

【本編完結】 ロバ娘：ファンディングストライプ

桐型枠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界にJAPAN WORLD CUPというレースは存在しない。なら作っちゃえばいいじゃん。レースを。

二度目の出走が叶わなかったその舞台に再び立つため、そのシマウマ娘はバ場を駆け金を稼ぐ。名を、サバンナストライプ。

——しかしシマウマはウマではなくロバでは？

目次

しかしシマウマはウマではなくロバでは？	1
イカれたクラスメートを紹介するぜ！	8
この中にロバ娘が割り込む余地があるだろうか	13
サンコンソウルインストール	19
お金が入るなら何でもいいよ	26
どっちの雰囲気も時々は味わいたい	31
ぼくは虎になるのだ	38
何が足りなかったんすかね	44
一度思いの丈をぶちまけよう	50
オリオン座の一等星	59
色眼鏡をかけて見すぎていたかもしれない	67
三冠ウマ娘	75
ここできさかの肩透かし	83
人を射殺しそうなほど鋭い視線に襲われた	90
勝ちたい理由がひとつ増えた	97
シマウマタイプのサラブレッド	105
いきなり限界値	111
大事なのは目的意識	118
マルチタスク	127
そりやでけえでしょ	133
東京さこええだ	141
スリップストリーム	149
アイスいかがですか	155
詐欺師かスパイの手口	162

せめて派手に散ってくれるわ	168
流石に大きく出すぎだよ	176
中にはいるよねそういうのも	184
ケチな性格なのは間違いない	190
素朴で牧歌的で安心する	199
こういう面では良い仕事するな	206
裏方だからね	213
いわゆる青田買い	220
コックスプレート	227
BCターフ	235
きつとそのうち本題に入る	243
弱点が無い	252
ウイニングライブ狂気の仕様	257
貧弱な外見の子供	264
シードリングカップ	269
やや情熱に欠ける	279
バレンタインといえば	287
地道な体幹トレーニング	294
影のように忍者のように	300
本日の障害競走第一レース	309
思ったより長いな	318
ついでのように巻き込まれた	326
売上アップのフィーバータイム	334
怪我の妙技	341
1000直の覇者	347

メイクデビュー	354
言わんとすることはわかるけど	363
耳ぴこぴこ	369
勝負服を考えよう	374
似合ってることは何も否定しない	383
ありあわせでなんとかするしかない	391
玄人好み	397
影すら踏ませない	403
大櫂の向こうで	411
若草色の外套	421
手回し充電器	428
既に変なことにはなっていた	436
遠慮がちな視線	445
権利以前の義務	453
注目を受けるのも悪いものではない	460
こいつ何企んでるんだろう	467
新しい出会いもあったりする	473
半分くらい騙しきれれば上出来かな	479
皐月賞	486
史上最遅の	495
外枠不利	501
日本ダービー	508
リミッターが外れた	516
神出鬼没なもの	524
大入り満員の大井	532

ジャパンダートダービー

基礎トレしたら屋台引く

自信が持てないならそんな時は

糖分足りてなかった

鏡見ろ

菊花賞

最強の名をかけて

脳筋思考

走る上での大きな下地

ステイヤーズステークス

控え室で正座

現実出走者なので悪夢のレースである

大混戦の団子状態

露骨に気を使われている気がする

逆指名だろうか

三女神の像

継承らしきもの

心に縦縞

春のファン感謝祭イン野球（前編）

春のファン感謝祭イン野球（後編）

高地トレーニング

地の利を得ているぞ

ぼくらは競いに来た

天皇賞（春）

「競う相手」は目の前にいる

何か弁明は？	745
フォロワーが増えている	752
余計な助言したかな	759
中距離は一旦捨てよう	766
新兵器を導入します	775
水の上を走ってるようなもの	781
ジャンク&チープ	787
フランスの芝の具合	793
海外で有名なヤツ	799
偵察や潜入が趣味なのでは	807
La victoire est à moi	815
カドラン賞	822
ここからはただの体力勝負だ	829
調子に乗んな	840
凱旋門賞	847
過去最高に頼もしく見えています	856
今回のテーマは	862
そろそろ限界だから	871
チャンピオンステークス	877
技術の到達点	884
語感悪すぎ問題	893
理想をどう活かすのか	900
感覚派の「天才」	906
最後の一冠	913
勝っても余裕は無し	924

ジャパンカップに向けて	931
ナチュラル強者発言	938
反骨心に火を点ける	946
適応力の怪物	951
強制二者択一	957
成立する唯一無二	962
BLOW my GALE	972
URA賞	979
夢の原型	986
JAPAN WORLD CUP	994

しかしシマウマはウマではなくロバでは？

ウマ娘。彼女たちは、走るために生まれてきた。

様々な思いが込められた別世界の名前と魂を受け継ぐ彼女たちは、いつでもただその瞳に映るゴールだけを目標に走り続ける。

「しかしシマウマはウマではなくロバでは？」

ケニア最大の都市ナイロビ。その一角に設けられた練習場で走るぼくはそんなことを一つぼやいた。

ウマ目ウマ科ウマ属サバンナシマウマ。大きな括りの中では同じウマ目ウマ科の生物だが、生物学的により近縁種と言えるのはいわゆるサラブレッドよりもロバである。

これではロバ娘では？ ぼくは訝しんだ。

けれど、まあそのように生まれてるからいいんだろう、ウマ娘で。少なくとも「この世界」でウマ科の動物がないあたり別世界の名前と魂とは正確にはウマ科ソウルだったというだけの話である。たぶん。

ふるり、ふるり。尾先からだけ長い毛の生えている尻尾が揺れる。

ぼくの名はサバンナストライプ。いわゆる転生者というやつ……なのだと思う。

経緯はよく覚えてないが、かつてこことは異なる世界で命を落としたはずのぼくは、気づけばこの世界に生まれ落ちていた。

サバンナストライプ、というのはあちらの世界における創作、「J A P A N WORLD CUP」に登場した架空の競走バダ。

しかしなにぶん架空のシマウマである。元々は電子世界でのみ存在が確立していたわけだから、存在自体は希薄なものだ。憑依するためのウマソウルが確立しきれなかったのかもしれないし、それで存在を補強するような「何か」を求めているのかもしれない。その過程で異世界の何者かの浮遊霊か何かと結びつくことで、結果このように異世界の知識と記憶を継承したウマ娘が誕生したのではないか……と、いうところがぼくの立てた簡単な仮説。

元々は日本人、それも男性だった身としては大いに戸惑ったものだ

が、12年以上もウマ娘として過ごせば体にも言葉にも慣れた……はずだ。きつと。

「ごめんなさい嘘ついた。未だに慣れない。

「へい、ストライプ！」

ふと、コースの外から声がかかった。街の方に住んでいるベテランのトレーナーさんだ。

第一線から退いてはいるけど、今も指導能力は高く、専属のトレーナーさんがついていなかったり、ジュニア級よりも更に下の年代のウマ娘に正しいトレーニングの仕方などを指導している人である。

あちこちのウマ娘専門学校にも顔がきくため、ナイロビのウマ娘の多くがお世話になっている。ぼくはロバ娘だが。

柵を飛び越え彼のもとに向かうと、どこか惜しそうに苦笑いをされた。

「やっぱり障害競走の方が向いているんじゃないか」

「跳ぶのは好きだけど、走る方がもっと好きだから」

「そうか。ま、無理にとは言わんよ」

肩をすくめて、封筒を手渡してくる。そこに記されている送り主は

——日本ウマ娘トレーニングセンター学園。

ぼくは思わず、小さく笑っていた。

「合格おめでとう。しかしなぜ日本へ？」

ケニアから見れば、日本はやや縁遠い国だ。仮に海外の専門学校に通うとしても、UAEやフランスなどの方が距離的にも近い。指導者として勧めるならそちらということとは分かるけど、これは個人的な問題だ。サバンナストライプの魂に刻まれた憧れを果たしたいんだ。

「あの国のターフで走ってみたいって思ったんだ」

「はあ？ ……そ、そうか」

困惑させてしまっただろうか。でも仕方ない。

日本で走りたい。芝、1600m。あの舞台へ——そう、ジャパンワールドカップという舞台上上がってみたいという衝動は抑えきれないのだから！

・・・≠・・・

「ジャパンワールドカップって存在しないのオ!？」

「……無いですよ……ジャパンカップはありますけど」

後日。

日本トレセン学園栗東寮。ぼくは同室になったハッピーミークによつて勘違いを正されることとなった。

なんてことだ……なんとということだ……。

いや確かにサバンナストライプは現実の存在じゃなかったから知らなくって当然だし、ぼくもアニメやゲームのウマ娘から原作けいばを少しかじっただけのわか野郎。今は娘。なんとなく、海外勢が出場するものだから実装されなかったのかな? とか思つて脳内で勝手に完結していたんだけど、そうか……そうなのか……。

あとナイロビの環境だとネットに繋いでも日本の情報なかなか得られないし、調べられなかったし……仕方ないかもしれないし……しししし……。

脳内でシマ未確認生物Uが「クソボケがーッ!!」と空き瓶で殴りつけてくる光景が浮かんだ。

ごめんよストライプ。

「………頑張ればそういう名前のレースも……作れると思いますけど」

「冠協賛レースのこと?」

ミークは小さく頷いた。

地方競バ場では冠協賛レースというものがある。「○○記念」などの冠名の命名権を得られるということ、前世では時々……たまに……いや割とオタクのおもちやにされていた。

そこに関してはハードルが高くない、お手頃な値段だったというものもあるだろうけど。たしか数万円くらいで命名権は買えたはず。

しかし、この世界のレースにおいてはそうもいかない。

そもそも個人冠協賛レースというのは地方競馬場——元の世界の話なのであえてこう表記する——の売上難を解消する取り組みの一

環として行われたものだ。芸能活動と融合合体して強化変身を遂げたスポーツ・エンターテイメントレースバトル、トウインクルシリーズでは地方のレース場であっても売上難は縁遠い。

よって、一般人が個人的な立場からトウインクルシリーズに協賛を行う手段は、企業を立ち上げるといふ途方も無い方向でか、クラウドファンディングのように多くの人を集めお金を持ち寄り、規模の小さなレースの命名権を買う、という方向性になるだろう。

「個人単位でそれをやろうとすると、……少なくとも見積もっても数百万……」

「………にんじんが何本買えるでしょうか」

「何本っていうか……一週間くらい学園の食事が賄えちやいそうだよ」

「わあ……」

賄える……いや待つてほしい。オグリキャップ先輩がいるのにその程度で本当に賄えるか？

あの異次元の胃袋を抱えたウマ娘を……いやそれだけじゃなくて他に何百人も生徒がいるのに……たった数百万円で……？

「一日分くらい学園の食事が賄えちやいそうだよ」

「………どうして言い直しを？」

原作の知識は無くともウマ娘についての知識なら少しある。

更に12年以上付き合ってきた自分の体ということもあって、よりよく分かっていることなのだけど、平均時速50kmオーバーで走るウマ娘の燃費は非常に悪い。なんとというか普通の人と比べると文字通りケタ違いなくらい食べる。グラムじゃなくてキロ単位で食べる。オグリ先輩はそれに輪をかけてよく食べる。聞くところによると原作の時は体重を絞るために食事量を減らしていたら、寝藁まで食べたとか。飼い葉を入れる木桶まで齧ってたという話も聞く。あのひとその内コンクリートにバター醤油からめて食べ始めるんじゃないだろうか。

閑話休題。

「で、でもとにかく、お金と人を集められたらそういう名前のレースも開催できる可能性があるわけだ、うん」

「……それでいいの?」

「それでいいのだ」

「どうか他に方法が無い。

……考え方を変えよう。むしろこれは新たな枠組みを作り出すチャンス。仮にJWC(仮)が盛り上がって大きな経済効果が見込めると判断された場合には、学園やひいてはURAを説得して恒例の行事くらいに格上げをしてくれる可能性は無いわけじゃない。そうと決まればフツフツとやる気も湧いてくる。

トウインクルシリーズのライブはプロスポーツ競技であると同時に芸能活動だ。汚い話だけど、当然そこにはお金のやり取りが発生してくる。

トウインクルシリーズの先にあるドリームトロフィーリーグについてもこれは同じことが言え、あちらの方が規模が大きいだけにお給料や賞金は良いとのこと。だったら非現実的と言うほどではない。

……やれる!

「よし、頑張るぞ……!」

「……おー」

「……合いの手どうも」

「ぷん」

ミックは相談に乗ってもらっただけで、今後主に頑張るのはぼくの仕事になるのだけど、同調して共感を持ってもらえたのはやっぱり嬉しかった。

……#……

後日、登校初日。ぼくは意気揚々と学園へ向かった。

日本トレセン学園は見れば見るほど大きな学校だ。校舎だけでも相当なものなのだけど、本当にすごいのはそれだけだとあくまで学園の敷地面積の一割にも満たないということだ。

巨大にんじん農園があつたり、複数のチームが練習を行う余裕が持てるほど多くの練習場トラックが用意されているし、プールやウイニングライプのためのレッスンスタジオなども併設されている。こんな国内外合わせて見ても最高峰の養成機関を作り上げるなんて理事長は誇らしくないの？

さて、ともかくぼくはこの春からの入学なので、学年としては中等部一年。この年代に誰がいるかは分からないけど、早めにデビューをするに越したことはない。

メイクデビューの出走条件は二つ。専属のトレーナーさんがつくか、チームに入るかのどちらかだ。

専属トレーナーさんがつく……ことは難しいかもしれない。言っではなんだがぼくはシマウマである。最高速はサラブレッドと比べると遅い、と思われる。元々のJWCに登場するサブナストライプは血統も重視されていたし、他のウマと比べても遜色ない走りを見せてはいたけど……種族的な差異は当然出てくるだろう。総合的に見て才能は微妙なところだと思う。選抜レースの結果次第になるけど、こちらは保留。

となると一番を目指すべきは、チームに入ることか。チームといえば……アニメで登場した「スピカ」、「リギル」、「カノープス」。ゲームだと「シリウス」だけ。とはいえいずれも押しも押されぬ名バたちが所属している一流揃いのチーム。トレーナーさんの指導力は確かなものだけど、入れる可能性は低い。……それでも入部テストは受けてみよう。初めから無理だと決めつけるべきじゃない。

どっちにしろ、まずはクラスに馴染むことから始めよう。外国から来ていたりそもそもシマウマというのもあって今のぼくはかなり浮いている。

これから先、JWCという名前を冠するレースの開催を目指すなら、周りのひとたちの協力は不可欠だ。個人が企画しているレースだから出走者を募らないといけないし、何かあった時のために頼れる人脈も欲しい。あと単純に友達も欲しい。

入学初日の教室。ウマ娘たちがひしめきあっていて、皆も強い意志

のもとトレセン学園にやってきているのが熱気から伝わってくる。

まずは自己紹介から頑張ろう……！

「ウオツカだ。最高にカッコいいウマ娘になりに来たぜ。よろしくな
！」

うん？

「ダイワスカーレットといいます。皆さん、よろしくおねがいます
ね」

ううん？

「ツインターボだよ！ ターボはね、サイキョーのウマ娘になるから
ね！」

ううううううんんん!?

「ボクはトウカイテイオー！ カイチヨーみたいな強くてかつこい
無敗の三冠ウマ娘を目指してるんだ。よろしくね！」

ホワアアアアアアアアアアアアアアアア!!

テイオー!? テイオーナンデ!?

「ナイスネイチャです。えつと、ほどほどによろしくね?」

待って、待ってくれ。ちよつと待って！ 脳が破壊される！

頼むから整理する時間を……時間を……。

「メジロマックイーンと申します。メジロ家のウマ娘として天皇賞の
制覇を目指しております。皆様、どうぞお見知りおきを」

………よし!

何も聞かなかったことにして寝よう。

イカれたクラスメートを紹介するぜ！

イカれたクラスメートを紹介するぜ！

G I通算7勝かつダービー制覇者のウオツカ！

全出走レースで2着以上という成績を残した通称「ミスパーフェクト」、ダイワスカーレット！

最後の個性派、破滅逃げのツインターボ師匠！

ガラスの脚を持ちながらも二冠を達成した不撓不屈の帝王、トウカイテイオー！

G I未勝利ながらだいたい掲示板入りする抜群の安定感を誇るナイスネイチャ！

もはや説明不要、春の天皇賞連覇の最強格ステイヤー、メジロマツクイーン！

以上だ！

だれかたすけて。

……いやね？ 分かってはいるんだよ。ウマ娘の名前というのはあくまでひとつの指針。いつもいつもあちらの世界と同じ結果になるわけじゃない。努力と根性で覆すことはできる。アニメ一期のスペちゃんはその教えてくれた。ぼくだって自分にできる限りは頑張ろうと決めていた。

だからって難易度をインフェルノにしろとは言っていないぞぼかあ。

デビュー、遅らせた方がいいだろうか。

いや、それは少し軽率な気がする。上の世代には……今の高等部の筆頭ウマ娘はシンボリルドルフ会長だけど、あのひとだけじゃなくオグリ先輩やマルゼンスキー先輩といった傑物が集っている。中等部も期待のホープが数多くいるし、今の環境は人脈を構築するにはうつつだけだ。

周りにいるのも当代最強格のウマ娘たち。技術を学び取るには絶好の環境だし、注目度も段違い。必然的にレースにも人が大勢集まり、経済効果も大いに見込める。お金も集まる。活躍できればよく自

身に対する注目も集めやすいし、発言力も高まるかもしれない。

ピンチはチャンス、考え方によってはこの世代こそが最高のファンディングお金稼ぎチャンスと言えるはずだ。

(そう考えると、むしろこの世代と一緒にあったのは幸運——)
悪い、やっぱ辛^{つれ}いわ。

・・・≠・・・

——アレコレ考えてはみたけど、そもそもを言えば今のぼくらはまだ入学したばかりの一年生だ。

入学前でも町内大会みたいなレースこそあるけど、そこまで大規模なものじゃない。ターボ師匠は楽天的で諦めを知らずある意味精神的に完成されているターボ師匠だけど、他の面々は今の所発展途上の段階だ。一番話題性が高いのは、この中ではメジロ家のご令嬢マツクイーンだろうか。

ぼくは見ての通りただの一般通過シマウマである。海外出身者も別にトレセン学園じゃ珍しくない。

……の、だけでも。

「海外から一人で殴り込みかけるとか……そんなのカッコいいじゃねえか……!」

「おい……何で……ぼくが殴り込みをかけたことになつて……?」

ぼくはどういうわけかウオツカの中で「海外から日本ウマ娘界隈に殴り込みをかけたイキのいいヤツ」ということになって絡まれていた。

確かに日本にきた理由はある意味トウインクルシリーズへの参入なぐりこみだけど、そんな剣呑な雰囲気じゃなく普通に規則通りに穏便にトウインクルシリーズのレースを走りに来ただけなんすよ。挑戦と言うより出稼ぎなんすよ。俗っぽすぎてカツコ悪くない?

「殴り込みじゃねえの?」

「じゃないよ……」

「そっか……でも海外挑戦って響きがカッコいいだろ?」

「それはちよつと思う」

オレより強いウマ娘に会いに行く。

じゃないけど、勇気を持って踏み込んで何かに挑もうとしているひとは、カッコいい。

だろ？ と机の前の方でニカツと笑うウオツカがそこまで考えて言っているかは分からないけど。

「海外に挑むからには、どんなレース場があるかも知っておきたいんだよな。ストライプが知ってるレース場ってどんなのだ？」

「あ、それボクも気になるー」

そんな折、横から割り込むようにテイオーが語りかけてきた。

「テイオーも？」

「うん！ 無敗の三冠ウマ娘になったら、海外のレースにも行ってみたいからね〜♪」

「お、おう」

……いや、将来的にどうなるかなんてこの世界じゃ分からない。テイオーが無敗の三冠ウマ娘になれるだけの素質は十分、いや十二分と言っている。

仮に叶わなかったとしても、素質が曇るわけじゃない。ガラスの脚とは言うけど、怪我を克服しさえすれば黄金にも勝る輝きを放つ脚でもある。復帰できれば海外挑戦も決して不可能なことじゃないのだ。

とはいえ……うん、レース場か……。

「けどぼくが知ってるのはソング競技場だけなんだよなあ」

「ソゴ……？」

「あははっ変な名前！」

「ケニア唯一のレース場なんだよ。芝一周2000m、100年以上の歴史があるんだけど……赤道直下だからね、湿気が少ないから芝が乾燥してる感じがあるよ」

「へえ〜……」

通年でレースがあるわけじゃないこととか、ダートコースが無いこととか……日本と比べても違う部分は多く見受けられる。

「ダートコースは無いんだけど……海外転戦を視野に入れてる子が多

くてね、海外だとダートが盛んでしょ？　練習も、そつちに力を入れてる子は多かったよ」

「ストライプは？」

「どっちもできるようにしてた」

「ええー？　どっちつかずは中途半端でカッコ悪いぜ？」

「どっちもできたらカッコよくね？」

「言われてみれば確かにそれも……ちよつぱりカッコいいじゃあねえか……」

いいのかよ。

ちなみにぼくがダートを走れるのは単にシマウマソウル的なアレだ。

乾季のサバンナダーを走れない被食者シマウマにターンは回つてこない。もとい生き残ることはできない。

「いやっ、でもオレにも夢があるからな！　ころころ言うことを変えるのはカッコ悪いぜ」

「そうだね。一つの道を極めるつてカッコいいと思う」

「だろ？」

というか、ぼくのは生まれ持った性質によるところが大きいつてだけで、普通にやる分には芝・ダートの両刀よりもどちらかに割り切つてトレーニングした方が効率がいい。それぞれで足元の滑り方が違うのだから踏み込み方も違うし、脚に伝わってくる感覚も全く違う。込める力も変わってくるから脚そのものにかかる負荷の質も別物になるので、怪我の心配も常に付きまとう。また、更に海外の芝は日本の芝と感覚が微妙に変わる。海外遠征に出たウマ娘が勝ちにくいというのはこのあたりが原因であることも多い。芝の植え方や生え方、根の張り方が全く違うので、思ったように実力が発揮できないわけだ。

……中にはダート↓芝↓海外芝↓ダートというローテーションでGIを4連戦してその全部で勝利したアグネスデジタル先輩というウマ娘もいるのだが。彼女はその異次元のローテーションのせいであのひ天才というより変態という呼ばれ方をする人が多い。あのひ

との足どうなってるんだ。

ともかく、ぼく個人は分野に特化したプロフェッショナルもカッコいいと思うし、器用に色々こなせるのもカッコいいと思う。それぞれ違う良さがあるんだよね。汎用量産機いいよね……と思う人もいるし尖った専用機いいよね……と思う人もいる。ぼくはどっちもだ。

話が逸れた。

「テイオーは三冠を目指すならクラシック路線だね。チームは決めた？」

「うくん、考え中。カイチョーのいるリギルもいいなーと思うんだけど……」

あ、リギルあるんだ。

じゃあスピカもあるなこれ。

「ちよ〜つと窮屈そうなんだよねえ」

近くの席でネイチャが「うわこの子あのリギルに当然入れる気でいるよ……」みたいな呆れ混じりの苦笑いを浮かべている。

前情報が無いとそうなるよね。わかる。あのチーム加入条件絶対やべーもの。

一方でテイオーの言うことも分かる。リギルのトレーナーのおハナさんはかなり厳格な指導者で、トレーニングも徹底的に管理しているとのこと。

アニメを見る限りあの厳格さはひとえに担当するウマ娘たちへの強い愛情ゆえのこと。リギルに入部できたウマ娘たちは一流の指導者のもと才能を開花させ、数々の重賞を制覇し名を残している。それも全員だ。同時に、ウマ娘たちの体を想い組み立てられているメニューは徹底して管理されているため、若干融通がきき辛い。比較的奔放な気質のテイオーにとって窮屈なのはその通りだろう。

「ストライプはどうするんだ？」

「採ってくれるところがあればいいなあ」

「欲が無いねー」

金銭欲は人一倍やぞ。

この中にロバ娘が割り込む余地があるだろうか

レース。それはウマ娘にとっての本分であり最大の目的だ。

普通の人間と比べ、彼女たちは競争に対する意欲が強い……とかく闘争本能が強いと言えればいいのだろうか。ひとたびレースに出たなら勝つことだけを考えるのがウマ娘だ。

「そういえば午後から実力測定のための模擬レースするらしいよ？」

「そうなのかなぁ」

「覇気が無いねえ……」

しかしぼくはロバ娘なので勝ちよりお金の方を重視していたりする。

無事之名^{これ}ウマ娘。着順は勿論大事だけどレースの出走数によって稼げるお金は変わる。怪我をすれば出走したいレースにも出走できなくなる。ネイチャに指摘されたように覇気が無いように見られるのも致し方ないと言えよう。

もっとも、ぼくの場合は覇気が無い風に見えるのは別の事情があるのだけど、そこは置いておこう。

入学式を終えた直後、学内の施設紹介なども行われて精神的疲労などもあるだろうということで、前日はレースの練習などは行われずに解散となった。

その翌日……つまり今日。一般教養の授業開始に合わせてレースに関わる授業も始まる。

今は午前中の授業を終え、食堂。周りを見るとオグリキャップ先輩のチョコモランマジミタ食事の盛りとにかく圧倒される。嘘みたいだろ。三十秒もあれば消えるんだぜあれ。

「オグリキャップ先輩、すごい食べるね……」

「他の人の盛りも大概じゃないか……まともなのはぼくだけか……!？」

「ストライプは盛り少なめにして何度もおかわり行ってるだけじゃないですかね」

「テヘペロでやんす」

盛り多めにするとかぼれそうだからあんまりしたくないんだよね。あれを綺麗に食べられるみんな凄いね……。

「ごっこ、お邪魔していいかしら？」

「ん？ どぞどぞー」

「うい」

と、そこでやってきたのはまさしくそんな盛りのご飯を持ってきたスカーレットだ。周りの席が埋まってるらしい。

なんか印象違うな……と思ったんだけど、そうか、普段は猫被ってるんだっけ。アニメやゲームだと猫被ってないシーンの方が多くてこう……お嬢様然とした感じのスカーレットは新鮮だ。

「あら……？ ストライプ、ご飯の量、それで大丈夫なの？」

「あはは……この子めちやめちやおかわり行ってるから大丈夫だと思
うよ……」

その通りでございます
「Exactly」

「それだと効率が悪いんじゃない？」

「こぼしちゃうと勿体ないから……」

「あ、お箸持つのが苦手……じゃないみたいね」

中身は日本人なもので。

「そういえば上手だ……いやホント上手いなどっかで習ったの？」

「ん、ん……まあ、そんなところ」

習ったは習ったよ。前世で親に。

こういうのはちゃんとしておかないと人に良くない目で見られると言われてたから、意識して直すようにもしてたし。

「日本通って割といるんだよ」

「へえ……」

ぼく自身のことである。

……≠……

午後になると、ぼくらはジャージに着替えてレース場の方にやって

きていた。実力を測るための模擬レースを行うためだ。

中央と言うだけあって、トレセン学園に所属している生徒の多くは小学生や、下手をすると幼年期からすら頭角を現してきたウマ娘たちばかりだ。

この中にロバ娘が割り込む余地があるだろうか。いや、ない。(反語)

ぼくは安全に金を稼ぎたいんだよ！

「なんだか感無量だな……」

初めての日本の芝のコースだ。適性を見るためもあるのだろうが、今回は1000m程度で流すことになっていてのだけど、それでもずっと目指してきた環境なだけになんとなく嬉しさがある。

しかしながら……だ。

(……マヤノトップガンとマーベラスサンデーもいるし……)

マーベラス！ って言ってるからすぐ分かる……。

別の教室だから気付かなかったんだけど、あのふたりも同じ学年か……。

1997年三強のうちのふたり、マヤノトップガンとマーベラスサンデー。マーベラスサンデーは度重なる骨折でデビューが遅れ、爆発的な能力には欠けるとの寸評こそあるが堅実かつ着実に勝利を重ね続ける強豪だ。原作ウマの時の奇行は気にしないでおく。

そしてマヤノトップガン。4つのGIレースをそれぞれ異なる戦法で勝利するという異次元の脚質を持ち、十年近く春の天皇賞におけるレコードを保持していた天才。ちなみに当時の3200mの世界レコードだったとかなんとか。

デイープ某やらキタちゃん某というちよつと理解できない超天才が後にレコードを抜いていったものの、作戦をその場の気分で決めればなるほどノウハウも蓄積されていって当時できなかった調練とかできてははざらうし、レコードを更新しているからと言ってどっちが、という比較も難しいだろう。確実に言えるのはどのウマも天才だという事実だけである。

「次！ ダイワスカーレット、プラネットバリスタ、ヨーグルトール、スノウワルツ、マーベラスサンデー——」

出走順は全クラス合同のくじ引きで決まった。正直、順番は後であればあるほどいいとぼくは思っている。その方が今みんなの実力を正確に把握できるからだ。

情報を制する者がレースを制する。フッフッフ……さあ見せてくれキミたちの実力を……成長曲線を予測してカチ当たりそうなレースをことごとく回避してくれるわフッフ……。

「よいい、スタート！」

スターター役になった子が旗を振り下ろすと共にスカーレットたちが走り出した。

「お……う？」

「速い！」

すぐにスカーレットは前に出た。逃げの姿勢か、いやこれは……。

「スカーレットのやつ、かかってんな」

と、先に走り終え、座っていたウオツカが正確に状況を見抜いた。やっぱかかっているかなあ。トレセン学園に入学して初めてのレース、その上元々「一番」に対する意気込みと執着心が強いから、嫌でも緊張させられてたのかも。

「っ！」

けれど、スカーレットはそこで崩れない。

元々の脚質が逃げにも向いていることは、誰であろうスカーレット本人がよく分かっているはずだ。スイと脚に注がれていた無駄な力が抜けて逃げの姿勢に戻るのが目に見えて分かった。

「んん……マーベラス☆」

同時にその立ち直りを目にしたマーベラスのボルテージが上がった。凄い勢いで抜けてスカーレットに迫っていく！

すごい。視覚の暴力がすごい。躍動感すごい。

スカーレット、マーベラス、スカーレット、マーベラス……二人の間を交互に視線が動く。なんだあれすげえ。中一の胸か……？ あれが……。

「完璧な仕上がりにですね」

「急にどうしたんですのストライプ……」

「言っておかないといけない気がして」

——その後、一着を取ったのは僅差でスカレット。武インパクト某の言っていた、一着になると少し気が抜けてしまうマーベラスの悪癖が影響を及ぼした形だった。

というかどっちかって言うのであれば、マーベラス！　な走りを見せていたスカレットが突然視界からいなくなったことでちよつと冷静になつてしまつて、感情のボルテージがちよつと落ちて差し返されてしまったというところ。良くも悪くも感情のノリに左右されがちなのだろう。

しかし………なんというか………うん。

マーベラスな信じられぬものを見た。

スターター役の子が胸を押さえて打ちひしがれている。強く生きてほしい。

さて、それはともかくそろそろぼくの番になるはずだ。

準備運動代わりに軽くジャンプしたりへそ回し体操をする……が、その時不意に周囲がざわついた。同時になにかピリツとしたものを感じる。

「あつ、カイチョー！」

そこでテイオーの口から答えが示された。

皆の視線を辿っていくと、コースの外、観客席の最前列に騒ぎの原因となったウマ娘がいる。

——皇帝、シンボリルドルフ。

あの特徴的な鹿毛は見間違えようもない。というかつい先日入学式の挨拶で見たばかりだ。

ぱたぱた尻尾を振って会長のもとに駆けていくテイオーは微笑ましいが、会長は何をしに来たのだろうか。やはり、新入生の走りを見に来たということだろうか。

テイオーと個人的に面識があるだけに目当てはテイオー……とも考えたけど、あの生真面目な会長がひとりの様子を見るためだけにわ

ざわぎ午後のトレーニングの時間を割くとは思えない。やっぱり全員のレースを見たかったけど、生徒会の仕事やらで少し遅れて見に来たと考えるのが自然か。

「すまない。騒がせるつもりは無かったんだ。レースを続けてほしい」

会長は微笑を浮かべ、涼やかにそう告げた。周囲の空気が引き締まる。

流石、七冠の皇帝……存在感がまるで違う。あれでダジャレ大好きなお姉さんだっただからウマ娘は見た目によらない。

「……次のレースを始める。サバンナストライプ！」

「あ、はい！」

少しだけ騒ぎが収まったタイミングで、全体トレーニング担当の教員からこちらに水が向けられた。

ぼくのグループは、テイオーたちのように名を知っているウマ娘はいない。けど、それだけだ。それは彼女たちの実力がテイオーたちより落ちるということじゃない。まったくの未知数だということを示している。

油断なんてできるはずが無い。ぼくは中央ここに挑みに来たのだと、強く強く意識した。

暫定的なスタートラインにつき、低く構える。

「よいい。スタート！」

そして——旗が振り下ろされる。

サンコンソウルインストール

この世界に生まれ落ちてしばらくして、走るのが好きなのかどうかと自問自答をしたことがある。

ぼくの価値観の大本は以前の世界のそれだ。運動はそこまで苦手じゃなかったと思うけど、好んでやるほどでもなかったと思う。

生まれ変わった後、ぼくは特に理由も無く走るようになり、疲労が心地よく感じるようになった。

しかしこれは、果たしてぼくの抱くべき感情だろうか。そう思ったのが自問自答に至った経緯である。

——結論から言うと、これは「サバンナストライブ」の感情であると自覚した。

この世界にウマ娘・サバンナストライブとして成立するために、両者の魂は切っても切れないほどに結びついている。

元々、サバンナストライブはJAPAN WORLD CUPでも第一回にしかその出番が確認できない、存在が極めて希薄な競走バシマウマだ。まだ走りたい。憧れもあるだろう。執着もあるだろう。だから今、走ることができている事実喜びを感じている。疲れても、でもまだ走りたいと感じている。

それを受け入れるのにそう時間はかからなかった。手の届かなかったものに憧れる気持ちは分かる。

ただちよつと、なんと言うのだろう。個我や心理状態のベースとなっているのはぼくだから、ウマ娘としての感情の動きがなかなか表面化しないのだ。

走ることが好きだ。勝ちたい、とも思う。けれどそれはそれとして少々冷淡なほどに物事を俯瞰する視点も持ってしまったている。

ネイチャに指摘された覇気が無いというのは、それだ。表面的な「ぼく」の理性が、サバンナストライブの負けん気を包んで覆い隠している。

闘争心は、いつでもグツグツに煮えたぎっているというのに。

さて。

レース開始直後の展開は、静かなものになった。

脚質として逃げを得意とする子がいなかったためか、まずは脚を溜める展開から入る。その間に、コースの外から声が届く。

ウマ娘の聴覚はやたら優れている。レースに集中しつつも、ぼくの頭は同時にそれら进行处理していた。

「あちゃー……ストライプ、やっぱりちよつとぼんやりしてる?」

「レース中なの!? ストライプー! シューチューしろー!!」

ターボ師匠は応援してくれて優しいね。でもちよつとやかましいから声は抑えてください。

ネイチャはどうもさつきぼくと話してたことが気にかかっているらしい。なるほど、脚を溜めるとぼんやりしてるように見えるのか。元々の気質も合わせてそういう風に見えるかもしれない。

溜める。溜める。溜める。

脚を溜める。感情を溜める。普段ぼんやりしてたって構わない。

ぼくは全てを一瞬で出し切るために、いつも「溜め」続けてるだけだ。

シマウマは元来極めて気性の荒い動物だ。体格もサラブレッドより一回り小さく、事実今のぼくの身長は、150cmのテイオーよりまだ低い。いいとこターボ師匠とどっこいどっこいか。二人で並んでると色彩も合わせてイロモノ感がパない。

——残り600m。

シマウマはサラブレッドよりロバに近い。それは、最高速で劣つていてもそれだけスタミナがあるということだ。

そして、シマウマにはライオンの顎を砕き蹴り殺すほどの脚力が備わっている。それを兼ね備えていると言うのなら、やることは単純だ。

胸の奥底で煮え滾る闘志と感情を踏み込みの一瞬で爆発させ燃やす。

そして一步の踏み込みで最高速に乗り——そのままゴールまで最高速を維持し続ける。

——勝ちたい。勝ちたい。勝ちたい！
絶対に勝つ!!

・・・○・・・

「テイオー」

あちゃあ、と頭を抱えているナイスネイチャに苦笑を向けるトウカイテイオーに声がかかる。敬愛するシンボリルドルフだ。

彼女の目線はターフを走る新入生たち一人ひとりに向けられているが、中でも熱を持った視線を受けているのは……白と黒に別れた珍しい髪色をしている友人、サバンナストライプである。

「なにになにかイチョー、呼んだ?」

「璞玉はくぎよくこんぎん渾金飾りはくぎよくこんぎん気がなく、才能があること。……これから先、無敗の三冠を目指すと言うなら、サバンナストライプの走りをよく見ておくんだ」

テイオーは軽く首をかしげた。

ケニア出身の友人、サバンナストライプ。彼女は普段はどこかぼやぼやとしていて、覇気に欠ける印象があった。ノリが良い方であるため気は合うが、ルドルフのように直感にビビッと来るようなモノを持ち合わせているというわけではない。

言っではなんだが、友人としてはともかくライバルとみなすにはまだ時間が必要な相手、というのがテイオーにとっての印象だった。

「——彼女は海外のウマ娘に特有の才能を持ち合わせているウマ娘の一人だ」

「えっ……」

シンボリルドルフは海外遠征の経験がある。その際の結果は——6着。本人にとっても苦い経験の一つだ。

海外芝に慣れていなかったり、ダートコースを横切る際に足を取られたというのが主な敗因だが、合わせて彼女が悩まされたのが海外ウマ娘の持つ「特殊な才能」である。

テイオーは、ルドルフの言葉を一瞬信じられなかった。しかし次の

瞬間、視線の先でサバンナストライプの表情が変わったことで、嫌でもその片鱗を感じ取ることになる。

「ふッ!!」

直後、ストライプの足元が爆発したと錯覚するほど、彼女は強烈に踏み込んだ。

表情が変わった。覇気を感じられないぼんやりしたそれと打って変わって、闘志と気力に溢れた獰猛な肉食獣のような鋭い表情だ。

「踏み込み一歩でトップスピードに乗った!?!」

「……海外のウマ娘は手足が長く、生まれつき我々と筋肉のつきかたが違う。韌帯も異常なまでに強い。時に『バネが入っている』と称されるほどだ」

苦い記憶が蘇る。しかしルドルフはそれを受け止め、情報として昇華しながらストライプの走りを論じた。

広くストライドを取ることで瞬時にトップスピードに乗る走行技術は、初めて見た時は驚いたものだった。一時はその走り方を研究などしてみたが……すぐに分かった。その走り方は日本のウマ娘には根本的に合わない。体型、骨格、体質……生まれ持った遺伝的要素ありきの走り方だからだ。

「——ああいうウマ娘は、走っているとと言うよりも、飛んでいるようだと……羽が生えているようだ、形容される」

恵まれた視力で展開の隙間を見抜き、突き抜ける。

結果は、ストライプが差し切り5バ身差の一着。先のレースで頭角を現したスカーレットやウオッカにも負けず劣らずの好走だった。

全員がゴールするのを見届けて、ルドルフは拍手を贈る。今は負けたとしても、諦めなければいずれ勝ち上がっていける。先達としての激励を込めた拍手だった。

「ねえ、カイチョー」

「どうした、テイオー。勉強になったか?」

「あ、うん、それはそうなんだけど」

自信家のテイオーもこれには触発されたか……と思い視線を向けると、テイオーは更に首をかしげていた。

触発されていないわけじゃないし今の走りでいろいろなことを学び取ることもできた。ただ、それはそれとして。

「なんでストライプは後半ずつ尻尾グルグル回してたの？」
「えっ」

ルドルフは走行フォームや技術などに着目していたため余計な情報は自動的に頭から外れてしまっているが、よく思い返してみれば確かにストライプは後半、仕掛け始めてからずっと尻尾を回していた。

(……?)

尻尾はウマ娘にとってもバランスの一種だ。カーブの時などに逆に振ったりしてコーナーワークの一助にしたりもする。

しかし回したところで脚が早くなるわけもなく、空力学的にも何の意味も無い。チーターがカーブする時に重心を変えるために尻尾を回すという話も聞くが、そもそもストライプが尻尾を回し始めたのは直線だ。

(……???)

幻惑か？

あのしましまの尻尾を回すことで後ろにいるウマ娘を幻惑させる効果があるのか？

イヤ……幻惑じゃない……イヤ幻惑か？ 幻惑なのか？

何だアレは？

(……?????)

何のメリットがあつてあんなことを？

ルドルフは困惑した。

……≠……

皆のところに戻ると、なにやらすごく怪訝な表情と傾げられた首によつて迎えられた。

え、何コレ。

何で皆微妙に許されなさそうな角度でこっち見てんの。

「ストライプ、ちよつといいか？」

そこで皆を代表してウオツカが前に出た。

「いいけど角度戻さない?」

「ん、ああ。けどストライプ、聞きたいんだけどさ、何でスパートかけてからずつと尻尾回してたんだ?」

「え?」

「ん?」

「何それ?」

「んん?」

いや本当に何ソレ。

ぼくが? 尻尾回してた? 何でそんな非効率的で不合理なことを?

「ナイスジョーク」

「いやジョークのつもりはねえよ!」

「……え、マジで?」

マジで?

後ろの皆に視線を向けると一斉に頷かれた。

マジかよ。

「無意識だったのかよ!」

「し……知らなかった……ぼくの尻尾回ってたのか……」

——回つ……て?」

回転してる?」

「………ほおーう」

分かった……的場オーラのアレだコレ。絶対サンコンソウルインストールされてるコレ。

最新式アフリカンタービンかき混ぜてくれ命の渦巻きだよコレ。

ぼくは思わず顔を覆っていた。顔から火を吹きそうだ。

「恥つず……」

「もしかしてああすると速くなれる!」ターボもやってみる!」

「傷を抉ってやりなさんな……」

やめてターボ師匠……ぼくの前で尻尾をぶん回さないで……。

多分それぼく以外誰がやってもマジでただの無意味な動きだから

⋮
○

お金が入るなら何でもいいよ

ウイニングライブ。それはウマ娘たちのレースにおける言わば終着点だ。

極端なことを言うところではウイニングライブでセンターを取るために一着を目指している。

もつとも、いろいろな捉え方があるのは否定しないよ。徹底的にアスリート志向でレース以外に興味がないウマ娘もいて当然だし、マックイーンのように家名がかかっているというウマ娘だっていい。トウインクルシリーズに参加するウマ娘それぞれに思いがあり、抱えているものは違うのだから。

ただひとつだけ正しく捉えておかないといけないものがある。観客の視点だ。

観客にとってレースというものは重要ではある。けど、それは「ライブのために」重要なのだ。

レースというのは完全可視化されたセンター争い。推しがセンターになれるかどうかという大一番に熱狂しないファンはいない。ただ、主眼に置かれているのはあくまでウイニングライブだ。彼らはウイニングライブでセンターに立って輝くウマ娘を見たいから、声援を送っている。トウインクルシリーズのレースを制覇することによって得られる栄誉というのはそういった大勢のファンがいてはじめて成り立つものと言えよう。

ファンの減少はそのままトウインクルシリーズの権威の失墜を意味する。アニメ版の二話か三話辺りで会長がマジギレして「ウイニングライブをおろそかにする者は学園の恥」とまで言い切ったのはそういうことだ。

トウインクルシリーズもドリームトロフィーも言わば国をあげた一大経済活動なんだから、そこでトレセン学園の悪評が生まれてしまえば数億と言わないレベルでの損失が生じる。すべてのウマ娘が幸せになれる世界を作るといううちよつとラスボスかこのひとと思って

しまいそうな理想に真摯に取り組んでいる会長としては、看過できない問題だろう。

前置きが長くなった。

ともかくどういうことかと言うと。

「サバンナストライブ、民族舞踊のような動きはせずに手本のとおりにやりなさい」

「ふええ」

多分ぼくは会長に説教される勢だこれは。

おのれサンコンソウル冤罪……家で習ったような踊りの動きばかり咄嗟に出てきてしまう……。

ていうかうまびよい伝説課題曲なのにダンス難しくない？

周り見ても一発で形になったのテイオーくらいじゃないか。天才はいるね。悔しいが。

ちなみにウオツカはサボった。……いや裏で鍛えてるの知ってる。とサボるっていう表現をするのに抵抗があるんだけど。授業サボってるのは確かではあるんだよなあ……。

もしかしてこれのせいでメイクデビューのウイニングライブ失敗したりするのだろうか。次はなんとかして連れてこよう。

「先生、どうしてぼくにこの一番に仰られるんですか……」

他にもできてないひといるじゃないですか、と視線をずらすと、先生は更にぼくの後ろを示して答えた。

「あなたが違う振り付けをすると真後ろにいるツイインターボが真似をするからです」

「すみません」

振り向くとターボ師匠が体をぐねんぐねんしてた。

うん……全然違う振り付けのまま覚えさせちゃうかもしれないしね……そうだね……ぼくから矯正するのが一石二鳥ですね……。

「ストライブのダンス楽しいよ!!」

「そっか……ありがとうね……でも振り付け違うから授業中は指示通りの振り付けしようね……」

「分かった!」

ターボ師匠は素直で可愛いですね。
わんぱくでもいい、たくましく育ってほしい。

・・・≠・・・

トレーナーさんがついていなかったりまだチームに入っていないウマ娘は、トレセン学園の講師が一律で全体トレーニングを施してくれる。けど、基本的にそのトレーニングは「最低限」を担保するものであつて個々の習熟度は基本的に考慮されていない。

だからと言うわけじゃないのだけど、基本的に全体トレーニングは短時間で終わる。トレーナーさんにスカウトをしてもらうための選抜レースに向けて自主練習の機会を設けるためでもあるけど、一番の目的は各チームの見学だ。

やはり一番人気は数々のGIや重賞制覇ウマ娘を輩出してきたリギルだけど、トレーナーのおハナさんの体は一つだ。チームそのもののキャパシティには限界があるため、そもそも入部テストすら行われてないことも多い。必然的に他のチームに目を向ける必要がある。出てくる。

……と、いう自由時間のお題目とはまた別口で、ぼくはコースに出てテイオーと自主トレーニングをしていた。

芝400m、スパートを意識して全力疾走するだけの一発計測だ。

「ふっ……うう……!!」

全力、全速力で駆け抜ける。ゴールに設定されたラインを踏んだと同時にテイオーがストッププウオッチを止めた。そのタイムは……。

「ガツタガタだよストライプ!」

「ぬぁーん……」

見せてもらったタイムは、一回目の計測より遥かに落ちていた。
思わずその場に崩れ落ちる。

計測したのは、尻尾を回している……というか勝手に回っちゃう時と回していない時のタイムだ。比較すると回していない時のタイムは酷い。疲労を抜きにしても本当に酷い。

「尻尾がグルグルしてる時の重心移動が染み付いちやってるんじゃないの？」

「だろうね……自分の体がもう信じらんない……」

時空を超えてあなたは一体何度一回目——我々一人の前に立ちただかつてくるそんなつもりは無いというのだ！ ムワイ・サンコン冤罪!!

「ボクはそのままでもいいと思うけどなあ。下手にフォーム改造しようとしたら、逆に遅くなっちゃうよ?」

「それな」

走行フォームの改造というのは、相当な時間を要するものだ。

個人に最適化するなり怪我を防ぐなり目的は色々あるけど、問題はそうしてフォームを改造しても必ずしも「改良」に繋がるわけではないということだ。

そもそも別に勝てないからフォーム変えるってわけでもないし、走るのに支障が出るならやめといたほうがいいね、これ……。

「今何かするようないことでもないか……ごめんねテイオー、付き合わせて」

「いいよー。代わりに基礎トレ付き合ってよ!」

「いいよー」

基礎固め基礎固め。

今のぼくらはレースの「レ」の字くらいしか体験していない。だからまずは土台を固める。それでいて大事なのは「やりすぎない」ことだ。

特にテイオーのように怪我をしやすい体質のウマ娘はオーバーワークをするとすぐに脚に出る。慣れていない練習相手といきなり合わせようとすると更に怪我を誘発しやすい。

アツプは念入りに、クールダウンは更に念入りに。ケアはいつそ病的なまでにやるくらいで丁度いい。

「三冠を目指すなら一つの欠場が命取りだよー」

「そんなに簡単にケガしないよ」

「そうかな……そうかも……」

「ストライプは？ やっぱりクラシック路線？ あ、それともティアラ路線かな？」

「お金が入るなら何でもいいよ」

「思ってもみなかった方からゲスな発言が飛び出たんだけど」

ゲスとは失礼な。

「ぼくはなににお金持ちになりたいんじゃないよ。将来のためにお金が必要なだけ」

「あ、なーんだ。そういうことか」

「お金があれば世の中の悩みの大半は解決できるけど」

「ストライプ??？」

おっと、主題から逸れた。

「ぼくは、レースを新設したいんだ」

「レースを？ 新しく？」

「うん。最悪名前だけでもいいんだけどね。なににしたってそのためにはお金が要るから」

「そういうことかあ」

だからそのためならティアラでも三冠でも、種類は問わず走る必要があるなら走る。

けど短距離は勘弁な！ マジで。

ぼくの天敵は一気に最高速のまま駆け抜け続ける系のバクシン教である。

「そういうことだから、ぼくはテイオーたちのことは思いつきり応援するからねー」

「応援してくれるのは嬉しいけど、なんか複雑だなあ。ボク、やっぱりストライプとも走ってみたいし」

「併走ならいつでもいいよ」

「そういう意味じゃないよー！」

「ふふふ」

そりゃあそんなリスキーなことしませんわよ。本気の競り合いか脚にも良くないし。

どっちの雰囲気も時々は味わいたい

それやこれやあって、日暮れまで自主トレした後は食堂へ向かうことにした。

この頃になると自主トレを終えたりチームでのトレーニングを終えたり——場合によってはトレーニングの合間だったり——した生徒たちで賑わっている。

あちゃあ。こりや早めに行かないと席なくなるぞ。

「あ、春のお惣菜フェアだって」

「そんなのやってるんだ……」

ティオーが示した先、食堂の掲示板に確かにそんな手作りポスターが貼られている。

食べなきや（使命感）

もうずーっと……ほんとず——つと食べてない日本食。それも春の季節もの！ アフリカ料理も美味しかったけど、やっぱり文字通り魂のふるさと日本の料理がどれほど恋しかったことか。四季折々の旬があるっていいよね……ほんと……。あ、いや待ってほしい。やっぱり寒暖差激しいのはちよつと勘弁。

「春の山菜がメインだって。山菜かあ。ボク苦いの苦手だなあ」

「まあまあ。タケノコならそんな苦くないと思うよ？」

「そうだね……あれ、アフリカってタケノコあるの？」

「あるよー」

アフリカにも竹はある。どっちかって言うとな資源利用されるから食用にはあまりされないけど。

その中でタケノコを欲しがってたぼくは少数派で、周りからはちよくちよく奇異なものを見る目で見られていた。

好きなんだけどなあ、タケノコ。

「ボクは春野菜カレーにしよっかな」

「じゃあぼくは……あれ、おひたし無いや」

珍しいから食べてみたかったんだけど……たんぽぽの若葉のおひ

たし。無念である。

「同じのと、あとお惣菜つまんでいこうかな。テイオー、ぼくが先に席取ってこようか？」

「いいの？　じゃあ後でボクが代わるよー！」

「ありがとー」

空いてる席があればいいなーと思いうま混みを抜けていくと、他の人の食事の様子が目に入る。

横目でそれを見ていく中で、ふとグラスワンダー先輩のお皿に大量のおひたしが載っていることに気がついた。

あなただったのか。タンポポを絶滅させたのは。

……仕方ないかグラス先輩だし。実馬グラスワンダーは牧場で自分の周りに生えていたタンポポを食べ尽くし絶滅させた。

……≠……

ぼくの同室の相手について語らねばなるまい。

全領域対応型スーパーオールラウンダーことハッピーミーク。彼女は既に専属トレーナーがついている超エリートウマ娘である。

そんな彼女は今、部屋でぼくの私物の木彫りのマスクを着用していた。

「何やってんの」

「……被ってるんと落ち着きますね」

「ちよつと分かる……」

こういう仮面は祭事でちよいちよい被っていたので少しアフリカ感が出て落ち着く。

日本は魂の実家だけどあっちもまた実家である。感覚的にこう、どっちの雰囲気も時々は味わいたい。

「トレーナーさんの練習ってどうっ？」

「……どうというのは？」

「楽しいとかキツイとか」

「……トレーナーは優しいですよ。……トレーニングについては、ま

だ基礎ばかりだから……何とも」

「そっかー……」

とはいえ、トレーナーがついているということはそれだけちゃんとした論理に基づいたトレーニングを受けられているということだ。

問題があるとするなら、ミークのその才能だろうか。彼女は他のウマ娘と比べてもある意味厄介な才能を持つ。

というのは、あらゆる距離、あらゆる環境に即適応できるのだ。芝もダートも短距離も長距離も。

脚質までは流石に先行や差しが主だけど、ただこれ、とんでもないトレーナー泣かせの才能だと思う。何せどこに出場させてもいいということはどこにも特化できないということになるのだから。

ウマ娘は基本的に特定の距離、特定の作戦に特化して鍛えることが多い。バ場の特性も重要で、芝で力を発揮できないと思っていたらダートで才能を開花させるようなウマ娘もいたりする。一方でミークはなんでもでき「すぎる」。トレーナーさんがどういう方向に進ませればいいかを選ぶことが難しくなるわけだ。結果、レースに出た時になんとも言い難い器用貧乏な仕上がりになってしまう。

……しかし逆に言えばこれ、その欠点を克服すると器用貧乏から器用万能という怪物に化けるということでもある。

早い内に才能を見出すことができれば、その分を基礎練習に充てることでデビューまでの間に強固な土台を構築することができる。

そう考えると早い内にミークを見出したトレーナー——多分桐生院さん——は相当な慧眼ではないかと思う。前世では色々ネタにされてたけど。

「ぼくも早くトレーナーさんに教わりたいなあ……そういえばミークはどういう経緯でトレーナーさんがついたの？」

「……普通に選抜レースに出ましたよ？」

「やっばそうかあ」

別に何も悪いこと無いんだけど、例えば選択肢として選抜レース外でのスカウトなどがあつたりするのかな、と少し思っていた。

けれど、そもそも実力が分かってもないのにスカウトするなんてこ

とはまずありえない。当然何かしらの機会が必要になるだろう。でなければ、元々知り合いだとか、つながりがあるか。

やっぱり選抜は必須か。まあ、ぼく自身はこの学園にパイプも何も無いし、それが当然なのだけど。

「頑張らないとなあ。絶対勝たないといけないわけじゃないけど、勝ったほうが心証はいいし」

「……ふあいとー」

「おー」

「……もぐ(もぐ)」

「仮面取ったら?」

「……おちつくので」

そつかあ……。

でもぼくの私物だしそろそろ返してくれてもいいんじゃないかなあ……。

……≠……

「ということで選抜レースに向けてマスクトレーニングをしようかと」

「マスクってそういう木彫りのやつじゃないと思うんですよネイチヤさんは」

「うおおおーっカツコいい何それ!?!」

「家から持ってきたマスクだよ」

翌日、マスクを着用してきたぼくに最初に向けられたのは奇異の視線だった。

当然である。いくらぼくでもそれを理解できないとは言わない。木彫りのマスクなんて着けてきたら怪しすぎて何してるんだこいつとしか思えなくなる。

しかしとりあえず手近なところにあったマスクというのはこのくらいしか無かったりするのだった。

ちなみに本来のマスクトレーニングというのは、それ専用の低酸素

マスクというものが市販されているのでそちらを使うものである。

じゃあ何をしているかと言うと、なんとというかミーク以外の皆はどういう反応を示すだろうと好奇心がうずいたというか。

そっかあ……：気にいる子は少ないかあ……：でもターボ師匠が気に入ってくれてるし……：うん、まあいいか！

「ターボにはこれを進呈しよう」

「ストライプさんや、何で複数持つてるのあなた」

「ありがとうストライプ！」

「ターボも気軽に受け取らないの。ていうかこれ手彫り？」

「うん、ぼくが作った」

「そんな手間のかかったものの気軽に渡さないの！ ていうか器用だなあ!？」

「地元にはもっと工芸品みたいなもの作る人いたよ」

「それは本当の工芸品じゃないかなあ……」

「そっちは三千円くらいで売るよ」

「売るんだ……」

ぼくの手彫りはウマ娘パワーで彫った雑なのだからいいけど、そっちは他に販路もある売り物だからね。

インテリアとして買うひともいるからちよつとした収入になるし、お友達価格にはするけど無償というのはちよつと……。

「で、トレーニングだけど。専用のマスク着けなさいな。購買にもあつたよ?」

「お金が無いんだ」

「おおう……」

実家からの仕送りはあるけど、あつちのお給料と通貨のレートを加味するとそこのとこちよつと余裕がない。全寮制で三食出るから余計な出費こそ減らせるのだけど、今後のことを考えると数百円すら惜しい。こちとら月のお小遣いほんの二千円やぞ。ケニアの収入自体が安いのと、ぼくんち自体がそんな裕福でもないのが原因だけど。そもそも二千円でも送ってくれるだけありがたい。よく捻出してよ。家族多いのに。

「だからマスク」

「コーホー。」

「それはやめなさい」

「あぁう」

取り上げられた。悲しい。

……いやネイチャも被るんかい。

「早くレースに出たいなら募集かけてるチームに入るのが近道かもね。気質が合うかわかんないけど」

「そうだねえ。準備もあるし、もうちよつと先の話になるけど。考えてみるね」

「頑張れストライプ！」

「頑張るよ〜」

チーム……チームか。

早急にレースに出たいと言うのなら、たしかにそれが最速だ。問題はチームという枠組みの中に入ると、どうしてもそこにしがらみが生じてくるので自由に動けなくなることか。わかりやすく極端な例で言うと、「チームのエースが三冠路線に進むからお前は回避してくれ」ということがありうるわけだ。

トレーナーとしての実利にチームの名誉、それに運営。そういった面から見ると仕方ないことではある。必要さえあればバチバチにメンバー同士がやりあうことも厭わないスピカやカノープスは少数派だ。

ぼくは回避してくれと言われれば構わないと思ってるけど、賞金を逃すというのはやっぱり惜しい。いつそこぞのステイゴ……キンイロリョテイめいたシルバーコレクターでも目指すか？　と思つたけど、やる前から負けにくいのは趣味じゃないともうひとりのぼくがワンワン吠えているリアルシマウマの鳴き声。

じゃあやつぱり勝ちたいし、できるならあまりそういうしがらみが無い方がいい。

もつとも、専属トレーナーにしても、リスクはつきものではあるのだけどね。

メイクデビューでファン人数1000人超えたからとりあえずで
ホープフルステークス走らせて玉碎させてしまったトレーナーは残
れ。
ほくも残る。

ぼくは虎になるのだ

選抜レース。

それはまだトレーナーがついていないウマ娘にとって最も重要なアピールの場である。

トゥインクルシリーズに参戦するにはチームへの加入か専属トレーナーがつくことが条件として挙げられるけど、レースに出走するのはぼくらのような新入生だけじゃない。

運悪くトレーナーさんに声をかけてもらえなかったウマ娘、何らかの原因でデビュー前にトレーナーさんが離れることになってしまった——たいていは引き継ぎはするだろうけど——ウマ娘や編入生、あとはあえてチームなどに入らず徹底的に基礎を固めてきた猛者なども含まれる。

最後のは滅多にないけど、別に一定の年齢になったら必ず参加しないといけないという規則は無い（年齢の上限はあるだろうけど）。それも一種の戦略だと思う。既にクラシック三冠を制しているナリタブライアン先輩の姉であるビワハヤヒテ先輩が、テイオーたちの一年後にトゥインクルシリーズに参入するというケースだってあるのだし問題ない。たぶん。……いやぼくのいる世界だとどうなるかわからないけど。

……ともかく、そういうわけでぼくらも一ヶ月ほど学生生活と並行してトレーニングを行い、選抜レースの日を迎えたわけだけでも。『芝2000、選抜第3レースの出走者をお知らせします。一番、サバナストライプ、二番、ツインターボ。三番、トウカイテイオー。四番、ウオツカ。五番、メジロマックイーン。六番、マヤノトップガン。以上です』

「オイオイオイオイオイ」

なんだコレ地獄かね？

出走表考えた人ちよつと表出てきてくれない？ 我シマウマぞ？

ロバ娘ぞ？ どうやってこの包囲網突破せえと言うねん。圧で死ぬわ。

「そろそろ出走ね。ストライプの本気の走り、最初に走った時から見てないからちよつと楽し……ストライプ？ 今にも死にそうな顔色になってるけど大丈夫……？」

「つよい。勝てない」

「もう心が折れてる!？」

「交代しようよスカーレットお……」

「まあそう言うなら……オホン。いやダメよ流石に。呼ばれたからにはちゃんと行かないと……」

ウオツカが出るならスカーレットに振ればいけるかと思つたんだけど流石にダメか。

今回は特に、ウオツカから突つかかかっていってないから、対抗意識を刺激されてもいないし。

「ほら、早く行かないと皆に迷惑かかっちゃうわよ」

「はいママ……」

「ママじゃないわよ」

面倒見が良いからつい……。

まあ実際、これで変にゴネて迷惑をかけてしまうのも本意じゃない。重くなる気分と裏腹に軽い脚でコースに向かうと、皆は——ウオツカを除き——集まっているようだった。

ウオツカは多分「ちよつと遅れてきたほうがカッコいいだろ？」とかそんな感じの理由でよそでしつかり準備運動してるな、これは……。

「おっそいぞストライプー!!」

「そんなに遅くなくない? ……ないよね?」

「ええ、まだ十分時間ありますわ」

ターボ師匠はせっかちだからなあ。

「準備うんどーてつだつて!!」

「はいよー」

前屈や軽いストレッチ、二人じゃないとできない準備運動をした後は、二人でコースの外をアップのために軽く——と言いつつ40kmは出てるけど——走りにいく。

気持ちとは関係なく脚が動く。その間、周りを見ていると……客席はすごいことになっていた。

テイオーは会長がやり遂げた無敗の三冠という偉業に憧れ、自分自身もそうありたいと願い日々努力を続けている天才だ。たびたび無敗の三冠という言葉を口にしてるのは自らの退路を断つためという意味合いもあり、デビュー前の、それも入学直後であるにも関わらず実力は学内でよく知られており、トレーナーたちも目を光らせている。

マックイーンはメジロ家の秘蔵っ子で、入学前からステイヤーとしての才能を期待されてきたこれまた注目を浴びている才媛。ウオツカは態度にこそ難があるけど、行動原理には一本の芯が通っているかのようにわかりやすい。大口に違わないだけの実力も備えている。

マヤノはまだ走りを見せる機会が少ないから知る人ぞ知るところだけど、いざその時が来たら異次元の理解力と脚質は多くのトレーナーを魅了するだろう。ターボ師匠だつてネタ枠とか思われがちだけど、重賞を制覇できる実力がある時点で上澄みも上澄みだ。あの破滅逃げスタイルもうまくやれば格上すらハメられる可能性を秘めている。

対してぼく。

サバンナストライプ、シマウマ。

ちなみに第三回JWCでギンシャリボーイが連覇していると明言されているので正史ではあのレース勝ててない。

そういうメタ的な情報抜きで考えると、ぼくが学園で本気で走ったのは模擬レースの一度きり。こつちに目を向けるトレーナーさんはいないだろう。

いつそ尻尾回しに回して困惑させたら。

「あ、ストライプとダブルジェット」

「ツインターボ!!」

「ふたりとも、今日はよろしくね☆」

「お手柔らかにどうぞお」

走っているうちに、先にアップを始めていたテイオーとマヤノに追

いついた。今日のマヤノはやる気十分なようで、目もしつかり開いている。

「あれあれ、ストライブなんかやる気無さそーだね？」

「ついこないだ『テイオーとは本気でやり合わない』って言ったばかりでコレだもの……」

「そんな細かいこと気にしなくていいのに」

細かいことかあ。

細かいことかなあ。

テイオーがそう捉えるならいいか。

「ねえねえストライブちゃん」

「何だいマヤノ」

「ストライブちゃんだとちよつと長いから縮めていい？ ストちゃんとかそのくらいに」

「なんかストライキしてるみたいでちよつと嫌だなあ……」

「じゃあサバちゃん？」

「魚だコレ」

頭の中でシマUMAが「鯖じゃねえ!!」と吠えて生魚を投げつけてくるのが幻視みえされた。

「じゃあちよつと変形してサブちや——」

「それはマジでヤバイ」

「ぶーぶー。文句ばっかり！」

「テイオー、何かいい案無い？」

「ストライブだからトラちゃん？」

「……まあそれでいいか」

「いいんだ」

他よりマシな気がする。

虎だ。虎だ。今からぼくは虎になるのだ。

こう、縞模様仲間だしいつかなって。

「ストライブは……トラだった……!?!」

「ぎやおう」

「そのシマ模様もトラだったから……!?!」

「もしやぼくはトラ……?」

「自分を見失わないで」

自分自身が何者なのかを見失いながらもアツプを終えてゲート前に戻ってくる。

途中、マヤノが何か思いついたようにこちらに視線を寄越してきたけど、どうやら何かが「わかった」らしい。こういう時のマヤノは怖い。

ただ……。

(——そう簡単に負ける気は無いよ)

重い気分が、奥から生じる闘志に押し流されていく。

あまり走りたくないなと思っていたのは負ける可能性が高いからだ。けど、いざ走るとなると負けるかもなんて泣き言は吹き飛んだ。ただ、勝ちたいという衝動だけが心のなかで燃え上がり光を灯す。

「お? またストライプの尻尾回ってる!」

「くっ」

ダメだ、この尻尾完全に感情と連動してる。気付いたらまたちよつと恥ずかしくなってきた。

「気にするようなことかあ?」

「ウオツカ……」

「ちよつと変かもしれないけど、そこも含めてストライプはそれが走りやすいんだろ? じゃあ気にしねえで走って、結果で黙らせてやればいいんだよ」

「……そうだね」

こういう時、走りに対して真摯なためか、ウオツカはいやにカツコいいことを言う。シチュエーションに対する回答が完璧だ。

背も高いし、ウオツカに憧れる女子が量産されるんじゃないかな……中身知らなければけど……。

絶対今「カツコいいこと言ってやったぜオレ……!」とか考えてるよ。口元ニヤけてるし。

「あの……皆さん、そろそろゲートに入った方がよろしいのではないですか?」

「そうだった」

結局、ぼくらはマツクイーンに指摘されてようやくゲートにいそいそと入り始めた。

何が足りなかったんすかね

距離2000m、芝。皐月賞や秋華賞、秋の天皇賞を目標とするウマ娘が多いこともあり、人気のコースと言える。

クラシック三冠、ティアラ三冠、多くのウマ娘にとってほとんど必ず通らなければならぬレースで採用されている。当然——今回出走するべく以外の五名にとっても得意な距離だ。

唯一、マックイーンは春天を目指してそちらを前提にトレーニングしてるだろうし、更に長距離のレースの方が得意かもしれない。ウオッカも将来的にダービーウマ娘になりうる逸材とはいえ、本質的にはマイラーだ。未だ発展途上である現状なら、勝ちの目はまだ見える。

『ゲートイン完了。出走の準備が整いました』

一歩、前に出る。

ぼくの体は他のメンバーに比べるとやや小さい。だからこそゲートの中でも少しなりとも前傾姿勢になる程度に余裕がある。

一瞬、息を止める。その瞬間に音を立ててゲートが開き……一斉に、一歩を踏み出した。

『各ウマ娘綺麗にスタートを切りました！』

「行つくぞおお——！！」

『先頭に出たのはツインターボ！ 二番手マヤノトップガン。三番手にはトウカイテイオー、四番手メジロマックイーン。その後ろからウオッカ。最後尾にはサバンナストライプがつけています』

当然と言わねば、ハナを切ったのはターボ師匠だった。

後先をまるで考えていない見事なまでのスタートダッシュ。嘘だろ、とばかりに皆の表情が強ばるのが後ろから分かった。

マヤノは唯一平静を保っているが、これは恐らく先にぼくを見て「わかった」事実から導き出した結論。ぼくは「逃げ」をされるのが多少、苦手だ。

ぼくは他のウマ娘と比べると最高速に劣る。いくら加速力パワに優れ

ていてもスピードが無ければ競り合いには勝てない。最終2ハロンで競り合いになったらその時点でほぼほくの負けと言っている。最終直線でようやく追いつくレース運びになりやすい逃げウマ娘は、そういう意味でほくの天敵と言っている。

マヤノがほくの走りを見たのは一度きりだと言うのに、そのことが即座に「わかった」のは驚異の一言だ。逃げを打つのはむしろ望むところ。動揺する理由も無いのだ。

ここで一瞬、ここで皆の判断が緩む。どう見てもペースは早い。ターボはあのペースを維持して逃げ切れるということか？ いやしかしターボだし、何も考えてないかもしれない。けれど、いやしかし。もしかして――。

「絶対」はどこにも無いのがレースだ。大逃げという戦法が確立されている以上、明らかかなまでのオーバーペースでも「もしかすると」が必ずウマ娘全員の頭によぎる。

「マジかよ……っ、ストライプ!？」

『ここでサバンナストライプ五番手に出た！ これはかかっているか？』

そこでぼくはウオツカの前に出た。主な戦略が差しのウオツカだけど、本来先行することも逃げることもできる万能型だ。彼女は普段、本来の差しの位置につけるよりもやや前に出る。

差し型から追い込み型に近いため、普段最後尾に近いところにいるぼくがこのタイミングで前に出るというのは、否応なく「この位置につけていると差しきれないかもしれない」という印象が生じる。否応なくペースが上がるのだ。

「っ！」

『ウオツカ、再度前に出た。一番手ツインターボから二番手マヤノトップガンの差は6バ身――7バ身に広がる。大きなリード。三番手、トウカイテイオーとはそこから4バ身開いています。おっと、メジロマッククイーン、トウカイテイオーを抜いて三番手!』

「まだまだっ！」

背後のウマ娘たちのペースが上がったのに合わせて、ターボ師匠の

ペースが更に上がる。

——どう見たって破滅に向けて一直線だ！

それを理解するのにそう時間はかからない。だから、ぼくは更にペースを上げる。

「んなっ」

『サバンナストライプ再々度前へ！ ウオツカ、つられて更に前へ！』

「ここで競り合うのか……!?!」

(どうかな)

——残り1000m。

マヤノ……見たところテイオーも、そろそろ気づくだろうか。だとしてももう遅い。仕込みは済ませた。

一瞬、かくりとマヤノの脚が「落ちる」。

『1000mを通過しました。タイムは1分02秒5！ これは速い！』

「!!!!」

皐月賞のレコードタイムは、ぼくが知る限りだと約1分58秒……57秒だっけ。そうしたレコードなんかと比べると通過タイムは一見大したことが無いように思えるが、デビュー前のウマ娘、それも体が仕上がっておらずトレーナーから正式なトレーニングを受けていないウマ娘としては驚異的なハイペースだ。それを牽引しているのは他でもないターボ師匠。今は軽快に飛ばせているが、あと600m……いや、400mもあれば逆噴射し始めるだろう。

『先頭は変わらずツインターボ！ 続いてマヤノトップガン、ジリジリ差を詰めていきます！ メジロマックイーン三番手！ おっとトウカイテイオー、脚を溜めているか!?!』

残り800m。

——ここだ。

一足で踏み込み、全力を解放する！

『最後尾のサバンナストライプここで仕掛けた！ まくっていくまくっていく！ 凄まじい加速！ だが仕掛けが早すぎるんじゃないか!?!』

「ふっ……はっ……」

計算は済ませた。思考も謀略ももはや必要ない。思考を全て削ぎ落とし、全精力を両足に注ぎ込み、走る、走る、走る、走る！

『3コーナー回って4コーナーに差し掛かる！ ツインターボの先頭はここで終わり！ 一番手はマヤノトップガンに替わりますが苦しい様子！』

当然だ。ターボ師匠の超ハイペースに巻き込まれてレース全体の速度が飛躍的に上がっている。

遅筋——持久力を発揮するための筋肉の割合が多くそれで体が絞られているステイヤーにとって、この負担は非常に大きい。さらにソレを最後方からつつき回すことで全員を擬似的に「かかった」状態に追い込む。

最高速で劣るロバ娘が一流の超高速ランナーに食らいつくためには、こうした小細工を弄するほか無い。

——お前のやり方は、肉食動物の狩りのようだな。相手が疲労するまで追い続け、「ここぞ」というところで全力で仕留めにかかる。

前にケニアのトレーナーにそう評されたことがある。だから、トラと言われた時は思ったよりもしっくりきたものだった。

(追い詰めて——食らいつく！)

『サバンナストライプ、ロングスパート！ 見事なごぼう抜きを見せる！ 速度は維持できるのか！ ここから他の子は間に合うのか！』

——何で尻尾が回っているんだ!?!』

黙ってる実況!!

——残り400m、最終直線！

『各ウマ娘一斉に上がってきた！ サバンナストライプ、脚が衰えない!』

ぼくの最大の武器は生まれ持った体のバネと環境によって培ったスタミナだ。減速だけは絶対に無い。

——と。

『——ここです上がってくるトウカイテイオー！ トウカイテイオーが上がってきた！ 驚異的な末脚！ ウオツカもここで追い上げる！』

メジロマックイーンも並んだ!』

「っー」

「ふっ、ふっ、ふう……!!」

背後からプレッシャーが来る。凄まじい重圧だ。さすがはテイオーたち。

「だけど、負けない。勝ちたい。本気の勝負を望まれるならばこそ。」

「テイオー……!!」

「悪いけどっ……ボクが勝つよ……!!」

柔軟な関節を備えたその脚は、常に最善の角度、最善の配分で地面に力を伝えていく。

スパートをかけるにあたってフォームもそれに適応するため大きなものに変わり、大きく足を上げることによって体重をかけてより強く地面を踏みしめて前が出る。テイオーが力尽きるまで、その速度は緩まない、どころか……。

(まだ伸びる……!)

すごい。

やっぱり、テイオーは速い。

生まれ持った才能だけじゃない。無敗の三冠にかけた執念と、それを実現するために重ねた研鑽。「帝王」の名に恥じない矜持。それら全てが彼女の強さ、速さに結びついている。

「ぼくも、その本気に応えないといけない。」

「負けるかぁッ!!」

「勝つのは……ボクだぁあ!!」

必死に脚を動かし、ストライドを拡げる。跳ぶような、あるいはいつそ「飛ぶ」ような勢いで駆け抜けるが……差は、広がらない。どんどん詰まっていく。

そして。

『トウカイテイオーとサバンナストライプ、ゴオオオール!! 差はわずか! どっちだ!? 一着は——トウカイテイオー!!』

歓声が、会場を貫いた。

——負けた。その実感が胸を突くと同時に、どこか爽やかな感覚を

覚える。全力で競り合って負けたのなら、それはただ、ぼくの実力が不足していただけでしかない。

頭の中でたづなさんが「次につながる良いレースでしたね」と言っているのが聞こえてくるようだ。いやぼくはアドバイスが聞きたいんだけど。何が足りなかったんすかね。

『続いて半バ身離れてメジロマツクイーン、ウオツカ、マヤノトップガンほぼ同時にゴール！ 最後尾、ぽつんとひとりツインターボ。……今ゴールしました』

やめたげてよお……。

一度思いの丈をぶちまけよう

ほどなく、歓声が落ち着いた頃合いを見計らって、ぼくは走り終えてターフの上でへばっているターボ師匠を回収してから皆のもとに向かった。

やつぱり皆目に見えてへばっている。次のレースが始まる兼ね合いもあるため、コースから出る程度の気力は残っているようだけど、クールダウンできる体力は残らなかったようだ。

「大変だったねえ」

「トラちゃんも走ってたよね!？」

「ひ、他人事みたいに言いやがって……！ 完全に狙ってただろ、この展開……!！」

「狙ったねー」

「こ、こいつ……」

最優先ターゲットにしたマヤノと、戦略のためとはいえ後ろからつつき回してしまったウオツカは、既に脚がガクガクだった。若干申し訳ない。

「テイオー、マックイーン、お疲れ様」

「ええ……いやターボさんを背負ってここまで来るなんて元気ですわね」

「おつかれっ。……もしかしてストライプ、本気じゃなかったりした？」

「まさか」

間違いなく全力だった。ただ、体はそれを速さとして出力してくれはしなかった。それだけのこと。

あと、ぼくに関しては余力があると言うよりひと息入れると勝手に回復するというか。

「もしもし神様？ 好転一息レース終わってから発動してるんですがどういふことですか？」

「完敗だよ。流石テイオー」

「へへっ、だって無敵のテイオー様だもんね！」

たしかアプリだと本当に無敵になれるんだよねテイオー。他のウマ娘もそうだけど。

この世界だと本当に無敗の三冠ハイパームテキテイオーになれるかな。どうかな。「ええ、感服いたしましたわ。……とところでストライブ、貴女の……そのスタミナですけど、どこで鍛えたのですか？」

と、そこでマックイーンが疑問を振ってくる。スタミナ……スタミナかあ。

教えるのは別に構わないんだけど、うーん……マックイーンの求める答えに合致するものを出せるかなあ。

「しいて言えば、高山トレーニング」

「しいて言えば？ その言い方ですと、特別なことをしていないように感じますけれど」

「ケニアって国土の大半が標高1000m以上の高原で、ぼくが生まれたところだと……2500m近くあったから……自動的に……」

「あ、はい……」

だから勝手に肺機能が鍛えられたわけですね。(RTA文法)

これは真面目な話でもある。海外マラソンランナーが日本のマラソン大会の上位を総なめにしたという例があるけど、その原因の一端がこれだ。

もともと、ウマ娘の場合必ずしも「だから勝てる」とは限らないのだけど。

「やはり私も高山わたくしトレーニングは取り入れた方が良いでしょうか……」

そういえば今専門の機械があるんだっけ。空気を薄くするとかなんとか。

メジロ家ならそういう設備もすぐ手元に取り寄せたりできるんだろうか。テイオーの脚をマッサージしながら、少し羨ましく感じた。

……≠……

一着になったテイオーに大勢のトレーナーが押しかけるのと、ぼくを見るトレーナーさんたちが困惑して首を傾げているのを見届けた後、ぼくは中庭の大樹のうろにやってきていた。

選抜レース中だけど……いや、だからこそだろうか。ここも大盛況だ。

「何でもうトレーナーがついてる子が出てるのよー!!」

「どいつもこいつも見る目が無ぁーい!!」

「トレーナーさんをもっと甘えさせたいいいいい!!」

「にんじんラーメン超爆盛りアブラマシマシペアセットおお!!」

「あんたらおかしいで」

ノイズは挟まったが大盛況だ。

すまん、と約二名のウマ娘を押し出していくタマモクロス先輩を見送ると、次はぼくの番だった。

そろそろ一度思いの丈をぶちまけよう。

「本当はダメだけど……ひでえことだけど……負けても賞金が五十万くらい出てほしい! たくさんお金が欲しいいいいい!!」

後ろのウマ娘たちはズツコケた。

離れたところでタマ先輩が「ちよつと分かる……」とばかりに、やや複雑そうに頷いている。

レースでは、たとえ入着してもライブに出るか否か、出させてもらえるかどうかによっても賞金が変わる。1着の賞金が一番多いのは当然にしても、2、3着と4、5着で入着した場合にもまた差が出てくる。

調子やレース場の状態、出走者によって変動してくる着順の中、レースも楽しみたいし安定してお金も欲しい。負けて改めてぼくはそう思った。

「ふう」

スツキリした。

負けて悔しい思いもちよつとあったし、それも一緒に吐き出せたよな感覚だ。

とりあえず一旦寮に戻って着替えよう……としたところで、タマ先

輩がふと何かビビツと来た様子でこちらににじり寄ってきた。

え、突然なになになに。

「……キミ」

「な、何です……?」

「猛虎魂を感じる」

「グリーンウエル」某虎の球団ファンにとつてのトラウマ。超大型助っ人として大金を積んで契約したら7試合だけ出場して引退して帰った。

「又、ツツツ」

「タマ!？」

しまった、あまりに勢いよく迫ってくるものだからつい反撃を……。

「え……ええ性格しよるやんけ……ウチやなかったら戦争やぞ……」

「ごめんなさい……なんか急に迫ってくるから……」

「タマ、グリーン……誰だ？」

「ソレ以上言うんやないでオグリ。その名は禁句や」

……こつちでもあったのか、神のお告げ事件グリーンウエル引退の理由。会見でマジで言った。ファンはキレた。……。

「タマちゃん、知り合いの方ですか？」

「え。いや面識は無いで。すまんなキミ」

「いえ、いいですよ。タマ……ちゃん、先輩？」

『「ちゃん」は抜いとき』

「はいタマ先輩」

「よし。こつちはクリークとオグリ。多分知つとるやろ？」

「はい。噂はかねがね。サバンナストライプです。よろしくおねがいします」

「トラで縞。名前から猛虎魂を感じる」

「まだ言いますか」

「縦縞のユニフォームが似合うと思うで」

「そろそろ虎ファンからアスリートに思考を戻してください……」

いけない。魂が虎の球団に囚われかけている。ウマ娘より場末の

匿名掲示板にいそうなノリだ。頼むから帰ってきてほしい。

「サバナステイシヨク……」

「サバナストライプちゃんよ、オグリちゃん……」

いけない。魂が食欲に囚われかけている。生粋のウマ娘のノリそのものだが怖いので頼むから食堂に行ってきてほしい。

「ところで、ストライプちゃん？」

「あ、はい」

「少し……頭をなでなでもいいかしら〜」

「ご勘弁を」

いけない。魂が母性に囚われかけている。下手に受け入れるとぼくは今から赤ちゃんにされるから誰か助けてほしい。

「しゃ……シャワー浴びて着替えてこないといけないから、ぼくはコレで……」

「……せやな！ クリーク、オグリの腹も鳴つとるし、食堂行くで！」

「え？ いや私は問題な……」

「あらまあ。言われてみたら、よく鳴ってるわあ」

意を察してくれたタマ先輩のフォローが光る。

先程の焼き直しのように二人を押し離れていくのを見送り、当初の予定通りぼくはシャワーを浴びに戻った。

しかし何であるの三人ここにいたんだろう。模擬レースとかでイナリワン先輩に負けたとかかな。

はてさて、軽くシャワーを浴びて考えてみるけど、やっぱり選抜レース、一回目じゃ思ったようにトントン拍子に話が進むことは無いだろう。

競り合った相手もテイオーにウオツカ、マヤノにマックイーン、ターボ師匠と強豪ばかりだし、いずれも名前はトレーナーの間でよく知られている。

その中でぼくはまるで注目を受けていなかったポツと出のシマウマだ。誰こいつというのがトレーナーさんたちの正直な気持ちだろう。

認識としては、いいところ「まぐれでテイオーと競り合えた幸運なや

つ」ってところか。

今の時点で過度な評価は要らないんだ。そのくらいでいいし、そのくらいがいい。ウオッカもスカーレットもまだチームに目星をつける前のようだし、クラシック戦線が激化していくのは来年以降になるだろう。

年度内で四回あるうちの最初の選抜レースが終わったから、今年度は残り三回。三回目か四回目に理解のあるトレーナー君と巡り合うくらいが理想的かな。

まだぼくの体は完全に出来上がってるわけじゃない。トレーニングも栄養も、自分である程度管理はしているけど本職のトレーナーにどうあっても及ばない。なら早い内にトレーナーがついてくれるとしたらそれはその方がいい……けど、そこで現実を見ないわけにはいかない。

人は良い面よりもまず悪い面の方が目に付きやすい。

負けたぼくは、外から見て「足りない」と思われるようなことが数多くある。尻尾が回っていたという困惑を超えてこちらに寄ってきたトレーナーがいなかったのがその証左になるだろう。

この一回は言わば叩き台。まだお金も人気もかかっていないデビュー前の今のうちに、ここから少しずつ「見え方」を修正していけばいい。

慌てない、焦らない、その上で計画をしつかり練る。お金を稼ぐためにはそれが大事だ。お金に限ったことでもないけど。

まずは軽くノートにでも今の問題を洗い出すのがいいかな。部屋に戻ってそう考えていたところ、外から何やらノック音が聞こえてきた。

「あ、はい」

ミーク……じゃないな。同室だし、そういうのは気にしないでらう。じゃあ他の同級生かな。

外に出てみると、そこにいたのは全身黒づくめの服に身を包んだニンジャだった。

「……………はっ。」

「ドーモ、サバンナストライプⅡサン。ニンジャスナイパーです」
なんつ……え、ニンジャ？

ニンジャ、えつ……ニンジャ？ スナイパー？

ニンジャスナイパー？ って、あの？ あれ???

「アイエエエ!? ニンジャ!? ニンジャスナイパーナンデ!」

二文字しか違わない！

コワイ!!

「ある方が貴様をお呼びだ。これから連れて行く。反論は受け付け
ん」

「えっちよつと待って何を……やめつ……ヤメロー！ ヤメロー！」

頭が追いつかない！ いきなり現れて怒涛の勢いで追い込みを始
めるんじゃない！

何なのこの状況!!

誰か説明してくれよお!!

◆オマケ：選抜レースを見ていたトレーナーによるサバンナストラ
イプの寸評

・新人トレーナーA

足元がふらふらしており生まれ持った体幹でどうにか持ち直せて
いる印象。才能で走っているだけと考えられる。

フィジカルによる強引なレース運びがうまくハマっただけではな
いだろうか。トウカイテイオーと比べスマートさに欠け、同じことを
しろと言ってもできるとは考えづらい。

現状では選外。何で尻尾が回っているのか理解できない。

・中堅トレーナーB

スタミナは見事だが、近現代の長距離戦においてはマイル戦すら制
することができる優れたスピードが要求されることを、スーパーク
リークが既に示している。

時代に逆行した半端なランナーという印象が目立つ。選外。

個人としては視界の中で意図不明の動きをされて気が散りながらも三着をもぎとったメジロマックイーンに着目したい。

・ベテラントレーナーC

どこからどこまでが狙った展開であるのかが不明だが、フェイントを交えた特殊な走法をしていることが見て取れる。

仮にレース展開を制限するために走法を変化させていたのだとすれば、ウマ娘個人でレース展開を把握し逐一作戦を更新できる頭脳があるということだ。フィジカルを鍛え最高速を更新することで、GI戦線への参入も夢ではない。ただし、希望的観測による仮定であるため次回、次々回以降の選抜レースまで様子を見たいところ。

空力学的に何の意味があるのか分からないあの尻尾の回転はやめさせるべきだと考える。

・桐生院葵

特殊な走法をしておられるようなので、足腰への負担が気にかかりました。周りのウマ娘さんたちの様子を見る限り終始サバンナストライプさんがペースを握っておられたようなので、作戦立案能力が高いことが見受けられます。現在、担当ウマ娘がいるため私が個人的に面倒を見ることができないのが残念なところです。

コメント：大丈夫です、フォームは矯正できます！

・東条ハナ

ルドルフからの報告に上がっていた注目株。ケニア出身で身体バランスと肺機能に優れており、あの年頃にしては優れた戦術眼を持っている様子。

現地の環境はトレーニング環境としては最適だったかもしれないが、専門家に面倒を見てもらっている様子は無く、全体的に独学で鍛錬した形跡が見て取れる。早熟かつルドルフを目標にトレセン学園への出入りも行っていたトウカイテイオーに敗北すること自体は自然であり、相応の教育を施せば伸び代は大きいのではないか。

リギルメンバーの海外挑戦に向けたマッチアップ相手としても最適と考えられるため、可能ならチームに迎え入れたい。

ところであの尻尾の回転は何？

・新人トレーナーG

その時、ふと閃いた！

このアイディアは、ハルウララのトレーニングに活かせるかもしれない！

オリオン座の一等星

ニンジャスナイパー。「JAPAN WORLD CUP」、その三作目に登場したニンジャのウマだ。

何を言っているか分からないと思うが本当にニンジャでウマだとしても言いようがないのだ。コワイ！

作中の活躍についてはなんと表現したらいいのかちよつと難しい。他のウマがゴールしたと思ったらニンジャスナイパーだった。何を言っているか分からないと思うが何をされたのか一瞬分からなかった。そういう感じなのであえてこういう走り方をするとは言いつらい。勝ち筋それしか無いし。解釈としては変わり身の術か変化の術かのどっちかだけど、どっちにしてもウマが忍術を使うなという話である。

ちなみに所属は日本ではなくロシアである。

そしてニンジャスレイヤーではない。

今の彼女は、シンプルな構造の黒い面頬メンポを着用したジャージ姿だ。髪色は栗色よりも更に明るい月毛。確かに布と布の間から見えてた毛色は明るいものだった覚えがあるがミスマッチ感がスゴイ。それにどうにもジャージの色が黒い。改造したのだろうか。ニンジャっぽさを出すためとはいえそこまでする？

……するのもかもしれない。ニンジャスナイパーだし……JWCでもウマなのに忍者服着てたし……。

(そもそもこのひと一体何者なんだ?)

サバンナストライプの例から考えて、彼女も転生者のサムシング？ いや、それにしてもサバンナストライプほという存在に対してあまりに何も感じてない気がする。

……それはそもそもウマ娘について知らなかったり、JWCについて知らなかったという可能性もあるけど。それはそれとして何か違う気もする。シマウマという異質な存在に対する反応が淡泊すぎる。

そんなニンジャスナイパー……先輩？ 同級生？ に連れてこら

れたのは、各チームに与えられた部屋が並び立つ部室棟、その一室だった。

「入れ」

「アツハイ」

思考を打ち切るような鋭い言葉に促され、扉を開けて中に入る。見ると、そこにいたのは見覚えのないハンチング帽を被った女性だった。

ウマ娘なら、ある程度リアルにはなってもそれなりに見分けはつく。となれば知らないトレーナーの人か……と思い少し視線を横にやると、すぐに異常が目についた。

髪、水色。

否応なく、ぼくはその裏に誰がいるかを想像することとなってしまった。そして、給湯室からやってきたウマ娘の姿によってその想像は現実のものと証明される。

「待っていたよおー！」

「やはり黒幕はあなたか」

——アグネスタキオン。

前の世界では男女問わず担当^モトレーナー^{モツト}を量産した狂気のンマツドサイエンティスト。ないしは^{てえん}天才化学者。あとなんかちよくちよくハーフボイルド探偵みたいなポーズ取ってるウマ娘だ。今もやってる。

実験好きで偏屈という印象が強い彼女だが、どうやらこの世界線ではチームに所属することができているようだ。多分、あの^モトレーナー^{モツト}君のおかげで。

「ふうん？ やはりとききたか。こここのところ活動は控えていたはずだが、一年生にも私のことは知れ渡っているのかな？」

「スカレットに聞いた後で、色々調べて……」

「ああ、あの子か」

これに関しては事実だ。偶然調子が良かったので練習をしていたのか、タキオン先輩が走ってる姿がフォームが綺麗で足取りも軽くてすごかった、と興奮した様子で語っていたのを覚えている。

もつとも、ぼくの印象は前世のゲームのそれに偏っているのは否めないが。

「しかし待っていたのは事実だが、黒幕とは心外だ。モルモット君、スナイパーに頼んで彼女を連れてきてもらったのはキミだろう?」

「ええ、そうですね」

「えっ、そうなんですか……?」

穏やかに微笑むと、女性——トレーナーさん?——はこちらに小さく会釈をした。

「はじめまして。チームベテルギウスのサブトレーナーを務めております、金城利紗かねしろりさと申します。少々強引ではありますが、スカウトのためにサバンナストライプさんをお呼びさせていただきました」

「は、はじめまして。サバンナストライプです……スカウト?」

「ええ」

チーム……ベテルギウス?

知らない名前だ。オリオン座の一等星だっけ? 少なくともアニメやゲームには存在していなかつ……いや、背景に映ってたんだっけ? どっちにしてもフォーカスはされてなかったようだけど。

しかし、こんな強引な方法でスカウト……? あんたスピカか?

穏やかそうな顔と物腰してブツ飛んでるな。中央のトレーナーだけある。

「あの、こんなやり方でスカウトと言われても、ぼくはこのチームのことを何も知らないんです。すぐに『はい』と頷くわけにはいきません」

「おや、思ったより理性的だねえ」

「思ったとおりですよ、タキオン。非礼は承知しておりますが、どうしても先んじてお声掛けをさせていただかなければならない事情もありますので……」

「はあ」

そうは言っても、スペ先輩にとつてのスズカさんのような即決に値するだけの要素はぼくには無い。あくまで金銭目的であるぼくだし、アニメのマックイーンのように泣き落としはそう通用しない。

チームに対する思いもぼんやりしてるから、悪印象というのはその

分お断りを伝えるだけの理由になりうるものだ。

部屋の壁際で黙って立つてるニンジャスナイパーも怖いし。

「あたたかいものどうぞ」

「あたたかいものどうも」

タキオン先輩がカップを机の上に置く。匂いからするに多分紅茶だと思っただけど、明言していないから分からない。

……あ、サブトレさんが飲んだ。

瞳が光り始めた。

かつこよ。

道理で何の飲み物か濁すわけだよ。

「先の選抜レース、拝見させていただきました」

「あ、はい」

いけない。気が散る。

「単刀直入にお聞きしますが、あなたはあのレース展開をどこまでコントロールされていましたか？」

「ふうん？」

何やらこちらに興味を持ったように、タキオン先輩が目を細めた。

ニンジャスナイパーも視線を向けてくる。コワイ。

「……ターボが大逃げすること、ぼくが逃げを打たれるのが苦手だということをやマヤノに読まれる、というところまでは読んでました。なので後ろからつついてペースを強引に上げて、スタミナを削る。そうすればあとは体力勝負に持ち込める……はずだったんですけど、結局テイオーに差し切られました。何もコントロールできてません」

「だそうだよモルモット君」

「小学校を卒業したばかりの一年生の思考ではないですね」

中身は小学校を卒業したばかりの一年生というわけでもないし。

しかし、それが何の言い訳になるといつのか。レース勘が無い。まだ二回目。そんなものは皆同じだ。

「——私達が評価をしたいのは、その思考力です」

「けど、負けましたよ」

「その原因は作戦が悪かったのではなく、単純なフィジカル差ですよ」

「マジですか」

「はい。マジです。聞きますが、あなたはこれまでどういう食生活を送ってきましたか？ ケニアです」

「……………」

「推測ですが、普通の人と同程度にしか食べていなかったのではないのでしょうか？」

「……………そうです」

ぼくの住んでる地域はそれほど富裕層がない。

ウマ娘も生まれるけど多くは農作業に出されている。お金稼ぎのためにレースに目を向ける子も少なくはなかったけど、家をどうにか守るために諦めた子もいる。

ぼくの家族もわりかし大家族だ。母がサバンナパーティーというぼくと同じシマウマタイプの子ウマ娘だけあってまあ兄弟姉妹の中でウマ娘の割合は少なくない。エンゲル係数がヤバイ。同時にウマ娘パワーのおかげで農業の手際もヤバイ。

その中で生活していくために切り詰めるべきは何かと言えば——
まあ、食費になる。

普通の人と同程度の食事であって別に死にやしない。活動を抑えさえすれば。

当然、お金は無いので今のぼくは基本、奨学金で学費を賄っている。お小遣いは以前言及した通り月2000円あれば良い方。

なるほど、栄養の問題もあったか……………と軽くがつくりきいていると、不意に脚に触れるものがあった。

「ひよああああ!?!」

「ははあ、なるほどなるほど。確かにこれはしなやかなだけだ。良いトモだが筋肉量はともかく太さが足りない」

いつの間にもこちらに回っていたのか、タキオン先輩がぼくの太ももを揉み回していた。

「とはいえあちらの国は人間もウマ娘も基本として筋肉の質が違うからねえ。栄養不足でもモルモット君が太鼓判を押すほどの走りはできるわけだ」

「急に触らないでくださいよ」

「痛みや傷を伴うようなことでもない。許可を取る時間と躊躇される間が無駄だよ」

「そういえばこういうひとだった。」

「注射打たれるというわけでもなければ今は放っておこう……。」

「話を戻しましょう。確かに結果こそ二着でしたが、私はあのトウカイテイオー相手に二着に持ち込んだ作戦を評価して、あなたをスカウトしたいと思いました」

「……そ、そうですか」

「当チームが特に重んじているのは、データです。栄養管理は勿論のこと、効率的なトレーニングやスポーツ医学についても研究を進めています。きつとあなたの力になれるはずですよ」

「これは……事実だろうか。いや、事実だろう。タキオン先輩が所属していることがそれを物語っている。」

他のメンバーの姿が見えないのは、今トレーニング中だということだろうか。ニンジャスナイパーはともかく、タキオン先輩の脚はあまり無理をさせられないはずだからここにいないことにも不自然なところは無い。

「……あと何でニンジャスナイパーはまだここにいて訳知り顔でうんうん頷いてるんだろう？」

「先程サバンナストライプさんも仰っていた通り、今日すぐに決めるというのは難しいでしょう。今、チームメンバーが外でトレーニングをしていますので、そちらの見学をされた上でご検討されてはいかがでしょう？」

「いいんですか?」

「はい。判断材料としては必要でしょうから」

サブトレーナーを置いてあるということは、チームとしてはそれなりに大きな規模ということだ。

チームに入るにしろ入らないにしろ、そういうところで行われているトレーニングというのは参考になるはずだ。

「それでは行きましょ……スナイパー? あなた何でまだ練習に行っ

てないんですか？」

「しまった」

そこは予想外の事態なのかよ。

・・・≠・・・

あわあわするニンジャスナイパーを引きずりながら「こちらです」とごく穏やかに、かつ冷静に告げて先導するサブトレさんについてレース場の客席に向かうと、声を上げて練習をしている数名のウマ娘と、コースのやや外めからその様子を見守る引き締まった体格の中年男性の姿が見えた。

あのひとたちがベテルギウスの……。

「これが……」

「当チームの練習風景です。あちらチーム所属のウマ娘と、メイントレーナーですね」

メイントレーナーさんは練習風景とタブレットを見比べながら、時折指示や檄を飛ばしている。どうやらあれで練習内容を管理しているらしい。

……よく見ると端末多いな。何台あるんだあれ。常時入れ替えながら操作してるようだけど、手元の操作がまるで淀みないのがすごい。データに重きを置いているというのも頷ける。

「タキオンとスナイパーは紹介しましたね。あちらで今走っているのが、エアシヤカール、セイウンスカイ、エイシンフラッシュ、アグネスデジタル」

「ヒエツ」

今変態が混ざってたぞ。

しかし、言われてみるとすごい面々だ。タキオン先輩は元より、一名を除き全員がクラシック三冠に手をかける可能性を秘めた実力者。除かれた方の一名にしてもとんだ変態ローテでGIを勝ち抜いて勇者と謳われた極まった天才だ。この世界でどれほど才能が開花しているかは分からないにしても、GIで6勝を上げる可能性がある時点

でポテンシャルは凄まじい。

これだけのメンバーを揃えて面倒を見ているあたり、指導力は申し分無いのかもしれない。なるほど、これならスカウトを受けることも一考に値するのかも……。

そう考えていると、遅れてやってくる二人のウマ娘の姿が目に入った。

ひとりは……小さい。ちょっと信じられないくらい小さい。あれは、もしかしてぼくどころかニシノフラワーさんよりまだ小さいんじゃないか？ 120cmあるかどうか……ポニーちゃんと言われなくても仕方ないくらい小さい栗毛の少女。

もうひとりは、反対にデカすぎる。ヒシアケボノ先輩よりデカいんじゃないか？ 黒鹿毛で、顔立ちは日本人離れしている。どうやら外国のウマ娘のようだ。身長は2m近いようで、隣にいる小さい方の子と比べると親子くらいの差がある。

あんな子たちの指導もしているのか……と感心していると、サブトレさんは続けて彼女たちの名前を告げた。

「あちらにいるのがピーピードーナッツとハリウッドリムジンです」

この世界は狂っている……！自分自身を柵に上げるウマ娘の屑。

色眼鏡をかけて見すぎていたかもしれない

ピーピードーナッツとハリウッドリズムジン。

ピーピードーナッツは、「JAPAN WORLD CUP」の二作目に登場したポニーだ。

こちらはウマやウマ以外の動物の上を八艘飛びして実況のテンションを破壊したり、他の競争相手の技をその場でラーニングして突然同じようなことをし始めるといふ……まあ、割合までも寄りなウマではある。他が度を超えてカツ飛んだことをしているだけでも言うけど。

ピーピードーナッツに関して特筆すべきはむしろ騎手のカルキン Jr. の方で、3歳児であるにも関わらず「世界で最も恐れられる100人」のうちの一人で本業海賊。オマケにスキージャンプペアにも出演しており、スポーツ万能であることがうかがえる。サバンナストライプ（サンゴ）の騎手ソウルのようにカルキンソウルがインストール（インストール）されている可能性も否めず、何をしでかしてくるか分からない恐ろしさがある。

対して、ハリウッドリズムジン。こちらも「JAPAN WORLD CUP」の一、二作目に継続して登場したウマ………多分、ウマだ。

なぜ言葉を濁したかと言うと、ハリウッドリズムジンは胴が伸びるのだ。4〜5mくらい。

しかもこの胴は伸縮が可能だ。数度往復すると何らかのエネルギーがチャージされ、ロケット噴射を行い凄まじい勢いでカツ飛んでいく。

ロボットかロケットと言われた方が多分まだ納得はいくが、何やかんやウマの形は保っているのでギリギリでウマかな……ウマかも……という、ちょっと悩ましい存在に仕上がっている。

あと騎手が双子で二人乗ってる。明らかに重量的不利が生じてる。もう何考えてんのか分からない。さて。

そんなJWC出場者のソウルを継承したウマ娘を目にしたばかりの心は、思いの外風いでいた。

心がオーバーフロー起こしてるだけじゃないかという自覚はあるが、内心「ウマの範疇で良かった」と考えている自分もいる。

同じ奇蹄目で出場していたのはシマウマのサバンナストライプだけだったけど、有蹄類という項目で見ればジャンボナンプラー、偶蹄目のキヤメルクラッチクラッチ、バーニングビーフビーフ、ジラフキリンまでが含まれる。

更に下手をするとシーワールドアシカ科の何者かどころかウマ娘を名乗る一般通過ハリボテエレジーまでもがありうる。それと比べるとどうだろうか。ウマというだけでむしろ安心感すら感じるほどではないだろうか。

いや安心できねえわ。

原典JWCのハリウッドリムジンどうなってるんだよう。あれ品種改良とかそういう問題じゃなくてNASAかどっかが開発した星間探査用ウマ型ロボットと言われる方が納得できるんだけど。

どうしよう。意識すると不安がムンムン湧いて……あ、いやこの表現はやめておこう。イメージビを著しく損ロなう存在モが生えてくるかもしれない。

意識すると不安が急激に湧き上がってきた。

「サバンナストライプさん？」

「あ、はい」

サブトレさんに声をかけられて意識が戻る。

いけない。一瞬トリップしてた。元から異世界トリップしてる？

やかましいわ。

「トレーニングについて軽く説明をさせていただこうかと思ったのですが……何かありましたか？」

可及的速やかに解決したい問題が視界の中に山程あるけどあえて視線を逸らすこととする。

「大丈夫です」

「やけに顔が横を向いています」

「大丈夫です」

物理的に視線を逸らすこととする。

「全体トレーニングは火・木・土。それ以外の日も自主トレーニングはしていただくことになりましたが、内容については基本的にこちらの方で指定させていただいています」

「自主トレもですか？」

「はい。あくまでこれくらいまでやってほしい、これ以上は避けてほしい、という目安程度ですが」

「やりすぎはむしろ損。古事記にもそう書かれている」

「過ぎたるは猶及ばざるが如しと言いたいのですね？」

「хорошо」

ニンジャスナイパーの頬と耳がほんのり赤くなっていた。

素で間違えたんだ、そこ……。

「そうですね、トレーニングは、すればするほど良いというものではありません。過度なトレーニングはむしろ逆効果です」

「疲労骨折なんかもありますからね」

ウマでもヒトでもよくある骨折原因だ。ちよつとずつ強い負荷がかかることで、軽微なヒビが生じ続けて慢性的な痛みを訴える。最悪はそのまま完全骨折に至る。オーバーワークの典型的な悪影響だろう。

だから指導にあたる人は痛みがないか、という点を強く気にかける。自覚症状があつたらもう既にヒビが入っている可能性があるからだ。

「それだけではなく、横紋筋融解症という、筋肉が壊死して融ける病気に罹る原因にもなります」

「えっ、なんですかそれ」

急に現実的な方向で横から殴りつけるような衝撃を加えてくるのはやめてほしい。コワイ！

「更に、壊死した細胞が血管を通ることで多臓器不全の原因にもなります」

「インガオホーというやつだ」

「それもちよつと違うんじゃない」

「どちらかと言うと、『努力は嘘をつかない』……過度なことをして負

担をかけてしまえば、体はいずれ壊れます。誤った努力もまた、嘘をつかないんです」

「ほえー……」

思わず変な声出ちゃった。

強引な手段に奇抜なというかエキセントリック通り越してインサニティな髪、加えてあのニンジャスナイパーたちを見てしまったせいで印象があまり良くなかったのだけど、ちゃんと話してみると凄まじくウマ娘の体調に気を遣っているのが分かる。思えば当然と言えば当然なのか。ガラスの脚を自覚しているはずのタキオン先輩がチームに所属しているという事実の意味をよく考えるべきだった。間違はなく、相応の環境が備わっているということだ。

表情には出すことなく感心していると、そこでぼくらの来訪に気付いたのか、トレーナーさんが顔を上げた。サブトレさんとよく似たタイプのハンチング帽を上げてこちらを見て、腰を上げてくる。

「こんにちは。すみません、お邪魔しています」

「やあ、どうも。見学かな？ 名前は？」

あれ、サブトレさんから聞いてないのかな。

「中等部一年のサブバナストライプです」

「サブバナ……そうか。ゆっくりしていきなさい」

「ありがとうございます」

「利紗、少し話……スナイパー!? ここで何をやっとするんだ!？」

「しまった」

ウカツ!

哀れスナイパーはメインのトレーナーさんにも見つかってしまった!
た!

「今日はドーナッツとの併走だろう。お前いつもいつも気付いたらいなくなりおつて……」

「ど……ドーナッツとの併走はオタツシヤさせていただきたく……」

「却下だ。いたぞドーナッツ!」

「なアにイ!？」

と、ひとごとトレーナーさんが声を上げると、ピーピードーナッツ

は本来可愛らしいとすら形容できるはずの顔を凶悪に歪め、凄まじい勢いでこちらに向かって跳躍してきた！

すっごい跳びっぷりだ。その小さな体格故の身軽さだろう。柵や椅子を足場にひよいひよいこちらに向かってくる。八艘飛びめいた跳躍でニンジャよりニンジャらしい海賊がエントリーだ！

「ためースナイパー!! アタシから逃げるとはいい度胸してんじやねえかコラ! あーっ!!」

その口調はヤクザスラング同然であった。

コワイ!

ニンジャスナイパーの顔が青ざめて恐怖からか目が見開かれている。いやあんたも怖いのか。

「ヤメロー! ヤメロー!」

「じたばたするんじやねえや! 逃げ回らなきやこんなことしてねえんだよ降りろオルア!」

ドーナツツはそのままドラア!! とスナイパーのメンポを強引に剥ぎ取ってしまった!

「はわわ……」

そしてスナイパーは——今までの様子はどこへやら。完全に赤面して涙目になってしまった。

ああ、仮面^{マスク}無いと喋れない系のシャイな子とかそういうパティーン?

「何がはわわだ!!」

……おい新入り!

「は、はいっ!」

「邪魔して悪イな!」

そう言い残すと、シュツ、と軽く指を二本立ててドーナツツは来た時と同じようにぴよんぴよん跳ねてコースに戻っていった。

怖いと思っただけど、もしかしてただ威勢がよくてちよつと荒いだけで気風のいいウマ娘なのかもしれない。

「ПоЖалуйста, верните……」

そして片一方、スナイパーはへ口へ口になってロシア語らしきか細

い声を上げながらそれについていった。

コースではでっかいのがこちらにぺこぺこ頭を下げている。見たところ、どうやらよくあることらしい。

(……思ってたよりマトモだったな)

失礼極まりないが、三人の性格が見え隠れする一連の行動を目にしたばかりの感想はそれだった。

色眼鏡をかけて見すぎていたかもしれない。反省。

「スナイパーは元々ああいう気弱な子なのですが、自分の名前に似たタイトルの漫画に影響を受けたらしく、あのマスクを着けていると強い自分でいられるのかなんとか……」

「一種のペルソナというやつですか」

困惑顔だったばかりにサブトレさんがそう補足してくれた。

……大丈夫？ 実はぼくみたく異世界のニンジャソウルと結合して生まれた存在だったりしない？

あのメンポ着けたらニンジャソウルの方に切り替わってるから性格が変貌してたりとかしない？

「利紗」

「はいはい」

心配やら何やら色んな感情がまぜこぜになった微妙な表情を浮かべていたばかりだが、一方でトレーナーさんたちは先程何かを言いかけたのを思い出したのか、サブトレさんに何か耳打ちしていた。

「あの子から素質は感じるが、まだ見極める時間が欲しい。そう言っただけです」

……しかし、だ。

シマウマの耳はロバの耳。他のウマ娘よりもやや大きいぼくの耳は、そのささやき声も聞き取れてしまう。

頭の上でぺたーつとして耳を塞ぐが、それでも聞こえてしまう。

察したらしいサブトレさんの苦笑が目についた。ごめんなさいね。

「ティンとは来てもそうやってやたら慎重になるから、よそのチームに先にスカウトされるんですよ。なので、独断で申し訳ありませんが声をかけさせていただきました」

トレーナーさんは痛いところを突かれたように顔をしかめた。
さつき言ってた「先に声をかけさせてもらわないといけない理由」ってそれか。

しかし、外から見るとぼくの二着という順位やそれに伴う走り方もあまり評価されるものじゃないと思っただけで、それでも他に声かけてくるところあるのかな。

「しかしな……いや、そういう感覚はお前の方が鋭いか」

「ええ。本人の口からも、例の一件はちゃんと作戦だったことを聞きました。将来有望ですよ」

「そうか、ならいいが……あの尻尾回すのはいったい何なんだ」

「さあ……?」

あ、そこは気付いてるんだ……。

「ですが些細なことです。尻尾が回ってコンディションが良くなるならいくらでも回って結構だと私は思います」

「尻尾を回してコンディションが良くなるなんてことがあるのか……?」

「体操服より遥かに動きにくいはずの勝負服を着用してる時の方が調子の良いウマ娘に言うことですか?」

「分かった。この話はヤメだ。はいヤメヤメ」

どうやら話はいたらしい。

実際、勝負服着てる時のウマ娘って明らかに邪魔なもの持ってるのに普段以上の力発揮したりするんだよね。

代表例はマチカネフクキタル先輩。あのひと一抱えもある招き猫背負ってるのに菊花賞優勝してるし。

この世界だとちよūdスズカ先輩が出走した皐月賞が終わったばかりなので、まだ先の話だけど。

「待たせてしまつてすまん」

「いえ」

トレーナーさんの後ろでサブトレさんが小さく指を立てている。黙っていてほしいということだろう。ぼくも言うつもりは無いので問題ない。

「ベテルギウスのチーフトレーナーを務めている金城だ」

「あれ、金城……」

「あ、父なんです」

「なんと」

親子でトレーナーなのか。道理で似たようなハンチング帽被ってるわけだ。

「本名は金城弘海ひろみといいます」

「代々トレーナーとか、そういうった家系なんですか？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……少し縁があつてなあ」

「私が父に憧れてトレーナーを志したんです」

なるほど、桐生院家みたいに一族代々が、とかじゃあないと。

それでも憧れを原動力に、相当難易度が高いっていう中央のトレーナー資格の試験に合格できるのはすごい。ノウハウを蓄積してけば、もしかするとサブトレさんより更に下の世代が代々トレーナー業を受け継いでいくという下地になったりするかもしれない。そう考えるとちよつとロマンがある。

トレーナーさんは照れくさそうに、あるいは居心地悪そうに帽子の下から頭を軽く掻いた。

「……よくできた娘だね。ま、それは置いておこう。説明はどこまで済んだ？」

「これからトレーニングの見学を行うところです。即決はできないそうなので、判断材料になればと」

「分かった。これからはばらくトレーニングを続けるから、よく見学しておきなさい。チームに入るにしろ入らないにしろ、参考になるものを見せられるはずだ」

欲を言えばチームに入ってはほしいがね、と、それなりに明け透けな言葉を添えてトレーナーさんは皆の練習の監督に戻っていった。

三冠ウマ娘

それから、しばらくトレーニングを見学してから、ぼくはコースにいる皆より先に寮に戻ることにした。

先輩たちと話をするのは今は避けておく。「見学はしたけどやっぱり入りません」となるとちよつと気まずいし。

……けど。

(魅力的なのは間違いないだよなあ)

やっぱり、あの環境は得難いものだ。

ベテランのチーフトレーナーに実績と実力を兼ね備えた先輩たち。データ主義でトレーニングも効率的。

サブトレさんも即断即決を旨としてやや強引なところがあるくらいで、優しいひとではあるし。

内心、だいぶ傾いている。けど、他のチームと比較検討したわけでもないし……。

「——ん」

公平を期すためには、やっぱり他のチームの見学に行くのも大事なことはあるよね。

けど、スカウトを直に受けたベテルギウスならともかく、所属メンバーの走りを見せる＝手の内を晒すことになりかねないのに、練習の見学を……というのは、許可を出すものだろうか？

流星にそこまで気にすることもないかもしれないけど……うーん。

「——ちゃん」

体作りをするなら早いに越したことはないし、早めに結論も出しておきたい。

けど、だからって焦りすぎるとろくなことがない。それこそ、場合によってはもつとぼくに合った環境がある可能性も否定できないし……。

「トラちゃんー！」

「うえ？」

そこでようやくぼくは我に返った。

中空にさまよわせていた視線を元に戻すと、マヤノとテイオーとマーベラスが怪訝そうな顔をしながらぼくのお皿からチキン南蛮を取って食べていつている。

待つてほしい。気付いたらお皿が空になつて。全部取つて食べたの？ ぼくが上の空になつてる間に？

「どうして」

「流石に手元にあるもの取つたら気付くでしょって思ったのに、ストライプ全然気付かないし……だんだん面白くなつちやつて……」

「食べ放題のトレセン学園じゃなかったらさすがに泣いてたよ……」

「食べ放題のトレセン学園じゃなかったらこんなことしないよー」

「何か悩み事？」

考え事？ どころか一足飛びに悩み事があると察するマヤノがすっごくい。

「選抜レースの後からこんな感じだから……ズバリ！ スカウトの話だねっ☆」

「うん」

「あつはは、まさかそんな早ウエエエエ!？」

「マーベラス!」

「やつぱりそうなんだ！ いいないいなー、あーあ、マヤも早く素敵なトレーナーさんにスカウトしてもらえないかなあー」

ぼくが言葉を話す前に結論にたどり着くのやめてくれないかな、マヤノ。状況証拠から過程を経ずに即結論に至つてるんだらうけど、ちよつと怖い。

それにしてもテイオーの反応には安心感がある。ぼく自身も早すぎない？ というのは思つてるし。

「ボク聞いてないよー!」

「言つてないし……」

「ひとに聞かせるようなことでもないしねえ」

「そう言うテイオーの方がよっぽどスカウト来たんじゃない？」

「まあね。でも、あんまりこう、ビビッ！ つて来るひといなくつて

「さあ」

「フイーリングかあ」

「テイオーが大事にしないといけけないのは確かにそこだろう。」

「テイオーのことをよく見て、ともすると繊細とすら言える肉体にちゃんと向き合える人じゃないといけけないと思う。」

「まあこのボクならたとえどんなトレーナーでも楽勝だろうけどね」

「「ナイナイ」」

「ええーっ!?!」

「だってテイオーちゃん、危うくトラちゃんに負けかけてたよね?」

「うぐっ」

「出会いを大事にしないのはノットマーベラス」

「選抜レース直後も脚ガツクガクだったし」

「うぐぐっ」

「そうしたのはぼくだけだね。」

「だからあんまり好きじゃないんだよなあ、友達とレースするの。走り方はともかく、戦法が他のウマ娘の脚を潰すようになるもの主体で、特にテイオーのように繊細な脚だと、最悪の場合ケガをさせてしまいかねないから。」

「確かにテイオーはそれを才能とフィジカルで粉碎してのけたけど、同じようなことをし続けたとしたら、それこそ本来のタイミングよりも遥かに先に脚が壊れるだろう。」

「だからこそ、ちゃんと息を合わせて歩んでくれて、脚のケアも怠らないトレーナーさんが必要になる。そこをしつかり考えるのが、テイオーにとってはまずスタート地点と言えるのではないだろうか。」

「ちゃんとしたトレーナーさんがついてないと、テイオーそのうち体壊すよ」

「……参考にするよ。それで、何悩んでるのさ」

「他のチームのこととか全然知らないから、このままオツケー出していいものか迷ってて」

「専属トレーナーさんじゃなくってチームなんだ。どこのチーム?」

「チームベテルギウスってどこ」

「ベテルギウスって……どういうチームだっけマベちゃん」

「リギルのおハナさんがトレセン学園に来る前まで最強って言われてたチームだね★」

「えっ、そんなすごいチームだったの……」

「十数年前の話だから分からないけど、三冠ウマ娘が所属してたって話を聞いたことがあるよ」

えっ、本当に凄いチームじゃないか。

会長やミスターシービーは今でも現役でドリームトロフィーで走ってるし……となると、時空の歪み方から考えるとセントライトやシンザン？

十数年前くらい、となるとタイミングを考えれば妥当なのはあの最強の戦士^{シンザン}、かなあ。チーフトレーナーさんの年齢を考えても不思議はない。

「ストライプの気持ちも分かるけど、あっちから声をかけてくれたってことはこれはもうマーベラスな必然だよ☆ 前向きに考えていいかも★」

「う、うん」

「あ、検索してみたならそのひとのレースの動画あるかも！ 参考にしてみたら？」

「ナイスマヤノ」

「ナイスマヤノ！」

「ネイチャちゃんと合体してるみたいだからやめてよー」

ネイチャの抜群の安定感とマヤノの洞察力をフュージョンしたら強くない？

そんな益体もないことを考えつつ、マヤノのスマホに表示された動画を皆で覗き込む。

「あった、これだね！ 2XXX年菊花賞出場のギンシャリボーイ！」

「なんて？」

「ギンシャリボーイ！」

「ぎんしゃりボーイ」

待って？

そっちの方なの？ 三冠ウマ娘ってそっち？

確かにあれも大概無敵の戦績持つてるけどぼくらより十数年先に生まれてトウインクルシリーズ制覇してたの？

混乱をよそに動画は始まり、ワクワクした様子の三人と裏腹にぼくの心は徐々にげんなりとしていく。

だいぶ前の動画だから仕方ないけど、映像はやや粗い。食堂だから音声も大きな音を出すわけにいかないし、と思って目を凝らして見ると、パドックの中で悠然と立つ鹿毛の少女が目に入った。

髪に混じる綺麗な直線の流星——どことなくテイオーや会長に似てる——が印象的だ。勝負服は、黄色を基調として赤いシャクナゲの模様が散らされた和装で、幸いなことによく目立つ。目印としては申し分無い。

「あ、始まったよ」

誰と感情を共有できるでもないまま、レースが始まる。

菊花賞は京都レース場で行われる芝3000mの長距離レースだ。ぼくたちは四人とも長距離は苦手じゃないので、これも勉強にと思うことにしよう。映像粗いけど。

出走表を見てみるけど、これはすごい。当然と言えば当然なんだけど、レジェンド級ばかりだ。

「カイチヨーより前のレコードって誰だっけ？」

「ホリスキーの3分5秒4だね★」

「マヤノ、動画説明文とかにこの時のレコードって書いてない？」

「あるよー。3分10秒7だって」

タイムそのものは当時の視点からでも平均的だ。

レースの展開は、ギンシャリボーイは先行集団の中で好位置をキープするもの。先頭集団はやや脚を抑え気味で、1000mの参考タイムは1分2秒強。当時で考えてもそれほど速くない程度のタイム。

しかし……こうして見ると、ギンシャリボーイの全体的なバランスの良さを思い知らされる。

体格、パワー、コース選び、スタミナ、スピード、あらゆる能力が

ハイスペックにまとまっている。先行策は先頭集団の直後につけていかなければならない分精神的にも肉体的にも消耗が激しいのだが、一向に息を切らした様子も無く、薄笑みすら浮かべて余裕の走りを見せている。

一周目を終え二周目へ。3コーナーまで大きな動きは見せていなかったが、ギンシヤリボーイはそこで先頭集団の背後にピタリとつけた。それから4コーナーまでもまだ動きは見せない。ジリジリとした緊張感の中、最終直線に入ったその時——ギンシヤリボーイはまるでワープしたように、前にいたはずの走者の更に前を走っていた。

「え?」

「ちよ、ちよつと戻して! スロー再生で!」

「う、うん」

映像が巻き戻り、先程の状況のスローで見せてくる。

そこでようやくそのカラクリが分かった。

ギンシヤリボーイは、無減速でクロスステップを行っている。

通常、ぼくらウマ娘に限った話じゃないけど、少しでも方向転換を行おうとすればその分ロスが生じるのでやや速度が遅くなる。斜行反則行為の一種。進路変更の結果、他の者の進行を妨害してしまうこと。の危険もあるため、基本的には前が拓けていないとスパートをかけるのは難しい。

ウオツカが凄いとよく言われるのはこの辺りだ。自分の周りをほとんど囲まれた状態だったのに、僅かに隙間が開いた瞬間そこに体をねじ込んで、残り1ハロンのところから見事なごぼう抜きを見せ1着でゴール。勝負勘と度胸、スピード、それから加速力を生むパワー。全部が揃ってないとできない芸当と言えるだろう。

ギンシヤリボーイはそれとはまた違うけど、これも恐ろしい。視野の広さと判断力、減速しない方向転換と異次元の末脚で、他のウマ娘が前にいようがいまいが関係なく抜き去っていく。

ブロックができないし囲めない。いつの間にか前にいる。常に一番いい位置を取られ続ける。

……まさか、これは……。

(スシウオーク——!!)

名前こそついていかなかったけど、間違いない。多分これは、今ぼくだけが知っていること……あの欽ちゃん走りをそのままウマ娘の技として昇華させた形に違いない。

嘘だろ。あのトンチキ技がマジのレースに持ち込むとこんなにも凶悪な技になるのか。

ギンシャリボーイはそのまま前の走者を全員躲し4バ身差の1着。その表情には未だ、余裕の色が見えた。

「……………」

「マーベラス……………」

「これが三冠……………」

それぞれに思うところはあろうけど、ぼくの考えはまた別の方に向いていた。

三冠ウマ娘、ギンシャリボーイ。彼女がぼくらと同じ時代に生まれてこなかったというのが、ひどく惜しいことに思えてならなかった。

JAPAN WORLD CUPの覇者。三回連続で出場しその全てで勝ち星をあげ名を挙げ、その立ち位置を確固たるものとした彼女は、ぼくらよりも遥かに早くこの世界に根を下ろすための存在^{ウマッウル}を確立したのである。だから、生まれるのも早かった。

ただその結果、リムジンやスナイパーが生まれるのを待つことなく、引退してしまった。……JWCの主人公とも言えるギンシャリボーイがいけないというのは、ある意味片手落ちだ。

でも、逆に……この時代、リムジンやスナイパー、ドーナッツやぼくの現役の期間が重なっていること自体は、間違いなく幸運だ。ぼくがそうだからという曖昧な根拠でこそあるけど、きつと彼女たちもJWCというレースに漠然と「何か」がひっかかるはず。今、ウマ娘になっっているぼくらだからこそ見せられるレースもあるはず。

心が、ワクワクしていた。

「うん——決めた」

ただの名前でしかなかったものに、内実が備わってきている。

イロモノと思って避けようとした自分が恥ずかしい。印象だけで

語ってどうするんだ。レースで語られて目が覚めた気分だ。
考えてみれば環境的にもここしかないくらいじゃないか。
まさに素晴^{マーベラス}らしい。

「ぼく、スカウト受けるよ」

「判断が早い」

「今まで悩んでたのなんだったの……」

「気の迷いかなあ」

「マーベラス！ 一期一会を大事にね★」

それじゃあまずは……チームの部屋に行ってお返事からかな？

ここでまさかの肩透かし

善は急げ。決めたからには早めに返事をしたほうがいいと思い、ぼくは食事を済ませた後で教官室に向かった。

ベテルギウスの全体トレーニングは火・木・土。月曜日の今日ならある程度時間的にも余裕はある。はず。

「金城トレーナーならどちらでも今日はいないけど」

「ぬあ……」

——しかし、ここでまさかの肩透かし。

リギル担当のおハナさんから伝えられたのは、まさかの不在だった。

「チーフトレーナーのほうがURAの学会に出席してるのよ。サブトレーナーとアグネスタキオンがその付き添いで不在。何か用事があった?」

「チームの加入届を提出しようと思ったんですけど……」

「……そう」

おハナさんはほんの一瞬だけ残念そうな顔をしたように見えたけど、まばたきした後にはもういつも通りの冷静な顔に戻っていた。見間違いだったのかな。

それより……うん。サブトレさんはいずれトレーナーさんの跡を継いでベテルギウスの運営に携わらないといけないから、学会に同行するというのは分かる。むしろ自然だ。

けどタキオン先輩が行くってなると、これだだいぶ趣旨が変わってるんじゃないかなと思う。トレーナーのための学会じゃなくてタキオン先輩の研究発表の場になってない?

いやよそう。ぼくの勝手な想像で茶々を入れたくない。

「提出するだけならこちらで預かるけど」

「んー……と……ありがたいんですけど、また日を改めます。直接挨拶した方がいいと思いますし」

「律儀ね」

困ったように微笑むおハナさんに一礼して、ぼくは教官室を出ようとした——そのときだった。

「ひっ—」

「こいつは凄い……細っこいがとんでもなく強固な『芯』を感じさせる——いい脚だ……」

何か、何者かが脚に触れている！ いや撫で回している！

気持ち悪い！ せ、生理的嫌悪感が……ストライプとしての感情なのかそれとも中身の中身、生物的な危機感から来るものか分からないけどとにかく今すぐこの不快感の元を断ちたい！

「しかしトモ太腿の筋肉のこと。現実のウマの場合は臀部(尻)のことを言う。が未成熟、いや……この状態でなお未成熟なのか……！」

「ひいひいひいひいひいひい!!」

「素晴らしい将来性おぼふ」

「あ」

その瞬間、ぼくは自分の感情を制御しきれずに脚をそのまま後ろに振り抜いてしまった。

脚に衝撃。直後、めこ、というおよそ人体が発するに相応しくない音が背後から聞こえて大きなものが吹き飛んで周りのものを巻き込んでいくような音が聞こえてきた。

あ、やばい。そう思って振り向くと、廊下の端に一人の男性が転がっていた。

黄色いシャツと紺色のベスト。左側頭部は刈り上げ。

——ぼくはこの人を知っている。いや、この無遠慮さとこの洞察力を知っている！

だとするなら、耐久力はかなり人間離れしているはずだけど……いや、しかし、だとしても大丈夫なのかな……？

「この蹴り、すげえパワーだ！ 得意なコースは!! 芝!! ダート!!」

まさかのオールウェザーレース場の走路の一種。合成ゴムや樹脂を利用して作られたコースで、クッション性が高く砂埃も発生しづらく水はけも良いという利点がある。ただし脚に合うかどうかは別問題。!?!」

「ぎゃあっ!!」

鼻血流すだけで普通に起き上がってきた!

不死身かこの人!?

「やめなさい。怖がっているでしょう」

「ひっ……ひええ……」

「……そこまで怖がる?」

「見知らぬ男が下半身に触ったら当然でしょう……あなた、そろそろ訓告じゃ済まないわよ」

「流石にこれ以上お給料を減らされるのは勘弁願いたいね……」

「戒告も飛び越してるのね……」

ちなみに訓告とは「もうこれ以上やるんやないで」という比較的穏当なニュアンスの嚴重注意である。

戒告はそれに対して「オウええ加減にせえよワレ」という強いニュアンスの実効力を伴う嚴重注意だ。

前者は口頭での注意で済むけど、後者は書類に残る。減給はもうちよつと上の処分だ。

高給取りなはずの中央のトレーナーなのにあの人が万年金欠なの、注意されてもされても体が勝手に! とばかりについ脚に触ってしまい、ハラスメント案件として通報されて減給処分になってるからではないだろうか。いや、大半は所属ウマ娘たちのための投資などが主だろうけど……。

事情や本人の人格を知っているぼくでも、咄嗟に蹴っちゃうくらいだし、何も知らない普通のウマ娘の脚に勝手に触ったとなればそりゃあ……ねえ。

能力面は本当に優秀なんだけどね……。

真面目にどうやってあの七人を同時に育成してるんだろう。アブリやってた人から見たら、おハナさんと並んで畏怖の対象だよ。

「こ、この方は……」

こちらをかばうようにして前に出てくれたおハナさんに問いかけると、彼女は少し困ったようにため息をついた。

「スピカ、というチームの……有望なウマ娘の脚を見ると、つい触って

しまう悪癖がある……トレーナーよ。もつとも、今はチームメンバー不足で活動を休止してるけど」

「だが、キミのような逸材がチームに入ってくれれば……」

「彼女、もうベテルギウスに内定済み」

「あ、そうなの。あの慎重な親爺おやっさんがこんな早く？」

「娘のほうの手を打ったんでしよう。残念だったわね」

あちゃあ、とスピカのトレーナーさんは小さく頭を掻いた。

それから、ぼくの方に近づこうとしてくるんだけど……どうしよう。体が強張る。申し訳ないんだけど、どうしてもおハナさんの後ろに隠れてしまった。

「突然悪かったな、あー……怖がらせるつもりじゃなかったんだよ」

「年頃の子の脚を突然触るのは充分怖がらせる行為だって自覚しなさい」

「参ったな……」

「……じゃ、じゃあ……ぼくはこれで……」

「お疲れ様」

そうこうして、今度こそぼくは教官室を後にした。

しかし……うーむ……元を辿ればぼくは男だったし、サバンナストライプも牡馬だったし、若干インストールされてるサンコンも男性なんだけど、男性に触られた程度であんなに慌てて奇声を上げてしまうとは。

ウマ娘としては12〜13年過ごしてるし、体に対して最適化されていくものなのかな。うーん……それにしても、こういう反応するもんだっけ。

「あら、ストライプ……どうかなさいまして？」

「マックイーン」

廊下を歩きながら首をひねっていると、食事を終えてきたらしく、食堂の方からやってくるマックイーンから声をかけられた。

向こう側にはマックイーンに向かって手を振っているメジロパーマー先輩やメジロライアン先輩、メジロドーベル先輩の姿がある。どうやらメジロ家のお茶会だったらしい。

ちよūdいいいや。せつかく通りかかってくれたみたいだし、ちよつと聞いてみよう。

「いきなりで悪いんだけど、ちよつと聞いていい?」

「? ええ。私に答えられることでしたら」

「さつき教官室に行ったら、男の人に下半身触られて思わず悲鳴上げて蹴つちやっただけどこれって普通の反応かな?」

「通報案件ですわー!!」

「え?」

「何でそんなにぼーつとした表情ですの!?! かっ、か、下半身を触ら……」

顔を真っ赤にしたマックイーンに対して、ぼくの反応は普段どおりのごく小さなもの。

お互いの感情に変にギャップが生じてしまっている。いや、当然と言えば当然だねこれ。ぼくの言い方が悪かった。

「ごめん、言い方を間違えたよ……マックイーン、落ち着いて」

「も、問題無いんですのね……!?!」

「トモの辺りは触られたけど」

「大概ですわ」

言われてみればそうである。

「その人はいったいどういう方ですの……?」

「トレーナーさん。有望なウマ娘の脚を見るとつい触って確かめたくなるんだって」

「変な人ですわ……」

言われてみればそうである。

「それで思わず悲鳴を上げて蹴ってしまったと。蹴ってしまうのは淑女としていかなものかとは思いますが……自衛のためですものね。仕方がない部分がありますわ。それで、相手のトレーナーさんは無事でして?」

「うん、鼻血が出ただけで済んでたよ」

「本当に人間ですの?」

「わからん……」

多分人間……だと思う。ちょっと振り切れてるけど、何かこう、自分の信念に対して振り切れてるおかげで耐久力も振り切れてる感じで……ちよつと人間の枠を超えちゃってるだけで人間だと思っ……。「そういう目に遭ったのなら悲鳴を上げるくらい普通のことです。むしろ、ストライプにそういう情緒がちゃんとあつて安心したくらいですわよ」

「そっかあ。悲鳴を上げるくらいは普通なんだね……」

今のぼくが特別に男性に対して免疫がなくなってるわけじゃない、と。むしろこのくらいで普通なわけか。

それによく考えてみれば、男だったら男だったで同じ男性に太腿まで触られたら不快感で悲鳴くらい上げるよね。

「あの……その人、通報したりしなくて大丈夫ですの……?」

「下心は無いみたいだし、大丈夫……だと思いたいけどどうかなあ」「徐々に自信を喪失しないでくださいませ」

本人に悪気が無いのは分かるんだけど、それで他の人がどう思うかは別なんだよね。

あのトレーナーさん、チームメンバー増やして忙しくしてそういうことができる暇を無くしたほうが学園のためにも本人のためにもいいんじゃないかな……。

「それで、教官室にどういう用事で?」

「この前スカウト受けて、入るチームが決まったんだ。それで、挨拶に行こうと思って……」

「まあ、おめでとうございます!」

「ありがとう。でも、チームのトレーナーさん、学会だったみたいでいなくって」

「あら、それはまあ……ご愁傷さまですわ」

「マックイーンはどう?」どこのチームに入るか、決めてる?」

「まだ決めかねている最中ですよ。チームとしての気質や性質もそうです。私自身がどのタイミングでデビューすべきか、しっかり担当になるトレーナーさんと意志を共有する必要がありますから……」
「慎重にならないとねえ」

マックイーンもテイオーほどじゃないけど、体を壊しやすいタイプではある。

というかステイヤーみんなそういう気質は強い気もする。他と比べて長時間脚に負荷をかけ続けるわけだから、その分疲労骨折のリスクも高まるし関節にかかるダメージも大きくなるということなのだろうけど。

ケガは……いずれすることになるのかな。してほしくはないなあ。ライバルっていう以前に、友達だし。苦しんだり悲しんだりする顔を見るのはやっぱり辛い。

とはいえ、今はぼくにできることというのは、せめて綿密なケアをしてくれるトレーナーさんに巡り合うのを祈ることくらいだ。

いずれタキオン先輩が何か肉体に作用するような薬品を完成させることがあるかもしれないから……その時は、ぼくも手伝える機会があれば手伝おう。完成のための一助になればいいけど。

それはそれとして、その時が来ても髪の色が1680万色に光り輝くとかは勘弁してほしい。

人を射殺しそうなほど鋭い視線に襲われた

流石に何度も同じように訪問して肩透かしを食らうのを避けるためにも、一度訪問するという旨でアポを取って翌日の昼休みにチームの部室へ向かった。

「失礼しまーす」

「はい、どうぞ」

三度ノックして入室すると、まずはサブトレさんが迎えてくれた。今日の髪の色は虹色だった。うねうねしてる。日替わりかよ。

本人はまるで気にしていないようだが、室内にいてなおハンチング帽を外さないのは……やっぱり他の人の目が気になるというか、他の人が気にするからというのがあるんだろう。実際ぼくの目も釘付けだった。どうやったらこう……ちよつとずつ色が変わっていくんだろう、あの髪の色。さつきまで青色だった部分が赤くなってる……。

いけない。気にするべきじゃない。

「先日は不在にしているって申し訳ありませんでした」

「いえ、こちらこそ、予定を把握していなくてすみません」

頭を下げると、サブトレさんは苦笑いを見せて見せた。そこまで気にすることか、という思いが見て取れる。

とはいえアイサツは実際大事だし、ぼくもチームに入れてくださいとお願ひしにきた立場。相手方の行動を把握していなくて手間を取らせたというのは落ち度ではある。

「ストライプか。早いな」

次いで顔を見せたのはチーフトレーナーさん。お弁当を手に持つており、どうやらお昼はこの部屋で済ませるつもりらしいことがうかがえる。

ウマ娘の立場から見ると、両手を合わせた程度のサイズで足りるのかな……などと思ってしまうのだけど、本来普通はあんなものだよ。ね。むしろちよつと多いくらい。トレーナー業は体を動かす機会が多いだろうし、あのくらいが適正なんだろう。

「返事を聞かせてもらってもよろしいですか？」

「スカウト、お受けします。チームの加入届も書いてきました」

「漏れがないか確認しよう。……日本語上手いな」

ちなみにケニアではスワヒリ語と英語が公用語として使用される。更にカレンジン語などの、地元特有の……特に家族間や民族間で用いられる独自言語もあるため、いわゆるトリリンガルが多い。

ぼくはそこに加えてネイティブそのものの日本語を用いることができるマルチリンガルである。こう言うとなんだか頭が良さげに見えるので、ぼくは自己紹介でそのあたりを強調することが多い。

実情？ JWCが実在しないことも知らなかった頭ふわふわのポ
ン菓子だよ。

「よし、不備は無いな。サブナストライプ、今日からよろしく頼む」
「はい、よろしく願います！」

サツと手を差し出すと、トレーナーさんは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに思い直して同じように右手を差し出し握手を返してくれた。

海外と日本と感覚が違うよね、この辺。ぼくもついやつちやつたけど、日本だとお互いにお辞儀をするところ、海外だと握手をすることが多い。リムジンやスナイパーなどの海外文化圏のウマ娘がいるから対応できたんだろう。

「それでは、そうですね。お昼ごはんは食べてきましたか？」

「まだです。何か指示があると思って」

「察しが良いのはいいことだけどなあ……まだそこまではしなくていい」

え、余計だったかなこれ。

と思っていると、トレーナーさんはこちらに一枚の用紙を手渡してきた。

「先に、今の栄養状態をチェックしておきたい。今日から一週間分、三食何を食べたかを記録して提出してくれ」

「あ、はい。今日からいいんですか？」

「昨日何を食べたか全部思い出すのは難しいだろう。ただでさえ量を

食べるんだから」

それは正直言うとその通りだ。今朝何を食べたかと言われるとギリギリで思い出せる範囲だけど、昨日は……何をどのくらい食べたっけ。

……なるほど、そう思うと、思い出しながらうろ覚えで報告するよりは正確に把握できるこっちの方がいいか。

「管理はそれからだ。現状を知らなければアドバイスもできん」

「わかりました。お昼からのトレーニングには参加していいですか？」

「それも先に色々と見てからですね。私達はまだ、選抜レースで見せていただいた走り方しか知りません。最高速はどれだけ出せるのか、スタミナはどうなのか……今後の方針にも関わってきますので、まずはそちらを優先しましょう」

「はい」

本当に徹底してデータ主義なんだなあ。

他のチームならとりあえず練習に出してみる、ということもありそうなものなんだけど……そこも好き好きか。細々したことはいいからとにかくトレーニングがしたいというウマ娘も少なくないだろうし。結局のところどこまで気質が合うかということが重要なんだろう。教わる立場のぼくから言えることは特に無い。

「じゃあ、とりあえず食事に行ってきます」

「そうしてくれ。13時……いや14時に4番コースに集合だ」

「わかりました」

ウマ娘の食事は長い。これはもうどうしようもないことだ。中にはオグリ先輩のように諸々の理屈を超えて食べたという結果だけが残っているようなひともいるが、口の容量とか、食器で持てる限界とかが絡んでくるので本当ならどうしても時間がかかってくる。

あとは慣れもあるのだろうか。単純に早食いができるかどうかもある程度関わってきそうだな。

一時間遅らせたのはそれに加えて、アップの時間や準備の時間も計算に入れたというところだろう。

まずは指示通り、メモを取りながら食事を摂りに向かった。

さて、それやこれやの準備を終えて13時半ごろ。ぼくは普段使っているシューズの蹄鉄がちゃんと装着されているかを確認したあと、ジャージに着替えて諸々の荷物を持ってコースに向かった。

荷物と言ってもそんなに大荷物というわけじゃない。せいぜい着替えと水分、あとはタオルくらいのものだ。元々私物も少ないし。

見た目ぼんやりと、内心は意気揚々とした気持ちと不安とが半々でコースに入場する……と。

「あア？」

その瞬間、人を射殺しそうなほど鋭い視線に襲われた。

「ひゅ……」

コワイ！

ぼくは思わず物陰に姿を隠してしまった。

何だろう今の。え、ぼく誰かの恨み買うようなことした？ ウカツに入ったら殺されるん？ やばない？

再び、そつと体を傾けて覗き込んでみる——と。

「んだあいつ？」

「シャカールの凶悪なツラにビビったんだろ」

「一言多いんだよお前」

すぐに先の視線の大元に行きついた。

エアシャカール。モデルになったウマは、頭の中身を見てみたいと言われてしまうレベルの気性の荒さで有名だ。

ウマ娘としては論理とデータを重んじる頭脳派、なのだけど、見た目すらも戦略の内に入れる思い切りの良さに加え、データをまとめるために寝不足になっているせいか、目の下に深くクマが刻まれている……有体に言ってしまうと、見た目かなり怖い。

というかドーナッツ先輩がケラケラと笑ってシャカール先輩をからかうたびに眉間に皺が寄っていった余計に怖い……。

一応、事前知識でエアシャカールというウマ娘はむしろ面倒見の良い方だとは知ってるんだけど、同時に気性が荒いということも事実として知っている。今はどっちなんだろうという思いがぐるぐると頭

を回って離れない……。

……いや!

こういう色眼鏡をかけて見る自分を恥じたことを思い出そう。そもそもぼくの目的は何だ。お金を稼ぐことだろうか?

ちよつと視線が鋭いとか、怖い顔をされるとか、そういう事態に直面することが無いとは言えない。なら勇気を出して一步を踏み出すべきだ。

よし、まずはしっかりと挨拶をしよう。話はそれから。チームに入ることになりました、それだけでもまずは十分だ。

「Nimefurahi kukuona!」

「なんて?」

「なんつった?」

ぼくは思わず熱くなった顔を両手で隠した。

サンコン!! 冤罪

十二年という年月の重みがテンパツた精神に合わせてそのまま言語として出力されてしまっているようだ。聞いてねーぜ困難。

「Добро пожаловать」

「え……」

今すぐ立ち直れるだろうか。そう思っていたところ、上から声が落とされた。

このロシア語……内容はわからないけど、声音は覚えている。スナイパーのそれだ。

顔を覆っていた手を外して見上げると、やはりというか、コース入口の直上にある客席から彼女はぼくを見下ろしていた。ニンジャスナイパーのエントリーだ!

「ベテルギウスには外国出身のウマ娘が多く所属している……ニュービーがウカツにも母国語を喋ってしまうのはよくあることで恥じることは無い」

「ど、どうも。ありがとう……」

あからさまにニンジャのアトモスフィアを漂わせながらだけど、気を使ってくれてるのは分かった。

一つ礼をして……………呼び方どうすればいいんだろう？

「スナイパー……………さん？ 先輩？」

「好きに呼ぶがよい。では失礼する」

「あつ」

一言だけ添えたニンジャスナイパーは、そこで高速垂直リフト射出めいた速度で垂直跳びをしてコースから逃れ……………することはできなかった。

その前にやはり八艘飛びめいた勢いで跳んできたピーピードーナッツに肩を掴まれ捕獲されたからだ。

「失礼するんじゃねエ」

「あつ」

「バカナー！ あつあつやめて」

「やめてじゃねえよ今日も併走だろうがチームから降ろすぞ！」

……………そうして、スナイパーはそのままメンポを剥がされ強引に連行された。

連行する時毎回メンポ剥ぐんだ……………そして剥がされたらスナイパーは気が弱くなるんだ……………。

やっぱニンジャソウルが混ざってるんじゃないかなあのウマ娘……………。

「おい」

「えっ……………あ、はい……………」

「大丈夫か？ 緊張してんなら気分落ち着くまで休めよ」

「いえ、大丈夫です」

そうこうしてる間にやってきていたエアシヤカール先輩が、こちらの精神状態が気にかかったのかそんな言葉を投げてきた。

いや本当に一見すると少し顔と声音が怖いだけで態度普通だな、なんて少し面食らう。一方でシヤカール先輩の方も眉を上げて、内心驚いているようだった。

そうなるよね。スワヒリ語で何か喋ったと思ったら次に話すとき普通に流暢な日本語で返答するんだもの。

頭を下げて礼をすると、今度はのしのと音を立てていそうな重量

感を伴い、もうひとり——ハリウッドリズムジンがこちらに近づいてきた。

「Hello。新入生の子、デスカ？」

「はい、サバンナストライプです」

「Hm^{ふむむ}m。ストライプ。よろしくお願ひしマスね」

なるほど。外国出身。すごくわかりやすい。

タイキシャトル先輩やエルコンドルパサー先輩と異なるのは、リズムは相当大人しめの雰囲気というところだろうか。

JWCでも二人乗りができるほどに安定感があり、それで嫌がらないほど気性も柔らかい風だったし……ウマ娘としてはそういう性格として成立したのだろう。

ぼくやドーナッツ、スナイパーと違って第一回、第二回と連続出場しているから、ウマソウルが成立するのもそう難しくなさそうだし、余計な混ざりものは無さそうだ。二人分の騎手ソウルで代替してる可能性もあるけどそのくらいだろう。

「もう二十分でタイム計測始めんだろ。体温めとけよ」

「はい」

他の四人は……まだ姿が見えないけど、裏で何かしているんだろうか。

どっちにしてももうしばらくトレーナーさんたちも来そうにならないうっぽいし、シャカール先輩に言われた通りアップしながら待つとしよう。

勝ちたい理由がひとつ増えた

腹ごなしとアップを兼ねた運動をしばらく行つて体を温め終えた頃になって、トレーナーさんたちはタキオン先輩たちを引き連れてコースの方にやってきた。

タキオン先輩は軽めのメジャーなどを、セイウンスカイ先輩やアグネスデジタル先輩、エイシンフラッシュ先輩はサブトレさんと協力して大きな機材を運んできていた。

あ、陸上競技とかで見るとああいう光計測器とかって結構なお値段するんだけど、よく考えるとああいう光計測器とかって結構なお値段するんじゃないか……。

こういうのってシャカール先輩詳しいかな。

「あれっておいくらくらいするんですか？」

「遠慮がねエな。だいたい三十万くらいだったはずだ」

三十万！ やっぱ結構なお値段だ。

けど、このくらいなら努力すれば届かない程度の値段ではないかもしれない。重賞に勝てれば……うん、少しくらいならいけそう。

うわあ、頑張ろう。ビッグになろう。

「何でいきなり値段なんて聞いたんだよ」

「いつか地元で寄付とかできたらと思つて」

『『いつか』なんて話をする前にまず自分がデビューすることを考えな。お前がどれだけ地元で頭抜けた才能あつたか知らねえけど、油断したら足元掬われるぜ』

「あつ、すみません」

「そこで何で殊勝なんだよ」

「ダメでしたか」

「いやダメとは言つてねえよ……そういうこと突然言い出すのはだいたい自信家なヤツが多いから論理的にそう言つただけで……ああクソ、調子狂うなア」

ぼくは基本スペックが他の人と比べると歪なので、この能力で上

回ってるから勝てる、と一口に言うことはできない。

レースとは総合力の勝負だ。稀に何か突き抜けた一芸で勝負できるひともいるが、ぼくはそういう方向の特化型ではない。現にテイオーに負けたし。

他のひとから受けた指摘は真摯に受け止めて改善していかないと、これから先、夢を見ることすら叶わなくなる。

「集合ー」

と、そんな折のこと。各種機器の設置を終えたらしいトレーナーさんがぼくらを呼び寄せた。

どこに集合した方がいいだろう、と思っているとサブトレさんがぼくを手招きして呼び寄せる。どうやら紹介をするのでトレーナーさんたちのいる方に立てばいいらしい。

小走りでそちらに向かうと、そこで何やら変な寒気を覚えた。これはいったい——そう思っていると感じるのは奇っ怪な湿り気と温度を帯びた熱視線だった。

「ふおおお……珍しい縞毛のウマ娘ちゃん……!!」

辿ってみれば名うての変態ゆうしゃであった。

アグネスデジタル。以前も異質なローテーションでなお勝利を上げた凄まじい適応力を持つとして例に挙げたウマ娘である。

多分ぼくの目指す先として挙げられるウマ娘のひとは、彼女だ。

いや性格的な話ではなく。

ダートも芝も、場合によっては海外でも特に遜色なく走れるぼくら、デジタル先輩と同様のローテーションであろうと多分、問題なく耐えられる。

あとはその上で勝てるかどうか、だ。他のウマ娘と並び立つためという不純なのだか純粹なのだか純粹に不純なのだか分からない動機とはいえ、ストイックに努力を続けられるその姿勢、そして努力をしつかりと結果に反映させる才覚は素晴らしいものだ。

ちなみに、余談だけど元の分布域の問題もあってシマウマ娘は日本にはほとんどいない。ぼくのような留学生がいるかな、程度なのでデジたんパイセンの反応もむべなるかな。あれで推しの悲しい顔は見

たくないという光のオタクなので実害は無い。

一着取られる以外。

世紀末霸王とそのライバルを前のアングルから見なくなっちゃまったんだ。仕方ないんだ。

「今日から新しくチームに加わることになる一年生だ。自己紹介を頼む」

内心の戦慄を知らないトレーナーさんがこちらに水を向けた。

もうそんなタイミングか。今度は失敗しないようにしよう。

こほん、とひとつ咳払い。

「ケニアから来ました、サバンナストライブです。よろしく願います」

よし、ちゃんと言えた。そう安心していると、小さく、しかし確かな拍手の音で歓迎の意が伝えられた。

「質問などはあるだろうが悪いがそれは後にしてもらおう。まずはストライブの実力を見なければならん」

「計測は私とタキオンで行います。皆さんはチーフトレーナーと平常通りトレーニングに取り組んでください」

「はいー」

「はい」

「おうよー」

「おう」

「Da……」

意気揚々と駆けていく皆とそれに引きずられていくスナイパーⅡサンを見送った後、ぼくはサブトレさんに促されるまま芝のコースに入った。

軽く足を伸ばし、屈伸。それから跳躍して——と。

「つと」

「！……」

「おや」

思いの外跳びすぎた。

チームに入ったということであちよつと緊張して力が入りすぎてい

たのかもしれない。凶らずもシャカール先輩の言う通りになっていたか。

「ストライプ君、少し立ち止まってくれるかい？」

「あ、はい」

言われるまま応じてそこで立ち止まると、タキオン先輩が近づいてきて僕の足元に視線を寄越した。

足元、というか今跳び上がったせいで見えたシューズだろうか。

「ふうん……このえらく擦り切れたシューズで今まで走っていたのかい？」

「うわ、お恥ずかしい。すみません、実家にこれしか無くて」

「無いのですか」

「お金が無いので」

シューズは基本、どつかの国で寄付されてケニアに来たのをそのまま使ってる。蹄鉄はお小遣いを貯めてなんとか丈夫なものを買ったので使いまわし。

ウマ娘用のシューズ、安くないんだよね。ちゃんとしたレース場での模擬レースや入試では靴履いてたけど、実家だともっぱらその辺の草や農作物を収穫した際に出る藁で編んだ草履を履いているし、場合によっては裸足の場合もある。

「どことなくオグリ君を彷彿とさせるねえ」

「そうですね……後日、新しいシューズを購入しますのでそちらを使用してください」

「え、いいんですか？」

「チームのためですから」

「すみません、ありがとうございます」

「モルモット君、キミ、チームのためと言いつつ『ちゃんとしたシューズを履かせたらどうなるか』という興味本位な部分が無いかい？」

「どうでしょうね？ フフフ」

うわあ、頑張ろ……これさつきも同じこと考えたな？

いいか。何にしろ負けられない、勝ちたい理由がひとつ増えたということだ。ガンバルゾー！

「では計測を始めよう。1000m、2000m、3000mでそれぞれ走ってもらおう」

「1000ですか?」

距離適性を見極めるのなら、スプリンターズステークスに代表される1200mが適切なのではないかと思うのだが、それでもないのだろうか。

「まずは、とりあえず、ということですよ。後々他の距離も測ってみますので、まずは1000m刻みで計測しましょう」

「わかりました」

どちらにしろ、トレーニングや計測に関しては全くの素人のぼくが何か言うことでもないか。

そうして都合三度、インターバルを挟みながら計測した結果――。

「何でしょうねこれ」

「何なのだろうねこれは」

「何なんすかねこれ」

そのタイムは平坦だった。

2000mのタイムがそのまま1000mのほぼ倍に。3000mのタイムは同じく1000mの約三倍になっている。

ちなみにやっぱ尻尾は回っていた。疑問の半分はこちらにも向けられている。

「手を抜いたりということとは?」

「そんなことできるほど器用でもないですよ」

全力で走るぞ、と決めたら、シマウマ特有の気性の荒さが顔を出し、理性がプツンと行って完全に全力疾走することに意識が向いてしまふ。

だから普段は差しの形で脚を溜めることで、レース展開をかき乱す思考力を残すわけだ。

「タキオン、ハロンタイム約200mごとの所要タイムはいかがですか?」

「極めて安定していると言っている。坂やコーナーでの減速はあるがそれを差し引いても測ったのかというほどだよ」

「測ってないですよ」

「結論づけるとしたら、いかがかな？ トレーナー君」

「生粋のステイヤーですね」

ステイヤーですか。まあ想像はついていたけど。

……そう考えるところもしかしてJWC第一回のサブナストライプって、適性外のマイルに出場してゴリツゴリにやりあってるってことなのかな。すごいな。

そう内心で褒めていると、頭の中でデカイ椅子に座った縞柄UMAがふんぞり返っているのが幻視された。

「最高速はまだ伸びる余地がありますが、パワーで強引にスタートから即トップスピードに乗って、あとは持ち前のスタミナでそれを3000m維持し続けた……このタイムはその証拠でしょう」

「ストライプ君、一度肺機能の検査に行ってみないかい？ 費用はチームで持とう」

「勝手に決めないでくださいねタキオン」

「行つていいなら行きます」

「勝手に決めないでくださいねストライプ」

正直、高山に住んでたウマ娘の肺機能が、どの程度他のウマ娘と違うか知りたいという気持ちはある。

その辺はサブトレさんも気になるんじゃないだろうか。どうだろうか。データ主義のチーム的にその辺のデータは欲しいのではないだろうか。

「その話はまたいずれ。すみませんがもう二本、ダートのタイムを見せていただいてもいいですか？」

「わかりました。1000と2000ですか？」

「ええ」

世界的に見てもダートの長距離戦は珍しい。かつて東京大賞典は3000mで行われていたというが、現在はおおむね2000mで行われる。

最長距離は2500m。これは中山と新潟で行われている。諸外国も2400mを超えるダートコースはそうそう無いため、想定され

るのはここままでいいということだろう。

そうして再度、計測を行ったが――。

「何でしょうねこれ」

「何なのだろうねこれは」

「何なんすかねこれ」

そのタイムはやはり平坦だった。

また2000mのタイムがそのまま1000mのほぼ倍になっている。

またまた尻尾は回っていた。

――しかし、今度は二人の声音はどこか興奮の色が含まれている。

「芝コースを走るウマ娘がダートコースで走ると、おおむね1F F 2ハロン。1F 200m。あたり0.5秒から1秒タイムが変わるといいう。しかしストライプ君の場合……」

「タイム差は0.4秒弱。足が取られやすい良バ場でこれです。適応力だけならデジタル以上かも……」

「デジタル先輩基準なんですネ」

「他にそうそういないですからね、あれほど走れる子も。デジタルでもマイルでは5秒の差が生じますが……」

単純計算で、同じ1600mならばよくの場合場合はダートと芝のタイム差はおよそ3秒になる。

もともと、ぼくは最高速で完全に劣る形になるため一概にこっちの方が速いとは言い切れないけど。

「これならデジタル君と似たトレーニングメニューが使えるかな？」

「実際、体格面でもよく似てはいるんですが……」

と、サブトレさんは指をファインダー代わりにしてぼくの体を眺め始めた。

なんだかこうまじまじと見られると照れるな……そもそもこんな形で体を見られるというのもあまり無いし……。

……ちよつと待てよ？ デジたんパイセンと同じメニュー？

つまり彼女と接触が増える可能性大？

……え、ちよつと怖いんですけど。大丈夫なのそれ。

「……手足の長さが違いますし、それに伴って走法も違いますから同じように当てるのは禁物ですね。チーフトレーナーに指示を仰ぎましょう」

……チーフ！ チーフです！

シマウマタイプのサラブレッド

それからしばらく、ぼくはサブトレさんとタキオン先輩と一緒に色々なテストを行った。

坂路やコーナーでの所要タイムは勿論のこと、ランニングマシンでどこまでの速度を耐えられるか、ショットガンタッチにシャトルラン、反復横跳びにラダー、幅跳び……果ては瓦割りしたり数トンタイヤを引いてみたり、謎の早押しクイズを試みたり将棋やチェスをしてみたり……。

途中からぼくはなにをしているのだろうと思うようなテストもあつた——というかこれアプリのアレじゃない？——が、ともかく一通りのテストが終わったところで、サブトレさんから一応の評価が下されることとなる。

「加速力とスタミナは共にすぐにデビューしてもいいほどのものを持っていますが、やはり最高速が……平均にもやや届きませんね」

「……そう……ぜえ、はあ、なりますよね……」

「おや、流石にここまでやると疲弊するかい」

昼から夕暮れ間近までずっとやり続ければ当然そうもなろう。

しかし……分かっていたけど、最高速はダメか。

短距離走の参考記録程度のもものだけど、サラブレッドは瞬間最高時速としては84kmを記録したことがあるという。その魂を継ぐウマ娘たちの脚力はそれに準じたものになるだろう。

それらに対してシマウマは、最高時速70km弱。もつともサバンナストライプの場合、シマウマタイプのサラブレッドというトンチキながら「シマウマのブリーディングに成功していたら」という、比較的現実的なものも内包してもいるだろうから、多少速さは底上げされているかもしれない。

「……でも、逆に言えば、今の問題はそこくらいということ……ですよね」

「ふうん？」

息を吐いて、吸う。

酸素が回るのが実感できる。肺が全力で稼働し、体力がわずかに戻った。

ぼくの武器は体力もだけど、肺機能の強さによる回復力もそうだ。一息入れればそこで多少なりとも行動するだけの体力が戻る。

速度は大したことないかもしれない。けど、それを維持し続けられるのならば……例えば常に時速60kmでコースを走り続けられるのなら、菊花賞3000mだって記録は3分ジャスト。世界レコードが出せる。

勝てる……勝てるんだ！

サブトレさんはそんなぼくの自信を目にしてふ、と一つ笑みをこぼした。

「いえ、体力の減少に合わせてフォームも崩れてましたし元々のフォームもかなり無駄が多いです。コーナリングも拙いですし坂路もまだ改善点が十……二十……それに勝ちが見えた途端に何も考えなくなつて隙だらけになりますよね。半端です。全体的に体力があるという事実を過信しています。体もやや硬いですし、咄嗟に素早い動きをするのも苦手なようですし……あとちよつと滑舌も不安なところが見られるのでトレーニングしましょうね」

「ひゃい」

その笑みは失笑のそれだった。

タキオン先輩はぼくの身の程知らずな発言に爆笑していた。

恥知らずでごめんなしゃい。

顔あつっ。

「クッククック……彼女はこのあたり遠慮が無いからねえ。辛辣な言葉に聞こえるかもしれないが、指摘そのものはそう的外れではないと思うよっ。」

タキオン先輩も、見てて同じように思いはしたのだろう。

……けど、ほら、あれだ。競技者の立場からなんとなく漠然とそう思ってただけで、正確な問題点の洗い出しまではできてなかったかもしれないし。

一応、ケニアでもトレーナーさんに見てもらってはいたけど、あつちが最低限のことだけやってあとは独学みたいなものだから、トレーナーさんみたいに専門知識を蓄えたひとじゃないとちやんと言語化できない程度の違和感かもしれないし……。

「的外れではないと分かっているなら、タキオンも指摘してあげればよかつたんじゃないですか？」

「二度手間じゃあないか。モルモット君から言うだけで十分だろう」

自ら気付くことなく同じ競技者からも即座に見抜かれるほど慢心した、スタミナでゴリ押しするだけの走り方の醜さ。

生き恥。

……いや違う、そうじゃない！　こういう時はポジティブに考えるんだ。大舞台で恥を晒さずに済んだと思えばいい。幸い今、調子に乗ったところを見せたのはタキオン先輩とサブトレさんだけだ。

「大丈夫です！　ここから少しずつ修正していきましょう。そのためチームであり、トレーナーなんですから」

「ひゃい」

普通に立ち直りきれなかった。

ぼくの口は気の抜けた返事を出力するだけだった。

……≠……

もしかして自分が強いのではないかという妄想に駆られたイキリロバ娘が誕生直後に恥ずか死して一時間と少しして、全体練習を終えたベテルギウスメンバーが戻ってきた。

彼女らは入学したてのぼくよりはるかに練習に慣れているはずなのだが、疲労の度合いはやや濃いように思える。なるほど。効率的だから疲れない、なんてことは無いようだ。むしろ効率を突き詰めるからこそ、短時間に高密度のトレーニングを行っているということなのだろう。

約一名明らかに疲労の質が違うニンジャがいるがあれはどういうことなのだろうか。

「スナイパーさんは何であんな燃え尽きているんですか？」

「ドーナツと並走したせいですかね……」

「なぜ併走したくらいであんな魂が抜けたような顔に……？」

確かにメンポを奪い取られるというのはニンジャ的には屈辱的だろうが、しかしだからと言って並走したくらいでそんなことになるものだろうか？

サブトレさんは頬を軽く搔いた。

「併走が終わるまでメンポを返してくれぬのだ……許すまじピーナツ……」

「うわあ!？」

「気配を消して背後にやってくるのをやめなさいスナイパー」

……ピーナツじゃなくてドーナツじゃないの？

そう思ったんだけど、どうも彼女は意図的にやっているらしい。わずかに声が聞こえたらしいドーナツ先輩がギロリとスナイパーⅡサンを睨みつけたが、ぼくの背後に隠れたせいでその視線はこちらが一身に受けるかたちになってしまった。

コワイ!

「そうやって微妙に煽るようなことを言うから、ドーナツも余計に酷くなるんですよ……」

「初対面でメンポを剥ぎ取ってきたあの悪夢は忘れぬ……」

実際、人と挨拶する時に顔隠すって普通に失礼なことでは？

ぼくは訝しんだ。

「おかげでいつも逃げちやうから、追いかけるのが大変なんだよね
〜」

「むっ。スカイ……」

「どもどもー」

そこで横から注釈を入れるようにして、どこかふわふわした雰囲気
を漂わせた——ように見える——緑がかった芦毛のウマ娘が姿を見
せる。

セイウンスカイ先輩。一見するとマイペースなひとであるように見
せて、強い闘争心のもと計算と策謀を働かせ勝利を狙うウマ娘だ。

ポテンシャルは非常に高く、あの菊花賞でレコードを叩き出せるほど。

もつとも、今は本当にゆるい穏やかな雰囲気なようだ。同期の、例えばグラスワンダー先輩やエルコンドルパサー先輩のような、同じレースで競い合うことになるライバルがいるわけじゃないからだろうか。

頭を下げて挨拶をすると、スカイ先輩は手をひらひらと振って涼やかにそれに返した。

「先行策や差しの訓練になりませんか？」

「追いかけるだけならいいけど、隠れるからねー……トレーニングにはなりそうにないよ、残念だけど」

「でしょうね」

それこそ時と場合によつては変わり身の術とか身代わりの術とか使ってくるのではないだろうか。

「そういえば挨拶、まだだったよね。セイウンスカイ。よろしくねー」
「あ、はい。よろしくお願いします」

「スカイはスナイパーと同じく、今季ジュニア級でデビュー予定の子です。スカイ、ストライプは歳も近いですから、よく面倒を見てあげてくださいね」

「私？ いやあ……どうかなあ。スナイパーで手一杯かも」

「分かっていますねスナイパー？」

「ぬっ!? う、ぬう……むう、う、うーん……」

すごい微妙そうな顔してる！

あ、でもサブトレさんの威圧感に押されて頷かざるを得なくなってる。半泣きだ。どんだけ嫌なの……。

まあ、苦手意識ってなかなか解消できないしね……そういう気持ちには分からなくもないけど。

「ま、ほどほどによろしくー」

「ほどほどによろしくお願いします」

「いいんですかあなた方それで」

いいのです。

ウマ娘によつて最適な距離感というのは違うものなのです。

○オマケ

「ニンポ！　とうめいの術っつ！」

（ええええ〜！　なんですかその尊みの術〜！　透けて…透けて透けて…透けて…）

「へっへっへ、昨日スナイパーちゃんに教えてもらつたんだ！　ねえねえ、見えてる？　見えてる？」

「見えていませんともっつっ！！」

いきなり限界値

日も暮れてきたし、そろそろ解散かな——そう思い始めてきたところ、サブトレさんがふとクリアファイルを取り出してこちらに寄越してきた。

「これは？」

「暫定的な自主トレ計画です。全体トレーニングが無い日は、当面こちらを参考にトレーニングしてください」

「あ、はい……ほえ？」

もう計画ができたのか。早いなあ。そう考えてファイルを開くと——そこに記されていたのは、およそこれまでにぼくが想定し、経験していたものの数倍はキツイメニューだった。

………え、マジ？　ちよつと待つて。厳格に管理して怪我をさせない方針じゃないの？

「さ、サブトレさん……これ、このメニューの量はいつたい……？」

「はい。今のあなたに可能で、かつ怪我をせず限界値を突き詰めたメニューです」

「ひよえっ」

いきなり限界値突き詰めてくるの!?

いや、まあ、確かに……無理ってほどでもないような……それでもこの量はどなのっていうか……ええ……。

困惑と驚愕で固まっていると、諸先輩方が上から覗き込むようにしてファイルの中身を読み始めた。

「ああ……ま、暫定的なモンだからな、このくらいはやらすだろ」

「このメニューがどの程度の負担になっているかを調べるという目的もあるはずです」

「おいリムジン、アタシにも見せろ。肩車だ肩車」

「んっしょ」

「ふおお……これはかなり期待されてる感じの内容……！　ア。ツイけない近づきすぎ」

「どうしてメニューを渡されただけで大集合するんですか？」

何がそこまで琴線に触れたのか、皆一様に興味深そうに覗き込んでくる。

後輩のトレーニングメニューってそんなに気になるもの？

「細かいこと気にすると尻尾の毛え抜けるぞ。いやもつと細かいこと気にしてるシャカールもいるし大丈夫か。ヌハハ」

「だから余計な一言を増やすんじゃないやねエドーナッツ！」

「ふふ。後輩が増えるとみんなこうやって見にきマス。ワタシたちも、最初はすつごく疲れてたので、アドバイスもできたらと思いまし
テ」

「アドバイスですか？ いただけるならありがたいですけど」

「……今は特に無いですネ」

「そですか」

でしようね。

まだやってすらないんだから何とも言えるはずもなし。仮にアドバイスするにしても様子を見に来た翌日以降ということになるだろう。

なんだか毎回変な不安に駆られてるなあ……という思いがそのまま微妙な表情として出力される。と、そこでトレーナーさんがサブトレさんの頭に軽く手刀を落とした。

「あいた」

「馬鹿者。指示をしたら意図を説明しろといつも言っているだろう」

「すみません」

「トレーナーさん……あ、え、意図？」

頷くと、トレーナーさんは軽くしゃがんでこちらに目線を合わせてきた。

「ストライプ。このメニューは『あえて』限界の瀬戸際を攻めるようなメニューにしている」

「はあ」

「理由はさつきフラッシュが言ったように、どの程度肉体的精神的に負担が生じるかを調べるためだ。全部完璧にこなす必要は無い。痛

みや違和感があるようならすぐに報告しなさい」

「は、はい」

なるほど、限界ギリギリを攻めていくってそういうことか。要はこのメニューも完全に叩き台なわけだ。

最悪、それこそ途中まででギブアップしても構わないし、むしろそれが前提になっていると。

「あとは……このメニューは辛かった、苦痛だった、というようなものがあれば、それも言ってくれて構わない」

「辛いとか苦しいとかは、当然あるものじゃないですか?」

「かと言ってそのままじゃ気乗りがせんだろう。身が入らなければ半端な取り組み方をしてトレニングにならないことも多いし、最悪怪我をする。それなら別のメニューに切り替えたほうが効率が良い」

見ると、サブトレさんが一瞬スカイ先輩に視線を向けるのが見えた。

自分からやろうと思えるようなトレニングをするのが一番効率がいい、と。

しかし、だとするとなぜスナイパーⅡサンが嫌がるドーナッツ先輩との併走を推し進めているのだろうか。疑問が少し増えてしまった。

……いいや、気になったなら聞いちゃえ。

「……何でスナイパーさんに限っては本人が嫌がってるドーナッツ先輩との併走を?」

「ドーナッツが自分と走らせろというのもあるし、適性が奇跡的に合致していてな……それに、レースによってはマスクを着けて走ることができない場合もある。今から慣れておかんと話にもならん」

「適性……と、ドリームトロフィーの一部のレースとか、そうでしたっけ」

出場できるウマ娘自体が限られるけど、ウインタードリームトロフィーはそれぞれ色違いの汎用衣装だった覚えがある。

シャドローールやメガネはいいけどメンポはダメよ、ということがあるとは考えづらいが、時によってはドレスコード必須な場所に行くということにもなったり、完全に指定された勝負服で走らないといけ

ないケースもあるだろう。その時に「メンポが無いので走りません」というのは……やっぱりちよつと問題か。ファンあつてのトウインクルシリーズだし、ドリームトロフィーリーグだ。走る機会が減ることとはそのままファンの減少に繋がりがかねない。

そりやまあ、中には口元隠してるからイイんだろうが！ という紳士淑女諸氏もいるだろうが、冷静に考えてほしい。それは割と特殊性癖マイノリティの部類だと。

「めったにあることじゃないが、URAの表彰の時に勝負服を贈られるウマ娘もいる。中にはマスクとデザインが合わんこともあるだろう」

ああ、なるほど。アニメ2期のテイオーたちみたいに、ということか。

そうなるとURAへの義理立てもあるし、対外的な問題もあつてどうしてもその勝負服をしばらく着る必要が出てくる。

だから荒療治も時には必要と。ドーナッツ先輩の気質のせいでもちよつと荒すぎるし悪化する可能性もあるけど……そこはちやんとデータを見てこれが効果的だと判明しているものと思おう。

それから、トレーナーさんに軽く激励の言葉を贈られて、今日の全体トレーニングは終わりを迎えた。

スナイパー||サンとドーナッツ先輩の適性の噛み合いってなんだろう……と聞こうとはしたものの、結局聞ける機会は無かった。

何だったんだろ、適性って。

……≠……

それから後日。

「うぐううおおおお……」

「つんつん」

「ぐああああああああああ」

寮に戻ったぼくは自室で激的な筋肉痛に呻いていた。

想定外の激痛だ！ これはひどい。普段使ってなかった筋肉が悲

鳴を上げている！ ミークにつつつかれた場所が痙攣して死にそう
だ！

「ちよつと、近所迷惑ですわよ」

「そうそう、あんまり騒ぐなよ」

そんな風に床でのたうち回るぼくをベッドに腰掛けて見下ろすのは、先日ぼくが貰ったトレーニングメニューを興味深そうに見るマツクイーンとウオツカだ。

マツクイーンは元々、メジロ家の令嬢として幼い頃からトレーニングに励んできた身。ウオツカも全体トレーニングがぬるいという理由でサボって、より高負荷高密度な自主トレを行っている程度にはトレーニングの質というものを求めている。チームに入ったよ、自主トレメニューを貰ったよ、という話を教室でした時、一番食いついてきたのはこのふたりだった。

「スタミナ自慢のストライプがこんなことになるなんてなあ。これ、そんなキツツいのか？」

「スタミナは関係ないですわよ。負荷をかけるのはあくまで筋肉ですから」

「普段……鍛えていなかったんですか……？」

「そんなわけないでしょ……ぎゃひい」

「じゃ、何でだよ？」

「わがんにゃい」

疑問で体を傾けてこちらを見るウオツカに、ぼくが返せるのはちよい、いやだいぶ、まあ絶対的にテキトーな返答だけだった。

代わりにそれに答えたのはマツクイーンだ。

「メニューを見る限り、普段使わない部位の筋肉もまんべんなく鍛えるようにしているようですわね」

「普段使わないのにか？」

「トレーニングにはいくつかの原理原則がありますわ。どれも重要ですよけれど、見落としがちなのが『全面性の原則』……体の動きというのは連動しているものですから、一箇所だけを鍛えてもボディバランスが崩れて良くない、というものです」

「へえ」賢さが不足しているようなので重点的に鍛えてみましょう。
「ほー」賢さが不足しているようなので重点的に鍛えてみましょう。
「ほええ」賢さが不足しているようなので重点的に鍛えてみましょう。
「どうして皆して感心してますの……？」 基礎知識ですわよ……？」
「メジロ家の秘伝だったりしねえ……？」
「しませんわよ」
「しないんだ……」

いや漠然とは知ってるけども。とはいえそれだつてちゃんとした理論として知ってるわけじゃあなかったのは確かだ。

家柄が家柄だし、専門家もすぐ身近にいるわけだから、そういった理論も既に聞き及んで完璧に記憶していたんだろう。さすがマックイーン。

「おつし、そういうことなら俺もこの内容、取り入れてみつか！」

「ウカツだなウオツカⅡサン……何の準備も無しにただやってみるかではぼくの二の舞になるのがオチだぞ……グググ」

「何ですのその口調」

「へっ、やってみなきやわかんねーだろ？ どうせなら時間空いた時付き合ってくれよ、ストライブ」

「いいよー」

ぼくとしてもまずはやってみて検証し、データを蓄積するところから入らないといけない。一人じゃやりづらいものもあるし、渡りに船だ。

「マックイーンはどうするんだ？」

「全体の合同トレーニングが終わったら合流いたしますわ」

「ウオツカも出なきや」

「ライブの基礎、大事ですよ……」

「分かってるよ、けどまずカッコよく勝たなきや、ウイニングライブもできないだろ？ ま、見てなつて！」

本当に大丈夫かなあ。

確かにウオツカは体格的にも恵まれているし、鋭い差し脚は一級品。入学したてのこの時期に、ほんの一月程度の練習で2000mの

距離を走りきれてしまうほど才能に溢れている。その気になればメイクデビューもすぐに一着が取れるようになるだろう……と思う。まず一着を取らないと、という姿勢も理解できる。

けどなあ。ううん。ウオツカだからなあ。どこかでポロツとライブのこと頭から抜け落ちる可能性を否定できないんだよなあ。

……まあ、今はウオツカもチームに入っていないし、そこまで急ぐことでもないか。

これは余談だけど、後日、やっぱりぼくらは揃って筋肉痛に苦しむハメになった。

ウオツカは部屋で悩ましい呻き声を上げてしまい、声が聞こえてしまったデジタル先輩がその場であらぬ方向に妄想を飛ばし死亡。5秒後復活。

練習直後で先輩に同行していたぼくはそれに巻き込まれ、全身の筋肉痛が再燃し無事死亡した。

アイシングって大切だね。

大事なのは目的意識

「ストライプ、今日のトレーニングが終わったらシューズを買いに行きましよう」

「うあい？」

チーム合同トレーニング参加二日目。体格が似ているということデジタル先輩と組んでストレッチをすることになったその最中、途中からやけに荒くなっていく息に小さな不安を覚えていると、ふとサブトレさんからそんな申し出がされた。

本日の髪は黒……黒すぎねえかコレ。

吸光率99%超えの例の塗料みたいだ……。

「それは嬉しいんですけど、デジタル先輩が過呼吸になりそうなのはどうしたら」

「その辺に寝かせておいてください」

いいんですかそんな雑な扱いで。

普段外から見つめるだけで十分に興奮できているデジタルパイセンにとっては、刺激が強かったのかもしれない……のだけど、チームに所属する以上ストレッチといい他のトレーニングといい、ウマ娘と触れ合う機会というのはありふれている。そのたびにこんな人になつてるようだし、もうよくあることなのだろう。完全に慣れきっている。

タキオン先輩の脚の調子によっては参加できない日もあるし、そういう時は大概サブトレさんとでもストレッチしていたと考えるのが自然かな。

消防士のそれのようにして担いで運び上げると、それに合わせてデジタル先輩はヒョエエ……と小さな悲鳴を上げたが、かしなにか「違う、そうじゃない」とばかりに複雑そうな顔をしていた。

実際お姫様抱っことかおんぶとか、オーソドックスなのだ喜びそうだからあえて避けたのだけど。

「シューズの話に戻りますが」

「いいんですか戻って」

「いつものことです」

「なら仕方ないのか……?」

「なら仕方ないか……」。

「普段は裸足で走っていたということですので、早めにちゃんとしたシューズを履いた状態での走行に慣れていただく必要があります。こういうことは早いに越したことはありませんから、早めに行きましようね」

「わかりました。ありがとうございます」

「サイズは!? 靴のサイズは!?」

「……デジタルのためではありませんが、足のサイズなどはいかがですか?」

「……21.5cmです」

身長としてはマヤノよりも更に小さいぼくだが、足のサイズだけはちよつと大きめだ。まあ、誤差程度だけど。

シマウマもロバもサラブレッドに比べると体が全体的に小さいんだけど、脚は野生下で生きるシマウマやロバの方が太い。

競争のためにある種先鋭化した進化を遂げているサラブレッドは、脚が細くできており非常に繊細だ。このサイズ差は多分その辺の差異だろう。

その後は入念にアップをして、合同トレーニングに入る。

最初にやるのは基礎トレ基礎トレまた基礎トレだ。しっかり負荷をかけることを意識しながらやらないといけないため、これが相当キツイ。

動きを見てちゃんと負荷がかかってないと判断した場合、これをトレーナーさんたちは矯正してくれる。……が、そうなるとやつぱり相当体力が削られるので辛い。

けど、これを通り越えた果てにトウインクルシリーズへのデビュー、ひいてはお金! そしてお金! 更にJWCの開催がかかっている。

何事も大事なのは目的意識だ。トレーニングは地道な反復作業だ

けど……あー……まあ好きな人も中にはいるだろうしトレーニング大好き！ なひとがいることを一概に否定できないし実例も知っているのだけど。ともかく、そういう地道な反復作業というのはあまり人に好まれるものじゃない。ぼくもそんなに好きではない。

そこで、モチベーションを保つために重要なのが、しつかりした目的意識を持つことになる。

ぼくのようにお金！ お金！ お金！ でもいいし、テイオーのように無敗の三冠ウマ娘を目指すでもいい。何なら痩せたいでもいい。それによつてモチベーションが上がるなら何でも自由だ。

やる気を保てなければ、トレーニングはどれだけしても苦痛にしかならない。そして、苦痛に感じ始めたらいぶ危険信号だ。トレーニングに身が入らず、ちゃんと負荷をかけることができない……鍛えても鍛えても結果に何ら反映されないことにもなりうる。

(お金、おっ金、おっ金え……)

……まあ常に目標を念頭に置くって言ったって頭の中でずっと目標について呟いてく必要は無いんだけど。

いや探せばいそうだな、目標について叫んでるひと。Wなウマ娘とか。あのひとは今日もダービーへの思いを叫んでいるのだろうか。

ともかく、そうこうして基礎トレが終わった頃。

「やはりこうなったか」

「やはりこうなったかじゃねえよブツ倒れてんのに案外余裕だな」

今までに受けたことのない種類の負荷によつて、ぼくはもう全身疲労で動けなくなっていた。

筋肉は痙攣するわ、単純に力使い尽くしてスタミナ云々の問題じゃないわで立ち上がれない。

まあこうなるとは思ってたんだ、ついこないだの自主トレメニューで。あれが標準ってわけじゃないだろうけど基準にはなってるだろうし、自分である程度加減ができる自主トレと違って、ちゃんとトレーナーさんたちが見てくれている合同トレーニングだ。多分筋力がもたないだろうと予測は立てていた。

「ふっふっふ……すみませんシャカール先輩、ぼくはここまでのよう

です……」

「みたいだな。まあ気に病むなよ、皆そんなもんだったからな」

「そうなんですか……」

死に際ネタがスルーされてちよつと悲しい。

それより、みんなこんな感じだったのか。意外……というか、あんまり想像できなかったな。今の姿の印象が強いせいだろうか。

「動けるようになったら座って見学しとけ」

「わかりました」

「コースにいると踏んじやうので、外に連れていつてきマス」

……まあ、当然疲れたからってコース上でいつまでもへばってるわけにはいかない。

ぼくはそのままアイシング用のスプレーを手渡され、リムジン先輩に連れて行かれたのだけど……彼女のおんぶは思った以上に快適だった。

リムジン種、しゅごい。

十分から二十分ほどして、ようやく筋肉の疲れが取れて緩慢ながら動けるようになってきた。

スプレーを当ててアイシングをして、ゆっくりストレッチをする。見学をするならするでクールダウンはしっかりしないとイケない。

それから更に少しして、技術的なトレーニングが始まる。腕の振りや足運びなどは……個人差が大きいから何とも言えないや。安易に应用できるからと言ってしようとしても、体格差があるので合わないことも多い。この辺は基礎トレだけでへばってしまうような状態を脱してから、改めてトレーナーさんたちに見てもらうのが良いか。

「調子はどうだ、ストライプ」

「全身がねじ切れそうです」

「喋る余裕があるなら大したものだ」

そんなことを考えていたところ、併走までの小休憩の間にトレーナーさんがぼくの様子を見に来た。

「明日以降は自分の体と相談して、超回復を意識してトレーニングをするように」

「わかりました」

「……随分簡単に返事をするが、ちゃんと分かっているか？」

「？ 分かっています。筋肉ごとに回復するまでに時間差があるという話ですよ。腹筋や前腕なら24時間で超回復しますけど……」

「ああ、いや……分かっていないならいいが……もの分かりが良すぎるというのも厄介だな」

指導者としてはもの分かりが良い方が嬉しいものじゃないだろうか？

わからん……よし、聞くか。

「もの分かりが良いと何が厄介なんです？」

「本当に理解して返事をしているのかが判断できんからな」

「はい」

仰るとおりすぎて何も言えねえ。

本質的な問題がわかってないのになんとなく理解した気になって「わかりました」と言っちゃった経験はありますか？ ぼくにはありません。

なので警戒するのはよく分かる。

しかしながら、今この場では少なからずトレーナーさんの言っていることを理解できていないはずだ。はずだよ？ なんだかちよつと不安になってきたぞ？

「……まあ、理解しているならいい。ただ、体調や体の痛みといったトレーナーから見ても分からんこともある。そういう時はただ『分かった』だけで済まさないようにな」

「わかりました。全身痛いです」

「そういうことを言っるとるんじゃない」

てへぺろ。

「……そろそろ併走を始めるが、ストライプ。リムジンの走りをよく見ておきなさい。参考になるはずだ」

「へ？」

と、去り際に、トレーナーさんはそんなことを言い残していった。

……ぼくが参考にするなら、シャカール先輩やフラツシユ先輩、あ

るいはどちらかと言うと先行型ではあるけど、デジタル先輩じゃないのだろうか？

確かにハリウッドリムジンの脚質は差し型。そういう意味ではサバンナストライプと同じだ。しかしそれはピーピードーナッツも同じことが言える。

しかし彼女らは、身長体重共にぼくとはあまり似通っている部分が無い。それなら差し、追い込みを得意としていて平均的な体格のシャカール先輩たちの方が参考になる点が多いのではないだろうか……。

悩んでいると、やがて併走が始まった。

最初に走るのはスナイパーⅡサンとデジタル先輩、そしてトレーナーさんが直接言及してきたリムジン先輩だ。

距離は1600m。スタート直後、まずは飛び出すような形でスナイパーⅡサンが飛び出す。脚質自在の面目躍如と言ったところか。

「前にトレーナーさんはドーナッツ先輩とスナイパーさんの走りの適性が噛み合ってるって言ってたけど……」

今見る限り、そんな感じはしない。

はて、と首を傾げていると、そこでフラッシュ先輩が来てぼくの漏らした言葉に答えてくれた。

「今はスナイパーさんには練習のためにあえて逃げていただいています。普段はもう少し違う走り方をするんですよ」

「あ、そうなんですな」

そういえばこのチーム、ステイヤーや中距離路線のウマ娘が多くてマイラーってあんまりいないや。

逃げが得意でペースメイクができるスカイ先輩も、走れないことはないといえやっぱり本領は中・長距離だろうし。

ぼくの話が気にかかったのか、そこでドーナッツ先輩もやってきて隣にどかんと勢いよく座った。

「リムジンが出場する安田記念が近いからな、その予行でもあんだよ」「リムジン先輩、マイラーなんですな」

「と思うだろ？ あいつケンタツキーダービーダーフト2000m。アメリカクラシック三冠の一角。で一着」

「ひえ……」

そこも踏襲してんの!?

そういえば原作のJWCだとBCクラシックダート2000m。事実上のダート世界最強決定戦。とBCターフ芝2400m。BCクラシックよりは格式としてやや劣るがアメリカ内での芝最強決定戦と目される。で一着もぎ取ってるんだっけ……。

……あれ？ 体が伸びることにばかり着目しててうっかり頭から抜けてたけど、もしかしてリムジン先輩もぼくやデジタル先輩みたいに変態適性持ち？

よく考えると安田記念もBCチャレンジアメリカ開催のBCワールドチャンピオンシップの優先出場権が与えられる競争のこと。だし、これ、今年の出場枠狙っていらっしやる？

「ひええええ……」

「フハハハ！ そんなビビンなつて」

「普通は、驚くと思いますが……」

「ま、そのダービーであいつ脚骨折してんだけどな」

「え!？」

「見てな」

レースは未だリムジン先輩が差しに行く様子は見えない。

最終コーナー。

ここでデジタル先輩が仕掛けた。内から外に回るような形で加速し、スナイパーIIサンに肉薄する。

リムジン先輩は……コーナーではまだのようだ。デジタル先輩の横につけるような形で外へ。

と、そこで一瞬、彼女の瞳——どこか理性の光と獣性の炎が拮抗しているかのような、異様な光を持ったそれが目に入った。

仕掛けに行く。そう直感的に読み取ったその直後、残り400mを切ったところで彼女はまるで地面に沈み込むかのように、上体を思い切り倒した!

「あれは!？」

——外からハリウッドリムジンが伸びてきた!!

伸びる！ ボディが長い！ そうか、高い身長をそのまま横倒しにすれば横に長くなる！

けど、それはバランスの崩壊と同義だ。体を倒せば倒すほど、重力によって体は下に向かって「落ちる」わけなのだから、やがて転倒する可能性すらある。常識的に考えれば、あんな走法長くはもたない。

……その、はずなんだけど。

(倒れる気配が無い……！)

同時、ぼくは彼女の足元が凄まじい勢いで抉れていくのを見た。

重力に任せ倒れる下向きの力が、常識はずれのパワーで地面を踏むことでそのまま前へと進む推進力へと転化されていく。

強靱な体幹と、桁外れのパワー。それがあの体格でありながら、とんでもない前傾姿勢を取ってなお問題無く走り続けられる秘訣なんだ。

ただ、なんとなくだけとそれだけじゃない何かを、彼女の目からは感じた。あれは一体……。

……疑問そのものは解消されなのまま、併走はリムジン先輩が差し切って終わった。

ドーナッツ先輩は好戦的な笑みを隠さなのまま、こちらに言葉を振ってくる。

「何で折ったか分かったか？」

「……力が強すぎて、脚の方が耐えられなかった、ですか？」

「はい。身長が高い分、体重も……それなりのものになってしまおうのです。長丁場になればなるほどリムジンさんの脚には強い負担がかかります。良くも悪くも、ケンタツキーダービーでそれが表面化しました」

「アイツ、マジでやるともつと爆発するみたいになるぜ」

ドーナッツ先輩の声音からは、そんな「本気」のリムジン先輩に勝ちたいという気持ちがありありと感じ取れた。

……トレーナーさんがリムジン先輩の走りを見ると言った理由が分かった気がする。

常識とは離れた走法に尋常じゃないパワー、そして芝ダートどちら

も走れる適応力という点でリムジン先輩はぼくと似通っている。特に走法については、あの強靱な体幹も含め見習う点が多い。

上体を起こすためにはスピードを緩めることができないため、たつぷり200m近く追加で走るハメになったリムジン先輩。

彼女が休憩に戻るのを見送って、ぼくは何か飛び出しそうになるほどの興奮を抑えるように、口元に手を当てた。

マルチタスク

「どこまで分かった?」

併走を終えて、リムジン先輩たちにくつかアドバイスや今後の指導計画を伝えた後、こちらにやってきたトレーナーさんはそんな風に僕に話を振ってきた。

曖昧な、けどどここれ以上ないくらい簡潔な言葉だ。ぼくは親指を持ち上げて答えた。

「半分くらいですかね……」

「なら自慢げにサムズアップをするな」

「お前時々ノリで生きてんな?」

本当に時々だろうか。かなりの割合でノリで生きてるようなことをしてないだろうかぼくは。

さて、それはともかくだ。

「ぼくも走法がちよっと特殊なので、リムジン先輩の体幹や踏み込みの強さが参考になりました。ただ、それが印象に残りすぎてしまって……多分他にも何かあると思うんですけど」

「そうか。それも確かに必要だが……一番見習ってほしかったのはその『何か』だな」

「何なんですか?」

「マルチタスクだ」

「マルチタスクって……2つ以上の作業を同時進行できるっていう、あの?」

「リムジンあはそれが抜群に巧い。あれだけの前傾姿勢を保っていられるのはそのおかげだ」

「はえー……なるほど、言われてみると、確かにあれはぼくじゃできなさそうだ。」

あの姿勢、レースに集中しすぎると、多分足元が悪ければそのまま転倒する危険性がある。他の走者が足元をえぐり抜くような走法をしてデコボコになっていることもあるだろうし、雨でぬかるんでいた

りバ場状態が悪ければそれだけで命取りになるだろう。そここのころ、スパートに入ると前以外見えなくなるぼくには無理だ。

体重移動や足運びも極めて繊細に管理しないとイケないし、それこそマルチタスク——物事を並列に処理できる頭が必要……必よ……。

「……………これ騎手ソウルの影響じゃな？」

JWCにおけるハリウッドリムジンの騎手は双子のチキン兄弟。騎手が二人。考える頭も二人分。

リムジン先輩がマルチタスクに天賦の才を示したというのは、その辺が原因の一つなんじゃなからうか。

とはいえ、マルチタスクは誰もが無意識下でやっていることではある。立ち上がりながら何か手に取る、なんてことも突き詰めればマルチタスクだ。それを技術として昇華できるかどうかが重要な点だろう。トレーナーさんの言わんとすることも、そういうことのはずだ。

「選抜レースの時のことを覚えているか？」

「まあ、はい」

「中盤から何も考えずに走っていたな」

「はい……………」

完全に見抜かれてる。

サブトレさんに言われて知ったのかもしれないけど、多分、トレーナーさんはその辺が気にかかって、スカウトは見送りとしていたのだろう。

「作戦を組み立てるまでにはいい。それで疲れが見えたら、というのも分かる。この歳でそれができるなら大したものだ。だがストライプ、最後まで考えて走ることができないなら、野生の獣と変わらん。だから最後まで冷静さを保っていたトウカイテイオーに負けたんだ」

「……………」

……………もしかして、ケニアのトレーナーさんに言われたそれって、ポジティブな意味でもありネガティブな意味でもあった？

今の年齢で作戦を組み立てて走ることができたら大したものだ。しかし、最後に何も考えず野性に任せて突撃……………で勝てるのは、ぼくに油断してかかっている無防備な相手だけ……………と。

うわ恥ずかし。普通に褒め言葉として受け取ってた。いや褒めてるニュアンスもあるんだろうけど、それだけじゃないってこと何も察せてなかった。

「常に考えて走ることができるようになりなさい。でないところから先、トレーニングを積んだ彼女たちには勝てないぞ」

「分かりました。……頑張ります！」

……明日から！

今日は無理っす。

かなり真面目に。

全身筋肉痛で動くに動けないわこれ。

その後、宝塚記念を控えたドーナッツ先輩——多分コックスプレート芝2040mで行われるオーストラリアのGIレース。ピーピードーナッツ（原作JWC）はこれに出場し一着を取っている。の優先出走権を賭けてる——の併走や模擬レースなども見学したが、こちらはあまり特徴的な走り方は見られなかった。

本人は、「アタシの走りは大勢いるところじゃねえと強みが分からねえよ」と自信ありげに語っていたので、見られるのはそれこそ宝塚記念ということになるだろうか。

……宝塚記念の出走条件、基本的にファン投票なんだけど、コレ当然のように受かる算段があるってことなんだよね。どんだけ実績積んでるんだろう……。

……≠……

さて。

忘れがちだがぼくの目的はお金を貯めること、ひいてはJWCを開催することである。

トウインクルシリーズに参加する理由は、今の年齢でお金を稼ぐのに最も都合がいいからだ。ぼく自身走りたいという欲があるからそれを満たすためでもあるのだけど、それはそれとして。

極端なことを言うと、お金を稼ぐという目的さえ満たせるのなら、

最終的にはレースを手段としなくてもいい。

では、その手段として何をするか。

「起業したいんです」

「エアグルーヴ、私はアルバイトの許可を取りに来たと聞いたのだが」
「私もそのつもりでした」

ある日、午前中の生徒会室。アルバイトの許可を取りに行つたばかりのまま勢いでそのようなことをぶちあげた。

完全にノリと勢いの産物である。ここまで言つたならもう言つちやえ。そのくらいのもので多分部屋を出たところでもう言つちやつたこと後悔することになるだろうし、実際今既に後悔しつつあるけどまあこのまま言つてしまおう。

「日本の法律上満15歳未満の中等部生がアルバイトをすることは難しい、ですよね」

「それも少し誤りかな。『児童の健康及び福祉に有害でなく、かつ、その労働が軽易なもの』という条文のもと許可が出ているアルバイトもある」

「そういった業種ではダメなのか？ 今はトウインクルシリーズのデビューに向けた大事な時期だ。あまり無関係な仕事にかまけていられてはな」

「それはそうなんです。ただ、これから何かとお金が入用で……」

例えばシューズと蹄鉄。踏みしめるパワーが強いとそれだけ磨り減るため、度々買い換える必要がある。それに関して、いつまでもチームの資金に頼るわけにはいかない。

それ以外にも、ぼくはまだスマホやパソコンなどの電化製品を揃えていないし契約のための料金なども必要だしで、今はとにかくお金が要る。新聞配達などは日給4000〜5000円程度。加えてそもそも都内だと中等部は雇ってもらえないパターンが多い。

そこは会長やURAの関連業種などのツテで解消できる場合もあるけど、やっぱり安定するとは言い難い。

というところまでを説明すると、会長たちはひとつうなずいて続きを促した。

「なのでアルバイトを足がかりに、最終的には安定して収入を得られるようにしたいなあ」と

「随分と気の長い話だな……」

「事業計画はどんなものを予定しているのかな？」

「会長」

「いいじゃあないか。明確なビジョンがあるなら、私は今日から許可を出してもいいと思っっているよ」

エアグルーヴのやる気が下がった。

そんなナレーションが不意に脳内にあふれてきた。

ぼくはそれをあえて無視して、一つ頷いた。

「第一に出店を用いた飲食業。こちらは現在日本で知名度が低く、同時に隙間産業的な需要を見込んだアフリカの料理を提供する予定です。ファン感謝祭や学外のレース場に申請を行い出店を行います。」

第二に個人貿易業。もともとぼくにはアフリカで伝手がありますので仕入れは簡単です。エスニック的な用品に対する需要は少なくありませんから相応の収入が見込めます」

「会長、13歳にあるまじき明確すぎる内容なのですが」

「彼女はまだ12歳だよエアグルーヴ」

「尚更です」

お金がかかっているのだから当然ぼくとしてもレースにかける並みに本気だ。

現在過去前世現世全ての知力を総動員して計画を練り上げたし、必要な書類を含む資料を既に部屋の片隅に積み上げている。

口頭での説明もあくまで一部のものだ。必要なら寮に戻って資料を持ってくることもやぶさかでない。

「しかし……そこまで考えるのはいい。先ほども言ったがレースに影響は出ないものか？」

「どちらかと言うとそのレースに集中するためというのが一番の理由なんですけど……」

いつまでも仕送りに頼るわけにいかないし。

そもそも頼れるほどの額の仕送りがあるわけでもないし。

用具もそうだけど体づくりのための諸々の食べ物とかも要るし。

レースにはとにかくお金がかかるのである。

「分かった。そういうことであれば許可を出そう」

「……不安は残るが、仕方ありませんか」

「彼女は既にチームに所属しているから、レースに出走するための最低条件は整っている。レースに対する気概と言う面は問題ないだろうね。素行が悪いようであればチームのトレーナーの方から報告が来るだろうから、気を付けることだ」

「はい、十分気を付けます」

一瞬、会長の目が細められて急激に威圧感が襲った。

「……多分、これ、昔そういう生徒がいたんだろうな。バイトにかまけてしまって、って。」

「ぼくも気を付けよう。そう改めて心に留めて、ぼくは許可証を受け取って生徒会室から退室した。」

そりやでけえでしよ

ぼくがアルバイト先に選択したのは、これまでにトレセン学園生徒の受け入れ実績がある牛乳の宅配サービスだった。

さすがにこの年齢で、しかも外国人がアルバイトがしたいと言うと受け入れ先からたいそう驚かれたものだが、それはそれとしてウマ娘の働き手というのはありがたいものであるらしく、とりあえず歓迎をもって受け入れられた。

新聞配達じゃないのか……と当初は少し首を傾げたものの、新聞という媒体自体が最近はあまり読まれなくなっている。時代というやつなのかなあ——なんて、ぼくは中学生にあるまじきことを考えてしまった。こんなだから副会長にこいつ本当に12歳かという目で見られるというのに。いや、まあ実情はアレだけど。

業務についてはそれほど難しいものではなかった。ぼくは運搬を得意とするロバ娘である。

正確にはその仲間のシマウマだけど。

実際には背中が弱いので重い荷物が運搬できないのがシマウマだそうだけど。

……どつちにしても幸い、パワーはあるし、考える頭もある。走る練習ついでにと思えばこれも有益だ。少量ずつしか運べないとしても、スタミナはあるので往復すればどうとでもなる。これもスタミナのトレーニングだ。

で、それやこれやとあつてチームに所属してから最初の一ヶ月が過ぎた。

一週間が経つ頃まではトレーニングを終えたら立ち上がれないほどに消耗していたが、三週間目に入る頃にはだいぶ慣れてきて、走行技術のトレーニングにも入れるようになった。

改めてちゃんとした指導のもとフォームチェックなどをしてみるとこれがまあズタズタというかボロボロで、独学というのがいかに難しいかということを感じ知らされたものだった。

……専門家を招いたりしてスポーツ医学にも精通してららしいマックイーンはともかく、テイオーって家が裕福らしいけど実質的にはこれまで独学だよ。それであの走りだ。天才はいる以下略。

——さて。それやこれやあって6月はじめ。チームベテルギウスはリムジン先輩が参加する安田記念の日を迎えることとなった。

梅雨時に特有の曇天ではあるものの、バ場状態の発表は「良」。じつとり蒸すためあまり良い気候とは言えないが、走りやすくはあるだろう。

……ぼくを含め、チームメンバーの数人や会場にやってきている人の多くはうちわでばたばた体を扇いでるけど。

「帰ってテレビで見るんじゃないやダメなのかよ」

体が小さいせいとか、やや体温高めのドーナッツ先輩がそんなことをぼやいた。それに対して明確に「No」を突きつけるのは、データ主義のシャカール先輩たちだ。

「肌で感じられる湿度や温度、空気つてのは現場にいないと分からねエだろ」

「熱狂というものもね。観客の声援というものがリムジン君にどういった効果を与えるのか、それとも与えないのか、はたまた彼女はそういったケースに該当しないのか。会場に来るだけで無数のデータが得られるんだよ。部屋に籠もる理由がないね」

「へーへー……お前らも汗ダラツダラじゃねーか」

「それは仕方ないだろう」

来たいから来た。とは言っても気温に対処できるわけでもない。現実の辛さである。

「ストライプも汗すべーいけどあっちって気温高いんじゃないの？ 赤道近いし」

「ケニアって標高が高いので30度超えることも少ないですよ……」

むしろ気候は温暖というか、常に20度前後で安定している。雨季乾季があるので、そっちの方向ではかなりムラがあるけど。

魂が日本人のそれとはいえ、肉体がアジャストしきれていないので

キツイのは割とキツイというのが正直なところ。

……そして、そう言うスカイ先輩は、やっぱり溶けていた。

ドーナッツ先輩よりひどい。猫舌だということは知っているけど暑さにも弱いのか……。

「スカイ先輩も辛そうですね」

「いやあ、こっちの方がもっと辛そうかなあ……」

「アバツ……アババ……」

「Oh……」

ロシア出身のスナイパーIIサンは完全に爆発四散寸前であった。

比較的涼しい6月はじめでコレだ。7月、8月になるといったいどうなってしまうのだろうか……。

幸い、規模の大きなG1とそのためのステップアップレースは9月以降に集中している。まあ、なんとか、なる……といいなあ……。

「ここにいたか」

「あ、トレーナーさん」

いつそアイスでも買いに行こうか……と思ってきたところで、リムジン先輩の激励に行っていたトレーナーさんたちが戻ってきた。それに同行していたサブトレさんとフラツシユ先輩の手には、ジュースやアイスが入っているらしいビニール袋が握られていた。

なんとというかベストタイムだ。もうだいぶ耐えられなくなっていたぼくたちはずるとビニール袋に引き寄せられていった。

「タキオンさん、デジタルさんはどちらへ？」

「デジタル君は最高の撮影スポットを探しに行ったよ」

止める間も無かったとはこのことだ。デジタル先輩はパドックでのウマ娘紹介とレース、そのどちらもを最適、最高のアングルで撮れるスポットを探しにいつの間にか消えていた。

彼女の撮るレースの動画は、テレビでは分からない微妙なアングルを重点的に撮っていることが多く、後で反省会をするのに非常に役立つのだとか。

マナー上、三脚は使用しない。デジたんハンドは固定力。デジたんレッグは安定感。彼女はオタクの名にかけて一切の手抜きを自分に

許さない。

ほどなくして、皆がアイスをしやくしやく食べ始めたあたりで、パドックで出走ウマ娘の紹介が始まった。

『1枠1番、ヴィクトリア。5番人気です』

例の実況の人アプリの男性実況及びJAPAN WORLD CUP実況のお方。じゃん!!

ちよつとした驚きだった。ぼくらが出走するとあの人が実況になるのだろうか。いや、まさかそんな因果律が固定されるみたいな……。

……これ以上これについて考えるのはよそう。別の機会だと女性実況だったり解説が細江さんだったりするかもしれないし。

ともあれだ。

リムジン先輩は5枠10番。それまでに紹介されたウマ娘は、いずれも錚々たる顔ぶれで、仕上がりも素晴らしい。さすがは上半期のマイル王を決定するG1レース、実力者ばかりだ。

やがてリムジン先輩の番になる頃、パドックの裏から一度ゴツンという鈍い音と小さな悲鳴が上がった。

あんまり想定されてないもんね、その大きさ……。

『5枠10番、ハリウッドリムジン。1番人気です』

それからすぐにリムジン先輩がパドックに上がつてくると、まず一度どよめきが起こった。

でええ。でええ。そんな声が客席から響いてくる。そりやでええでしょ。

2 m近くある上に、ウマ耳もあるから更に大きく見える。内心で同意していると、続いてリムジン先輩は羽織っていた上着を思い切り放り投げた!

「うおおおおおっ!」

でええ! でええ! そんな声が客席から響いてくる。

そりやでええでしょ!

何とは言わない。

「毎日見てっけどあいつのプロポーションおかしいな」

遠い目をしながらドーナッツ先輩がそんなことをぽつりと呟いた。直接的な表現避けましょうよとも思うけど、そうだねとも思う。

一見細いんだけど、出るところは出ててなんというかモデル体型通り越して女優体型っていうか……名前負けしない、まさにハリウッド！　って感じた。

勝負服はやはりハリウッド女優めいたパーティドレス風。色合いは、青をメインに外に行くごとに赤のグラデーションがかかっている。星を思わせるクリスタルの刺繍が眩しく、ゴージャスな雰囲気を漂わせている。普段の大人しげな印象とはまるで別物だ。

しばらくすると、リムジン先輩は恥ずかしげにはにかんで脱ぎ捨てた上着を取って外に駆けていった。

……いつも思うけど、あれ脱ぎ捨てる必要あるのかな？

疑問に思いつつも紹介は続く。と――。

『7枠15番ヒシアケボノ。3番人気です』

「「おおお……！」」

再び会場にどよめきが上がった。先程のリムジン先輩とはまた違ってたかいウマ娘が現れたのだ。

ヒシアケボノ先輩。リムジン先輩のそれとは異なり、彼女はややがっしりしたスプリンター向きの体格をしている。

でかい。こちらもやはりでかい。迫力がある。どことは言わないが。身長差と体格差を考えると、両者の重量はおおむねどっこいどっこいと言ったところだろうか。

「大相撲東京場所開幕ってなもんだな」

「何失礼なこと言ってるんですドーナッツ先輩」

「いやこれはボノの奴が実際に言ってたことで……」

言ってたんかい。

U m a t t e rを見せてもらおうと、確かにそのようなことを呟いているのが確認できた。

律儀にもリムジン先輩もそれに反応している。公認かよ。そういうえばヒシアケボノ先輩は相撲マニアだったっけ……。

パドックでの顔見せが終わると、参加者はレース場へ移動する。こ

ここで皆もゲート入りする……のだけど。

『春のマイル王決定戦、安田記念。天気はもちこたえ曇り。レース場は「良」の発表となりましたが……ヒシアケボノとハリウッドリムジン、ゲートに入りません』

『この二人の出走時の名物ですね』

「名物ってなんすか」

「ふたりとも、体でつかすぎてゲートに入るとすっごい窮屈になっちゃうんだよねえ」

「故に、タイミングを合わせてエントリ……できるだけゲートに入っている時間を短くする算段なのだ」

なるほど。他の出走ウマ娘が全員ゲートに入ってもらわないと、自分たちがずっと窮屈なゲートの中で精神すり減らすことになるのか。大きすぎても大変なんだなあ……。

しみじみそんなことを実感しているうちに、ふたりは窮屈そうにゲートに入ってしまった。

『さあ各ウマ娘ゲートに入りました』

そして準備が整い——スターターが手を挙げた。

『スタートを切りました！ さあまずはヒシアケボノが好スタートを切り先頭へ飛び出す！』

「逃げ!?!」

先行型のイメージがあっただけに驚きだ。たしか、スプリンターズステークスでは先行策で一着を取っているはず……。

「悪くない手ではある。データ上、ヒシアケボノは逃げでの勝率が高い」

「はい。ですがそれはG1レース以外での話です。それがどう影響してくるか……」

ヒシアケボノ先輩はパワーでグイグイ加速していくタイプのランナーだ。リムジン先輩もその点は似ているが、その力の出し方というものが双方でやや異なる。

リムジン先輩は重力や物理学的作用をしっかりと用いることで加速していくスタイルだ。筋肉はやや薄いため骨に掛かる負担は非常に

大きい、その分ダイレクトに力が地面に伝わりやすい。

対してヒシアケボノ先輩は、しっかり筋肉がついた体をしている。骨もやや太く、その上に筋肉が言わば「鎧」として固められているため、負担は全体に分散する。こちらは完全に素のフィジカルで生じるパワーを地面に叩きつけているような形だ。

安易に優劣はつけづらい。どちらも合う合わないがあるからだ。

レース展開はヒシアケボノ先輩が先頭に立ち終始リードする形で進む。周囲ににらみをきかせることでペースを作り、牽制する……逃げウマ娘として非常に「上手い」走り方だ。

そして――。

『大ケヤキを抜けて最終コーナーへ！ まだ後続は抑えているか！』

先頭は依然ヒシアケボノ！』

「……あれ!? リムジン先輩は!?!」

「よく見ろ、今『沈んだ』ぜ」

一瞬、そこでぼくはリムジン先輩の姿を見失った。しかしシャカール先輩に言われて、リムジン先輩が外に抜けていることが分かった。バ群の向こう側に回ったことと超前傾姿勢、それらが同時に作用したようだ。レースに集中しているヒシアケボノ先輩も、当然これを見失う。

残り2ハロン。そこでリムジン先輩の足元が弾けるように土を巻き上げた!

『――先頭ヒシアケボノ必死に引き離しにかかるが外からハリウッドリムジンが寄せてくる!』

「来た!」

「行けーっ!!」

ドーナッツ先輩の言っていた「爆発するような本気の走り」だ!

凄まじい末脚で一気にヒシアケボノ先輩に追いつがる!

「ううあああつ!!」

「やあああつ!!」

『伸びる! 伸びる! ボデイが伸びて見える! ヒシアケボノ苦しいか!? いやまだか!?』

ここで差し切る、と心に火を灯したリムジン先輩の体が更に沈み込む。

二段階加速だ！ 重力の力を更に受けたその体は、半バ身ほどヒシアケボノ先輩を離してゴール板へ――。

『ハリウッドドリムジン、ストレエッチ、アンド、ゴオオール!!』

僅かな、しかし確かな差。掲示板に灯るランプが示しているのは……10番。つまりはリムジン先輩の番号だ。

わっと一気に会場内に大歓声上がる。この瞬間、リムジン先輩が安田記念一着……春のマイル王に輝き、BCチャンピオンシップの挑戦権を手にしたのだった。

『これがアメリカのレース、これがハリウッド！』大立者一座の中で一番優れた俳優。「ハリウッドドリムジン、見事春のマイル王の座に輝きました!!』

素晴らしいレースに惜しめない拍手を皆で贈る。手を振ってウイングランをするリムジン先輩の顔は、いつになく晴れやかだった。……ところで実況の人、なんかやっぱりちよつと変なソウル注入されてない？

ぼく半月後の宝塚記念とかドーナッツ先輩の出走がちよつと不安になってきたんだけど？

東京さこええだ

安田記念のウイニングライブは、3着に入ったウマ娘が170cm超えの長身だったこともあり、文字通りの超大型ウイニングライブと称されるほど大迫力のステージとなり、盛況のうちに幕を閉じた。

二段階加速という本気の走りを見せたリムジン先輩の脚は、やはりと言うかなんと言うか相当な負担を抱えていたようで、レースが終わった直後にもライブが終わった直後にも入念なケアを要した。

チームで一番神妙かつ真剣な表情を見せていたのは、意外なことに——ある意味では当然ではあることだが——タキオン先輩だ。

普段の実験の結果がダイレクトに出るのが、レース後のケアだ。そうした研究的な面も強く出てはいるが、それと併せて脚に不安を抱えている者同士、シンパシーを覚える部分もあるのだろう。その光景を目にしたデジタル先輩は尊死とうじした。

アニメやアプリに親しんでいると麻痺しがちだが、G1レースでの勝利というのは相当な快挙だ。

翌日の練習の後は、チームでパーティを開き、ささやかながらリムジン先輩の勝利をお祝いした。皆からお祝いを受けて、レース場で見せたものとは違うはにかんだ笑顔を見たデジタル先輩は再び死んだ。苦しまなかったはずである。

さて。次はドーナッツ先輩の宝塚記念を控えた形になるが、その間の半月あまりはきちんとトレーニングをこなしさえすればほぼフリーだ。

……まあ、トレーニングそのものは濃密だし、門限もあるから完全にフリーとは言えないけど。

ともかく、自由時間である。

「ああれええ……」

そしてこの日の自由時間、ぼくは有無を言わさない勢いでマヤノたちに連行されていた。

場所は新宿副都心。前世今世合わせてまるで縁のなかったこの場

所だけど、こうして改めてやってくるとまた別の印象が湧いてくる。単純に人が多いというだけじゃない。流れが多いんだ。

あっちに行きたい人、こっちに行きたい人、いやでもやっぱり戻ろうかという人。複数の流れが寄り集まって人の川、人の海を形成している。

すごいのはマヤノだ。いくつもの流れを縫うように、時には流れに乗るようにしてスイスイと道を行く。魔の迷宮新宿駅すらマヤノにとってはそう大層なものではないらしい。

それについていくテイオーは華麗なステップで人波を回避している。ぼくは流さず流されていきそうなのを引っ張り上げられてギリギリというところだ。

東京さこええだ。

「もう、ストライプはぼーっとしすぎだよ！」

「ぼーっとしてるつもりじゃないんだけど……」

都会の人ってこう、全体的に速くない？

動作が機敏というか、よその地域と比べてもなんだかせかせかして印象がある。

おかげでぼくのような田舎者は流されていくのである。こういう時はテイオーたちのように都会に慣れたひとの案内がありがたい。

ところで、何でこんな時期にわざわざ街に出てきているのか。その原因は少し前に遡る。

以前からマヤノたちから時折遊びのお誘いを受けていたぼくだけ、基本的にお金が無いためなかなかそれに参加できずにいた。

しかしながら、アルバイトができるようになってお給料が入ったことで、そのあたりの制約もだいぶ緩んだ。

のだが。

「トラちゃん……ずーっと制服のままはマヤノどうかと思う……」

なんということでしょう。ぼくは「着ていく服が無い」という問題に直面することになったのだった。

これまで、ぼくの生活圏は基本的に学園の中とバイト先だけで完結していた。バイト先でも制服かジャージで良かったのであまり気に

もとめてなかったけど、ぼくは今私服をほとんど持っていない。
なんなら服を買いに行くための服が無い。

このままでは常時学園の指定ジャージでうろつくソダサ不審口
バ娘が各地で観測されかねない。そんなわけで服を買いに来たとい
うことだ。

ちなみにぼくにファッションセンスは無い。シマウマだからね関
係無い。致し方ないねそんなわけは無い。センスが育まれなかつ
た環境もある生来センスが無い。

そんなわけで今のぼくの格好は着古した黒の無地Tシャツと
ジャージのショートパンツだ。服を選ぶ選ばない以前の問題である。
民族衣装とか無いの？ と聞かれたけど、ケニアとはいえ現代の普
通の農村にそういうものはあまり無い。

やがて目的地のビルがようやく目に入ってくる。あれは……。

「う………うおいうおいUOUIUOI」

「ウマールイUOUIUOIだよストライプ」

読めるか……ッ！ こんなもん……ッ!!

どうしろって言うんだという内心の投げやりな気持ちを抑えなが
ら店内に入ると、外の熱気とはうってかわって冷涼な空気がぼくらを
迎えた。

けど一方で、人口密度の高い場所特有の湿った温度のせいで、じ
わっと少し汗がにじむを感じる。思い出した、ショツピングモー
ルってこんな感じだった。

「とーちゃーく！ さつ、トラちゃん。マヤがかわいい服コーデイ
ネートしてあげる！」

「ぼくの意味は………？」

「トラちゃんが選んだら同じようなシャツだけ買って終わっちゃうで
しょ？ マヤそういうのわかっちゃう」

「うん、正直、それはボクも分かるよ」

わかっちゃったかあ。

その通りなんだよなあ。

何も言い返せないんだよなあ。

「テイオーもマヤノに選んでもらう？」

「えっ何でボクに振るの？」

「うん……」

ぼくは改めてテイオーの服装を見た。

オフシヨルダーの黄色い短めの服に、デニム生地ホットパンツ。露出した赤い二本の肩紐を見ると、なんとというかイケナイものを見てしまったような気分させられる。

あえてひとことで表現するなら……そう。ダンス教室に通ってるすごく無防備な小学生って感じた。アプリで見た私服っぽい。

「わかるよトラちゃん。テイオーちゃん、もうちよつと大人っぽい服も似合いそうだもんね！」

「え、あ、うん、そういうこと」

「ええくそう？ まあ、無敵のテイオー様だからねっ」

それでいいのかテイオー。

ぼくも大概詭弁を弄してる自覚はあるけどそれでいいのかテイオー。

あとマヤノはフォローありがとう。

それから、まずは売り場へ向かうことになった。目的の店舗には既に目星をつけているようで、マヤノの足取りは軽快だ。

それほど時間はかからず店舗に到着するが、まずそこで目にしたのは——服のお値段だった。

「さ……さんまんえん……」

「あつ、その服もカワイイよね」

……女性がファッションにお金かけるのは知ってるんだよ。人による部分こそあるけど。けど三万円。三万円!?

布だぜ!?

「これ買うの？ マヤノ」

「流石に0がひとつ多いよテイオーちゃん……ちよつと欲しいけど……」

「欲しいのは欲しいんだね……」

「もちろん！ 大人のオンナって感じのお洋服だもん！」

マヤノはきやーつ、と小さく声を上げた。

流石にこれは無理なのか。安心した。あれ。いや、でも……どつちにしたって四、五千円は必要になるのかな？

「マヤノー」

「うん？ 何トラちゃん」

「お手柔らかにお願いします……」

「何が？」

どうか加減をしてほしい。ぼくは守銭奴——と言うには若干遠いかもしれないけど——なのでお金が手元から無くなることに耐えられないのだ。

ちよつとばかり今後の展開を危ぶみながらしばらく待っていると、持ってきてくれたのはまあまあ割とどこにでもあるタイプの白いパーカーだった。

「あれ、普通」

「何選ぶと思ってたの？」

「もつとフリフリの」

「ちつちつち。トラちゃんみたいな子にそういうの選んだら嫌がられるって、マヤ分かってるんだから！ だからまずはこういうの」

なるほどわかってるムーブだ。確かにこれなら、「普通」の範疇だし抵抗感も薄い。おしやれと言うには遠いかもしれないけど、普段遣いする分には特に問題ない。

「ここからどんどんオシヤレ覚えていってもらえばいいしね」

「前向きに善処させていただきます」

「それ絶対やらないやつじゃん」

「前向きに善処させていただいております」

「ストライプってどこからそういう日本語覚えてくるの？」

善処は……善処はしてるから……。

元々がそんな女性としてのオシヤレとか縁が無かったし、中身の基準が基準なのでどうにもそこは……ね。

いや正直、美少女になったわけだし多少はそういうのも興味持とうかなーと思いはするよ。

ただ、センスが足りないし肌の色や髪の色なんかの違いもあるから、ファッション誌見て真似しようとか店頭に置いてあるマネキンのコーディネートそのままくださいって言うわけにもいかないんだよね、真面目な話。いざ着てみたら似合わないとかあったりするし。

だからセンスが養われるまで待ってほしいんだ。いつになるかわからないけど。

……その後、ぼくの外行きのための服を追加で何着か購入してこの場で着替えたり、テイオーの服もついでに購入したりして店を後にした。

で、あれやこれやとウィンドウショッピングをしたのだが、マヤノとテイオーの喋ること喋ること。

テイオーはファッションそのものにはあまり興味は無くとも、ビル内にあるスポーツ用品店などへ行くときまあテンションが上がる上がる。普段のテンションがそこまで高くないぼくはそれについていくのに少しだけ苦労した。

しばらくそうしていると喋り疲れたので、これまたビル内にあるカフェに行くことにした。

「キャラメルマキアートのハチミツ硬め・濃いめ・多めで！ マヤノは？」

「コーヒーテイラミスのフラッペ！ トラちゃんはどするの？」

「一番安いやつ、ミルクアリアリで」

「トラちゃん……」

こういう時くらい贅沢しようよという声が聞こえてきそうだけど、ぼくは目を逸らして耳をペタリと寝かせた。

ぼくにとってはこういうカフェにやってくることで自体がかなりの贅沢なのである。

注文した商品を受け取って向かい合わせに座る。ぼくはその中で、それとなく軽い脳トレを始めた。マルチタスクの訓練だ。

初歩も初歩、例えば片足は特定の動きを取りながら、もう片足は別の動きをするとか、その程度のものだ。これらをコーヒーを飲みながら、あるいは会話をしながら行い続ける。

しばらくするとテイオーもそうしていることに気付いたのか、首を傾げてこちらに水を向けた。

「さつきから何してるの?」

「軽いトレーニングだよ。こうやって別々の動作ができるようになる」と、全力で走りながら作戦も組み立てられるようになるかもって」

「へえー……えっ、あれよりもっど?」

「もっともっど」

「うへえ……またああいう走りするの?」

「ううん、その時々によつて変えるよ。だって、一度やったことはもう対策は練るでしょ?」

「そうだねー、一度やられるともう全部わかつちやうもん。次やる時はあんなに飛ばさないようにしなきゃ」

「ふっふっふ。それを逆用するのだよマヤノ君」

「あつ、そっか。じゃあ今のなし、なーし!」

無しと言われても困る。どっちにしろやるだけだし。

逆用、というか正確に言うともうちよつと複雑だ。こういう作戦があると相手に知られることでその事実自体を利用することがメインとなる。

こういう作戦を使ってくるかもしれない、いやでも手の内がバレている以上使わないかもしれない。しかし、はたまた、いや、でも。そういう心の隙間を突いていくわけだ。

「次はテイオーにも勝っちゃうかも」

「ふふーん、それはどうかな? なにせワガハイは無敵のテイオー様であるからして、もうストライプくんの弱点は見抜いておるのであつたりするのである」

「言葉が迂遠すぎる」

「弱点つてなに? テイオーちゃん」

「ズバリ、『自分の走りを貫かれる』こと!」

なるほどそのものズバリである。事実、それをされたからあの時はテイオーに負けたようなものだったのだし。

「さー、それはどうかなあ」

「あつ、凶星っぽい」

「凶星だ」

「へっへっへ」

なのでここでぼくはあえて言葉を濁した。

凶星っぽい。そう、それはそのとおり。凶星だ。

けどその事実も含め布石だ。ぼくとしてはどちらでも構わない。

自信ありげに笑うテイオーに、ぼくは続けて告げた。

「それでも次は負けないよ」

「ボクだつて」

「マヤもね」

ふっふっふ。はっはっは。ぼくらはそんな不敵な笑いを浮かべあつた。

その後店員さんに不気味さとうるささの相乗効果で注意されたのはまた別の話。

スリップストリーム

6月下旬、阪神レース場。この年の上半期における最強決定戦とも言える宝塚記念の日とあって、会場は大入りの満員だった。

流石は世界的に見ても高いグレードを誇るレース。大勢のファンによる投票の結果選出されることも相まって、注目しているファンはそれだけ多くなる。

『——本日の2番人気、4番、ピーピードーナッツ。ファン投票は堂々の3位、客席から罵声が飛んでいます』

「なして？」

「恒例行事だ」

「なして？」

ぼくわかんない。

何で急にこのタイミングで民度が世紀末に？

「ありやそういう歓声なんだよ」

「ちよつと仰る意味がわかんないです」

「ピールレスラーに対するアレだ」

「何となく分かりました」

つまりそういう演出と。

ドーナッツ先輩の勝負服は、いわゆるテンプレート的な海賊の服を少し改造したような格好だ。花浅葱をメインカラーに据えており、色合いはなかなか派手だった。

眼帯は着けていない。本人に聞くと、「いや視界狭めるとかアホだろ」とツッコまれた。仰る通りである。

ドーナッツ先輩の性格は、今日まで接して分かる通りかなり荒い。言動もそうだし、態度もそんなだ。身内には甘いけど、外部のひとに対しては犬歯を剥き出しにして威嚇することがまます。敵を作りやすいひとと言えはいいのだろうか。

そんななので、これまでのレースでもその前後の記者会見やパドックでも、気の強さを存分に発揮してきたのだろう。で、「海賊」だから

ヤジを受けたりするところまで含めて恒例の流れになって、今まで継続しているところだろうか。それはそれとして「親分」などのやけに野太い歓声もあるし、ファン人気投票トップ3に入っているという時点で確実に人気はあるのだけど。

「それでもあんなになりますか？」

「ドーナツツさんは『海賊』という異名を持っています。外見に由来するものもそうなのですが、それ以上に……レース記録を阻んでいることが大きいですね」

「記録っていうと、連覇とか三冠とか……ですか？」

「はい。二冠を達成したニユーコスモスさん変名ウマ娘。本編には登場しない。を菊花賞で差し切って一着。それから目黒記念連覇を狙っていたアドリアシングさん変名ウマ娘。本編には登場しない。を差し切ってこれも一着……後者が特に、アドリア海が有名です。余計にそちらになぞらえて……」

フラツシユ先輩のおかげで更によく分かった。それは確かに海賊だし、悪役^{ヒール}だ。

本人がそれを望んでやっているらしいのが幸いなところだろうか。客席から見ると、観客や他のウマ娘も、マイクパフォーマンスに対してノリノリで応対している。

「ところでスカイさんとスナイパーさんは大丈夫ですか？」

「死んでます」

「Oh……」

時期は6月下旬。気温は安田記念の時よりも更に高い。更に天候は晴れ。レース場の状態の発表は「良」。走るには最適の状態だが同時にそれ以上に死ぬ^{ファック}ほど暑い^{キン}。暑い^{ホット}。

かく言うぼくも、会話に参加はできているが別に無事というわけではない。さつきから垂れ流しになつて汗を拭き続けているタオルが、そろそろ絞れそうなくらいに汗を吸っている。

時期柄、冷房の出力が弱められているのもあるし、高い湿度のせいであんなにか空気がまとわりつくよう余計に暑いというのもある。

日本人だった頃のぼくはどう対処してたっけ？　と思いつ返すけど、エアコンでガンガンに冷やしてただけなのを思い出して考えるのをやめた。付け焼刃で対策を練ったところで自然には勝てないものだ。ぼくの雨ごいも成功率は5割を切る。

「んぐ」

買ってきた水をあおる。

が、もうだいたいぶぬるくなっていたそれでは体温は下がらない。むしろ水分を摂ったことでより汗が噴き出してくる。

……もつともコレ、汗が出なくなる方が更にヤバいんだけど。そこまで行ったら脱水症状が行きつくところまで行ってしまっているということだ。命の危険がある。

『各ウマ娘、ゲートイン完了』

「あ」

ようやくスタートだ。

と——ゲートが開くまでの数秒、未だ喧騒にあふれているはずのレース場に、一瞬ひやりとした空気が差すのを感じた。

ドーナッツ先輩の方に目を向ける。と、その笑みはいつも浮かべているイタズラっぽいものとは打って変わって、獰猛なものに転じていた。

そして、わずかな間隙の直後……。

『さあ、ゲートが開いた！』

弾けるように、全てのウマ娘がゲートから飛び出した。

先頭集団として飛び出した数名のウマ娘に続くように、ドーナッツ先輩は中団に位置してレース展開を窺うかたちだ。戦法としては、ぼくやリムジン先輩と同じく差し……なのだけど、少し不安要素がある。

(……そもそも、ドーナッツ先輩はそこまでのパワーがあるのかな？) ドーナッツ先輩の体はすこぶる小さい。不安になるくらいちっさい。ぼくから見てなお小さいと感じるくらいなのだから相当だ。

鍛えてないわけじゃないとはいえ、そうなると筋肉の絶対量というのはどうしたって限られてくる。必然的にパワーは落ちるし、加速力

もそれに従ってまた、落ちる。

ではどうやって集団から抜け出すのか……そう疑問を呈したところで、ようやくドーナッツ先輩の走り方を目にする事ができた。

『4番ピーピードーナッツ、中団を軽快に進む。目の前に9番を置いた位置』

(……なるほど)

スリップストリーム走法。競争相手の背後に位置取ること、風の抵抗を最小限に抑え、速度を維持しながら体力の消耗を減らす技術だ。

……言ってはなんだけど、少し面食らった。一体どんなトンデモ走法なんだ……!? と内心戦々恐々としていたから肩透かしを食らったというのが大きいけど、スリップストリームを利用することは程度の差こそあれ誰でも——よっぽど逃げに特化したひとは除く——やっていることだからだ。

リムジン先輩のように体格的にちよつとそれが難しいひとはともかくとして、意識しないということはまあ、まず無い。

(大勢ランナーがいる状況じゃないと見せられない走法って言うってたけど……)

つまり、多分まだ何かがある。

半ば確信めいた予感を覚えながらレースを見てみると、中盤、ドーナッツ先輩の前を走っていたウマ娘が中団から逸れ始める。仕掛ける前の溜めなのか、失速か、それともそういう作戦か……いずれにしてもこれでは引っ張られてズルズルと後退しかねない。

「……！」

そう考えてハラハラしていたところで、ドーナッツ先輩は素早い身のこなしでそれを躲し、別のウマ娘の背後につけた。

危ないタイミングだった……もう一瞬でも遅かったら、他の走者の後ろにつくにしても、中団からは外れてしまうところだった。

「……シャカール先輩、あれ結構際どかったですよね？」

しかしシャカール先輩たちは、今の一瞬の攻防に対してさして感情を出すような姿を見せない。

安心もしてないし、かと言って興奮もしてない。まだ気が抜けないとか、そういう風でもない。あれ？

「あいつに『際どい』はねーよ」

「え？」

「それも含めて狙いの内だ。そろそろ仕掛けるから見とけ」

『第3コーナー！——ここでピーピードーナッツ前に入る！』

「！」

あれは!?

……前に出ると言っではいるけどまた別の走者の後ろについた!?

「仕掛けてます!？」

「アレがアイツの仕掛けだ」

「ええ!？」

どういうこと!?

その時、混乱と共に過去の記憶が湧き上がる。第二回JWCの映像……ピーピードーナッツとカルキンJrの勝利シーンだ。

あつ、とその理由に行き着くと同時、ドーナッツ先輩は更に前を走っているウマ娘の背後についた。

『10番の後ろ海賊ピーピードーナッツ！ 取舵一杯!』

そして次、ドーナッツ先輩はそこで加速した。前に行くウマ娘の背後につき、そこからスパンと抜いて更に前へ！

まさかドーナッツ先輩、これ……スリップストリームを常に維持したまま走ってる？ それってつまるところ、今走ってる全てのウマ娘の走行フォームに合わせて後ろを走っていける、息を合わせられるってことになる……よね。

だから「大勢いるところじゃないと強みが分からない」ってことなのか……！

チーム内の併走だとしても少人数でしか走れないし、走る相手もおおむね決まった組み合わせになる。息を合わせるにしたって、いつも一緒に練習してるんだからお互いの息の入れ方も強み弱みもだいたい理解してるわけで、息を合わせてスリップストリーム走法に入ることができるのは当たり前のこと。外部のレース……今回みたい

なフルゲートのレースになってようやくその異常性が見えてくる。

『最終直線に入った！ 先頭は依然9番粘っている粘っている！ 逃げ切るか！ 後ろからピーピードーナッツ迫る！ 撃ち方用才意！』
……それはそれとして実況の人ちよつとテンションおかしくなつてんな？

「っあああああ!!」

「ツラアアアアアツ!!」

ラスト1ハロン。ドーナッツ先輩がここまで温存してきた体力全てを振り絞り、先頭に躍り出る！

しかし、相手もさるもの。宝塚記念に出走するほどの実力をフルに発揮した彼女は、ドーナッツ先輩を差し返すべく再加速した！

もはやこうなつてくると気迫と気迫のぶつかり合いだ。犬歯を剥き出しに、見栄も外間もなくただ全力で駆け抜ける。

『二人もつれるようにゴールインツ!! 一着は——ハナ差！
ピーピードーナッツ!!』

——わっ、と花開くように……いや、と言うよりはむしろ、大砲がドカンドカンと撃ち放たれるように、歓声が弾けた。

『阪神レース場の「宝」を手に！ キャプテン・ドーナッツ、祝杯を上げる！ 2着は9番、3着は11番——』

これで、ドーナッツ先輩も海外G1、コックスプレートの挑戦権を得たわけだ。

リムジン先輩が勝つのを見届けた時のような緊張感が背に走った。

……日々弛まぬ努力を続けるのは当然のこと。その上で、あれだけの特別な走りを見せることでようやく勝てるものなのか、G1という舞台は。

改めて、少し怖くなった。と同時に、心の奥底から少なからず闘志が湧いてくるのを感じる。

これが、武者震いというやつだろうか。少しだけ奇妙な感覚を抱きながら、ぼくはウイニングライブを待ったために絶賛ダウン中の二人を引っ張ってクレーラーの効いた室内の方へと向かっていった。

アイスいかがですか

夏。トレセン学園の生徒の多くは、ここで学習カリキュラムが一段落を迎え夏休みに入る。

夏休み、とひと口に言ってはみるが、どちらかと言うとトレーニングに集中する期間というのが認識としては正確だろうか。授業がないだけで、トレーニングはむしろ夏休み期間の方が激しいだろう。夏休みに入るに伴って、ほとんどの生徒は学園主催の夏合宿に参加することになる。

……ここしばらくの間には、いろいろなことがあった。

ウオツカとスカーレットが何やらやけにナウいポスターに惹かれて「あの」チームに加入したり、ターボが赤点を取ってしまったのでなんとかしてネイチャと一緒に要点を叩き込んで、追試に合格させることに成功したり……ともかく、うちのクラスはちゃんと無事夏合宿の参加に成功したわけだ。

照りつける太陽。繊細で綺麗な砂浜に透き通った海。見事な合宿所と言う他無い。専属トレーナーがついているひとはマンツーマンでひたすらトレーニングに励み、チームに入っているひとはチーム内での指示に従う。そうじゃないひとは生徒会主催の強化メニューをこなしたり、教官の指導の下トレーニングを行っていた。

そんな中ぼくはと言うと。

「安いよーアイス一本50円、ニンジン入りで80円だよー」

「トレーニングするんじゃないやありませんの!？」

——アイスを売ることにした。

ミルクのアイスキャンディとヨーグルトのアイスキャンディ、各50円。ニンジン入りで+30円。バイト先のツテで仕入れたものなので質は悪くない。

ぼくはクーラーボックスを抱えながら指を二本立てた。

「トレーニングはする。商売もする。両立はそう難しいことじゃないんだよ」

そう、ベテルギウスならね。なんつって。

実際のところ、この辺りチームベテルギウスはかなり自由がきく方だ。厳格な管理のもとでトレーニングを行っているためやる事がそう大きく変わるわけでもないし、普段学園の授業の方に割いている午前中の時間を使えるので、合宿に来たのに時間が余るといふ逆転現象が起きる。

もつとも、浮いた時間は完全にフリーかと言うとそうではない。筋肉を無駄に痛めない方法はいくらでもある。例えばフォームチェックや、レース場の研究などはいくらでもできる。トレーニングメニューにも組み込まれている……のだけど、基本的にそうした研究は夕方以降、室内で行うことになっている。午前中にトレーニングをおよそ終えた今、自由時間であることには変わらない。

「両立できているなら私からとやかく言うこともございませんけれど……売れてますの？ それ」

「割と。マックイーンもどう？」

「いえ、今は遠慮しておきますわ。減量もありますもの」

「マックイーン普段からやってるでしょ減量。っていうか食事制限。夏なんだし倒れちゃうよ」

「だ、大丈夫ですわ。夏は夏のメニューに変えておりますもの」

「そう？」

そっかあ。

いやしかし、これが本当意外なことに売れ行きが良い。

海辺だとはいえ暑いことには変わりないし、いつまでも泳いではいられない。じゃあ海の家に行つて何か買うか……となつても、これがまた微妙に遠かったり生徒でこつた返したりしてちよつと不便だったりする。

そこでこう、横からスススツと近付いてささやくのだ。いいものありますよ、と。

ちよつとした営業努力である。

海の家でかき氷を買うよりもだいぶ安上がりだし、海ということなちよつと財布の紐と気が緩んじやつてる生徒たちは「そういうことな

ら」と買ってきてくれる。

あつちはアイスが安く買えてWin。ぼくはいい感じに商売ができてWin。商売の基本とは双方が得をしたと感ずることなのである。うはは。

「分かつたよ。明日明後日残つてるか分からないけど」

「え。なぜですの……？」

「オグリ先輩がいるからね」

「……あつ！」

トレセン学園、食のリーサルウエポンことオグリ先輩。

彼女の手……いや胃袋にかかれれば、この2ヶ月程のお給料で仕入れた程度の材料など即座に食べつくされてしまうだろう。

幸いなのは、普通に支払いはしてくれるだろうから確実に黒字にはなるだろうということか。食べ放題にしない限り、オグリ先輩は飲食店にとっては太客と言える。

問題があるとするなら、それ以降は食事の提供ができなくなることだろうか。長期的目線で見るとこれが案外痛く、「あそこはいつも売り切ればかりだから、今日も売り切れだろう」と思われて客を逃すことがありうる。

「本数が揃つてる今なら特別な商品も用意できるんだけどなあ」

「と、特別……それはいい……？」

「んん……や、でもマックイーン、さつき『今は遠慮しておく』って」
「無くなると聞いたならそうも言っていられせんわ！」

「あ、うん」

マックイーンのスィーツに対する執念はなんというか異次元である。オグリ先輩には流石に及ばないけど、たしかアプリだとアスファルトがミシミシ音を立てるくらい食べてたはずだ。

調整不足の原因になつたりはするけど、アスリートにとってそれだけ食べる能力があるというのは恵まれたことだ。なかなか量を食べられないというひとも少なくないし。

……いやステイヤーとしては良くないのか？

ぼくは背負っていたバックパックから紙のお皿とスプーン、コンパ

クトかき氷機、それからクーラーボックスからいくつかの容器を取り出した。

「400円です」

「ッ……!?!? ……か、カードで……」

「……お財布ある時でいいよ」

なんとということでしょう。マックイーンはお金を持ち歩いていなかったのです。

そうだね。ご令嬢だものね。カードだけで十分なんだろうね……。

「まあ簡単なものだけど」

まず棒を外してあるミルクのアイスクャンディをかき氷機にかけてふわふわの氷を作る。この上に紅茶シロップをかけて……更に酸味のきいたジャム状の冷凍イチゴを添えて。

「はい、ロイヤルミルクティー風かき氷」

「くうっ……!?!? こ、これは都内で買うと倍から三倍のお値段になるものでは……!?!?」

「そこまで質の良いものじゃないよー」

「ですが……いえ、アレコレ言う前にいただきますわ」
「どうぞ」

それから少しマックイーンが食べてる姿を見てたけど、なんだろう。こう……とにかく顔が良いご令嬢が美味しそうにお菓子食べるだけで絵になるなあとふと思った。

良い目の保養だった。

さて、マックイーンはそこからメジロ家の皆さんと合同練習に入ることになったので、ついでにいくつかアイス売ってぼくはまた別の場所に移動することにした。

移動先は、リギルが揃ってトレーニングをしている区画だ。生徒会メンバーが午前中、トレーナーがついていないウマ娘たちの指導のために奔走していたため、本格的なトレーニングが午後からになった形だ。見物している生徒は数多く、その中にはティオーの姿もあった。

「アイスいかがですか」

「何してるの!?!?」

「マックイーンにも同じこと言われたよ。アイス売ってるだけだ
ど」

「ば、バイト……?」

「残念ながら中学生がこういうバイトはできないよ。自営業だよ」

「そっちの方がよっぽどダメじゃない?」

「えへっ」

「えへっじゃなくて」

まあ困惑するよね普通。普段からそういうことしてるわけでもな
いんだし。

周りから受けた注文に従ってそれぞれにアイスを差し出してテイ
オーの隣に戻る。その視線の先にあるのは会長だ。

「はあ……カッコいいよねカイチョー。ボクもあんな風になれるか
なあ」

「んー」

「何身長測ってるのー!?!」

「まだまだかなあ」

会長の身長がたしか165cmでテイオーが150cm。15c
mほどの差がある。

ぼくはテイオーより更に低いんだけどね。

「まったくもう、そういう問題じゃないでしょ!」

「じゃあどういう問題だと思う? テイオーは」

「え? カイチョーみたく無敗の三冠ウマ娘になってー、『やあ、今日
も頑張つていこう』……みたいな言葉遣いで……」

「まだまだかなあ」

「ええー!?!」

そこは大した問題じゃあないと思う。

昔誰かが言ってたっけな、憧れはナントカカントカで理解してるわ
けじゃないとか……なんかちよっと違うな。まあいいや。

ともかく、今のテイオーは憧れの会長みたいになりたい、近づきた
いという気持ちが行先してて、そこから抜け出せていないわけだ。

「わけわかんないよストライプ!」

「ふおっふおっふお……よく考えることじゃよテイオー……憧れは憧れのままでいいのか……校則……じゃなくてえーつとスクールモットーだっけ……を思い出して考えるのじゃよ……」

「もうグダグダだよー」

ふふふ……ぼくも途中からよくわかんなくなってきた……。

と、不意に視線を感じた。どうやら会長からのもの……のようだ。なんだろう、と思いつつ視線を辿ると、ぼくとテイオーとの間を行ったり来たりしている。

(……そういうことかな?)

視線でそれに返すと、会長は目に見えるかどうかという程度に小さく頷いて応えた。

会長という立場上、言いたいことがあっても言えないこともあるだろう。テイオーに目をかけている会長だけど、目に見える形での鼻肩は憚られる。

応じるように、ぼくはテイオーに呼びかけた。

「ねえテイオー」

「何?」

「会長に勝ちたくない?」

「え、ええっ!?!」

『唯一抜きん出て並ぶ者無し』——それは中央に所属するウマ娘みんなに言えることでしょ? ぼくは会長にだって勝ちたいよ」

勝てるかどうかは別にして。

会長だって負ける時は負ける。七冠の皇帝でも、無敵ではない。

例えば菊花賞直後のジャパンカップで会長は体調を崩し3着に終わった。シニア級での秋天も2着だ。

策を弄し最大限の努力を積み上げ運に恵まれば……仮に一緒に走ることになったとしても、最初から負けるつもりで走るランナーなんていない。

「並ぶんじゃないかって追い越そうよ」

「ストライプ……」

一度テイオーは会長の方を見た。

そして一瞬困惑した表情を浮かべ、再度こちらを向く。

「……もしかしてさっきコレが言いたかったの!？」

「ふおっふおっふお……そうだね……」

あと正直ちよつと茶化した方が言いやすいかなって……。

時々無い？ こう、真面目なこと言いそうになるけどちよつと恥ず

かしくなって茶化そうとしたら、頭の中でこんがらがっちゃうの。

特に今はアイス売りのおふぎけモードだったから余計にさ……。

あ、ちよつと今更意識して恥ずかしくなってきた。

詐欺師かスパイの手口

夜。チームベテルギウス第二のトレーニングとも言える、チーム内ミーティングの時間が訪れる。

冷房の効いた薄暗い部屋の中、プロジェクターから映し出されるのはチーム、個人問わず集められた有力なウマ娘たちの練習風景だ。

「はうっ」

デジタル先輩は死んだ。

どうやら水着姿のトレーニング風景が相当キいたらしい。このひと基本的によそのチームの練習場所への出入りは遠慮させられてるからな……いきなりだと刺激が強かったのだろう。

と、ここでタキオン先輩が軽く手を挙げた。

「この映像を撮ってきたのはモルモット君かい？」

「いえ、ストライプです」

「ふうん？ よく撮れていると思うけどね、しかしリギルのようなチームは練習風景を外部のチームに撮影されるのを好まないはずだよ」

どうやったんだい？ という疑問と一緒に部屋の中のメンバーの視線がこちらに向かう。

ぼくはこの昼間ずっと抱えていたクーラーボックスを指差して答えた。

「アイス売りに来たって言ったらすんなり入れてくれました」

「詐欺師かスパイの手口じゃねエか」

「そこまで巧妙じゃないですよ。どっちも本心ですし」

「なおタチが悪いわ」

ぼくが今日、アイスを売って歩いていたのは、お金のためもあるけど偵察のためでもあった。

どっちがより比重が上か、ということもない。どっちも同じだけ重要だ。

ぼくはお金が欲しいと常日頃から……というほど頻度は高くない

けど、そこそこ事あるごとに公言している。そんなだから急に売りを始めても、奇異の視線で見られるがそこに異論を挟む人はそういない。

というわけで、ぼくは今日、アイスの販売と同時に無事に偵察を終えてきたのであった。

ふと見るとトレーナーさんは「こいつ野放しにしてて大丈夫か？」みたいなしかめっ面をしていた。大丈夫大丈夫。大・丈・夫が枕詞につくゲームの最速攻略本よりは大丈夫。

「……知つての通り、この冬からスカイとスナイパーがデビューすることになる。ストライプには同じ時期にジュニア級でデビューするウマ娘を主に偵察してきてもらった。今からどれだけ伸びていくかも含めて予測していくから、しつかり頭に入れておくように」

「ええ〜」

「ええーじゃない」

スカイ先輩はかなりの面倒くさがり……のように見えるひとだ。少なくともそういう資質があり、他人に見せている姿は実際にそうだったものではある。

けど、負けん気はもしかしたらチーム内でも1、2を争うほどかもしれない。今もこうやって文句言うようなポーズを取っておきながら、視線はスクリーンから離れていない。

「では、まずリギルから見てください」

サブトレさんはこんな時でもマイペースに司会進行をしている。なんだかんだ「見ない」なんてことはしないとみんなを信頼しているからか、あるいは話についてこないなら振り落とすというスパルタか……いずれにしても、すぐに皆スクリーンに向き直った。

まず最初に映し出されたのは三名。「女帝」エアグルーヴ副会長と、タイキシヤトル先輩、それと——サイレンススズカ先輩だ。

「今年クラシック級のサイレンススズカとタイキシヤトル、シニアのエアグルーヴ。いずれも重賞で当たる可能性があります」

「ん〜……スズカ、は……あいつ素質はスゲーんだけどなあ」

ドーナツツ先輩は行儀悪く机に足を載せ……ることができずに、椅

子の上で片膝を立てた状態で呟く。

メイクデビューで1着を取り鮮烈にデビューしたものの、弥生賞では……なんとというかちよつと、うん……トラブルが起きて8着。ダービートライアルのOP戦、プリンシパルステークスでは1着を取るものの、その後のダービーでは9着。「素質は感じられるがイマイチ勝ちきれない」という評価をされることが多いのが、今のサイレンススズカ先輩だ。この合宿中も彼女の走りはどこか窮屈そうで、見るからに精彩を欠いていた。

……いや、これはサイレンススズカというウマ娘の走りや、俯瞰的な視点から一度見たことがあるからこそ言えることか。知らなきや評価としてはドーナッツ先輩くらいのところは落ち着く。

良くも悪くもチームリギルは完璧な管理体制の下でトレーニングとレースを行うチームだ。スズカさんはちよつと……割と……結構……いやかなり？ ……だいぶ他人とズレたところがあるウマ娘だから、方針に順応できずスランプに陥っているのだろう。

「この中でチームに大きく関わってくる可能性があるのは、タイキ君かな？」

「ですネ。副会長さんは、シニア級なのでそろそろドリムトロフィーへの移籍を視野に入れてると思います」

「今年は秋のマイルチャンピオンシップに出場予定が無いが……となれば、来年以降、スナイパーと当たる可能性が高くなるな」

「シヨツギヨ・ムツジヨ……」

タイキシャトル先輩、この前のOP戦で2着になるまで全勝だけ。

そのOP戦も、1400mで短距離だったため微妙に距離が合わなかった、というのが敗因なので、マイル戦での負けはゼロ。ステイヤーであるスカイ先輩がマイル戦に出る可能性は低いので、必然的に当たるとすればリムジン先輩かスナイパー先輩ということになる。リムジン先輩はBCシリーズの挑戦が控えているため、冬はアメリカで調整する手はなくなっているから今年当たることはまず無い。つまりスナイパー先輩は犠牲になるのだ。

「続いては……グラスワンダーですね」

「グラスちゃんかあ」

「グラスか……」

スカイ先輩が少し頭を上げ、スナイパーⅡサンが苦い顔になった。同級生だから実力はよく知ってるよ、と言いたいのだろうか。スナイパーⅡサンは……。

「グラス先輩と仲良くないんですか？」

「んーん。スナイパーのはちよつと一方的な苦手意識」

「グラスがワタシNINJAの忍者観NINJAに何か言つてこないかとヒヤヒヤしている……コワイ……」

グラス先輩は大の日本通だ。その気合の入り方はもう筋金入りと言つても過言でなく、エルコンドルパサー先輩が納豆にデスソースをかけているのを見て「伝統に唾吐く行為は許せません」と豪語するほどだ。だったらスナイパーⅡサンも……と考えるのは自然だけど、だが少し待つてほしい。

確かに忍者という観点からするとスナイパーⅡサンのはちよつと勘違いしているかと思われるだろうが、彼女のこれは忍者と言うよりニンジャだし、ニンジャ殺すべしな方の模倣だ。

日本文化に対してじゃなくて、いわゆるMANGA文化に対するフォロワーなので、きちんと元ネタがあると判別できる分にはとやかく言わないのではなからうか。

「グラスワンダーはここまで模擬レースや選抜レースで結果を残してきている。反応と瞬発力が優れているようだな。合宿明けすぐにもデビューできるほど仕上げているようだ」

「狙いを定めるなら朝日杯かホープフルステークスが定石ですね」

「ぬう……」

スナイパーⅡサンがメンポの上からでも分かるほど顔をしかめた。そんなに嫌かグラス先輩と競るの。

……いや冷静に考えたらあんまり走りたくないな。レースの時のグラス先輩怖すぎるもの。雰囲気もだし迫力もだし、単純にスペック面で見てもそうだし。大和撫子っていうか薩摩隼人だよあのひと。

こうして考えるとスナイパーⅡサンの苦手なひとつで身内が多いんだな。同じチームのドーナツツ先輩に、同じクラスのグラス先輩もそうだし……。

……ともかく、そのまま映像は進んでいく。

次は会長たち……には行かずに、そのままエルコンドルパサー先輩やキングヘイロー先輩のトレーニング風景になった。

会長は既に散々ドリームトロフィーのレースで走っているから、合宿中の映像を見るより実際のレースの映像を見た方が早いと思ったんだろう。ぼくもそう思う。どこまで行ってもぼくの撮影技術は素人だもの。

「あれ？ ウララも撮ってたんだ」

「え、あ、はい」

どちらかと言うと映り込んでるの方が正確だろうか。

度々キング先輩のところに来るので結果的に一緒に撮れている……というか。

「情報はどれほどあっても充分ということはない。この子は見たところダートが得意なようだな？」

「あはは……ダートが得意っていうか……なんて言うのかな、ウララの場合」

「実情……ダートも、得意かと言うと別問題だと思われる……シヨツギョ・ムツジョ」

そうなんだよなあ……ウララ先輩が得意だと言うのは、「比較的」であって、本来ダートも得意かと言うと微妙なところだ。

モデルとなったハルウララはダートでしか走ったことがない……が、ここで問題になるのはそのダートでの勝ちも無いというところだ。

ダートが得意というのはゲーム的な都合の部分が大きいし、芝は……地方所属だったため、そもそもレースで走ったことが無いから分からない。単純に得意苦手でくれないんだよね。

もつとも、それは言わば「原型」の話なので今は一概にどうとは語りづらい。

「今はまだ本格化していないだけで、そういうウマ娘が突然伸びてくることはあります。ダートで走ることもありうるリムジンやデジタル、ストライプと競うこともあるでしょう。充分に注意してください」

「ハイ」

「わかりました」

そこなんだよなあ。ダートに限定しなくとも、突然何やらどこかで覚醒して伝説のスーパードウマ娘になる可能性も無くはない。

先程映像に出たスズカ先輩なんかはその代表例だ。大逃げに目覚めたら、それこそ並のウマ娘じゃ手がつけられないことになる。

……ぼくもどこかで突然覚醒したりしないかなあ。

無理か。

そういうのは日々の地道な努力の積み重ねあつてこそだろうしね。

せめて派手に散ってくれるわ

照りつける太陽。雲ひとつ無い空。澄み渡る海。そして灼熱の砂浜。今日も今日とて合宿日和である。

トレセン学園の合宿所は、全校生徒のほとんどを受け入れなければならぬという性質上、相応に広大な敷地面積を誇る。

主な練習場所として設定されているのはよく整備された砂浜だ。しかし、まあ、なんとというか。夏、しかも合宿中という状況なので、ひとによっては開放的な気分になったり、高揚して他のウマ娘に模擬レースでの勝負を持ちかけるケースが相当増える。

合宿中にどれだけ成長したかも知りたいし、成果を表現する場が欲しい。……しかし、砂浜だけでレースをしようとすると周りのひとの迷惑にもなる。

そういう時のために用いられるのが、砂浜の一角に設けられた簡易的なコースだ。性質上ダートコースしか無いが、普段見られない組み合わせでの対決なども見られるということではなかなか盛況だったりもする。

そんな場所で、今日のぼくはというと。

「あれえ……？」

——コースに設けられたゲートの中で待機していた。

右を見る。会長がいる。

左を見る。地方から来た怪物と永世三強のもう一角と変態デジたんがいる。

……模擬レースを目前としていながら、ぼくの意識は空の彼方へと飛んでいきそうになっていた。

どうしてこんなことになってしまったのか。その原因は、昨晚に遡る。

・ ・ ・ ≠ ・ ・ ・

偵察の映像を見終えた後、ぼくは個別にトレーナーさんに呼び出さ

れることとなった。

はて、何か問題があっただろうかと思いつつ応じると、トレーナーさんは渋い顔をして告げた。

「ストライプ、お前もう少し立ち回り方なんかならんか？」

「もつと巧く立ち回れということでしょうか」

「いや、そうじゃない。巧く立ち回ろうとしてお前は少し……姑息……こつすい……根性が悪い……いや、小賢しい印象の方が強くてな」

「……言い方なんかありません？」

「ならんな……」

ならんのですか。

というか姑息とかこつすいって、ぼくそんな印象持たれてたのか。

え、何気にヒドくない？

「チームのために働いてくれたのはありがたい。だが、こういう立ち回り方ばかり覚えてしまうと、将来的に自分自身の首を絞めることになりかねん。分かるか？」

「それは……まあ……はい」

「分かるのか」

「分かります。正面から誠実に向き合っていないといけない問題に直面した時、ついやっちゃいけない方向から解決しようとしちゃつて、悪い結果を引き起こしかねないってことですよね」

「何でお前そこまで分かっててやっちゃってしまうんだ」

「へへえ……」

「笑って誤魔化そうとするな」

「すみません」

正直半分くらい無意識的にやっちゃってる部分があると言える。あ

だって中身は半分くらいお金への執着をみなぎらせた心の汚れた大人だもの。

「そうやって茶化そうとするのも悪い癖だな」

「マジすみません」

「……それと今回の件、事後承諾で東条に伝えたがな」

「東条？ あ、おハナさん？ 先に許可は取りましたよ。どのタイミングで撮るかとまでは濁しましたけど」

「お前本当にそういうところだぞ」

「はい」

ぐうの音も出ないや。ふはは。

ただなあ、トレーナーさんの言ってることも理解できるけど、サバンナストライプくの半分は価値観固まっちゃってる大人だからなあ……。

うーん……まあ、反省と改善ができないほどダメになった覚えは無いし、残り半分はちゃんとウマ娘……いやシマウマ娘……ロバ娘？

だし、純粹な、というか素直な子供らしい部分もある……はず、多分。恐らく。ちよつと自信無くなってきた。

ともかくそつちに期待しよう。

「それでだ。その件でルドルフから言伝があつてな」

「え、会長？」

『『代金を支払ってもらうから、明日コースに来るように』だ』

……はえ？

……≠……

そしてご覧の有様というわけだ。

婉曲な言い回しだったけど、要は併走をしてもらおうということだったらしい。真に受けて売上を持って土下座しに行ったら大層動揺された。そりやそうだ。

しかしながら、「あの」皇帝との併走だ。すさまじい勢いで噂が広まり、どここのウシの骨とも知れない一年生が併走できるなら自分も、と手を挙げたウマ娘は数知れず。気づけば「一度会長と走ってみたかった」とオグリ先輩が参戦し、ダートと聞いて我慢できずに駆けつけたイナリワン先輩が加わり、更に夢の対決をひと目見ようとデジタルパイセンが飛び込み参加しに来た。

他の参加者も軒並みダート強豪の先輩方ばかりだ。ぼくの胃は縮み上がるばかりである。

なんかひとり場違いな萎びれたロバがいるんですけど。ウケる。

ちなみに、ここまで集まったらぼく要らないんでない？ という抗議は却下された。まさかね！ 昨日の今日で「正面から誠実に向き合っていないか」といけない問題に直面した時」が降って湧いてくるとは思わないじゃん！

会長はぼくを殺そうとしている!!! と一瞬疑心暗鬼になりかけたけど、あの会長がそんなことをする理由が無いため真面目に善意から「別にそんなこと気にしなくていいんだぞ」と励ましてくれてるのが分かった。その善意が痛い。

諦めよう。そして玉碎しよう。見ていてくれクラスの友人たち、そして故郷の家族たち。せめて派手に散ってくれるわ！

「位置について！ よーいー！」
スターターの声と共に、気温と裏腹に冷えた感覚が全身に流れ込む。

そして、ゲートが開くその瞬間――。

「スタート！」

「！」

「なにっ！」

その冷えた感覚全てを振り払うように、ぼくは最初から全力のスパートをかけた。

砂浜特設コース、ダート1000m。策は――無い。スタミナとパワー任せの全力の逃げで押し込んでやる！

――そして一分後。

「ヴォエ」

普通に沈んで普通に最下位だった。

当たり前と言えば当たり前、妥当とかいう以前の問題である。

ダートに沈みながらぼくは無力感でそのまま動けなくなっていた。

「おーい生きとるかー」

む、この関西弁は。

「死んでますわ」

「生きとるやないけ」

さすがのレスポンスの早さである。ついと視線を上に向けると、やはりそこにはジャージ姿のタマ先輩がいた。

「心は死んでます……」

「まあまあ。デビュー前なのに会長やらイナリ相手に大差つけられへんかったんやったら上出来やろ。ほら起き」

「うあーい」

大差つけられなかったのは、距離のおかげだと思う。もう600m長かったら確実に大差だよコレ。

引き上げられるのに合わせてずりずりとコースから退場する。会長は……どうやら次の相手との併走を始めるようだった。勤勉だな、という以前にあれだけすごい加速でぶちぬいて行ったのに連戦なんてして脚は大丈夫なのだろうか？　と誤ってしまう。

しかし、表情にも顔色にも変化は見られない。どうやら本当に何も堪えていないようだ。次はテイオーが駆け寄って参加しに行っているのが見えた。

対して、さっきのレースに出ていたイナリ先輩がこちらに手を振りながら駆けてくる。

「おー、タマ！　そのちっこいの、知り合いかい？」

「前言うゆーとった猛虎魂を感じるストライプや」

「何でもかんでもトラ認定やめとけってんでい」

「さっきはどうもです……」

「おう！　悪くねえ走りだったな！」

「オグリはどこ行ったんや？」

「オグリ？　食い物探しに行ったんじゃないかい？」

「せやろな」

でしようね。

もしくは自分のトレーナーさんどこ行ったか。どちらにせよ何か食べるもの探しに行ったのは確かだろう。

領きあいながら移動していくそのさなか、ふと思い出したようにイ

ナリ先輩が問いかけてきた。

「そういえばあんた、大逃げなんて珍しいことするじゃないか。逃げ切れはしなかったけど、あれは……ヤケかい？」

「じゃないですよー。それ以外に勝つ見込みがなかったからやっただけですよ」

「言われてみりやあペースが全く落ちなかったねえ」

「アンタ逃げが得意やったんか？」

「差しの方が得意です」

「何やそれ。けつたいなことするやつちやなー」

そうは言うけど実情、ぼくが勝つセンがあるとすればそれしか無かったんだよね。

会長は一人だけ速すぎて「結果的に逃げになる」ようなことがあるけど基本的には先行、または差し型、オグリ先輩もイナリ先輩もデジタル先輩もおおむね似たような形でレースを進めるタイプだ。バ群を形成して前に出られなくなってくることが現状、ぼくに残された唯一の勝ち筋だったのだけど……そう上手くはいかなかった。

マルチタスクはまだ成功してない。だから今回は最初から何も考えずひたすら全力で走っていたかたちだ。もうちよつと考えられていたら、何か変わったのかと言われると甚だ疑問ではあるけども。

「ま、相手はドリームトロフィーでしのぎを削つとる会長たちや。負けても今は仕方ないくらいでええんやないか？」

「そうなんですけどねえ。最初から負けるつもりで挑むウマ娘はいないでしょう」

「おう、よく言った！ そのくらいの気概があつてこそつてなもんでいいー！」

「せやな。気持ちで負けたらアカンでー！」

すみません、レース始まる前までは意識飛ぶほど気持ちで負けてました。

思えばこの辺は後ろ向きだな、我ながら。もうちよつとなんとかなるようにしよう。同期やクラスメイトも大概なんだし。

……あ、そういえば。

「タマ先輩たちもドリームトロフィーですよね」

「せやでえ。相当稼ぎがエエで。なっはっは」

「金の話はするもんじゃねえよタマ……」

「いいですよね賞金も奨励金も……ぼくも早くドリームトロフィーに行けるくらい実績作りたいなあ」

「それで食いつく!?!」

「金やで!?!」

「お金ですよ?」

「仲良しか」

ぼくとタマ先輩は境遇などで少し似通ってる部分がある。

弟や妹が多かったり、実家が裕福でなかったりだ。お金に対する考え方捉え方は違うけど、お金が欲しいという思いは同じ。なんとか文字通りウマが合う。

学年が違うし、ぼくはトレーニングを普段チームの皆さんとやっているの接点こそ少ないけど、廊下で会えば結構話をするし昼食の時間一緒に席になることもある。初対面があんなのとはいえ……いや、あんなのだからかな? ともあれ、接しやすく面倒見の良い——クリーク先輩に二人まとめて赤ちゃんにされかねないことを除けば——良い先輩だ。

なんか目線が姉感覚な気もするけど、ぼくタマ先輩より背低いからどうしてもそういうスタンスになってしまうのかもしれない。

「よっしや、あれだけの相手に引かんと競り合ったんや。時間もエエ頃やし、ストライプ、海の家で何か一品奢ってやるか!」

「いいんですか? ありがとうございます!」

「あのドケチのタマがひとに奢る!?!」

「アホ! ドリームトロフィーで走つとるウチらが後輩に夢見せんでどないすんねん! バイトの万倍稼いだるんやで。奢るくらいワケ無いわ!」

「粹なこと言うじゃねえかタマ! 何頼むんだい?」

「焼きそばと白飯大盛りや」

「てやんでい!! 焼きそばは単体で食うもんだろ!?!」

「焼きそばはおかずやああああ!!」

ちなみにこの○○はおかずか主食か論、ソースを使う料理については関西と関東のソースに対する意識の違いのせいで起きることが多い。

関東以北でソースと言うと、だいたい中濃……ウスターソースを指す。

対して関西より西や中部地方の一部地域においては、家に異なる種類のソースが複数あるのが標準的だ。伊達にソース文化圏などと呼ばれておらず、とんかつ専用ソースだけ見ても数十種類はくだらないくらいにバリエーションがあり、メーカーも多岐にわたる。あとは焼きそば専用とかお好み焼き用とか、カレーソースとかだしソースとか……塩気や粘度、酸味や甘味などの要素がそれぞれ異なるので、こだわる人はもうとことんこだわる。上京した際にひいきのメーカーのソースが無くて途方に暮れた、という話を聞いたこともある。

で、味付けの話に戻る。関東圏のソースはやや酸味が強い味わいなのだけど、関西のソースは甘みが強い。比較のご飯に馴染みやすい味わいになるわけだ。

これで濃い目に味付けをするとご飯に合うため、ご飯、汁物と合わせた定食として供されることになる。結果、関西では「おかず」として広まり、あまりご飯と合うわけじゃない関東などでは炭水化物、「主食」として広まった……と考えるのが自然だろう。

うどんはおかずかどうかという点については諸説あるけど、雑炊の例もあるしだし汁がご飯と合うのは確かだと思う。ぼくとしてはうどんにはおにぎりを合わせたいけどね。

「アンタはどっちやストライプ!」

「アイムケニアン! アイムケニアン!」

とりあえず現状どっちにも属してないぼくに地域性の話を振るのはやめてほしい。

流石に大きく出すぎだよ

タイムを縮めるといふのは、並大抵のことではない。

子供の頃、何も下地が無い時分であれば、少し走行技術を学ぶだけで爆発的に脚が速くなることだろう。けど、ある程度育って技術を確立してしまうと、今度は更にその先、いかに技術を「使いこなす」か、「極めるか」が大事になってくる。

もちろん、才能とか単純なフィジカル面の問題もあるけど、それは時間と割り切りによってしか解決できないので考慮からは外しておく。

さて。

ぼくは現在、基本的にストライド走法を用いているが、これは一歩の幅を広く取ることによりスピードを出しやすくする走り方だ。対してピッチ走法というものがあり、こちらは脚の回転数を多くすることで負担を軽減する走法。どちらがより良いというものではなく、どちらが自分に合っているかという点が重要で、ストライド走法だから絶対に速い、ピッチ走法だから遅い……ということは無いです。

で、そのストライド走法なのだけど、いかに突き詰めていくかと言うと……これがまたちよつと難しいもので。

「はい、ピッチ上げて！ ピッチピッチ！」

「ぬああああ……！」

「うひよおおお！」

「あの！ デジタル先輩の視線が！ 怖いんですけど！」

「お気になさらず〜！」

「レース中に他のウマ娘の視線に惑わされてペースが保てますか？ 人気と実力が高まればそれだけマークも強まります。これもトレーニングですよ！」

「ひいひい……」

朝の砂浜。この日は色んな意味で過酷なトレーニングを行うことになっていった。

……ストライド走法で更に速度を早める方法、それは歩幅を維持したまま足の回転数を上げることだ。

どうしてデジタル先輩を真横に置く必要があるんですか？ と最初は聞いたのだけど、サブトレさんはこれを「やればわかる」として横に置いた。そうして分かったのだけど、デジタル先輩のトレーニングめっちゃめっちゃ参考になるんだよね……なんか悔しいことに……。

お互い芝・ダート等々環境を選ばない適性持ちだし、脚質も似てる。マイラーとステイヤーという差異こそあるけど、力の入れ方とか脚の上げ方とか、先輩だけあって圧倒的に巧い。

実際、走った結果は先日の通り大敗。最短で内ラチラチは柵のこと。内ラチで内側の柵のことを指す。削る勢いで行ってたのに、大外からぶち抜いてくんだよこのひと……どういう末脚してるんだよ……。

というかね、デジタル先輩の視線をも利用したメンタルトレーニングを兼ねるってコレ、考案したのサブトレさんでしょ絶対。チーフトレナーさんだともっとスタンダードなトレーニングをするだろうし。

でも実際コレ精神力が養われてるのが分かるのでなんとも言いづらい。

ふと見ると、視界の端の方でウオッカとスカレットが競い合って走るのが見えた。頑張ってるなあ……と思っていると、その後ろから後を追うようにしてダチョウに乗った芦毛ゴルシが駆けていった。

今日もトレセン学園は平和である。

「……はい、少し息を入れましょう」

「っ、くあ……」

「ふう……」

一旦やめ、の指示に従って速度を落としながら徐々に止まってく。急に止まると筋を痛めることもあるからだ。

数度息をつくと、それでぼくの体力は勝手に戻った。脚はガクガクだけど。

「デジタルは良い具合ですね」

「うへへえ……いいモノを目にできていい体験もできましたので、それはもう好調です……」

1000mというごく短い距離とはいえ、会長たちの激走を間近で目にした今のデジたんは精神的に無敵だった。

一方のぼくはと言うと、少し、燻った思いがある。

惨敗……は、なつて当然。けど、だからって納得できるわけじゃない。勝ちたかった。それは本能的な衝動だ。

トレーニングを続行しよう、と頭の中の獣の部分が訴えかけてくるが、ぼくはそれをなんとかしてなだめすかした。

ハードトレーニングはどんどこいだけど、オーバーワークは厳禁だ。それを避けるためにこのチームに入ったのだから、そこはしっかりと割り切らないといけない。

「ストライプ」

「はい」

「……思ったよりも堪えたような様子はありませんね？」

「負けて当然ですしねえ」

プロに対してアマチュアが挑みかかったようなものだ。

……いや、トウインクルシリーズやドリムトロファイリーグのことを考えると「ようなもの」というかそのものじゃん。本来なら無礼なめるなよとか言われるアレじゃん。

「あなたくらいの年頃だともう少しムキになってトレーニングをしたがるものですが……」

「それで効果が上がるならしますけど」

「オーバーワークになるので許可しません」

「ですよねえ」

そのためにトレーナーさんたちが頭を捻ってトレーニングメニューを考えてくれているのだし、ぼくはそこから逸れる気は無い。

体を壊せばそれだけデビューも遅れるし、度合いによっては治療費などもかさむ。前世じゃ別に大して運動もしていなかったぼくが変に独学でトレーニングを始めてもロクなことになりはしない。

そんなぼくの態度や返答の何が琴線に触れたのか、サブトレさんは

にっこりと笑みを見せた。

「な……なんですか？」

「いいえ。どうかその調子でお願いしますね。今はじっくり時間をかけて体を作っていく時期です。焦らずに頑張りましょう」

「あ、はい」

……読めん。

ううん、他のひとはまだ表情でなんとなく何考えてるか察するくらいはできるんだけど、サブトレさんはなんかこう、読めないことが多い。

いつも笑みを絶やさないと穏やかなひと……というのが表面的なところなんだけど、実情は、まあ、あれだ。自ら進んでタキオン先輩のモルモットになるわ、かーなーり強引な手段で勧誘するわ、なんていうか、失礼なことを言うがあんまりまともなひとではない。

ぼくの中では、学園の実権を握るため潜伏している革命家説と、U RAから出向してきた秘密の監査員説が拮抗している。概ねその場のノリで適当に生み出した珍説だけだ。

「そういうばストライプ、あなたは目標としては……』とにかくお金が欲しい』ということで良いのですか？」

「あー、まあ、ですね。レースを自費で開催できるくらい欲しいですねえ」

「相当頑張らないといけませんね、それは。世界最強ステイヤーでも目指しますか？」

「滅茶苦茶言いますね」

「それだけお金が欲しいとなれば、相応の賞金を獲得しなければなりませんからね」

まあそりゃそうだ。しかし世界最強とは。流石に大きく出すすぎだよ。

「あなたなら案外行けるかもしれないよ」

「それは買いかぶり過ぎかと」

「そうですね？ ストライプ向きの重賞はありますよ。カドラン賞フランスG1。芝4000mの超長距離レース。とか」

「気軽に最長距離のレースを例に出すのはやめてくれませんか？」

「最長距離はゴールドカップイギリスG1。芝4014mでG1の平地競走としては世界最長距離レース。ですよ」

「14mは誤差みたいなもんじゃないですか……」

「あら。7cmの差で泣くことになったエアシヤカールの前でも同じことが言えますか？」

「それもそうですね」

「14mもあれば差し返すチャンスは訪れる。……こともあるわけだし。」

それはいいとして、ぼくら世代の中で最強ステイヤーって言うところ、マックイーンの方だろう。スタミナ以前にスピードが段違いだ。

もつとも、最強がイコール無敵とは限らない。無敵だって不敗じゃないられない。

「はい、じゃあそろそろ休憩終わりです。トレーニングを再開しますよ」

「はい」

「はい」

今のトレーニングはそのためのものだ。前にマックイーンより先にゴールにたどり着けたのはただの作戦勝ち。何度もあんなのは続かない。

頭だけ、スタミナだけではいつか、必ず前に行かれてしまう。

だったら、鍛えないと。

でも、デジタル先輩に凝視され続けるのはなんとかしてくれないかな……。

……≠……

なかなか心を削った午前中のトレーニングからしばらく経って、時刻は夜。ぼくらは合宿所にほど近い場所にある森のすぐ近辺にいた。

トレセン学園夏合宿、大肝試し大会……と銘打たれたそれは、生徒会や寮長さんたちが主催して毎年行われている恒例行事なのだとか。

ルールは単純。二人一組で森の中のお堂まで行って、そこに置いてある御札（生徒会謹製）を持ってくるといふものだ。一年生は基本的に相部屋のウマ娘とペアになる。ぼくならミーク、ウオツカならスカーレット、という具合だ。ぼくの周囲、一年生同士のペア多くないかな。

さて、そんな中だけど。

「魔除けの仮面安いよー3000円だよー」

「買いますツツ!!」

「ウソでしょ……即決で買ってる……」

今日も平常運転である。

ちなみに仮面を買っていったフクキタル先輩は、専属トレーナーさんにアイアンクロウをされながら連行されていった。返品はしないあたり律儀な方らしい。

「あの……ストライプ。その魔除けのお面って、本当に効果があるの？」

「あるよー」

「あるんだ……」

続いてこちらにやってきたのはスカーレットだった。いつもの強気さは少しばかりなりを潜め、この状況に対する怯えが見て取れる。

あちこち大きいというか恵まれた体格してるけど、こういうところは中学生だなあと少しほっこりする。

「アフリカにいる知り合いのシャーマンが作った仮面だからね」

「知り合いのシャーマンとか途轍もないパワーワードで殴りつけてくるのやめてくれないかしら」

「事実なんだけど」

まあ普通に生きてたら聞くワードじゃないのは分かるよ。知り合いのシャーマン。自分の発言じゃなければぼくも何言ってるんだこいつはとも思っただろう。

しかし冷静に考えてほしい。そもそもぼく自身もそうだけどほとんどのウマ娘はある意味異世界転生してきた存在だ。

あとなんかウマ仙人とか存在するらしいしマーベラスは領^{マーベラス空}域展

開するしシラオキ様も実在するらしいしマンハッタンカフェ先輩は見えるひとだし笹針で能力向上するし、この世界は割とオカルトに慣れ親しんでる世界と言っていていい。

なので、オバケが実在する可能性は非常に高い。でもその上で、霊能力者みたいなひとがいる可能性も非常に高い。

だから多分この魔除けの仮面も事実ちよつと魔除けの効果みたいなのがあるかもしれない。

「レンタル10円だよ」

「安……じゃなくって。ちよつと。あつち見て」

「あつち？」

促されて見てみると、副会長がこちらを冷たい眼差しで見つめていた。

てへぺろ！ とすると更に表情が険しくなった。

おかしい。美少女のてへぺろに心が動いた様子が無い。同じ美少女だからか。ちくしようめ。

「少し控えたほうがいいと思うの」

「仕方ないなあ……」

「何で不満げなのよ……」

「あとミークさんは何で当然みたいに手伝ってるの……」

「お友達なので……」

仕方があるまい。商売はここまでにしておこう。

ぼくは急いで合宿所に商品を置いてくることにした。

……さて、肝試しそのものなのだけだ。

「ミークって肝試し得意？」

「あんまり得意じゃないですけど……苦手でもないかなと……」

「だろうね」

「そちらは……？」

「得意とも苦手とも言い辛いかなあ……」

「……」

「……」

別について顔してる。

ぼくも似たようなものだけど。

「適度に頑張ろっか」

「……むん」

「むん」

えいえいむんって言ったほうが良かっただろうか。

いや……多分ぼくが言っつていいことじゃないなコレ……。

中にはいるよねそういうのも

肝試しが苦手でも得意でもないというのは、少し語弊があるかもしれない。

より正確に言うと、ぼくは幽霊に対して大きな恐怖を抱いていない、ということだ。

なんというか自分も似たようなもんだと思うと若干親しみがある。あーだいたいぶ前までぼくもこんな感じだったわ、みたいな。ひとに危害を加えるタイプの悪霊は怖いけどさ。そっちはなんというか、うーん……犯罪者に対する現実的な恐怖、みたいな。普通幽霊に対して感じる言わば「わけのわからないもの」への恐怖というのは特に無いんだよね。だから、苦手じゃない。

一方、肝試しという趣旨からは完全に外れてしまうので得意と言うのはなんか違う。だから得意でもない。そんな感じ。

なので、森の中の整えられた道に入っても、ぼくもミークもぼんやり歩くだけだった。

「静か……」

「静かだねえ」

サイレンススズカ先輩が今にも走り出しそうな静けさである。

もつともこの肝試し、かなり厳密にコース分けされているし、そうしないとかかなりの数いる参加者全員をさばくことができない。迂闊にコースから外れて走り出したりなんかしたら遭難するそうなんだ（会長が実際に言っていた）。

だからそうそう衝動的に動きはしないだろうけど……。

（……いや、ターボはどうかな）

そこへ行くとターボはどうだろう。あれ。急に心配になってきた。いつもどおりターボエンジン全開にして森を脱出するまでありうる。

……森に入っちゃった今のぼくにはどうしようもないので生徒会には頑張ってほしい。

森の奥へ進んでいくと、不意にミークがうまぴよい伝説を口ずさみ始めた。

何でいきなり？ とは特に思わない。ミークだし。部屋でも時々何の前触れもなく突飛なことをしたりする。この前はぼくが持ってきた工芸品をフル装備してグレートハッピーミークになっていた。だっただだー。

こういう時はノるに限る。二人分の小さなうまぴよいが森の中に響いていった。

……と、そんな時のこと。

「……………う……………しょ……………び……………」

「……………」

これまた唐突に声がした。ミークの声じゃない、けどか細い声だ。ずっと耳が前後左右に動き回る。やがて発生元を特定すると、その内容が明らかになった。

「……………皐月賞……………ダービー……………皐月賞……………ダービー……………一冠足りなあいい……………」

「恨み言が高度過ぎるわ」

思わずツツコんでしまった。

多分その辺に仕込んでいるスピーカーか何かだろうからこっちのツツコみは聞こえないだろうけど、世を憐んだ設定にしても二冠達成者は強すぎるわい。

G1自体出走できるウマ娘は限られるし、勝者は更に限られる。生涯に一度しか出走できないクラシックなんてそれはもう。

この皿屋敷ならぬ冠屋敷なんて趣向を考えたのは一体誰だ。いや怖いは怖いけども。三冠にリーチかけて取れなかったとか、重圧で胃も痛くなるだろうし……………。

……いや、何で現実的な方向で怖くなってるんだよ。この方向性は違うんじゃないかな。

ともかく、この場はげんなりしながらも、とつとと離れることにした。

しばらく歩いていくと、道々になにやらおどろおどろしい飾り付け

をされたマネキンなどが置いてあることが分かる。

学生主催とはいえ手が込んでるなあ……あっちなんか日本人形風だ。誰がこういうの作ってるんだろ。

「……あ」

「おー」

ミークが声を上げたと思ったら、その先に何やら上半身だけが飛び出て蠢いている人影があった。

落ち武者風かあ。こんなものもあるのか。でも動くって何？ スピーカーとかモーター駆動とかそういう何かじゃなくって何コレ？

軽く手を合わせると、落ち武者は安心したような表情でスツと消滅した。

……………。

「何も見なかったことにしようか」

「そうですね……」

まあ、中にはいるよねそういうのも。

成仏したなら良かったということにしとこう。

そこからは、何か変なものでも現れたらイヤだなあと思い、ミークと一緒に持参した仮面を被って先に進んだ。

そうすると不思議なことに……と言うべきかは分からないけど、怪奇現象はぱったりと起きなくなった。

怪奇現象どころか生徒会側のおどろかしも無くなってしまったけど、何故だろう。

「——あああああああああ」

「んんん？」

「？」

と、そんな折のこと。不意に向こうから何やら声が聞こえてきた。他のコースでも盛大にやってるなあ。そんな風に思っていると、どんどん声が近付いてくる。

ミークはあまり聞こえてないようだけど、そこはぼくの耳が大きいせいだろう。ロバの耳もシマウマの耳も長いものだ。

周囲によくよく耳を傾けてみると、届いてくる声はどうやらウオツ

カとスカーレットのもののような。しかも近付いてくる。

「うわああああああああああ!!」

「きゃああああああああああ!!」

「あ」

「やっぱりウオツカとスカーレットだ」

案の定、あの二人だった。

追ってきてるのは、白い死装束を身に着け作り物の包丁を掲げたマンハッタンカフェ先輩。驚かし役ということで今の今まですごい形相をしていたというのに、ぼくらを目にした途端にぎよつと驚きを顔に出していた。

……ウオツカとスカーレットも含め。

「ウワ————ッ!!」

「また出たああああああああ!!」

「……あれっ」

「あー」

……今度はぼくらの姿を見た途端に驚いて叫びだして逃げてしまった。

一方、ミークは何やら気付いたように小さく声を上げていた。どうしたんだろう、とそちらを見ると、彼女はスツと自分の顔を指差す。

あー、仮面。

そりや暗がりの中、突然木彫りのマスク着けた二人組が現れたらビックリするよね。ぼくらは逃げていったウオツカたちを目で追いつつ、マスクを外すことにした。

「……お二人とも、その仮面は何なんでしょうか……?」

「ぼくの持参物です。すみません驚かせて」

「いえ……ただ、お友達が……ああ、外していただけたら問題はないのですが……」

お友達そこにいたのか。

どうやら今のぼくには靈感レベルが足りなくて見えないようだ。

仮面が何か影響を及ぼしたとなると悪いことをしてしまった。お友達も仮面もホンモノという証拠ではあるけど。

「そういえばカフェ先輩、ウオツカとスカーレットって、このコースじゃないですよ?」

「はい……コースを逸れかけていたので軌道修正を、と……」

「逸れてた……?」

「一本道ですよ?」

「ええ……おかしなことですが……たまにあるそうなので……」

「あるんだ……」

生徒会さん? これ本当に大丈夫なイベント? ちよつと開催地再考したほうがよくない?

ぼくらは大丈夫かもだけど、霊障とか起きたりしてない? お祓い行く?

「それでは、私は仕事がありますので、これで……」

「あ、はい。頑張ってください」

「ふあいとー……」

お互いに軽く手を振り、ぼくらとカフェ先輩はその場で分かれることとなった。

驚かし役に選出されたらこういう仕事の割り振りもあるのか。大変だな……今後ぼくが選ばれるようなことが……うん……絶対に無いとは言い切れないけど、生徒会から見たぼくってあんまり扱いやすいウマ娘でもないし、そういう役柄が回ってきそうにはない。はず。

その後、ぼくとミークは特に問題なくお札を取って戻ることができた。

戻って話を聞くと、ウオツカとスカーレットはスタート地点に戻ってきたと同時に気を失ったとかで、今は合宿所で寝ている。

一年生同士だったため、引率としてフクキタル先輩が帯同していた……らしいのだけど、そのフクキタル先輩はスタート地点に置き去りにされたのだという話も同時に耳にした。

……誤魔化さずに言葉にすると、これやっぱりフクキタル先輩の見た目をした何かが出たよね。こわ。

あつ、待ってこれ商機にできないかな。仮面レンタルの準備しとこ。

ケチな性格なのは間違いない

色々とおかしなことも起きはしたけど、それはそれとして楽しかった初めての夏合宿も終わり8月下旬。今日は三ヶ月に一度行われる選抜レースの日だ。

もつとも、ぼくは出場するメリットがあまり無いので基本的には見学だ。実際のレースの空気を味わうという観点では大事なことだけど、だからと言って手の内をさらすのはよろしくない。バレたらそれはそれで策に使わせてもらうけど、切れる手札が一つ減るだけでぼくとしては相当痛いんだよね。

あとそれとは別に、ぼくの走りだと勝つにしろ負けるにしろほかのひとの邪魔になってしまう可能性が高い。前の選抜レースでも見せた通り、あれはほかのひとの足を潰して勝つ走りだ。走者の強みを見せることができない選抜レース……だなんて、開催意義に反するようなことをするわけにはいかない。

「夏の暑さにレモネードいかがですかー」

「またトラちゃんの変なことしてる……」

「変なことじゃないよ。経済活動だよ」

「わざと難しいこと言って煙に巻こうとしてない？」

「そんなことないあるよ」

ぼくは今日も今日とてお金稼ぎである。

今日の商品はレモネード。シロップから用意してきたので炭酸やちよつとした変わり種くらいならいける。

一杯200円と前回のアイスより値段は高騰したけど、専門店やお祭り価格のそれに比べるとまあ安い方なんじゃないかと思ってる。実際売れ行きも悪くない。

「マヤノはどうしたの？ 選抜レースは？」

「むー！ 聞いてよトラちゃん！ 教官さんが今日も選抜レース出ちやダメって言うんだよー！」

「あー……」

マヤノは言っただけで、サボリ癖がひどい子である。

トレーニング嫌いというか、とにかく「わかった」らそれ以上やろうとしないので、反復が苦手だ。

だから基本的に代わり映えのしない、教官さんから受けるタイプのトレーニングに出ることをしていない。おかげで、最初の選抜以降レースに出場することを禁止されているという話だった。

「そんなにレース出たいならトレーニング参加すればいいのに」

「ヤダー！」

「そっかー……」

こればかりはぼくから何か言っても仕方ない。同じウマ娘の立場からだとしても意固地になる部分もあるし、時によっては皮肉のように受け取られてしまうこともありうる。

もつとちゃんと……そう、例えるなら理解のある専属トレーナーの資質があるようなひとじゃないと。

「こればかりは仕方ないね。一杯どう？」

「もらうけど……これ、どうやって作ってるの？」

「手絞りで」

「そっぢゃないよー！」

ウマ娘のパワーは素晴らしいぞ。じゃなくって。

「普通にレモンを買ったんだよ。夏の間にお金はちよつと増えたし」

「あつ、あれ結局うまく行ったんだ……」

「ふふふー」

トレセン学園に限った話じゃないけど、ウマ娘が多い場所で食品系の店を構えればまず大きくハズレることは無い。ただし値段以上にそれなりのクオリティが求められる。

寮の前にはちみつドリンクのキッチンカーがやってくるのも、需要を見込んでのことだ。主に毎朝のように買っていくテイオー。今更だけど一杯1000円以上をよくあんなに買えるな……とも思いうけど、それだけ味は良いので理解できないわけじゃない。他の生徒もたまに買ってるのを見かける。ぼくは買おうにも懐が辛いのでそうもいかない。

ともかく、このはちみつドリンクがよく売れている理由は、カフェテリア食堂でこれを賄うことができないからだ。同じように、カフェテリアで供されることがあまり無いものとなれば、それなりの需要が見込めるわけだ。

レモネードは……まあ、時によつてはカフェテリアにもあるけど、頻度はそんなに高くない。というかメニューに並んでない時を選んでやっているとも言える。

「ね、ところでマヤノ、ちよつと聞きたいことがあるんだけどいい？」

「うん？ どうしたの、突然」

「ベテルギウスちのセイウンスカイ先輩見なかった？」

「ううん、見てないよ？」

「そっかー……」

さて。今日お店を出してる目的は三つ。

内ふたつはもちろん、いつも通りのお金稼ぎと情報収集。もうひとつは——サボったスカイ先輩の搜索だ。

トレーナーさんの言葉を借りるなら、「ついにやったか」というところ。元々サボり癖があったスカイ先輩は、初めての後輩がチームに入ってきたおかげでしばらくは奮起していたようなんだけど、夏合宿を終えて緊張の糸が切れてしまったのだろうという話だった。

チーム内の反応はおおむね三通り。フラツシユ先輩のように即探しに行くか、どうせすぐ帰ってくるだろうとタキオン先輩のように静観するか、トレーナーさんのようにそれはそれとしてメニューを組み直したりなどして対応するか。例外的にドーナツツ先輩は爆笑していた。

ぼくも探しに行こうとはしたのだけど、スマホを持っておらず手軽に連絡ができないため、行き違いになる可能性が高いのでやんわりと拒否された。仕方ないのでこうして正門付近に場所を固定して、スカイ先輩が帰ってこないか待ち構えているというわけだ。

もつとも、レモネードの売上と反比例してこっちの成果はまるで上がらない。場所を動けるわけじゃないから当然つちや当然なんだけどね。

「教えてくれたからオマケして100円にまけるねー」

「わっ、ありがとー☆」

「どーいたしましてー。よそで見つけたら教えてね」

「うん！ ……あーあ、マヤもレースに出てキラキラになりたいなあ。あつ、そうだ。トラちゃん、こっそりレース……」

「ぼくが怒られちゃうからダメでーす」

「ケチー！」

「ケチでーす」

世間一般で言うケチな性格なのは間違いない。

とりあえずケチなぼくはそのままマヤノを見送り、再度監視とレモネード販売に戻った。

……しかし、途中から看板に「手絞り」って加えるだけで男性客の数が何割か増えたというのは、サンプリングしていいものか悪いものか。

いやそういう気持ちは分からんでもないよ。けどさ、一応これでも料理用の手袋して絞ってるからさ、そう期待するようなことは無いと思うんだけど……。

話が逸れた。

ともかく現在ぼくがスカイ先輩を探す手段は無いに等しい。行き先の予測はできるけど、じゃあどこに行ったかと言うとこれが全然わからん。

例えばお昼寝スポット。中庭とかなら知ってるけど他の場所は知らない。釣りスポット。広すぎる。日本全国津々浦々どんだけ海と川とがあるのやら。府中周辺と言ってもこれがまた広い。多摩川に行ったやら海の方まで駆けていったやらそれとも上流まで行ったやら……。

……考えるのやめよ。付き合いの長いトレーナーさんたちのほうが分かるだろうし。

「炭酸入り一本ください」

「はい」

選抜レースの方に頭を戻そう。マヤノはさっきの話の通り。ウ

オツカとスカーレットは既にチームに所属することになったし、ぼくも同じく。となると今回出場するとしたら、テイオーとマックイーン、マーベラスとターボ、ネイチャだろう。諸先輩方も時によっては出場することもありうるので、こちらも要チェック。

ちなみに今回、選抜レースの偵察に行くことについてはトレーナーさんから咎められることは無かった。基本的に公開されない合宿と違い、こちらはイベントとしてそれなりに広く外部のひとを受け入れているからだろう。……盗撮まがいそのもの。なことをしていたのが一番良くなかったと言えるけども、あの件。

「はちみつください」

「はい。300円です」

「レモネード2つ」

「はいはい」

……しかし、思いの外忙しい。結構列もできてきたし、今はこっちに注力すべきかな。

「すみませーん、炭酸みつっ」

「はいはい」

「ストライプ、俺にもレモネードコーラひとつ」

「ほいほい」

トレーナーさんや校内外のウマ娘はもとより、友達や学外から見物に来たひとまで。イベントとなるとみんなどうも財布の紐が緩くなるらしい。

所定の量のシロップを注いで、同じく事前に決めていた量の水なり炭酸水なりを注いで渡す。工程としてはこんなものなので、列がそれなりに長くなっても回転率は悪くない。

どんどんどんどんと捌いていくと、中にはマヤノのようにぼくが出店をやってるなんて知らないひととも出てくるわけで……。

「やー大漁大漁。あつ、すみませーん。炭酸入り……の……」

「あつ」

早朝から出かけているらしいスカイ先輩がぼくがこんなことしていると知らないというのも、ありうる話ではある。

たまに見る私服のオーバーオールに変装用らしき帽子。それにクーラーボックスと釣り道具。この状態では動きづらいことである。

ぼくはそのままスカイ先輩の手を取った。

「確保ーっ！」

「捕まったーっ!!」

……というわけで、無事確保。

……≠……

結局スカイ先輩は近くの川で釣りをしていたらしい。

本人の言い分を聞くと、どうも今日は釣れる気がしたんだそう。な。後ろからドーナッツ先輩が「ウソだぞこいつ絶対下調べバリバリにしてるし仕込みもしてきてるぞ」と笑いながらからかっていた。

ともかく。確保には成功したということで今日のトレニングも再開……の、はずだったんだけど。

「併走ですか？ ぼくと、スカイ先輩が？」

「何で？」

「正確には、私とスカイさんとストライプさんの三人ですね」

ぼくたちはふたりして首を傾げることになってしまっていた。

ターフに正座させられているスカイ先輩の横にちよいと座りながら、トレーナーさんの言葉を待つ。

「走れば分かりま——」

「利紗」

「すみません……」

「お前たちふたりは、走りの質こそ異なるがよく似通った戦術を使う。今後レースでそういった相手と当たらないとは限らん。ここである程度、自分と同じように搦手を使ってくる相手と走ったらどうなるか、というのを体感してもらおうと思ってるな」

「今の段階だとフィジカルの問題でスカイ先輩の圧勝ですよ……」

「いやいや、それはどうかなあ。セイちゃんは同級生の中じやとーっ

てもか弱いウマ娘なのですよ?」

「始まる前から牽制をするな」

「はい……」

……というわけで、併走である。

条件設定としては、芝2000mでぼくが内枠、スカイ先輩が外枠でフラッシュ先輩がそこに挟まる形。

主体になってるのがぼくとスカイ先輩なので、ぼくらはそれぞれの得意分野として、作戦は差しと逃げ。フラッシュ先輩はこれもその中間ということで、先行策の形で付き合ってくれることになった。

ゴール役はリムジン先輩。スターターはサブトレさんがやってくれることになった。

「では、位置について! よーい……」

——スタート!

サブトレさんの宣言と同時に、スカイ先輩は即座に飛び出した。

流石、速い。一足でトップスピードに乗る、とまではいかないけど、外枠にいたはずなのにサツと切れ味良く内に内に寄せてきた。

「」
となるとぼくは外から抜いていくべき、なんだろうけどそのことはスカイ先輩も分かっているだろう。フラッシュ先輩の走りを上手く誘導して前に行かせないようにしてくる可能性は高い。

……けど、そのこと自体は逃げている以上分かりきっているはずだ。読まれていること自体、既に読んできると考えていい。

では裏の裏をかくか……となるとこれもまた微妙なところで、表面的なアクションこそ一つだけであっても、二重三重に策を練ってより多くの事態に対応できるよう備えるというのは当然のこと。ある程度は余裕も持たせているだろうし、こちらが行動するとまず間違いなく対応してくる……。

「っ」

「……」

一瞬のフェイント、と同時にわずかに視線が動くのを感じた。

迷っている、と判断するには十分な証拠だ。いやしかしそれもブラ

フ？

ぼくの基本的な仕掛け位置は1000mから。けど、もつと前からトップスピードに乗ることは可能ではある。スカイ先輩はそのことを把握しているはず……いやでも、お互いステイヤーなんだからやろうと思えばスカイ先輩も行けるか？

しかしスカイ先輩の立場からすればぼくにスタミナ勝負を挑むのは得策ではない。やるなら速度勝負だ。だとすると早め早めの仕掛けにした方があちらとしてもやり辛くなるはず……。

「——ふっ」

「……」

わずかにスカイ先輩の足元が揺らぐ。フェイントなのはすぐに見破れた。

けど問題はそれをしてくるってことだ。こちらのことともよく見えている。いやまさかそれもブラフ？

いけない、ドツボにハマりかけている。表情には出さずに済んでるけどコレ、精神的にキツイ。

どこまでがブラフでどこまでが真実なんだ……!?! いやそれ以前に、仕掛けどころ……仕掛けどころを見失うな……!!

「……………ツツ」

「——っ！」

いや。しかし。だけど。でも。されど。

浮かんでは消えたり自ら否定したり採用に踏み切れなかったりそもそも現状に合わなかったり。

無数の考えが閃いて実行に移しては潰されて、逆にこっちもあちらの考えを読み切って潰して……。

——とりあえず結論から言ってしまうと、最終的にはフィジカル差で押し切られてスカイ先輩に負けた。

が、そのスカイ先輩も、ペースを乱すことなく走ったフラッシュ先輩に先にゴールされることになった。

ぼくもスカイ先輩もデビュー前、ぼくはそのスカイ先輩より更に一年後輩だから、この結果は当然と言えば当然ではあるんだけど……。

「うえあおっほ……ほあえ」

「うにやああああ……」

「お二人共、大丈夫ですか……?」

併走を終えたぼくとスカイ先輩は、疲労困憊に陥ることとなった。お互いに汗はだつくだけ。頭を回しすぎてオーバーヒートしそうだ。体を起こせそうにない。

ターフに転がって軽く悶えていると、上から声がかかった。

「どうだ、スカイ、ストライプ。自分と良く似た戦法の相手と競った感想は」

「めんどくさい!」

「だろうな」

「だろうな」で。

いやしかしホント、すごいよ。お互いの一挙手一投足でどんどん精神が削れていくんだもの。

フェイントをかけていること一つ取ってもそれがブラフなのか本当にフェイントを入れていいのか、果てはそのまま行くか。一つの動作に当然のように複数の意味が込められていて、非常にやり辛い。

しかしこうして同じ反応をするってことは、多分スカイ先輩の方も同じことを考えていたんだろう。

「相手のペースを乱してやろうと考えているヤツは、自分のペースが乱されると脆い。加えて今回のフラッシュのように……乱されないウマ娘も必ず出て来る。いずれ必ず直面する問題だ。覚えておきなさい」

「はっ」

「はい……」

同じように搦手を使うような相手か……あんまり思い浮かばないけど、やっぱりいることはいらんだろう。

そういう手段を用いるとなれば、主にはぼくらのように足りない能力を埋めるために、ということになるのだろうけど……こんなに面倒なら、将来的に競り合いたくは無だね、正直。

素朴で牧歌的で安心する

9月。トレーニングに集中しすぎたウオツカが宿題を忘れてたり、爆速で終わらせたターボの宿題の内容が間違いだらけだったりで、最後の追い込みとして簡単な勉強会が開かれたりしたものの、どうにか無事二学期が始まった。

はてさて。

秋、と言えば10月はじめに開催されるスプリンターズステークスに端を発する秋のG1戦線が注目のイベントだろう。

ドーナツツ先輩の出走するコックスプレートも10月下旬、リムジン先輩のBCターフも11月はじめと、当然ながらベテルギウスメンバーも無関係ではられない。フラッシュ先輩やタキオン先輩も秋天に向けて調整しているし、スナイパーIIサンやスカイ先輩のデビューも近い。自然と、チーム内の空気はピリツと張り詰めていた。

まだデビュー予定の無いぼくは、普段のトレーニングメニューをこなしたら、今は皆のサポートに奔走している。

……まあ、今一番キツイのはトレーナーさんだろうけど。コックスプレートとBCターフの開催時期が近いせいで、アメリカに行ったりオーストラリアに行ったりを繰り返してるんだよね。

優先出走権を取ってるおかげでレース直行だから、前哨戦のために数ヶ月滞在する必要がある……とかいうわけではないことが幸いだろうか。もしそうなったら、トレーナーさんとサブトレさんがそれぞれ海外に行くハメになるところだった。

で、そんなG1戦線と別に、トレセン学園では大きなイベントがある。トウインクルシリーズ秋の大感謝祭こと、聖蹄祭だ。……一般的な学校で言えばだいたい学園祭にあたる。

ファン参加型のイベントが数多くあり、これが盛り上がる……らしい。アニメで見たことがある一期第6R「天高く、ウマ娘肥ゆる秋」から、多分そういう雰囲気だろうと思う。

このイベント、チームやクラスで様々な出し物をすることになるの

だけど、ぼくら中等部一年は基本的に出店は許可されてない。まだ一回目の参加ということで、ルールや雰囲気をちゃんと把握できていないからだ。

もつとも、チームに所属している場合はその限りではない。ベテルギウスも歴史があるチームだけに、こういったイベントにはそれなりに参加してきたらしく、今年も参加する……のだけど……。

(うん、スカイ先輩たちがいない)

夏休み明け登校初日。今日は打ち合わせということで、昼食が終わったならチーム室に行こう、と話していたのだけど、一向に来る気配がない。

スカイ先輩だけなら中庭あたりでぼやくつとしている可能性が高いか、とも思うけど、スナイパー||サンと一緒にいるし、連れてきてくれるはずなんだけど……。

「う〜ん……」

探しに行ってみようか。食堂は広いけど、ちよつと本腰を入れて探せばすぐ見つかるだろうし。

ああ、それにしてもお手軽な連絡手段ホが欲しい。

食堂の方を探しに行くと、ほどなくしてスカイ先輩たちの姿は見つかった。

周囲にはキングヘイロー先輩やグラス先輩の姿もある。それに加えて、見慣れないひとが……いや、ある意味でものすごく見慣れた姿なのだけど、少なくともぼく自身は見たことの無いひとがいる。

黒鹿毛に加えて一本の綺麗な流星。温和でどこか朗らかな雰囲気ホを漂わせたウマ娘——スペシャルウィーク。……先輩。

ついに来たか、という思いと同時に、え、今？ という困惑が湧き出す。

アニメ第一期で主人公に抜擢されていたこともあって、ある程度彼女についての詳細な経歴は知っている。けど、編入してくるのってこの時期だったけ？

……まあ、媒体によってかなりバラつきがあるはずだし、この世界だと今だった、というだけなんだろう。

考えは置いて、とりあえず声をかけることにした。

「スカイ先輩」

「あれっ、ストライプ？ なになににどうしたの？ ははあ、まさかセイちゃんに会いたくなっちゃったとか？」

「ですね。時間になっても来ないので」

「え？ あ、やばっ」

「ウカツ！」

「あなたもですよ」

「うっ」

なんかビツクリした顔してるけど、スナイパーⅡサンがすっかり時間見てたらこんなこと言わずに済んだんですが。

「あらあら〜。言われてみたらもうこんな時間ですね。つい話し込んでしまいました」

「あのっ、そちらの方は？」

「うちのチームの後輩だよ〜」

「サバンナストライプです。すみません、お話中にお邪魔してしまつて」

「あ、いえ！ こちらこそすみません。私、スペシャルウィークつて言います。よろしくお願ひしますね！」

「はい」

なんだろう。なんというか雰囲気は素朴で牧歌的で安心する。

この辺は田舎出身だからだろうか。そこ言うとぼくの出身も大概田舎なんだけど、これは……スレてないのが大きいんだろう。

純朴さかあ……もう随分前に無くした気がするなほかあ。

「じゃ、すみません。先輩方。スカイ先輩たち借りていきます」

「До свидания」サヨナラ！

「またね〜」

お互いに手を振って別れ、食堂を出る。そこから部室棟までの道を行く中で、ふとスカイ先輩が呟いた。

「ストライプには強敵出現！ かもね〜」

「え、何でぼくです？」

「んん？ だってあの子、この時期に編入してきたってことは、チームとか入ってないでしょ？ 選抜レースにも出てないから、トレーナーさんがついてもだいぶ後になりそうだよ。それから体を作っていることになるわけだし。私達よりデビューは遅れそうだから、当たるとしたらストライプかなあ、って」

「なるほど」

ああ、そうか。順序立てて考えればそうなるのか。

トレセン学園の編入試験は厳しい。入学試験よりも基準は相当上と言つていいだろう。それをぐり抜けてきている以上、スペシャルウィーク先輩の素の実力は推して知るべし。

でも、トレーナーさんに指導を受けてきたわけじゃないから、体の絞り方とかは知らないだろうしまずは基礎的な部分から作っていく必要がある。その期間におおむね一年を見込めば……当たるとしたらぼくらの世代、というわけか。

……そうなんだよなあ。アニメみたいに劇的な展開がいつも待っているわけじゃないし、何かの拍子に歯車が噛み合わなくなる可能性もある。

それこそ、かなり先に生まれたおかげで、JWCで競い合った相手と戦う機会を逸したギンシャリボーイという例もあるわけだし。気をつけとこう。

……≠……

さて、チームベテルギウスの出し物というのは、実のところ毎回不定となっている。

データを重視するチームらしく過去のレースデータをまとめて掲示することもある。アトラクション系もあったと聞くし、割と手広くやっているようだ。

で、今年はどうするのか、というテーマだけど……。

「和メイド茶屋はどうでしょう」

「なんて？」

「なんつった？」

「大丈夫かお前」

「落ち着Coor it デスよ」

「落ち着けストライプ」

ぼくの意見は残暑の厳しさにやられて頭がおかしくなった戯言と断じられた。

なかなかこの対応ひどくない？

「まず何でその発想になったんだお前は……」

「簡単に説明します」

言つて、ぼくは持参した資料を配布した。シャカール先輩が「コイツ何でここまで気合入ってるんだ」とドン引きし、リムジン先輩とフラッシュ先輩が苦笑いしているのが見えるが気にしない。

「ここ数年の売上データをまとめました。リギル恒例となっているらしい執事喫茶が好評で、毎年上位を取っています」

「ま、あそこは規模もやる気も段違いだからねえ」

「他のチームも健闘はしていますが、現状ですと並ぶのも一苦勞です。しかし、元々のコンセプトもあって執事喫茶の客層は女性に偏っています。逆に言えば男性層への訴求力は比較的低い。この点を突いたチームは、リギルに並ぶほどの売上を見せているんです」

ごくわかりやすい例を出せば、メイド喫茶。実に安直だ。しかしそれがいいとばかりに男性客が大挙して押し寄せたという。

トウインクルシリーズの走者というのは、言わばアスリートであると同時にアイドルだ。そういう需要が生じて当然だろう。

加えて執事喫茶。男性客に刺さりがちな男装女子というのは往々にして元が可愛い系の、ボーイッシュなもの。これはテイオーなどが該当するだろうか。背伸びしているとか、本来とは違う一面が見られるという点が強く出ている。対して女性に刺さりがちな男装女子というのはマニッシュなもの……フジキセキ寮長やナリタブライアン副会長、オペラオー先輩や、ウオツカなども該当するかな。こちらは元々の気質にやや男性的なものが混じっているパターンが多い。リ

ギル所属のウマ娘の多くは後者のパターンだ。

「というわけでいかがですか!? 和メイド茶屋!」

「要は正反対の需要を狙うということか。言つとることは分かるが……」

「あまり、このチーム向きとは言い辛いですね……」

「国際色豊かすぎて和って雰囲気まるでねえわな」

「ぬーん」

言われてみればそうである。

ドイツ出身のフラツシユ先輩をはじめ、リムジン先輩、ドーナツ先輩、スナイパー先輩、あとぼく自身も。トレーナーさんたちを除くチームの過半数が海外出身だから雰囲気合わないというのもその通りではある。

「なら草案はもういくつか用意してきてるんですがいかがでしょうか!」

「少し気合が入りすぎてはいないかい?」

「金が絡むからか?」

「いえ、このイベントでお金懐に収めちゃうと横領になっちゃいますからそれは無いです」

「変なところで理性的なこと言うな……」

「いやあ、ストライプだからどうかなあ……何か別に目的とかありそうな気がするなあ」

ふふふ。

……いやまあ、あるんですけどね。

飲食関係の出店にしようと思うと、それこそ仕入れの手間が必要になる。ここでぼくがその役割を一手に担うことで、仕入先とのツテを作るのだ。

そうすると将来何らかの飲食関係の店を出すという時、このツテを辿ることで仕入れの手間を省いたり、ある程度あちらの印象が良い状態で取引を行うことができるわけだ。

適当に笑って誤魔化してみるけど、多分見透かされてるだろうな。まあそれはいいが。

「トレーニングの時間もある、あまり時間は長くかけられん。ストライプ、今日のところは全ての意見を精査するわけにはいかん、と分かってはくれるか？」

「はい、すみません」

「すまん。じゃあ次……」

と、その後もほどほどに意見は出てきたのだが、結局結論は出ないままトレーニングに移ることになった。

……もうちよつとブラッシュアップしないとダメか。ぬぬう。プレゼンテーションって難しい……。

こういう面では良い仕事するな

「うーむ」

和メイド茶屋。ぼくは売れる！ とそこそこ思ってたんだけど、チーム内の評価、というか反応はあまり芳しくなかった。

これは売り上げ面の問題じゃなくて、「店員としてやる側」としての気持ちが生かされているのだろう。

和、はともかくとしてメイド。男のロマンと言えば聞こえは良いものの、それをやるとなると抵抗感が出るひともいて不思議はない。自分には合わない、ヒラヒラしたものが苦手、キャラじゃない……などなど。あとは単純に客商売やサービス業が向いてないというひとも少なくない。スカイ先輩やシャカール先輩もそのようなことを言っていた。

……まあ、仮にいざやるとなるとふたりとも真剣にやるとは思わけどね。負けず嫌いだし。

(基本的には、物珍しさとか言葉から受ける印象で抵抗が生まれてるのが問題かな)

アスリートとしての意識が強いひとだと、より顕著かも。

メイドって、言っちゃなんだけど割とマニアックだからね。自分が着て接客する、となると恥ずかしく思うのは仕方ない。

ぼくは必要とあらば何でもやるけども、この辺は何なんだろうね。突飛なことをしても気にしないサンコンソウルの影響だろうか。こういう面では良い仕事するな。

……とはいえ、それはぼくの基準なので、他のひとに求めるべきものではない。

だったらどうすればいいの？

「根回しに来ましたー」

「お前のそーゆー無駄に正直なところアタシは嫌いじゃねえけど敵は作りやすいぜ」

「へへえ」

「褒めてねえぞ?」

でも半分褒められてるってことはほぼ褒めてると言っただけで過言でないと思う過言。

というわけでやってきたのは、ドーナッツ先輩とリムジン先輩の部屋だった。

ドーナッツ先輩が使っているらしい部屋の左側部分には、ボトルシップや船舶の模型、海賊旗らしきドクロの布などが飾られている。

あと、机の上にある作りかけのブーツは……なんだあれ……ボトルガ○プラ……? しかもご丁寧に海賊のやつだ。よっぽど海賊好き……いや、海賊が本業だったりしないよなこれ。ぶらさがり健康器も置いてあるけどやっぱり意外と身長のこと気にしてるんだらうか。

右半分、リムジン先輩が使っているらしき部分にそこまで突飛なものはない。ぱかプチウマ娘をモデルにしたぬいぐるみ。主にクレイニングゲームで取れる。がいくつか並んで、他は……映画のグッズかな? パンフレットや独特なデザインのペンなどが整理されて置いてある。

ドーナッツ先輩のスペースの境目あたりには有名な海賊映画のポスターが貼ってあった。なるほど視覚的にも境界線が分かりやすい。

「まあ正直に言やアタシは別に構わねえ」

「本当ですか?」

「ケド、他の人は分かりません。シャカールさんとか……」

「でしようねえ」

「つか、それそんな気合い入れてやることか?」

「というの?」

「そのプラン結構金かかるだろ? よそで言やコレ学園祭なんだし、手間かかりすぎんのもなあ」

——あ、そつか。先輩たちが懸念してるの準備面か。

ドーナッツ先輩たちは海外G1を控えた身だ。そうでなくとも秋のG1戦線には誰かしらどこかで出場することになってる。

聖蹄祭は10月のシーズン開始より前に始まるとはいえ時期が近いことに変わりはなく、トレーニングに集中したいというひとも相当

多いだろう。

だからぼくの恥ずかしいからやりたがらないんじゃないか？ という予測は少し違ってて、実際のところは「レースが近いから、時間的制約が生じるほど大掛かりな準備は避けたい」という点と、「あくまで世間一般で言う学園祭なのだから、お金がかかって大掛かりなことをするのに気後れする」という2つの理由が絡んでくるだろうか。

ならば語らなければなるまい。ここで聖蹄祭に力を入れなければならぬ理由を……。

「簡潔に説明します」

「うおっ、急に雰囲気のパリッとさせるな！」

「すみません。でもドーナッツ先輩、ぼくらは確かに学生、なんですけど、それ以上に世間からの見方は『トウインクルシリーズの走者』、つまり一種のエンターテイナーなんです」

「アスリートでは……?」

「それは前提です。アスリート、であると同時にアイドル的存在でもあるんですよ。ですから、当然それなりの対応が求められる」

ただのアスリートがウイニングライブをしますか？ アナタ。

実際のところ、レースが全国放送までされて、例えばルドルフ会長みたく熱心なファンがつくほど有名になってるウマ娘というのは、単にアスリートというだけではいられない。

ぶっちゃけベテルギウスの面々だって、その辺は大概だ。海外G1を制覇した経験があるリムジン先輩は言うに及ばず、宝塚を制覇したドーナッツ先輩もそう。というか全体を見てもだいたい何かしらのG1で結果を残してるとなれば、そりゃあもう。

「聖蹄祭は秋のファン感謝祭でもあります。だからこれはファンサービスの一環とと思ってください」

「お前色々考えてんのな……」

「そりゃあもう」

「目がギラついてて怖えよ」

よく言われます。

「Ah……ワタシはイイと思います。はつきりしたビジョンがあるな

ら……」

「まーそーだな……」

「本当ですか？　ありがとうございます！」

「いや、アタシらがいいつつたからって他の連中も同じように言うとは限らねーぞ？」

「大丈夫です。皆さん説き伏せてみせますから」

「お前は何を指してるんだよ……」

「最強のステイヤーですネー」

「最強の経営者と違うか？」

「そうかな……そうかも……」。

「……いや待ってほしい。つまり……両方目指せばいいのでは？
なるほど、そういう手もあるか。うん。」

……≠……

それから翌日のこと。

「で、では……賛成多数でストライプの案に決定しますね……」

「……お前、一日でどう賛成票を集めたんだ」

「頑張りました」

「頑張りましたじゃねエよ手段を言え」

「地道に説得して回っただけですよ」

いや真面目な話。

別にぼくに大層な弁論能力があるわけでも何か変な洗脳能力があるわけでもないんだもの。ただちよつとお互いの認識を擦り合わせて、これはこうした方がいいんじゃないか、という方向でそれとなく提案をしただけだ。

「ですが、ストライプ。この案……あなたの負担が相当大きくなりませんか？」

「こっちが懸念してるのはそういう部分なんだがな……」

「大丈夫です、体力の配分は得意なので」

「無理が出ると思ったらすぐに言いなさい」

「了解です」

よし、とりあえずこれでほぼ思った通りの状態に持ち込めた。

あとは必要な商品の仕入れをしつつコネを構築、それから必要な小物を仕入れて……こりやあ忙しくなるし今後の役にも立つぞお。うへへのへ。

「ストライプ君、少しいいかな？」

「はいタキオン先輩。何でしょう」

「シャカール君が言いたそうなことを代弁させてもらうけど、出店の制服は和風メイドの一種類だけなのかな？ 彼女はああいう可愛らしい服を着るのが恥ずかしいだろうからねえ」

「余計なこと言うな」

「そこに関しては二、三案があります。まず、いわゆる大正ロマン風。ブーツと着物、袴のセットです。もう一つは男装。どちらも露出度は更に低いですよ」

「……チツ、そこまで言うなら仕方ねえな」

よしよし。納得してくれて助かった。

シャカール先輩はシャカール先輩で、やっぱりヒラヒラした可愛い系の服に抵抗感があったんだろうな。やっぱり先に想定しておいてよかった。

「問題がないなら提供する食品について話し合いたいと思うが、誰か案はあるか？ ……まずストライプ以外でだなして……」

「はーい。お茶屋なんだからまずドリンクですよねー。メインは抹茶類になるんじゃないですか？」

「あとほうじ茶だろ。他に何かあったかあ？」

「柚子やきな粉、豆乳なども時には挙げられているね」

「Ah……あまり種類が多くても、それはそれでコントロール、難しくなると……思いマス」

「論理的に考えりゃ、やるとしても材料の組み合わせだけで済むようなものにするべきだろうな」

困った。特に何も言うことがない。概ね思った通りのことを全部

話されてしまった。

トレーナーさんがこちらに視線を寄越してくる。何も無いです、とばかりに肩をすくめると、納得したように頷きを返された。

「食品の方はどうしますか？」

「フラッシュのケーキは入れておきてーな。ありや相当美味えぞ」

「ありがとうございます。ですがそれだけではメニューとして寂しい限りですので、他に何か入れておかなければいけないかと思いますが……」

「オハギを所望する」

「スナイパーが食べたいだけだよねそれ？ いや、いいとは思うけど」

「ウマ娘ちゃんの手作りオハギというだけでお客さんは集められると思います!!」

「そういう話じゃないんだがね？」

「すぐに思い浮かぶのは、お団子、どら焼き……和洋折衷と考えると、抹茶スイーツも適しているかと思います」

「ですが……トレーニングがあるので、作る練習をする時間が無いですね……」

「……………」

「……ストライプ」

「はいっ」

大きく拳手をしてアピールすると、そこでようやく発言が許可された。

流石にこういう、トレーニングで時間が上手く使えない……という状況になるとぼくの出番だ。

「仕入れが終わらないと試作もできませんし、ついでにぼくの方でやります。時間はありますから」

「お前な……」

「トレーナーさん、分かっていますけどここで少し頑張っておけば、来年以降も同じ手を使えるので多少楽になります」

「ほくも来年以降のどこかでデビューすることになるだろうから、同じように時間を費やして……というわけにもいかないだろうしね。」

「言わば今は資産を積み立てるべき時期。レシピも衣装もコネも、全部まとめてチームとしての、あるいは個人としての資産だ。後々になってこれが効いてくる。はず。」

トレーナーさんは大きなため息をついた。

「……やりたいようにやりなさい」

「はいよー」

「最近お前のにへらって感じの笑い方がスゲエ胡散臭く感じてきた」「言い方ひどくないです?」

——で、まあその後。

仕入れた品物はチームの部室に保管するとしても、試作を重ねる必要があるので一部はぼくの自室に置くことになった。

試作、とひとくちに言っても提供しなければならぬ商品はそれなりに多い。スイーツというものはかなり厳密に分量が決まっているため、目分量というわけにもいかずレシピを構築するには毎回きっちり計量する必要がある。

更にもの上、定められた分量で作らなければならない以上、「少しだけ作って味見する」というわけにもいかないため、一度作るとそれなりに処理の手間がかかる。

同じ寮だからということでもオグリ先輩やマツクイーンに味見をお願いしたりもしたのだけど、これがまた試作を重ねていくと同じ手を何度も使うわけにはいかず……。

……結論から言うと数日後、ミークがちよつと太り気味スピードが上がらなくなるになってしまったりして、桐生院トレーナーにぼくも含めて注意されたりなどしたのだった。

裏方だからね

10月上旬、秋のG1戦線の合間を縫うように、秋晴れの空のもと聖蹄祭が開幕した。

流石はトレセン学園における秋のファン感謝祭と言ったところか。開場前から学園前には長蛇の列ができていて、整理券まで配られているほどの盛況ぶりだ。

客層も老若男女でほとんど偏りが無く、トウインクルシリーズやドリムトロフィーの走者がどれだけ人気なのかが見て取れる。

さて、その大盛況の中ぼくはと言うと——ひたすらドリンクを作り続けていた。

「1番きなこと豆乳と冷緑茶、2番抹茶オレとゆずサイダーできました！ 3番抹茶もうちよつとかかります！」

「お願いしマス！」
バリツバリの裏方作業である。

当然のことではある。デビュー時期すら未定の新人未満だ。役割分担としては効率的だし、ぼく自身もその方がいいと思っではいる。けど……まさかここまで忙しいなんて。軽く計算誤っちゃった……。

現在、表に出ているのはリムジン先輩とタキオン先輩、スナイパーサンとフラツシユ先輩という構成。他の四名は自由時間だ。

スナイパーサンとフラツシユ先輩は和メイド服、リムジン先輩とタキオン先輩は大正ロマン風で揃えている。

フラツシユ先輩は勝負服をイメージした黒いもの。ただ、こちらは和風になっただけでかなり印象が変わってくる。具体的に言うとな勝負服だと見えてた部分が隠されたのが一番のポイントだろうか。男性客は泣いていたが、これはこれで、と受け入れてもいた。

タキオン先輩は普段と印象をあまり変えたくないのか、これも勝負服と似て袖が長い。あの時口を挟んできたのは露出多めになるのが実は恥ずかしかったからではないかというのがぼくの中でもつぱらの噂だが、真偽は不明である。

リムジン先輩に関しては……実はこれ、でかすぎて和メイド服が用意できなかったという事情がある。オーダーメイドにするには時間とお金が足りず、なんとか見つけた和服にブーツを合わせることはできなかったのだった。

スナイパーⅡサンはメンポ外そう？

「ストライプ、一段落したらこちらを少し手伝ってください」

「はい」

トレーナーさんたちはぼくと同じく裏方だ。スイーツ類の調理を担当している——とは言っても、メニューのほとんどはそこまで調理の手間を要しないもので、盛り付けが主だけだ。

時々、抹茶パフェなどの注文もあるので、そういったものについてはぼくも手伝うことにしている。

……調理台に置いてあるお皿とか、微妙に手が届かなくて悔しいことがあるのだけど、そこは置いとこう。種族的特徴というやつだ。ぼくは悪くない。

「うう、まさかこんなに忙しいとは……」

「そこは予測しておいてほしかったですね」

「いや、まあ……そうですね……」

ぶつちやけちよつと侮つてたのは否めない。

今くらいになるとしても一番繁盛する時間帯、例えば昼前から昼過ぎあたりになるとばかり思ってた。

ただこれは軽食屋じゃなくて茶屋。お菓子と飲み物を求めてやって来る以上、ピークタイムは普通の飲食店のそれからはやや外れる。

これは……試練だ。いずれぼくが自分で経営なり出店なりする際にどれだけ対応できるかという一種の試練だと受け取った。

いずれ人を使う側になるにしろ、こういう経験をしたという事実は重要だ。まあ、世の中には「自分もできたんだから他の人もできるよね？」と黒いことを言う経営者もいるわけだけど……ぼくはそうならないように願いたいところである。

「ストライプ、交代の時間だ」

「はれ、もうですか」

開場からしばらく経ってお昼時、休憩なども挟みはしたけど、なんとかひと区切りのようだ。

やってきたスナイパーサンを見ると、どうにもお疲れの様子。丈が短めな群青色の和メイド服……に、更にメンポを装着しているのは本当にいかななものか。精神安定のためには重要かもしれない。

大丈夫だろうかと心配していると、問題ないとばかりに手をビツと前に突き出してきた。

「コレは衆目にさらされたことによる精神的疲労だ。チャメシ・インシデント」

「それトウインクルシリーズ走者的にどうなんです?」

「ミヤモト・マサシはこう言った。『環境に文句を言う奴に晴れ舞台は一生来ない』と。どうということはない」

「アツハイ」

どうやら自分自身にそう言い聞かせて耐えているらしい。心が強いのか弱いのかよく分からないひとである。

休憩はおよそ二時間。その間は他のひとに任せることになるから、お店が回るか不安だけど……トレーナーさんたちもちゃんとした大人だし、先輩たちも仕事となればきっちりこなすタイプ。まあ、杞憂で終わるだろう。

ちなみに、外出の時は店の制服とも言える和メイドの格好のままだ。色合いとしてはやや地味めな松葉色。裏方だからね。

これは宣伝効果を狙うと同時に、ぼくがチームベテルギウスの一員だと分かりやすくするためでもある。

ベテルギウスはその特性もあって、かなりの有名チームだ。その新入りとなれば記者や一般人の注目も集めやすい。今は外に出ることが滅多に無いから話が学園内だけに留まっているけど、聖蹄祭ともなれば話も外部に漏れるようになる。流石に今ここでファンが増えるようなことはまず無いだろうけど、「こういう子が加入しましたよ」と外向けに示すことで受け入れるための土壌ができ、ファンが増えるための土台を作ることができる。

正直なことを言うと、まあ、その、ヒラヒラしてて服が可愛らしす

ぎるので、恥ずかしい思いは少しあるけど、仕事と考えればなんてことはない。

……将来的に勝負服、着ることになるかもしれないけど、そっちはどうなるだろう。いや、G1に出走できるかもまだ不透明なんだから、考えても仕方ないか。

(それにしても、うーむ)

困った。食事をしに行こうと思ったんだけど、どこも割と値が張る。

学生出店のお店は値段的にはそれほど高くないんだけど、やっぱりみんな女子ウマ娘だけあって甘味類に偏っている。お昼ごはんにするには少し……どうだろう。

外部のひとを招いているからがつり系の食べ物ならそっちの屋台やキッチンカーを利用するのが筋だけど、イベント価格だから軽く千円はする。他称も自称もケチなぼくにはなかなか手を出し辛いというのが本音だ。

「あら？ ……あれ、ストライプじゃない？」

「ん？ おー……？ うおっ、見たこと無い格好してる」

「あれ」

悩んでいたところで声が聞こえてきたので振り向くと、そこには大量の食べ物や景品を抱えたウオツカとスカレットがいた。

楽しんでいようや何よりである。手を挙げて応じると、ふたりは小走りでこちらに駆け寄ってきてくれた。

「どうしたの？ その服」

「ベテルギウスの出したお店の制服。どう？」

「似合……う、わよ？」

「なんかちよつと犯罪的だな」

「ウオツカ！」

でもそれは正直ぼくも思ってた

140に満たない身長で和メイド。ある意味ではお遊戯感があつて微笑ましいが、ある意味では男性の趣味的にややガチな雰囲気醸し出されている。

中身がアレなので実質的には訳あり商品として大安売りに出される類ではあるが、実年齢は確かに12歳（そろそろ13歳）なので少し微妙なところ。

「ええ、ストライプは……忙しそうね？」

「今はそうでもないよ。休憩中だから」

「ぽやつとあつちの方見てたけど、何してんだ？」

「どこもそれなりに値が張るなあって」

「そうかあ？」

うくん……ま、今は考えるのやめよ。

お金は大事だけど、結局は使うためのものだし。

「んー、ま、いっか。何か買ってくる」

「珍しいわね。高いって言ってるのに買いに行くなんて」

「お祭りだからねえ」

そう告げて、ぼくはキッチンカーでハンバーガーのセットを、屋台でお好み焼きなどを購入して近くの飲食スペースにふたりと一緒に向かった。

ハンバーガーは手作りの分厚いやつ。お好み焼きについては……

議論が勃発するので何風と表現するのは避けておく。飲み物は安心・安定・安全の水。ケニアの水質事情についてはノーコメント。

「あら。スイーツは買わなかったの？」

「うん。最近試食で山ほど食べてるから、塩っ辛いものの方が欲しくて」

「「あー」」

「おかげで味は保証できるものができたよ。サービス券あげるから来てね」

「あ、ありがとう……？」

「へー、ドリンク無料だつてよ」

無料にできるものがドリンクしか無かったとも言おう。

一段落してハンバーガーにかぶりつく……が、具に到達しない。ぬう、一口が小さい。

「ストライプって、いつもお金と商売のこと話してるけど、レースは大

「丈夫なの？」

「大丈夫だよ。人前で話さないだけだから」

「そういうトコやけに徹底してるよな」

「作戦が外に漏れたら大変だからねー。で、その辺ふたりはどう？
まずチームの方からだけど」

「ふふん、それがね。新しくチームに入ってくれるひとがいた……らしいの。これで4人よー」

「あとひとりチームに入ってくれりゃあ、出走できる条件が整うんだけどなあ」

「そうなんだ。おめでどう。それで……『らしい』って？」

「まだそのひと、よそのチームに所属してるらしいから……引き抜きするのにも手順が必要とかで、進展があるまでアタシたちに何があつたか教えてくれないのよ」

「ほー」

引き抜きねえ。

そうなると、時期的にこれは……スズカ先輩の件、だろうか。

彼女の才能が花開くのは後に行われるバレンタインステークスでのことだけど、大逃げの素質を見出されたのはそれより前……前年の香港カップでのことだ。

開催は年末だからまだ先の話ではあるけど、時期的にはおおむね一致している。書類の上でもチーム運営の上でも手続きは実際必要になってくるだろうし、トレーナーさんたちはその件で現在進行系で動いているのだろう。

そもそもを言ってしまうと、そんな簡単に事後承諾で話が進められるとは思えないし……アニメはわかりやすさと演出を重視して描くものな上に一期一話というキャラ性も固まっていけない時期だから、この世界と違いが出るのはしょうがない。むしろ違って当然である。
バグ枠ほくもいるしな！

「これじゃスプラウト記念大きな期待、注目を受けているデビュー前のウマ娘が出場できるエキシビジョンレース。ウマ娘アプリにおけるビワハヤヒデのストーリー第三話にて登場。なんかも出られねー

んだよなあ」

「そうだねえ……」

同情はするけど、こればかりはぼくにはどうにもこうにもしようがない。

チームの運営方針はトレーナーさん次第だ。まだどこにも所属していない子に名義だけチームに置いてもらう、ということもできるにはできるが、そもそもそんなことをするメリットがウマ娘側に無いので机上の空論もいところ。結局のところ、相性の合うウマ娘がチームに入ってきてくれるのを期待する他無いだろう。

……まあ、そのところは大丈夫だろう、多分。ゴルシパイセン「ウマ王伝説・最強になった件」ゴールドシッパにてグラスワンダーに「ゴルシ先輩」と呼ばれているため、プロフィール上所属は「??」だが、スベ世代から見ても先輩であることはほぼ確定的。がいる以上そのうちマックイーンも引き込まれそうだし。

「今は体を作る時期と割り切るのが一番じゃあないかな。まだまだ先も長いしね」

「気が長えーよー……」

そこは……人生経験の差ということだ。

いわゆる青田買い

その後はしばらくスカーレットたちと話して、他のクラスやチームの出し物を楽しむことにした。

今日の自由時間は限られている。射的に挑戦したり、謎解きゲームとして学園中に散りばめられたクイズを楽しんでみたり食べ歩きを試してみたりと、やろうと思ったことはだいたいできたように思える。

唯一、オバケ屋敷だけはふたりに強硬に反対されたので参加はできなかったのだけど……夏合宿の時の肝試しがよっぽど堪えたらしい。気持ちには……分かるような分からないような。ウオツカたちの反応の方が正しいというのは分かっているんだけど、ちよつと過剰じゃないかなと思わなくもない。

ほどなく自由時間も終わったため、ふたりと別れてチーム用店舗……の、裏口へ向かう。混乱を避けるための措置だ。

今の段階でぼくに注目するひともそう多くはないと思うけど、関係者と思われると流石にね。正面から入って邪魔してもいけないし。

「ただいま戻りました。ホールの方に行きますね」
「お願いします」

一時休憩中のサブトレさんたちに断りを入れてホールに入ると、出る前とはまた違った雰囲気的光景に移り変わっていた。具体的に言うと女性客がちよつと多くなっている。

先程の四人とは少し変わり、スカイ先輩、デジタル先輩、ドーナッツ先輩が和メイド。シャカール先輩が大正ロマン風という構成になっている。

……ちなみに、男装案は結局なかったことになった。というのも、貸衣装を発注するのに、一着だけ違うジャンルのものを紛れさせると少しだけお高くつくからである。あと単純にリギルと被る。

幸いだったのは、シャカール先輩が大正ロマン風だけで納得してくれたことだろう。露出とかヒラヒラ感という点で言えばこつちも抑え気味だったのが効いたかもしれない。これはこれでギャップが出

てイイ、という反応も見受けられた。

とりあえず、ぼくの仕事は……。

「お写真撮りましょうかー?」

「あ、いいんですか?」

聖蹄祭においては、禁止区域以外ならある程度自由に撮影ができる。

入場チケットそれ自体が撮影許可証になっているので、校内に入ってきて飲食をしていたり出し物を楽しんでいる時点で規則上は問題ない。あとは各個人の良識の範疇だ。

「だったらコレ、お願いします!」

「はい、じゃあ……」

カメラ起動状態のスマホを受け取って先輩たちの方に向ける……が。

(あれ、何か違う)

思ったように撮影できない。

なんか位置が悪い。位置……いや、あれ、高さというか角度だ。

……あ、高さ? 身長か。

く、くそつ、今まで写真とか撮ったことあまり無かったからまるで考えが及ばなかった。とりあえず試しに背伸びする……が、焼け石に水。手を掲げて……画面が見えないせいで撮影どころじゃない。ジャンプ、は論外。

どうしよう、と思い始めたその時、不意にドーナツ先輩が幅の広い頑丈な箱を持ってきた。

「……乗りな」

「はい……」

それは——見事なまでに丁度いい高さの踏み台だった。

およそ40cmほどで、ぼくが踏んでようやく成人男性の平均より多少高いくらいになる。

サムズアップを向けてくるドーナツ先輩の目にはぼくと同種の哀しみが漂っていた。

「縞毛のウマ娘の身長は最高でも150cm前後と言われている」

「どうした急に」

「環境や食生活などは関係なくこれが限界らしい。遺伝的に定められた、ある意味で人種的特徴と言えるかもしれない」

「そういえば、相対的に歩幅が狭いからレースでは不利、と聞いたことがあるな……」

「ああ。だからトウインクルシリーの盛んな日本に留学しているということは滅多に無い。だがこうしてベテルギウスに所属していることを考えると」

「それだけ実力を見込まれてるということなんですよお〜！ チェツクして……推してあげてください、是非……ふへへ」

「あ、はい」

写真を撮るその傍らで、客席の方からそんなやり取りが聞こえてきた。

デジたんパイセンにとってはあれくらいは基礎知識の範疇なのだろうか……さつきからあのひとらと話し込んでたし、多分相通ずるものがあるんだろうな……。

というか何気にぼく、先輩の推しの範疇に入れられている？ ……

正直、嬉しいと言うべきか怖いと言うべきか少し迷う。

「……どうぞ」

「あ、ありがとう……」

想定よりもはるかに長く時間がかかってしまったにもかかわらず、お客さんは特に文句を言うこと無く受け取ってくれた。

……いやあ、子供の見た目だし、実際、年齢も子供だし。こう、多少の失敗には寛容になってくれて……お……お得だな！ ……いや、うん。踏み台に登れば対応できるから問題なくなったとはいえ、やっぱり手間取った事実はちよつと堪えるし気にもなる。次はこんなことが無いようにしよう……。

「あの一、すみません」

「あ、はい、ご注文ですか？」

「いえ、写真を……」

「写真ですね。どなたと撮りますか？」

さ、気持ちを切り替えよう。場の盛り上げは先輩たちに任せて、ぼくは注文を取って写真を取って配膳をしよう。

そう思った矢先のことだった。

「キミとで……」

「はえ？」

我まだデビュー前で

「It's me?」意識

おまえや

「You」意識

オウ……クレイジー。

珍しいことをする人もいるものだ。いやこれはあれかな？ いわゆる青田買い。まだデビューしてなかったりデビュー直後だったりするウマ娘をいち早く推すというあの……。

うわすつご。初めて見た。いやコレぼく自身が経験してることだから、見たというか初めて経験したと言うのが正しいんだろうけど、本当にこういうことあるんだ……。

い、いや。いやいやいやいや。こんなこと許されていいのか!? とばかりにトレーナーさんたちの方を見ると、いいからやれ、とはつきりゴーサインを出された。

「たっぷり30秒以上フリーズしてンな」

「あー、セイちゃんわかる気がするなー。あの予想外のことが起きると真っ白になるの」

「今は顔真っ赤だけだな。カツカツカ」

それから、なんとか平常心を取り戻し全く取り戻せていないで撮影もこなすことができた。

その後も十数人に一人くらいの割合でぼくと写真を撮りたいという人が出て来たりしたが、同じように青田買いと思えばこれもまた納得はいく。

平常心を保ちながら保てない次々とこなしていったって、ぼくはこの年度の聖蹄祭を疲弊しながらもなんとか終えたのだった……。

……≠……

聖蹄祭を終えて少しばかりの時間が経った。あの後からぼくは度々スカイ先輩やドーナッツ先輩にイジられることにはなつたけど、ぼくは毅然とした態度でこれを躲した。

さて、時期はドーナッツ先輩とリムジン先輩がコックスプレートとBCターフの調整のため、それぞれの実家に一時帰国した頃。

トレーナーさんが先にドーナッツ先輩のいるオーストラリアへと飛んだ後、トレーニング中にサブトレさんがこんなことを言い出した。

「ストライプ、今度のシードリングカップに出てみませんか？」

「なんですかそれ？」

Seedling Cup

苗木杯？

言葉の響きからすると、スプラウト新芽記念に似ているけど、何か関連があるんだらうか。

「スプラウト記念と同じく、ジュニア級未満のウマ娘が出走できるエキシビジョンレースです。中・長距離路線を目指す子にとっては登竜門的なレースですよ」

「そんなレースがあるんですね」

「はい。距離は芝2000で、ホープフルステークスと同じです。スプラウト記念と比べるとやや知名度は落ちますが……」

「ダービーに対する菊花賞みたいな……」

「そういうことを言うのはやめなさい」

いや、まあ分からないでもない。

中距離路線はともかく、長距離路線はやや人気薄だ。

2400mを超える長距離G1レースは年3回のみしか行われないうのも原因のひとつだろうか。その内有馬記念はほとんど中距離レースとして見られているし、菊花賞は花形とはいえクラシック級でしか出走できない。シニア級で出走できるのは春の天皇賞のみ。短距離戦も少なくはあるけど、年2回開催されるレースは、どちらもクラシック・シニア問わず出走可能。マイル戦は年に7回も開催されるし、王道と称される中距離はもっと多い。

世界的な流れもあるとはいえ、怪我を誘発させやすいというのも大

きな要因としてある。欧州では長距離路線の整備も徐々に行われていると聞くけど、日本は今後どうなるか……。

いつそ何かこう、ステイヤーズステークスとかG1化したりしない？ ついでに東京大賞典も3000mに戻さない？ 無理か。無理だな。そんなぼくにだけ都合の良いこと無いわ。

「って言われても、出てもあんまりメリットありそうに思えないんですよねえ」

「賞金も出ますよ」

「出ます！」

「スゴイ現金なヤツだ……」

実際のところ、ぼくは元からお金目当てなんだから、策を晒すデメリットがあってもお金が入るといいう明確なメリットがあればそりゃ出走する。

ジュニア級未満という条件に限定されていれば、実力もある程度拮抗しているだろうし勝つ目はある。

それに別に本番のレースほど高額賞金じゃなくてもいいんだ。数万、数十万でもあれば先行投資や設備投資には十分。夢が広がるね。むほほ。

「時期はいつですか？」

「年始ですね。帰省の予定などはありましたか？」

「帰るお金がありません」

「……………」

すごく微妙な顔をされた。多分ぼくも同じことを言われていたら同じ顔をしていただろう。

けど事実だから仕方ないんだよなあ……定期的に連絡はしているから、そこまで心配もされていないだろうけど。

とはいえそもそも、帰るお金があったとして今の段階で帰るものかどうか。レースである程度結果を出してからにしたいというのが本音だ。

「というわけで登録よろしくおねがいます」

「え、ええ……」

あ、そういえばこれ、エキシビションとはいえやっぱりウイニング
ライブもあるんだろうか。賞金が発生しているってことは、多分ある
んだろうな。

振り付けと曲含めよく確認しとこ。

コックスプレート

フクキタル先輩が菊花賞に出走する前日の土曜日。

東京レース場では富士ステークスが開催されるこの日、トレセン学園のカフェテリアは異様な熱気に包まれていた。

普段なら日本のレースに合わせられている大型スクリーンのチャネルが、海外……オーストラリアのそれに合わせられている。

豪州最高峰の中距離G1レース、コックスプレート。今日はその開催日だった。

「そろそろ始まりますわね……」

「うわあ、ボク関係ないのにキンチョーしてきたよ。海外挑戦ってこんなに注目されるんだね」

「ねえ何でぼくチーム未所属の一年生の方に連れてこられたの……」

……が、そんな中でありながら、ぼくはチームの方じゃなくって一年生のいつものメンバーのいるテーブルの方にいた。

今回、情報収集やデータのまとめなどは、チームの部室で中継を見ているサブトレさんや現地にいるトレーナーさんがしてくれるので、ぼくらは観戦に集中しているというらしいそう。だから、チームの先輩たちも特に気にせず送り出してくれはしたのだけど……何で連れてこられたのかという理由が見えてこない。

ネイチャに視線を向けると、肩をすくめながら苦笑いされた。

「通訳？」

「いらなと思うよ……」

確かにオーストラリアは英語圏だから、微妙なニュアンスの違いを抜きにすればぼくでも通訳はできる。

が。

「日本の局でやるんだから日本の実況もつくだろうし……」

「だよなー」

「そうなの!?!」

「え!?! そうなの!?!」

「テイオー、あなた……」

テイオーとターボ、あとマヤノもこっさり驚いているのが見える。マジか。興奮でそれどころじゃなかったりしたんだろうか。まあ、皆とこういうの見るの好きだしいいけど。

「私たちはピーピードーナッツさんのことはほとんど存じ上げませんわ。よろしければ解説をお願いできれば、と思ひまして」

「そういうことなら是非」

流星にマックイーンはもう分かってたみたいだ。

……オリンピックとか、あと野球の海外中継とかも見てそうだし、その辺の中継事情も把握してるんだろうな、多分。

本人に言いはしないけど。

「あ、始まったよ★」

マーベラスに促されて画面を見ると、もう皆ゲートに入ったところだった。他の走者は……層が厚いと言うより、体格がすごい。余計にドーナッツ先輩の体が小さく見える。

ゲートは9番。あれは……うーん。

「位置が良くないね」

「そうなの？」

「走り方が独特だし、外めなのはちよつと厳しいかな……」

『さあ、今スタートしました』

例の人の声に合わせてゲートが開く。

さて……ドーナッツ先輩は、と。

(ううーん……これは、やっぱり良い位置とは言いき辛い。マズいぞ) ドーナッツ先輩の脚質というのは、ひとことで言えば差しなんだけど、もつと掘り下げて言葉にすると「前めにつける差し」だ。

あの次々と相手走者の背後を取っては次々に乗り換えていく海賊走法は、最終直線で余力を残したまま競り合いに持ち込めるという利点こそあるのだけど、体格の不利もあって「最終直線で後ろから一気に入ごぼう抜き」という派手な勝ち方を演じづらい。あれはある意味「そうするしか無い」類の苦肉の策。……を、戦法として昇華し高め上げたものだ。

最終直線に入った段階で、先頭の走者から数バ身でも離されていたらほぼ負け。序盤から中盤、走者が一列になった縦長の展開の中で、いかに前めにつけておくかが大事になる。

……だけど、現時点で既に10番手。

「厳しいって、どういふこと?」

「ドーナッツ先輩は、ああやって……ほら。スリップストリームって分かるよね?」

「他のランナーの後ろにつけて風の影響を受け辛くし、体力の消耗を防ぐ走法ですわね」

「うん。それをレース中、最終直線入るくらいまでかな? ずっと続けて、競り合いで確実に勝つために体力を温存するっていうのが先輩の戦法なんだけど」

「それって、順位落ちてたらダメじゃ……あ、そっか」
「そうなんだよね」

こうなると、競り合いの形に持っていこうとすればどうしても「体力を温存する」という目的は果たせなくなる。

見方を変えると、これは他のランナーと同じ土俵に上がっただけと言えなくも無いのだけど、元々の恵まれていないフィジカルのことを考えると「同じ土俵」に立った時点で展開としては最悪の部類だ。

『1コーナー回って直線、各ウマ娘まだ仕掛ける様子はありません』
「本当なら、直線に入る前にコーナーである程度上位のウマ娘の背後に回れる隙もあるんだけど」

「うわっ、伸び切ってる」

「見ての通りレース場の具合が悪いんだよね……」

コックスプレートの舞台となるムーニーバレーレース場は、一言で表すと長方形、としか言いようのない形状をしている。

この2040mコース、スタート直後と最終直線が異様なほどに短く、「中山の直線は短いぞ」で有名な中山レース場よりも更に短い。中山レース場310mに対し、ムーニーバレーはなんと173m。これでは序盤の位置取りも何も無い。先行や逃げが大幅に有利になる。

そこから第1コーナーを抜けた後はしばらく皆脚を溜めるため、一

列になって縦長の展開になる。後方集団は固まるけど、こうなると、前に行こうとするひとがそうそう横に來ないので、飛び移り辛くなってしまう。

ドーナツツ先輩の八艘飛びは、魔法のように相手の背後を奪うように見えるが、どこまで行ってもあれは技術だ。加えて、失礼ながら不利な展開を一変させられるような豪脚の類でもない。

たとえばこれがリムジン先輩だったら上がり3Fで思い切り末脚ハロンを使ってぶち抜くだろうし、ぼくなら……あそこまで成長できたらという前提になるけど、スタミナとパワーに任せて多少外を回ってでも好位置を取りに行くことができるかもしれないけど……。

『2コーナーに入ります。先頭はケリーリユケイオン、続いてレッドスパイド。注目のピーピードーナツツは依然10番手で動きません』

見ると、細かく動こうとしてるのは分かるんだけど、動こうとしてるだけで動ききれないし動けてない。今の段階で前に出ようとするひとが少ないからだろう。

『さてここから3コーナーおっとピーピードーナツツ、グングン上がっていく！ 3番手！』

「あつ、行った！」

「これは……行けるでしょうか？」

「トラちゃん、これってダメな方だよね？」

「うん……多分、かかっている」

ぼくがよく他人を引掛ける方だから分かりやすいけど、ちよつとムキになって、かかっている。

ドーナツツ先輩の走りは、その外見や態度からは分かり辛いけどかなり精緻で、基本的に計算に基づいたレース運びをする。

そのため、ベストの位置は……人数にもよるけど、今なら先行集団の後方、おおむね5、6番手。このままじゃ逃げのペースに潰されかねないし、後ろからやってくる差しや先行型のウマ娘の影にも気付けない可能性が高い。

『さあ長い直線を抜けて4コーナーが見えてきた、ここで右からサメ！ ノードスクアア口が抜け出してきた！ 更にアブルツツオが並

んでスパート！ 先頭に躍り出た！』

「ああつ」

「ヤバい！」

そして案の定——カフエテリアのあちこちから悲鳴が上がる。ま
ずい。今ので後ろにつけなかった！

咄嗟に元の先頭走者のケリーユケイオンの後ろについて四番手を
堅持してるけど、コーナリングしてる最中に「乗り換え」るのは至難
の業だ。

『ついに最終直線！ ザ・バレームーニーバレーレース場の愛称のあ
まりにも短い直線が待ち受けている！』

「短いってどのくらい？」

「1ハロンありませんわよ」

「そんなに!?!」

ドーナッツ先輩はなんとか前の走者を躲すことに成功したけど、先
頭でデッドヒートを繰り広げるふたりが、先輩の前に出てしまってい
る。

こうなるとまた更に外に出るしなくなるんだけど、そうすると横
にずれるために今度は加速が足りなくて競り負ける……。

頭を抱え……そうになったその時、不意に少し遠くの席にいたタマ
先輩の声が、やけにクリアに耳に届いた。

「——ここで入ったんか」

——直後、ぼくたちは目を疑うようなものを見た。

目の前のランナーを無減速で抜き去る、クロスステップ^{スウオー}。

10年以上前に日本の三冠ウマ娘が見せた、奇跡のような走法。彼
女は今、あそこでそれを再現し、差し切ってみせたのだ。

やりやがった、とばかりに画面の向こうでトレーナーさんが膝を
打って立ち上がるの見える。

想定を遥かに超えた勝ち方に、カフエテリアが一瞬静まり返る。そ
して直後、大歓声が辺りを包み込んだ。

『勝った！ ピーピードーナッツ！ 宝塚に続きオーストラリアをも
征服ッ！ ——ああああ!?!』

「わあああああつ!!」

——と、そうした直後。

ドーナッツ先輩がギャグみたいなコケ方をして、オーストラリアも日本も騒然となったのだった。

・・・≠・・・

「……脚にも命にも別状は無いようです」

「レース中でもレース外でもハラハラさせんじゃねエ!!」

それから、いち早くサブトレさんがトレーナーさんに連絡をしたところ、特段体に異常は無いという話だった。

流石はJWC出場馬の因子を継ぐウマ娘。こういう時ギャグで済むのは強い。

「練習でも成功したことのないものをぶっつけ本番でやったことで、成功はしたものの脚に余計な負荷がかかってしまったようですね」

「ま、ドーナッツ君でなければ大怪我だっただろうねえ。並外れた記憶力と学習能力があつて、体重が軽く、その上『領域』^{ゾーン}に入っていたからあの程度で済んだんだろう」

「ゾーンだぞーん」

今どこかで副会長の調子が下がったような気がする。

「ゾーン！ って古いドラマでやってたよね〜」

えっ、あれ「古い」の範疇なの!? TRICK2。2002年1月〜放送

「誤解を招かないために私は『超集中状態』と訳しているけれどね。時間の流れが遅く感じたり、思考力が研ぎ澄まされたりというのが主な特徴かな?」

脳内物質の作用によるものだから再現はできるよ、と掲げられたタキオン先輩の蛍光色のお薬は、その場でサブトレさんが飲み干した。

首から上が紫色になった。

「ああっ、モルモット君はしょっちゅう飲んでるじゃないかっ」

「ゾーンというものは無理に入ろうとして入れるものではありません

ん。そして必ずしも、入ったからと言って勝てるものでもありません。皆さんも注意してください。最後にものを言うのは基礎能力です」

「はい」

顔を文字通り紫にしてまで告げられたその言葉は、なんとというか問答無用の説得力があった。

……さて、今日はその後、ドーナッツ先輩の勝利に触発されたように合同トレーニングにも熱が入ったのだけど、その中でふと思ったことをサブトレさんに聞いてみた。

「あの。ドーナッツ先輩のしてた走法って、ギンシャリボーイの……」
スシウオーク、というのはあくまであっちの世界で通用する言葉だ。こっちの世界で特殊な名前がついているとは聞いていない。

というわけで仮称としてこのように聞くと、サブトレさんはすぐにピンと来たように指を立てた。

なおトレーニング中に顔色は元に戻っている。今度は髪が紫色になつた。

「無減速のステップですか？」

「はい」

あれは見た目の地味さに反して超高等技術だけど、使えるようになればそれだけで選択肢が増える……と、思う。あわよくばなんとか学べないかな……。

そういう意図を見透かされたのか、サブトレさんは困つたような笑みを浮かべて頬を掻いた。

「あれはドーナッツだから使えると判断して、お父……チーフトレーナーと協議の上、最近教え始めたものです。闇雲に覚えようとしても脚を壊すだけです。今のあなたには……」

「まあそうですよね。あ、それなら大丈夫です」

「判断が早い……」

正直そこについては最初からダメ元だ。

加えてあのドーナッツ先輩でさえ少し誤つたら転倒してしまうなんて、今のぼくがどうこうできるような代物でもない。

何かこう、コツでも掴めば使いやすくなったりするのかな、と淡い期待は持ってたんだけどね、本当にただ才能と適性があつてはじめてできる、かもしれない、というレベルの技術なら普通に練習を積んで基礎的な能力を伸ばしていった方が良い。

ぼくの能力を思えば、「それができなきや勝てない」状況になるようならその時点でレース展開として論外なわけだ。個人的には、小細工上等の精神でいるけど。

「というわけでトレーニングに戻りますね」

「はい……ええ。何でしょう、この釈然としない気持ちは……」

気持ちは分からなくもないけど、元はと言えばサブトレさんが言ったことじゃないですかね。

BCターフ

秋の天皇賞。

その長い歴史と格式から、秋のシニア三冠の第一冠目及び中距離路線における国内シニア級最強決定戦とも呼ぶべきレースであり、多くのウマ娘から目標とされている。

ジャパンカップも賞金額の高さから、中距離最強を目指すウマ娘にとっての目標とされることが多い。ただ、こちらは多くの国からウマ娘が招待されるため、国内という括りで見ると秋の天皇賞の方が……と考える人は多いだろう。

天覧試合となる可能性もあるため、格式の高さで言うところらの方が上とする向きもある。その辺りの捉え方は本当に「人による」としか言いようが無いので、ぼくから言及することは避けておく。

さて、秋天の結果だけど、結論から言うとこれはフラッシュ先輩が差し切って勝利した。

ダービーの時の上がり3ハロン32秒7の異次元の脚とまではいかないものの、33秒1という超豪脚。タキオン先輩もゴール直前まで一番手をキープしてたんだけど、油断した……というわけでもなく、こう、油断しなかったからこそ、背後に誰か迫っていないか確認したその一瞬の不意を突いたような形だった。

ああいう隙の突き方もあるな……とは思うけど、そもそもぼくは同じ差し型でありながら上がり3ハロンで突き抜ける脚が無いので、参考にしてもどうしようもなかったりする。

ちなみにトレーナーさんは秋天のために帰ってきてそのままアメリカに向かった。疲労が顔に出ていた。

さて、話を現在に戻して——土曜日の午前6時。BCターフの開催日である。

時差が時差だし、皆朝練で慣れてるのでそこについて何か言うひとはあまりいない。ただ、前回と違うのは、朝食を取りながら観戦しているひとが多いという点だろうか。かく言うぼくも、朝練を終えた

「そうだったんだ……」

「そうだったんだー!」

そうだったんだ……。

知らなかったそんなの……。

「つて、スカイさんとスナイパーさんは知っておきなさいよ! 授業で教わった範囲でしょう!」

「面目なし」

「にやははく☆ ……あれ、ウララはいいの?」

「いつものことだもの……」

また復習してもらわないと……と、キング先輩がうなだれるのが見えた。

「セイちゃんは……さては居眠りしていましたね?」

「ノーコメント」

居眠りしてたんだらうなあ……。

……いや、スナイパー||サンは何で知らなかったん?

「それに、ど・う・し・て! スナイパーさんも知らない風なの!」

「じゅ、授業中ニンポを開発しておった……」

想定外の方向だよ。

「ところでその『そうだったんだ』とでも言いたげなストライプ君?」

「心を読まないでくださいタキオン先輩」

「読んではいないよ。ただ普段の言動からサンプリングして予測をしただけさ。で、君が食べているそれは何だい?」

「トウモロコシの粉をそばがきみたいに練ったケニア風のお餅です」

ウガリ、という名前を出してもピンと来ることは無いだろうから簡単に伝える。

味……は、別に素晴らしくおいしいとかそういうわけではない。トウモロコシの香ばしさをちよい感じる……かなあ……? くらい。

要するに主食だから、扱的にはご飯のそれとそんなに変わらないと言っていい。付け合わせの方が重要なところあるし。あ、でも、白米は白米だけで食べるのが至高というひともいるし……うーん……

何とも言い辛い。

「ふうん。穀類の炭水化物というわけだね。そういう意味ではおにぎりともそう変わらないと思うのだけど」

「故郷だと『強くなりたいたならこれを食べろ』ってずーつと言われ続けてきたので、習慣ですね」

「炭水化物という意味ではそれほど変わらないと思うけどねえ。ま、こういうのは実践しなければ分からないものか。少し試させてくれないかな？」

「端的に言うとう？」

「少し分けてくれたまえ」

「いいですよ」

「素直だねえ」

ちなみにこのウガリ、半分くらい魂が日本人なぼくに合うように自作したもののため、本場のものとは違う。

でもそんなもんだ。現代の中華料理だって、ほとんどは日本人の味覚に合うようにアレンジしてある。中華の鉄人が言ってた。

料理の歴史というのはそのままローカライズの歴史と言っている。シチューがなぜか肉じゃがになったりナポリ関係ないのになぜかナポリタンなる日本発祥の料理が誕生したり、逆に外国の各地で寿司がSUSHIとして独自の進化を遂げたり……。

ケニアにいた時、お小遣いやりくりしてなんとか和食を食べに行くことに成功したことはあるのだけど、その時はローカライズされまくって逆に哀しい思いをしたけど、今となってはそれも良い思い出だ。……良い思い出かなあ。

「おいストライプ、アタシにもくれ」

「欲しいなら後で持ってきてきますよ？」

「ばっか、他人が食^{ひと}つてて美味そうだと思ったから食いたいの以後でってんじや興醒めだろ」

「ドーナッツ……お前コックスプレート終わってからちよつと態度がデカくなつてねエか」

「カッカッカ、そりゃあアタシがオーストラリアで一番のウマ娘つて

ことになったからなア」

うわははは、とわざとらしく笑うドーナッツ先輩に若干イラツとしたらしく、シャカール先輩の肩が吊り上がった。

ちなみに、今日ぼくがついているのは普通にチームの先輩方がいるテーブルだ。コックスプレートと違って早朝なので、チーム未所属の一年生はまだ起きて……るな、意外と。特にネイチャとマーベラス。今日もマーベラス！ って言って起きたんだらう。絶対調のようだ。逆にマヤノは多分まだ寝てる。テイオーは、朝練かな？ BCターフがあることは知ってるだろうし、見ないという選択肢は無いだらうから……録画くらいはしてるだろう。

「皆さん、そろそろ始まるようですよ」

「あ、もうですか」

ちなみにデジたん先輩は始まる前から興奮しすぎて鼻出血したので保健室で視聴中である。

さて、レースの様子は……と。

『さあ、各ウマ娘一斉にスタート。おっとハリウッドリムジン4番手、前めにつけています』

「あれ、珍しい」

「先行策？」

リムジン先輩の脚質は差し。それもまくり気味なもので、上がり3ハロンの急激な加速はフラッシュ先輩のそれを彷彿とさせるほどだ。しかし、それだけの速度を出す代償として脚への負担が非常に大きく、ケンタッキーダービーに勝利した時には実際に骨折していた。

先行策の場合、前に前に出ていく関係上、差しのときよりも継続して負荷がかかり続けることになる。だからこそ比較的短いマイルを主戦場として、その上、差しという形である程度負荷がかかるのを短時間に抑えていたんだけど……。

「BCターフって、12²⁴⁰⁰mですよね……？」

まずいのは、これが日本ダービーと同じ2400mで行われる競争ということだ。

マイル戦や、場合によってはケンタッキーダービーなどと同じ20

00くらいならまだもたせられると思うけど、長距離に片足突っ込んでる2400は負担が未知数だ。差しならまだしも……。

「こ、これ脚大丈夫なんですか？」

「分からない」

「分からないって……」

タキオン先輩がそう言うなら疑いようも無いけども……。

「考えうる対策は全部試した。私も脚の強度に不安を抱えていた時期があつてね、それを改善するために様々な実験を行ったものだよ。リムジン君にはそのノウハウを伝えている、が……」

「論理的に考えろ。体格が違いすぎんだよ。頭一つ以上デカいリムジンじゃ骨密度も筋密度も違う。同じようにやっただって同じ結果なんて出ねえ」

「あつ……」

「今日の一番人気は逃げで有名だ。差しに行くならあの位置しかねエのかもな……」

レース運びは順調、だけど、いつそ順調すぎるくらいだ。

理想的な位置取りに完璧なコーナリング。残り800mとなったところでいつもの「沈む」走法へと移行し、スパートがかかる……。

『さあ4コーナー回って直線！ ハリウッドリムジン、すごい脚で上がってくる！ 9番シャムロックとの差がグングン縮まっていく！』
リムジン先輩のパワーと圧倒的なフィジカルが爆発し、凄まじい末脚を見せる。

国内外を見てもリムジン先輩の末脚は上位に位置すると言っている。戦場を選ばない適応能力をも併せ持つ以上、差し切る体勢に入られたらその時点でまずい。

今日の一番人気である9番のウマ娘はこれを目にして——しかし、わずかに微笑んだように見えた。

『——ああつと、9番の脚に再び火が灯る！ 脚を残していたっ！』

『二の矢かよー！』

「ラップタイムがなんか遅えと思つたらー！」

逃げを戦法として選ぶウマ娘の性質は、おおむね4つほどに分かれ

る。

スズカ先輩のようにそれが性に合っているからというパターン、ス
タミナを活かす戦術として用いるパターン。あとはマルゼンスキー
先輩のように、他と隔絶した能力を持っているから結果として逃げの
形になるだけというパターンもあるか。そして最後に……スカイ先
輩のように、レース展開をコントロールするために逃げを選んだパ
ターン。

あの9番のウマ娘はそれだ。幻惑してレース展開を遅くすること
で、最後に逃げ切るための脚を残していた。これじゃあ間に合わない
！

「いや——ここに彼女はもうひと伸びできる」

そうタキオン先輩が苦い表情で呟いた、次の瞬間だった。

まるで銃撃でも叩き込んだかのようにリムジン先輩の足元の芝が
抉れ、その速度が更にハネ上がった。

——二段階加速!?

『伸びる、伸びる、まだ伸びる！　まるで二トロ噴射のような加速！

今！　ハリウッドリムジン、差し切った！　そして……四バ身離して

ゴール・インツ!!』

「うっそお……」

非現実的とも言える光景に、思わず息を呑む。

差して四バ身も離れたこともそうだし、脚部不安を抱えた状態での
突破りの二段階加速。勝利への執念に対する畏敬の念は当然として
も、あれだけのことができるだけの天賦の才に軽く引く。

映像越しでは分かりづらいけど、減速しながらゆっくり身を起こし
たリムジン先輩の額には、大粒の脂汗が浮かんでいる。少なくとも、
どこか痛めていることは確実だ。

しかし、それでも彼女は観客の方を向いて笑顔で手を振り、ウイニ
ングランを完遂してみせた。

「……ん、待てよ？　なあシャカール、あれどうなんだ？　レーティン
グ」

「ああ？　……今日の一番人気相手に四バ身離してるワケだから……

「おお？」

あと、下手するとリズムジン先輩が今年の世界ランキング上位に躍り出る可能性が浮上した。

そういえばJWC基準で考えてもアメリカ最強刺客とか呼ばれたから、そのくらいのレーティング順位あってもおかしくないんだよね、原作ハリウッドリズムジン……。

……ところで、観戦が終わった後で部屋に戻ってから、テイオーが録画するのをすっかり忘れていたことが判明したりするが、それはまた別の話である。

きつとそのうち本題に入る

BCターフの後、リムジン先輩が精密検査を受けたところ、大腿骨の関節部付近にヒビが入っていることが判明した。

強すぎる力が悪影響を及ぼし、骨折にまで至る……というのは、例として分かりやすいものはテイオーのそれだろうか。「トウカイテイオー」はストライドを広く取る走法と力強い踏みつけのせいで、軽微な骨折が頻発した。ウマ娘としてのテイオーも同じような展開を辿る可能性が低くない。

事情を知っているだけに、報せを受け取った時にはぞつとしたものだけど、意外なことに先輩たちはむしろホツとしている様子だった。

どういうこつちやと思つて話を聞くと、ケンタツキードービーの時はヒビとかそんな軽微なレベルではなく、完全骨折だったそうなの。

圧倒的に軽い症状に抑えた秘訣は、タキオン先輩が提唱し計画したプランCだ。曰く、自分の脚の脆さを改善するためのプランAと、他者を鍛えるためのプランBの折衷案なのだとか。

……とはいえ、骨にヒビが入ったことに変わりはないので、今シーズンいっぱいには休養。UR Aから出走の招待を受けていた有馬記念には（距離的不安があるから元から出るつもりは無いようだけど）出られないことにもなった。多分ドーナツ先輩が思う存分かき乱してくれるだろう。

さて、ともかく11月中旬。この日は選抜レースが行われることになった。

今回はリギルのおハナさんが誰かチームに迎え入れるらしい、という噂で持ちきりだった。レースそのものにはあまり関係無いぼくの耳にも頻繁に聞こえてくるほどだ。多分、スズカ先輩の一件が影響しているんだろう……というのは、ぼくの中だけの秘密である。

「うーん、まあまあ売れたかな」

さて、今日の商売は、肌寒くなってきたこともあつて温かいものと冷たいもの両方のドリンクを用意してきた。

売れ線は抹茶系。あと生徒からは、最近メニューに追加したタピオカを追加したドリנק。聖蹄祭の時のツテが早速活きたような形だ。しかし同時に、そろそろ見た目の物珍しさや安さだけでは売り切れないことも増えてきつつある。苦戦とまでは行かないけど……そろそろ大幅なクオリティアップも視野に入れるべきかもしれない。

ただ、そうなると値段が上がることになるし……そもそも安い方の商品をオミットすればそれ目当ての客離れも進むし……うーん、やっぱり商売は奥が深い。そう思って店じまいをしようとしたそんな時のことだった。

「ハムツ、ハフハフツ、ハグツ！」

「……………」

屋台の前に、持参した椅子に座って何やら麻婆豆腐をかつこんでいる芦毛のウマ娘がいる。

何で今？ どうしてここで？ いやそもそもあんたぼくと知り合いいでもないよね？

そういう諸々の疑問を解消する理由は一つ。

——彼女がゴールドシップだからである。

ぼくは頭に湧いた色んな考えをそのまま投げ捨てた。

商品の余りをシェイクしてコップに移してシユツと滑らせ渡す。

「あちらのお客様からです」

「おう、気が利くじゃねえか！」

ちなみにあちらと言って示した先のお客様はいない。実際にいるのは知らない黒鹿毛のウマ娘だった。突然何とも形容し難い小芝居に巻き込まれたおかげで相当ビックリしたようで、明らかに顔がひきつっていた。

「……なあスカーレット、何でストライプのやつあんな普通に対応できてんだ？」

「アタシに聞かないですよ……」

ふと見ると、視界の隅で木に隠れた状態でウオツカとスカーレットがこちらを観察していた。

ははーん。スピカ絡みの何かだな？

「ところで大将、ここにスシは置いてねえのかい？」
「あるよ」

「あるんだ……」

「はい芽ネギ寿司」

「おうコレコレ！」

「それでいいんだ……」

なぜこんなところに寿司があるのか？

そもそもぼくはこんなものを持ってきていたのか？

いったい何を目的にこんなことを？

そんなものは分からない。多分ぼくはもう既にゴルシワールド聖芦毛領域とかそんなのに取り込まれているんだと思う。

きっとそのうち本題に入るだろうから流れに身を任せよう。

「ところで大将、二時間後は空いてんのかい？」

「空いてござんす」

「じゃ、その頃にまた来るぜ」

「へえ」

そう言い残すと、ゴルシパイセンは持参した皿を持ってそのままどこかへ行ってしまった。

後を追うようにしてスカレットとウオツカもこちらのことを何度か気にしながら去っていく。

……………

「何だったんだろう……」

彼女が立ち去って我に返ったぼくは、結局何をしたかったのか測りかねその場にしばらく立ち尽くすのだった。

それからちようど二時間後、夕日の差すトレーニングコースに、突如としてその芦毛ゴルシは姿を現した。

「ああ？」

「ゴルシさん……？」

まるでターミネーターが溶鉱炉に親指立てながら沈んでいく逆再生を見ているかのような登場だった。アングルの意味でも筋力的な意味でもどうやってあれを再現したんだろう。

再現が終わってトゥツ、とばかりに着地した彼女は、当惑する先輩たちをよそに途轍もない速度で迫ってくるや、そのままぼくの体を抱え上げてしまった。

「ゴルシさん？ と、突然何を？」

「ちよつと借りていくぜー」

「えっ」

「えっ、ちよ、おいゴルシ！ おーい！」

一瞬の凶行であった。

ぼくはシードリングカップに向けて長距離の経験が豊富なフラツシュ先輩とシヤカール先輩からコツを教わっているところだったのだけど、トレーナーさんたちはちよつとスナイパー先輩とスカイ先輩のデビューに向けてつきつきりになっている状態だ。サブトレさんたちが何か言う前にぼくはそのまま攫われてしまった。

……年齢も近いっばいなので、普段の素行も知っているのだろう。シヤカール先輩もフラツシュ先輩も、まあゴルシ（さん）だし、という空気になっていたのが不幸中の幸いか。それはそれとして後でトレーナーさんから苦情が行きそうなのは否めない。

「突然酷いじゃないですか」

「悪い悪い、でも二時間後空いてるかって言つたら？」

あれそういう意味かよ。

「はじめましてでいいんですかゴルシ先輩」

「話を聞いてて初対面って感じがしねえからはじめましてじゃなくていいんじゃない？」

なんつー突飛な発想だ。

いや平常運転か。

「ぼくも色んな噂を聞いてたので初対面という気はあんまりしません」

「だろ？」

「それで話を聞いてたというのは？」

「ウオツカとスカーレットに『オマエらの知り合いで一番変なヤツって誰？』って聞いたら」

「だいたいわかりました」

「変なやつ……変なやつか……まあ否定できないしいいか……」

「で、どういったご用ですか?」

「なんかスピカのトレーナーが有望なチーム加入者がいるから連れてきてくれて言つてよ、その手伝い頼めそうなヤツ探してたんだ」

「へー……え」

「マジ?」

「……いやいや、ちよつと待とう。スピカだからと言っても、もしかしたらぼくが思つてるのと違うひとかもしれないし。」

「ぼくが知つてる範囲で言うと、アニメだとスカイ先輩は個人のトレーナーに指導を受けてたはずだから、チームの構成が違うことだつて十分あり得るんだよ。」

「どんなひとです?」

「こいつ」

と、ゴルシ先輩が差し出してきた写真に映し出されていたのは、黒鹿毛に綺麗な流星を持ったウマ娘……。

—— スペ先輩やんけ。

「いやこのひと編入してきたばかりだよな? 8月の選抜レースは出てないから今日のレースが初めてで……え、マジ?」

「スペ先輩……?」

「おつ、知つてんのか。なら話は早いな! じゃ、ちよつとついてきてくれ!」

「ついてくも何も抱えられとるんですが」

「へへっ」

ともかく、そんな風に連れてこられたのはチームスピカの部室だった。

「ウオツカとスカーレットもいたのだけど、案の定、ぼくが来たことについては相当動揺しているようだった。いやチームの関係者じゃないよね? という感情がアリアリと見て取れた。」

「で、このスペシャルウィークってウマ娘を連れてくるわけだが」

「ストライプ無関係よね!?!」

「まあいいじゃない」

「何でお前が一番落ち着いてんだよ!？」

「時には流れに身を任せることも大事なんだよー」

激流に身を任せ同化する的なサムシングである。

二度目の学生を経験することになったから分かるけど、特に学生はこういうノリが大事だ。

社会人になるとそうも言ってもらえなくなることが多くなるからね……。

「で、どうやって連れてくるんです？ ゴルシ先輩」

「こういうマスク着けて……こういうサンングラス着けて……こういう麻袋に詰め込んで」

「拉致じゃないですか!!」

「いいのよそんなことして……」

「そんな不謹慎なこと……やろうぜ!」

「オマエならそう言うと思ってたわ」

いやね。正直あのスピカ特有の悪ノリ、ちよつと混ざりたかったんだよね。

いや、だってホラ、今後のこと考えたらウオツカとスカーレットだけじゃなくてテイオーとマツクイーンもスピカ入りする可能性が高いんだよな？ ターボもネイチヤもカノープスだし。ぼくチームだと同級生いなくて一人だし。先輩方は皆優しいけどさ。やつぱりちよつと寂しいじゃん。

「いや、これいいの……?」

「トレーナーも『入る』って言ってるし、いいんじゃないかしら」

「多少強引に行った方がいいよ。ぼくはそれでチーム入ったし」

「オマエどんな勧誘受けたの?」

「ニンジャが突然部屋の前に……」

「面白^{おもしろ}えーやつ……」

というわけで、そういうことになった。

……≠……

夕焼けに照らされた正門前の道をトボトボと歩くウマ娘の姿がある。スペシャルウィーク先輩その人である。

今回の選抜レースはチームムリギルの入部テストも兼ねられており、成績優秀者には優先しておハナさんから声がかかることになっていた。サイレンススズカ先輩に憧れているスペ先輩は、彼女が所属していると聞くりギルへの加入を熱望していたのだが、結局今回のレースでは出遅れが響いて二着。おハナさんが声をかけたのはエル先輩だった。……ということも項垂れているのだろう。

ふと、スペ先輩の顔が正面にある看板に向けられた。チームスピカの部員募集看板である。そこには犬神家よろしく三人のウマ娘がダートに埋められている写真が収められていた。即座にドン引きしたのが見て取れる。

「あれどう撮ったんです?」

ウマ娘第一主義のトレーナーさんが承諾すると思えないけど。

「ナカヤマに頼んだ」

「ああ……」

ナカヤマフェスタ先輩か。あのひとはなんというか、ウマソウルの関係性両者共にステイゴールド産駒のおかげかゴルシ先輩にある程度まで対応できる稀有な方だ。ドン引きしながらか、それともノリになったか……まあ、いずれにしろ撮ったことには変わりないだろう。面倒見は良い方だろうし。

見ると、再びスペ先輩は項垂れてため息をつきながら歩き始めた。ゴルシ先輩は即座の前に立ちはだかり、胸でスペ先輩を受け止める。直後、誰かにぶつかってしまったと感じ取ったスペ先輩が咄嗟に謝ろうと顔を上げるが、サングラスにマスクという明らかな不審者ルックを目にしてその場で固まった。

「……………え?」

「スカーレット! ウオツカ! ストライプ! やあっておしまい!」

「あ……あの、名前言ったら変装の意……ストライプさん!? つぶ

ええ!？」

「はろはろー。スぺ先輩確保ー」

「「えっほ、えっほ、えっほ」」

……というわけで、スぺ先輩の確保には成功。

ぼくは元からスカイ先輩経由で知り合いだったので見事に即バレしたがそこはまあ別に構わないというか大した問題ではない。

皆でえっほえっほと身柄を運び数十秒、チーム部室に放り込んで麻袋を取って挨拶と相成った。

「「ようこそ、チームスピカヘー」」

「おい一人部外者がいるぞ」

「へへえ」

「俺たちの友達だし大目に見てくれよトレーナー」

「いや親爺おやっさんのトコの子だぞ……情報抜かれちゃ敵わないんだが」

「抜かれて困る情報自体無いじゃねーか」

「うぐ……」

うん……まあ、そこなんだよね。そもそも活動実績そのものが無いのでぼくが抜く情報も何もあつたものじゃない。利害云々以前の問題だ。

なので、今回のぼくはただスカーレットとウオツカの友人として、あとぶつちやけノリで来たんで気にしないほしい。

あと、情報と言うならそもそも頭角を現したら勝手に集まってくる。スぺ先輩が編入直後でチームに加入するという話題性もあるから、データ収集そのものはむしろ順調になりそうだしね。

「と、というか私！ 入るとはひとことも言ってますんよ!？」 勝手に決めないでくださいよー!」

「勝手に決める。お前は俺が磨く」

「言い方変態っぽくない?」

「だな」

「よね」

「お前らなあ……」

「まずメリットを提示してはいかがですか？ あんまり強引なやり方

だとウマ娘とトレーナーとしての信頼関係の構築に影響が出ますよ」
「それ強引に連れてきた私達の言っ正しいセリフ？」
「えへっ」

都合の悪いことは忘れよ。時に人は自分のことを棚に上げてでも
他人にものを教えるということが必要なのだ。

まあ今はそういうタイミングには該当しないけど。

弱点が無い

スベ先輩の説得は割と難航した。というのも、アニメと違ってスズカ先輩がこの場にいないためだ。

既に書類上、移籍は済んでいるという話なのでそれを見せればいいとも言えるのだけど……そもそも、ここまで大きな関わりを持っていなかったトレーナーさんが、スベ先輩がスズカ先輩に対して憧れを抱いていることを推察するのは難しい。それに「スズカ先輩がスピカに移籍する」ということは話題にも出してないから、そこをいきなり突いていくのも不自然極まりない。

ただ、この場にいる全員栗東寮だから、夕食時などにスベ先輩がスズカ先輩を慕って追いかけている姿はこの二ヶ月余りの間に何度も見かけている。導線を引いて話題を引き出すのはそう難しいことではない。

「スベ先輩ってやっぱり、スズカ先輩と同じリギルに入りたいですか？」

「そうですね。そのために選抜レースにも出たんですけど……流石に痴漢の人は……」

「ああ？」

「痴漢ン？」

「ち、違う違う違う！ 勘違いだって！ あくまでトレーナーの見地からだな……」

「ぼくの脚も触りましたもんねえ」

「有罪ー!!」

「ぐあああああああ！」

やっべ、この話するの忘れてた。

……まあ、このトレーナーさん無駄に頑丈だからなんとかなるだろう、多分。

そして案の定数秒経てば復活して起き上がってきた。無敵かよ。

「なんだ、サイレンススズカと同じチームに入りたいのか？ だった

らなおのことスピカに入ればいい」

「どういうことだよトレーナー?」

「前から移籍の話をしてたろ? それがスズカだ。もう書類上はこっちに移ってきてる」

「そうだったの!?!」

「ほー。だからおハナさんが今回の選抜レースでスカウトをするなんて噂が立ってたんですね」

ちようどひとり分のキャパが空いたというのはそういうことだ。スペ先輩は……うん、絶句してる。こんな偶然があるなんて、という驚きにも思えるし、痴漢トレーナーさんのもとにスズカ先輩が来たことへの危惧にも思える。

しばらく唸って考え込むような素振りを見せて、ようやくスペ先輩は口を開いた。

「わかりました……チームに入ります!」

「よおし! これでようやくチームが始動できるな!」

「5人必要だったからな」

チームに必要な人数は5人。これは規則として定められており、例外は特殊な事例——例えば「突然脱退者が相次いだせいで規定の人数を割った」アプリのチームシリウスとか、「必要があつて最低人数を割るチームに移籍したが、既に出走登録を行っていた」というようなケースだろうか。

香港カップの时期的に、スズカ先輩はそろそろ出走登録は終えていくはず。特殊な事例の後に該当はしそうだけど、やっぱり例外的措置だから早めにチームメンバーを揃えるに越したことはない。

「それじゃあトレーナー、アタシ1月のシードリングカップに出るから、出走登録お願いできる?」

「えっ、スカーレットも出るの?」

「も? ……ってことは」

「ぼくも……」

「そ、そう……」

お互いに一瞬「うげえ」と言いそうなオーラが漏れていた。

そっか、スカーレットも出るんだ、シードリングカップ……まあ、トリプルティアラの三冠目、秋華賞と同じ距離だし、叩き台としては申し分無い。

スプラウト記念の方が距離的には適正だけど……と思ったけど、あつちはあつちで出走条件が厳しい。今日までチームとして成立してなかったスピカのメンバーだと、選外でも仕方ないか。

その分、シードリングカップは割かしその辺りの条件が緩いから、出てきてもおかしいことは無い。

問題は、スカーレットのフィジカル面の強さだ。

本来、スカーレットに一番適しているのはマイルから中距離。しかし、「ダイワスカーレット」は有馬記念を走り切るだけの能力があり、その魂を継いでいるスカーレットにも同じことが言える。

適性外のはずの長距離を走破できた理由は、有識者によれば「生まれ持った能力だけで距離不安を克服した」のだとか。その分前に前に行ったがる癖があり、「逃げ」しかできないとまで称された。だから折り合いがついて先行策が自在にこなせるようになれば、もつと強かつたのかなんとか……。

まあこれがキツイ。何がキツイって弱点が無い。ただ強いから強いつていう理屈のない強さはいっそ暴力的ですらある。流石は生涯に一着と二着以外取ったことの無いミス・パーフェクトのウマソウル。対処の手がグツと少なくなってしまった。

「あのう……ウオッカさん？ スカーレットさん？ ……は、何で今一瞬嫌そうな顔を？」

「ん？ と……ストライプのヤツと走るとスゲーやり辛いからじゃないですか？」

「やり辛い？」

「ええ……ストライプはとにかく色んな作戦を立てて走る子なんです。だから、思うような走りをさせてくれない」

「スカーレットと走ったこと無いよね？」

「ウオッカから散々聞かされたもの。分かるわよ」

ぼくは軽く肩をすくめた。なるほど、お互いちよつとやな気分にな

るわけだ。

ぼくはスカーレットに強みを出し切られるとその時点で負け確定。対するスカーレットはそもそもその強みを出し切れるか不安。

いやあ、また面倒なことになっちゃったぞ。

「そういうことならお手伝いも終わったし、そろそろトレーニングに戻らせてもらいますねー」

「ああ、邪魔して悪かったな!」

「いえいえ、楽しかったです。じゃ、スカーレットにウオツカに先輩方、また」

「ええ、またね」

「気をつけて戻れよ」

一礼して部屋を出ると、外はもうだいぶ暗くなっていた。こりや怒られるかなあ。

ま、それもいいや。変なこととして怒られるのもまた青春って感じ
で。

で、ベテルギウスのチーム部屋に戻ったところ——まずサブトレさんが開口一番こう告げた。

「上手く情報は抜けましたか?」

怖いよ!

「サブトレさん、叱るでも指導するでもなく淡々とそういうこと聞いてくるのどうかと思います」

「ゴールドシップの素行は今更ですから、スカイたちのように故意のサボりでないなら私からは何も言いません」

「わかりました。今日の遅れてる分はしっかりやります」

「よろしい。で、何か新しいことはわかりましたか?」

「あの、サブトレさんはぼくのことスパイか何かだと思ってません?」

まあありますけど……」

「半分冗談だったのにあるんですか……」

と言っても、すぐに判明する程度のもので大した情報でもない。スピカにスペ先輩とスズカ先輩が加わってチームとして始動すること、次のシードリングカップにスカーレットが出走することくらいのも

のだ。

しかしそれを伝えると、サブトレさんは頭が痛そうにこめかみに軽く指を当てた。

「ストライプ、あなた本当にスパイとかじゃないですよね？」

「コレそんなに重要な情報ですか？」

「スピカはこれまで、トレーナーの一身上の都合によって活動を休止していましたが、彼のウマ娘を見る目は確かです。ウチやリギルと違って放任主義のケコそありますが、要所での確かな指導をするとおハナさんから伺っています。その分やや近視眼的なものの見方をしてしまうとも言っていました……」

うん、まあ、そのへんは学生のぼくが聞いても詮無いことだ。

苦笑いを返すと、サブトレさんは小さく咳払いして話を続けた。

「ともかく、その新しく加入したというふたりも含め全員の實力を調べる必要があります。このことが知れただけでも幸運ですよ」

「そですか……」

……困ったぞ。今回はそんなつもりじゃなかったと言ったのに、何か結果的に情報漏洩の一手になってしまってる。

うーん……ううう……ん……まあ、早いか遅いかの違いでしかないか……ここはノーカンということにしてももらいたい。うん。

スペ先輩にしてもすぐデビューさせるなんて真似をするとは思えないし、スズカ先輩が大逃げに目覚めるのはバレンタインステークスから。情報を優先的に入手してもそんな大勢には変わり無さそうだ。

……うん、多分、誤差……になる、はず。

「じゃあ、ぼくトレーニング行きますんで……」

「ええ。必要十分程度に頑張ってください」

その日は軽い罪悪感でちよっとトレーニングに身が入らなかった。

ウイニングライブ狂気の仕様

翌週、スペ先輩がメイクデビューで一着を取って帰ってきた。
なして？

「一週間で仕上げ上がり3ハロン34秒8で差し切り一着？ トレーナーさんは正気か……？」

「それより見てよストライブ、『天を仰ぐ見事な棒立ち』だって」
「会長怒るだろうなあ……」

「だよー……」

週が開けた月曜日、ぼくらの教室は……ぼくらの教室「も」かな？
その話題でもちきりだった。多分他の学年もそんな感じになつて
る。

編入生が突然零細チームにスカウトされたと思ったら、一週間後の
レースで劇的な勝利！ ……ウイニングライブが0点というオチま
で含めて見事な語り草である。

すすす、とネイチャがスカレットとウオツカに視線を寄越すと、
ふたりは気恥ずかしそうに目を逸らした。

これはライブのトレーニングやってないっぽいな……。

「トラちゃんは大丈夫なのかなー？」

「ベテルギウスはライブにもしっかり力入れてますー」

そう、シャカール先輩がうまびよい伝説を完璧に踊って歌ってみせ
るくらい、少なくともライブに出て恥をかかない程度には全員仕上
がっている。

ぼく自身については？ ……ふ、普通……かな……？

いや、うん。これは仕方ないと思う。他のチームメンバーは既に一
年以上チームに在籍しているけど、ぼくはまだ一年目でデビューがい
つになるかも決まってるないし。まず体を仕上げるのが最優先。そ
の上でメイクデビューに合わせて調整しているのだから、今の時点で
ちよつと半端な状態なのはある意味当然だろう。というか普通はそ
うする。スペ先輩に課されたローテが頭おかしいだけだ。

と、そう思っていたところで上から声が降ってきた。

「なるほど、それが大言壮語でないことを祈りたいものだが」

「うわっ!？」

「カイチョー!？」

「お、おはようございます会長さん……」

よもやよもやのお人である。気付けば会長がぼくらの背後に迫っていた。

テイオーがいるからとはいえ、気軽に友達にやるみたいに片手を挙げられても困る。周りざわついているし。

「どうして急に……」

「少し頼みがあつてね。テイオー、いいかな？」

「うん、何でも言つてよ!」

「相手が会長さんだからつてまた安請け合いでするー」

と、そこでぼくはティンと来た。コレは……例の件だな。

アニメだとウオツカやスカレットがデビューしてウイニングライブの練習不足が浮き彫りになつてから話が出てきたわけだけど、こつちの世界だとまだデビューする予定は無いし……一回でもこんな風に記事にされたとなれば、トレセン学園の指導力不足が疑われることになる。見る側は「トレーニング期間が一週間に満たない上にライブのトレーニングはそもそもしてない」なんて事情を汲み取つてなんてくれないからね。いや、汲み取つてたら汲み取つてたでトレーナーは何やつてんだ、という話になるか。

「スペシャルウィークの件は聞いているね？」

「うん、まあこれだけ大きく取り上げられてればね……」

「そうだな……。そこでなんだが、テイオー。彼女にレッスンをつけてあげられないだろうか？」

「ボクが？」

「良ければサバナストライブ、君にもお願いしたい」

「あー。順位で振り付け変わりますから……」

1着2着3着で変わり、更にバックダンサーの場合もまた異なり、時によっては掲示板入りの4着5着も振り付けが変わる。ウイニン

グライブ狂気の仕様である。

これを教えようと思うと一人二人では当然手が足りない。そしてチームスピカはその性質上、あまりウイニンググライブに力を入れていないようなので、このまま放置しておくとも目も当てられないような惨状になりかねない。

「トレーナーさんに許可を取ってからなら問題ありません」

「それは重畳」

「ボクも問題無いよカイチョー！」

「ああ、テイオーも力戦奮闘してほしい」

「あつ。でもそうなるのアシスタントがあと何人が欲しいかな……ねえマヤノ、マヤノー！」

ああ、会長に力戦奮闘なんて言われたからテイオーがかなり張り切ってしまった。

会長も苦笑いしているからこれは想定外なようだけど、これはこの後どうなるか不安だなあ……。

……≠……

それから夕方になって、コーチ役を申し出たぼくらは会長たちに指定されたカラオケボックスに集合していた。

「いくらなんでも6人は多すぎるでしょ」

「あつはは……だよねえ……」

……集合しすぎていた。

最初にテイオーがマヤノを呼び、そのマヤノがじゃあマベちゃんも一緒にと言い、更にマーベラスがネイチャを呼び、隣にいたターボが仲間外れを嫌がりついてきて……当初の人数の三倍だ。既にカラオケ大会状態になっている。

マックイーンは……呼ばれなかったと言うよりは断られたと言った方がいいかな。元々メジロ家で専門のコーチのもと指導を受けているらしく、ダンスも歌もできるのでわざわざ集まって復習することのメリットがあまり無い。加えて、ひとに教えられるほど達者ではな

い……というのが本人の弁。なんだかんだこの場にいたら頼もしかっただけに残念だ。

というかターボ師匠、普段の印象と裏腹にやたら上手いな……曲そのものがハイテンションになっていつてるけど。

「はー！ 歌った！ はい次ストライブ!!」
「んー」

マイクを渡される。それと同時に、テイオーのスマホが音を立てた。どうやらそろそろ先輩たちがやってくるらしい。

じゃあ、と思って入力したのは「winning the soul」。待ってましたとばかりにテイオーが二本目のマイクを手に取り、ライブ練習に必要なだからということでお店に借りた三本目をマヤノが取って立ち上がる。

「じゃあテイオーセンターで」

「ボク？ うーん……ま、当然だよね！」

「テイオーちゃん今悩んだフリしたでしょ」

「えっ。何のことかな？」

今のフリかよ。

ともかく、「winning the soul」は曲調が激しく、ダンスの振り付けも比較的共用部分が多いため、ウイニングライブとしてはやりやすい方の曲だ。

クラシック三冠の勝者がセンターに立って歌う権利を得られるため、テイオーが一番好きで得意な曲というのもあるし、今後スぺ先輩が三冠路線に進むに際して、どうしても接する必要がある出てくる曲でもある。まずはこの部屋に来た時にこれでビシッとキメて……。

「こんにちは……うわあっ、いっぱいいる!?!」

もう来たし！

計画オジャンだし!!

「何い？ うおっ、テイオーとストライブだけじゃないのか!?!」

「お邪魔してまーす」

「マーベラス★」

「何だ、いつものメンバー勢揃いじゃねえか」

案の定、スぺ先輩とトレーナーさんは人数に驚いたようだった。続いてやってきたウオツカとスカーレットはことの経緯を知っているので、ぼくらの性格を知っているふたりからは「やっぱりか」とでも言いたげな感情が滲み出ていた。ゴルシ先輩は爆笑している。

「えつと、つまり……テイオーさんたちが今日のコーチってことですか?」

「そーゆーこと!」

「あ、でもアタシとターボとマーベラスはコーチ受ける側なんで……」

「みんなまとめてしっかり面倒見ちゃうからねー☆」

「マヤノがコーチ役? ……それはそれで少し不安だわ……」

「なんでー!?!」

スカーレットがそう思うのも仕方ない。マヤノは超がつくほどの天才だけど、同時に相当な感覚派で、理論や過程をすっ飛ばして即座に正解にたどり着いてしまう。同じことを他人に教えたところで理解できるはずもない。

……ただ、こう、同じ感覚派の天才に教える時なら、理解できるのではないかと……希望的観測だけど。某球団の説明が擬音ばかりなN元監督のエピソードとかの実例もあるし、そこにちよつと期待している部分はある。どう考えてもスぺ先輩とかウオツカとか感覚派の典型例だろうし……。

では、テイオーの方はどうかと言うと、どっちの要素もあるので何とも言えない。本人が度々口にするように「無敵のテイオー様」として相応しい才能はある。同時に無敗の三冠ウマ娘を目指して行っている努力の質も量も本物で、抜き打ちテストでホイと100点を取るほど頭も良いから理論というものの大事さも理解している。

ぼく? 理論先行の頭でつかち。

と、まあそんな風な三人なので、他人に教えるにしてもいい具合に欠点を補い合えるんじゃないかなあ、と思ってる。同時に、こんがらがってゴツチャゴツチャになる可能性も否めないでいる。難しいところだ。

「スカーレットとウオツカはもうちよつとライブの練習に時間を割けばデビューまでにはなんとかなると思う、けど……デビューしちやつたスペ先輩は、早急に基本を学んでもらわないとまずいと思います」「ですね……」

「逆に何でトレーナーはライブの練習せずにメイクデビューに出しちゃったのさ」

「それは……まあ、そうなんだが……」

「あつ、マヤわかつちやつた。きつと普段からライブのトレーニングもしてるだろうって、ちよつと想定が甘かつたんだよ」

「ぐ……」

凶星つぼいなこりや。
スペ先輩って中央に来るまでその類のトレーニングをする習慣が無かつたようだし、そのところのすり合わせしてないとそりや認識の齟齬も生まれるよ。

ただ今回の場合、最低限教官から教わってるはずなのに全部頭から抜けちやつた上に棒立ちで歌うことも忘れちやつたスペ先輩も悪い部分がある。ライブの出来について確認せず即翌週にレースに放り込んだトレーナーさんもだいたい悪いけど。

「カイチョー怒つてたよ。『ウイニングライブを疎かにする者は学園の恥』……だって」

「ひええ……」

「そこまで怖い表情では言つてくない？」

苦虫を噛み潰したような表情で言つてはいたけど。

直後にテイオーが「そっかー」と返した時に目を見開いたのは、多分「疎か」とかかっていることに気付いたんだろう。何でそんなどうでもいいところに着目するんだ……。

「ま、でも安心してよ。ボクらがみつちりスパルタで教えてあげる！」

「す……スパルタ……」

「スパルタにならざるを得ないとも言います。トレーナーさん、次の出走予定は？」

「そこは猶予あるんだな」

アニメだとどうだったっけ。弥生賞はやってたのは覚えてるけど、バレンタインステークスとの間隔を考えると……毎週レース出てるペースだっけ？ 具体的には覚えてないけど。編入がバレンタインS（2月14日に近い土日）直後↓翌週にデビュー（2月中旬）↓二勝目（アニメではダイジェスト。具体的なレース名などは無し。2月末）↓弥生賞（3月上旬）という流れで連闘に継ぐ連闘という狂気のローテーションが組まれている。

ともかくそれだけ余裕があるなら、必要に応じてこういう形でトレーニングをしていけば、恐らく……「Make debut!」なら問題なくマスターできるはず。あとは……あんな風に真っ白になつてたのは、人前に立ってライブをするという状況に慣れてないからだろう。その辺りも改善していかないといけない。

「じゃ、お手本を見せていくよ。マヤノ、ストライブ、準備オツケー?」

「アイコピ―!」

「sawasawa」

「なんて?」

「なんて?」

スワヒリ語で「了解」である。

ともかく、この日からしばらく、ぼくらは暇な時にスペ先輩たちにウイニングライブのコーチ役を務めることになった。

1月と言えばぼくとスカーレットにとっても重要なレースがあるのでどうしても頻度は落ちるけど、その間はテイオーが主に見てくれることになったので安心だ。

……恐らく。

貧弱な外見の子供

12月中旬。多くのひとが有馬記念や東京大賞典、朝日杯やホープフルステークスなどの年末のG1に注目を向ける中スナイパーⅡサンのメイクデビューの日が訪れた。

中山レース場芝1600。天気は晴れ。バ場状態も良好。

——結論から言うところのレース、スナイパーⅡサンは勝利した。

「普通に勝ったな」

「普通に勝ちましたね」

「普通に勝ったか」

……すごく普通に勝利した。

なんというか、リムジン先輩やドーナッツ先輩と比べるとあまりにも普通というか特筆すべきところが無いというか……普通に先行型のレース運びして、能力差で押し切るとかそんな感じ。

ただ、トレーナーさんたちはうんうんと頷いてこの結果に満足しているようだった。

「ンだよ、トレーナーたちは満足そうだな。もっと派手にやってビビらせばいいのに」

「余計なデータは取られんに越したことはない。小技に頼る必要が無いならそれが一番だろう」

「普通に勝てるなら普通に勝つことが一番ですよ」
だそうな。

まあ言っていることは分かる。手の内を無闇に晒す必要は無いというのもあるし、技術に頼る必要が無いほど実力差があったということでもある。ぼくとしてはまさか分身の術とか隠れ身の術とか、何なら変装とか目くらましとかし始めやしないかとちよつと内心ハラハラしていたものだけだ。

そのことについて後日告げると、「ルールに定められていないからと言って何をしてもいいわけでもなからう」というド正論を言われた。ふだんからサボリ癖のあるひとだけに、こういうまつとうなこ

とを言われるとちよつと悔しいという思いはあるが、やっぱりウマ娘として自分の脚と体一つで使える技術だけで勝ちたいという思いが強いのだろう、と少し見直した。

この先何か、特殊なことをやるとしたら大舞台で……実力が拮抗している相手を前にした時、ということになるだろう。

さて、そんな風に割合呆気なく終わったスナイパーIIサンのメイクデビューだったけど、ぼくの出走するシードリングカップ、そしてスカイ先輩のメイクデビューは間近に迫っている。

この日からしばらく、トレーニングは更に厳しくなっていた。年末の有馬記念の後、チームメンバーのほとんどが一度帰省するためぼくは寮に一人残されることになるが、そこはまあ……ぼくも中身の年齢が年齢だけに割り切りはできている。

……と、考えていると、突然部屋にキング先輩が乗り込んで来て年末年始を過ごすことになったりしたのだが、それはまた別の話である。

ぼくは別に実家との折り合いが悪いわけじゃなくて単に里帰りする暇と金が無いだけなのだけど、そこは無理に指摘することは無かった。ひとと一緒に過ごすのは楽しいし、水を差すような真似はできない。

ともかく、適度なトレーニングと適度な息抜きを経て、現状でできる範囲で体を絞り込んで迎えた1月上旬。スカイ先輩たちがメイクデビューを迎えているその裏で、ぼくらのレースもまた始まろうとしていた。

『――2枠4番サバンナストライプ。9番人気です』
「とーう」

やってきたのはパドックの上。ジュニア級未満とはいえレースはレースだ。形式もそれに則ったものになる。選抜レース以外では珍しい、デビュー前のウマ娘を公的に見ることが数少ない機会だ。観客の数もそれなりのものだった。

パドックでのウマ娘紹介、先輩方の事例に倣って上着を脱ぎ捨てて体操服姿で前が出る。気の抜けた声が出るのは緊張を紛らわすため

だ。特に意味があるわけではない。

「貧相」

「ちっちゃ」

「しょぼ」

「ちんちくりん」

なお反応は最悪であった。

や。まあ分かってたけどね。人気順で見ても下位だし。いくらチームとしてのネームバリューがあるとはいえ、ぼく単体で見たら仰る通りの貧弱な外見の子供だ。観客全体を見た時、関係者の割合は非常に低い。ほとんどは一般客であり、裏事情を知っているのはごくわずかだろう。

「ありや相当仕上げてんな……」

……その裏事情を知っている関係者で、オマケに一目見るだけでほとんどの状態を看破してくるひとがいるのは幸か不幸か。

いや、やつぱ不幸か。油断してくれやしない。同じチームなら心強いんだろうけど、今は完全に真逆。過小評価はしてくれそうにないか。ブラフを多用するべくにとつては天敵と言えるかもしれない。

「ですね……!」

「いやस्प分かってねえだろ」

「実際仕上がってるとか仕上がってないってどういう基準で見てるんだよトレーナー?」

「総合的な肉の付き具合が……」

「ああ?」

「そういう意味じゃないっての! 睨むなゴルシ!」

仕上がりというのは、どれだけ無駄な肉を落として引き締められたかを示す基準になる。ステイヤーの場合は特にこれが重要で、スタミナを持続させることと体を軽くして瞬発力を確保すること、その両者が高いバランスで整っていないとレースで結果を残すことはできない。

どれだけ贅肉を落とすかが重要かと言うと、前世で「スペシャルウィーク」の敗因の多くが太め残りベストな体重よりもちよつと重い

ことだったと言われてたくらい重要だ。ちなみにマックイーンも太りやすい体質なので日々何かしら我慢している姿が見られる。

「ふふ、いかがですかうちの期待の新人は」

「げ」

「あんだ、ベテルギウスの……」

「サブトレーナーです」

「どもつす、サブトレさん」

「あ、こ、こんにちは。はじめましてですよね？」

「はい、はじめまして。ゴールドシップ。逃げないように」

「ゴールドシップさん!？」

ふと横目で見ると、唯一こっちの様子を見に来ていたサブトレさんがスピカに合流していた。

あと無敵のゴルシちゃんが押し負けている。珍しいこともあるものである。

「期待の新人、ね……」

「私は三冠の素質があると見込んでいますよ」

「それはまた大きく出たもんだ」

本当だよ。

三冠は流石にちよつと……こう……チヨロツと菊花賞あたりを掠め取っていくくらいならまだ考えられなくもないけども……。

……もうちよつと話を聞いていたけれど、いつまでも出ずっぱりというのはパドックの性質上良くない。ぼくは上着を取ってそそくさと裏手に戻った。

それからしばらくは他のウマ娘の紹介を裏手で聞きながら対策を考える。

スカーレットは当然のこと、ここにわざわざ出てきているということとは、他のウマ娘も相応の実力を持っている。名前を知っているのは少ないけど――。

『6枠11番アイネスフウジン、2番人気です』

——いや、今まさにいた。

アイネスフウジン。ぼくの知る中でも相当な実力を持った逃げウ

マ娘だ。また逃げだよ。もう堪忍して。嫌になりそうな気持ちを抑え込むように、ぼくはジャージの上着をフードのようにして頭に被った。

……能力としては、スピードとスタミナその双方を兼ね備えた理想的なタイプ。プライベートでも同じバイト戦士として時折会話をする程度の親交は持っている。

その上、現在既に高等部なので体の方はほぼ出来上がっていると見ている。現時点で比較すれば、恐らくスカーレットと同等以上……。

(勝ち筋が浮かばねえ……)

以前一度示した通り、ぼくの天敵は逃げだ。前の方で競り合いになったら最高速の差で押し込まれてまず負ける。

今回はよりにもよって稀代の逃げウマ娘になりうる素質を持った二人が相手だ。半端にロングスパートをかけたところでゴールまで間に合いそうにないし……となると、奇策でも珍策でも何でも使ってくしか無い。

「できたらもつと油断してくれるといいんだけど」

無理か。無理だな。

そんなことをぼやきながら、コースに向かって地下道を進んでいた。

シードリングカップ

コースへ出ると、遠慮のない視線が観客席と、そして周りで準備運動をしているウマ娘たちから浴びせられるのを感じた。

あんな小さい子が出てきて大丈夫なのだろうか、とか。こいつになら勝てそう、とか。多くはそういう類のどこかこちらを甘く見るような感情が寄せられた視線だ。

(いいね)

仕込みをする労力を費やさなくても、勝手に軽く見て侮ってくれるっていうのは楽だ。

ちよつぱり……こう、見返してやりたいなあ、という思いが無いわけじゃないけど……お金のための思えば、油断してくれる方が都合は良い。勝てば結局のところお金も名誉も得られるんだから、まずは勝ちやすい環境がある方がぼくとしては好ましい。

——のだが。

「ストライプ」

「ん」

「今日は全力でやりましょ」

「んー……」

……ぼくの前にやってきたスカーレットの目には、ギラギラと闘志が漲っていた。当然、油断など欠片も見えはしない。どことなく猫を思わせる縦長の瞳孔もあって、ぼくに対する物腰こそ穏やかだが、肉食獣のような迫力が備わっている。

多分、スカーレットだけじゃない。同級生はぼくと走る時油断してくれないなコレは。ヤダヤダ。警戒がキツイのなんのって。

「いやあ、ぼくはほどほどくらいで……」

「と、言って油断させようとしてるでしょ」

「てへぺろ」

「もうっ」

「ストライプちゃん、レース前でもそういうこと言ってるの?」

「アイネス先輩」

それと、問題はアイネス先輩の方もだ。氣負った様子は見られず、ぼくらへの対応もフラット。基本的に誰かを侮ったり下に見るといふことが無いため、これがまたスカーレットと違う意味で油断してくれない。

……しかしこの、こう……右にスカーレット、左にアイネス先輩つてこの光景……大迫力だな。

身長の話である。

スカーレットはこの前の計測で160cm超えてたし、アイネス先輩は170cm近い。確か167cmだっけ？ここにリムジン先輩やフラツシユ先輩を加えるとよりスゴい迫力の光景になりそうだ。

一向に身長の話である。

「レース前『でも』って、ストライプがよそで何かご迷惑を？」

「疑うなんてヒドいよママ」

「ママじゃない」

「あはは……そういうのじゃないの。バイト先でもいい子つて聞いているよ？ただ時々何を言ってるのかわかんないからちよつと変な子とも聞いているの」

「あ……」

困った。反論のしようがない。

自覚はあるがぼくはまごうことなき変な子だ。バイト先でも仕事とは別に突飛な——実年齢にしてはだけど——ことを始めるので、そういうことを言われるのはとてもよく分かる。

「あと、レースに対してはとても真剣だったって話もおばちゃんから」
「おばちゃん……」

良い子とか評価してもらえてるのはちよつと背筋が痒くなつちやうくらい嬉し恥ずかしなただけれども、こういうところで他の競争相手に話が漏れるなら、もうちよつと普段からダラダラして「あの子つたらしようがないわね〜」くらいの扱いになっておくべきだった。

「というかレースに出走してきてる以上、勝つつもりが無い、なんて言っても通じないわよ……」

「それはそうなんだけどさ、勝てる可能性が0・1%でも上がるならやって損は無いから」

「そうね。でも……今日はアタシが一番だから」

言うのと、スカーレットはアイネス先輩に丁寧に挨拶をしてからゲートに入っていた。

「それじゃあたしたちも行こっか。負けないよ！」

「はい。よろしくです」

そしてぼくも、アイネス先輩に促されてゲートインする。そろそろか、と思うと少しずつ頭の中が冷えてきた。

『新春の東京レース場。中・長距離を目標としてたくましく育った苗木が集う、シードリングカップ。出走ウマ娘の紹介です』

実況は……女性の声だ。珍しい。

いや待てよ。普通どっちかに偏るってそうそう無いはずなんだけど。おかしいな……。

『三番人気はポルカステップ。この評価は少し不満か、二番人気アイネスフウジン。そして、会場の期待を一身に集めたのはこの子。一番人気、ダイワスカーレット。4枠7番で出走です』

スカーレットが客席に向けてちよつと窮屈そうに礼をするのを横目で見つつ、ぼくは広いゲートの中で軽く屈伸をした。

……いや今は何も言うまい。大事なのはレースだ。そろそろ全員がゲートに入る。勝つにはとにかく手を尽くさないと。

『体勢整いました』

多少ゲート難のケがあつたらしい子が最後にゲートに入った。集中する。

スカーレットもアイネス先輩も、精神的な隙が少ないだけでなく能力だけ見ても殆どの要素でぼくを上回っている。

それに対抗するには、まずは――。

『さあ、ゲートが開いた！』

――度肝を抜いてやろう。

『各ウマ娘一斉にスタート！ ハナに立ったのは――4番サバンナストライプ！』

「!!」

「なにイ!? 速ッ……」

「ウソだろ!」

選拔レースや入学直後の模擬レースを見ているクラスメイト、そしてその情報を握っているトレーナーさんはぼくの脚質が「差し」だということを知っている。だからこそその裏を突く。

ぼくの武器はスタミナと——^{パワー}加速力。最高速が他のウマ娘の九割ほどだとしても、トップスピードまで持つていく能力は恐らく今の場にいる誰よりも高い。アイネス先輩は11番、スカーレットが7番。まずは最内の優位を活かす。

「くっー!」

——そして、ほら。「かかって」来た。

『ダイワスカーレットが前に出る! これはかかってしまっているでしょうか?』

『しかし、彼女の脚質には合っているようですよ』

『確かに合っちゃあいるんだが……』

「スカーレットさんって逃げが得意ですよね? 問題は無いんじゃない? ……」

「だとしてもペースが速すぎるんですよ。スタミナおぼけのストライプと張り合ったら先に潰れちまう」

「実際に潰されたやつが言うと言説得力が違うな」
「うぐっ」

何にしろ「一番」にこだわるスカーレットだからこそ使える手だ。意識的にしろ無意識的にしろ、自分の前に行く相手が出てくると抑えがきかなくなる。

油断してないなら油断しないで仕方がない。そもそも、誰もが油断してくれるわけじゃないことくらいわかっている。

だから、突く場所を変える。

気合が入っているというのは、転じればそれだけ気負っているということでもある。勝ちたいという思いは前へ進むための原動力だが、同時に自分自身の視野を狭める枷にもなりうる。

油断をしてくれないならしてくれないでいくらでも戦い方はある。
「だが、あれは暴走だな……ストライプは本来ああいう走りをするタ
イプじゃないはずだ。あれじゃいいところ共倒れだぞ」

「……あー、本当だ、尻尾が回ってる！　ってことは本気じゃねーか、
ストライプ……！」

……!?　な、や、やめっ……やめろ！　尻尾の回転具合を本気かど
うかのバロメーターにするんじゃない！

……いや、分かりやすいのは認める。無意識的にやってしまうもの
だし。でもさあ、これ絶対実況にネタにされるヤツじゃん!?

『先頭はサバンナストライプ。尻尾が回っています。……尻尾？　え
？　え……え？』

『いったい何を考えているのでしょうか』

やめてええええ!!

そういうマジなやつ割と傷つくんだって！

『……後続のウマ娘、動揺しているようです』

『狙ってやっているなら大したものですよ』

ほああああああああ!!

「狙ってるのか？　あれ……」

「いえ……あれはただの矯正が難しい悪癖です……」

「余計本気なのが分かるってもんだな」

……ともかく！

軽く後ろを確認するが、スカーレットはまだ離せていない。アイネ
ス先輩も、やや困惑顔だがしっかりついてきている。

ぼくはと言うと、癖が出ちやつてる通り本気も本気だ。そうしない
と逃げの形にならないからだ。当然、どれだけスタミナが豊富でも尋
常じゃない勢いで削れていく。

それだけじゃない。平時、鍛えていたつもりのマルチタスクは全力
で走ること途切れ途切れになり、理性が焼ききれそうになっ
てくる。気を抜くと本当に何も考えずに走ってしまいそうだ。

さて、一方でスカーレットはどうするか。

選択肢は二つに一つ。抜きに行くか否かだ。戦略的に見ればこの

まま暴走ペースで前を行かせて自滅を狙うのが筋だろうが、スカレットの気質を考えればよくに前を行かせたくないと考えるのが自然。そして何より。

「……………」

彼女は、ぼくのスタミナを知っている。

確かに暴走ペース、明らかな自滅だが「もしかすると」粘るのではないか？ 「もしかすると」2000mを全力で走り切るだけの能力が備わったのではないか？ 春から成長したからスピードも伸びているかもしれない。だったら「もしかすると」今の走りは全力ではないのではないか……。

頭が良いスカレットだからこそ、その可能性を考慮に入れているはずだ。ここで先頭を奪わなければ終始レース展開を握り続けられてしまう、と。

「——ッ！」

だから、自分の気質と感性を後押しする考えが多く浮かべば、すぐにでも先頭を狙いに来る。

スタートから3ハロン、やっぱりこの辺か。

（——お先にどうぞ）

『ここでダイワスカレットがハナを奪う！ 更にアイネスフウジンが二番手に躍り出た！』

ぼくは、それを確認すると同時に速度を緩めた。当然、スカレットが先頭になるがそれでいい。

息を入れると同時に頭に冷静さが戻ってくる。視野が拓け、更にレースを俯瞰する余裕が生じる。

『さあ1000mを回ってレースは中盤。いかがでしょうかこの展開？』

『スタート直後から壮絶な先頭争い、相当ハイペースになっていますね。ウマ娘たちの体力がもつかが焦点になるでしょう』

時計は、正確に測っていないから分からないけど……現状、相当早いタイムを刻んでいるはずだ。ターボ師匠のそれと同じで、先頭走者のペースが速ければ速いほど、後続はそれに危機感を抱く。さっきのス

カーレットと同じだ。「もしかすると」という危惧が体を突き動かす。レース中という状況だからこそ、思考よりも先に体が動いてしまう。

——スタート直後に先頭に出て暴走した甲斐があった。

「……利っさん、あんたあいつに何吹き込んだ？」

「何の話でしょう？」

「エグい作戦考えるな、つてね」

「私たちはトレーニングを積ませているだけで、作戦はほぼあの子が自分で考えていますよ」

「……はあ!？」

『さあ4コーナーに差し掛かる！ 先頭は依然ダイワスカーレット！

しかしアイネスフウジンも食らいつく！ 続いてポルカステップ！ 序盤先頭を走っていたサバンナストライプは4番手、この位置です』

残り4ハロン。

重要なのは、タイムと順位とバ身の調節。それから、可能な限り前に「出ない」こと。ロングスパートをかけるなら——ここからだ。

「ふっ……!？」

『——おっと再びサバンナストライプが進出！ じわじわと速度が上がっています！』

『ペースを落としたおかげで息を入れられたようですね。ですがここからですよ』

そう、ここからだ。スカーレットのことは元よりアイネス先輩の速度にも意識を向ける必要がある。

身体能力で強引に距離を克服しているスカーレットとは異なり、アイネス先輩は十分なスタミナを兼ね備えているタイプ。とはいえ、この状況で足を残していると考えるのは難しいだろう。

この場にいるぼくらは皆デビュー前で、本格化こそ迎えてはいても能力的なピークに至るまでまだ時間がかかる。2000mは長距離に匹敵するほどに長く、過酷だ。

『最後の直線に入った！ 残り400！ 後ろの子たちは追いつけるのか!？』

坂に差し掛かると共に、スカーレットたちがスパートに入る。

僅かに顎が上がっている。それを目にしたぼくは、更に速度を上げた。スカーレットの背中に食らいつき、スリップストリームで速度をより安定させる。

「っ!？」

「くっ……!？」

残り200と少し。坂を登りきった段階で仕込みが起動する。……と、大仰なことを言ってみるがそう難しいことではない。単なるスタミナ切れだ。

スカーレットもアイネス先輩も、脚と体の重さを感じ取っている頃合いだろう。徐々に体が上がってきていた。

散々ペースを上げたのは、スカーレットやアイネス先輩……だけでなく、全ての走者の体力を徹底的に削るためだ。特に注目すべき相手が逃げを打つ二人だっただけで、そこに区別は無い。

『アイネスフウジン一番手に出た！ ダイワスカーレット粘る！ 差し返すか!? ——だがサバンナストライプ猛追！ ここで後ろから追いついてくる！ 差はごくわずか!』

「スカーレット！ 行けーっ!」

「頑張ってくださいスカーレットさーん!」

「やああああ!」

「っああああああ!」

——実のところ、これ以前の段階で差すことは可能だった。

アイネス先輩もスカーレットも相当疲弊している。スピードも普段より遥かに落ちてるから、直線に差し掛かったところで抜くこともできた。

しかし、スカーレットもアイネス先輩も、どちらも凄まじい勝負根性を持っているウマ娘だ。何も考えずに抜こうものなら、二人は限界を超えて差し返しに来る——そして差し返される。これは「多分」というような予想の範疇じゃない。「絶対」にそうする、そうなるという確信だ。

だから、さつきまでは差せなかった。わずかにでも余裕を持たせて

しまえば負ける。実際に、スカレットはアイネス先輩に抜かれたことで限界を超えて奮起し、ここで今差し返しに行っている。今なら。

（——ここだ！）

ぼくはスカレットの背から離れて姿勢を低くした。低く、低く……もつと低く。リムジン先輩の姿勢を思い出すように。

体格の不利があることは承知の上だ。だからそれを逆用する。スカレットもアイネス先輩も疲労でフォームが崩れ頭が高い位置にある。

計算する。今のふたりの視点、30cm近い身長差。あと………

……いや言葉にはすまい。ともかく、スカレットもアイネス先輩も確実に死角がある。今のこの状態では絶対にぼくの姿が見えない角度がある！

息を吐く。勝ちたいという渴望と野性に身を任せ——全力で地を蹴る。

「——ッ!!」

『ああーつと並んだ！ 三人並んだ!! いや最内を抜けてサバンナストライプ抜けてくる！ 今、ゴールイン!! 体勢有利か!?!』

「えっ!?!」

「ストライプ!?!」

「へっ、はっ……ふうっ……!?!」

『ダイワスカーレットか！ アイネスフウジンか！ それともサバンナストライプか!?! 結果はいかに!?!』

予想通り、二人は気付いていないようだった。そうなるように誘導したとはいえ、この具合なら他のレースでもこの戦法は応用できるだろう。競争相手の身長の高さ次第だけだ。

ウイニングランは……誰もしない。勝敗がイマイチ分からないからだ。会場もシンと静まり返っている。

……ほんの少しして、判定の結果着順が確定したらしく、アナウンスが流れ始めた。

『——結果が出ました！ 一着にサバンナストライプ！ 二着ダイワスカーレット！ 三着アイネスフウジン！ ……以上の着順になります』

「！」

「!？」

会場がざわつくのを感じた。

当然だ。9番人気…身体的に圧倒的に劣る上、レース中盤で減速して脱落しかけるような意味のわからないウマ娘が、掠め取るような形で一着になった。これに疑問を感じないでいられるだろうか。

フロックまぐれだろう、とどこかで声上がるのと共に、ざわめきも落ちていく。そうそう、そう思ってくれるとこちらとしてもありがたい。

——次も上手く油断させられそうだしね。

自分が一着であることを示すように軽く拳を掲げると、主にサブトレさんたちのいる辺りから控えめな拍手が上がった。

未だデビュー前ではあるが、ぼくの初めての公式レースはこうして幕を閉じた。

やや情熱に欠ける

『一着はなんと予想外、サバンナストライプ！ 二着はダイワスカ
レット、三着にはアイネスフウジンが——』

「はー」

「ほー」

「んー？ うーん……」

シードリングカップを終えて翌日。ぼくはシードリングカップの
抜粋動画を見るテイオーとネイチヤとマヤノに巻き込まれていた。

動画の方は今終わったところだが、再度再生しようとテイオーが画
面を連打して……表示された広告をタップしてしまった。何やって
るんだか。

それでイライラが頂点に達したのか、テイオーは頭を掻きながら立
ち上がった。

「わっつけわかんないよー！ これ、どうやって勝ったの!?!」

「やっぱ本人に直接聞いた方が早いと思うよ……」

「聞かれても答えるとは限らないと思うけどなー、特にトラちゃんの
場合は」

と、三人のちよつと湿った視線がこちらに向けられた。

基本的にこういう作戦の仔細というのは明かすべきものではない。
後々それが命取りにならないとも限らないし……うぬう。

「ブロックじゃダメ？ ニューズでもそう言われてるし……」

「スカレットがまぐれブロックで負けるわけないじゃん！」

「ぬう」

困りましたわ。ぐうの音も出ない正論ですわ。

スカレットの能力は近いところで見ているぼくらもよく知って
いる。当然だが、スタミナでのゴリ押し戦法なんて通じない。半端な
作戦なら見抜いてくる頭の良さも持ち合わせているので、「まぐれ勝
ち」そのものがありえない。斜行やブロックで不利を受けたというこ
とも無いのだから当然だ。

「今まで一回もやったこと無いのに、突然逃げなんてするしき」

「そっちはずっと練習してた」

「してたんかいっ」

なにせ抜群の適性を持った先輩がいる。二の矢戦法にしても、元を辿ればスカイ先輩のそれを基盤に組み立てたものだし……なんだかんだその辺のトレーニングには不便しなかったな。

「でもトラちゃん、マヤも最初にスカーレットちゃんをかからせたのは分かったよ？ でも、だったらギューンって押し切っちゃう方が良かったんじゃない？」

「そこなんだよね。ストライプ、途中で息入れてたからスタミナは回復してたでしょ？ いつもみたいにスパートかければ良かったんじゃないの？」

うーん、ぼくの身体能力の方も知ってるからか、そこまでは見抜かれてる。

まあ、何度も見てたらそのうちマヤノあたりは気付くだろうし、このくらいならもう言ってしまった方がいいか。

「……下手に差しちゃうと、逆に差し返されちゃうんだよ。前の方で競り合ったら体格と最高速の差で負けるから、差し切るタイミングがあそこしか無かったわけ」

そこまで説明してようやく納得の声が漏れた。

もともと、クラシック以降……スカーレットにもアイネス先輩にもちゃんとスタミナが付きいたら、もうこの手は使えない。

幸い、路線が違うだろうからそうそうカチ当たることは無いだろうけども。

うはは。ぼくは長距離路線に居座り続け……いや待てよ。それはそれでマックイーンが来ちゃうな。すぐくマズいぞ。逃げもできてスタミナも潤沢でスピードも相当なものだ。春天を連覇できる才能があるのは前提として、更に枠番の不利や斜行さえなければ秋天を制覇して天皇賞春秋連覇という大偉業を成し遂げる可能性さえある。

普段変なところで抜けてて食い意地が張っているがそれもまた味があるというか……。どっちにしろレースになると本当に隙が無い

し頭も良いので手がつけられない。史実の生涯成績も大概だジャパンカップと斜行降着で18着になった秋天以外ほぼ全て2着以上。

「レース中によくそこまで考えるねえ……」

「よく考えて走らないと、ぼくみたいにスタミナしか取り柄のないウマ娘じゃ勝てないからねえ」

「テイオーさんや、妙なことを言ってますよこの子」

「こう言って油断させようとしてるんだよ。ネイチャも気をつけてね」

「ひでえや」

油断させようとしている点はある点はあるけど否定できないとここまで含めて。

「……まあいいや。ぼくもう行くよ」

「あつ、そうだった。引き止めてごめんねトラちゃん」

「そういうえは何しに行くところだったの？」

「チームの打ち上げ。と、あとスマホ買いに行くんだ」

「……あ、そういうえは持つてなかったね、スマホ……」

ようやくである。ようやくとぼくの手にも文明の利器が渡ってくるのだ。こんなに嬉しいことはない。

苦節八ヶ月とちよつと。これまでバイトという定期的な収入源があったものの、金額的には心もとなかったため手を出せずにいた。しかしシードリングカップで賞金を得られたことで、その問題も多少は解決した。一括で支払うか分割で支払うかという問題こそあるけど、これで連絡手段を寮の固定電話に頼らなくてもいいのだ。

「これでネット通販が気兼ねなくできるんだ」

「おつとー?」

「深みにズブズブハマっていきそうな言葉が聞こえたよトラちゃん……」

「大丈夫大丈夫、ぼく出品者だから」

「なおダメっぽいよ!?!」

ダメなんてことはない。それでもネット倫理については詳しい方だ。

……ケニアの農村部の生まれなのにネット倫理に詳しいってのが既におかしい気がするが、まあそういう変なところがあるのがぼくとは周知されてるだろう。トレセン学園の一般授業でも情報処理の授業なんかもあるわけだし、そこまで不自然でもない……と思う。多分。

ともかく、ぼくはルンルン気分ですは携帯のショップへと向かうのだった。

……≠……

さて、それやこれやとあつて昼頃。ぼくはスカイ先輩とスナイパーⅡサン、それからトレーナーさんとサブトレさんの五人で都内の回転寿司に訪れていた。

目的は、先日のスカイ先輩とスナイパーⅡサンのメイクデビュー、それからぼくの初公式戦の打ち上げをまとめて行うためだ。

席について数分、タッチパネルで注文を終えたところでぼくは懐からスマホを取り出して見せた。

「というわけで買ったんですよ！ 最新型のスマホ！」

「ストライプがお金以外でこんなに興奮してるの初めて見た」

「いつもの不敵な笑い方ではなくニコニコ顔だな」

「言えばこちらで用意しましたが」

「そこまでお世話になるわけにもいきませんよー」

「うっそだー……利用できるものは親でも利用しそうな性格してるのに」

「むほほ。そこまで冷血じゃないですよ」

もちろん、ちゃんとした理由はある。トレーナーさんたちのお金で購入するということは、チームの備品も同然ということだ。中学生という年齢もあるから、当然、外部から何らかの制限が設けられるだろう。当然の措置だとは思う一方で、ぼくの目的のためにはかなり使いづらいものになってしまう。

なので、無制限に使用できる自分専用のスマホが欲しかったという

わけだ。あとはパソコンを購入できれば言うことは無いのだけど、まあ当面は置いておこう。スマホの契約料や通信料はどうしても今後継続して支払わないといけないし、パソコンのための通信料や本体代金まで加わってしまうと、デビュー前に預金も底をついてしまう。奨学金の支払いもあるのだから、そこはしっかりと自己管理していかないと。

あと使えるものは親でも使うというのは流石に風評被害である。

やってきたお皿を受け取って机の上に置く。スナイパーⅡサンのオーガニック・トロマグロスシである。嘘だ。普通のマグロだ。

スシを補給している。

「上等なシヨーユだ」

「上等なんですかねこれ」

「さあ……？」

次々やってくるお皿を取っていく。最初に口に運ぶのは、スカイ先輩がブリ、トレーナーさん父娘が揃って鯛。ぼくはサーモンだった。

しばらく皆でお寿司に舌鼓を打ちつつ雑談していると、やがて話は先のレースのことに移っていた。

「スナイパーは1バ身、スカイは6バ身差だったな。ストライプはクビ差……スカイは少し実力を示しすぎたかもしれん」

「逆にスナイパーは抑えすぎじゃないですかー？」

「んぐっ……いや、ワタシはコレでよい。目立ちすぎるとマークがきつくなる。それよりもストライプは……」

「フロックでーす」

「嘘をつけ」

「嘘ばかり」

「チーム内でくらしいいでしように……」

「半分は本当なんですけど」

あれだつてそういう風に誘導したとはいえ、結局のところ最後は賭けの要素も大きかった。できることなら危なげない勝利って方が個人的にも望ましいんだけど、そういうのが狙える体質でもないしねえ……。

あとはその「まぐれ」を引き寄せる確率をいかに上げるか、というだけの話だ。だからかからせて疲労させる必要があつたと言えるのだけだ。

「ぼくのごことは置いて。先輩たちは次の出走どうするんですか？」

「話の逸らし方が雑ですよストライプ……」

「にやはは。でもそうだね……キングがもうホープフルステークスで実績残してる史実では旧ラジオたんぱ杯3歳ステークス（G3）。この関連レースは何度か改名や再編を繰り返しているが、本作ではアプリでの出走レースに準じる。んだよねえ。ここはばーんと一発重賞でも？」

「メイクデビューで勝つたとはいえ、それだけではい分かつたと重賞に出すわけにはいかん。まずはオープン戦で一勝、次を考えるのはそれからだ」

「はーい。ま、大物を釣り上げるなら準備は必要ですもんね。で、次の出走は？」

「若駒ステークスを考えているが……」

……あれ、史実の「セイウンスカイ」って若駒ステークスに出走してたっけ？ 史実で出走しているのはジュニアカップ（OP）。2000年以降、開催日が1月上旬となっているため、現在の基準だと日程的な問題で出走できない。

そこまで記憶が確かじゃないからはつきり言えないけど、まあ、そういう揺らぎも出てくるか。

「じゃ、そうしますかー」

「スナイパーはどうしますか？」

「地道に一勝クラスで勝ちをもらいにいく」

「あなたはあなたでもう少し上を見た方がいいかもしれませんね……」

「解せぬ」

スナイパーIIサンの実力自体は間違いなく一線級のものがある。メイクデビューで「普通に勝つ」ことがどれだけ難しいことか……か

の世紀末霸王でさえ、メイクデビューは二着だったはずだ。

まあいわゆるスペ先輩の同級生である黄金世代は全員メイクデビューで一着取ってるんだけど……黄金世代と呼ばれるだけのことはある。

「そこで素知らぬ顔をしてウドンを啜っているストライプはどうなるのだ」

「今回のレースで、同じ世代には十分通用することが分かりましたから……10月あたりを目安にデビューを目指していければと思っていますが、いかがでしょう？」

「まあ早ければ早いほどお金的には都合がいいですし、じゃあそれで」
「軽い……」

「覇気に欠けますね……」

「そう言ってやるな利紗。ストライプの『金が欲しい』という欲求は、単純で根深い問題だからこそモチベーションを保つ上で役に立つ」

「単純で」

「おっと、すまんな」

事実だけでも。

「……とはいえ、確かにただ『走るのが好き』というだけでは……モチベーションを保ち続けるのは難しいでしょうね。競技生活を続ける上でいつか何か別の目標にすり替わり、場合によってはそのせいで挫折してしまうような子も少なくありません」

「ぼくはお金稼ぎ自体は目的ってわけじゃないんですけど」

「レースを手段にする以上似たようなものでしょう。……あなたたちの知る先輩で言えば、タマモクロスもレースでお金を稼ぐことが目的です。執念があるだけに、強くなる子は多いですよ」

確かにストライプは軽く見えますが、とついでのように注射を入れられた。

アメリカな動作で肩をすくめてみせる。スナイパーIIサンのそういうところだぞ、と言いたげな視線が刺さる。

執念……執念かあ。勝ちたいという思いこそあるけど、そこまで強いものだろうか、ぼくのそれって。

なんやかやと言いつつバイトしてみたり起業を本気で考えていたりと保険をかけてる部分はあるし、もしかして他のひとと比べるとやや情熱に欠ける？

まあ、だから何ができるってものでもないし、気にしてもしようがない。とりあえず今日のところは寿司に舌鼓をうつことにした。

……なんかぼく、割としょっちゅう問題を棚上げしてる気がするなあ。

バレンタインといえば

2月14日バレンタイン。

女子校であるところのトレセン学園は、バレンタインというイベントと縁がない……というわけではない。

男性トレーナーが多数在籍している上、専属トレーナーとして数年間行動を共にするケースもある。特に若いトレーナーだと自然と「そういう」ことになりがちなようだ。時々トレーニング中にも砂糖を吐きそうになることがある。あいつらトレセン学園をマッチングアプリと勘違いしてるんじゃないか？ とはタマ先輩の言だ。

露骨にベストマッチなトレーナーとウマ娘が専属契約を結んでいることが多いこともあって、あんまり否定できないなど内心思いはしたが、口には出さずにおいた。フクキタル先輩とか、クリーク先輩とか……。

……そういうえばそろそろ金鯱賞だけど、フクキタル先輩大丈夫かな。既に雑誌だとナメケモノ娘とかボロクソに書かれてたけど。

閑話休題。

さて、ともかくバレンタイン、イベント、とくれば――。

「チョコレートはいらんかねー」

「いつものことですけど目ざといですわね……」

「もう誰も驚かなくなってきたよ」

そろそろ一年近く経つため驚く人も少なくなってきたようだ。良いことである。

さて、そういうわけでバレンタインと言えばチョコ……なのだが。「いくらなんでも安直すぎない？」

「ええ、普通はチョコレートなどは既に購入していると思いますが」「ところがそうでもないんだな」

「と言うと？」

「2月以降、どんどん重賞が開催されていくのは知ってるよね。トレーニングもハードになっていくから買いに行く暇が無いってひと

も少なくないんだよ」

2月の目玉と言えば、G1のフェブラリーステークスだろうか。それ以外でもクラシック前哨戦として重要視される共同通信杯、オーストラリアG1の優先出走権が与えられる京都記念、ステイヤーズステークスに次ぐ超長距離競走ダイヤモンドステークス……それから、大阪杯の前哨戦となる中山記念なども開催される。

3月はもつと大変だ。皐月賞と桜花賞のトライアルが開催されるのは主にこの月だし、月末にはG1の高松宮記念が……。

休む暇が無いというわけじゃないんだけど、ちよつと無理して作らないと微妙に時間が足りない。今はそんな微妙な時期というわけだ。中には用意周到なひともいるけども、それでも一定数はうっかりしているひとが出てくる。今日の販売はそんな駆け込み需要を狙ったかたちだ。なので商品自体の数は少なめ。

「もちろん今日までの間にもしっかき稼がせてもらいましたとも。むほほ」

「ちやつかりしてますわね……」

「これで自分が渡す分忘れてたりしないよねー？」

「そこはしっかき覚えてるよー」

まあ昨日キング先輩に「キングに友チョコを渡す権利をあげるわ！」って言われてようやく思い出した間抜けっぷりではあるんだけど。

日頃のお礼にということでも渡して歩こうとは（忘れるまでは）思ってたし、本当にあそこで言ってくれて助かった……。

ちなみにぼくが作ってきたのはずっしりした感じのチョコケーキだ。小麦粉などが手元にあるから作りやすく、一度にそれなりの量を作ることになるため配るのにも向いている。幸いなことにフラッシュ先輩にレシピを教わることもできた。

「というわけでテイオーとマックイーンにも」

「えっ、いいの？　ありがとうストライプ！」

「あ……え、ええ、ありがたく……」

「チョコ味だけでチョコレート自体はそんなに使っていないから糖質

オフだよ」

「ありがたくいただきますわ!」

「マックイーン……」

「……………」

メジロ家、もうちよつとマックイーンのメンタルに配慮してあげられないだろうか。

メジロ家的に考えてもライアン先輩にアルダン先輩、パーマー先輩にドーベル先輩と他に四人もトウインクルシリーズ走者を抱えている関係上、マックイーンだけに注力するわけにいかないのは分かる。太りやすいのも知ってるんだけどさ、寒天とか……低カロリー低糖質のデザートとかもあるし……。

……いや、これはあれか。マックイーンが過剰に自制してるから、外部からこうして手を入れないといけない状態でもあるのか。難儀な……。

「つていうか、ストライプならこういう時むしろ盤外戦術ーとか言つて太らせようとするんじゃない?」

「んー……それも考えたことはあるんだけど」

「……………!」

「一度やっちゃうとぼくへの信用がガタ落ちだもの。これから商売をするならそういうリスクは避けなきゃ。あと単純に遠回りすぎるし」

「マックイーン、今露骨にホツとしたね」

「茶々を入れないでくださいます!」

ただ、それだけじゃない。やっぱり友達だから、信用や信頼を無くすようなことをしたくない。

それに、相手の体調を崩すようなやり方をしてしまうと、本番のレース以外にも大きな悪影響が出てしまう。

ぼくは自分のレースで勝ちたいんだけど、前提としてその「勝ち」はお互いが全力を出せる状態じゃないと価値がない。レース内外で策を弄することはあっても、卑劣ではありたくない。

言わないけど。

・・・≠・・・

さて、バレンタインといえばバレンタインステークス……だと思っただけだが、最近になって調べてみるとバレンタインステークスはダービー1400mで行われる競走に変更となっていた。2017年以降。2021年現在のアプリ準拠のためこちらでもダート競走として扱われる。

そのため、そもそもスズカ先輩はこのレースに出走していない……が、別のレースには出走していた。それがG2、芝2200mで行われる京都記念だ。それが終わったということはすなわち——サイレンススズカ先輩の真の実力が白日のもとに晒されたということである。

チームスピカのチーム部室はお祭り騒ぎになっているが、同時に他のチーム、特にぼくの所属するベテルギウスはほとんどお通夜のようなムードだった。

「どうすんだよあれ……」

前走は香港カップ。芝2000m1999年に名称を「香港国際カップ」から変更すると共に距離も延長され、1800mから2000mになっている。史実のサイレンススズカが出走したのは変更前の香港国際カップ。で行われる競走だ。そこで5着……掲示板に食い込んだことで手応えを感じ、もう少し距離を伸ばせないかと考えたのだろう。

そして結果が……大逃げからの大勝。今まで「ポテンシャルは高いが持て余している」とスズカ先輩を評価していたドーナツ先輩たちも、これには閉口せざるを得なかった。

対策をどうすればいいのか？ 答えは一切見つからない。その中で、ぼつりとトレーナーさんが呟いた。

「……まるでマルゼンスキーだな」

トレーナーさんの言葉に、思わず皆が納得した。スズカ先輩のそれは、他のウマ娘とあまりに速度が違うからこそ「結果的な」逃げを思わせるものだったからだ。

では、なぜこれまでその逃げ脚を見せることができなかつたのか？
と言えば……やはり、教育方針の違いだ。

「厳しい管理体制を敷くりギルでは、大逃げは勝ちのセオリーから外れてるとして禁じているでしょうね。対して、スピカでは相当自由にやらせてもらっている、というところでしょうか」

「もつとも、マルゼンスキーはあそこまで露骨な大逃げというわけじゃなかったが……」

マルゼン先輩だからなあ。その辺の立ち回りの能力は相当高そう
だ。リギルとしても古株だろうし、チーム結成当初は自由にやらせて
もらっていたんだろう。

対してスズカ先輩はその辺の……人間関係という意味では、相当無
頓着だろう。やりたいとは思っても言い出せない遠慮もあつたはず
だ。まあ、だからこそスピカに移籍したとも言えるのだけど。

「スカイ、ストライプ、お前たちならどうする？」

「ええー……って言われても、どうする？」

「無理矢理でも前に出てバ群に沈めてあとは運次第……ですかねー
……」

「お得意のスタミナ削りは？」

「無理でしょあれ……ぼくって基本心理戦で強引にハイペースにさせ
てるんですよ。常時マイペースじゃないですか、スズカ先輩。スタミ
ナ削るも何もできませんって……」

「となるとあとは長距離に引きずり出すか……」

「適正距離外に出ては来ませんでしょ……」

というわけで、打つ手無し。それがぼくらの結論である。

場が更に沈痛な雰囲気になった。

実際、真面目にあれば勝ち目が無い。最初から最後まで一着でい続
けられれば勝ち——ある意味、レースにおける最強の理論だ。

ただでさえ素のスピードが尋常じゃない上に終盤になってまだ伸
びるスタミナがあり、更に、あまりにもマイペースすぎてペースを崩
せない。

まさしく、トウインクルシリーズにおいて一度も敗北しなかつたマ

ルゼンスキーの再来と呼ぶに相応しい。

「グラス先輩もマルゼン先輩の再来とか言われて、怪物二世って言われてるくらいなのに……」

「ストライブ、それをグラスの前でウカツに言うな」

「表面上ニコニコしてるけどめっちゃくちゃ怒るからね……」

「アツハイ」

「というか日本トウインクルシリーズ界限って怪物ってあだ名のウマ娘多すぎないかな。オグリ先輩は芦毛の怪物だしグラス先輩は怪物二世、二世と言うからにはマルゼン先輩も一時期怪物と呼ばれているわけだし、白い怪物なんてのも（今いるかかつていたか将来現れるかは別にして）いる。」

「……あだ名つけるにしても、もうちよつとバリエーション増やせないものだろうか。」

「ともかく、現状スズカ先輩をどうにかする手段は無い。なので一旦結論は保留となった。」

「特に今年デビューのスナイパー||サンとスカイ先輩、それからぼくも、まずは地力を高めること。そうしなければ勝負の土俵に上がることにすらできないという判断だ。」

「というわけで、今日のトレーニングと相成ったのだが……。」

「ストライブは2000mを全力で走りきれようになりましょう」

「Nini kille?」

「なんて言いました?」

「英語でWhat that? です」

「ワツザ!」

「あれです」

「なるほど」

「それでどういうことですか……?」

「2000を全力で……なんて、確かにブラフとしては使うこともあるけど、そんなの普通無理だ。」

「いくらスタミナに優れていると言っても途中のどこかで必ず息を入れる必要が出てくる。」

「同じ世代のウマ娘の最高時速は70 km以上。場合によっては80 kmほどにもなる。対してストライプはその9割ほどが限度だろう」
「……ですね」

シマウマの最高時速は70 km弱。確かにだいたいそのくらいか。
「その速度差を埋めるためには、常時限度ギリギリいっぱいまで速度を出せるようにするしかない。わかるな？」

「分かりますけども……」

まあ、スズカ先輩だって上がり3ハロンは36秒付近という時計が多いわけだし、常時時速60 km + α で走れるならサイレンススズカを再現できると言ってもいいかもしれないけども……。

その辺で言うなら、ちよつとブツ飛んだ理論ではあってもたしかにぼくにとつての武器を一番よく活かしているとと言えるかもしれない。

「もちろん、これはあくまで『いずれは』……能力的なピークを迎えた時に、という目標に過ぎない」

「最終目標ではあるんですね」

「それに、ある程度小細工も覚えてもらわないと……ですね」

「小細工って、作戦とか？」

「いえ、例えばリムジンのしていた体重移動であるとか」

ああ、なるほど。シードリングカップではあれを参考にして走ったりもしていたが、ちゃんと技術として教えられたわけでもなかった。そういう意味での小細工というわけか。だったらこつちとしても大歓迎だ。

「——あと、ドーナツツのしていた無減速クロスステップであるとか」

——んん？

え、マジで？

地道な体幹トレーニング

無減速^スクロス^{ウオー}ステップ。

現在のぼくが知る中では、多分最も再現難易度が高い技だ。

ラーニングの鬼であるところのドーナッツ先輩でさえぶっつけ本番では制御を誤って転倒してしまったし、再現を試みようとしているウマ娘の話もあまり聞いたことが無い。

同級生に習得を目指すかと聞けば、多分皆口を揃えて否定するだろう。というのも、無減速クロスステップというのは、超高等技術でありながらそれができて也得られるメリットが少ないからだ。

かの三冠ウマ娘ギンシャリボーイの使っていた技にしては扱いが軽い、そもそもギンシャリボーイが驚異的だったのはそれを自在に「使いこなせていた」からだ。

狙ってやろうとすれば、できて直線での一発勝負になる。実際にドーナッツ先輩はそうしている。だがギンシャリボーイはどんな状況からでも繰り出せる。囲めない、潰せない、ブロックなどもつてのほか。直線だろうとコーナーだろうと状況を選ぶことなく、それこそ息をするようにそれを使ってくる。当時のウマ娘はどんな恐怖を抱いていただろう。

……ともかく、無減速クロスステップは、習得しようと思えばできるが、それに費やす時間があるなら基礎トレに時間を使った方がいいというのが一般論だろう。

常時レースに影響を及ぼせるようになるにはそれこそギンシャリボーイレベルのものが必要だし、ドーナッツ先輩のようにここぞという時のための小技として用いるにしても、大きなリスクが伴う上にそれ相応の練習環境が必要だ。

——そうした制約の中、ぼくは例外的にそうしたデメリットをほぼ無視できる。

他のウマ娘なら、習得にかかる時間を通常のトレーニングに回した方がよっぽど速くなるのだけど……ぼくの最高速は多分すぐにでも

頭打ちになる。

鍛えることをやめはしないが、時間を費やしすぎててもむしろ逆効果だ。スタミナを伸ばして常に最高速を出せるようにするほうが有意義だろう。

だから、長距離ならともかく、中距離の範疇であれば、作戦と小技で速度の無さを補う必要がある。その第一歩がこれということだ。とはいえ。

「やることは……こういう……地道な体幹トレーニング……なんです
ね……」

「当たり前だ」

「のクラッカー……」

「マルゼンスキーですら微妙に反応に困るようなことを言うのはやめんか」

ちなみに1960年代、関西方面のギャグである。

何を言ってるのか分からなかったせいとか、サブトレさんは珍しく困っているようだった。

今日ぼくがやっているのはバーベルスクワット。普通に人間がやる分には負荷が凄まじいが、ウマ娘の筋力なら扱いは通常トレーニングの一環程度のもと言っている。

「ともかく、これから何を教えていくにしても、体重移動や足捌きがキモになる以上、体幹が安定していなければ話にもならん。それに、正しい姿勢で走れば結果的にスタミナの消費を抑えることにも繋がる。しばらくは体幹トレーニングをメインにしていくぞ」

「はい……」

体幹トレーニング、と一口に言っても、本当に単に体幹を鍛えるだけではない。全身を鍛えるある種の複合トレーニングの側面があるため、スタミナもパワーも同時に鍛えられていく。

トレーニングの目的というのは常に一方だけではないのだ。

・・・≠・・・

さて、時期は3月。皐月賞の前哨戦、弥生賞が開催されることとなった。

注目ウマ娘としては、デビュー以降三連勝で今乗りに乗っているキング先輩。負けなしの二連勝で実力を見せつけたスカイ先輩。それから、ここまで二勝。先のきさらぎ賞で1着を取っているスペ先輩の三人だろう。

いずれもプライベートで交流のある仲の良い先輩である。正直に言うとう胃が痛かった。

結果としては——スペ先輩が1着。中山の短い直線を凄まじい末脚で差し切つての勝利だった。

敗因は……何だろう。やっぱリスぺ先輩の脚を実際あまり見られてないのが一番大きいだろうか。「なるほどねー」などと一見何も無い風にスカイ先輩はぼやいてたけど、内心メタクソに悔しがっているのは、そろそろ一年に近い付き合いのおかげで理解できていた。

……これ多分皐月賞に向けてしばらく戦術の構築に付き合わされる奴だな。

さて。一ヶ月後の皐月賞を控え各チームが準備に追われる中、未デビューのぼくたちの方はちよつとした動きがあった。

「テイオーがチームスピカに加入、ネイチヤもカノープスに加入……かあ」

「もく！ ふたりに先越されちゃったよ〜！」

「じゃあマヤノもどこかのチーム入る？ うちのキャパまだありそうだよ」

「んーん、なんかビビツつてこないからいい」

「残念」

テイオーとネイチヤがチームに加入。今までそんな素振りがなかった（ように見せてた）だけあつて、クラスの皆はこれに少なからず動揺を見せた。

テイオーは学年内でも一、二を争うほど実力を持つウマ娘で、ネイチヤも上から数えたほうが早いレベルの実力者。ぼくやウオツカ、スカレットに続いて早々にチームを決めたものだから、自分たちも早

く決めてしまわないと——という焦燥感が蔓延してしまったのだ
た。

……確かに早めにチームに入ったり専属トレーナーに面倒を見て
もらえば成長は見込めるけど、それで焦って相性の良くないトレ
ナーと組むことになるのは双方にとって良くないことだ。そうでな
くとも本格化を迎えているかどうかという問題もあるから、ウマ娘に
とってチームに入ったりするのに最適な時期というのは皆異なっ
てくる。

なので、焦りすぎるのは良くないよ、長い目で見ていこう——とい
うようなことを学年のインフルエンサーであるマヤノたちにそれと
なく広めてきてもらった。

おかげで一気に皆が焦ってチームに入りに行く、みたいな騒動は避
けられたけども、いつまた再燃することやら。ぼくはともかく、皆は
年頃の女の子だ。内面は繊細だから、思いもよらないことでカツと
なってしまうことは十分にありうる。せめてそういう子が良いト
レーナーさんと巡り合うことを祈ろう……。

「すつごい転入生も来るし、みんな焦っちゃうだろうな」

「そうだね……転入生……ん、個人が特定できてるの？」

トレセン学園は、その性質上普通の学校と比べて退学者が多い。

才能の壁にぶつかったとか、ケガとか、単純に個人的な事情だつた
りもあるけど……ともかく、競技の世界に身を置く以上、そうした挫
折は避けたくとも避けられない。毎年生徒会も奮闘していると言
うが……効果が上がっているかは、どうだろう。

ともかく、そんな事情があるので、トレセン学園の定員枠そのもの
は多少の余裕がある。定期的に編入試験も行われているため、地方ト
レセン所属のウマ娘が試験を受けることもあるし、突然本格化を迎え
たので中央を受けてみようか、というような剛毅なウマ娘もいる。

もっとも、試験の基準はそれ相応に高いので、合格者は少ないと聞
くけども。

「うん、知らない？ ウマスタグラマーのCur^カren^{レン}が来るって！」
「ほーん」

Curren——カレンチャンか。史実における「カレンチャン」と同じく適性はゴリゴリの短距離路線。ぼくとカチ合うことはまず無さそうだ。

それはともかく、重要なのはウマスタグラム……と言うより、SNSの女王とでも称するべき情報強者である点だ。ウマッターやウマチューブ、ウマトックを含め複数のアカウントを持ち、その全てで数多くのフォロワーを獲得している。

これは……。

「強敵登場……」

「お金の匂いがする……!」

「発想が最低だよ!」

「えへっ」

しかしながら、正確なことを言うとお金を求めることが最低なのではない。

お金を求めること自体は悪いことじゃあないんだ。心なり体なり命なり……それに伴って何かしらの犠牲が伴うというのが最低なんだ。それが無ければただの経済活動。現代社会を生きる上で必要なことを、少し規模を拡大して行っているに過ぎないのだ。

「なんか反応鈍いけど、トラちゃんってウマスタグラムとかやってないの?」

「やってるけど……」

「えっ、やってたの!? 何で教えてくれなかったの!?!」

「そんなに面白いこと書いてないし。見る?」

「うん! えーつとお……『輸入雑貨の販売承ります。商品一覧はホームページより』……う、ん?」

「ね?」

『「ね?」じゃなくなつて……あつ、ウマッターのアイコンがある! えーつと、なにになに……『トレセン学園敷地内で不定期に開店中!」

「面白いこと書いてないでしょ?」

「企業アカウント……?」

起業（したいひとの）アカウントではある。

ともかく、終始こんな調子なのでぼくはプライベートなアカウントというものは取得していない。どこから変な情報を漏らすとも知れないし、SNSで個人的なことを語るのは避けたいのが本音だ。

匿名掲示板なら、自分で自分を落とす発言でもして情報操作するという手もあるけど……いやいや、流石にそこまでするのは良くないな。チームの方にも迷惑がかかる可能性があるし。

これ、それこそつい最近始めたばかりではあるんだけど、思ったよりも効果がある。輸入雑貨の方はますますという程度だけど、屋台については何かにつけ買いに来るオグリ先輩やスペ先輩の写真などを（本人やトレーナーさんやその他学園の方に許可を取った上で）上げていることもあって、そこそこフォロワー数も増えている。

トレセン学園の生徒というのは、アスリートであり同時にアイドルでもある。宣伝効果としては十分だろう。

……これってぼくがデビューしたらぼく自身も宣伝の一環に加えるべきなのだろうか、とか思っただけど今は気にしないことにした。

なんとというか少し自意識過剰な感じがして恥ずかしい……。

影のように忍者のように

4月。トレセン学園にいくつかのイベントが一斉に押し寄せてきた。

まずは入学式。幾人ものウマ娘がトレセン学園の門を叩くこととなった。ぼくらが現状彼女らにできることは先輩としての姿を見せることだけになるだろうが、いずれターフの上でぶつかることもあるだろう。

次に進級と転入。チーム未所属だったりまだ専属トレーナーがついていなかったりするウマ娘は皆学園の教官のもとでトレーニングを行うわけだけど、既にチームなどに所属してしまっているウマ娘が一つの教室に固まっていると、教官の受け持つウマ娘の数に偏りが出てきてしまう。そのあたりを均一化するためにも毎年、進級の際にはクラス分けが行われる。今回は既にスピカに加入しているウオツカとスカレット、ネイチヤも別クラスになってしまった。

一方で、マヤノとマーベラスとは一緒のクラスになった。既にターボとテイオーを交えて凄まじいハイテンションになっている。遠巻きに見ているマツクイーンは相当疲労しているようだった。

そしてカレンチャンもうちのクラスに入ってきた……のだけど、転入初日に専属トレーナーを捕まえるとは恐れ入った。お兄ちゃんトレナーは強く生きてほしい。

更に、春のファン感謝祭。聖蹄祭と異なり、こちらは一般の学校で言えば体育祭のような趣が強い。

トゥインクルシリーズやドリームトロフィーシリーズで活躍しているウマ娘が、レース以外の競技で鎬を削るのを見られるとあって毎年多くの来場者がある。

ぼくとしても臨時収入が入りそうなこういうイベントは大歓迎だ。うへへのへ。

さて、一番の大イベントと言えば、当然ながら——GIレースの開催だ。

4月第一週の3月に第五日曜日があれば3月開催。大阪杯を皮切りとして、翌週に桜花賞、更にその翌週に皐月賞が開催される。障害競走のG1レース、中山グランドジャンプも皐月賞が行われる週の土曜日開催だ。春天については4月だったり5月だったりとマチマチだけど、まあ概ね皐月賞の翌々週にあると思えば間違っていない。

さて、今日はそんなG1レースの開催日。ぼくたちもその観戦と応援のために——阪神レース場にやってきていた。

(ティアアラ路線か……)

阪神レース場、芝1600m……桜花賞。トリプルティアアラの第一冠となるこのレース、出場することになったのはスナイパーⅡサンだ。

マイルから中距離付近を得意とする彼女にとつては一番走りやすい路線と言える……のだが、ぼくは少しばかり据わりの悪さを感じていた。というのも、JWCにおける「ニンジャスナイパー」は、紛れもなく牡馬。それに対して、史実におけるトリプルティアアラ——桜花賞、オークス、秋華賞は、本来牝馬限定戦として発展してきたレースだ。ヴィクトリアマイルやエリザベス女王杯についても同じことが言えるけど……。

ともかく、ウマ娘となつて垣根の取り払われたこの世界では、路線の違いにはまた別の意味がある。

まず、クラシック路線。皐月賞もダービーも菊花賞も、いずれも戦前から継続して開催され続けている由緒あるレースだ。

これについてどちらがより格式がある、と断言することはできない——というかするわけにはいかないのだけど、ともかく、それだけ深い歴史がある以上おいそれと距離やレース場を変更するわけにはいかない。

2000mの高速バ場から3000mの過酷な長距離レースまで全てに対応しながら走破しなければならないこともあって、クラシック三冠を獲ることは非常に難しい。同時に、その難易度故に三冠を達成したウマ娘に送られる栄誉は計り知れないものがあると言えよう。

ただ、同時にウマ娘にかかる負担は非常に大きい。皐月賞とダー

ビーの間隔は一ヶ月半ほどしか無いし、菊花賞までの間隔はかなり余裕があるものの、3000mという距離に対応するためのトレニングも過酷を極める。三冠が終わってしまおうと燃え尽きてしまったようになるウマ娘の数は少なくない。距離不安から菊花賞を回避したり、出場したことでケガをしてしまうようなウマ娘も多いだろう。

対して、トリプルティアラ。こちらは1600mの桜花賞から2400mのオークス、最後に2000mの秋華賞を経由する形になる。

桜花賞とオークスは歴史が古く、成立はクラシック三冠と同時期。しかし、当初はトリプルティアラという概念は無かった。その後、エリザベス2世の来日に伴いエリザベス女王杯がクラシック級のレースとして設立されたことを期にトリプルティアラという路線が確立。最近になって秋華賞が設立され史実では1996年、エリザベス女王杯がクラシック・シニア級混合の競走に移行したことで成熟を迎えた。

こちらの路線もクラシック三冠とほぼ同様のローテーションを経ることになるが、菊花賞の3000mほど極端に長い距離を走ることには無い。そのため、トレーニングの内容は中距離路線に対してより最適化されることになる。

ここで問題になるのが世界的な長距離路線の縮小だ。今現在、ウマ娘への体の負担の増加を懸念し、長距離路線のレースは距離縮小されたり廃止されたりと全体的に逆風と言える。

対して、中距離以下はむしろ追い風。世界的に見た時、賞金額トップ3となるレースはサウジカップ(ダート1800m)、ドバイワールドカップ(ダート2000m)、ジ・エベレスト(芝1200m)……芝とダートという差異はあるけど、これらはいずれも2000m以下のレースだ。というか、ジャパンカップに比肩するレベルの高額賞金が出るレースで2500m以上の長距離レースは、有馬記念とメルボルンカップ(芝3200m)しか存在しない。その有馬記念にしても2500mで実のところ中距離レースか長距離レースかは議論が分かれるところだし……。

(マイルとか中距離のが稼げるしぼくもそっちのが良かったと言えば

良かったんだけど……)

距離適性の差は残酷だ。

いずれにしろ、世界的な時流に合っているのは間違いなくティアラ路線のレースだ。菊花賞を回避するウマ娘の中にも、シニア級の猛者としてのぎを削ることになってもなお秋の天皇賞に出た方が良いと考えるひともし少なくないし、なんなら……ローテーションとしては異質だけど、NHKマイルからダービーを経由して秋天を目指すようなひともいたりする。

現在のトウインクルシリーズにおけるティアラ路線の立ち位置は、これ自体が多くのウマ娘から目標とされる格の高いレースでありつつ、シニア級以降のレースに備えた登竜門的な意味合いが備わっていると云っていいだろう。

……ちなみに、路線が違っても反対の路線のレースに出ることはできるけど、暗黙の了解としてそうするべきではないという感覚が根付いている。

これはウマソウルのなその強制力というわけではなく、トウインクルシリーズが興行であることから来るある種の配慮だ。何せ、裏方として動いているのはトレセン学園やURAだけじゃない。テレビ局や全国各地の関係各局……関連グッズのことも考えると小売店も何かとりサーチはしているだろうし、広告代理店も動いている。ひとり路線を少し外れてみるだけで、事前準備がパーになってしまうわけだから、迂闊にハイこっちに行きます、というわけにはいかない。一着を取れるなら……まだマーケティングのしようもあるけど、もし負けてしまったら……。

いや、将来的に出てくるんだろうけど。路線変更する破天荒なウマ娘。

「しっかしティアラねえ……あいつならNHKマイルに行くと思っただんだが」

「エルコンドルパサーが出走するから避けたとも言われていますが……」

「正直に言えばあいつの考えとすることはイマイチ分からん」

「トレーナーとしてその発言はいいんですか……」

「俺のようなオヤジが年頃の女学生の考えとることをいちいち理解していても嫌だろう。スカイ、何か聞いているか？」

「いや……そこまでは聞いてないですね……エルと一緒に出たくないのは、まあ事実でしょうけど」

ぼくはスカイ先輩と軽く視線を合わせた。

スナイパーⅡサンと同年だった唯一の後輩だったりで、他のメンバーと比べるともうちよつと親しさのランクが高いぼくらだが、それ故、実を言えば彼女が桜花賞に出走した理由を聞いてはいる。

簡単に言えば「ニンジャと桜花を組み合わせると超カツコ良くね？」。

伊達や酔狂100%である。

こんなG1レース舐めてんのかと言われそうな内容、外に漏らすわけにいかなかった。

「それよりっ！ そろそろ始まりますよ！」

「ん？ お？ そ、そうか」

今回のスナイパーⅡサンは5枠9番。ほぼ真ん中の位置だ。最初は長い直線から入る分東京レース場の芝2000などと比べると枠番の有利不利は出ないので、大して影響自体は無いか。

……いや、東京レース場芝2000が異常なまでに枠番の有利不利が出やすいだけなんだけど。

スナイパーⅡサンの勝負服は……言わずもがな、ほぼ忍者である。

いやだいぶアレンジはされている。裾とかヒラヒラしてるし……あとやっぱり微妙に所々露出がある。メンポは……流石に外してるようだ。走ってる最中にまであんな口に密着したものの着けてると絶対走り辛いし。そもそもここまでのレースでもだいたい外して青いマフラーで代用してる。顔出し慣れなよ。

『——スタートしました。いずれも綺麗なスタート！』

ほどなく、18人のウマ娘が一斉にスタートした。ほぼ横一列でのスタート。流石G1、集中力が違う。

数秒もすれば各ウマ娘の位置はそれぞれの脚質の通りに前後し、集

団を形成した。スナイパーⅡサンは前め。他のウマ娘の背後につけてスリップストリームを上手く使っているようだ、が……。

『おつとここまで全勝のニンジャスナイパー、タフネスブロッサムとグランパスシヨックに強烈にマークされています』

「……流石にここまで来るとマークも強くなるか」

ニンジャスナイパー、前哨戦のアネモネステークスを含め4戦全勝。ここまでほぼOP戦でG2以上の経験が無いとはいえ、全勝というのはそれだけ高い能力を持つということだ。

当然、周りからの注目も強まるし、マークしてくるウマ娘も増えてくる。ニンジャエミュレーションをしていない性格の根本がシャイなスナイパーⅡサンにとっては辛かろう。

……と思つてたのだけど、サブトレさんは余裕の表情だ。

「まあ、マークしたところでというところではありますが……」

「どうということですか？」

「マークを外すことにかけてあの子の右に出る者はいませんよ」

「はあ……？」

どういうこつちや、と思つて見ていると……三秒後、気付けばそのマークはサブトレさんの言う通りに瞬時に外れていた。

……あれ、いや、何で？ どうやったの？ 困惑が頭を支配する中、

次にぼくに言葉を投げってきたのはトレーナーさんだった。

「特定のウマ娘をマークしようと思えばそれだけ意識を向け注視する必要があるのは分かるな」

「それはまあ」

「だがコースを走る上で注意しなければならないことは数多くある」

頷いて応じる。

斜行、衝突、転倒……単なる反則行為のみならず、レースを成立させるために注意しなければならぬことは色々ある。

……いや、まさか。

「……あいつは注意が逸れた一瞬の隙を感じ取って、他のウマ娘にマークを押し付けている」

「ええ……」

なんつー奇っ怪な技能だ……。

隙を感じ取っ……ええ……。

「恥ずかしがりなあの子じゃないとできないことなんですよ」

「……ああ」

なんか読めてきた。そうか、素の状態だと人一倍シャイ、だからこそ視線に対して人一倍敏感で……結果、自分に向けられる意識が途切れたその瞬間を感じ取ることができる。即行動に移ることも含め、だ。

ドーナッツ先輩と度々並走をしていた理由はコレか。スリップス トリーム走法は目の前に他のウマ娘がいないと成立しない走法。だからこそ、少し体をずらすだけで、「今までニンジャスナイパーがいたはずの場所に別のウマ娘が現れる」というトリックが成立するようになる。ドーナッツ先輩は半ば無理矢理に併走に付き合わせることで、スリップストリーム走法を体に覚え込ませたのだろう。

(と言っても、これだけじゃ大きな武器にはならない。そうなるか、あのひとの走りは変幻自在の脚質が一番の強みってことになるのか――

『第4コーナーから直線に入った！ 前から15番タワーブリッジ、マキシマムダイソー、ビープリンセス、ランスプロキオン……』

「あれ？」

実況の人スナイパーIIサンのこと飛ばしたよね？

今彼女は三番手。コーナーを出る際に、マークを外すために内ラチギリギリを攻めたのは見えただけど……。

「今実況の人もスナイパーのこと飛ばしたねー」

「ああ、これはもう術中だねえ」

「タキオン先輩、ぼくのレベルでも分かるように言えますか？」

「そうだねえ……簡単と言えば簡単だが……さつきと同じように意識の隙を突いたのさ」

「……実況の？」

「結果論だがね」

「え？ あー……なる、ほど……？」

なるほど、分かった。これぼくのさっきの認識がちよつと間違つてたんだな。

スナイパー先輩の真の戦法とは即ち、マークを外すことじゃなくて他のウマ娘の意識から出ること。マークが外れるのは副次的な作用に過ぎない。

ターフにいて他のウマ娘を見失うということは普通に考えればありえないが、それとは別に「意識をしなくなる」ということはままある。

例えばはるか後方にいたり、視界の盲点に入ってしまったたり、完全にレースに集中してしまったり……いずれにせよ、同じターフを走っているウマ娘のことが気にならなくなる瞬間というものは必ず存在している。

彼女はそこにするりと入り込む。まさしく影のように忍者のように。そうして鋭い切れ味の末脚で差し込んでいく……今回は偶発的に実況の人の意識の隙間にも入り込んでしまったようだ。

……改めて列挙するととんでもない超感覚の賜物だなこれ？

『ここからニンジャスナイパー！……なにつ、ニンジャスナイパー！』

『微妙なところに隠れていましたね。これはひと波乱来ますよ』

『仁川の舞台はここから坂がある！ どう来る！』

終わりーハロン。ここで待ち受けているのが、高低差ほぼ2mの急な坂だ。ここまで緩やかな下り坂だっただけに、脚には強い負荷がかかってしまう。

スナイパー先輩はそのまま自分の存在を誇示するかのよう前に躍り出た。意識していなかった——できなかつた後続のウマ娘が、突然の登場にギョツとして坂への対応が一手止まる。そこで、猛烈なスパートをかけた。

『速い速い！ ニンジャスナイパー素晴らしい末脚！ 今一着でゴールイン！』

「お、おお……」

なんとというかこれまでとはまた異質な勝ち方を目にして、ぼくはし

ばらく変な声しか出なかった。

同時に、なるほどとも思った。スナイパー先輩はある意味ぼくとも似て、レース中に作戦を駆使して戦うタイプでもあるわけだ。

……だからエル先輩と一緒に走るのは避けたかったわけでもある。今のあの戦法、完全な格上で本当に自分のレースに没頭するようなタイプには通用しないから。

「ああいうのもアリなわけですねー」

「うんうん、ああいうのもアリだね」

ぼくはスカイ先輩と頷きあった。

戦法は読み合いと騙し合いだけではなく、ああして他人の意識を利用する方法もあるわけだ。

これもこれで、ある意味収穫というところか。

何にしろ、まずは控室に行つてスナイパーⅡサンに祝福を送ることにしよう。

本日の障害競走第一レース

春のファン感謝祭。このイベントは秋の聖蹄祭と同じく「ファン感謝祭」である関係上、主役となるのは基本的にトウインクルシリーズの走者である。

中にはまだ走ってないけど有名なカレンチャンみたいな例もあるが、大多数はそうじゃないのでサポート役が主になる。とは言っても、学生として賑やかし程度でも競技に出る必要はあるものだ。もしかするとここで意外な才能が発掘されることもあるわけだし。

さて、そんな具合なので、ぼくが参加することにした競技は……障害競走だ。

元々ケニアでも得意としていた方だし、最高速よりも着地後の瞬発力が重要視される関係上、今のぼくでも勝ち負けがつくくらいにはやりあえる。

……どっかの中山グランドジャンプの王者なんかは跳んでるんじゃないで跨いでるだけと言われることが多々あるが、まあそこまで障害競走に最適化してるひとも今はいないだろう。

ついでに屋台の宣伝も、なんて考えたりして。むほほ。

「あわよくば一着、なーんてちよっぴり考えてたわけですよ」

「何や諦めたんか」

主にあなたのせいですが。

今、ターフに訪れている障害競走の参加者は8名。ぼく、同級生のレッちゃん、ちよつと申し訳ないけど名前はご存じない先輩1名。あと……タマ先輩とクリーク先輩とヒシアマ寮長とフクキタル先輩、あとスズカ先輩だ。

ファン感謝祭で運動競技が多いだけあって、基本的に皆着用しているのは勝負服だ。ぼくたち未デビュー組はジャージだけど、その辺は置いておこう。

そんなことより勝ち筋が見えない。

「宝塚記念でもやる気ですかこのメンバー」

「ま、確かに錚々たる顔ぶれかもしれないけどな。勝つ気でやらな……つてアンタに言つても仕方あらへんか」

「えへっ……つてやる気力も今回は無いんですけど既に」

見せかけがどうあれぼくが勝利に対してかなり貪欲なのはタマ先輩も知っている。それにしたつて限度というものがあろうという話である。

タマ先輩もヒシアマ姐さんも追い込みが得意で瞬発力に優れるタイプだし、フクキタル先輩もレッちゃんも差し脚に優れる。スズカ先輩もトップスピードに乗せるまでが早いし……何よりトウインクルシリーズ走者が二名とプロ相当のドリームトロフィー走者が三名。障害競走とはいえデビュー前じゃあなあ。

まあ、今回は傷跡を残すくらいのもつもりでいよう。宣伝だけでも十分。ぼくは軽く肩を落としながらゲートに入った。

『さあお待ちせしましたあ！ 本日の障害競走第一レースが始まります！ 実況はトウカイテイオー！』

「あれ、テイオーだ」

「あら本当……」

少し驚いた。実況担当がテイオーか。会長と個人的に親交は深くとも、生徒会そのものとはあまり関係ないはずだけど……その個人的な親交の深さがあるからこそか。

サポートすると一口に言つても色んな方法があるし、実況で盛り上げるのもいいことだろう……と思つていたところ。

『解説はゴールドシップ！ なおこの障害競走は副題として「G4ゴ金船障害」と名付けられています』

『よろしくお願ひします』

「おつとお……？」

「ウソでしょ……」

なるほどね。そういうオチね。読めなかったわ。

……というか事前にしてた想定とか準備とかが完全に崩れちゃったよ。いや、ある意味全員条件がイーブンになったと言えるから、悪いわけではないのが厄介なだけだ。

でもこの障害競走……金船障害ってことはきつとバラエティ番組のそれだよなあ。運動能力よりもネタへの適応力が求められるタイプのやつ。どうしょコレ。

隣を見ると、スズカ先輩もこの競走の企画者にピンと来たのか、相困った表情を浮かべているようだった。普段スピカで付き合っているしね。となると実況のテイオーもその絡みか。……なんてこった、ヒントは既にバラ蒔かれていたんじゃないか。

「では皆、位置について」

「あれ、会長さんやないか」

「本当だね」

……その上今日の第一レースだからって会長がスターター役を務めている。しかも勝負服まで着て。なんとまあ贅沢な……。

ピリツと徐々に周囲の緊張感が高まっていくのを感じるけど、ぼくとスズカ先輩はと言えばこの先で何が待ち受けているのかと気が気でない状態になっていた。

『ゲートが開いた！ 飛び出したのはスズカ……と、ストライプだ！』

「……………」

「……………」

これは障害競走の名前を借りた、バラエティ番組の箱モノ障害物競走。何が起きるか分からない以上、先行逃げ切りで他のウマ娘よりも早く障害物にたどり着く方が有利になる。

……心の準備という意味で。

スズカ先輩は、元々の気質も大きいけど、それを踏まえた上で同じ考えに至ったのだろう。どこことなく困り顔で眉がへの字になっている。

『先頭からスズカ、ストライプ、クリーク、フクキタル、シネマホープ、レットイットダウン、ヒシアマ、タマモでレースが進んでるよ！ 縦長の展開で第一関門に差し掛かる！ まずほ——』

まずは!?

『飴玉探しだあ！』

「そう来たかア……………」

「あ……飴玉……!？」

飴玉探し。手を使わずに口だけで、小麦粉などの粉の中に隠した飴玉を探し当てるといふ競技、ないしは遊び。

近年では衛生面の問題もあって行わないことも増えたが、古くは運動会の定番だった時期もあるという。現在でもバラエティ番組などでは時折行われている。

思い切って探そうと思えば顔面粉だらけになるが、ある程度思い切って探さないと無駄に時間がかかるだけになってしまう。ここでどう対応するかが人によつて大きく異なるのが見どころの一つと言つていいだろう。

ちなみに飴玉をちゃんと取ったかどうかはエアグルーヴ副会長がジャッジする。また厳正ではあるけど豪華な人選だよ。

「え……ええつと……こう？　かしら……」

ぽふつと音を立ててスズカ先輩が粉に軽く顔……というか鼻を埋めた。

少し探した後顔を見ると、鼻の頭が白くなっている。黄色い歓声が（主にスぺ先輩から）飛んだ。

さて、じゃあぼくも……と思つただけで、ここで少し疑問が生じる。これ、何も考えずそのままやっていいものだろうか？

ファン感謝祭という性質を考えるに普通に探すだけというのはあまり好まれないはずだ。バラエティに富んだことをしてほしいというのが本旨のはず。となれば……。

『タマモとヒシアマ頭から突っ込んだー！　続いて続々飴を探しに

……ストライプはまだ顔をつけてもいませ』

「ふうっ!!」

「何や!？」

ぼくは思い切り息を吹きかけた。手を使わずに飴玉を取るといふルールには何も抵触していないぞ！

一気に粉が吹き散らされていく。塊になつていてある程度の重量が確保されている飴玉はそんな中でもなんと吹き飛ばされることはな……いや飛んだ。予想以上に息が強かつたか！　そこまで計算

している時間が無かったのもあるけど……。

ともかくまずい……けど、これはこれでやりようはある。よく目を凝らして軌道を予測、ウマ娘の身体能力を駆使して追いつき、噛み付くようにしてキヤツチする。

すると無事、飴玉は口内に収まった。ふう。セーフ。

「あんなんアリか!？」

『やれるならやっていいぜー!』

「できるかい!!」

なんか絵面がやたらスタイリッシュになってしまったことで、会場はだいぶ盛り上がっていた。……本来の目的からするとちよつと外れてるっていうかほぼ失敗だけど、まあいい。結果オーライ!

……ということにしておこう。

「ウマ娘の強さは心肺機能によるものが大部分を占めると言っている」

「どうした急に」

「心臓が大きい、肺が強いといった特徴は競走能力にそのまま影響するんだ。心拍数が少ないことはそのまま疲れにくさに繋がる」

「酸素を取り込む力、酸素を供給する力と言い換えられるからな」

「心臓の機能は生まれ持った素質が大きいが、後天的に鍛えることもできる。代表例は高山トレイニングだな」

「あの子の出身はケニア。平地ですら平均して標高1000mを超えるから生まれた時から常に高山トレイニングをしてるようなものなのか」

「あれだけの勢いで息を吐き出せるのはそういうことだな。それだけじゃなく目も良い、吹っ飛んだ飴玉すら見逃さないとは」

解説するのやめて!

ともかく、まず抜け出したのはほくということになる。むほほ、これなら一着も視野に入るぞ。

『というわけでストライプがまず飛び出した! おっと、続いてタマモとヒシアマが抜け出してくる! ……ここで次の障害は——』

「次は!？」

「次は何や!？」

『コスプレ早着替え』

「ナンデ!？」

「ゴルシおどれえ!!」

何やかやと言いなながら次々と——自分の名前が掲げられたボックスに入っていくぼくたちだが、ほどなく周りのボックスから悲鳴が上がった。

……ああ、まあ……そうなるだろうなあ。ゴルシパイセン企画ってことは……ねえ？

さて、じゃあ一方のぼくはと言うと……。

「虎か……」

虎のきぐるみだった。

まあ、割りかしどこでも売ってるしお手頃で丁度いいだろう。体のラインも出たりしないしなんだかんだ一番無難な気がする。

あ、いやでもちよつとこのままじゃ着るのが辛いな。脱ぐしかないか。

『皆ほぼ同時に飛び出した！ タマモクロスこれは幼稚園のスモック！ スーパークリークはまるでターフに迷い込んだ若奥様だあ!？ ヒシアマゾン……魔法少女!』

「うわああ」

「ゴルシイイ!!」

あー、知ってるぞこれ。かつて見た記憶がうっすら残ってる。

……いや待て。クリーク先輩ってあの時ベビーカー押してたっけか? なんかタマ先輩がマズいことになる予感がする!

『フクキタルは狐、ストライプは虎! スズカは……サイレンススズメ!』

『動物ふれあいランドだな』

「うひやあああああ!？」アニメ一期二話参考。

「どうしたスぺ!？」

「スぺちゃん、突然どうしたのかしら」

「さあ……」

スぺ先輩、スズカ先輩のこと大好きだからなあ。何が何なのかと考
えても心当たりが多いから分かんないや。

ちなみにレツちゃんはぼくらと同じ傾向の動物コースで黒い牛つぼ
い動物。先輩はサムライだ。スナイパーⅡサンが外で興奮している。

『さて、レースも大詰め！ 最後の障害はー？』

『借り物競走』

「もはや何でもアリかいな!!」

何でもアリである。だってゴルシだもの。

しかしこれ、パターンのにはどうだっけ。確か……ああ、そうだ。
借り物の内容が「ゴルシちゃん」とかそんな感じはずだ。

ある意味気は楽だ。こうなるとどうなってもトンチキなことにな
るのは変わりないし。

ぼくはふらつとその場にあつた適当な封筒を手にとって、中身を取
り出した。

——「蹄鉄」。

「普通に借り物競争じゃんツツ!!」

『普通に借り物競争だよ!』

『ゴルシちゃん知ってるぜ。アタシ主催だって分かってるなら裏を読
んでくるの。だからあえて何の裏もない普通の勝負にしといた』

『だそうです!』

くっ!? こうなるとどうするべきか……! 競技が始まるのが近
いウマ娘なら誰か蹄鉄も持ってそうだけど、また微妙に探すのが面倒
な……。

仕方ない、躊躇するような状況でもないし声上げるか。

「誰か蹄鉄持ってませんかー!!」

「オグリおるかー!!」

むっ。タマ先輩も何らかの条件を満たすべく隣でオグリ先輩を呼
び始めた。

しかし……ぼくの場合は条件を満たせるひとはそれなりにいるだ
ろうから、だからこそ自分が手を挙げなくても……ということには必ず
ある。いわゆる傍観者効果だ。

少しすると、客席の方がにわかになぎわついた。観客の山を割るようにして現れたのは、スーパースター、オグリキャップ。ただし本人は特に自覚は無く普通のことのように焼きそばをすすっていた。……そろそろ次の競技にでも参加するためか、勝負服で。

「……あつー！」

勝負服！となれば確実に、準備のためにもそろそろシューズに蹄鉄を付ける頃合いだ。ならこれはチャンス！

ぼくはタマ先輩を追うようにして一緒にオグリ先輩へと駆け寄った。

「オグリい！ ちょつち手伝いや！」

「オグリ先輩！ 蹄鉄貸してくださいー！」

「ん？」

「うん？」

——この時、ぼくの脳内に電流が走る。

そもそも今日の趣旨はファン感謝祭。負けん気が発動してこそいるが、そもそも勝つことにメリットはあまり無い。

ファンを沸かせて喜ばせてこそそのファン感謝祭ではないだろうか？ こういう時には……！

「わっせ、わっせ」

「……??？」

二人で運ぶことになった。

曰く、タマ先輩の借り物の指定は「芦毛のウマ娘」。ちょうど両方の条件を満たすのがオグリ先輩だったわけである。

同着ゴール。これもいいことじゃないか。今は本気の勝負というわけじゃないんだから取れる手だ。

「いやあ、一時はどうなるかと思うけど、これはこれでイベントとしちゃアリやな」

「そうですね。これで知名度が上がるなら万々歳です」

フハハ！ と二人して笑って——そんな時だった。ぐばん！ と言わんばかりの勢いで風を裂いてぼくらの横を唐突に何かが通り過ぎた。

「むえ!？」

『おおーつとここで先頭に躍り出たのは……スーパークreekだあ！』

今、ゴールイン!!』

「何やて!?! ……あつ」

やりましたく、と朗らかな笑顔で喜ぶクreek先輩。しかしほくらは見てしまった。彼女が押すベビーカーに、やや強引な体勢で専属トレーナーさんが収まっていることに。

後で聞いた話だが、どうやらクreek先輩のお題は「一番信頼している相手」だったそう。そりゃ決まるのも連れてくるのも早い。

……後日、ドリームトロフィーのレースでクreek先輩が絶好調な快走を見せるのはまた別の話である。

思ったより長いな

クラシツクの第一冠、皐月賞。今年のこのレースを制したのは、見事な作戦勝ちで他を抑えきったスカイ先輩だった。

両路線の一冠目をひとつのチームが独占。これも相当な快挙と言えるだろう。後日、トレーナーさんたちが奮発してちよっとお高いお店に連れて行ってもらったが、柄にも無く恐縮してしまった。我ながら小市民の根が抜けきらない。

ともあれ主要なレースが一通り終わった現状、うちのチームは5月末のオークスとダービーに向けて準備を進めることになっていた。そんな折の夜のことだ。

「ストライプちゃん、髪の手入れってしてる？」

入浴後の自由時間。いつも通り皆と何かしらして遊びながら脳トレなどしながら、ついでにスマホをいじって商売の確認などしている時、唐突にカレンチャンがそんなことを問いかけてきた。

思わず、ミークと指していたオセロの手が止まる。

髪のこと……？ 手入れ……？

「ヤダ何、におう？」

「そういうことじゃなくって」

少し髪を鼻に近付けて嗅いでみるが、特に臭いはしない。というかさっきお風呂入ったばかりだから変な臭いがするとも思いたくないんだけど……。

「ちゃんと頭は洗ってるよ」

「そういうことじゃなくって！」

「ケアのお話だよー！」

「ケア？」

カレンチャンの横からふっと顔を覗かせたマヤノがそんなことを告げてきた。

ケア……？

……ケア……？

「ケアとは……?」

「言うと思ったよ!」

「リンスはつけてるけど……?」

「つけてるって言い方がもう……」

「そのリンス、リンスインシャンプー……」

「トラちゃん……」

え、何この空気。ミークがリンスインシャンプーのこと指摘した途端にスンとなっちゃった。

シャンプーとリンス別々に買うより安いし、時間かからないから丁度いいんだけど……。

「トラちゃん、だいたい髪伸びてきたでしょ?」

「言われてみれば」

人間あるいはウマ娘の髪は月に1cmちよつと伸びるといふ。年間で換算すると12cm。女性の方が伸びるのが早いと言うから、だいたい15cmくらいだろうか。個人差はあるけど。

ケニアの実家にいた時は農作業を手伝っていたから、邪魔になるしと思つて適当な時期にぎつと切つたりしてたけど、日本に来てからはお金稼ぎの下準備やらトレーニングやら色々やることがあつたし、床屋に行くのもお金勿体ないからここ一年は伸ばし放題だった。

もみあげのあたりをくるくると巻いてみる。思つたより長いな。

「なるほど、じゃあそろそろ切つてこようかな」

「いや切ってきてつて話でもないよ?」

「トラちゃん切ってくるつて絶対1000円カットとかでしょ……」

「1000円カットだけ……?」

「マヤちゃん……」

「うん……トラちゃん、今度美容院行く! 予約はもう取つてあるから!」

「え、やだ……」

「ええっ!」

「えええ……」

「お金の問題ですか……」

「うん。一万円くらいかかるでしょ」

何かと……それこそよく自身もかなり感覚が麻痺しがちだが、一万円は大金だ。

ケニアの農村なんて月収一万円なんてザラにある。農家なので食べるには困らないけど、都会に出てトウインクルシリーズで活躍して……という夢を見るシマウマ娘も数多い。ただ、ほとんどはスピードの差で諦めるけど。

ぼくはある種の例外だが、「ここまでやれば勝てる」という前例を示すことができればたとえ例外であろうとそこには道ができる。鋼の意志スキルではない。で本能を抑え込んでるぼくとちよつと違って———というかぼくが異質なだけだけど———多くのシマウマ娘はレースとなるとかなり気性難というか気が荒い部分が露出してしまいが、それでもスタミナや荒地地を物ともしないパワーは据え置きだ。

一応人間の形態であるウマ娘の一種であるわけだから、理性は備わっているし本来のシマウマほどヤバい気性してるわけでもない調教できない、乗りこなせない、レースにならないの三重苦。アメリカで実際に行われたシマウマレースでは逸走や斜行が続出というかそもそも前に進むことすらままならないレベルだった。ので、スタミナ任せの大逃げ戦法で勝ちを拾える可能性はあると思うんだよね。その辺を見せて後に続いてもらいたい。

話が逸れた。ともかく、それほどの大金をおいそれとは使えない。お金稼ぎともあんまり関係ないし……。

「お店にもよるけど、そこまですつごく高いってことは無いよっ。」

「それに、もろつとカワイくなればもろつと注目されるよね★」

「何してるのマヤノ、カレン！ 行くよ！」

「ミークちゃん、トラちゃんが今どういう感情であんなこと言ってるのかマヤワかんないの」

「お金稼ぎのことしか考えてないと思います」

「あと行くのは今からじゃないよ……っ？」

いずれ顔出しの機会が増えるならば、と考えていたが、よく考える顔出し自体は今だって屋台でやってるようなものだ。その時に何

だこの小汚いガキはとでも思われたらいけない。それこそ機会の損失、商売をする上で避けなければならない事態と言えるのではないだろうか。

まずは行ってみようそれから考えよう。費用対効果とか。

・・・≠・・・

「急におなか痛くなってきた」

「どこまで来て?！」

一晩経って、ぼくは急に冷静になってしまった。

はつきり言おう。怖気づいた。ぼくは知っての通り、休みの日にはウマクロの無地Tと学校指定のハーフパンツで過ごす程度のクソダサロバ娘である。

美容院なんてそんな、カレンやマヤノが行くみたいなお店、もうオシャレすぎてオシャレ総本山（意味不明）じゃん。クソダサの化身のぼくにはハードルがいささか以上に高い。

流石に、今の服装は普段の休日のそれじゃないけど……まあ普通だ。シャツと長めの丈のジャケットにジーンズとかそんなん。

「場違いじゃないかなー」

「場違いじゃないようにするために行くとも考えられない?」

「なるほど」

「……」

「どうしたのマヤノ?」

「カレンちゃん、もうトラちゃんがどうしたら動くのかわかってるみたい」

「そうだね」

自分で言うのもなんだけど、わかりやすいもんね、ぼく。

お金のことならド級にチョロいし、ちゃんとメリットを示されれば即手首が大回転。もっとチョロくなる。

……まあ、その辺はアスリートの皆が察するのは少し難しいかもしれない。でもそれは普通のウマ娘はだいたいそうなのでそれ自体は

大した問題じゃない。カレンチャンがSNSの女王なので人の心の機微に非常に敏いだけだ。

「いらっしやいませ」

ほどなく、美容院に到着する。これまでに感じたことのないどこか異質でオサレな雰囲気包み込んでくるのを感じた。

ムーディーなBGMだ……ここ本当にぼくがいていい場所？

「予約してたマヤノトップガンとカレンチャンとサバナストラライブですっ」

「はい、お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

「二人も髪切るの？」

「もー、髪切る、じゃなくってカットする、って言ってよねっ。その方がオトナっぽいでしょ？」

「そういうものかな……」

「言葉遣いもカワイさの秘訣だよっ★」

なるほど、そういうことなら理解はできる。治るかどうかは別にして。

……そうこうあって、カットとシャンプーをしてもらって一時間ほど。

特にその辺こだわりのないぼくは「おまかせで」としか言いようがなく、店員さんにも苦笑されてしまったが……初めてなので仕方ないということにしてもらいたい。

ともかく。

「ほおー？」

「おおー、随分印象が変わったね！」

「ホントだ、写真撮ろ写真！」

「いいよー」

「こちらでお撮りしましょうか？」

「あ、お願いしまーす★ さてきて、#お友達 #ハジメテの美容室、なんてねっ」

フアサアと前髪をかきわけてみる。……できた！ なんだか新鮮な気分だ。

丁寧に手入れしたおかげか、髪が普段の数割増しでサラサラだ。すっげ……。

店員さんに三人揃った写真を撮ってもらうと、続いていくつかの注意を受けた。曰く、ちよつと手入れを怠ってるので普段からやるようにとのこと。トリートメントなどを使って普段から手入れし、お風呂から上がったたらドライヤーで乾かすように……とも。

髪の手入れってものも大変だとは感じていたが、やっぱり皆気を使ってるんだなあ。

……と思っただけど、それ以上にぼくの髪質にも原因はあるとか。縞毛だからこう……白黒分かれてるから、日光の反射率の問題があつて傷みやすさが違うんだとか。

ケアのための美容用品、結構お金かかりそうだなあとげんなりしつつも、アドバイスは素直に受け取ることにした。

……ということその後、美容院を出てしばらく三人で遊んでいた折のことである。

「あつ、あのー！ ウマスタグラマーのCurrenですよね!？」

「うん?」

何度も言うようだが、カレンチャンは超がつくほどの有名ウマ娘だ。そんな子が街で遊んでいるとなれば、当然だけど気付く人も出てくる。ウインドウショッピングに行こうとしていたぼくらに近づいてきたのは、おおむね高校生くらいの年齢の女の子たちだった。

思わず、ぼくとマヤノはひよいと一歩下がって、彼女らを遮らないようにした。

「そうだよ。あはっ、こんにちはっ♪」

「う、うわ〜……生Currenだ……あつ、ウマスタ、フォローしてますー!」

「こうして見てもやっぱりカワイイー!」

「ふふっ、ありがとうございます♪」

わー、有名人ってこういうことあるんだーすごいなー、なんて内心で舌を巻く。その上何気にそんな子と同級生で友達という扱いでいられるあたり、ちよつとした誇らしさも同時に湧いてきた。

カレンは特に気負うこと無く自然体で女子高生に対応していると、話の流れで写真を撮ることになった。ぼくらは一般人のため一旦この場からは下がる……けども。

「じゃあ、ぼくが写真撮りますよ」

「いいの？　ありがと〜！」

「カレンも皆もカワイく撮ってね♪」

「お任せあれ〜」

ぼくは女子高生たちとカレンのスマホを受け取ってカメラ係になることにした。

はいチーズ、パシャリ。綺麗な芦毛がキラッと輝いたその時をちょうどシャッターに収めることができた。うん、こんなものかな。

「撮れたよー」

「ありがと、ストライプちゃん。それじゃ、これからもよろしくね♪」

「カワイイカレンちゃん！」

それ挨拶なの？

……いや、まあいいか。あの人たちが楽しめたなら何よりだ。

「トラちゃん、写真撮るのにお金取ったりしないんだね？」

「冗談でもそんなことしないよ」

これも一種のファンサービス。ぼくがやるわけじゃなくカレンがやっつてることだけど、だからこそぼくの冗談というノイズを挟んで空気を壊すのは避けたかった。

「それにね？　こういう時はそれとなく『あ、あの子見たことあるな〜』くらいに思ってもらった方が、ぼくのウマッターなんかを見た時に好印象を持ってもらえるでしょ？　それはつまり真面目でいることがお金に繋がるってことなんだよ」

「そんなことだろうと思ったよ」

「もー、いつものことだけどサイテーだよー！」

「へへえ」

「褒めてないよ？」

あと、ぼくのデビューも近いしね……とは、流石に言わなかった。その辺守秘義務もあるし。

ま、空気感でなんとなく理解はしてるだろうけど。カレンも、もうちよつとトレーニングを積んで仕上がったらデビューだろうし。

その辺、なんとなくでも分かっちゃうんだよね。

……絶対カレンと一緒にやれるとお金稼ぎ捗ると思うんだけどなあ。

路線被らなくて良かったと思うべきやら、残念と思うべきやら。

ついでのように巻き込まれた

日本トウインクルシリーズ、クラシック期最大のレース、日本ダービー。

オークスの翌週に開催されるこのレースは恐らくここ数週間で最も注目されるレースで、今年はぼくの知る限り最も苛烈なレースとなった。

スペシャルウィーク、セイウンスカイ、キングヘイロー……そして、エルコンドルパサー。

恐ろしく豪華なレースだ。ここにもうひとり、グラス先輩も含まれていると更に恐ろしいことになっていたと思うのだけど……脚の故障ばかりは仕方ない。

史実においてエルコンドルパサーは日本ダービーに出走しなかった。これは1998年当時、クラシック級の三冠路線の競走にマル外（外国産馬）が出走できなかったのが一番の原因だ。もともこの世界ではそういう概念は無いので普通に出走できるのだけど。

……そもそも、NHKマイルカップの後に日本ダービーへ出走しようと思うと、中一週の過密かつ過酷なローテーションを経なければならぬ。1600mに対応する調整から即2400mに対応するための調整を経なければならぬわけだし、ちょっと非現実的と言っていいだろう。実際にやっつてどっちも勝った例が2つはあるけど。そしてこの日まさに増えたけど。どうなってんの。

そこを言い出すと英国三冠なんかは1600から3000まで対応しなければならぬ超過酷なレースなんだけども。米三冠にしてもローテーションが頭おかしい。ほぼ一ヶ月の間に全部ある。

さてともかく、ダービーの結果は——前代未聞、スペ先輩とエル先輩が同着。それも一着。一着での同着は、日本のG1レースだと……あったっけ。よく覚えてないや……。2021年現在、日本のG1レースで一着での同着は2010年のオークスの一例のみ。

国外では五、六年に一回程度にはそうしたケースがある。4着以下

だと割と見るんだけど、その辺りはウイニングライブに絡むことが少ないのであまり語られない。

さて。スカイ先輩は涙を飲む結果になったのだが……。

「……オークスとダービー、どちらも獲れなかったか」

「こればかりは難しいところですね」

スナイパーⅡサンも同じくオークスを落とし、ふたりは揃ってセリ市場に並べられたマグロめいて部室に転がっていた。

ダービーは、難しい。それはトレーナーさんたちの間でもウマ娘たちの間でも常々言われていることだ。

かの三冠ウマ娘セントライトの妹もダービーを落としているし、シャカール先輩は言わずもがな。そもそも骨折で断念という例もいくつかある。

ダービーから菊花賞という距離適性の残酷なまでの差はどうしようもないとして諦められることも多いけど、勝てる地力があるけど勝ちきれない、というケースも多発するのがダービーだ。伊達に「ダービーは最も運があるウマ娘が勝つ」と言われていない。

6月。夏合宿を目前に控えたぼくらは、やはり次の出走レースの対策に追われることになっていった。

スナイパーⅡサンは秋華賞。スカイ先輩は菊花賞。これまでのデータから出走してくる相手のことはだいたい分かっているため、この夏合宿は対策を立てるために十分時間を使えることだろう。しかしクラシック級は皆伸び盛りのウマ娘ばかり。夏合宿を経てもはや別人と思えるほどに成長するということも珍しくない。

なので。

「各チーム練習風景の撮影許可申請に来ました」

「承認ッ!!」

「ニヤー」

「もう少しよく考えてから発言してくださいね理事長。サバンナストライプさん、利用目的は何ですか?」

やってきたのは理事長室。去年は隠し撮りのような格好になってしまったため、今年はずいぶん偵察の許可に来たのだった。

とはいえ各チーム個別に許可を取りに行くのも面倒なので、理事長に直に許可をお願いしに来ただけだ。後でたづなさん経由でチームには通達されるだろうし……。

「用途はチーム内のデータ分析のみです。商用利用はしません。合宿が終わったなら、映像データは偵察させていただいたチーム及び学園に提供します。あ、これ誓約書です。これでいかがでしょうか？」

「承知ッ！ しかし、その誓約書はいつ書いてきたのかね？」

「昨年の例もあるのであらかじめトレーナーさんに書式を作っていただいてました」

「周到ッ！ ……ちよつと怖いくらいだぞ！」

「へへえ」

「褒めていらつしやるニュアンスではありませんよ？」

「こういう反応されると能力を評価されたみたいでちよつと得意になっちゃうんだよね。こういう時に調子に乗っちゃうのはある意味人間のサガだ。」

……この辺は去年の反省の部分が大きいけど。

「ですが分かりました、これなら問題無いかと」

「うむ、では改めて——承認ッ！」

「ありがとうございます」

——というわけで、そういうことになった。これで問題なく合宿の撮影もできるし、データ分析もできる。

とはいえ、偵察したデータそのものは他のチームにも渡る。そういう約束なのだからそれは仕方ない。

もつとも、ぼくらが分析した結果を送る必要は無いので、そのところは問題ない。むしろ逆に、うちのチームがどれだけ分析しているかを推測させて……場合によっては、推測しきれず混乱させるためのフアクターともなりうる。

盤外戦術にはこういうやり方もあるのである。むほほほ。

「ふほほ」

「見てよマックイーン、またストライプが悪そうな顔してるよ」

「また何か企んでそうですね」

「酷いよー」

理事長室から出てすぐ、通りがかりのティオーとマックイーンにそんなレッテルを貼られた。

ひどくない？ ぼくが毎時毎分每秒何か企んでると思ってるじゃない？

まあ今回は企んでるのは嘘じゃないけど……。

「出会い頭にいきなりレッテル貼りなんて……まさかこれが有名なヘイトスピーチ」

「人聞きの悪いことを言うのはやめてくださる？ あなたが言うところだと済まないのですけれど」

「……おお」

「あなたもしかして」

自分が外国人だということをつっかり忘れていた。

そうだそうだ、外国の方だとこの手の問題シャレじゃ済まないんだ。反省。

「どうかストライプが疑われてるのは普段から色々やってるからだよ……」

「これでも素行や生活態度に問題は無いんだよー」

「素行や生活態度はね？」

まるでそれ以外に問題があるような言い方じゃないか。その通りだ。

……いや問題と表現するのはどうかな？ 確かに策は巡らせるけど、別に他人に危害を加えてるわけでもないし……。

表現について少し悩みつつ視線を下げると、ティオーの手に何らかの書類が握られていることに気付いた。さつきからちらちらとマックイーンの方に向けては突き返されている。

「ところでそれは何？」

「入部届だよ。ゴルシがさ、どーしてもマックイーンにスピカに入っ
てほしいんだって」

「ですからまだ色々と手続きや話し合いがあると云っているじゃありませんの」

「ええ〜？」

「メジロ家は大変だねえ」

「他人事みたいな……いえ、他人事でしたわね……」
「うひひ」

名家のご令嬢様だから非常に大きなしがらみがあることは分かる。メジロ家の名前を背負う以上、チームの所属やその後のバックアップ体勢の構築についてもちゃんと相談する必要があるだろうし。

ただぼくは一般庶民、しかも奨学金を貰わないと学校に通えないレベルの激貧なのでその辺は推測するほかない。

カンニングめいた知識のおかげでなんとなく分からんこともないけど。

「一応入部予定ではあるんだよね？」

「え……ええ、まあ」

「一瞬言葉を濁したね？」

「それはいいじゃありませんの」

「じゃあトレーニングに参加するくらいはいいんじゃない？ 今のうちにこういう雰囲気で作ってるか確かめたい方がいいよ」

「そうだよマックイーン、スピカって結構自由だからね、もしかしたら戸惑っちゃうかも」

「ええ、それは見れば分かります」

「だろうね」

「まあ、実際の状況を見ないことには何とも言えませんから、一度行ってはみますわ……」

ということ、そういう方向で話はまとまった。

いやあめでたしめでたし——そう思っていた折のことである。

「ついでにストライプもついて来てくださいますんこと？」

「えっ」

「あら、チームに所属しているという意味では先達でしょう？ 時間もあるようですし、口添えした手前、ついてくるくらいはしていただけますわよね？」

ついでのように巻き込まれた。別チームなのに。

そうしてあれよあれよという間に準備が整い、10分ほど。ぼくは

スピカの面々と併走することになってしまっていた。

「なして？」

「ほらストライプもセットしてセット！」

「始めるぞー」

「え、ええ……」

スターター役にゴルシパイセン、記録役としてトレーナーさんとスズカ先輩。ウオツカとスカーレット、あとスペ先輩、テイオーとマツクイーンが併走に参加することになっている。

この中じやスペ先輩は一人だけデビュー済、オマケにダービーウマ娘である。格がヤバイ。

ま、ハナから今ここで通用するとは思わず適度にやろう。……と、何気に併走することについては抵抗を覚えていない自分に内心苦笑しながら、ぼくは位置についた。

「すみません、ストライプさん。別のチームなのに……」

「いやいいですよー。たまにはマツクイーンたちと併走したかったし」

「ふふっ。それはどういう意図で？」

「ノーコメント」

本音を言えば、たまには本当に何も考えず走りたいという本能に根ざした感情がある。

けど、それは別にいつでもできること。本当にやるべきなのは勝つために動くことで、今日のこれもポジティブに考えればデータ収集の一環にもなりうるわけだから、この機を逃すわけにはいかない。

「位置について、よーい……スタート！」

旗が振り下ろされるのと同時に、ぼくは思い切り足元を蹴った。

この人数の中でも感じ取れる程度には強い衝撃とともに、体が前に出る。

「！」

「っ」

——それだけだ。

必要以上に音を立てただけの言わば虚仮威^{こけおど}し。逃げを打ってくる

と知っている相手だとよく効くんだ。スカーレットとか。

逃げウマ娘、じゃなくても先頭に立つことになるウマ娘というのは、ペースメーカーの役割を課せられることになる。ペースが早ければ全体のペースもそれに合わせて上がるし、抑えめにすれば遅くなる。常に先頭に立って全力で走るせいでレース全体のペースが上がるターボ師匠が顕著な例だろう。

スカーレットはどうやらぼくが前に行くのとペースをガタガタにされると思っっているようだが……別に前に行かなくてもガタガタにはする。

した。

「ふっ……いー」

(おっ)

つられてペースを乱されることを嫌ったためか、ここでマックイーンが前に出る。

マックイーンの戦法は、基本的に先行型の横綱相撲。前めにつけることの方が多いが、必要とあれば逃げもできる。

圧倒的なスタミナを利用し、早めのペースで半ば強引に押し切ることでスタミナ差で磨り潰す。

最大限好意的な見方をすればぼくの戦法はそれに似ていると言えなくもないが、マックイーンのそれは圧倒的に完成度が高くスマートだ。だって変な策略を考える必要も無く全部自前の能力でやれるんだから。

(とになると……)

対処法は驚くほど少ない。単純に速さとスタミナで上回らないといけないんだから。手があるとすれば鋭く差し切ってみせるか、なんだけど……当然ぼくにそんな差し脚は無い。

ここまでの展開だと……ふむ、新しい手を考えるのもアリだけど……それよりは、あくまで併走、トレーニングという趣旨に則った方がいいか。

コース中盤でロングスパートをかける。計算だとマックイーンに追いつくのは残り300m地点くらい。競り合いにはなるだろうけ

ど、マックイーンの方もトップスピードにならないとぼくを抜けない……はず。

視線が交錯する。仕掛けてきましたわね、と目が語りかけてくるのを受け止め……。

「あれっ!？」

「あー」

……受け流し、ゴール前でぼくは自分たちをちぎっていく素晴らし
い差し脚の持ち主に視線を向けた。スペ先輩とウオツカである。

当然というか、順当というか……ロングスパート自体は効果的な
んだけど、鋭さには欠けるからこういう場面で横から差し切られるケ
ースも多い。シードリングカップの時のように計算して差し切るた
めを使うか、もつと独走できる状況を作らないと。

うん、とはいえそのことが実戦で証明できて良かった。今までは想
像の上でしか場面を展開できなかったし……次はこれを活かしてい
こう。

……流石に選抜レースとあんまり変わらない戦術でやれば、このく
らいが限界だな。

売上アップのパーティータイム

「こうして見ると対照的なもんだな」

「何がですか？」

併走が終わった直後、クールダウンをしようとしていると、スピカのトレーナーさんからふとそんな言葉が漏れた。

「テイオーとマックイーンのふたりとストライプがな」

「そうでしょうか……？」

「マックイーンはメジロ家だしテイオーも旧家のご令嬢様だ。ふたりとも恵まれた環境に生まれ育った天才……」

スズカ先輩が「テイオーってそうだったの……」とでも言いたげな顔をしているのがチラツツと見えた。

分からんでもないけど、長く付き合っているとテイオーは言動の端々で育ちの良さを見せてくる。実家に「じいや」がいたり、当たり前みたいにダンス教室に通ってたり……本人が気にしてない風だから話題に上がることも少ない。けど、食べ方とか所作とかふと見るとやけに綺麗だったりして見る人が見れば分かるという程度には洗練されてる。

「対してストライプは外国の農村出身で、恵まれた境遇はしていない。その上、血筋的にはレースに向いてもいないわけだからな」

「ハングリー精神は、養われているでしょうね……」

「……ま、確かにそこはな……」

はつきり言っただけでええんやで。守銭奴って。

……まあ確かにこれだけ差異があるというか対照的な境遇だと、気にかかりはするか。ぼくら全然その辺気にせず付き合い持ってたけど。

それはそれとして今後、大舞台などで直接対決でもしようものなら宣伝材料として扱われそうな要素ではある。

お金のおいがするので気にかけておこう。

「実力の方はどうでしたか？」

「それだがな……」

トレーナーさんがこつちを見ると、ギョツとしぼるような圧力がかったような感覚があった。

うちのトレーナーさんはデータ分析が得意だけど、スピカのトレーナーさんはひと目見るだけでウマ娘の体重の変化を即座に感じ取れるほどの洞察力と観察眼がある。ちょっと怖いけど、どういう風に映ってるのかは気になるところだ。

「ま、確実に今日は本気じゃ無かっただろうな。シードリングカップの時の何をしでかすか分からないようなおっかなさが無い」

「そういえば……」

「ただ、1月のあの時よりもスタミナは相当伸びてんな。もう息が整ってやがる」

げ。バレた。

……いや分かりきってることだしいいけど。ぼくの武器なんてスタミナスタミナパワーひとつ飛ばしてスタミナみたいな状態だし、推測するのも難しくはない。

むしろこれで全然わからんと言われたらその方が問題だ。トレーナーとして。

と、ぼくと同じように話を聞いていたらしいテイオーが問いかけてくる。

「実際いつなの？」

「早めに。だけど守秘義務あるからお伝えできません」

「ちえっ」

トウインクルシリーズはアスリートの世界であると同時にアイドルの世界でもある。いくら事前に定まっていると言っても、勝手に他人に教えるのはコンプライアンス違反になる。調整次第で変わることもありうるし。

基本的にこういったことについては、URAの公式発表が全てに優先される。

クールダウンを終えた後、スピカの皆から離れてぼくは自主トレに戻った。

合間に今度の合宿のための仕込みなどもしつつ、なので時間はかかったが、併走の反省も踏まえてより気持ち引き締まったように思う。

・・・≠・・・

7月、夏合宿の開幕だ。今年も大勢のウマ娘がトレセン学園所有の合宿所に集い、研鑽を重ねることになる。

そしてぼくにとっては今年もまた商売時である。売上アップのファイバータイムだ。

「今年の新作はミネラル補給もできるソルティなトロピカルジュースと健康志向のスムージーとピタサンド。去年のメニューは据え置きで、かき氷は裏メニューから表に昇格したよー」

「私のいちごミルクかき氷が表に出てきてしまっていますわ!？」

「落ち着いてマックイーン、別にあのメニューアナタだけが食べてたわけじゃないのよ」

……なんだか気に入ったのか、マックイーンは変な独占欲を發揮し始めているがそれは置いておこう。

さて、今年の変更点はまずメニューの増加。これは実は表以外にも裏メニューも少し増えている。「ここだけのお話があるんですよー」という攻勢は未だ健在だ。味をしめたとも言う。

人は皆、限定という言葉に弱い。ぼくにも身に覚えと苦い思い出がある。

で、もう一つが屋台を持つてきたことだ。持ち運びできるものを増やしつつ調理設備を利用できるようにするためである。が、スカレットがそのところを気にしているようだった。

「この屋台と荷物、どうやって持つてきたの？」

「業者に頼んだんだよ」

呆れたような納得いったような微妙な表情をされた。

けど真面目な話、こういう運送はプロに頼むに限るのではないだろうか。そもそもが大きなものだし。まさかトレーナーさんに頼んで

トラックを運転してきてもらうというわけにもいくまい。お金がかかるのにやるのか、と思われそうだけど、この程度は必要経費というやつだ。

「しかしこう屋台を持ってきたということは、簡単に動けなくなるわけですから」

「偵察はできなくなるかもしれないわね」

「そう思う?」

「この口ぶりは……」

「……ああ!? よく考えたらストライプが直に偵察に行く必要はありませんわ!」

「あっ!」

「バレたか」

そう。偵察そのものは別にぼくの仕事というわけではないのである。

許可は取ってあるので、必要なら別にチーム内の誰が行ってもいい。サブトレさんとか、デジタルパイセンとか。

マックイーンのように、去年の行動のせいでもぼくが偵察に行くと思いはんでるひとも多いので、これが微妙に効果が上がったりする。いやあ、油断してくれるっていいね。

ぼくを警戒する以前にまずチーム全体を警戒しないといけないことを忘れてる人が多いんだこれが。

ぼくの悪名が広がりすぎとも言える。おかしい。悪事はしていないしルールにも抵触していないはず……。

「まあまあ、細かいことは気にせずに。裏メニユーどう?」

「細かいはないわよ」

「まず最初に裏メニユーを勧めてくるというのはいかがですか?」

「聞くのは聞くんだ」

苦笑はしつつ、透き通った青のグラデーシヨンの棒アイスを見せた。

「色は綺麗ですけど……これは?」

「トロピカルジュースの副産物。色合いと南国フルーツ、それからほんのりつけた塩味で海をイメージしてみたんだ。名付けて……」

「名付けて？」

「……マリンソルトアイス」

「何今の間」

危ない。危険な商標に触れるところだった、

……ともかくそういう棒アイスだ。仕入れの手間がかかってる分他と比べてやや値段は高め。150円くらい。

まだ試作段階で出来はちよつと粗いので、来年の通常メニュー化に向けてここで感想を聞いておきたいところだ。

「では……8本」

「ほーん。8本。まいどあり」

「何か言いたげですわね」

「マックイーンは優しいねって話」

「そうね」

「なっ」

ちよつと8本、となるとチームスピカのメンバー全員分ということになる。

ノブレスオブリージュというやつだろうか。普段の生活でもマックイーン割と自然にこういうことするんだよね。思わずにまにましちゃう。

「スカーレットはどうする？」

「ジュースだけ、あ、アタシも人数分貰うわ」

「まいど」

ちよつとほっこりした気持ちになりながら商品を渡し、ふたりとはそこで別れることになった。

さて。運動量とエネルギーの問題で大食いが多いウマ娘だとは言っても、今はトレーニングで忙しいため、常にお客さんが来るというわけでもない。

休憩や、今のマックイーンたちのようにチームメンバー全員分を一度に買いに来る、というようなケースはあるけど、まあまあ暇な時間

がある。

ということ、ぼくはこの時間を利用して、普段のトレーニングとは別にサブトレさんに事前に頼まれていた計測を行うことにしていた。

誰もいないことを確認し、屋台から距離を取る。頭の中で屋台の位置をコーナーの頂点と設定して……。

「——ふっ。」

一歩一歩踏みしめ、砂浜に跡を残すことを意識しながら、けど可能な限り自然な形で駆け抜ける。

ここで確認しているのはストライドの幅だ。普段のトレーニングでも確認はしてるけど、レーザー計測装置みたいなお高い機材は常に使えるわけじゃないし、今測りたいのは平均ストライド長ではない。ストライド走法が得意、ピッチ走法が得意とひと口に言ってはみても、坂路やコーナーに入れば自然と歩幅は走りやすいように変化する。これはその、言わば「揺らぎ」であるストライド長の変化を分かりやすくするためのものだ。

柔らかい砂浜は負荷をかけることもそうだけど、足跡が残りやすいので計測がしやすい。そうしてしばらくやってみただけ……。

(問題はない……よね?)

うん、大丈夫……なはず。と、自信を持って言えるほどではない。意識しての切り替えはしてるけど、どこまで行っても主観だし。

それぞれメジャーで測ってメモを取る。途中でお客さんが来て中断させられることもあったけど、計測そのものは特に問題なく終わった。

そこでふと、今回はその辺りの意図を聞くのを忘れてたな、と思いつく。

スナイパーIIサンの秋華賞、スカイ先輩の菊花賞の対策をそれぞれしないといけないので、今、チームはどちらやくそ忙しい。説明をしないのではなくできない、と言う方が正確だろう。

今やることが終わったらすぐ説明するとも言ってたので特に焦りはないけど、珍しいこともあるものだ。

……そんだけ説明が長くなりそうだと確定もしているのだけど、今は気にしないでおこう。

怪我の妙技

「セクレタリアト、というウマ娘を知っているか？」

「アメリカの三冠を取った伝説的なウマ娘ですよ」

「話が早いな」

夕方。トレーニングが一段落ついたところで、まだ体力的に余裕のあるメンバーを交えて、トレーナーさんたちからの解説が行われることになった。

セクレタリアト。アメリカのトウインクルシリーズにおいて伝説的な功績を残したウマ娘だ。アメリカ三冠のアホみたいな過密スケジュールをもともしないほどの頑丈さと、三冠レース全てをレコード勝ちした上に三冠目で2着に31バ身差をつけるという異次元の速度を併せ持つ。多分、最強のウマ娘は、という議論になった時に必ず挙がるだろう。

その走りを見た人は、口を揃えてこう言う。

「——彼女の走りは、俺が見てきた中で最も合理的で完壁^{パーフェクト}だった」

トレーナーさんも言った。

「若い頃に見たのがよっぽど衝撃的だったようで、私も散々聞かされましたね……」

気持ちは分かる——。

生でもものすごい走りを見たら、思わず語りたくなっちゃうとは思う。会長とかもその類のウマ娘だろう。

強さというものは時に見てる人すら狂わせる。トレーナーさんがその一人なのは予想外ではあったけども。

ともかく、その強さを支えているのは、単なる身体能力の高さだけではない。

『等速ストライド』の話かい？」

等速ストライド。セクレタリアトの驚異的な加速の秘訣……と言われることもある走法だ。

史実におけるそれについては、話を聞いたことがあるという程度。

実情はよく分からない。なにぶん、海外のことだし当時英語の資料までは見てなかったからだ。ただ、圧倒的な走りをしていたことは映像も見て知っている。

セクレタリアトは短い歩幅と長い歩幅、その両方を自在に操ることができたという話だ。それによつて長距離でも短距離でもすぐに対応してみせたらしい。同様のことが出来る馬は40年後のとなる日本の三冠馬が思い浮かぶけど、それはまあ一旦置いておこう。

ここで重要なのは、ウマ娘——人間のアスリートなら、程度の差こそあれストライドとピッチの使い分けは誰でもやっているというあたりだ。

……変な言い方をするとスシウオークなんかと似ている。どういう形で走法になつているのだろうか。

うん、分からない時は聞こう。

「話には聞くんですけど、どういう原理の技術なんですか？」

「あー……なんてーか、『普通』の極地つつーのかな……」

「Ah……難しい、デスね……」

リムジン先輩はともかく、ドーナッツ先輩にしては煮え切らない返事だ。いつもならもつとスパツと言葉にしてるのに。

首を傾げていると、横からシャカール先輩がそれに補足を加えた。「言つてみればあれは『走る』つて動作から全部の無駄を削ぎ落としたようなモンだ。ストライドの長短を使い分けるのは結果論に過ぎねエ。等速ストライドつてのは、あらゆる状況で等しい速さで走れるストライドつてのを意味してんだよ」

「……等しい速さ、つてことは——減速をしない？」

「ああ。坂路でもコーナーでもな。セクレタリアトはそれを常時使いこなしてた。走るという行為を極限まで最適化してやがんだよ」

「それつて……自分は同じ速度で走り続けて、でも他のひとはコーナーとかで減速するわけだから」

「これ以上ねエつてくらい分かりやすい数字の積み重ねだろ？」

自然に走るだけで、周りが勝手に順位を落としていく。

セクレタリアトの脚質をあえて表現するとすれば、「逃げ」……それ

はマルゼンスキー先輩のように、「結果的に逃げになっている」ような形のそれだ。

確かに映像で見る限り、序盤は他のウマ娘と競り合っている場面もあったと思う。けど最終直線に入るあたりでもう他の走者をぶっちぎっていた。理屈としては確かにこれ以上無いくらい分かりやすいか。

……で、この話題をここで出すってことは。

「……トレーナーさん。前もこんなことありましたけどつまりそういうことですよ？」

「そうだ。ストライプには今やっている無減速でのクロスステップとともに、等速ストライドの習得を目指してもらいたい」

そう来るかア……。

いや、そう来て当然なんだ。もうスピードそのものはほぼ頭打ちが見えてるから、別の要因でこれを補うしかないんだし。

策を講じるにしろ、スタミナで押し切るにしろ、ぼくにできることは全体的に自分の速さを底上げするよりも他人の能力をなんとか制限させてという方向性が強い。

変化球気味なやり方しかないぼくにとっては、これ以上ないくらい正統派の、そして最も手堅いだろう……相対的とはいえ「速さ」を得る方法だ。こう提案するのも、理に適ってはいる。

……習得難易度を除けば。

「……これ、何年がかりでやるお話になります？」

「……早ければ2年ほどか」

「遅ければ……？」

「どうにもならんな……」

無慈悲な話だった。

いや、習得の芽がないと言われるよりよっぽどマシか。あとはぼく自身がいかに努力するかということと、仮に焦ったとしても、それを表に出さない精神力と忍耐力。それと……。

「あとぼく無駄の極みみたいな動作挟まないと本気で走れないんですけど大丈夫でしょうか」

「前例が無さすぎて何とも言えん」

「でしようね」

……いかに「自分の動き」としてそれを落とし込み昇華するか、そのセンスが重要になってくるわけだ。

しかし、それでも数年がかりの計画か。これはこれで、シニア級、ひいてはドリームトロフィーでの活躍を見込んでくれているわけで。

そここのところは素直に嬉しいと思うのであった。

……≠……

現在のぼくの課題は主に2つに分けられる。ひとつは全体的なフィジカル強化。目標は2000mを全力で走りきれるようになること。

この一芸ができるようになるだけで——「だけ」って言っているのか？——勝てるレースはグッと増える。オープンからG3くらいなら、駆け引き抜きでもイケるかもしれない。

もう一つが、技術の習得。これは格上と張り合うための武器であり、今は無減速クロスステップと等速ストライドを身に付けようとしているわけだが……。

「ふたつ同時進行は正気の沙汰じゃないですか」

「今頃気付いたのか。ウカツ！」

トレーニングは更に激しさを増し、以前よりも更にギリギリを攻めるようなものになっていた。

ケガはしないよう、させないように細心の注意を払いながら、しかし全身に強く強く負荷をかける。

元々、ミステイレクションを応用した身代わり走法と強いシナジーを持つ無減速クロスステップを習得しようとしていたスナイパーⅡサンが参加してくるのはまあ自然と言えば自然。だけど、ぼくに付き合わされてトレーニング量が増えているのはちよつと可哀想だった。

「無減速クロスステップにしろ等速ストライドにしろ、基礎的な能力

がモノを言う技術です。一方のトレーニングで鍛えた能力は、もう一方の技術に必ず好影響を与えます」

「地面を這いずる虫にイーグルの思考は理解できぬという……」

「多分それだいが用法違います」

「ま、元々あのステップは等速ストライドを真似ようとして……失敗した時に生まれたものだからなあ」

「えっ、そうなんですか？」

——と、不意に横からトレーナーさんがそんな裏話を明かしてきた。

そういうことなら、確かに技術の習得が相互に影響を与えるというのも頷ける。

「怪我の妙技というヤツだな」

「怪我の功名です」

「結局、等速ストライドそのものの習得は半端なところで終わってしまったが、蓋を開けてみれば無敗の三冠ウマ娘だ。トレーニング技術の熟成が進んでいなかった時代というのもあるが……おっと」

サブトレさんもそこを意識して……おや。何やら顔に手を当てて俯いている。

……あ、そうか。自分と同じ年頃のウマ娘のことを滔々と語られても困るか。親が娘と同じ年頃の女性のことを語ってるような姿を見て快いと思う人もまずいないだろうし。

「余談は置いておいて、トレーニングを続けますよ」

「余談って扱いでいいんですかアレ。ウマ娘的にはだいたい聞きたいですよあのギンシャリボーイの裏話とか」

「私はそうでもありませんね……」

辟易した様子が見て取れる。散々聞かされてきたんだろうなあこれ……。

話す相手が違っていると、同じ話を聞いたことがある人がいてもつい同じことを言ってしまう現象。あると思います。

「そうだ。トレーナーさんにとつての理想がセクレタリアトなら、サブトレさんも何かあるんですか？」

「……そうですね、『ギンシャリボーイ』を超えるウマ娘を育てることが私の目標です」

「ほえー」

「難СЛОЖНОいのではないだろうか」

「冗談だと思つてますね？」

「まあ半分くらい」

それだけやったことが伝説的すぎるとも言う。

あまりすごいすごいと言いつ過ぎるのも、それはそれで自分の可能性を狭めるだけなので言い過ぎないよう努めるのが望ましいけども……意識するなつて方が難しいよね、元を辿れば同じチーム出身だし。

「これでもあなたたちには期待しているんですよ？」

「あまり大きな期待向けられると恐縮します」

「コワイ」

「……今後期待なんていくらでもかけられるんですよ……」

期待はしないでほしい。その方がより油断を誘えるから。

1000直の覇者

ぼくのスマホの主な用途は、仕入れ、宣伝、それから写真撮影と連絡だ。

娯楽のために使いたい気持ちは大いにあるのだけど、現状は時間的な問題と、あと料金プランを最低限にしたせいでデータ容量が少ないことで一步踏み込めずにいる。

トレセン学園内にフリーWi-Fiなんかはあるっちゃあるけど、基本的にみんなが使っているので激重だ。なので今はいいか、としてこの問題は置いていた。

……で、トレセン学園の所有物件ということで、合宿所にも同じようにネット回線は引かれているし、フリーWi-Fiも開放されたりしている。

早朝、まだ皆が起きてきていないくらいの時間帯に、ぼくはふと思いついて食堂までやってきていた。ウマ娘の姿は、当然ながら無い。ちようどいいな。

「さて、と」

ぼくはまずあるものを取り出す。昨晚作っておいたコーヒーゼリーと、コーヒーを冷凍させて作った氷だ。氷の方はウマ娘パワーで細かく砕き、ゼリーはえいやとスプーンを使ってぐっちゃぐちゃに混ぜてしまう。この二種類を入れたグラスに牛乳を注げば……。

「できた」

氷カフェオレinゼリー。チェーン店のオサレな喫茶店なんかにありそうでいいじゃないか。むふふ。

単純にコーヒーと牛乳という鉄板の組み合わせな上に、ゼリーを加えて食感を楽しむ余地をプラス。氷の方は時間が経つごとに徐々に溶けていくから、味の変化も楽しめる。

「じゅるりら……」

「……!?!」

むっ、殺気!?

いや食欲!

入り口に視線を向けると、そこには物欲しそうにこちらを覗き込んでくるスペ先輩とマックイーンの姿があった。

ぼくは新たに2つ同じものを作ってふたりに差し出した。

「えへへえ、すみません、催促したみたいになっちゃって」

「や、別にいいですけど。それよりスペ先輩もマックイーンも、こんな時間にどうしたの?」

「つい早く起きちゃって……お母ちゃんが農家で、そのお手伝いをしてたので」

「あーあるある」

「わかりますか?」

「わかりますわかります。ぼくの実家も農家ですし」

「わっ」

思わずふたりしてへへつと変な笑いが出た。マックイーンはよく分からなかったらしく、首をかしげっていた。

「マックイーンはお腹すいたの?」

「どうして理由をほぼ断定していますの!?! 軽い朝練ですわ!」

そうは言っているがぼくは知っている。昨晚、テイオーが目の前でパフェを食べ始めたせいで触発され自分も食べてしまったことを。そして朝練と言いつつ多分これは帳尻合わせという意図が多分に含まれていることを。

そして恐らく、今多分普通に小腹が空いていることも。

「そういうストライプはまた悪巧みを?」

「ううん、動画見ようと思ってただけだよ。人が多い場所だと別の分析と布石打ち始めそうだからひとりの方がいいと思って」

「何の動画なんですか?」

「……チョコセンバンチョコのレース映像」

——チョコセンバンチョコ。

1000直新潟レース場1000m直線の覇者とも称された、ぼくらにとってはだいたい前の世代のウマ娘だ。日本のウマ娘としては初めてバイワールドカップを制したとして知られている。史実では

2011年のヴィクトワールピサが初。

あのギンシャリボーイのライバルとも目されており、調べてみれば実在していることが確認できた時のぼくはもうどエライ衝撃を受けたものだった。

「ああ、あの……けれどストライブにはあまり学ぶところは無いかもしれないわよ」

「学ぶところがあるかどうかはぼくが決めるよ。けど、そんなに？」

「バンチョーさん……あつ、今時々レースの番組で解説してますね！」
えつ、なにそれ知らない。

概要を知っているらしいマックイーンには一旦解説は控えてもらい、動画を再生する。多分、一番有名なドバイワールドカップのそれだ。

……ウマ耳でセットし辛いだろうにあのキマったリーゼント——
ポンパドゥールって言うんだっけ？——は、見るからに気合が”
注入^{はい}って”いることが分かる。

勝負服もサラシに特攻服^{トッブク}といつそ時代錯誤的な雰囲気醸し出して……あ、トレーナー^{トッブク}さんと思しき人がTシャツ手渡した。流石に外国は肌の露出に厳しいか。

ともあれ、レースがスタートする……。

「そういうえばバンチョーさん、ダートコースも走るんですね？」

「適性はむしろそちらの方があると聞きます。けれど、ライバルとの対決に強いこだわりがあったらしく、血の滲むような努力で適応した……と。そういうインタビュー記事がありましたわ」

ライバルとはこの場合ギンシャリボーイのことだろう。よつぽどのこだわりだったと見える。

とりあえずお金なぼくとはあまり価値観は合致しそうにないかもしれない。

ほどなくして、レースも本番が始まった。

序盤から中盤にかけてのレース展開はごく穏やかなものだ。先頭に立った外国のウマ娘がペースを作りながら、後方に睨みをきかせる。やや逃げ有利の配分といえるだろうか。ぼくなら早めに仕掛け

始めたりやめたりして周りを揺さぶっていくところだが、チヨクセンバンチヨーは不気味なほど沈黙している。

(メイダンの直線は400mほど……だったっけ)

レースの舞台となるメイダンレース場のダート2000mは最終直線が長めで、チヨクセンバンチヨーにとっては走りやすい環境といえる。

しかし、現地の天気は晴れ。日本と違って乾燥しやすいあちらでは、アメリカのダートコースと同じようにキックバック踏み込みなどで砂や芝が飛び、後続に影響を与えること。が起きやすく、前方の走者からダイレクトに影響を被りやすい。差しウマ娘にとっては不利だが……。

「あ、行った……！」

そんなぼくの懸念など吹き飛ばすように、チヨクセンバンチヨーは第4コーナーを大きく回って外に出た。

常識で考えると走る距離が増える分ロスになってやや悪手だが、あれならキックバックの影響も受けることなく走ることができる。そして彼女の本領はコーナーではなく直線に入ってから。

加速する……いや、まだか。チヨクセンバンチヨーはまず前傾姿勢になって……ん、んん？

「んんん〜？」

「あれえ？」

そこでぼくとスペ先輩は一気に怪訝な顔になった。

何この……何、これは？

「し……獅子舞？」

「ソーラン節……？」

チヨクセンバンチヨーは、ぐわんぐわんと上体を左右に揺らしていた。

いつそ今にも蛇行してしまいそうなくらいの派手な動き……これは……別の意味で外に出ないとやれないことだ。

それでもなんかよくわからないうちにグングン加速してどんどん前に行っている。何コレ。

「ですから言ったでしょう、参考にはならないと」
「そうだね」

ほぼ完全に身体ポテンシャル任せの、暴走じみた超強引な差し……
というか……追い込み……というか……。

何なのだろうね、この感覚は。どこかで味わったことがある気がするが具体的に言葉にすることができない。

ただ……はつきり分かるのは、チョコセンバンチョーが他の一線級のウマ娘よりも遥かに高い身体能力を持っているということだ。

あれだけロスが出る走り方をするとすれば、そりゃあ直線でしかやれないしやろうとも思えない。斜行になるし。

(……待てよ?)

ロスが出る走り方と言うか、「ロスが出るように走る必要がある」のではないだろうか？

1000直の覇者……というか、例えば1000直でなければ本領を發揮できないような……。

「あつ」

「突然どうしましたの？ あなたが『あつ』と言うと怖いのですけれど!?」

「ううん、バンチョーさんの走り見てちよつと考えることがあつただけ」

「……具体的には？」

「あの走りをする必然性があつたんだろうか……つてどこから始まつて」

「ええ」

「あつたのかも……つてところまでは考えて……」

「あるんですの……？」

いや、推測だけでも。

例えばぼくの取り柄は加速力で、その気にさえなれば数歩で最高速に乗せることができる（最高速はお察しだけ）。シマウマ的な特徴として。

対して一般的なウマ娘は早々にトップスピードに乗せるというこ

とが難しい。セクレタリアトと同レベルにストライドを使いこなせるとか、リムジン先輩と同レベルのフィジカルとパワーがあるなら話は別だけど、脚の負担のことも考えるとスピードは徐々に乗せていくのが普通だ。あと単純に筋肉の質の問題もある。

……なので、チョコセンバンチョーというウマ娘は、それ相応の助走を挟まないとトップスピードに乗せきることができないのではないか、とぼくは考えた。

あの凱旋門賞が行われるパリ、ロンシャンレース場芝2400mのコースを史実において走破したとある馬について、語られていたことがある。彼は、本来仕掛けの難しい偽りのストレート^{フォールス}を、言わば滑走路に仕立て上げること、加速の乏しさを補い勝利したのだと。

それと同じことがチョコセンバンチョーの足元だけで起きていると考えると……ちよつと異質な出来事ではあるが、納得できなくもない。

あと、前傾姿勢になって上体を振り回しているのは、遠心力と重力によつてより加速度を得るためじゃないだろうか。いやそんなことある？　と思うけど、それも含めて……例えば、肉体的な感覚だけで最適な重心移動ができるような、特異な才能を持っているのかもしれない。

やがて、みるみるうちにチョコセンバンチョーは速度を上げて差し切ってしまった。あれでか。マジでか。軽く戦慄するが、そういうものなのだろうと半ば無理やり心を納得させる。才能以外に説明のつかないことなんていくつもあるしね、うん……。

「なんだかすごかったですね……」

「真似しちゃいけませんよスぺ先輩」

「そうですわよ」

「できませんよお!？」

いやや分からんぞ。スぺ先輩も大概才能豊かなウマ娘だし、あれだけで何か変なヒントを得ている可能性は低くない。

「こんな才能豊かなウマ娘^{ひと}がケガで現役を退く羽目になるなんて、現実は無情ですわね」

「そうだね……」

チヨクセンバンチョーの話には続きがある。彼女はその後、秋の天皇賞でギンシャリボーイに敗北した後、年末の有〈font:ul40〉馬〈font〉記念でリベンジしようとしたところ——練習中の怪我によつて競技人生を終えることになったのだ。

典型的なオーバーワークと言えるだろう。ギンシャリボーイが所属していたベテルギウスは、その辺りも知っているからあれだけの管理体制を敷いているのかも知れない。

「うーん……何かスゴいものを見た気分だ……」

「実際凄いことではありますのよ」

「ドバイワールドカップですからね……」

「賞金額が……」

「そっちの話はおやめなさい」

「へーい」

でも考えはしちやう。だってサウジカップに次いで世界第二位。そりやもう目が？のマークになりそうなくらいだよ。

「ぼくも再来週のレースから思いつきり稼ぎに行くつもりだけどね」

「あら、そうなんで……えっ」

ついでなのでこの場に爆弾を落としてそそくさと去っていく。

出走表はもう出てるから問題はない。

予定は前倒しするものだ。

メイクデビュー

9月上旬、この時期には多くのウマ娘がメイクデビューを迎えレースの世界に飛び込んでいく。

中には6月とか7月とかにメイクデビューするひともいるけれど、そこは一旦置いて。

ともかく10月を予定していたぼくのデビューは、少しだけ繰り上げられ、今日からガンガン鎬を削る事になっていた。
というのも。

「体ができきつてないうちにデビューしたいって何事だよ」

「えへっ」

ドン引きするドーナッツ先輩に、ぼくはぼんやりした笑いで返した。

メイクデビューは完全に体ができきつてないギリギリの段階で迎えたい、というのがぼくからの要望だ。

中山レース場地下道。レース場に向かう道の半ばで、ぼくは他のウマ娘たちと同じようにトレーナーさんたちに応援を受けていた。
……と言つてもチーム全員だと大所帯になりすぎるので、今回はシャカール先輩とドーナッツ先輩だけだけど。

ちなみに人選は厳正な抽選（じゃんけん）の結果だ。ぼくも何度か先輩方の応援に行ったことがある。

これがG1レースとかなら準備時間もあるし、チーム全員で応援つてこともあるんだろうけど……メイクデビューの段階だからね。

「どうせ成長曲線を誤解させてやろうってロクでもねエこと考えてるだろ」

「そですよ」

「マジかよ……」

シャカール先輩、言い当てるおいてビックリするとか器用なことしてんな。

実際のところその通り。数値を絶対とするシャカール先輩の理論

を借りて言うと、そもそも始点となる数値を誤認させることでその後の全部の数値をバグらせるといふ形だ。

感覚派を相手にする時は元より、これで理論派も罠にかけやすくなる。数字に強ければ強いほど、基準値に目を向けて間違つた分析をしてしまうのだ。ぐへへ。

「オレはよく他人の能力を評価するのに器で例えるが……お前は器に穴開けて中身を掻き出すタイプだな……」

「アタシ絶対ぜつてこいつとは走りたくねえ」

「諸先輩方からの評価が酷い」

いやこれはこれでしつかり評価はしてくれているのか？

致命的に与えてる印象悪いけど。他のチームはともかく同じチームですらこれってどうなってるんだぼくの印象は。

「お前達、もうちよつと良い印象は持てるのか」

「やだよ手の内知っててトレーニングも一緒にやってつから実力だいたい把握してんだぞこいつー」

「併走でも油断してたら食うにくるじゃねエか……」

そんな、油断してたら食うなんて滅相もない。ぼくはこのように10割フルパワーで走っても他のウマ娘が9割程度の力を出せるほどの速度しか出ず……。

……まあそれは置いとこう。流石にそろそろ本バ場の方に行かないと。

「ストライプ、今日の作戦はどうするんだ」

苦笑しながらトレーナーさんが問いかけてくる。ぼくは少し考え、周りに聞くひとが誰もいないことを確認してひとつ返した。

「普通に差しますよ」

……≠……

——と、言ってみたものの。

まだ体ができてないうちになんて言っつて、この上更に「普通に」差すなんて余裕ぶつこいてるわけだが、それはつまり元から低めの能力

が更に未完成の状態です。レースを迎えないといけないということだ。

分かりやすくゲーム的に表現すると、スピードがGのまま。オマケに脚質が差して滅法事故りやすい。ちよつと気を抜くと前を走るウマ娘が横一列に並んでたりして不利な状況に陥ることだってありうるし。

(ま、何にしても気は楽にしていこう。メイクデビューで勝てるウマ娘の方が少ないんだ)

シャカール先輩やフラッシュ先輩もメイクデビューでは勝てなかった。それでもその後G1を複数制覇するほどの名ウマ娘になっているのだから、問題はここで勝つことではなくその後いかに勝つかだ。勝ちたい、は前提として、勝てなかったとしても次に繋がるようにするのが道理だろう。

地下道を抜けようとする、外の歓声が耳に入ってくる。

通常、中央主催で土日に行われるレースは、第12R^{レース}までである。基本的に第11Rがメインレースと称され、重賞や重要なOP戦が行われることになるけど、ぼくが出てるのは第5R。それもお昼のど真ん中だから、観客は少ない……と思ってたんだけど。

(……せつかくだから全部のレースを見ていこうってファンも少ないってことか)

特にレース観戦が趣味、みたいなディーブなファンは未勝利戦やメイクデビューなどにもよく目を向けると聞く。今は芽が出ずとも、将来的に素晴らしい才能を發揮するようなウマ娘も少なくないからだ。早い内から注目しておいて推しているとファンの間で一目置かれるとか……。

うくん……肖像権やURAとトレセン学園、ぼく個人の契約の問題もあって、関連グッズが売れたほうが当然ギャラも良くなるし、注目される方が好ましくはある。

けど、注目されればされるほどマークがキツくなってより動きづらくなる。レースに勝つ、というそもそもその目的が果たせなくなるのはちよつと……ジレンマだなあ。

ターフに出ると、今日の出走者が視界に入った。ひい、ふう……予

定通り9人。ぼくを入れれば10人。出走取消は無し。16人が標準的なメイクデビューとしてはやや人数少なめだけど、時期が早いことを考えるとこのくらいでも納得はいく。

「……………」

(むっ)

ふと、周りから割と強めに警戒心を向けられていることに気付いた。

当然と言えば当然だろうか。ただでさえ(不本意ながら)悪名が広まっているし、ぼくの所属チームも今年のG1を2つも制している古豪。オマケにシードリングカップで勝って少し知名度が上がってる。

一方で、小さいからと侮っているウマ娘も少なくないし事実能力は高くないので仕方ない。…………けど、その方が罠にかけやすくていい。

対して、警戒しているウマ娘については…………これも実は罠にかけやすい。気負ってたり気を張っている状態というのはおおよそ「普通」とは程遠い精神状態だ。そうなれば視野は狭まり、自ずと脳の処理能力が落ちる。

やはりぼくにとつての一番の大敵は、自分の走りだけに集中できるウマ娘だ。テイオーやマックイーン、スペ先輩もそうだしスズカ先輩に会長にオグリ先輩に…………いや該当者多いな。

まあ、そんなものだ。一流どころは皆それなりにメンタルコントロールの方法を会得している。そういった相手と競り合うつもりなら、場当たりの戦術は意味がない。

(このレース終わったら考えるか。戦略レベルでの奇策)

もつともその前にまずは目の前のことから、だけど。

『3番人気は5番サバンナストライプ。新春に行われたシードリングカップでは一着。注目のウマ娘です』

紹介されるのと同時に小さく上がる声援に向けて軽く手を挙げてゲートに入る。表情は…………多分いつものへらっつとしてる感じになっている。笑顔作ろうとするとなんだかこんな風になってしまう。だから胡散臭いのだろうか。

続いてひとり、またひとりとゲートに入ってくるのを感じ取る。が

しやりと扉が閉まる度に聞こえる金属質な音に反応して耳がびくびくと倒れたり起き上がったりした。

あー……なんとなくゲート難のひとの気持ちがあった。今日は早めにゲートに入ったからなお顕著だけど、あの金属音はウマ娘にとって結構なストレスだ。耳が良いから尚更。

『各ウマ娘、ゲートイン完了』

頭の中を冷やして集中する。最初から仕掛けることが無いとはいえ、走る位置というのは重要だ。イニシアチブを取るならスタートは大事にしておきたい。

そして直後、スターターの旗が振られて……ゲートが開いた。

『——スタートしました。まず飛び出したのは4番ジュエルアズライト、8番コルスカンティ。7番テンダーステップ、1番……』

スタートは上々。位置取りは中団からやや後ろで全体を見通せる。このレース、一番警戒するべきは……逃げに回っている二人、ではなく先行策を取っている1番。逃げの二人……4番はスズカ先輩やマルゼン先輩のようなタイプと言うよりは、気性の関係で逃げの手を取っている方だ。対して8番は戦術として逃げを活用している方だけど、まだ習熟度が高くない。

対する1番、彼女の走りは教科書どおりの極めて堅実なものだ。どことなく、以前並走した時に間近で見た会長の走りに近い気もする。……というのは、会長の走りがまさしく教科書的で、それでいて極めてハイレベルに完成されているためだろう。お手本としてはこれ以上無いほどで、模倣しようと考えてるウマ娘がいても決しておかしくない。実績もあるし。

堅実に勝負できるというのはそれだけで才能だ。ぼくもどれだけ堅実にやりたかったことか。けどそうはならなかったんだから仕方ない。

さて、次いで問題なのは、ぼくの後ろにいる二人。先程こちらに視線を向けてきてたウマ娘で、どうもぼくのことをある程度知っているようだ。完全にマークしてきてる。

この位置ならこっちが何をしても対応できると考えてのこと

だろうか。仮にも所属チームがチームだ。凡走することはないとも判断してのことだろう。ぼくもできればそうでありたかったところだけど、残念ながらここからできるのは、完全にセオリーから外れた走り。彼女たちの思うであろう好走とは似ても似つかない異質な技法だけだ。

『400mを通過して縦長の展開です。ここからどう出るでしょうか』

『後ろの子が間に合うか心配なところですよ』

内心難しいだろうとは感じ取っている。

逃げの二人が競り合ってペースを早めつつあるし、全体的に配分が狂いつつあるのが感じられる。煽る必要無いな。

差しや追い込みというのは仕掛けどころが難しい。天性のセンスでそれを感じ取れるひともいるが、そうでなければ場数を踏んでそれを読み取れるようになるか、単純にそれ以外の能力で補う必要がある。

それこそメイクデビューで追い込みがスパッと決まるなんて、英雄なんて呼ばれるほど極まった才能を持ったウマ娘でもないと無理だろう。

(脚力を考えるとあと……向こう正面まで待つか)

1コーナー、2コーナーは温存する。繰り返しトレーニングは重ねてきた距離だ。周りに流されないようペース配分するのもわけはない。

まだ我慢。本番のレースとなると心がざわつくのが分かるけど、仕掛けどころまではあと少し待つ。あと5秒ほど……。

『さあレースは中盤に入って向こう正面。先頭は依然4番——』

——ここだ。残り1000m。グツと脚に力を込め、踏み込んで一気にトップスピードに乗せる！

「!?」

「ちよっ……」

『おつとここで5番サバンナストライプ上がっていきます。これはかかっているでしょうか』

『流石に仕掛けが早すぎますねえ……おっと、尻尾が回っています』
『あれはいつたいたいどういったことでしょうか』

そこを真面目に解説に入れるのやめない？

ともあれ、まともに考えればここで仕掛け始めるのはどう考えても暴走。スピードそのものはやや鈍くとも、まっとうな考え方をしているなら、いくらマークしているとはいえ付き合う必要は無い。そして実際、セオリー通りにマークしていた一人はそのまま中団に残ってこちらを見送った。だがもうひとりとは逆に闘争心を燃やしてこちらに付き合ってくる。

「普通なら」そんな馬鹿げたことはしない。しかし実際にしでかしている。追ってきた方はほくのことを多少なりとも知っているようだ。半ば疑問を持つてはいるようだが、このまま放置するのもマズいということとは把握しているらしい。

「ふっ……」

3コーナーに差し掛かったところで先頭集団と出くわした。ギョツとした顔で8番の子が見てきたが、ここで気付いても遅い。ぼくはそのまま集団を抜き去って先頭に立った。

『ここで先頭が入れ替わった、サバンナストライプ先頭！ 次いで10番、ペースが早いぞ、これは体力がもつのか!?!』

『4コーナーに入ると共に後続のウマ娘たちも続々仕掛けに入っていきます。早い仕掛けにつられたようですねえ』

『まもなく直線に入ります。中山の直線は短いぞ！ 後ろの子たちは追いつけるのか!?!』

それ毎回言っていないです？

何はともあれそろそろ直線、ということとは同時に2・2メートルの上り坂を登らなければならないということだ。

本来、このコースの仕掛けどころはここか、もう少し登ったところだ。少なくとも、ここまでの間にスパートをかけるだけのスタミナが残っていないと一気に減速するハメになってしまう。

だから早めにロングスパートをかけて煽った——その一方で、やはり教科書どおりを貫徹している1番の彼女は周りにつられることな

く、坂を登るための体力を温存していたらしい。

「……………」

「はあっ、はっ……む、むりいく……!」

徐々に、それこそ徹底的にマークしてきていた10番の子すら脱落していく中、1番の子がぐいぐい上がってくる。

ぼくにとってはかなり嫌な展開、だけど……同時に、上り坂というのは一気に突き放すチャンスでもある。

カッと目の奥が熱くなる。獣性が満たされ全身に力が漲り——ぼくはここで、更に力を込めて地面を踏み砕かんばかりに踏み込んだ。『ラストスパートだ!』先頭依然5番、いやしかし1番がどんどん上がってくる!先頭は二人の罅迫り合いだ!まるで上り坂を意に介さない、羽ばたくような走りを見せるサバンナストライプか!それとも意地を見せるか!!』

「——ッ!」

「っ、うああああああ!」

伸びる、伸びる、伸びてくる。対するぼくは速度が伸びることは無い——けれど、落ちることもない。例えば坂路を登りきった直後だろうと関係ない。スタミナとパワーが武器というのはそういうことだ。

伸びなくともいい、粘りに粘って追いつかせなければいい。計算は既に済ませている。このまま前に前に、前傾姿勢になって……!

『サバンナストライプ粘る!粘る!そして今二人並ぶように——ゴールッ!!』

競り合い、粘り抜き——ぼくたちはゴール板を駆け抜けた。

速度を落とすとともに急速に頭が冷えてくる。計算は合っているはず。その上でもギリギリだった。勝敗はどうなっているか……。

『ややサバンナストライプ体勢有利でしょうか』

『——結果が出ました。クビ差で一着はナイロビからの刺客サバンナストライプ!』

「っし……!」

結果がアナウンスされる。ギリギリ、と自覚はしていたけど、本当

にギリギリだった。初めて、というほどではないけど、緊張があったためか珍しく息が上がっているのを感じる。それも数秒ほどすると整ったけど。

得も言われぬ高揚が胸を刺す。歓声に後押しされるように、ぼくはそのまま感情任せに片腕を振り上げた。

言わんとすることはわかるけど

「あれただの力押しだよな？」

「ゴリ押しもいいところだねえ」

「セイちゃんあれでよく策士みたいな顔できると思いましたよ」

「デビュー戦直後にこの言い草よ」

レースが終わり、ウイニングランを済ませて夕方からのウイニングライブの準備を済ませた折のこと。戻るや否やそんなダメ出しを食らった。

いや皆冗談めかして言ってるのは分かるけども。言ってる意味も理解できるけども。

「普通に差し切ると言っていたがあれは途中から逃げとらんか？」

「トレーナーさんまで！」

言わんとすることはわかるけど！

スズカ先輩なんかがやるような逃げ差し「逃げ」のペースで先行しながら最終直線で「差し」のように加速して押し切る技法。……技法？の真逆、差し逃げ？みたいな状態ではあった。

一見変つちや変だけどさあ……。

「まあ、皆さんこれくらいにしておきましょう。なんだかんだ、ロングスパートをかける型のステイヤーとしてはよくできた走りでしたよ」
『なんだかんだ』なんですすね……」

「ええ、なにぶん、外から見るとあなたが何を企んでいるかどうしたいかがわかりませんので、こう評さざるを得ません」

「ほ——ん」

「又ウ……邪悪なニンジャ的な企てをしているアトモスファイアを感じる……」

一応あの一連の流れの中にも駆け引きがなかったわけじゃないけど、それが外からわからない、と。つまり今日のぼくも途中から大暴走したけど、ギリギリで勝ったラッキーウマ娘と思われる可能性もそれなりに高いわけなのだな？

良くも悪くもステイヤーとしてのスタンダードな走りだったから余計に。

「トレーナーさん、次の出走どうしましょつかー」

「お前急激に話変えてこのタイミングでそれを言い出すか」

「予定を決めるのに早いに越したことはありませんね」

フラツシユ先輩のそれはちよつと桁が違くない？

「要望はあるか？」

「なるべく早め、2000m以上の1勝クラスですかねー」

「ジュニア級2000m以上の1勝クラス……？ 11月の百日草特別まで待たんと無いぞ」

「あれっ」

「百日草特別の次がその翌週の黄菊賞。更に次が……12月の葉牡丹賞ですね」

……あ、そういえばジュニア級って1勝クラスより上存在しないじゃん。

メイクデビューの後、未勝利を抜けられたら基本的にはそのままオープンに移行したり、重賞やそれこそG1を目標に組み立てていくものだった。ごく短い間に2勝クラスとか3勝に行けるほどレースを重ねるものじゃないや。特に中距離以上は。

「この後1勝クラスのアスター賞あんど」

「出走登録もしとらんのに出られるわけがあるか」

「着実にステップアップをしつつ賞金も狙う、という思惑なら、私はOP戦を勧めます。あまり間隔を空けないつもりでしたら、今月末に野路菊ステークス、その翌週に芙蓉ステークスがありますよ。あとはマイル戦になってしまいますが、1勝クラスで1800mの紫菊賞が10月のアイルランドトロフィーと同じ日に……」

「全部出られるなら出てしまいたい気持ちはありますけど」

「こいつヤバイ」

「無茶を言うんじゃないやねエ」

でもできないわけじゃないんだよね、連続出走。実際にオグリ先輩がそれをやらかしてる。マイルCチャンピオンシップSのすぐ翌週にジャパンカツ

プに出走したというのは今でも語り草で、それでもともあの秋のローテーション全体が頭のおかしなことになっている。

しかしながら、そこは馬ではなくウマ娘。人間の二形態である以上医学的にもほぼ対処は同じで、丁寧なケアと十分な休息、それから十分な栄養補給である程度はなんとかなる。それでなくても医学的な設備も人間と同じものが使え、痛みや怪我の具合についてもしっかりと言葉を使って伝えられるので、よっぽど頑丈なひとなら連続出走にあたっての問題は少ない。

……いや、だからってやる気は無いけど。今の所。冗談ですよ冗談。へへへ……。

「芙蓉ステークスがいいです。それから後はひと月ごとにレースに出るくらいで……あ、確かG3の京都ジュニアステークスがありましたよね」

「うむ。経験を積む意味でも悪くない。成績如何によつてはホープフルステークスへの出走も……」

「あ、そつちは考えてないです」

「なにつ!？」

「エ、エツもつたいない!!」

まあ……もつたいないと言われるとそうだろう。勝てば賞金だけでなく、名声も同時に上がる。

しかし同時にその後のレースに対する期待も高まる。勝てなかった時は……デメリツトはそれほど無いけど、やっぱりぼくの思惑とは少し違う結果になるだろう。

この早期に仕込みを発動するのは得策じゃない。あとデジたんの言うもつたいないは多分だいぶニュアンスが違うと思う。

「……ストライプ、何か考えがあるなら、たまにはこちらに言ってみてはくれんか。多少なりとも力にはなれると思うが」

「あ、はい。いいですよ」

「軽っ」

「お前何か明かさない理由とかあるんじゃないかねーのかよ」

「え。いや聞かれなかったので」

「詐欺師の論法だ……」

商取引でこの論法は使っていないので安心してほしい。

そもそも商売の基本はWin—Win。超短期的に安いものを高く売りつけるだけなら騙すまでしなくともデメリットをあえて黙っておくだけでいいが、どうやったってそれでは悪評がついてまわるし普通に法に触れる。

クレームが来るといふのは、色んな人がいるので仕方ないことにしても、やはり気持ちよく買ってもらうというのが取引する上で大事だと思う。

相手を立てて尊重する。これができないとお客さんはいとも容易く離れていってしまう。

なんかもつちや話逸れた。
閑話休題。

ともかくトレーナーさんに話してなかった理由は、あえて言うなら機会に恵まれなかった、という以外特に無い。

チームだからトレーナーさんは先輩方の指導にいつも追われているし。

「えーとですね、あ、できればこっそりと」

「うむ」

どこから漏れるとも知れないのでできるだけこっそりと。

トレーナーさんに少しかがんでもらい、耳打ちする形で今後の戦略を打ち明ける。すると、話していくにつれて徐々にトレーナーさんの顔が渋いものになっていった。

「正気か？」

「この言い草よ」

初手で正気を疑ってかかるのは酷くない？

「けど一戦は確実に嵌められる自信ありますよ」

「一戦は一戦だ。それ以降はどうする」

「それはまあ、どんどん距離を延長してこっちのフィールドに引きずり込みますよ」

ぼくが小細工抜きで走ることができるのは、やはり長距離だろう。菊花賞までの重賞だとクラシック級では青葉賞とダービー、オーク

ス、京都大賞典の2400mが最長距離だけど、そこさえ超えれば3000m近いレースはそれなりに見つかる。別にゴリゴリの罅迫り合いがしたいとか、そういうわけでもないし……………。

「……………そういうことなら出走レースも絞られてくるな。利紗、レース日程を少し組んでみる」

「はい」

サブトレさんが日程を組む……………そういうのもあるのか、と一瞬思ったけど、それは当然そうか。サブトレーナーは指導者補佐であると同時に、将来的に本職のトレーナーになるために指導を受けている立場。トレーナーさん自身もそろそろ還暦近いという話だし、まずサブトレさんが日程を組んでみて、そこからトレーナーさんが修正を加えていくという形なのだろう。

「となりやあ、12月は……………出るレースが無エぞ」

「え、そうですか？」

「11月の京都ジュニアで勝てばの話だがな。1勝クラスはあるがジュニア級の2000mオープン戦はホープフルしかねえ」

「じゃあ12月は全休で……………」

「1月から再始動だな。追って連絡はする。まずは勝者の義務として、しっかりウイニングライブをこなしてきなさい」

「はい」

もともと、ライブ自体は全日程が終わってからだからまだ十分時間はある。

これは……………気を遣ってくれたのかな。前のシードリングカップは模範的なものだったけど今回は本番と言って差し支えないし。初めての経験ともなれば緊張が勝るだろうと。

しかしぼくも見た目通りの子供でもない。大入り満員なら緊張することもあるだろうけど、まだメイクデビューの段階でそこまで注目度は高くあるまい。加えてこの美少女ぼでー。ほぼ10割が美少女として生まれてくるウマ娘に外見的コンプレックスはあまり無いと思っただけだ。いや個人差はあるけど。

「ふふふふふふふふ……………ん？」

立ち位置をよく思い返ししながら振り付けを確認していく。その途中でふと、この振り付け合ってたっけ？ と疑心暗鬼に駆られた。

……問題ない、はず。いやはずじゃダメなんだ。ちゃんと振り付け確認しとかないと。

「ふふふふーふふふーふんふーん………？」

教本を確認しながら再度踊ってみる……けどなんだろう、何かしつくり来ない。間違ってる……はずなんだよな。

いや間違ってるない。うん……本当に間違ってるない？

……これはまさか。

（――ドツボにハマった!?!）

何をしても何か忘れてるような、それでいて大丈夫なような、けど実際には忘れて……はつきり言ってしまうえば、変に不安に苛まれた心理状態。

久しくこんなことにならなかつたから忘れてた。自信満々だったというわけでもないけど、ある程度行きあたりばったりでもなんとなるよう常に行動には余裕を持たせてきた。

が、ライブ。これは用意をしていたところでどうしようもないというか、どれだけ準備していても失敗する時は失敗する。

あ、今ちよつと心臓が脈打った。レース中の心地よい緊張感とは別物のヤツだ。

この日、大筋は間違ってるはずなのになぜかちよくちよく絶妙に珍妙な動きを挟んでしまうサバンナシマシマロバムスメがライブ会場にて発見されることとなった。

耳ぴこぴこ

カレンチャンに珍妙なシマシマの踊りを拡散されてしまった。

副題は「ペガサスフォーメーション」。耳がピコピコ羽ばたくように動いているのでそう名付けられた。名付けられてしまった。そして境界最高峰のインフルエンサーの拡散力は伊達ではなく、その日のうちに万を超えるウマいねがつくことになった。

同時に各SNSに作っていたぼくのアカウントのフォロワーも爆発的に増加し、分不相応な扱いにぼくはしめやかに爆散した。おおサンコンよ、変なところで起きるのですねあんた。で。

「ねーねートラちゃん、あんな風に大きく耳ぴこぴこするのってどうやるの?」

「ぼくわかんないよ……」

——後日。

女子中高生が大半を占める上に新しいもの好き祭り好きの多いトレンセン学園。特にぼくたちのクラスでは、例の動画が何やら変なブームになってしまっていた。

……いや、時によっては皆自然に耳ぴこぴこさせてるよね? ぼくのは耳が大きい分その振幅と可動範囲が大きいだけで……どうやってるものにも、自然にこうなってしまうたとしてもいいやうがないんだけど。

ぼくは机に伏せていた顔を上げた。

机の上には今度の聖蹄祭に向けての資料が広がっている。対面しているのはマヤノとテイオーとカレンだ。うっカワイイ。

「みんなやろうとすればできるもの……ていうか、勝手になるものじゃない……?」

「あのねストライプちゃん、お耳は前後には動くけどあんな風にぱっさぱっさ翼みたいには動かないの」

「現にできてるんだけど」

「本当にどうやってるの?」

ばたばたして見せるのをやめて考えてみる。どうって………どうやってるんだろう………。

あれ？　もしかしてこれぼく理論的にどうやってるか説明できない？　マジか………。

「ダンスにその動きが取り入れられたらもう一つとカワイくできるかなって思ったんだけど」

「やめたほうがいいよ。制御できない……」

「……結構自由にやっていると思うんだけど」

「緊張感とか色んな感情が混じり合って勝手になってる部分の方が強いのコレ」

尻尾のそれと同じだ。いや、ある程度任意に動かせる尻尾と比べるとなお酷いかもしれない。

クラスメイトやチームメイトの前では今までほぼ出てなかったことを考えると、今後どんどん舞台が大きくなるにつれてこのクセも強まるだろう。少なくとも出なくなることはありえない。

「この話はもうやめよう。マネしてできることでもなければコントロールもできないんだから」

「今マヤたち耳の動きの話をしてるよね？」

「そうだよ」

口ぶりは何やら走りに関する高等技術についてのようだが、別にそんなことは全く無い。

しかしぼくの特徴こんなばっかりか。もうちよつとレース向きの特徴持てない？

……さて。

「……でき、そろそろ本題に戻らない？　本当にやるの？　ミニライブ」

「もちろん！」

発端は、次の聖蹄祭に向けて何をするか、という話だった。

去年のぼくたちは一年生だったので、お祭りに参加はしてもお店を出したりは——チームに所属しているなどの例外を除き——していなかった。

今年こそ何か出し物をやろう！ とは皆思っていたようなのだけど、流石にいきなり飲食店なんかはどうだろう、ということで見展示物の発表という形式になった。そこまでは良かった。しかしそこでふと、何の気無しにレツちゃんかぼつりとこぼした言葉がクラスの皆に火を付けた。

曰く——「ちよつと地味だね」。

……いや、見た目自体は結構華やかなんだよね。お題目は「勝負服の歴史」だから、色んな服を飾れるし、ぼくら自身先輩方にツテを持つてるから、例えばサイズが合わなくなった勝負服などを借りてきたり、服飾に興味のある子が似たようなのを自作してきたりと、展示そのものはきらびやかなものになるだろう。ちよつと多めに警備置く必要はあるけど。

十分展示として見栄えはする。が——これ、完成すると生徒がやることは無くなってしまふ。そういう意味で「地味」||やる||ことが無い、と言ってしまったわけだ。

皆はハジけた。

勝負服関係の展示をしてるんだからこれを逃す手はない！ とばかりに超速で教室内ミニライブの話が立ち上がり、裏でコソコソ色んなことをやってるシマシマが服飾担当ウマ娘に捕獲された。

ぼくに限った話じゃないが、この時期それなりにメイクデビューに出走している子はいるし、レースなので当然勝ってる子もいる。賞金も出る。奨学金の返済に大半を使ったぼくとは違ってそれなりに懐に余裕のある子もいるため、伝手を最大限に利用されてあちこちの店で勝負服を模したコスを発注させられた。

……しかし、縫製しつかりしてるし、変なことに使いませんよとU R Aの許諾を取っているだけあって、これが結構なお値段になる。

使い回しがきかないものではないから、来年以降同じような企画をしようというクラスがあるなら、その役には立つだろうけど……皆の金銭感覚が今から心配だ。

「ふわ……」

「あれ、どうしたのストライプ。寝不足？」

「ちよつとね……」

「それとももしかして気乗りしない?」

「んー、いや、そういうわけじゃないけど」

小さくあくびをしたのを見られたせいか、そんなことを口々に聞いてくる。そんなことは無い。これも伝手作りには役立つし、今後のためにはなる。

「でも最近色々なことありすぎてキャパオーバーかも」

ただ、他にも色々やることがありすぎる。

芙蓉ステークスに向けてのトレーニングもあるし、日々バージョンアップしていかないといけない屋台の品の件もある。個人輸入販売についてもぽつぽつお客さんが増え始めてるし……これに加えて、チームの出店の仕入れ管理とメニュー開発、クラスのミニライブの衣装発注からマネジメントノリでやり始めた。自業自得。までとなるとちよつと忙しすぎた。

まだ聖蹄祭までの準備期間限定でこれだけ忙しくなってるだけだから、時間と共に問題も解決していくだろうけど……本格的に起業したら絶対にこれ以上に忙しくなるんだよなあ。

人を雇って業務を委託する必要がある、こんなにも早く出てくるとは。業務の質を上げるペースがそれだけ早いと喜ぶべきか、これで手一杯になりつつある自分のキャパ不足を嘆くべきか……。

「トラちゃんって色々やってるけど、いつもどれだけ寝てるの?」

「昨日はよ……お……6時間」

「今4時間って言いかけたよね!?!」

「言いかけた!」

「ダメだよストライプちゃん、美容カワイイのためには質の良い睡眠時間が必須だよ!」

「そつちの問題?」

アスリートとしてとかではないんだ……いやどっちもだろうな。カレンチャンだし。カワイイの求道者だし。レースで勝つこともカワイイの一環だろう。きつと。たぶん。

「大丈夫。すぐもとに戻るよ。昨日はケニアに電話してたから短く

なっただけだし」

「パパとママに？」

「うん。あと知り合いの職人さんとシャーマンに」

「んんん？」

「出た……ストライプの変な人脈……」

日本とケニアの時差はおよそ6時間。深夜に連絡するとちやうど夕方の仕事終わりにあたるので話しやすいし、つい次の輸入雑貨の件で話し込んでしまったというのもある。

……あとこれは単純な種族差の話なんだけど、ショートスリーパーなんだよね。シマウマ娘。

一般的に馬は一日3時間ほどの睡眠を取るというけど、シマウマは1時間野生環境下かつ諸説あり。しか眠らない。被食者ゆえの睡眠時間の短さと言えるだろうけど、そのあたりの特徴がちよつと出ちゃったのかなと思わないでもない。

「そんな調子で次のレース大丈夫？」

「あうあう」

両手で脇腹をつつかれるが、そういう懸念は抱いて当然だと思う。

勝つ見込みは、勿論ある。無ければそもそも出走しない。勿論こんなこと口にするわけにはいかないの……。

「頑張りまする」

「大丈夫？」

「あうあうあうあう」

脇腹をつつく指が増えた。

勝負服を考えよう

ジュニア級OP戦、芙蓉ステークス。この時期に行われるのは珍しい2000mの中距離戦だが、それ故にこのレースには三冠路線を目指すウマ娘が多く集う。

中山レース場、右回り2000m——この条件は皐月賞のそれと同じだ。叩き台としてはもってこいで、直前に行われる弥生賞ほどではないにしても、ウマ娘にとって2000という距離が「長い」か「短い」か、はたまたピツタリと合うかを判断する試金石になりうる。

(まあ全員崩したから指標にはできないだろうけど)

『3人なだれこむようにゴオオール!! 1着は半バ身差でサバンナストライプ!』

今日のぼくは、追い込みに近い位置から前に出たり出なかったりあえて姿を見せたり見せなかったりしてつつき回し、後方のペースを徹底的に乱す作戦を取った。

2000mは一般的に中距離だが、未だジュニア級のウマ娘にとっては紛れもなく最長距離のレース。本番でのペース配分を掴みきれず、レース展開そのものがスロー気味になってしまうというのは割とある。ただでさえこの時期無理するわけにはいかないというのもあるし。そして今回のレースもそういった傾向があった。

今日、先行してペースを作っていたのは慎重なウマ娘だった。そのため2000mにしてはやや展開が遅くなる……はずだった。

そこで、ぼくは差しウマ娘の子を後ろからつつき回して前に押し出すことにした。そうすると、中盤に入る前に先行策を取っていたウマ娘に追いついてしまうという珍事が起きる。

溜めて溜めて切れ味を發揮するタイプのウマ娘がこうも前に出てしまうと、どうしても消耗が激しくなる。対して先行していたウマ娘からすると、ここで本来中団以降にいるはずの子の姿が見えてしまつて「あれ!?!」もしかしてペース遅かった!?!」と一瞬なりとも焦りを感じてしまう。

そのあたりでマークする相手を先行していた子に移し替え、これもまたつき回す。更にここからロングスパートをかけ始めると、自然とつられて全体のペースが早まる。こうなってしまうと最終直線での「競り合い」ではなく、誰が一番最初に脱落するかというスタミナ勝負の潰し合いに持ち込める。

あとは全員バテバテになったところに高低差2・2mの急坂をぶつけて仕上げだ。

差がまるでついてないのは仕様だ。

『白熱したレースでしたね。今日一着のサバナストライプはメイクデビューに続けて二連勝となりましたが、いかがでしょう？』

『危うい勝ち方でしたね。もう少し走りにも安定感があると良いのですが』

『今後に期待というところですね』
知ってた。

実況の評価を適当に聞き流すが納得しか無い。危なげしかないからね、実際。

見たまえこの上がり3ハロン36秒8の末脚を。なまくら通り越してただの鈍器だ。

中団につけてとか先頭目指してとかそういうセオリーからも外れてるので、一見フラフラした安定しない走りなのもわかる。

ある意味これはこれで目論見通りの評価なので構わないとしておこう。

なお、本日のウイニングライブでも相変わらず耳は動いていた。

・・・≠・・・

さて、芙蓉ステーキスとウイニングライブを終えて、その日の打ち上げでのことだ。

本日の参加者は芙蓉ステーキス参加者当の本人であるところのぼく、トレーナーさん、サブトレさん、あと寿司と聞いて迷わず駆けつけたスナイパーIIサンとサブトレさんと何やら実験していたらしい

タキオン先輩だ。サブトレさんの肌が銀色に光っている。

そしてまたしても都内の回転寿司屋に訪れて注文待ちをしていたところ、まずトレーナーさんから一言が告げられた。

「煽り運転のような走り方だな……」

「スゴイナラズモノ」

「ひどくない？」

そして寸評がコレである。脚質「煽り」が爆誕した瞬間だった。

せめて差しか追いつき込みとか既存の概念に納めてほしかった。

「目的がどうあれ相手を速く走らせようとするのはたしかに『煽っている』と言われても仕方がないね、くくっ」

「ううっ、単純に人間が悪い……」

煽り。

もちろん運転としては良くない、というか犯罪だし、そうじゃない界限でも良いイメージを持たれる言葉じゃない。およそマナーの悪い行動の代名詞と言っている。

ぼく個人は変人であってもレースや対戦相手には紳士的（今の性別的には淑女的？）に接したいと思っているというのに……字面一つでまるでぼくが人が苦しんでるのを喜ぶ系の悪党のようじゃないか。せめて「翻弄」とか「揺さぶり」とかにならないかな……。

「呼び方は今は置いておきなさい。それよりも先に今後の話をしなければならん」

トレーナーさんが指先で軽く机を叩いたことで現実に戻される。

今後、次……となると、11月の京都ジュニアステークス。この場にいるスナイパーⅡサンは秋華賞に出るからそっちにも言及するところになるかな。

「スナイパーはそろそろ絞っていった方がいいでしょうね。食事は控えた方がいいかもしれません」

「えっ……す、スシ……」

「……まあ祝勝会の間くらいはいいでしょう」

そのままスナイパーⅡサンはグツとガッツポーズをして見せた。

そんなに嬉しいのか……いや、ぼくも嬉しくないとは言わないけど。思えばこのチーム、祝勝会毎回寿司だな。

メイクデビューとOP戦だとその辺の100円回転寿司。G3やG2だとグレードアップして均一じゃない回転寿司。G1だと回らない方のお寿司。

……ギンシャリボーイを輩出したチームとして何かしらこう、意地があったりするんだろうか。あとトレーナーさん還暦近いから焼き肉とかの重そうなものダメっぽいし。

ちなみにこのチーム、スイーツ類はあまり求めない。フラッシュ先輩がたまに趣味で作ったものを持ってくるし、ぼくがしょっちゅう屋台のための試作品を持ってくるせいだ。

まあそれは置いて。

「ドーナツは秋の天皇賞があるが……」

「彼女はそこまで制限しなくてもいいだろうねえ」

「むしろ安定感が欲しいところですからね。ここから秋三冠の過酷なローテーションですから」

……秋の天皇賞、か。

いや、なにも必ず「そう」なると限らないんだ。不確定要素も相当多いし……。

「ストライプ。ストライプ？」

「N d i y o」

「なんて？」

「すみません」

つい上の空になってしまった。反省。

「何か企んどつてもいいが話は聞きなさい」

「なんで企んでる前提なんです？」

「日頃の行いだねえ……」

「この時期に2勝となれば必ず有力ウマ娘のひとりとして数えられることになるはずだ。参加レースへの注目も高まってくる。G1への出走も、既に不可能ではない」

「——なので、そろそろ勝負服を考えないといけませんよ」

「はあ」

「……気のない返事だな」

勝負服。それはレースに携わるウマ娘にとってはある種の勲章であり、誇りの象徴だ。

G1に出走できるウマ娘がまず限られているため、「勝負服に袖を通せる」というだけでまずたいへんな栄誉と言える。なので、勝負服を考えよう、なんて言われた日には大喜びする子も少なくないのだけど……。

一方のぼくは、内心まだ気が早いんじゃないかと感じていた。

もう2勝と言うが、まだ2勝だ。弥生賞などの前哨戦で勝ったわけでもないし、ここからの勝ち数によつては皐月賞を逃すこともありうる。

加えて現状、既にホープフルステークスへの出走は見送ることを決定しているので袖を通すことになるのも最速で半年後……それまで気持ちが保てるか、ということところだ。

「時期尚早だと思っんですよね。ここから調子落とすようなひともしくないですよ」

「あなたやるのが大胆な割に変なところで慎重ですね……」

「行動に移る前に計画は立ててますから」

時々行きあたりばったりだしイレギュラーも多々あるけど。

「半年もあればもうちょっと成長するかもですし」

「いや、残念ながらも（身長は）止まるよ。春先になつても、まあ、伸びても誤差というところだろうねえ……」

「はうっ」

なんてこつた！ よりにもよつてウマ娘の体に一番詳しいだろうタキオン先輩にここまで言われてしまった！

あ、もうちよつと伸びたらマヤノと視線が並びそうだなあ。もしかするとシマウマ娘の成長限界150cmが見えてくるかなあなんて淡い期待を抱いていたのに！

「というかデザイナーはもう呼んどの」

「うえっ!？」

「利紗の言う通り、お前はいらんところで変な気を遣って遠慮するからここは強引にやらせてもらう。それでなくとも、勝負服は発注から到着までに時間がかかるものだからな」

「先方も理解はしていらっしやいますが、それでもデザインと手足の動きが干渉することもありますからね。何か問題があれば作り直しもありえます。分かりますね？」

「了解です」

「オヌシ毎度物分りが良いな」

「悪いことじゃないんですけどもうちよつと自分の意見を通そうとしてもいいんですよ？」

「プロの言葉は全面的に尊重するのがぼくの意見です」

一応、ぼくの考えとしては「素人考えで下手なこととはしない」という点で一貫しているつもりだ。

あ、プロと言えば今の所ぼくがやってることって基本的に素人料理だな。今度時間ができたら調理師免許……は無理だけど、せめてプロの料理人雇ったりしよう。うん。

——という話をしたすぐ翌日。呼ばれてチームの部室に行くと、そこには既にデザイナーの方が準備していた。

「早すぎやしませんか」

「善は急げと言いますでしょう？」

サブトレさんぼくのことスカウトしに来たときもそんなノリだったなそういえば。

驚くのはそこそこにしておいて一礼。改めて見ると、デザイナーの方はウマ娘のようだった。

思えば結構いるな、勝負服デザイナーのウマ娘。引退してもレースの業界に携わりたいという思いのひとが多いのだろうけど。

「はじめまして。今日はよろしくね」

「はい。こちらこそよろしくお願ひします」

「彼女はこのチームのOGなんですよ」

「ほー」

「トレーナーさんや……あ、サブトレさんって言った方が？」

「そうですね、立場のこともありますから」

「うん、じゃあサブトレさんで。二人には前からお世話になっててね」なるほど、元から伝手があったからこんなにも早く話がついたんだな。

話を聞く限り、どうもドーナツツ先輩やスナイパーIIサンの勝負服などは、ベテルギウスに昔所属していたらしいこの先輩にデザインを依頼したようだ。

デザイン業界も上がつかえてる面がある。いや、まあ……クラシック級年間7000人がデビューするこの業界シンデレラグレイ3巻第26R参考、中央のG1のみならず地方のダートグレードにおけるJpn1日本独自のグレード。国際的な格付けからは漏れているが、国内では実質的にG1として扱われている。に出場するウマ娘のべ人数は結構なものだ。探せば仕事は山のようにあるのだろうか……。

いずれにせよ、こうしてトレーナーさんが伝手を辿って仕事を渡せば、それだけ人の目に留まる可能性が高まる。そうすれば名が売れることだってありうるだろう。

これもトレーナーの仕事……アフターフォローの一環でもあるんだろうな。

「早速だけど、少し寸法測らせてねー」

「わかりました」

立ち上がり、トレーナーさんには少し部屋の外に出てもらって体の各部の寸法を測ってもらう。緊張をほぐすためにか、ちよくちよくフランクに話しかけてもらったけど、逆に少し恐縮した。

見たところそれほど歳のいつてない先輩だけど、もう場数は割と踏んでいるのか計測そのものはサツと終わった。メモとかじゃなくてタブレットに入力していくのは、トレーナーさんの影響かな。

「はい、オツケー。それじゃあどうしようか、何かデザインの要望とかある？」

「えー、んー……」

デザインの要望か……特に考えたこと無かったな。なんなら汎用服とかいつそジャージでもいいんだけど。

……勿論そういうわけにもいかないよね。内心何やらざわついてる部分があるのが感じ取れる。長く着ることになる勝負服なんだから力入れないでどうする、みたいな。心が2つある。出自考えたら細分化すると多分3つはあるけど。

益体もない思考が一瞬流れたその後で、ふと頭の中にイメージが浮かぶ。思わず、ぼくはそれを言葉として出していた。

「狩人」

「かりうど？」

「狩人、ハンター……そんな意匠が入ってるといいな、と思ってます」「ほうほう。その……ころは？」

「前19話「マルチタスク」に『最後まで考えて走ることができないなら、野生の獣と変わらない』とトレーナーさんに言われたことがあるんです」

だから常に考えて走ることができるよう訓練してきた。

獣の狩りじゃなくて、人間の狩り。常に考えを巡らせ続け、罫を張り計画を練り戦略を立てて、そして勝つ。それを片時たりとも忘れず自分の頭に刻みつけるために……というのは、ちよつと大仰だろうか。

あとは、ベテルギウスというチーム名……オリオン座を構成する星からの連想だろうか。オリオンはギリシア一の狩人と呼ばれているし。

「狩人ね、なるほどいいじゃない！ 色はどうしましょうか……」

「できれば緑色を入れてくれると嬉しいんですけど……」

「緑……うん、インスピレーション湧いてきたかも」

その後もしばらくすり合わせを続け、休憩なども挟みつつほとんど一日を費やしてデザインの方向性を定めていった。

話を進めていくうちに「あれ、これケニア国旗の色使ってるな」と自分で気付いて思わずサンコンソウルの干渉を疑ったが、まあそれは置いてくとしよう。

トレーナーさんから勧められるまでは勝負服に対するモチベーションはそこまで高くはなかったけど……なんやかんや、勝負服が届くのは楽しみだ。

似合ってることは何も否定しない

それは聖蹄祭を少し後に控えたある日のトレーニング中のことだった。

菊花賞、3000m。スカイ先輩の出走するレースはクラシック級でここまで経験したことの無いほどの長距離レースとなる。必然的に併走相手も限られてくるが、今回白羽の矢が立ったのは純ステイヤーのぼくと菊花賞を走破したことのあるシャカール先輩の二人だ。

ドーナツ先輩も菊花賞を取っているが彼女は今秋の天皇賞に向けての調整中なので、秋華賞向けの調整をしているスナイパー先輩と一緒に中距離が得意な先輩たちとの併走になっている。

とりあえず一回目、3000mを走り終えて皆でストレッチをしている中、ふとした拍子にスカイ先輩が問いかけてきた。

「ストライプならスペちゃんどうやって攻略する?」

「んぬ?」

「スペ先輩の……攻略?」

「まずは()飯に誘って好感度を稼ぎます」

「考えてる方向性が迷子だなあ」

「恋愛ゲームじゃねエか」

「冗談ですよ」

スカイ先輩、いつも飄々としてて雰囲気がちよつと中性的だし女性ファンも多いし、ファンサービスの方向性も女性ウケのするものが多いから、そういう側面だけ見るとやりかねないと思いはする。

けどパーソナリティを知っていると、冗談でもないとなんかことしなしいできないだろうというのは流石に分かる。

「菊花賞でどう勝つかって話ですよ?」

「こそ」

「あア——」

ぼくは軽くシャカール先輩と視線を合わせた。そうして出た結論は……。

「先行逃げ切り一択」

「ブツチギリのガン逃げだろうな」

案の定、ほぼ同意見だった。

「ほうほう、その心は？」

軽くシャカール先輩に視線を送ると、ぼくの方から話すよう視線で促された。

「スペ先輩、3000mを走るとはあっても3000mの『レース』はしたことないと思うんですよ」

「それは皆そうじゃない？」

「併走でもそうだったっつたら？」

「なるほど」

チームスピカの問題点のひとつ、それが層の薄さだ。

……いや、あれだけの才能の塊を揃えておいて層が薄いとは何事だという話ではあるんだけど、いずれもあくまで「将来的に」目覚ましい活躍をするウマ娘たちだ。現時点でデビュー済みなのはスズカ先輩とゴルシ先輩とスペ先輩だけだ。

単純に距離適性を見ても、ウオツカとスカレット、スズカ先輩にとって3000mはちよつと適性外だし、テイオーには……今走らせるのは負荷が大きすぎる。では肝心のステイヤーふたりはと言うと、マックイーンはまだデビュー前ということでも万全じゃないからレースの感覚を掴むためにはやや力不足。ゴルシ先輩は……時間になれば指定したトレーニング場所に来るは来るだろうけど、来たとしてちゃんとスペ先輩にとって実のあるトレーニングになるかどうか……。

「ゴルシ先輩はステイヤーとして類稀な能力はあるんですけどね……」

「アイツにもアイツなりのロジックはあんだろうがそれが伝わらなきや意味がねエ。この状態で『レース』の場数を踏むってのが土台無理なんだよ」

「……で、スペ先輩の前走もセントライト記念ですよ。史実でスペシャルウィークが勝ったのは京都新聞杯。2000年より菊花賞ト

ライアルから除外され春季開催に変更された。以降はダービーのステップレースとして開催。これも2200mで距離的に短めだから、3000mに最適化するのに時間かかると思うんですよ」

「短め？」

「短めつつったか」

「そこは今いいじゃないですか」

「まあ、でもやっぱそうなるよね」

「やっぱって」

「答え合わせにオレたちを使いやがったな」

「えへっ☆」

くっ、そういうごまかしはぼくの専売特許と言いたいところだが、そもそもぼくのやってるごまかしだつて多々影響^バを受けた成分が含まれてるので強くものを言えない！

「まあセイちゃんはスペちゃんの同級生ですし？ そのあたりはふたりよりもよく見てるわけですよ」

まあそのあたりはそうだ。スカイ先輩やグラス先輩たちの方がスぺ先輩のことについてはよっぽど詳しい。

ちよつとズルしてるぼくのは置いておくにしても、レースでの姿しか知らないシャカール先輩ならそれだけフラットな見方ができるわけだから、見方としては間違つてない……と思う。

「でも、あくまで主観的なものだからそんなに自信がなくなつて。外から見えてる人に聞くことで、確信が欲しかったわけです」

「なるほどー」

「お前はひとりで作戦立てて相談もせずに決行してつからこの手の悩み人一倍共感できねエだろ？」

「こうやって共感してるような姿を見せて取り入って、情報を抜き出すんですよ。いやー怖い怖い」

「サイコパスみたいに言わないでくれませんか!? 人聞きの悪い!」

「にやはは☆」

確かに経営者は程よくそういう資質がないとやっていけないと聞くけれども！

ぼくはそんなこと……そういうことは……無い………のような……いやでも無い、よね………？ どうだろう………。

「というかストライプが怖いのでそういうところより、2200を『短い』って言い切っちゃうようなところだと思えますよ」

「それはそうなんだがな。ジュニア級で菊花賞に向けての併走トレーニングに参加してくるってどうなってんだお前」

「何ならクラシック級入ったら3000でも短いって言うかもしれないよ」

「どうなってんだお前」

ぼく以外のシマウマ娘はここまで言わないので安心してほしい。
たぶん。

………

うちのクラスの出し物は勝負服コスプレミニライブ。その特性上、衣装合わせが必須になるのだけど、この日はちょうどそのための衣装が届いた日だった。

事前に仕立てたこともあって基本的に皆とサイズは合っている………はず。とはいえ、元々は他のウマ娘のために作られた専用の勝負服だ。できるだけ背格好の似たウマ娘を当てることで違和感をできるだけ減弱させようというのが今回の想定だった。

もつとも、どうしようもない部分も多々あるので、ある程度は印象の似た子がサイズ違いのものを着たりして対応することになる………のだけだ。

「ミニ会長さんだ」

「ちっちゃい会長さんだ〜」

「髪ほどくともつと会長さんにそっくりにならないかな?」

「みんなさつきからそればかりじゃん!」

どうしてもと言うのでテイオーに会長の勝負服を着せてみたのだけど、これがやっぱりというか案の定というか、まるで会長のようだった。

クラスの皆が取り囲んでテイオーのポニーテールをほどこうとじりじり迫っている。やりたくなるよね。分かる。

「だってマックイーンとか……うん……」
「どういう意味ですの!？」

マックイーンが着ているのはドーベル先輩の勝負服だ。

同じメジロ家だけあって、全体的な印象はさほど変わらない。……実はマックイーンの方がドーベル先輩よりも背が高いので、ちよつと違和感は拭えないけど。

「良く言えば印象を変えずに上手く着こなしてる。悪く言えば意外性が無い」

「でもでも、マックイーンにすつごく似合ってるってことだよ☆ それってマーベラスじゃないかな★」

「そ、そうでしょうか……?」
「それはそう」

似合ってることは何も否定しない。

あと何気にマーベラスもすごいことになっている。

今あの子が着ているのはイナリ先輩の勝負服だが、なんとというか……びったりだ。違和感がないという意味ではマックイーンに勝るとも劣らない。

印象をあまり変えず勝負服を着こなすというのは難しい。いや、まあ、うん、色々と言いたいことがあるけれども、とりあえずマーベラスとだけ言いたい。

ちなみに、今ぼくが着ているのはタマ先輩の勝負服(旧Ver)だ。他だと何が似合うとも言い難いので消去法でもある。

はいてないつけてないと言われがちなこの服だが、チューブトップを着ているしショートパンツも穿いている。あくまで「外から見えないだけ」ということに気付いて、ぼくは……なんかこう……ちよつとがっかりした。

自分で着る分にはいいんだけどね……。

「……意外、という意味ですとその、マヤノさんも相当大胆ですわね」
「そーお?」

頬に指を当てて首をかしげるマヤノ。彼女が着ているのは、ゴールドシチー先輩の勝負服だ。

ぼく個人はあまり違和感を覚えていなかったのだけど、思えばそう
だ。あのライダースジャケット脱いだらだいぶ危険なことになる。

……結局のところ、知識としてマヤノが将来どういう勝負服を着ることになるのかということを知ってるということについても、あくまで指針程度のものだ。それとあまり印象が変わらなかったからと言っても、大胆な格好には違いない。

わあすごい大人っぽいねマーベラスだねと皆で褒めてたものだけ
ど、その最中テイオーが何やら言いたそうにしていたのはこれだった
ようだ。

「オトナの女って感じがしない？ どう？ ちゅっ☆」

「かわいい」

「かわいい、じゃなくて大人っぽいがいいな」

ド直球なことを言わせてもらおうとそういう背伸びしたところが可愛
い。

……と、そろそろ問題の二人が着替え終わる頃かな？

「じゃーん！ どうだあー！」

「あら、ターボさ……こ、これはまた……」

「意外性の塊だあ……」

「意外ってどういうこと!？」

そしてこの場に現れたターボは——スズカ先輩の勝負服を着てい
た。

なんとというか……なんだろう。意外なマッチ感。

ターボの髪が青だからだろうと思っただけど、インナーカラーや
メッシュが淡い緑色なので微妙にグラデーションがかかったようにな
ってて思ったより似合ってる。

当初、ターボ師匠の服をどうするかという点についてはちよつとも
めた。

あまりにもキャラが違いすぎるのでやめた方がいい派。意外だからこそ推し出すべき派。あとターボが希望してるんだからマルゼン

先輩の服着せよう派。教室は3つの派閥に分かれ混沌を極めていた。それはそれとして「じゃあ一度着せてから判断しよう」という話になって混乱は解消された。結果だけ言えば成功の部類だろう。

「マーベラス！ 意外な方向で似合ってるよ★」

「ねえ意外って何で!？」

「こんな落ち着いた服装似合うと思わなくて……」

「ところで何でトラちゃん、ターボちゃんがマルゼンちゃんの勝負服着るの反対してたの？」

「あの勝負服は……こう、こういう人専用だと思う。多分ぺろんってめくれちゃうよ」

「ああ……」

胸のあたりでこう、お山を描くように腕を動かす。中学生の出し物でこれは問題だ。大変な問題だ。

あと色彩的にもちよつと噛み合わせが悪い。

「ターボもマルゼンみたいに走れるもん!」

「もうちよつとスタミナつけよつか……あとそういう問題じゃなくて……」

「みんな、おまたせー♪」

と、そうこうしてるうちにカレンも着替えが終わったようだ。カレンの着てきた勝負服は……オグリ先輩のもの。

同じ芦毛だけあって着こなしは完璧。いや、しかし……やっぱり着るウマ娘によって印象って全然違うな。おへそチラつと見えてるのがちよつと目に毒だ。

「「カレンちゃんカワイイ!!」」

「えへへっ♪ みんなも似合ってるよ!」

「きやーっ!」

「Currenに褒められちゃった!」

いつものこととはいえ、クラスの皆毎回これやって疲れないのかな……。

いやカワイイことは一切否定しないけど。実際カワイイよ。思わずぼくも声揃えるくらいには。

「この調子なら問題なく行けそうかな？」

「うーん、問題……無くは無いと思うけど」

「例えば？」

「クリークさん役がないこと？」

「あ、あー……うん……」

それは……そうなんだけど……。

ぼくがタマ先輩、マヤノがシチー先輩、カレンはオグリ先輩だし
マーベラスがイナリ先輩。あの世代のトップスターの勝負服を取り
揃えている中でクリーク先輩の勝負服を着てる子だけがない。

周りを軽く見回してみるけど、うん……クリーク先輩の勝負服は
……あの抜群のプロポーションと比較してしまうと、似合いそうな人
があまりいないかな……。

「スカーレットかネイチャささえいれば……」

「別クラスだよお」

……こう、飛び入り参加でもいいから誰かクリーク先輩役やれるひ
といないかなあ。

ありあわせでなんとかするしかない

「いやー、今年もちゃんと開催したねえ」

「開催できたねえ……」

「何でそんな死にそうなのストライブ……?」

妙に年寄りめいたことを言うネイチャの隣、ぼくは軽くヨロヨロになりながらそうぼやいた。

正直、今年は仕事を増やしすぎた気がする。

ここまでの忙しさも今年だけのことと思って乗り切ったけど、誰かが「いつそ皆がコスしてるひとの代表的な曲歌おうよ」と言い出した時は一瞬クラツと来た。

テイオーなどは元から会長のファンだったから持ち歌くらいは苦もなく歌えるし、ダンスも覚えてる。会長といえば無敗三冠だし、「winning the soul」を歌えば問題ないだろう。これはテイオーの得意な曲でもある。

が、他はそういうわけにもいかない。ぼくだってタマ先輩と仲良くさせてもらっているけど、持ち歌のこと詳しく知ってるわけじゃないし、オグリ先輩役のカレンなんかもなかなか大変だ。マイルCSや安田記念を取ってるのに有馬記念を二度も勝っている。有馬はマイルなのでは? ぼくは訝しんだ。

だからって有馬記念も実質マイルだから「本能スピード」歌えばいいんじゃない、とマジで何も考えずにポツと呟いてしまった時は「長距離に脳やられすぎてついに狂ったか」とでも言いたげな表情を向けられてしまったが。

「ふふふ……まだ天皇賞走る予定無いのに『NEXT FRONTIER』歌って踊れるようになったよ。ほめて」

「はいはいえらいえらい」

「ネイチャのこのゆるい感じが安心する……」

「なにそれ」

寮ではともかく、チームも別、クラスも別になったとなると一緒に

行動する機会というのはめっきりと減ってしまおう。

クラス替えは新しい人間関係を構築しやすいメリットはあるのだが、それまでの関係が一変するあまりしていない。ところもあるのがネックだ。何せ中央トレセン学園の入学人数は毎年1000人を軽く超える。クラスもそれだけ細分化されるため、同じ顔ぶれになることがまず無い。逆に、それまで頭角を現してなかった実力者と出会うこともあり得るのだけだ。

「ま、たしかにそっちのクラスはなんていうか、もういつつも賑やかだよね。見るたびにキラキラしててさ、もーこの主役どもめー、って感じ」

「出た、ネイチヤのキラキラ論」

いや、気持ちちは分かるよ？

主にカレンチャンとかカレンチャンとかカレンチャンとかマツクイーンとかマツクイーンとか……いやあの二人の占める割合大きいな。

あとあの二人芦毛だから時々物理的にキラキラしてるし。通りすがりのアシゲスキーさん（仮）がひよっこり覗いてきたと思ったら親指をグツと立てて去っていくこともあったっけ……。

いやそれはいいんだ。重要なことじゃない。

「そんなネイチヤさんに耳寄りな情報がありましたってえ」

「うっわ胡散臭い揉み手」

「今からこれを着るだけでキラキラな皆の中心センターで踊ることができるんですよ」

「へー？ なにそ……れ……」

ぼくが取り出したのは、水色と白の柔らかな印象を持った……クリーク先輩の勝負服だった。

「うおおおい！ 巻き込む気満々か!？」

「たーのーむーよーこれまともに着こなせそうなひと少ないんだよ」

「ええい放せ放せい！ とうか仮にやるにしても当日に言い出すのは禁止っしょ!？」

「ごもつとも」

それはその通り。だから正直半分くらい冗談のつもりではあったんだ。

「まあ、クラスが違うからそこまで本気じゃなかったけど」

「だろうねえ」

「でもあの世代のコス揃えてる中でクリーク先輩だけいなかったらつゆだく牛丼肉抜きみたいな締まらない状態になるでしょ」

「玉ねぎ丼じゃん」

「オグリ先輩ならそれでも美味しくいただきそうだけど」

「おかわり付きでね」

他のひとはだいたい揃ってるんだよ……レツちゃんはヤエノ先輩のコスしてくれてるし、メイクデビューの後話すようになった二着のルーちゃんもバンブー先輩のコスだし……他にもたくさん。

クリーク先輩役だけ皆尻込みしてる。ぼくも自分の身長や外見については理解してるからハイやりますとは言えなかった。だってねえ。そりゃねえ。ムリだよ。マーベラスがもうひとりいるなら別だけど。

「まー頑張りなよ。いつも言ってたじゃん、なんだっけ、ありあわせでなんとかするしかないみたいなの」

「今ある手札だけでなんとかするしかない、だよ。お昼ごはん作るんじゃないんだから」

「これはこれで言ってたかった？」

「言ってる」

食堂が休みの時に度々言ってる。

ネイチヤが言ってるのも聞いたことある。

ともかくそんな感じで結局クリーク先輩役は見つけられなかった。こうしてつゆだく牛丼肉抜きミニライブが始まることとなってしまったわけだ。めげそう。

・・・≠・・・

それやこれやあって。

ぼくは今年もチームの出し物があるため基本的にはあつちにいることになるが、せめて開会してしばらくは皆と一緒にセツティングしようと思って教室にいた時のことだった。

「邪魔するでー」

「邪魔するんやったら帰ってー」

「あいよー」

ピシヤツと扉が閉まり、今しがたやってきたばかりのタマ先輩たちは教室を出ていった。

しまった。つい反射的に。

「いや用があるから来とるんやないか！ アンタら何本気で帰つとんねん！」

「そういう流れだろう？」

「よう分かつとるやないかい！」

「なあタマよお……あたし毎回付き合わされてんだが何なんだいコレ？」

「なんばの有名な劇場でやつとるアレや」

なんばの有名な劇場他色んなところでローカライズされたりミーム化したりしているアレである。

ふと見ると、外ではクリーク先輩と……生徒会のひとだろうか？

教室の前に貼り付けている案内表示を弄っているようだ。

……一体何を？ いや、これは……読めてきたぞ。いやぼくも想定すべきだったんだろうけど。窓越しにクリーク先輩に向けて手をふると、ニコニコ笑顔で手を振り返してくれた。和む。いや和んでる場合でもないが。

「タマ……ふと思ったのだが、いいだろうか？」

「何や藪からステイックに」

「私はカサマツにいたからテレビで見られた。けど東京では見られないはず……イナリが分からないのに、何で外国出身のストライプが分かるのだろうか？」

「……………そういえば何でやっ？」

曖昧な笑顔のまま両手でサムズアップして見せる。

こういう時変に取り繕うとまた面倒なことになるので相手の想像に任せる形にするのが一番手っ取り早い。

まあ多分商業的なアレやコレやで学んだんだろうくらいに思ってくれるだろう。

「考えても仕方あらへんわ。何や悪さ色々しよるから何を見とるとも分からん」

「悪さして」

「タマ、安くて美味しい食事を出す屋台を出してくれるストライプが悪いことをしていると私は思いたくない」

「言葉の綾やつちゅーねんマジに受け取んなや」

ぶつちやけぼくに対する印象が混沌としすぎてると思う。

こっちはレースで勝つために動くけど盤外戦術は情報戦までというスタンスで一貫してるのに。

「あのさあ、結局タマモたちは何しに来たの？ 漫才？」

「ちやうわいー！」

あ、しびれを切らしたテイオーが先輩たちにツッコみに行った。

ここからまた漫才が始まる可能性もあるがとりあえず一步前進ということにしておこう。

「会長からの伝言を預かってきたんだ。キミたちのクラスの出し物なんだが、生徒会で指定した場所でやるようにと」

「ええっ!? 何で!?!」

「……テイオー、外をご覧なさい」

「外?」

マックイーンに促されて窓から外を見下ろすテイオー。つられて同じ方向……生徒会が用意してくれたらしい会場の方を見れば、そこはもう黒山の人だかりだった。

何人かが驚きであんぐりと口を開けたが、状況が把握できた人の行動は早い。納得の表情を浮かべながら皆の手荷物をまとめ始めた。

「何アレ!?!」

「事前に出してもらった見積もり以上に人が来すぎたって話でい。理由は……多分目星くらいついてんだろ？」

「カレンちゃんカワイイ……ってことですね」

「は？」

「皆、カレンのせいで迷惑かけちゃってごめんね……うるうる」

「「カレンちゃんカワイイ!!」」

「何なんやこのノリは」

……確かにちよつと普段の様子を知らない人には理解し難い部分もあるだろうけど、これはそういうことだ。

カレンちゃんは有数のフォロワー数を誇るカワイイの伝道師。トレンセン学園への編入後もSNSでの情報発信は続けており、今回の聖蹄祭のことも宣伝していた。

その結果首都圏にいたのだろうファンが一斉に押し寄せ、ご覧の有様である。これくらいは予測しておくべきだったんだろうけど、忙しさにかまけてうっかりすっかり忘れてた……。

「ストライプ、あなたなら予測できたんじゃないやありませんの？」

「買いかぶり過ぎだよマツクイーン」

「と、言いつつ……？」

「いや今回は本気で疲労が先に来て考えるどころじゃなかったよ」

「ごめん」

懐疑的な目で見られるのも分かるんだけどもね？ 伊達にスタミナおぼけとか言われてないし。

けど仕事をする時の疲れて肉体的なそれじゃないんです。皆もきつとそのうち分かるようになると思う。たぶん。

玄人好み

今回のミニライブのトップバッターはぼくだった。

この陰険残念ロバ娘が何言ってるんだと思う人もいそうだが、こんなんでも一応日本では珍しいシマウマ娘だ。オマケに九月のデビューから現在まで一応二戦二勝。カレンのウマスタやウマツターなどに時々写真が載ることもあるし、相互フォロワーもしてるので同世代の中では実は割と注目度が高かったりする。

加えて、チームの出店の方にも早めに合流しないといけない。今年にはテイオーがリギルの執事喫茶の助っ人に行くという話もあるようなのだけど、そつちはあくまで別チームの助っ人ということでごつちを優先してもらった。

クラスの皆には配慮してもらえてありがたい……と一瞬は思ったのだけど、よく考えたらこの状況になったのはクラスの皆のせいだな？　と思いついて複雑な気持ちになった。

ブラック企業から抜け出せない人みたいな心理状態になってない？　これ。

「耳動いてる」

「耳めっちゃ動いてる」

「曲に合わせて動くんだ……」

「あれがペガサスフォーメーション……」

(ひいん)

ミニライブの最中、そんなことを観客のひとたちが話しているのが聞こえてくる。

カレンの拡散能力を侮っていた……わけじゃないんだけど、オープン戦で勝ったことの相乗効果でより知名度が上がってしまったている。

「サバンナストライブ、現在2戦2勝。古豪のチームベテルギウスに所属していることも考えると成績そのものは納得の数字だが、レース内容には少し疑問を持たれている」

「どうした急に」

「2戦共に大きく差を離すことができないギリギリの勝利。手に汗握る展開といえば聞こえは良いが、これは同世代の中で抜きん出ているわけではないとも言える」

「タイムやバ身差は一番わかりやすい指標だからな」

強いウマ娘というものは、世代の中でも頭角を現するのが早いと言われている。

早熟なだけだったというパターンの中にはあるけど、例えば朝日杯を制したウマ娘はその後も活躍していることが多い。例えばマルゼン先輩とかサクラチヨノオー先輩とか。

その勝ち方も余裕があったりかなりのバ身差をつけていたり、「強い」ことが視覚的に分かりやすいのだけど……そういう基準に照らし合わせるなら、ぼくはメイクデビューでもオープン戦でも苦戦続きだ。見ている側としては接戦続きで面白くはあっても、強いと感じてくれはしないだろう。

よって、思うことはこうだ。

(重賞で勝ち負けはついても、G1は厳しい……)

「オープン戦で苦戦するなら、それより上の天才たちがいる舞台は難しいかもしれないな。重賞で勝ち負けはついても、G1は厳しいと評さざるを得ない」

「しかしそれも『今のままなら』という話なんですわね!」

「アグネスデジタル氏」

どうした急に。

「ストライプさんは得意距離3000以上という生粋のステイヤー、本人が言っていましたけどまだ今は短すぎるくらいで2000だと強みが発揮できないのです」

「なるほど」

「つまり今の苦戦もなるべくしてなっている状態、というわけか……」
「ウマ娘ちゃんたちは適性という絶対の壁がありますが、それを克服しようとする姿もまた……おっほう……尊いんですよ……!」

「分かる」

「そうだな……」

しみじみと頷く男性二人とデジたん氏。いつの間に仲良くなったのかという問いは野暮なので置いておくとして。

……しかしあのひとたち最前列で何やってんだ。

・・・≠・・・

ミニライブを終えてチームの方に戻ると、そこはもはや戦場の様相を呈していた。

お歳のせいかしばらく立ち作業続きだったせいかトレーナーさんは腰を押さえながら抹茶のシェイクを作っており、サブトレさんはあっちこっちすごい速度で行き来してパンケーキを作り上げたり冷蔵しておしるこチンしたり焼いてるお餅の様子を確認したりしている。もう大忙し通り越してるレベルじゃないだろうか。

ぼくはとりあえずそつとサポートに入ることにした。

「何がどうしてこんなに忙しくなったんです？」

「原因があるとすればスカイとスナイパーだ。同一年にティアアラと三冠両方の有力ウマ娘がいるとなればこうもなるだろう」

「あー」

トレーナーさんが放置している食器や調理器具を次々洗っていく。本当は調理の工程の中で済ませると効率的なのだけど、そっちは真つ最中で手を貸すと逆に危ない。

まずはこちらを済ませてからにするべきだろう。

「お前手際が良いな」

「慣れてますから。トレーナーさん普段家事とかされないんです？」

「妻に任せきりだな……」

失礼ながら確かにそんな雰囲気はある。栄養学なんかには普通に詳しいんだろうけど、チームのことで多忙すぎて日常的に料理とかはできそうにないっていうか。

流れ作業でいくつかパフェを同時に作りながら納得顔でぼくは軽く頷いた。

「たまの休日に気まぐれで料理してますけど、片付けをしないので母

に毎度怒られていますよ」

「余計なことを言わんでいい」

「気持ちは分かる——。」

家族サービスをしたかったんだろう。多分。それはそれとして洗いや物が面倒になってしまったり、料理のことにかかりきりになって処理し忘れてしまったり……。

その点で言うところサブトレさんの手際はとても良い。アレか、普段からタキオン先輩のお弁当とか作り慣れているからか。

逆にタキオン先輩の方はこの手の仕事は苦手そうだな。ウエイトレスくらいはできそうだけど……いやダメだ、変な薬仕込んでそう怖い。

……もしかしてそれはそれでフアンの人は喜ぶかもしれん……。

「来年以降は誰か手伝いを呼ぶべきかもしれんな……」

「アルバイトでも雇いますか？ 窓口なら作りますよ」

「学生が余計なことを考えんでいい」

「はい」

聖蹄祭はファン感謝祭の性質も同時に併せ持つ。学園祭であることは確かなんだけど、プロのアスリート兼アイドルがやるファンサービスの場合とも言えるわけで、学生がいかに頑張ったか、よりもちゃんとお客さんを満足させられたか、の方が比重が大きいだろうとも思う。

どうやってもお金のやり取りは発生してしまうし、アルバイトを雇うか外部の手を借りるかしないと手に負えないというなら、これも仕方ないのではないか。

「……まあこの多忙さも本を正せばストライプの発案が原因ですが……」

「えへっ」

『毎年恒例の行事』として求められるのはいいが、こうなることは想定しておくべきだったかもしれんな……」

「流石に『やらない』ことが選択肢から外れるほどとは思いませんでしたわウフフ」

「ウフフじゃありません」

「フハハ」

「言い方を変えろという話でもありません」

……しかし開場して一、二時間くらいならまだお客さんも少ないんじゃないでしょうか、と割と甘い見積もりをしてウエイトレス役以外のひとを休憩時間にしたのはサブトレさんだったような……。

いや、よそう。ぼくの勝手な推測で話を混ぜっ返したくない。

一時間ほど手伝うことで注文を捌き切って、次の厨房手伝いにフラッシュ先輩と血の涙を流してミニライブから抜けてきたデジたんパイセンを迎えると、ぼくは去年のそれよりやや華やかな色合いの和メイド服に着替えてホールに向かう。と――。

(おや?)

そこで、なんとというか去年と比べると向けられている視線の質が明らかに違うことに気づいた。

物珍しさと微笑まじさが主だったのが去年だけど、今はどちらかと言うと値踏みされているような、それでいてなんとなく得意げなような……。

……違和感は拭えないけど、仕事はしないと。

「いらつしやいませ、空いているお好きな席にどうぞー!」

「ありがとう」

案内したのは、三十代くらいだろう壮年の男性だった。この人もなんだかぼくに向ける視線がちょうどそんな感じだった。

……はて。

「どうしたストライプ、喉に骨でも刺さったような顔して」

「ドーナッツ先輩」

む、努めて表情変えないようにしてたのに読み取られた。普段と違って強張ってるせいかな。

この状態でいるのもお客さんに悪いし、疑問は早めに解消しよう。こういうことなんですけど、と軽めの調子で問いかけると、ドーナッツ先輩は納得したように「おう」と頷いた。

「お前の勝ち方な、玄人好みすぎんだよ」

「玄人好み」

なんじゃそれ。

「中盤からロンスパかけて半分くれー泥仕合に持ち込んで、最後はギリギリの勝ちだろう？ 華やかさとは無縁だわな」

「まあ……」

「そういう泥臭い勝ち方が好きならちよつと目の肥えてる人らがお前見るとそうなる」

「ああ……」

「だいたい分かった。ぼくの主要なファン層、レースに慣れてちよつと目が肥えた、悪い言い方すると少し面倒くさい大人なんだ……」

「早いうちから注目することができて少し得意になってる、けど危うい勝ち方をするのは事実なので本人を目にして実際のところ実力はどのなのだろう、と思っっている……と。」

「アタシも覚えあるぜ。リムジンと比較されてんだ」

「……なるほど」

「ドーナッツ先輩とリムジン先輩は同世代。スリップストリーム走法で際どいながらも勝ちを狙いに行くドーナッツ先輩の戦法は、一見するとやや地味だ。」

「対してリムジン先輩は凄まじい加速の末脚に、見た目にも派手な超前傾姿勢、それにあの長身と比較すると確かに玄人好みと言う他無い。」

「特にお前は今派手に活躍してるスカイヤスナイパーが真上にいつからなあ」

「どうやっても「こつち側」だけ、と親指で自身を指し示しながらニヤリとした笑みを向けてくるドーナッツ先輩。」

「……う……嬉しくないとも言いきいけどまあそれでもいいですとも言い辛い……!!」

影すら踏ませない

毎日王冠。

その成立は相当に古く、有馬記念や安田記念が初めて開催されるよりも前から開催されてきた歴史あるレースだ。

現在は秋の天皇賞の前哨戦として扱われており、一着のウマ娘には優先出走権が与えられている。オグリ先輩が連覇を成し遂げたレースとしても有名だが、今年はこのレースに対する注目度がまた違った。

主な出走予定者として挙がっているのは、スズカ先輩とエル先輩とグラス先輩。なお、スズカ先輩が出走を表明した段階で出走を回避するウマ娘が続出した。あの大逃げへの対策が打てないとすると出走回避もある意味致し方ない。ぼくだって割と真面目に考える。

現在クラシック級のエル先輩たちがどこまで食い下がれるか……そして、春に大逃げに覚醒した時から現在まで続いている連勝記録はどうなるのか。様々な意味でこのレースは強く注目を受けていた。

が。そもそもぼくたちのチーム、大半はこのレースを現地で観られていない。同日にスカイ先輩の出走する京都大賞典があったため、皆でそっちの応援に行ってたからだ。

一応、次のレースで当たるドーナツツ先輩と、何か気になったらしいタキオン先輩、それからタキオン先輩のお世話役としてサブトレさんの三人は毎日王冠の偵察に行っている。

メジロブライト先輩たちを含むシニア級の強豪を相手に、スカイ先輩は見事逃げ切り勝ちを見せてくれた。ダービーでの敗戦を糧とした快走は、菊花賞での好走を予感させてくれるほどのものがあつたと言えるだろう。

さあこのまま他の皆も続くぞ、と意気込んでいたのだが。

「勝てねエ——！」

皆が帰ってくるなりそんな弱音がドーナツツ先輩の口から漏れた。「開口一番皆の氣勢を削ぐようなことを言うのはやめんか」

「けどよ〜」

「現状、サイレンススズカの走りは『それができれば世話は無』という理想論をそのまま実現させているようなものですかからね」

誰より先にスタートを切り、ハナをきつたらそのままペースを維持し続ける。脚が残っていれば最終直線で再加速。

なるほど完璧な作戦だ。不可能という点に目を瞑れば——と言いたくなるようなことを実現してしまった。思ったことがつい口をついて出てきやすいドーナッツ先輩がこんなことを言ってしまうのも理解できないではない。

「まアドーナッツにや相性最悪か」

「多分誰にとつても相性悪いと思いますよ?」

「特につつこった」

スリップストリーム走法に入るためには、当然前にいる走者の背後に入る必要がある。影すら踏ませない大逃げをされてしまえば戦術がまったくの無意味になってしまうわけだ。

似たような理由でぼくもスナイパー先輩も多分完封される。「逃げ」をあくまで戦術として用いているスカイ先輩もやや厳しいだろう。スズカ先輩は戦術とか戦法とかそういうのじゃなく完全に性質として逃げが染み付いているからだ。もはやそういう生態だ。

おハナさんの指示そのものはセオリーに照らし合わせれば間違はなく上々だったんだけど、スズカ先輩に限って言えば先行策をしろというのは鳥に地面を走れと言っているようなものだ。

「勝ち目があるのはリムジン先輩ですかねえ。マイル、それも1600ピツタリで」

「ンー……勝つにしてもレコード出すほど急がないといけないので、苦労すると思ひマス……」

「折れるほどの無理はさせられんぞ」

「Ah……ハハハ……」

その気になったらガチで脚折るほどの無茶かますのが怖いわこのひと……。

実際のところ、スズカ先輩と言えどレコードタイムを叩き出せたの

は小倉大賞典と金鯨賞くらいのもので……いや待てよ、2つもレコード取ってるなら大概だな……。

……ともかく、タイムそのものは限界ギリギリを突き詰めてはいるものの、決して非現実的なほどのものじゃない。最終直線か、あるいはゴール前ギリギリで……こちらの存在を気取られる前にハナ差で差せば、あるいは……。

……それにしても珍しい。不自然なくらいタキオン先輩が静かだな。そう思っていると、不意に何やらデータをまとめる手を止め手招きされた。

「ストライプ君」

「あ、はい」

突然何なんだろうか。そう思って駆け寄ってみると、今の今までまとめていたはずのデータブックをそのまま手渡されてしまった。

「君はチームスピカの面々と懇意だったね。この資料、あのチームのトレーナーに渡しておいてくれないかい」

「? ……あ……はい。分かりました」

中身を軽くパラパラとめくって内容を少し見てみる——と、概ねその理由が理解できた。

そういう話か……予想はしてたけど、実際に目にとるとより強く実感が生まれてくる。それと同時にちよつと心が重い。これをぼくが伝えないといけないのか……スカーレットと仲良いんだからタキオン先輩が言えればいいのではないのだろうか。いやしかし、率直すぎて反感買うかもしれない。そう思うと適材適所……と言えるのかな、どうかな……。

「いつから目を付けていらっしやっただんですか?」

「春だね。映像越しとはいえ、少々気にかかったところがあつたものでね……結果的に確信を得るのが遅くなつたが」

「……ですか」

「彼女の走りが未完成なままに終わるのは惜しい。私では警戒させてしまう可能性もあるのでね」

「わかりました」

どうやら何も言わないところを見ると、サブトレさんたちはどうい
うことか把握しているしこれも容認しているらしい。

それはそうして当然なのかもしれないけど……これぼくが持って
いけないといけないの、ちよつと精神的にキツいなあ……。

・・・≠・・・

というわけで後日。スピカが練習しているコースの前にやってき
ただけけど、気が重い。

渡さないわけにはいかないんだけど……だからって率直に言ひす
ぎるとそれはそれで問題があるし……。

いいや、とにかく状況から考えると仕方ない。スピカのチームメン
バーの大半と同級生なのでぼくが一番渡りをつけやすい。

そう思つて客席に入つてコースを見る、と——丸太を担いでスぺ先
輩やスズカ先輩、マツクイーンと並走しているゴルシ先輩の姿があつ
た。

ぼくはその場で小さな付箋にテキトーな絵を描いて爪楊枝に巻き
つけて外ラチに立てた。

「何あの丸太」

「分かんねえ……」

ラチの外で休憩中らしきウオツカに聞いてみると、そんな答えが
返ってきた。そりやそうだ。

ぼくも分からん。特に意味は無いんだろう、多分……そう思つてい
ると、そこでようやくぼくが存在に気付いたのか、ウオツカが驚いて
こちらを振り返った。同時にこちらの声に反応したスカーレットや
テイオーがやってくる。

「うおつ、ストライブ!?!」

「出たな恐怖の偵察マツスイーンストライブ! スズカのデータは渡
さないぞおー」

「ぼくどういう風に見られてんの?」

「気付かない内に知らないデータ集めて変な作戦立ててる本質的に何

考えてるか分からない子？」

「H A H A H A」

言葉の返し方が無かった。

「急にどうしたんだよ？」

「ちよつとタキオン先輩に頼まれてトレーナーさん探しに。今いる？」

「タキオン先輩から？　すぐ呼んでくるわ」

「え、いやいるかどうかだけで——」

自分で探しに行くよ……と言う間に、もうスカーレットはトレーナーさん呼びに駆けて行ってしまった。

「タキオン先輩のこととなるとスカーレットのヤツすーぐ行動に移しちゃうからなあ」

「だね……」

そうなんだよね……スカーレットつてタキオン先輩に対してすごい憧れてるといってもういっそ盲目的というか……憧れること自体は別にいいんだよ？　ただもうちよつと……そこを見て見ぬふりするのはどうなのというか、もうちよつと見るべき場所があるでしよつていうか……。

……まあいいや、ちよくちよく実験に（無断で）付き合わされてるけど、先輩としてウマ娘としての能力を疑ったことは無いし。憧れる気持ちも理解できる。

「なにに、どうかしたの？」

「んー、ちよつと……今日はシリアスな方の話で……」

「まさかスペちゃん対策？」

「いやそういう話でもなくつて」

「歯切れが悪いな？」

思わず一瞬、テイオーの脚に目が向いてしまった。その直後にスズカ先輩の方に目が向いて……不安に駆られる。

話していいのかな、どうかな。同じチームだし……と悩んでいたところ、スカーレットに急かされるようにしてトレーナーさんがこちらにやってきた。

「何だ何だ一体……何だこれ、ラチにクソみてエな旗立てやがって……」

「ストライブ?」

「それは今いいんだ、重要なことじゃない」

「おい」

「で、俺に話っているのは……?」

「あ、そうでした。コレ……タキオン先輩から、トレーナーさんに」

「何? アグネスタキオンから?」

「ひつでえ表情つすね」

「何か問題でもあるのトレーナー?」

じろつとスカーレットに睨まれて、凄まじい表情をしていたトレーナーさんは僅かに顔を引き締め、萎縮しながらもデータブックを受け取る。

何がどういふことなのかと状況を把握しかねている様子だが、しばらくページを捲っていくとこちらの言わんことを理解してくれたのか、徐々に表情が先程とは別の理由で固くなっていった。

「……本当か?」

「こんなことまで作戦に組み込みませんよ」

「だろうな……」

「どうしたの?」

「スズカ先輩の脚が折れるかもしれない」

「……はあ!?!」

「どういふこと!?!」

率直に現状を告げると、ウオツカとスカーレットが目を剥いて驚きをあらわにした。

意外にこの状況でも冷静なのがテイオーだ。二人を抑えるように少し前に立つ——立——立ててないな。体が二人に比べると小さいから押されてる。代わりにトレーナーさんがウオツカたちを手で制した。

「あくまでレースのデータからの判断ですが、筋肉量と骨格、平均スピードとトップスピードの差、摩擦係数と地面を蹴る時のパワー、そ

れに伴う衝撃、それからウマムス……」

「ねえストライプ、その話長くなる？」

「……諸々端折って、あの大逃げのせいで毎レース脚に常識外れの衝撃が与えられて負担がかかっているから、そう遠からず疲労骨折する可能性が高いんです」

「分かりやすくなった！ ……ヤバイじゃん！」

「ヤバいんだよ」

「……スズカの様子を見る限り、痛がっている風でもないし問題は無いと踏んでたんだが、アグネスタキオンが言うならそうか……」

タキオン先輩は、類稀な速度を弾き出せる脚を持っていながらも、その「脆さ」のせいで、サブトレさんにスカウトされるまでトレーナーすらつけていなかった。

その話そのものは有名……というわけでもないが、夏合宿で盛大に高笑いをしていたので知っている人は知っている程度には知名度もある。スピカのトレーナーさんも知っているうちの一人だろう。

「すぐ秋の天皇賞が控えていることは把握してますけど、せめて今週中……いえ、二、三日は完全な休養を取らないといけないと思います」

「そうだな……いや待てよ、確かスズカは……」

「朝とか夜とか、気付いたら走りに行っているような……」

「スペ先輩になんとか言って部屋から出さないようにするとかしてください……多分それが骨の疲労を溜める原因になっています」

「そうだな……ありがとうな、違うチームなのに」

「いえ。ぼくは先輩たちにデータを持っていくように頼まれただけなので……何も力になれてないです」

こればかりはどうしようもなく事実だ。

ぼくはメッセンジャー役にしかなれてない。データを取ったのはトレーナーさんやタキオン先輩たちだし、それを活かしているのもトレーナーさんたちだ。ぼくはいち選手の立場以上のことは何もできていない。

いけない、感情がどんどん後ろ向きになってきている。不安の種がそのまま結実しそうになっているからだろうか。きつと大丈夫だろう

うと楽観視していた結果がこれだ。

……前向きに考えよう。この警告があるなら最悪の事態は免れる可能性はある。何せ自分自身の努力と、トレーナーさんたちの尽力あって脚の脆さを克服できたタキオン先輩だ。きっとなんとかなる！　はず、多分……。

「ストライプ、ところであの旗は何を意図して……」

「勢いでやってるだけで何も意味は無いです」

それはそうと即席で作った奇っ怪なデザインの小さな旗はその場で即取り払われてしまった。ちくしょう。

大櫛の向こうで

トウインクルシリーズ秋のG1戦線、今年はぼくらのチームもここにガッツリ関わっていくことになる。

まずすぐ翌週に秋華賞。その翌週に菊花賞。次は府中で秋の天皇賞が開催され、少し間を空けてエリザベス女王杯、マイルチャンピオンシップ、また府中に戻ってジャパンカップ……関係者は西へ東へと大忙しだ。

エリザベス女王杯とマイルCSを除いてだいたい誰かしら出走する予定になっているチームベテルギウスはその辺りの煽りをモロに食らっている。東京レース場で行われる秋の天皇賞はともかく、関西での開催となるとその都度あちらに行かないといけない。オーブン戦や重賞はともかく、G1となら確実にチーム総出で応援に行くことになる。補助金を出るとはいえ、正直言って小さくない負担を感じる。主にトレーナーさんの懐に。

まず第一戦目、秋華賞。スナイパー先輩は前回での負けをバネに、苦手なドーナツ先輩との併走などにも本気で取り組んだ結果、これまで以上の精度でミスディレクションを連発し、走者を徹底的にかき乱して勝利した。

この戦法のせいで14番人気のウマ娘が2着につけてくるなどの波乱もあったけど、そこは大逃げが全体のペースを狂わせて予想外の結果に……なんてこともあるので、別段珍しいことでもない。

「桜花と秋華、まさしくニンジャにふさわしいアブハチトラズ……」

「秋華ってコスモスのことじゃないの？」

「えっ」

「いえ、秋華とは『あきのはな』として中国の詩人が用いた言葉ですの
で秋の花は関係ありません」

「えっ」

——そんなやり取りがあったりしたけどそれは置いて。

問題はウイニングライブで起こった。メンポ強奪事件だ。スナイ

パー||サンは大半の場面でメンポを手放さず、脱いだほうが良い場面では布マスクに取り替えたりマフラーにしてみたりと、とにかく口元を隠してニンジャの模倣を徹底している。

本質的にかなりシャイな性格なので、それを覆い隠すための一種のペルソナと言つてもいいのだが……いつまでもこれじゃ通用しないとは前から言われてきたことだ。荒療治も仕方ないとしてトレーナーさんはこれを黙認。半分くらいぶっちゃけドーナツツ先輩の悪ノリなのは否めないが、ここでスナイパー||サン……というかスナイパー先輩が素顔のままステージに出ることになってしまった。

ここで普段、だいたい毎日彼女と顔を合わせるようになっている我々は忘れていた。

メンポも無し、服装も普通にステージ衣装だと、ロシア系の整った顔立ちにクリーム色に近い月毛この毛色を持つサラブレッドは極めて珍しいため、JRAにおける毛色の区分からは現在削除されて扱いは鹿毛の一種となっている。類例は河原毛、佐目毛、斑毛など。でただのドエラい美少女になってしまうのだと。

後日人気が大爆発して本人は大変なことになっていた。

ダブルティアラな時点で大概なだけだね。

続いて、菊花賞。入念な打ち合わせと研究の結果、やはり事前に話し合つた通り作戦は逃げ切り勝ち狙いに決まった。

その結果、スカイ先輩は逃げて逃げて逃げて——オーバーペースものともせず、歴代どころか3000mの世界レコードすらぶつちぎって勝利を手にした。

菊花賞の逃げ切り勝ちというだけでも数十年ぶりのことだというのに、世界レコードともなるともう脱帽するしか無い。流石に無茶し過ぎだとトレーナーさんからは呆れ混じりに叱られていたけど。

ぼくとしては「来年これと比べられないといかんの？」と正直気が気でなかった。

いや、まあ、うん。大事なのはタイムよりも勝ち負けだし、気にしないようにしておこう……。

今回の打ち上げ兼祝勝会では、珍しいことにチーム外のウマ娘がひ

とり、これに参加することになった。スカイ先輩の友人、ニシノフラワーだ。

フラワーはぼくから見るとひとつ下の後輩にあたる。同じ学年にはスイープトウショウやビコーペガサスなどがおり、揃って期待の目を向けられている……のだけど、なんというか全体的にミニマムな印象があるのは気のせいだろうか。

このあたりはあくまで比較するとそう見えるというのが正確なところか。ぼくらの学年の方が成熟している子が多いというか……主にスカーレットとかスカーレットとか……。

なおデジたんはふたりのやり取りを見て死んだ。

一方、トレーナーさんはふたりを……と言うよりもフラワーを見てやや思案顔だった。孫でも見てるような気分なのだろうか。

サブトレさんが20代中ほどから後半に差し掛かるくらいだと考えると、サブトレさんに兄弟姉妹などがいれば孫がいてもおかしくはなさそうではある。本人はどうにもね。プライベートがいまいちわからないし、恋人がいるようにも見えな殺意を感じたのでこれ以上はやめておこう。

さて。

更に一週間経って——秋の天皇賞の日が訪れた。

この日は注目のカードということもあり、トレセン学園の生徒も大勢が東京レース場にやってきていた。まず、一番人気であるスズカ先輩のチーム、スピカのメンバー。友人のフクキタル先輩と……エアグルーヴ先輩とタイキシャトル先輩。ふたりが来ているので当然リギルのメンバーも一緒だ。

それから二番人気、メジロブライト先輩。ドーベル先輩をはじめとして、ライアン先輩やパーマー先輩などメジロ家のひとたちが大勢やってきている。マックイーンのチームとの兼ね合いもあってか、スピカと合同での応援という雰囲気にもなっている。

ドーナッツ先輩も出走するのでぼくからも応援に総動員。見学のためにか、チームとしてはそれほど関係ないネイチャとチーム……カノープスのトレーナーもやってきているようだ。

「天候は晴れ。バ場は良。絶好のレース日和というやつだね」

「超高速バ場ってやつですねぇ……」

「そう、データから見ても速く走れるから『こそ』一番怪我をしやすい環境というワケだ」

高速バ場では怪我が発生しやすい——と、一般には言われている。

とはいえ専門家の目線から言うと、これは決して正しい意見ではなく、硬いバ場だから怪我をしやすいというわけではないとのこと。近年は芝や土のクッション性を研究し、より「怪我をしにくい」環境を作ろうと努力はしているそうだ。

だから正確に言えば、バ場が原因というよりは……速く走ったその結果、脚に強い負荷がかかって怪我が頻発する。因果関係が皆無というわけじゃないにしろ、どんな状況でもこういう場所でも普通に起こりうることと言えるだろう。実際のところ、事故率そのものはそこまですべて高い方ではないと聞く。人工バ場を導入しているアメリカが怪我の防止という観点では世界トップとは聞くけど。

「まあ、あくまで可能性の話だ。そうなるかもしれないしならないかもしれない。今回はこれまでと比べて前走との間隔が短いから注意しておかないといけないだけで、今後何ともならない可能性もある」
「ですね。まずはドーナッツ先輩の応援に集中しましょう」

「しかし、私の理論は他のウマ娘に言えば怪訝な顔をされるものだが、例えばシャカール君とかね」

「データが揃わなきゃ信じる余地が無エ。普段の言動からも分かんたろ」

「そうだね。だというのにストライプ君はすんなり信じるものだね？」

「ぼくは逆に疑う余地が無いと思ってるんですよ。脚の脆さを克服した実績がありますし、トレーナーさんたちも信用してるみたいですし」

「くくくつ、だそうだよ」

「ストライプ個人の意見だろそりゃ」
「です」

「えー」

「ぼくもシャカール先輩も基本、「そういう意見もあるな」で話を済ますタイプだ。人は人、自分は自分。他人の意見を取り入れて手のひらクルクルはするけどそれはそれ、スタンスそのものまで変えることはなかなか無い。」

「タキオンⅡサンの実験に『面白そう！ やろうぜ！』と言って嬉々として参加するストライプは実際狂人」

「酷い言い草だあ……」

「悪いが否定できる要素が無エよ」

「……ですね」

「皆さん、気になるのは分かりますが……そろそろ時間ですよ」

フラッシュ先輩の言葉に促され、揃ってコースの方に目を向ける。

……いやちよつと待って、ぼくスナイパーⅡサンにも狂人とか思われてたの？ スラングの一種としてついそういう表現取ってしまったるだけだと思うけど、そこんとちよつと気になるんだけど。もしかして本当に頭のヤバい奴だと思われてない？

「ストライプ妙にショック受けてない？ 何かした？」

「イエ……」

『——スタートしました！ サイレンススズカ内側から好スタート！』

変に思考が止まっている間にレースが始まった。

想定通り、スズカ先輩がロケットスタート。これでスタートがそこそこって程度ならまだ手の打ちようもあるんだろうけど……当然そんなわけは無かった。

この状況、ドーナッツ先輩はどうするのか……と見てみれば、ほとんど逃げに近いペースで二番手の背後、三番手につけていた。賭けに近い大胆な作戦だ。スズカ先輩のペースが落ちることはまず無いと見越してのことだろうけど、これまで以上にシビアなタイミングでの「乗り換え」をしないといけないので、相当な集中力が要求されるはずだ。

「差は……8バ身つてところか」

『サイレンススズカ先頭、サイレンススズカ先頭！ 二番手ようやく見えてきた！』

最初からブツチギリの大逃げペース。本気も本気……なんてつもりは無いんだろうな、スズカ先輩だし。あれがマイペースなんだ、間違いない。

中盤に差し掛かるもペースは一切乱れない。コーナーまでもう少し。このまま千切るのか、という客席からの期待感が歓声となってそのまま表れているのが分かる。

『このまま行ってしまうのか！ 会場の盛り上がりは最高潮に達しています！』

こりやこのまま行けば完全に勝ちパターンだ。異常が起きる予兆も前兆も見えない。

ドーナッツ先輩には厳しい展開だけど、こればかりは仕方ない。そう思っていた時——大櫓の向こうで、カクンとスズカ先輩の膝が落ちた。

その瞬間、会場全体が水を打ったように静かになった。

きつと誰もが、スズカ先輩の勝ちを予感していた。まさしく、いつもどおりの大逃げで何バ身差もつけて勝つのだと。そんな確信のもとにいたせいだろうか。「それ」は観客の心により大きな落差をもつて叩きつけられた。

『——サイレンススズカ。サイレンススズカに故障発生です！』
「！！！！」

スズカ先輩の足元がおぼつかない。痛みに耐えて歯を食いしばり、ギリギリのところで転倒しないよう耐えている。

その走りは、既に「歩き」と言っても遜色ないほどに鈍っていた。コースにいる走者の殆どがその事態を理解できてすらいない。後ろから状況を見ていた追い込み型の子や、あるいは天性のセンスで状況を逐一把握しながら八艘飛びで飛び移っていくドーナッツ先輩がその事実を正しく認識できたくらいだろうか。僅かに彼女たちの走りが揺らぐのが見て取れる。

他の走者を巻き込まないためにか、スズカ先輩はよろよろとした足

取りながらもなんとか外ラチの方へとその進路を逸らしていく。しかし、このままじゃすぐにでも転倒しかねない……！

——その時、客席からコースに飛び出していく影があった。スペ先輩だ！

「スペちゃん!？」

「スペ!？」

「何やってんだアイツ!？」

「私も行こう」

「タキオン先輩まで!？」

混乱に陥る場内だが、いの一番に行動を起こしたスペ先輩のおかげで少し冷静になったのか、騒ぎと言うよりもざわつきという程度に収まった。

レースは既に4コーナーを超えて最終直線に入っている。タキオン先輩の視線に対してトレーナーさんが頷いているから競走中止ということにはならないだろうけど……タキオン先輩自身も全然冷静に見えない。

ともかく、スペ先輩にタキオン先輩のふたりとスピカのトレーナーさんも向かっているなら、これ以上誰かあの場に行っても邪魔になるだけだ。

状況は把握しているだろうし、URRの職員が担架も持っていてくれるはず。

あとはどうするべきか……と考えても、この状況でできることは多分無い。タイキ先輩が「N O ぐ!!」と悲痛な声を上げながらコースに飛び込もうとしているのを食い止めている副会長を見習って、コースに入り込もうとしている人がいたら止めるために動こう。

・・・≠・・・

スズカ先輩はそのまま救急搬送されることになった。

気を取られたドーナツツ先輩はわずかに順位を落としたものの、結果的には3着。上々と言える着順ではあるんだけど……本人は色ん

な感情がまぜこぜになっただけなのでこの結果には触れられたくはないようだった。下手に触れたスナイパーはメンポどころか上着まで剥がされていた。

——さて、天皇賞の翌日。

天覧試合ではなかったとはいえ、G1の天皇賞の舞台だ。勝手にコースに入ったことで（理由が理由だけに処罰こそ無かったものの）URAの偉い人からスベ先輩とタキオン先輩、それから両トレーナーさんがお叱りを受けているその頃、ぼくはスピカの部室に拉致されていた。

「フオッフオッフオ……我が名はゴルゴル星人……貴様はこれから中山3600m星人に改造され人類に牙をむく存在となるのでゴルシ」
「イヤアアア！ ニツチ需要すぎて特殊ギミック解かないと倒せない系のクソボスみたいになれちゃうううう！」

「今真面目な話をしようとしているのですからやめていただけませんか？」

「でもよおマックイーン、真面目な話すぎるとどこかで息入れねーと潰れちゃうぜ？」

「話の最初から息を入れてどうしますの!？」

「諦めなよマックイーン、麻袋で拉致ってる以上いきなり真面目には無理だよ」

状況が状況だけに真面目にやれというのは分かる。がしかし、ぼくも一日気を揉んでだいぶ胃が痛いので少し心を緩めたい。

ただでさえどこでも今は皆が気を張り詰めすぎなくらい張り詰めてるし……。

「というか何でぼくが拉致られたの？ そこはトレーナーさんたちとかじゃない？」

「そつちをしたら冗談じゃ済まなくなるじゃん！」

「先輩たちにやんの失礼だしな」

「で、一番気軽に話を聞けて、いつの間にか事情を知ってそんなストライプが適任かなって」

「印象だけで話を持ち込まれても困るよー」

「それは……そうですわね」

「知ってるけど……」

「知ってるんじゃないか!？」

麻袋にくるまれたミノムシ状態のまま、その場で転がって逃げようとした……が、すぐにテイオーに捕まってしまった。

「ボクたちだつてスズカのことが気になるのにさ、付き添いで話聞きに行つたスペちゃんは今帰つてこれないし」

「明日になったら公式にも発表されるんだから待てばいいのに」

「ふーむ、ストライプがこの反応つてことは、さてはあんまり深刻な状態じゃないつてことだな?」

「ギクツ」

「口で言ってるじゃない」

「教えたのか教えたくないのかどっちだよ」

実は先日タキオン先輩から状況について耳にはしている。ただ、それを教えるというのは強い抵抗を感じる。だって明らかに個人情報だもの。

そろそろ事業を法人化しようかと考えているところで、個人情報をおもらしという明確なコンプライアンス違反はよろしくない。

「個人情報情報を漏らすのはコンプライアンス的にちよつと……」

「気にするところそこ!？」

「分かりましたわ。つまり個人情報を漏らさない範囲でなら教えられるということですからね!？」

「E x a c t l y」

「復帰はできそうなの?」

「後遺症が残るかは運だけど体の方は大丈夫だと思う」

目に見えて皆がホツとしたのが見て取れる。

これについては、実のところ内心の驚きは半端なものではなかった。あれだけの速度を出したとなれば、足根骨の粉碎骨折というものもありえないことではなかったはず。

しかし実際には、これは衝撃を吸収する部分……中足骨及び舟状骨の単純骨折に終わった。手術ということにはなったけど、骨移植なん

かの治療に数年を要するほどのものじゃない。発見から処置までも早かったので、よつぽどのが無い限り数ヶ月あれば復帰は見込める……と思う。

毎日王冠から秋の天皇賞までの間隔は非常に短い。思うに、補強をしようと思っても限度があった……と同時に、休息を取り、筋トレなどに力を入れて負担を軽減しようとしたことは間違っていないのだから、対策が功を奏したのを喜ばしいのやらという複雑な気持ちだ。ただ……。

『体の方は』……か？』

「……です」

「どういうこと？」

「……体は治っても、心の方は……ということですね」

人間もウマ娘も、心というものは複雑にできている。

一見何でもない風に見えたことがそのひとつにとって強くトラウマとして刻まれることはあるし、逆もある。

スズカ先輩にとって、「走れなくなるかもしれない」というのは——
いったいどれほどの恐怖だろうか。

若草色の外套

——サイレンススズカがレース中に骨折。術後の経過は良好だが、復帰時期は未定。

関係各社の報道で、このニュースはまたたく間に日本中を駆け巡った。

鮮烈な大逃げで観客を魅了したスズカ先輩の脚に故障が発生したという事実に対する心配と、引退の危機というわけではないということへの安心。一方で、復帰時期が未定であることへの不安……発表された公式情報で感情が乱高下したせいで情緒がグチャグチャに破壊されたファン（デジさんとスぺ先輩含む）の姿が日本各地で確認されたが、ひとまず完治すれば十分復帰は可能ということで、トレセン学園では大きな騒ぎにはならなかった。

スぺ先輩がこれまで以上にスズカ先輩にべったりになってしまったのだが、そこはぼくらの関与できることではないので置いておこう。

ともかく、トレセン学園がいつもの様子に戻ってきて、次のレースの対策を本格的に進めるようになってきた11月中頃のことだ。

「ストライプ、勝負服が届いたので試着してみませんか？」

「勝負……服……？」

「ストライプ今一瞬本気で何のことか分からない顔してなかった……？」

「オヌシ、ウマ娘としてそれは……」

「独特な感性なのは把握していましたがここまでとは……」

——そういえばそんな話があったのを今更ながら思い出した。

色んなことが起きすぎていたものだから記憶の彼方に消えていたようだ。ウカツ！

自分専用の勝負服ともなれば、普通のウマ娘は今か今かと到着を待ちわびるものだ。親戚などに勝負服姿の写真を送る伝統があるよう

に、普段何気ない風でいても勝負服となると強いこだわりを見せる子がほとんどだ。

普通ならもつと、仮に忙しきで忘れていたとしても反応はすこぶる良いのだろう。ぼくみたいに「あ、そっすね」とばかりに素っ気ないことにはならないはずだ。

と言つてもなあ……半年近く後まで塩漬けになるしなあ……。理屈は分かっているんだけど。仕立て直しか時間かかるんだろうし。

「とりあえず試着をしてきてください」

「はい」

部室に戻って見てみると、デザイナーさんから届いた勝負服が分かりやすく置いてあった。

注文を付けた部分は問題なくデザインとして組み込まれており、あとはデザイナーさんの感性のもとで落とし込まれてブラッシュアップされているようだ。

「あれ、ショートパンツじゃないんだ……」

事前に見せてもらった図面だと違ったのだけど、見栄えを重視したのかスカートになってる。まあ下はスパッツだしいいか……とまづ下を穿いてみることにした。

……うわ、短い。膝上何センチだろうこれ。スペ先輩たちの勝負服見たときも大概同じようなこと考えてたけど……ん？ いや制服の時も似たようなものか？

ケニアの国旗のイメージと伝えていたけど、赤色はここに持つてきたようだ。チエツク柄なので目立ちにくいけど。

「えーつと……上がこうで……」

上着は灰色のシャツだ。黒の方が見栄えがするんじゃない？ と言われたけど、ここは何故か譲ることができなかった。主にほぼ同化しているはずなのに時たま独立して心の中で暴れてくるシマUMAのせいだ。今回は「シマウマの地肌は灰色!!」と強硬に主張されて酒瓶で殴られた幻覚を見た。

正確には黒に近いグレーだ。ちなみに同じシマシマでも、虎は地肌

にそのまま縞模様が浮かんでいる。

説明書を見ると、面白いことにきつちり着こなすのではなく裾を外に出して少し着崩すように書いてある。その上で、胸とお腹の境目あたりに黄色いクロスベルトを巻いて締める。元々が細身なのに更に締めていいのかと思わないでもないけど、まあ置いとこう。こういうのはこう、強調するものなんだろうし。なんじゃないかな。だよな？

このクロスベルトには、小さなポーチがいくつか付けられるようになっていて。その内のひとつはサバイバルナイフ（模造）を収納することでそれらしい雰囲気が出せるようになっていてるそう。他のポーチには小物を詰めてもいいし空のままでもいい。要は雰囲気作りのための小物だ。フクキタル先輩の巨大猫カバンのようなものだ。

あとは若草色のカンガケニアで広く知られる一枚布。民族衣装よりも風呂敷など布として用いられることが多かった。衣服として着用されるようになったのは19世紀以降。を模した柄の外套を羽織って……。

「なるほど？」

狩人、とイメージを伝えていたのだけど、どちらかと言うと近現代的な……フィールドワークをしている冒険家だったり、猟師……軍人的なテイストがあるようにも思える。

あとはブーツに履き替えるんだけど……いやしかし、がつつりと本格的なブーツだな。これで本当に走れるのか？ そう思って脚を通すと——あ、すごい。シューズ履いてるとそう感覚が変わらない。

会長とかスベ先輩とかの靴見ててだいぶ疑問が強かったのだけど……ヒールついてたり明らかにレース向きじゃない靴履いてるのにあれだけ走れるのは、そのためにオーダーメイドして更にはそれ専用の特殊な素材なんかを使っているおかげだろう。特殊な作成技術を使ってもいそうだし……時間もお金もかかるわけだ。

よし、とにかく着替え終わったのだし、サブトレさんたちに見せに行こう。

「お待ちせしました〜」

「うわ胡散臭」

「絶妙に怪しいですね」

「ストーリーの後半で裏切るやつだな。ワタシは詳しいんだ」

「ハハハ毎度コレだよ」

衣装のことよりぼくの第一印象の方が先に来てる。もう慣れたけど。

せめて似合うか似合わないかを先に判断してほしかった。

「ちなみに裏切るというのは？」

「狩人を装って近付くが実は敵国のエージェントなのだ。妙に整った装いのマントの下がその伏線というわけだ。ウカツ！」

「離脱して再登場したら敵国のマントを羽織ってるわけですね」

「うむ」

いえー、とぼくらは軽いノリでハイタッチを交わした。

スカイ先輩はたまにあるよねそういうの、と納得しているようだが、一方でサブトレさんは珍しく困惑している。

「サブトレさんはこういうの、お馴染みじゃありません？」

「ゲームとか漫画とか」

「あまり学生時代から縁もなく……」

確かに疎そうと言えば疎そうなところはある……いや、タキオン先輩の謎の薬を一気飲みするような色々振り切れた人なんだけど。それとは別に生活感が薄いというかあまり俗っぽさが無いというかプレイヤーが想像できないので普段何してるのかも全然分からない。

言っちゃなんだけど、特別な趣味があるように見えないし、何かと効率を求めがちだから、休日を送るにしても目的が無いと落ち着かさそうだ。一日中掃除とか手間のかかる凝った料理とか資格試験の勉強とかしてそう。

「学生時代もそういえば友人に『お前つまんねー奴だな』とか『一緒にいると息苦しい』とか言われたことがありますね……」

「よしー…この話やめよう！ やめやめー！」

想定外の闇が垣間見えてしまった。

どうするんだよこの空気。いや半分はぼくのせいでもあるな。よし、トレーニングに戻ろう!!

「ところでサブトレさん、勝負服を着たからにはそれなりのトレーニングをするんですね！」

「あ、はい。そうでしたね。いきなり併走などをするわけにはいきませんので、まずはストレッツチなどで体が十分動くかどうかを見てみましょう」

スナイパーサンとスカイ先輩が露骨にほっとした様子を見せた。それからしばらく、体を大きく動かす柔軟などをして、動きに干渉しないことを確認した後、坂路、併走……と順番にやっけて、走りに特に支障が出ないことを実証した。

というわけで、勝負服についてはリテイクが出ることなくこれで最終稿となった。

言外にもつとこだわれという旨のことを言われた。

解せぬ。

・・・≠・・・

今年の秋のG1戦線は色んな意味で波乱続きだ。

まずタイキ先輩がプリンターズステークス1998年当時のスプリンターズカップは12月開催だが本作のレーススケジュールはアプリウマ娘準拠のため10月上旬開催。でまさかの敗北。ここまですべて一戦を除き無敗で来ただけあってファンに与える衝撃は大きかったが、一着とのタイム差が無いので単に負けたと言うのも憚られる激走ではあった。

秋華賞はえらい番狂わせが起き、菊花賞はスカイ先輩が大レコード。秋の天皇賞は……言うに及ばず。

エリザベス女王杯では直前のインタビューで「女帝」エアグルーヴ先輩を超えるドーベル先輩が宣言。そしてその言葉通り、ドーベル先輩が激戦を制して新たな女王の座についた。……で、その翌週。マイルチャンピオンシップに出走したタイキ先輩がこれに勝利。同一G1の連覇という快挙を果たした。

特に副会長とタイキ先輩、ドーベル先輩は天皇賞の後は凄まじい気

迫で……理由については、言わずもがなというところだろう。タイキ先輩についてはスプリンターズステークスでの敗北があつて、あるいは能力的にピークアウトしたのか……とも思われたのだが、そんな素振りも見せないほどの快走だった。

さて。マイルチャンオンシップの翌週といえば、ジャパンカップの開催日だ。

海外からの招待選手もやってくる、日本最大級の……それこそ有馬記念と並ぶほどの賞金額を誇るレースだ。当然、ファンからの注目度も高く、ぼくも将来的には——レース名的な意味でも——ぜひとも出走して勝って賞金をいただいてぬはははと……話が逸れた。

ともかく、ジャパンカップは世界の強豪が出るということもあつて多くのウマ娘にとつて憧れのレースなのは間違いない。

もつともぼくはその前日に京都にいて当日応援に行けるかさえ分らないのだが。

(レース選択ミスだったかな……いや応援に行く行かないで出るレース決めるわけにもいかないけど)

例年、京都ジュニアステークスはジャパンカップの前日開催だ。

ウイニングライブは夜、それこそ寮の門限近くまでやってることもあるアニメ1期1話でスペシャルウィークがウイニングライブの後に行くと締め出されたため。ので、関東近縁での開催じゃなければ外泊許可を貰って翌日に帰る、というような流れが一般的だ。無理に強硬策で帰ろうとすると疲れが溜まって怪我に繋がりがねないし、いくらトレーナーという保護者がいるとは言つても、それだけ遅い時間に出歩くのはやっぱり避けたほうがいいというのもある。

関西での開催だと、全日程を終えたら急いで帰ったとしても12時回るんじゃないだろうか。

「今日は表情が硬いですね」

コースに向かう地下バ道の中。ふと、唯一こちらについてきてくれたサブトレさんがそんなことを聞いてきた。

「いや……明日どうしようって」

「せめて重賞の舞台を前に緊張してたくらいのことを言ってください

……」

「緊張はしてますよ。表に出す理由が無いだけで」

レースはいつも緊張の連続だ。作戦にハマってくれなかつたら当然負けだし、ハマってくれても結局そのまま実力でブツ千切られると負けだ。

なんとか今は勝ち続けられているけど、負けてしまったらと思うとやっぱり怖い。だから当然緊張はする。表に出して相手に知られた時、勝敗に直接関わってくるから可能な限り緊張していると云ったり表情に出したりはしないだけで。

「今日はメジロ家の……メジロパーマーが出走すると思ったのですが。警戒などは？」

メジロパーマー。メジロ家に所属するウマ娘のひとりで、逃げウマ娘としても知られる先輩だ。

前走となる萩ステークスでは調子を落として9着だったものの、メイクデビューで2着、未勝利戦ではもう一度2着……その後勝ち上がりに成功し、その次のOP戦でも勝利。今回の人気こそ低迷してはいらぬものの、侮れない相手であることは間違いない。

「パターンはいくつか考えてますけど、出方次第としか。ただ……今回はちよつと普段と違う方針で行こうかなと。せつかく逃げウマ娘相手ですし」

相手にとって不足はないとかいかいっそぼくの方が萎縮しそうになるくらいの相手だけど、今気にしても仕方ない。

今回は勉強させてもらうつもりで……それでも勝つつもりで当たろう。

手回し充電器

実はパーマー先輩についてぼくが知ってることはそう多くない。気さくで面倒見が良くマイペースで、人柄も相まって 単にメジロ家という枠組みに留まらず多くの後輩に慕われている。

ぼくはマックイーンの繋がりで話すことがたまにあるくらい……というところだろうか。

脚質は逃げ。メイクデビューからの2戦は残念ながら2着に終わったが、これは前目に付けるセオリー通りの先行策を取っていたせいという部分が大きく、その後本格的に逃げをするようになってからは2連勝している。

(とはいえ、前走じゃ9着。安定してないと言えば安定してないかも……)

前走となるOP戦では、展開に蓋をされて先行策を取らざるを得なくなった結果、9着。本質的にバ群の中に入れられるのが肌に合っていないように見受けられる。

(調子の浮き沈みが激しいひとなのは間違いない。だからそこを叩く)

別にレース外で相手の調子を下げてやろうという思惑は無いけど、レース中になれば話は別だ。

弱点が見えているのなら、そこを狙わない理由はない。グツとターフの上で軽く柔軟運動をする。

「ん、ストライプ?」

「……パーマー先輩?」

と、そこで不意に、横からそのパーマー先輩本人に声をかけられた。ちようにど作戦を練つてるところに話しかけられたから、うぎゃあ。完全に何か出したくないもの剥き出しになってる。闘志とか。ぼくは普段から何やらぼんやりしてる風に見えるキャラで通してると言うのに。

「あはは、マックイーンと話してる時と全然雰囲気が違うから思わず

話しかけちゃった」

「すみません、レース前で気が昂ぶっちゃってて。今日はよろしくお願ひします」

「うん、よろしくね……」

「……どうかしました？」

「ううん、何か仕掛けてくるのかなって思ってた」

「ここ最近皆さんからの扱ひが本当にひどい」

「ごめんごめん」

そう言つて立ち去るパーマー先輩の足元に、ぼくは何やら小さな違和感を覚えた。

具体的に何がどう違うのかは言語化し辛いが、何度もレースの映像を見ているので「何か違う」ことだけは分かる。

ぼくは迷うことなく、客席にいるサブトレさんにとととと駆け寄って行った。

「すみません」

「どうしました？ もうそろそろゲートに入らないと……」

「パーマー先輩のこと注意して見ててくれませんか？ ぼく、スタートしたらそれどころじゃなくなるので」

「？ もちろん、メジロ家の注目ウマ娘として見てはいますが……」

「もうちよつと深めにです。お願いします」

「……分かりました」

頭を下げた後、急いでゲートに戻って係員さんの誘導に従つてゲートインした。

金属製のゲートに囲まれていると、その無機質さのせいか、スツと頭が冷えて歓声が遠のいていくような錯覚を得た——が、それに抗うように尻尾を一回転。体を大きく動かすこと無く、全身に血を巡らせる。

他のウマ娘の体格じゃこうはいかなそうだ。尻尾ぶつかつちやうだろうし。ぼくの方がゲート広いデース。なんちやって。

さて——。

『各ウマ娘ゲートイン完了』

グツとターフを踏む。晴れの良バ場。個人的に稍重かもうちよつと行ってくれた方が望ましかったが、仕方ない。どっちにしるやることは変わらない。

『——スタートしました』

ゲートが開くと同時にダン、と足元が爆ぜたような音とともに前に踏み出す。パワー任せのロケットスタートだ。

『一斉にスタート、おっとまずいいスタートを切ったのはサバンナストライプ。これは予想外!』

「うぐっ」

「うーわ」

『前走ではじわじわと上がっていくタイプのレースをしていましたが、これは大胆な方針転換ですね』

背後から漏れ聞こえてくるうめき声にぼくはほくそ笑みかける。いやちよつと表に出ちゃった。まあいい。

重賞クラスになると、競争相手の下調べをするくらいのは常識だ。シードリングカップのことも知っているひとはいるだろうし、ぼくについて調べていれば「逃げると見せかけて引っ掛けに行く」ような走りをしていたことも容易に知れる。

そうでなくとも前走から前々走のこともあり、何をしでかしてくるか警戒してくるひとは多いはずだ。

どうするも何もぶっちゃけ普通に逃げを打つだけなのだけだ。

今回、相手がパーマー先輩に決まった段階で、こちらも逃げを打つという方針が固まっていた。ドーナッツ先輩がスズカ先輩と走ることが決まってきたらと言うもの、対逃げウマ娘の戦術は何度となく立て（させられ）てきたんだ。これはそのうちのひとつだ。

強引に前に出ること展開にフタをして、後方に睨みをきかせる。相手を前に行かせずに強制的に位置を下げさせることで、先行策を取らざるを得ない状況に追い込む。慣れないことをすれば当然パフォーマンスは落ちるが、それを嫌がって前に出ようとするならそれこそ狙い通り。誘いをかけて超ハイペースの消耗戦にしてしまえば、

スタミナに勝るこちらに分がある。

本来、ハイペースで流れるレースは前にいるウマ娘ほど苦しい展開になるものだ。これについてはターボが良い例だろう。早く前に出すぎるとそれだけスタミナを消耗してしまい、後半で脚が残らなくなってしまう。後ろで控えていた差しや追い込みのウマ娘にとつて——よつぽど前と差がついて追いつけないという状況でない限りは——ハイペースな展開というのは望む所だと言えよう。

一方、スタミナと回復力だけは頭二つ分くらい抜けているぼくなら、ハイペースな展開になつたらむしろチャンスだ。スタミナが枯渇して速度が落ちるということは無い。ペースを維持し続けてむしろ他のウマ娘の脚を「残させない」ということができる。

逃げウマ娘というのは派手で見栄えこそするが、特に考え無くそれで勝つというのは非常に難しい。もちろん、有名なウマ娘の中には逃げウマ娘が何人もいるが、身もふたもないことを言うとならばただその本人が特別に強いだけだ。スズカ先輩やマルゼン先輩や狂気の逃げウマ娘や……。

並外れたスタミナと恐ろしく高い身体能力。世代の中でも一つ以上抜きん出ているから、結果的に逃げが有効になっていると言えるだろう。

パーマー先輩はそうじゃない……というわけじゃない。ただ、現時点で高い能力こそ持ち合わせていても、メイクデビューやその後のレース結果を見る限り、「まだ」マルゼン先輩たちほど傑出しているわけではない。

出自とデータ、それからぼくの知る限りの情報から考えるにパーマー先輩は晩成型。かつレース内容が本人の調子に大きく左右される振り幅ムラ幅の大きいタイプ。将来的に大きなレースで活躍するようになるにしても、それは多分今ではない。

罫にはめるなら調子が下り坂になっていて、成熟しきっていない今こそがチャンス。逃げられるのは苦手だけど、ぼく自身が逃げをするのはむしろ向いている方なんだ。消耗戦だって望むところ。あとは誘いに乗ってくるタイミングだが……。

『序盤ですがレースは縦長の展開です。後方に位置取るのはアカシミツリン、ドリームストラグル、メジロパーマーは最後方にいます』

だが……………今なんて？

『出遅れでしょうか。これは厳しい展開』

最……………後方？ 作戦か？

いや、そんなバカな。ここまで逃げで勝ってきてる以上、差しや追い込みのように鋭さが求められる走りは根本的に向いてないはず。

そりゃぼくやゴルシ先輩は差しや追い込みでもじわじわ上がっていく「鋭くない」タイプだけど、脚質煽りとか脚質ゴルシとか言われるくらいセオリーから外れたことができる土壌があることが大前提のはず……………。

『先頭のサブナナストラライブ尻尾が緩やかに回って一人旅』

『手回し充電器ですかね？』

『余計にスタミナを消耗してしまいそうですが——向こう正面、大きな動きはありません』

——それにしてもびつくりするほど誰も乗ってこない。

どうしよう。思ってたんと違う。確かに、セーフティリードを取って最後まで追いつけない状態に持ち込んで逃げ勝つ、というのは逃げの勝ちパターンのひとつだけど、計画してた展開とまるで変わってしまう。このままでもいいのかぼくは！

揺さぶられるという意味でならばぼくは今まで走ってきたどのレースでも経験したことないようなレベルで動揺しているぞ！

（——それよりも、ここで坂！）

余計な思考を打ち切る。

京都レース場の最大の特徴は、コーナーで待ち受ける急坂だ。

内コースで高低差最大3.1メートル、外コースでは最大4.3m……………特に長距離コースにおいては二度これを上り下りしなければならぬため、淀の坂と呼んで恐れられている。

内外ともに3コーナーの出口に急な下り坂がある。勢いがつけられるから仕掛けどころではあるのだけど、同時にその角度ゆえに非常

に怪我をしやすい。負担を避けてレースを安全に進めるためにも「慎重に登り、慎重に降りる」ことがセオリーとされている。近年では下りで勢いをつけてそのままゴールになだれ込む手法が確立されたりとそのセオリーも見直されてきてるけど……よっぽどのが無い限りは、やはり常道が安全だ。ほかの人もそうするだろうし差が縮まることはまず無い。今回もそうするようトレーナーさんたちから指示を受けているので、速度を少し落として登りに入る。

(……流石にそろそろ警戒するどころじゃなくなるはず)

レースもそろそろ後半戦だ。意図せず余裕を持ってレースができていたとはいえ、後方待機勢はそろそろ進出を開始してくるはず。

鋭く切り込めば差し切られることは十分ありうるし、何よりここは重賞の舞台だ。深読みしすぎて萎縮したままでは終われない、と考えるだろう。

ぼく自身だってそうだ。このまま勝つにしろ負けるにしろ、こんな不完全燃焼のままでは終われない。

仕掛けどころは——坂を降り切った、ここー!

『さあ後続も続々と4コーナーへ、ここで先頭サバンナストライプが加速! このまま逃げ切ってしまうか!』

さあ、正直そこはどうだろう……と思う。

加速はした。しかしそれは下り坂に入って減速した直後の落差のせいで急加速したように見えるだけで、本質的に速度はそれほど変わってない。

だからもう後ろの方から足音が聞こえてくるし、痛いくらいに視線が突き刺さって背筋に軽く寒気を感じている。

(最終直線……来た!)

ひととき歓声が大きくなるのを肌で感じ取る。

京都レース場内回りの直線はおよそ328m。短いと言われている中山レース場と比べてもそう大差はない。

しかし、中山とは異なり京都レース場の直線はほぼ完全な平地。坂で余計にスタミナを削られることが無いこともあって、末脚自慢の差しや追い込みといった脚質のウマ娘にとっては絶好の環境だ。ぼく

は坂とか欲しい。もつとパワーが必要なコースください！

『さあ上がってきたぞ2番人気プライムタイム！ 後方からはアカシ
ミツリン良い脚だ！ 更に続けてドリームストラグル！ 先頭は苦
しくなってきたか！』

——まさか。

胸中でそう否定し、ぼくは両脚の状態を確かめる。

問題ない。やっぱり2000mだとぼくにとってはやや短い気がする。

「くっ、うああああ！」

ゴール板まであと少し……そこで後ろから栗毛のウマ娘が鋭い差し脚で迫る。

このまま行けばゴール板にかかる直前で差し切られるだろう——
このままならば。

ぼくは、僅かに自分の速度を緩めて相手に前に行かせた。

「っ!!」

そして、ここで最後のひと押しをかける。

差し型のウマ娘は、よほど自分の走りに集中していない限りは一瞬でもトップに立つとソラを使う気が散って集中力を欠くこと。ことが多い。ゴール目前なら尚更だ。

一瞬の緩みを招くために、スピードを落とす。本来なら自殺行為そのものだけど、一瞬の加速でトップスピードに乗せられるべくにとつてはあまり関係無い。地面を蹴りぬくような一瞬のインパクトで再加速し、前傾姿勢になることで体勢有利の状況を作り出す。

「二段階加速！」

客席から驚いたような声が聞こえてきた。観戦に来ていたマツクイーンのようなのだ。

普段野性を縛っている理性もこの時にはもう全力全開を發揮したことで焼ききれていた。手札を見せることになってしまいかも、という懸念は既に頭に無い。

残っていた体力全てを解き放つかのように、一気にこの加速に全力を込めて——。

『ゴオオールツ！ わずかに体勢有利か!? ……出ました！ 一着は半バ身差でサバンナストライプ！ メイクデビューから無傷の3連勝、そして重賞勝利です!』

駆け抜けたその先で、勝利を報せる言葉を聞いた。

片腕を大きく掲げて、緩やかにスピードを落としながらコースを走る。

重賞、初勝利。表情に露骨に出しはしないまでも、その事実之心が躍動して思わず笑みが溢れる。まだまだやれるぞ……なんてのは流石に言いすぎだけど、そのくらい活力が満ちてるのが分かる。

——そんなぼくの表情が凍りついたのは、その直後。ゴール板を超えてから速度を落として膝をつくパーマー先輩の姿と、場内に入ってくる救護員や担架を見た時だった。

既に大変なことにはなっていた

スズカ先輩の件が強く心に残っていたせいか、ぼくは思わずウイニングランを放り出してパーマー先輩に駆け寄っていた。

「だ、だ、大丈夫ですかパーマー先輩！何があつたんですか!？」

「うわっ、びつくりした!? そんなに焦るなんて珍しいね、あはは……痛っ」

「言ってる場合じゃないですってば!」

「パーマー!」

うわあどうしよう。脚が痛むってことは怪我してる可能性が高い。けど状態がイマイチわからない。

こうなると、今迂闊に動かすのは危険だし……とオロオロしていると、客席の方からマックイーンやパーマー先輩のトレーナーさんがやってるのが見えた。更にうちのサブトレさんも、救護班の方々を引き連れてやってくる。大事になってきた、ということが否応なく感じ取れてしまった。

——やっぱりというか当然にというか、それからぼくに何かできるということとは、結局なかった。

ウイニングライブはなんとか気を持ち直……そうとした。外見は少なくとも取り繕ってた、と思う。けどいつもならダンスの時などに揺れているという尻尾が完全に萎びてた(※テイオー談)とのことで、思ったよりショックを隠せない自分の体が少し恨めしく思えた。

さて、何はともあれ翌日のこと。ぼくは前日から引き続き京都にいた。ジャパンカップの観戦も考えたけど……パーマー先輩のことがあつたことでちよつとショックが強くて帰るところじゃなかったものもある。

ちなみにサブトレさんはウイニングライブを見届けたらジャパンカップのために東京に帰った。

トレーナー寮は門限無いんですからそつちに一緒に行つて泊まればいいじゃないですかくなんて冗談めかして提案などではみたく

ど、前にそれやった人が本気で怒られたとこのことでこの手は使えない
そうな。……やったの？ マジで？

……まあそれは置いとこう。

しかしながら、ぼくは（内情はともかく）実年齢はまだ14。義務
教育真っ只中の中等部だ。それをひとり京都に置いて帰るわけにも
いかないとのことで、今回はある人たちに預けられることになった。
ちようど一緒に京都に来ていたメジロ家御一行様である。

マックイーンが友人ということと比較的簡単にツテを辿れたのも
あるし、保護者役に執事さんがいるので安心、というのもある。相手
方も快く受けてくれて助かった。

これでぼくはメジロストライブ！ ……嘘です。

今回やってきていたのは、マックイーンと執事さん、それから同じ
クラシック級のライアン先輩だ。ドーベル先輩とブライト先輩は、次
の有馬記念に向けて調整中——あと半分くらいドーベル先輩がエア
グルーヴ先輩のジャパンカップ観戦に行きたいのもあると思う——
だ。

時刻はお昼。そろそろ昼食にしようということ、執事さんやマッ
クイーンたちのご厚意もあってご相伴にあずからせてもらうことにな
ったのだが……。

ハウマツチ
「時価……？」

「どうしましたのストライブ？」

「ごめんねマックイーン、ぼく今脳が情報を処理しきれてないの」

——やってきたのは、テレビなどで芸能人が番組の企画などで行く
ような非常にお高いお店だった。

想定しておくべきだった！ メジロ家が行くんだからそういう格
調高いお店になると！

……いや、確かにこう、心の片隅にへっへっへ普段食べられないよ
うな良いものを人のお金で食るとか最高でゲスなあへっへっへ
……みたいな気持ちがちよっとでも無かったと言うと嘘になる。

なるけども、想像を超えた代物をお出しされるとそんなゲスな心が
一撃で粉碎されて申し訳無さと恐縮で心がいっぱいになってしまっ

た。我ながら器の小さいヤツ！

「お決まりになりましたか、ストライプ様」

「え……ええつとお……」

レースの時よりも頭がフル回転してる気がする！

もう少し待っててください、と言つても執事さんは特に気にしないだろうが、少なくともぼくはメタクソに気にする。

どうする!?

安いのにしてしまうとそれはそれでメジロ家のメンツに関わるし、かと言つて遠慮しなければいけないでぼくの方の品位に関わる。ちようどいい感じでかつ相手に気を使わせない感じの選択肢は……!?

「———こういったお店に来るのは初めてなので、マックイーンと同じものを頼んでみたいです」

「あら、私？」

「ほほ、かしこまりました」

にこやかにそう返して注文を告げに行く執事さん。ぼくはその裏で服の下にすごい冷や汗をかいていた。

冬目前で良かった！ 上着脱いだら絶対大変なことになってるよ

コレ！

「震え、隠せてませんわよ」

「ひゅい」

既に大変なことにはなっていた。

「……あつ、そうだ。ストライプ、パーマーのことはありがとう！」

「ひよえつ？」

と、そんな折にふと、努めて明るい声を出すようにして、ライアン先輩がそんな話を振ってきた。

「パーマー先輩のこと？ ……つて、そんな、ぼくは何か違和感あるなあ、くらしいのもしか……」

「それが大事なんだよ。パーマーのトレーナーさんも、いつも一緒にいるのにつて落ち込んでたけど……いつも一緒にいるから気付けないことだつてあるしね。筋肉の成長だつて自分じや分からなかったりするし」

「あ、はい……はい？」

「だいたい、コースに出ている以上何かできるならその方が驚きですわ……」

「筋肉の件はスルーなんだね。でもさ、気付いたのに何もできなかったって悔しいよやっぱり」

野性の動物じゃないんだ。怪我したらほっとくなんて情情的にもできない。

かと言ってあの場で素人が余計なことをしようものなら、その方がもつと酷くなる可能性もあり……なんて言っても堂々巡りになるだけか。話を換えよう。

「ところで、パーマー先輩の具合は？」

「骨折。だけど、早めに処置したおかげで後遺症は残らないって」

「少し頑張りすぎですわね。レースもトレーニングも……このままですとクラシックは……分かりませんが、走れるようになるまではそう遠くないでしょう」

「そっか……」

安心した、と軽々しく言っているのかわからないけど、選手生命に大きな影響が無いのは良かった。

しかしこう短期間に何人も故障が発生してしまうと……しかもそれが知り合いだったりすると、思った以上に気が滅入る。

……というか、ちよつと話をするくらいのはよくですらこうなんだから、同じチーム、同じメジロ家なマックイーンなんてどれくらいのシヨックなんだろう。ライアン先輩も努めて明るく振る舞ってはいるが、内心で心配してるのを隠しきれてはいないし……。

「お待たせいたしました」

差し出がましい心配かな、と思っていると店員さんが料理を運んできた。華々しくあり、しかし過度にきらびやかなのではなく上品な程度に収まった創作和食のようだ。

それが一皿、二皿、三皿……ん？

「……………」

「……………」

店員さんに余計なことを言わないように、しかし視線でマックイーンに語りかける。これ多くない？

ふいとそのまま目をそらされた。ははーん。やけ食いだな？

「では、ぐゅっくり」

店員さんが離れた後、少ししてライアン先輩がマックイーンに尋ねる。

「……マックイーン、確か体重が絞れなくってデビューできなかったんじゃない……」

「ん？んっ！」

「あとぼく同じもの食べるって言ったんだけど……」

「……あなたも私と同じ気持ちだと信じていますわ」

「言葉は綺麗なんだけど使う状況がなあ」

要は「やけ食いしてストレス発散したいけどあなたも同じ気持ちですわね？」ということじゃん。

いや同じ気持ちなこととはそれほど間違っではないけれども。

「もしかしてマックイーンの方がクラシック危うくない？」

「うぐっ……」

「体重落とすためにトレーニングしてたら脚痛めるし……」

「余計なことを言わないでくださいまし……」

こりやまだしばらくデビューは無理っぽいな……。

その後はライアン先輩たちに少しテーブルマナーなどを教えてもらいながら、生まれてはじめて食べるような高級料理を食べることになった。

が、ドえらい美味しいことは分かる、のだけど、それはそれとしてぼくの貧乏舌ではこの複雑な味わいは上手く言語化できないし、あと緊張で微妙に味が分からなくて完全に味わい尽くすこともできなかつたようにも思う。

……次はもつと舌が肥えてから行こう。うん。

……#……

ジャパンカップは結論から言えば大波乱だった。

まず一着に今期まだクラシック級のはずのエルコンドルパサー先輩。クラシックでのジャパンカップ制覇は日本トレセン史上初の偉業だ。以前から「世界最強」を豪語していたエル先輩の実力がその言動に恥じないと証明したと言っただけだろうか。

二着は同じリギルに所属しているエアグルーヴ副会長。オークスと同じ2400mということだけあって有力候補だったものの、今年に関してはエル先輩が一枚上手だった。

そして三着は、エル先輩と同じくダービーウマ娘のスペ先輩。絶好の距離だったのは間違いないんだけど、スズカ先輩のことを気にしすぎて気もそぞろ。とにかく走りづらそうにしていたのが印象的だ。

……で、ドーナッツ先輩は四着。あの顔ぶれ相手に入着は大したものなんだけど、いかんせん本人は全然納得できてないというか目に見えてわかるくらい荒れて悔しがっていた。気持ちは分かるけどぼくの耳みよんみよんするのやめてほしい。伸びる。

ともかく、うちのチームとしては今年の大舞台が残すところあと有馬記念だけとなったある日の練習後のこと。

「アタシ有馬で引退するわ」

——ドーナッツ先輩は突如としてそんなことを言い放った。

ビックリして思わず声を上げてしまったのはぼくを含めスナイパーサンくらいのもの。他の皆はある程度予想していたらしく、反応はむしろ納得のそれだった。

「分かっちゃいたがもう本格化終わってる。このままやりあっても仕方ねえわ」

「Ah……だったらワタシも次の高松宮杯で……」

「オイオイリムジンもかよ」

ウマ娘というものは、本格化の「テツペンを超える」——競争者としての能力がピークアウトを迎える日が必ず訪れる。

稀に史実においても例外はある2022年現在、平地競走では8歳で重賞を勝利した後、9歳現在でも現役を継続している馬がいる。公式記録においては10歳で重賞を勝利したケースあり。また障害競

走においては、11歳で現役を続けている同一重賞5連覇の絶対王者がいる。が、基本的に本格化が維持できる期間は長くとも4、5年だろうか。

もつとも、それで競争能力を喪失するということは無い。ウマ娘固有の身体能力はそのままだし、培った技術も失われない。ただ——少なくとも現役時代と同じだけの速度は出せなくなる。同じような走りもできなくなる。

もつとも、本格化を終えたウマ娘というのは、全員が「能力が落ちている」という前提を共有している。皆同じように能力が落ちているのだから、競技を行う上で差は無い。ドリームトロフィーは、トウインクルシリーズで高い知名度を得たウマ娘のセカンドキャリア……本格化を終え、トウインクルシリーズで走っているような競技者と同じステージで走るに適さないとされた人の受け皿という側面が大きいだろうか。

トウインクルシリーズは競技性が高く、ドリームトロフィーは興行的側面が強いというのが世間一般の見方だ。単純な距離別競走のみならず、様々な催しが行われているのもドリームトロフィーリーグの特徴と言えるだろう。

フィギュアスケートのアマチュアとプロの関係に近いかもしれない。いや、分かりづらいから微妙に例えとして不親切か。

……ともかく、数年間走ってきた先輩方はそろそろ引退でもおかしくない頃合いなのはその通りだった。

「じゃあ、私もそろそろ引退だろうねえ」

「タキオンⅡサンもか!?!」

「うわあ、一気に抜けますねー……」

「やっぱドリムトロフィーに?」

「籍は置くかもしれないが、しばらくは完全に引退のつもりだよ。いつまでも本格化を維持できるならともかくね……」

そう呟くタキオン先輩の表情には、憂いと同時にどこかすっきりしたような雰囲気を感じられた。

そうか……速さを追求する以上、本格化が終わって最高速を維持で

きなくなつた段階でレースに出る意義があまり無くなつてしまつて
るんだ。それでも、元々を辿ればタキオン先輩はいつまで走れるか分
からない程度に脚が脆かった。本格化の期間を長く維持して何年も
走つてこられたから、ある程度の割り切りができたのだろうか。

あるいは、いつかその研究成果によつて再度本格化の状態を再現で
きるようになるなら、復帰……という線もあるだろうけど。だから籍
を残しておく、とは言つてるんだらうし。

「そうか……そうなると少し寂しくなるな……」

しみじみとした表情のトレーナーさんの発言に、ぼくは少しだけ苦
笑いした。

本当に寂しくなると思つてますあなた？ 毎日のように娘さんが
発光してるのちよつと心苦しく思つてたりしません？ 内心若干
ほつとしてたりとか……。

しかし、そうなると年齢的に……どうだろう、トレセン学園に在籍
してられるのかな？

「来年度以降の身の振り方は決めているか？」

「トレセン学園に准教授相当の役職として在籍するよ？」

「そうか………何イイイイ——！？」

「あつはつは。見たまえモルモット君、お茶でも飲んでたら今にも吹
き出しそうな表情だよ」

「あ、お父さん知らなかつたんですか？」

「初耳だぞ俺は！」

「トレーナーさん、学校ですよ……」

「ゲフン！」

親としての顔を覗かせた直後、すぐに気を取り直してトレーナーの
顔に戻せるのはそれだけ場数を踏んでる賜物だろうか。

正直、個人的には「あー、なんかそんな気はしてた」という程度の
認識だ。タキオン先輩がこの絶好の環境見逃すはず無いんだよ。そ
もそもいくら付き添いとはいえ、タキオン先輩も一緒に学会に出席し
たことがある「ここでまさかの肩透かし」より。わけだし、サブトレ
さんも公的な場でのコミュ力は低くない、アカデミックな分野で伝手

を作っておけば、タキオン先輩の研究成果が認められることは大いにありうることだろう。何ならちよつとフラツとアメリカなんかに行つて飛び級して帰つてくる可能性も無くはない。

一般的に教授になるには博士号が必要と目されているが、別にそんなことは無い。ジャーナリストや芸人さんが教授として在籍している例もあるし、何なら大学教育の場ではそもそも教員免許などとも必要無い。この場合中等部や高等部に授業を教えるにすることは無いが、その辺やろうとする人でもあるまい。

あと理事長が理事長だし話が来たら絶対即「許可ッ！」とかやつてる。

「そもそもトレセン学園は『Japan Uma Musume Training Schools and Colleges』——大学の機能を併せ持つわけだ。でなければ会長や私がいままでも在籍し続けているのが不自然だろう?」

「言わんとすることは分かるが……」

「というわけで来年以降もよろしく頼むよ。あ、モルモット君、紅茶」
「はいはい」

——そんなわけで、来期以降トレセン学園にアグネスタキオン准教(相当)が爆誕することになった。

トレセン学園の倫理観は無事で済むのだろうか。済まないだろうな。気にするのやめよう。

遠慮がちな視線

12月のG1戦線、これはホープフルステークスに出ないことを決めた以上、チームとしては有馬記念以外のレースにはそこまで大きく関わる事が無いことになった。

……という一方、ぼく個人としては同じジュニア級ということでも2月は注目レースが多い。ホープフルステークスは言わずもがな中・長距離の今後を占う大事な一戦だし、朝日杯はアイネス先輩が出走する。そして阪神ジュベナイルフィリーズはと言うと――。

『白毛ウマ娘の夢が今ここに！ 一着は！ バ群の中から抜けてきたハッピーミークッ！』

「ほああああああ！ うおっはあああああ！」

「耳がー！」

一番人気、一着ハッピーミーク。

来年のティアラ路線を占うこの一戦を、ぼくはルームメイトとして友人として寮で全力で応援していた。

全力過ぎて隣に座っていたテイオーの耳を音で攻撃してしまった。若干申し訳ない。

「トラちゃん全力すぎだよ〜」

「応援ハッピーにうちわにペンライトにぱかプチまである……これどこで買ったんだよ」

「ぱかプチ以外は自作だよ。このまま商品化できないかURRに交渉してる」

「ええ……」

「ルームメイトなのは分かるけどはしやぎすぎよ……」

「ごめんなさいママ」

「ママじゃない」

ハッピーミーク。全距離全バ場対応型のスーパーオールラウンダー。

ぼくのルームメイトで実は学年的にはぼくの一つ上な彼女は、一足

早くG1ウマ娘の高みへと到達することになった。これでハシヤが
ずにいられようかというのが個人的な思っただけど、スカレットに言
われたからには少し落ち着くしかない。

ただこれ、ぼくも大概かかっているけど下手するとURAの方がもつ
とかかる案件じゃないのかな。世界初の白毛ウマ娘のG1制覇史実
は2020年のソダシ。なんてオグリ先輩並のアイドルの素質ある
よコレ。まあ地方から来たわけでもなく元から中央所属だからその
辺りの、言うなれば英雄性というのが不足してるのは否めないけど。
「トラちゃんがまたいらんこと考えてそうな顔してるー」

「いらんこととは失礼な」

確かに杞憂かもしれないけど、それはそれとして考えを広げておい
ているんなことに対応できるようにしておくのは悪いことじゃない
はずだ。

……ん？ いや、ぼくがやる必要は無いか？ そもそもこういうの
トレーナーさんの仕事か……？ そうか……そうかも……いやその
通りだな……。

どうか桐生院トレーナーは頑張ってほしい。新人なのに即G1ウ
マ娘を育て上げるという驚異的な実績を残しているわけだから、取材
とかその他諸々で大変だろうけど。強く生きてください。

……と、まあそんなこんなで（主にぼく一人が）阪神ジュベナイル
フィリーズの結果に熱狂した翌日のこと。

スカイ先輩の後について逃げのトレーニングをしていると、客席の
方からどことなく遠慮がちな視線を感じた。

「んー、ありや。フラワーだ」

「ホントですな」

つられて見てみると、そこにはサブトレさんに連れられて来る形で
ニシノ神……もといニシノフラワーがいた。

「スカウトですかね？」

「あゝ」

11月の選抜レースが終わって少し。時期的にはこのくらいだろ
うか。

ぼくの時はちょっとサブトレさんの行動が早かったので極めて早い時期だったけど、本来、1年生のスカウトとなると標準的なのはこのくらいの時期なのだろう。チームとしてはちよūdosp rintくマイル路線のリムジン先輩が一線を退く——と言ってもチームには所属したままだけど——わけだから、丁度いいのか。

「ストライプはそのところどう思う?」

「んん、ぼく選抜レース見てないから能力面は何とも言えないですけど」

ぼくは普段、選抜レースになるとだいたい屋台引いてるのでレース内容までは把握していない。

一応、知識としてデータとして知ってはいるものの、実際の能力と比較したわけではないので具体的に言うわけにいかないというのもある。

「フラワーって飛び級してきてますよね?」

「うん」

「本格化を迎えてもまだ体が出来上がってないわけですから、怪我もしやすいと思うんです。じゃあウチはその辺特に注意してるから、相性は良い方かなと」

「にやるほどー」

もちろんこれは自分が所属してるチームとしての最良目もある。が、実際、基本的にベテルギウスではトレーニング中の負傷というケースがあまり無い。

レースになると皆何かと無茶するから一概には言えないけど……タキオン先輩もアドバイザーについてくれるだろうし、トレーナーも二人体制。危ないなと思ったり特に見ていないといけないと思ったらマンツーマンでトレーニングを行える。

……うん、普通に環境良いんだよ。ぼくも結局それが決め手だったし。リムジン先輩というスプリンターとしての先達もいるから何かと世話も焼いてもらえるだろう。

「ま、実際ここ以上の環境ってのがそうそうあるかって話だよー」

「リギル?」

「ま〜……そっちはー……あー……おハナさんがあんまり合いそうじゃなくない？」

「フラワーみたいな子は苦手かもですね。じゃあやつぱウチか」
「でしょ？」

分かっている癖にこういう確認するみたいなことを聞くんだからまったくもう。

軽く苦笑いしていると、何かこう……いつもより負担が強くなっていく感覚がある。いや実際負担大きいな。速いぞ。いやマズい！
ついていけそうにない！

「スカイ先輩ストツプストツプ！ レコードペースになってます！」

「あれ、そう？ にやはは★」

「にやははじゃ……スピード落とせーっ！」

くそっ、このひと知り合いがチームに入るのがほぼ内定したからって露骨にテンション上がってる！

いやまあ外から見たら微笑ましいしほくだってデジたんパイセンとああいうのいいよねって話したいんだけど、併走付き合ってる当事者としてはそれどころじゃない！

えーつと、こういう時こそ最短ルート通って最適な体の動きをする等速ストライドを身に付け……。

「できねえー!!」

やろうと思っただけでできるものかよ！

というかコレ軽い罨なんだけど、やってやろうと意識すればするほど逆にできなくなるんだよ等速ストライド。あれは「意図しなくてもできる」のが真骨頂だ。やろうと思っただけでやってる時点で少ない口スが生じてる。これは走行時のロスを最小限に抑えることで相対速度を上げるという等速ストライドの理念と根本的に対立するわけだ。
「何をやっとするんだお前たち！ トレーニングで無茶な動きをするなあっ！」

「すみませーん!!」

流星にタイムを計測していたトレーナーさんには、現状はお見通し

だったようだ。

負けずに上げかけていたギアを緩め、当初走っていた時と同じ程度の速度に戻すことで再度、元の逃げ方講座に移った。

やっぱり本職逃げは違うなと思わされたけど、これ、やろうと思えばスカイ先輩もぼくと同じことできるんだろうなと感じさせられることになった。

普通のウマ娘だと、ぼくほどやる意味が薄いんだよね、ああいう煽り走法……。

・・・≠・・・

「中等部一年生のニシノフラワーです。みなさん、よろしくおねがいします！」

後日。スカイ先輩や相談を受けたらしいクラスメートの勧めなどもあり、大方の予想通りフラワーはベテルギウスに加入することになった。

ぺこりと丁寧にお辞儀をするフラワーに、歓迎の言葉と拍手が送られる。

以前、スカイ先輩の祝勝会に来たこともあって、チームの雰囲気については彼女もよく知っている。驚いたり萎縮したりということは無く——それでも多少気恥ずかしそうに——拍手に対して頭を下げていた。

「先輩ができた気分をインタビューしてやろう。感想を述べよ」

「明日から先輩風ビュウビュウ吹かせるのが楽しみってなもんですよむほほほ」

「わかる」

「この気持がわかるなら初めての先輩がぼくなあたりは残念でしたね」

「いや、ノリが合うのは悪くない」

「ほー」

「ムフフ」

スナイパーさんそんなこと思ってたのか。ちよつと嬉しい。

「で、それはそれとして素直なフラワーがやってくるのは？」

「カワイイヤッター！」

「ストライプは可愛げとはあんまり縁がないわな」

「ひつど」

多少、まあ……こう……うーん……自分自身のことながら全く問題が無いとは口が裂けても言えないけれども。

……営業スマイルはできるんだぞ！ 愛嬌バツチリ……いや自分でも自分のことで嘘言うのはあんまり好きじゃないな……。

シヤカール先輩の言う通りあんまり縁がないのは、まあ……そうだね……それでもそこそこはあるんじゃないすかね。うん……。

「ところで質問いいです？ フラワーのデビュー時期ってどのくらいになります？」

おつ、いいぞスカイ先輩。その調子でどうか話題を逸らしていただきたい。

「今の時点だとはつきりとは言えんな。飛び級をしてきてるから、その分体作りをしつかりしなければ怪我が心配でな」

「来年すぐというのは難しいでしょうね。上手く行けば再来年か……」

「そうすると本格化終わったりしません？」

「個人差があるが……現状はまだ伸びていく時期だ。よほどのことが無ければ数年は維持できるはず。もしもピークが早く訪れれば、その時は改めて相談の上考えよう」

親御さんから娘を預かっている身だから気をつけなければならぬのだ、とトレナーさんは複雑そうな表情で締めくくった。

そうですね。平均時速50km以上で走るトレセン学園のウマ娘は、常に怪我と隣合わせで生活している。もともと、命の危険に繋がるのはよつぽど勢いよく転倒した、とかでもないとなかなか無いけど……実際にあった事故ではあるし、命は助かって後も後の生活に影響を及ぼすような怪我を負うことはありうる。スズカ先輩も一歩間違えれば歩行能力に影響が出ているところだった。

細心の注意を払って、それでもなおレースになればその競争心のせいで派手に骨折するような……リムジン先輩みたいな例もあるんだ。幸い、今のトウインクルシリーズ現役組のぼくやスカイ先輩、スナイパー先輩などは今の所怪我しないでいられてるけど、将来的にどうなるかは分からない。

かと言ってじっくりやりすぎれば本格化の時期を逃して競技者として花開く前に終わってしまう。そのあたりの調整をどうすればいいか……指導者であり教育者としての側面もあるトレーナーとしては、頭の痛い問題だろう。

「まあまあ、今すぐどうこうできない問題は一旦置いときましょう。今日は歓迎会ってことで色々作ってきたので、まずはそっちから行きましょう」

「作った？ これ、店のオードブルとかじゃなかったのか？」

「まあ広義で言えば店のオードブルですかね……？」

普段、屋台を引いて飲食業を営んでいるぼくが、部費から徴収してオードブルを作ってきたのだからそれは「お店の料理」と言えなくもないかもしれない。

「これ領収です」

「随分安く抑えたようだが大丈夫なのかこれは……？」

「悪いものは入ってませんよ」

「ならいいが……」

「あつ、何でもケニアの味になる魔法の粉は入れました」

「それについて何か言う気は無い」

伝手を駆使した結果だ。加工するにあたって多少ワケ有り品を安く譲ってもらうようなことはあるけど、悪いものは入ってない。

それにしてもすっかり大人数用の料理の手際が良くなってきた。ぼく個人は経営の方向に進みたいからこのスキルがどれほど意味を持つかというのはわからないけど。

「あの、こんなにたくさん……私、お手伝いとか……」

「いいのいいの、フラワーは座っててー」

「パーティは主催者ホストにお任せするのがマナー、デス」

大皿を次々部室に運び込む中で立ち上がりかけるフラワーだが、そう言われるとどこか居心地悪そうに再び座った。

真面目な子だから、こういうのを見るとどうにも手伝わなきやという気持ちの方が先行するのかもしれない。うーん……何か良い手は……。

「手持ち無沙汰なようですから、私と一緒にジュースを取りに行きましようか」

「あ、はいー！」

お、サブトレさんナイスタイミング。これならやることができ気が紛れる。

このチームに所属してきたウマ娘の中ではなかなか珍しいタイプだ。良い子なのはそうなんだけど、良い子で真面目すぎる。もう少し気の抜き方を覚えてもらうともっと良さそうなんだけど……。

(……まあ、今言うことでもないか)

その辺のことは後々にしよう。トレーナーさんたちも考えてくれるはず。

今はとりあえず歓迎会。で、問題が見えてきたらその都度解決に走るでしょう。

権利以前の義務

12月下旬、有馬記念。このレースで引退及びドリームトロフィーリーグへの移籍を表明していたドーナッツ先輩は、惜しくも2着に終わった。

これはピークから外れたウマ娘としては悪くない結果ではあったと言えるだろう。引退レースで勝つというのは非常に難しい。ごく稀に普通に勝つオグリ先輩のようなケースもあるけど、あれが一例として適切かと言うとちよつと疑問だ。

しかし、一番の敗因は最盛期にいるグラス先輩が単純に強すぎたというのが大きいだろう。

スリップストリームを使って巧く出し抜き、1着をかつさらおうとしたそのタイミングで、更に横からぶち抜いて差し切るなんてもうどう対処すればいいのだろう。

ともかく、この勝利でグラス先輩の名前は広く一般に知れ渡り、同時に怪物二世の異名もまた広く知られることになった。グラス先輩は静かにキレた。

ともかく、ジャパンカップに勝利したエル先輩に並び、クラシック級で有馬記念に勝つというのは相当な快挙だ。

ダービーの同着や菊花賞での世界レコードなどの特徴的な出来事が重なったのもあり、この年のクラシック世代は巷では「黄金世代」などとも呼ばれるようになっていくとかいないとか……。

「だそうですねよキング先輩」

「黄金のように輝かしいキングを讃える権利をあげるわ。私の名前は——くしゅん！」

「キング〜！……こたつ入ったらく？」

「そうさせてもらおうわ……今日雪が降るとか言ってた？」

「深夜くらいから降るって言ってましたよ」

「初詣、大丈夫かしら……トレーナーには先に言っておきましょう」

大晦日の夜。ほとんどの寮生が実家に帰省する中、今年も帰ろうに

帰れないぼくは去年に引き続きキング先輩たちと一緒に寮で過ごしていた。

有馬記念では残念ながら6着に終わってしまったキング先輩だけど、ぼくらの前に姿を見せる時はそのことについて気にした素振りを見せることは無い。内心は……多少ならず気にしてるとは思うんだけど。

これまで三冠路線で走ってきたキング先輩が、有馬以降は短距離路線やマイル路線で走っていくことが決まった。三冠路線をひた走っていたキング先輩が、ここで急に路線を変えたということで業界関係者は混乱。ぼくらとしては、それがキング先輩の選択ならと尊重はしているのだけど、それでもやっぱり三冠路線で好走しているのを見ているだけに不安が無いわけではない。

不安を振り払うように、ぼくはよっこらせと立ち上がって部屋の隅に置いていた鍋を持ってきた。

「初詣のお話も出ましたし、そろそろ年越しそばでも食べましょーか」「いいわね、キングにおソバを配膳する権利をあげるわ!」

「ストライプちゃん、具は? 具は?」

「エビ天乗つけちゃう?」

「いいね」

「キングには贅沢に二尾!」

「キングにだけなんてダメよ。皆一緒に贅沢をする権利をあげるわ!」

「キングー!」

「……勿論その分は予め買ってきてくれるわよね? ストライプさん?」

「いえーおふこーす」

「やるじゃない!」

発注するものは少し多めな方が何かと便宜を図りやすい。

……という事情を抜きにしても、キング先輩がこういうことを言うのは想定できるので先に買っておいたというのもある。先輩何かと詰めが甘いところあるし。

ともかくそんな調子で温かい海老天そばを配膳し、皆で食べてほつと一息ついたタイムミングだった。

「そういえば、来期からはストライプさんもライバルなのよね」
「ぬ？」

きゅぽんとそばが口の中に抜けていく。

ライバル——キング先輩とぼくがライバル。

……うーん？

「路線違くないですか？」

「ストライプちゃんはステイヤーだからね」

「もう！ そういう意味じゃないわよ！ だいたい、私もそうだけど、ストライプさんだって呼ばれば有馬記念に出るでしょう？」

「それは勿論」

「でしょう？ だったらいずれ走ることになるからライバルでいいのよー」

そういう考え方もあるか。なるほど、それなら確かにライバルという解釈でも問題ないかもしれない。

「どっちを応援したらいいのかなあ」

「どちらも応援する権利をあげるわ！ どっちが勝っても恨みっこ無し……それがレースの世界だもの」

「キング……」

「そうね。確かに、ちよつと！ ストライプさんの方が長距離の適性は上よ」

「ちよつと？」

「ちよつとかなあ？」

「ちよつとよー！」

実際ちよつとな気もする。

というのも、キング先輩は菊花賞では5着で掲示板入り。有馬だと6着で微妙に外れてはしまったものの、単純に「長距離適性に劣る」と言い難い結果を残している。展開が向けばあるいは——そう思わせるほどの実力があるのは間違いないだろう。

「路線変更こそしたけれど、私はいつでも勝つために走っているわ。

皆も……私も。見返したいとか、自分の実力を証明したいとか、色々思うことはあるでしょうけれど、根底にあるものは同じでしょう？ 勝ちたい、って」

「そですわね」

参った。そこのところどころだろう。ぼくは勝ち負けについて頓着が……無いではないけど、必ず一着にならないといけないと思ってるわけじゃない。賞金圏内に入ればそれもまあいいんじゃないかな？ くらいの認識が残ってる。

その辺りの認識の差がいずれ何か関わってくる……こともあるのだろうか。

キング先輩のまつすぐな目を見てみると、どうしてもそう思わされる。

「だからもしぶつかったとしても、遠慮なく競い合いましよう」

「……はい」

……だから何もしない、なんてことは無いけど。

勝てるなら勝ちを狙いに行くし全力で策を練る。それが競技者としての礼儀……権利以前の義務だ。

「さ、その前に……今年の大晦日も地味くに過ごしている後輩がいるみたいよ」

「ありやく」

「そりやいますよねえ」

毎年相当数のウマ娘が入学してくるトレセン学園。実家と折り合いが悪かったり、ぼくのように金銭的事情で国に帰れないという子は一定数いる。

大半のウマ娘が年末年始で実家に帰省していることから、そういう子は得てしてキング先輩の言うように「地味に過ごす」ことになる。

「一流の大晦日を過ごす権利をあげに行くわよ！」

「二はーい」

……というのを見過ごすキング先輩ではないのだった。

もちろんその人による部分があるが、年頃の少女がこの寒い時期に、一人ないしは二人で部屋にいて人恋しくないわけがない。多分キ

ング先輩がその辺一番よく分かってる。

なのでぼくたちもそのへんを汲んで、寮に残っているウマ娘に声をかけにいくのだった。

・・・≠・・・

1月。トウインクルシリーズは基本的に学生が出走するレースということもあり、例年冬休み途中の平日5日、ないしは6日からシーズンが始まる。

残念ながらぼくが出走して実力を発揮できるレースは上旬には無いため見送ることになっているが、それ以降のレースは中距離以上のものがそれなりに揃っている。が。

「どうして梅花賞クラシック級中京6日目の芝2200m競走。クラシック級のこの時期には数少ない2000m超のレース。に出られないんですか……!!」

「梅花賞が1勝クラスでお前はとっくに三連勝しとるからだ」

「ちくしよおおおおおおおー!」

「ストライプがまた荒れておるぞ」

「1ハロン長いだけなのにね……」

1月上旬の練習開始日。ぼくは思わず叫んでいた。

なんとということだ。2000m超えのレースがだいたい1勝クラスで出場権が無いなんて。

2400のゆりかもめ賞も2月にあるんだぞ……そつちも出走できないうつていうのか……なんということだ。

「よっぽどのが無い限り、ここまで勝つとる分でも皐月賞への出走は問題無いだろうが万全には万全を期しておきたい……というの
は分かるな?」

「3月は若葉ステークス2022年現在皐月賞トライアルとなっているレース。阪神レース場芝2000m。に出ようって話ですよねー
……」

「不満そうだな」

「2月のダイヤモンドステークスシニア級G3。東京レース場芝3400m競走。にねじこめませんか？」

「真顔でとんでもない無法を言うな」

今からでも混合戦にならないかなあ……ダイヤモンドステークス……。

ほら、ステイヤーズステークスも世代混合戦だし……無理かな……無理か……。

「ストライプさんって、そんなに長距離が好きなんですか？」

そうして1月に若駒ステークス、2月はすみれステークス阪神芝2200mオープン戦、3月に若葉ステークス——可能なら4月に皐月賞。

というところで出走予定が決まったところで、フラワーから疑問が飛んできた。

……言われてみれば今日のトレーニングが始まってから、長距離出してくれと言ってる姿しか見せてないな？

「ううん、自分の実力が一番発揮できるからで好きとはちよつと違うかな」

「そうなんですか？」

「ありや？　じゃあストライプが好きな距離って？」

「1600？」

「ワツザ？」

「うわ、意外なところ」

これは単純にJWCの距離であり、ぼく自身がなんとなく見てて好きな距離でもある。

短距離のスピード感と中距離の駆け引き、その双方を併せ持っているのがマイルだ。

勿論、自分が走るとなると色んな意味で難しいのだけど。最速でそれこそ1分31秒ほどでゴールするマイルだどうしても最高速が足りない。

「適性なんて知ったこっちゃない！　なんて言えたらカッコよかった

んですけど」

「いやオヌシはかなり適性広いだろう」

「東京大賞典3000mに戻してくれないかな……」

「シラフでとんでもない無茶苦茶言うよね」

ジャパンダートダービー
「J D Dもダービーと同じ2400でやってほしいですし」

「スゴイヨタモノ」

「ストライプさんはダートも走れるんですか？」

「いけるよ。ただ、日本のレースだと距離がね……」

日本のダートレースにおける最長距離は大井レース場における2600mの金盃だ。

ただ、南関東所属ウマ娘じゃないと出走資格無かった気がする。中央所属でも出走できるのは、川崎記念とか？　ただ、どれにしろあまり優先する理由がないんだよね……」

「フラワーはあんまりストライプのことは参考にしない方がいいよ」
「ええつ、でもそんな……」

「いや本当にぼくのこととは参考にしない方がいいのはそうだよ……長距離得意なのは体質の問題が大きいし……」

……なるほど、フラワーは距離適性のこととか、少し気になってたのかな。

しかしこればかりは何とも言えない。ぼく、全然路線違うし。

トレーナーさんたちやスカイ先輩ともよく話し合って、自分に合った道を見つけてもらいたいなあ。

注目を受けるのも悪いものではない

若駒ステークス。リステッド競走重賞に次いで国際的に格式が高いと認定されたOP戦。準重賞とも称される。であるこのレース、リステッドに認定されるほど注目されるに至ったのは、かのレジエンド、ギンシャリボーイが出走したレースだからというのが大きいだろう。

このレースに勝ったウマ娘は将来の三冠ウマ娘！ ……かもしれない。

なんとということはない、過去のレジエンドの実績にあやかったゲン担ぎなのだけど、女子中高生は占いやゲン担ぎやゴロ合わせが大好きだ。注目されないはずもない。

史実の場合、若駒ステークスが注目されるに至った理由はそれこそ三冠路線で活躍したディーブ某などの存在があるのだけど、そこは一旦置いておく。

ともかく、ぼくもまたこのレースに出走することになったのだけど、京都ジュニアステークスの時とは違って、今回は概ね理想通りの展開で進めることができた。

まず、今回も作戦は前回と同じく逃げ。最初から飛ばし気味に行つて前に出る。

京都ジュニアステークスの時、一緒に走っていた皆はぼくが何をしてくるかという点に警戒しすぎて及び腰になってしまい、結果、まんと逃げ切りに成功することになった。そのことはレース内容を見ていれば周知のことだろう。それを踏まえた上で、今回はぼくに対して上からフタをするべく前に出てくるウマ娘がいた。

が。そもそも、こうやって前に出てくる展開こそぼくが前回狙っていたものだから、作戦をそのまま流用できて好都合。被せられたフタごと下から押し上げるように、後ろからつついて煽って時にはわざと前に出て競争心を更に掻き立て――。

『序盤から超ハイペースで繰り広げられた消耗戦！ 懸命に差しに行

くもあと数歩届かずっ！ 一着はサバンナストライプ！」

あとは京都ジュニアステークスで当初想定していた、超ハイペースの潰し合い。スタミナ勝負の消耗戦に持ち込むだけだ。

そして結果、まんまと今回はそれで勝ちをもぎとれた。

『今回は2バ身差をつけた「強い」レース運びでしたね！』

『ハイペースで流れる展開とペースの落ちない走り方が上手く噛み合いましたね。これからの中・長距離路線の注目株になりそうです』

今回改めて思ったが、注目を受けるというのもそう悪いものではないようだ。

あまり目立つのは良くない——と考えていたが、戦術としては目立つ＝自分の戦術が知られている方が、警戒して逆に戦術の幅がある程度「見せたもの」に限定してくれるので、相手を余計にドツボにはめやすい。

とにかく大事なものは先入観だ。強い！ と思ってくれるなら儲けもの。高めに設定してくれたハードルの下をそのままくぐっていけばいい。

ついでに「こんなことやるわけない」と思ってくれたら最高だ。やるわけないと思ってること全部やろう。むほほほ。

ところで。

「あなたもう重賞含め4勝もしてるわけですから、ハンデキャップ競走獲得賞金額次第で重量のハンデが課せられるレース。賞金が多ければ多いほど負担重量が増えるため、強いウマ娘ほど勝ち辛くなる。のダイヤモンドステークスだと相当不利になりますね」

「ぐあああああああああああああ!!」

ぼくの出られるレースの数が少なくなった。

そりゃあねえ！ 世界的な傾向として長距離路線は縮小傾向だけれども！ 3000以上のレースが無い!! ダイヤモンドステークス除いたらシニア級重賞は春の天皇賞と阪神大賞典とステイヤーズステークスしか無いじゃん！

URAは純ステイヤーに厳しく不是吗！ 割とマジで！ そんなところいかがですか!!

……さて、2月。立春と言いながら大雪が積もったり路面が凍結したり電車が止まったりとなんやかんや寒さが強調されるニュースが相次いでいる頃のこと。

ぼくらのライバルであるところのメジロマックイーンはここでもうやくメイクデビューを果たした。

「本当にクラシック逃してどうすんの」

「骨膜炎なのだから仕方ないじゃありませんの！」

……そして同時に、皐月賞への出走が絶望的になった。教室の皆も何気にこの件に触れるかどうか悩んでいるっぽい。なので、とりあえずぼくらが率先してイジることにした。

そりや中には1月デビューで皐月賞に出てしかも勝つスカイ先輩みたいな事例はあるけど、流石に2月は遅い。中2週でレースに出まくって全部に勝つとかしないとダメじゃないかな……しかもよりもよって走り過ぎが原因の骨膜炎まで患ってたんだから、今でも走り過ぎは禁物だし。

ダービーも厳しいだろうなコレ……。

「もう割り切っていますわ。確かに残念ですが、私の目標は天皇賞。まずは春の天皇賞に臨むため、菊花賞への調整を完璧にするつもりです」

「どれ」

「お腹をつまもうとしないでくださいまし!!」

「ボク知ってるよマックイーン、メイクデビューで勝ったの嬉しくて食べ過ぎちゃったの」

「ぼくも知ってるよマックイーン、パーマー先輩が怪我した時はヤケ食いたし完治してリハビリ始まった時も嬉しくて食べ過ぎちゃったの」

「くうっー」

テイオーと二人してマックイーンの席の周りをくるくる回りながら両手の人差し指でつつんする。

変な儀式か何かかと思ったのかマーベラスとマヤノまで加わって異様な絵面になったりしたが、このクラスしよっちゅう変なこととして

るものだからあまり気にするひとはいなかった。

ところで、スピカのトレーナーさんは要所所でアドバイスこそするし、それがウマ娘のためになることなら手間も協力も惜しまない人だ……が、トレーニングや生活面についてはやや放任主義のケがある。見方によってはそれだけ皆のことを信じていると言えるんだけど、スペ先輩の太め残りの件もどうやら気付いて放置していたらしいので、「失敗を経験して成長してもらう」という意図をもってあえて少し放任しているフシもある。

教育方針は人それぞれ、チームそれぞれで違うのでこれが正解というものは無い。無いけど、合うか合わないかはある。スズカ先輩やスペ先輩の躍進っぷりを見る限り、あのひとたちにとってはよく適していたのだろうというのとは間違いない。

実際マックイーンも食べすぎはこれで懲りただろう。懲りたよね？

「ところでー」

「露骨に話題変えてるよ」

「露骨に話題変えたね」

「……そういう風におっしゃるストライプは既に皐月賞の有力候補に挙げられていますわね」

「そうは言っても本当に出走するものだろうか？」

「という揺さぶりでしょうか？」

「バレたか」

ワハハ。

ま、実際そうだよ。ここまでで散々中距離戦出において皐月賞だけ出ないなんて普通ありえない。いくら突飛なことをして他のひとを罫にはめようとしてはいても、それは結局勝つためであって「出ない」という選択肢は最初から無いのだ。

「まあ初めての大舞台だし？ 落ち着いてラク々に走ることを優先させてもらおうかなーって思ってるよ」

「そうやって煙に巻くようなこと言うから性格が悪いとか言われるんだよっ。」

「ライアンがこの場にいらなくて良かったですわね。絶対に混乱させられるでしょうから……」

「えへっ」

ライアン先輩、素直なひとだからなあ……。

変なこと言ったら信じてしまいそうだし、実は前から割と発言には気を遣っている。ぼくの性格知ってるテイオーたちなら、冗談で済むんだけどね……。

……≠……

2月のイベントといえば。そう聞くと、多くの人が挙げるのがバレンタインだろう。

友チョコや、トレーナーさんや教官さんたちへの文字通りの義理チョコだったり、まあ色々……：色々と需要が大きい。

なので去年に引き続きチョコプレートを仕入れて売りに出す予定なのだけど、それとはまた別に大きめのイベントがある。節分だ。

——が。

「豆はダメかあ……」

思ったより、だいぶ大豆が余った。

ぼくは部屋で、大豆の袋の入ったダンボールを前にして軽くため息をついた。

しかし考えてみれば、当たり前といえば当たり前だったかもしれない。大豆を食べるイベントといえばそうなんだけど食べる量自体はごく少量だし、大半は撒く……とは言うが、最近は衛生上の問題もあるし単純にもつたいたいもないこともあって、袋に入れたまま投げて後で食べるような流れになっている。

で、その上で考えても大豆自体、そんなに消費量は多くない。

なのでダダ余りだ。商売も時の運と言えばその通りなのだけど、いざこうして現実に直面するとそれはそれで軽いショックだ。

そもそも日常的に大豆を食べる機会があまり無いと言えばそうだけど。

「ほり……ほり……」

「それ美味しい……?」

「癖になる……」

一方でミークは、さつきからしばらく大豆をひと粒ずつ口に運んでいた。

正直ちよつとわかる。

でもしばらく食べたなら急に飽きて余るんだよねこういうの。

……さてどうしよう。仕入れた以上売らないわけにはいかない。かと言ってこのままだと売れない。となれば……。

「まあ、ともかく加工しよう」

「おー」

ともあれ。

大豆は加工を前提とした食品と言ってもそう過言じゃない。と言っても、ご家庭でできるのは加熱したり調味したりが主だけ……やろうと思えば豆乳も作れる。

やり方は簡単だ。水に浸しておいた大豆をフードプロセッサーで細くなるまで砕いたら、しばらく煮る。それが終わったらさらし布を使って絞って濾せばいい。濾した後の大豆はおからになる。基本的には煮物にするのが美味しいけど、作りようによっては色んな応用法がある。クッキーとか、ドーナツとか。どれも比較的カロリーが低いので、トレセン学園の生徒には人気……のはず。皆基本的に低カロリーに食いつきやすいからなあ……。

「そういえば……」

「どうかした?」

「起業をするとか……しないとか……」

「あ、もうしたよ」

「早い」

起業するということ自体はそこまで難しいことではない。というより正確には「会社設立」ということ自体が難しいことじゃない、というのが正確か。資金調達して登記すればいいんだから。

逆に、現状はそれだけだ。社屋ナシ、社員ナシ。お金だけアリ。そ

んな感じ。都内でオフィスを探すのも今はちよつと難しいし……考えが無いわけじゃないんだけど。

「そもそも起業はスタートラインなんだよ。利益を上げて、レースを作るまでがゴール」

「ジャパンワールドカップ……それ、結局どういうレースを……？」

「うーん……最初は、トウインクルシリーズのどこかにレースをねじ込みたかったんだけど、『あ、何か違う』って思っちゃって」

「？」

ケニアにいる時にはあまり情報の入る機会が少なかったドリフトロフィーのことを知ったからだろうか。レースを開催する場にごだわりが無いなら、ドリフトロフィーでの開催も視野に入るんじゃないかと、少し前に思った。

トウインクルシリーズはあくまで本格化を維持できている数年間で行われる世代最強を決める場。ドリフトロフィーは、本格化を終えて競争能力が低下しているものの、年齢的な老化を差し引けばより広い世代が同じ条件で競うことができる場だ。

世界最強を決めるといふ趣旨を考えるとトウインクルシリーズでの開催が適切なものかもしれないが、より広く……それこそ世代の垣根なく人を集めるならドリフトロフィーの方が向いている。

「……ドリフトロフィーなら、引退した先輩たちとも競えるだろうし。そつちかかって」

あとこれはぼくの個人的な欲も含まれている。

やっぱりジャパンワールドカップなら、皆と競ってナンボでしようか……当初は、この世代はぼくしかないものだと思ってたからそういう欲を出すまでいかなかったけど、やっぱりやれるなら本気で競いたい。

……興行メインだから、ある程度ルールに關しても自由がきく可能性だつてある。だから、現役選手との交流戦なんかも……とか。

何なら引退したウマ娘という枠組みで、チョコセンバンチョーやギンシャリボーイとも……なんて。

……そこまで望むのは流石に難しいか、うん。

こいつ何企んでるんだろう

2200mという距離は、クラシック級に上がってきたばかりのウマ娘にとつてはやや過酷な距離だ。

ダービーより短い距離だし、1ハロン^{200m}程度なら……と思うひとも多いだろうけど、実際のところその200mが絶妙にスタミナを奪いに来る。

いつも通りのペースで行くと最後に伸びきれず、かと言って脚を残そうとすると仕掛けどころがまた微妙に難しい。時によっては先行する他のウマ娘に焦らされ、ペースを崩されることもあるだろう。

2月。阪神レース場、すみれステークス。

今日のぼくの方針は——ゴリ押しだった。残り1000mちよつとでロンスパかけて競り潰すいつものやつ。

慣れない距離で精神と体力を削られるウマ娘が続出する中、ぼくはひとりピンピンした状態のまま一着で入線した。

なお、差は半バ身。いつものことである。

レース後、言外に「お前いつまでもオープン戦でグダグダしてないでとつとと重賞行け」という旨のことを言われたがどうか4月まで待ってほしい。皐月賞出走できるの確定出来たら流石にこれ以上は出ない……もう出走確定できる程度に賞金稼いでる？ ええ、まあ、はい……まあ……それはそうなんだけど……。

さて、ともかく3月のとある日。トレーナーさんウマ娘問わずホワイトデーのお返しのためにお菓子の需要が大幅に膨らんでいる頃のこと。

ぼくは学園内の空き教室へ、アイネス先輩と一緒にアルバイトの面接に向かっていた。

「それにしても、トウインクルシリーズの走者歓迎、なんてアルバイト珍しすぎて怪しいの」

「それは確かに……」

今回の募集要項を思い出して、ぼくは思わず苦笑いした。

トレセン学園の生徒限定ってだけでも大概だけど、そこに加えてトウインクルシリーズの走者なども歓迎ときた。思わず飛びつきたくなる字句こそ使っているが、客観的に見ると怪しき満点もいいところだ。会社名も聞いたこと無いものだし、理事長とたづなさんの許可印が無ければ信用できるかどうか……。

「とはいえ、やっぱりバイトの需要自体はそれなりにありますからねー」

「税金もかかるし、賞金は貯金して使わせてもらえないって子も多いもんね。そうじゃなくつてもまだレースに出られない子もいるし……」

トレセン学園に通っているウマ娘は、なんとか実家が「太い」ひとが多い。ぼくの周りだけ見て言っても、テイオーやマツクイーンはかなりのお嬢様だ。

そうでなくとも、大成して名前を残せるウマ娘の割合が非常に少ないこのレース業界、結果を残せずに引退というようになった場合に十分なフォローができるのは家族だけだ。

加えて、仮に成功を収めたとしてもその後学生だけでまともな資産運用ができるかと言うと、これも難しい。税金の問題もあるし、必然的にトレセン学園生徒の親には、一定以上の金銭感覚やモラルが求められる。

——結果、子供に大金を持たせると色々な意味で危険だということ、親が貯金の管理をしてそこから「お小遣い」という形でお金を引き出す、というケースが多い。

現在、デビューしていて収入があるにしろ無いにしろ、「自由に使えるお金が欲しい」と思っている層は潜在的にかなりいるわけだ。バイトには許可証要るけど。

「けど、いくらなんでも週一回一時間でもOKなんてあざとすぎるの。いかにも配慮してる感強すぎるの」

「あっはは……」

トレセン学園の本分はやはり学業とレースなので、バイトをするにしてもトレーニングと両立できる程度のものじゃないなら論外だ。

「あ、よろしくお願いしますなの……ところでこれどういう状況？」

「んー、簡単に説明すると、ぼく会社を興しまして」

「会社を」

「興して」

「ええ、はい」

オフィスについては定期的な収入が無いと借りるのも難しいので今は置いとくとしても、とにかく事業だ。

以前、会長たちに食品関係の仕事をするという風に伝えた通り、まずは料理、食事……というところはすぐに固まった。

ではその内容をどうするか。リース場とか色々考えたのだけど、まずリース場のテナントは経営実績が数年無いと入れてもらえないので却下となった。

じゃあ店舗を……とやるには初期投資が痛すぎるし、かと言ってそれなりの拠点が無いとそれはそれで困る。

なので、キッチンカーを購入。イメージは寮の前にやってくるはちみードリンク売りだ。その上で、他の料理も色んなことができるように改装した。

で、あとは店員……という段取りだ。

「ともかく、今までより事業を拡大するために皆さんの力をお借りしたいわけです」

「じゃあ、あのやたらトレセン学園生向けの募集要項も……」

「配慮が行き過ぎて逆に反感買いそうな時間指定も……」

「現役走者のぼくが募集かけてるのに配慮しないわけがないじゃないですか……」

自分基準で「こういうのあったらいいな」を詰め込んだ結果、逆にできすぎた話になってしまって怪しさがマシマシになったわけだ。

冷静になって見直すまで気付けなかった自分のマヌケっぷりにはもう笑うしかない。

「もうっ、それならそうと先に言ってほしいのー！」

「先に言うって『こいつ何企んでるんだらう』って目で見られるじゃないですか」

「普段人を疑心暗鬼にさせてるウマ娘の言うことじゃないわ……」

「因果が巡ってるよね」

「実際企んでそう」

「げふんげふん」

ともかく！

「業務の内容は事前に資料でお伝えした通り、接客です。注文を取つたらキッチン担当に伝えていただいて、出来上がったらお客さんに渡す形です」

「質問！」

「はいどうぞ」

「この内容でトレセン学園の生徒に限定する理由は？ 身内人事？」

「身内人事です」

「ぶつちやけてるの!？」

そりゃ外部に募集かけてもいいんだけどさ。せつかくだしトレセン学園生徒という立場と環境は最大限活用していきたい。

コネがあつて知り合いも多いから一定以上信用できて、学校自体の知名度も高いから集客も見込める。加えてお互いにトウインクルシリーズ走者なので求めてる環境も把握してる。バイト先としては良い方なんじゃないだろうか。うん。

「はい質問」

「どうぞ」

「時給は？」

「1600円と、業績に応じてボーナス」

言つた瞬間、皆の椅子が軽くガタガタと揺れた。

東京都の最低時給は1000円と少し。このことを知つたばかりは一瞬気が遠くなりかけた。ケニアの農家の平均月収は日本円換算で10,000円程度だ。物価が高いからこそその賃金の高さとも考えられるけど、調べてみようと思うまで知らなかった。

ともかく、今ぼくが提示している額に行き着くにはそれなりに専門的な資格が必要になったり、アルバイトではなく派遣社員の立場まで行き着いていることが多い。それをポンと出すとなれば色めき立つ

のも致し方ない。

「なにか企んでる悪い顔してるの……」

「そんなことありませんのことよ？」

ふほほほ。

——と、実際のところ別に何か企んでいるというほどのことはない。

ただ、勘定の計算はしている。まず実働時間を8時間、勤務日数は20日、時給を1600円とすれば月あたりの給料はおよそ26万。お客さんをさばくにはできれば二人体制にするのがいいだろう……とはいえ、常時やる必要は無い。シフトの入れ方を考えると、月あたりだいたい費用は40万というところだろうか。ぼく自身の収入との差し引きも考えればそこまで痛い出費ではない。

ある程度歩合制の色が入っていると知れば、より多くお客さんを呼び込もうとするはずだ。加えて更に知名度を高めるためにSNSや広告などで宣伝を打つ。正攻法だが、それだけの手段が揃っている今は正攻法が一番有効だ。奇策珍策を講じるのは、正攻法が通用しないか効果が低い時だけにすべきだろう。

じゃあ何で毎回レースで策を弄するのかって、通じないんだよなあ！ 正攻法が！

「ぼかあ正攻法が使えるならちやーんと正攻法使いますよ」

「あんたが正攻法使ってるの見たこと無いんだけど」

「使えるなら使うけど使わないだけっていう詭弁よきつと」

「信用度がひつくい」

なぜかって……分からないとは口が裂けても言えないけどさ……。

自業自得っちゃ自業自得なんだけど、正直な気持ちをちゃんと伝えても伝わりきらないのはちよつと悲しい。

新しい出会いもあったりする

いやあ、若葉ステークスの出走者は強敵でしたね。

……なんて茶化すこともはばかられるくらい、実際激戦だった。

皐月賞への優先出走権が与えられるこのレース、阪神レース場での開催のため条件そのものはやや違うにしても、同じ2000m2022年現在。1990年当時は2200m。条件ということで弥生賞に出る機会を逸した強いウマ娘などがこっちに出走しに来るケースは多い。

……あと、弥生賞は朝日杯覇者のアイネス先輩が出てたり、メジロ家で今年の有力候補に名前が挙がっているライオン先輩がいることもあって、「じゃあこっちなら」と思って若葉ステークスを選んで来るひとも多いのだけど、一旦それは置いておこう。

ともかく、強い相手が多いのは確かなことで、どうしても苦戦を強いられることになるのは覚悟しなければならぬ苦戦してないレースが無い。

今までにやってきた作戦と同じようなことをすれば、看破されて負けるなんてことも十分ありうるわけだ。2000mでぼくにとつて短いから仕方ない……と見ることもできるけど、それはそれで後悔することになるだろうから勝ちには行く。

ここでぼくは阪神レース場の構造に目を付けた。スタート直後とゴール前に急坂があつてパワーが要求される点だ。

主体とするのは逃げ。スズカ先輩やターボのような大逃げではなく、先頭に立つことで他を牽制するタイプの逃げだ。

この状態を残り4ハロンまで維持し続け、下り坂に差し掛かったところで——尻尾の回転を無理矢理止めることで減速。順位を落とすことでマークが外れる。名付けるなら「死んだフリ」だ。

最後の最後、急な上り坂に差し掛かったところで回転を再開して一気に再加速。最大速度で抜き去り——切れるほど最高速は出ない。

ゴールまでずるずる一進一退のグダグダな状態になって、最後はドロドロになりながらギリギリのところまでハナ差勝ち。

レース後はドーナツツ先輩に「オメーもつとスカツと勝てよ」と怒られたが、走法考えるとドーナツツ先輩も大概じゃないっすかね。

ともかく、季節は春。4月になって、進級とクラス替えの日が訪れた。

「おいつすー。サバンナストライプでーす」

「なにそれ」

「ネイチャのマネ」

「うおっ………そんなことしたことあったっけ？」

「してなかったっけ？」

「わからん……」

進級にあたって、今年は去年と比べて更に顔ぶれが変わった。

なんと、いつものメンバーの中で同じクラスになったの、ネイチャだけである。

……いや、別に寮で会おうと思えばすぐ会えるわけだからいいんだけど、やっぱ教室で会わないとなるとそれはそれで寂しいものがあるっていうか。

仕方ないこととはいえ寂しいものは寂しい——のだけでも。

「おはようございませす、ネイチャさんにストライプさん。今年からクラスメートですな。よろしくお願ひします」

「あ、イクノにタンホイザ。おいつすー……今おいつすーって言っちゃった」

「ホラ」

「よろよろ……トラちゃん、何でネイチャ頭抱えてるの？」

「自分の言動に自信が持てなくなっちゃったんじゃない？」

「どゆこと？」

「いろいろあるんだよ」

それはそれとして、新しい出会いもあったりするのだった。

ひとりはマックイーンと同室で、これまで実は何度か話したこと自体はあるイクノデイクタス。

もうひとり、びつくり部屋またはマチカネ部屋と称され、シヤカール先輩にしょっちゅう注意を受けている部屋の住人であるマチカネタンホイザ。

どちらも友人を通じた知り合いで、余り深く付き合いはもっていなかったけど、同じクラスとなればもうちよつと関係性は深まるだろう。

……が。

(ターボ成分が足りない)

どうにも微妙に締まらない。

クラス替えはある程度ランダムだから仕方ないんだけど。だけれども。この気持ち的理解できる人が身近に欲しい。

「突然こつち見て遠い目してどしたのストライプ？」

「去年のこの時期は賑やかだったなあって」

「あー、うん。ね」

「……………えい！ えい！」

「賑やかにすればいいというわけじゃないよタンホイザ」

「む……………むえへへへ」

「今まで一年間過ごして慣れていた環境から別の環境に移ったことで、戸惑いがあるのでしようね」

それは間違いなくある。

ぼく自身にぎやかなのがほんのり好きだなーと思ってるのもあるけど、一年の時はターボがほぼ常時近くにいたし二年になるとそこにマーベラスが加わったしで、体がそれに慣らされているのをひしひしと感じる。

「あとマックイーンがいなくなつて……………情報収集がやり辛くなるのが辛い……………」

「こいつ……………」

「先生方もそれを理解しているからクラスを分けたのでしようね」

「うーん……………私もトラちゃんみたく日頃から情報収集しよつかない……………」

「ほーらタンホイザがすぐ悪い影響受ける！」

「悪い影響呼ばわりとは心外な」

良い影響とも言い切れないけれど。

ぼくが散々何やら変なことするせいで奇策が有効だと思われるのはちよつと悪い影響になってしまふと思う。だってタンホイザはまともにやれば普通に強いんだもの。

作戦を組み立てることができ、まではいい。自分だけじゃなくて相手のやろうとしていることを看破するのに役に立つ。けど、それを頭に置きすぎると逆に良くない。注意力も散漫になるし、本当に自分がやるべき走りもできなくなる。

トレーナーさんたちが専門に特訓をしてくれてるぼくでもその罠に陥ることが十分ありうるのだから、それ用の訓練をしていない子とはなると……。

情報収集すること自体はやるべきだとは思うけどね、うん。

それから話がひと通り終わった後は、新学年の授業の方に集中することになった……が、当初思ってた3倍くらいのんびりした時間だったように思う。

今までが騒がしすぎたとも言う。

……≠……

「ストライプ、宿題教えて!」

「フハハこやつめストレートに来おったわ」

昼休み。カフェテリア食堂でさあ昼食にしようかというところで、予想通りというかいつも通りというか、やはりターボが泣きついてきた。

勉強、じゃなくて宿題を教えるとはストレートすぎる。ネイチャが思わず吹き出しておるわ。

「あんたねー」

「マヤノには聞けなかったの?」

「マヤノは途中式教えてくれないもん」

「あー、あの子わかっちゃうからね……」

「まさにマーベラスというところですね」

「イクノ今なんて?」

「マーベラスです」

まあ、マヤノは色々突き抜けた驚くべき天才なのはそうだ。

おかげで数学のテスト、途中式の抜けによる減点が頻出している。だいたい全部正解はしてるんだけど。

「スカーレットは?」

「最初にターボが考えて分かんないなら聞きにきてって言われた」

「ド正論だよ」

「正論だよねえ」

「でもしばらく考えてもわかんないからストライプに聞きに来た!」

甘やかしてたな? と言いたげな視線が刺さる。

うん、まあ、まずぼくのところに聞きに来たっていうのはそういうことだわな……。

しょうがないじゃん。頼まれたら断りきれないよ少なくともぼくは。

どれだけの時間考えてたかは別問題とする。

「で、ターボや? 何秒考えてた?」

「10秒!」

なお、これは自己申告な上にターボの目分量なので実際にはもっと短い。

しかし、自己申告とはいえターボが10秒もったのは記録更新だったりする。もう少し頑張りま賞。

「ぼくもトレーニングあるから、夕方まで待つてできなかつたら栗東寮来てよ」

「分かった!」

「こやつサラッと夕方まで延ばしよったぞ」

そりやまあ、本来宿題というものは文字通り「宿」でやる課「題」。

まずぼくらの本分はトレーニングなのだから、まずはトレーニングを終えてから取り掛からないと。

「じゃあそれまでストライプたちとトレーニングする! ストライプ今日フリーの日でしょ?」

「フリーだよー」

「あつ、じゃあ私も！」

「教官のトレーニングが終わったなら私も参加します」

「えー、アタシだけ仲間外れかコレ」

「ネイチャ今日フリーじゃないの？」

「カノープスとベルギウスそっの日程微妙に噛み合っていないっぽいわ」

残念。まあ、そういうこともあるか。

……で、それから自主練メニューをこなした後、ターボとイクノとタンホイザを交えて合同トレーニングを行うことになった。

話の流れの中でそれとなくターボのスタミナ強化計画がほんのり立ち上がったたりなんかもしたけれど、結局今はできないねということでは流れた。いつになったらできることだろう。

—— 臯月賞まであと数週間。

進級してしばらくはのんびりと過ごしながらも、どこかフツフツと湧き上がる熱意が抑えられないぼくだった。

半分くらい騙しきれれば上出来かな

今年のファン感謝祭は、去年ほど（ぼく個人は）珍妙なことにはならなかった。

去年出走することになったのが金船障害だったから、その落差のせいでそう感じるというのが一番大きいけれども……それはそれとして、皐月賞に出走することになっている関係上この時期にあまり無茶はさせられないとして、トレーナーさんから参加をできれば控えるよう言われていたのもある。

いずれにしても、今年はそうした裏で色々なことが実践できて充実した日になった。

まず、例のキツチンカーの試用を始めてみた。トレーナーさんやサブトレさんの関係筋を辿って、運転できたり料理ができるひとを雇ってみると、これがまた運転してくれるのみに留まらず、知恵も借りられるので非常にやりやすい。ツテがツテなのでトレセン学園OGJWC関係者ではない。だったりもして、世間話も弾んだ。この調子ならバイトの時に来てくれるであろうひとにもすぐに打ち解けられるだろう。

ファン感謝祭と時期を同じくして、桜花賞も開催された。

一番人気はもちろん、阪神ジュベナイルフィリーズの覇者、ハッピーミーク。

彼女は期待に押される形で——果たして期待をプレッシャーと感じていたかどうかはともかくとして——マイルの高速戦を制してティアラの一冠目をもぎ取った。

白毛という特徴や、あれだけの激走を演じたにも関わらず平時からレースの時に至るまでだいたいのーんびりしてる独特な性格も相まって、人気はうなぎのぼり。ぼくもルームメイトとして鼻が高いよ。

——さて。

「いやーついにぼくの方も本番ですなー」

「もつと緊張感持てねエのかお前」

「いや〜……でもストライプだなーって感じですよ？」

「こやつはこういうこと言う」

中山レース場の控室。皐月賞が開催されることになるこの日、ぼくにとつて初めてのG1ということもあつてか、控室にはチームの皆が勢揃いしていた。

なんならレースの一線から身を引いているタキオン先輩（立場的に今は生徒じゃないため私服に白衣）までいる。

……………。

「なぜ私がここにいるのかと言いたげな顔だね」

「ナチュラルに心を読まんでください」

「確かに集団への帰属意識が薄そうという君の言いたいことは分かるが――」

「発言を全部先読みして一方的に話すんじゃないねエ」

「――私の研究を進めるのにトウインクルシリーズのレース、特にG1を観戦することは特に役に立つ。チームのOGという立場はこれ以上ないくらい有用なんだよ」

こりやG1出る度に来るわ。チーム割引で。

チーム的には悪いことではないんだけどね。アドバイザー的な立ち位置で意見くれるし、かつ医学知識もあるからいぎって時に頼れるし。変な薬飲むことになる点を除けば。それをエンジョイできれば悪いところ特に無いな。エンジョイできる人が限られているけど。

「あの、気分が落ち着くハーブティーを淹れてきていますよ……もう落ち着いていらっしやるんですよね……」

「いやいやありがたく貰うよー」

「ストライプって落ち着いてるように見せて内心グツグツだからねえ」

「……むう」

「こいつ凶星だと明確に口数少なくなんな」

「Ah……緊張は誰でもするものデスから……」

「おっしやる通りです。ただ、その情報も、可能ならば表に出した

くないんですよね」

「毎日その調子で息苦しくならんか」

「案外慣れますよ」

貰ったハーブティを口に運びながらそう答えた。

翻弄されてくれるのは正直ちよつと楽しいし、そうじゃなくても情報戦というのは積立と同じだ。将来のために早く動けば動くほど後に響く。

スピードという絶対的な資産に欠けるぼくは、早いうちからそうしておかないと後がキツイとも言う。

「仕込みが上手く機能してくれるといいのですが……上手いく確率のほどは？」

「んえー。そう言われても人の思考は水物ですから、短ければ3ハロ
ンもあればバレます」

「たったの……」

「逆にうまく行けば」

「行けば？」

「……半分くらい騙しきれれば上出来かな？」

「それでも半年かけて仕込みをして1000mで上出来ですか……」

「そんなもんですよ」

何事に関しても、大舞台というものは「これまでにやってきたこと」の集大成を発揮する場だ。たった一度の本番のために何ヶ月も何年もかけるというのはそう珍しいことでもない。

長いことかけて勉強してテストに臨んでも、実際にテストに向かうのは数十分程度だろう。そんな感じ。

それに、失敗したとして、なんにも培ったこと全部が無駄になるわけじゃないし、挑んだことも糧にはなる。

「人生長いんですから、たまには博打もいいもんですよ」

「大博打のつもりで行ってもお前はタネ銭は残すタイプだろうがな」

「えへっ」

そもそもこの舞台で博打して失敗したとしても、それはそれで別に大した問題じゃない。

ぼくにとつては「やや苦手」の範疇にある2000m。負けたとしてもこれが最後じゃない。まだ「先」はある。

作戦を強く印象付ければ、次にやりあう時にこっちが動きやすくなるわけなのだから、ポジティブにポジティブに考えていこう。

お茶を飲み干したら、ぐつと軽く猫の伸びをする。そろそろパドックに集合する時間だ。

「それじゃぼちぼち行ってきます」

「うむ、行ってこい」

「程々にね」

「程々じゃねーよガツンとキメてこい！」

「緊張しないでくださいね！」

色とりどりのエールに見送られながら、ぼくはへらへら一つと顔をほころばせながら部屋から出た。

(さて、と……隠しながらかな。震え)

そして、同時に一人になったことで、今まで薄れていた不安が急に胸をついた。

バチバチの大舞台に、数万を超える観客。緊張してない？ 虚勢だ、そんなの。

中山レース場の最大収容人数は約18万人。これはキャパだけで言えば、いわゆる「ライブの聖地」と言われる日本武道館のおよそ十二倍だ。東京ドームと比較しても更に三倍以上。流石に客席が全て埋まることはそうそう無いにしても、G1レースとなれば毎回数万人の観客が訪れる。アイドルイベントとしてもスポーツイベントとしてもこれは相当な規模だ。トゥインクルシリーズが世界でも有数のエンタメイベントとして見られているのはこの驚異的な動員数と、それに伴うお金の流れがあるからこそだろう。

「あちら」と違って賭博性も無いのでお客さんの間口も広く、老若男女を問わず高い訴求力がある。だからこの舞台で走ることは、それだけで強い宣伝効果にはなると言えるだろう。

けど。

(……負け方によっては悪評もついて回る)

惨敗を喫すれば、商売にかまけてトレーニングを怠ったとしてバツシングを受けるのは想像に難くない。

中途半端でどっちつかず。レースを侮辱していると取られることだってあるかもしれない。

今日の皐月賞はどう転ぶかを占う第一歩――。

「――ふう」

ぼくは外套を頭に被った。

ダメだ、ダメだ。氣負いすぎてる。耳が熱いのがよく分かる。

結局なるようにしかならないんだ、勝負なんて。それよりもまずは冷静にレースを動かすことを優先しないと。考えないまま走ってもぼくに勝ち目があるとは思えない。

・・・≠・・・

『3枠6番サバンナストライプ、4番人気です』

「とあつ」

流石にG1だけあって、今日の中山レース場はパドックまで大入り満員だった。

当然ではあるけど、外套を脱ぎ去ってから向けられる視線の熱気も数もケタが違う。自信を持って立ってるつもりでも、足がすぐみそう
だ。

「何か分かるか？」

「いや、全然わからん」

「小さいということは分かる」

「小さいわね……」

「小さい……」

……熱意があるからと言ってしつかり仕上がりが分かるわけではないようだ。

まあその辺、そもそも言うところと日本人とでは筋肉の質がまず違うから、見ただけで分かることは少ないだろう。仕方ない。

『戦績は6戦6勝、まだ無敗ですがここまでG2以上のレースの経験

はありません』

『着差が全ての指標ではありませんが、これまでのレースでは1バ身以上離してゴールできたのは一度だけのことです』

『同じレースで走ったウマ娘からはとにかく並ぶと走りづらいとの声が寄せられている不思議なウマ娘です。本日も尻尾は回転してみせるのか』

ワハハぼくの紹介だけすっげえ珍奇。

いや仕方ないけどね他に言いよう無いだろうし。変な走り方で変な位置取りしてなんかぬるつと勝ってる外国から来たウマ娘とか。知らない人が見たらこれ何かの呪術の介在でも疑うんじゃないだろうか。

まあ前提からして霊的現象がありふれてるけどねこの世界。ぼくに限った話でもなくウマ娘という存在自体がオカルトの塊みたいなものだし。マーベラス空間を自在にコントロールするマーベラスみたいな子もいるし……。

よし、考えてもしようがないこと考えるのやめよう。適度に笑顔を振りまいて、手を振りながらパドックから戻る——と、そこで、ぼくは普段……少なくともこのレースで見えるはずのない顔を見かけ、足を止めた。出走者名簿は見て知ってたけど、本当に出てるなんて。

「どもです、ファル子先輩」

「あつ、ストライプちゃん。今日はよろしくねっ☆」

「よろしくお願ひします……」

思わず、一瞬足元を見てしまった。

今日芝だよね？ 中山レース場の芝全部抜いたりしてないよね？

「ファル子先輩、ダートウマ娘ですよね？」

「そうだよ？」

「ジュニアカップ勝ってるのは知ってますけど……」

砂のサイレンススズカとも呼ばれる逃げの鬼、スマートファルコン。

……と、呼ばれるようになるのは先のこと。今の彼女はダート路線の注目ウマ娘という見方が主流で、そこまで大覚醒しているわけでは

ない。

前走のアーリントンカップでは10着、その前の共同通信杯では7着。芝に何度か挑戦しているものの、今はどうにも振るわないというのが実際のところ。これがダートなら、間違いなく今のトウインクルシリーズにおいて強豪のひとりに数えられると思うのだけど……。

「確かにちょっと難しいけど、絶対に勝てないなんてことは無いよっ。ファンの皆にファル子が『winning the soul』を歌ってるところが見たいって言われたんだもん。ウマドルとして、全力を尽くさなきゃ！」

「……なるほど」

眩しっ。

ここまでまつすぐにファンのことを想ってる姿を見せられると、自分のやってることがなんとも卑小に思えてきてしまう。精神攻撃か何かか。

勿論本人にその気は全く無いんだろうけど。

「ぼくも負ける気はありませんよ」

「もつちろん！ お互い頑張ろうね！」

「はいー」

ともかく、ここからだ。

笑顔を維持したままにファル子先輩を見送り、ぼく自身はコースへ向かう。

レースまであと少し——心臓が強く脈打つのが、自分でもよくわかった。

皇月賞

地下バ道を通ってコースに出ると、既にターフの上は濃密な緊張感に満たされていた。

当たり前か。G1だ。この舞台で緊張しないでいられるのは、世間一般で言うところのよっぽどのバカか、もしくはそれだけ胆力のある大舞台向きの性格をしているかだろう。

そして、そのどちらであつても間違いなく大物だ。

緊張しないでいられる、またはその緊張感を心地よく感じていられるようなウマ娘——例えばテイオーなど——は、疑う余地もなく天賦の才の持ち主だし、対してバカだ何だと言われてるひとでもG1の舞台に上がってきた時点で本物の実力を備えた天才と言えよう。あるいは、他の能力を削ぎ落としてでも競走に一極集中していると表現することもできる。

総じて、彼女らが緊張感を苦にすることは無い。だから、頭一つ抜けて強い。どちらも尊敬に値する才覚の持ち主だ。

では、緊張を感じて重荷になつてしまつていいるひとが劣っているかという、そういうわけではない。

緊張すると自覚しているからこそ、緊張による能力低下をもものとしめないように鍛え上げるわけだし、自分自身の状態を素直に認め、正しく向き合えば能力の向上が期待できる「適度な緊張感」として空気を捉えることができるはずだ。あるいは、「領域」——ゾーンと呼ばれる超集中状態に最も入り込みやすいのは、こうしたウマ娘かもしれない。

——では、ぼく自身は？

(ま、どのタイプでもないか)

どうにもぼくは脚質といい走者としてのタイプといい、類型から外れやすいようだ。

まあ元来がウマ娘というよりシマウマ娘だから仕方ない。

(……まだ時間はあるな)

時計的にも、ウマ娘の集まり方にもまだ余裕はある。

ぼくは早いうちにコースの方に来ていたアイネス先輩に後ろから声をかけた。

「せくんぱいっ」

「うっ……ストライプちゃん。これは嫌な予感がするの……」

「めいっぱい可愛い声作ったのにこの態度よ」

「余計怪しいよ」

「ひど」

「普段そんなことしないのに急に猫まで声で近づいてくるなんてそんなの……」

ま、実際してないわな、こんな真似。

状況が状況なので、ぼく自身も普段やらないことをしてしまうほど浮ついているらしい。

これはこれで不気味に思ってくれるならいいか。

「敵情視察ってところ？」

「ま、そんなところです。一番人気で朝日杯の覇者ですよ。それはもう十分に注意して走らせてもらいます」

「うくん……これは嫌でも去年のこと思い出しちゃうの……」

思い出させようとしているとも言おう。

シードリングカップでの一件は、アイネス先輩にとつてやや苦い記憶のはずだ。ぜひとも意識してほしい。

「あ、そうだ。社長って呼んだ方がいいの？」

「ぶっ」

そんなぼくの思惑を感じ取った——わけではないだろうけど、予想外のところから変なカウンターが飛んできた。

社長って何!? と他のウマ娘がギョツとしているのが見える。

「普通に呼んでくださいよ……」

「お返し。これでおあいこなの」

イタズラっぼくそう言われてしまうと、なかなかこっちも言い返さきれない。

事情を知らないひとから社長とは何かとその場で聞かれたけど、こ

ちらも社長ということですが、というくらいしか答えきれず苦笑するハメになった。

と、そこであるウマ娘がコースに入ってきたことで、一際強い歓声が客席から飛んできた。アイネス先輩に次ぐ本命。弥生賞を制したライアン先輩だ。

「ファイトですわライアーン！」

「頑張ってくださいませ〜」

……出どころは、案の定というかメジロ家応援団である。

マックイーンの近くにはスピカのトレーナーさんも来ているようだ。引率——いや、偵察かな。

マックイーンはダービーに間に合いそうにないけど、それでも菊花賞に出ることを視野に入れている以上、対抗となるウマ娘の情報は欲しいはず。特にライアン先輩や、長距離が得意なことを明言しているぼくに関しては重要なレースは直に見て対策を立てておきたいところなのだろう。

で、マックイーンたちがいる場所は関係者席なので、そこに更にベテルギウスのメンバーが加わった。

引退現役問わず錚々たる面々が揃ったせいで辺りがざわついているが、このくらいの騒ぎはレースだとよくあることだ。何せ場合によつてはリギルが偵察に来るなんてこともある。会長なんていることが知られたら結構な騒ぎになってたし。

ともかく、ライアン先輩は声援に応じ……はしたものの、すぐ気恥ずかしそうにしながらゲート前にやってきた。

「こ、こういうの少し照れるね！」

「慣れましょうよ」

「早いとこ慣れるの」

言わずもがな、ライアン先輩は押しも押されぬ超有力ウマ娘かつあのメジロ家のご令嬢。注目度も高く、人気も集まって当然なわけだ。

この先G1どころかG2でも多分普通にファンは応援に押し寄せらるだろうし、今のうちから慣れてもらわないとそれはそれで困るというか、なんというか……。

「改めて、今日はよろしくね！ アイネスも、ストライプも！」

「よろしくなの！」

「はい、こちらこそ」

一方で、ぼくに向けて挨拶するライアン先輩は、他のウマ娘とやや違って自信に満ちている。ぼくの風評を聞いているなら、多少なりとも警戒するはず。

それは筋肉のおかげ、と言う以上の何かがあるように感じ取れて……これは何かあるかな。マックイーンから何か聞いた？

ま、いいか。

——さて、何はともあれそろそろ時間だ。

係員に促されて順番にゲートに入っていく。ぼくは最初にゲートに入ることにした。

鉄の無機質で冷たい空気の中、他のウマ娘がゲートに入ってくる時の金属音でどんどん競争心が掻き立てられていく。

際限なく大きく膨れ上がってきそうな本能を理性の鎖で抑え込む。前傾姿勢になって芝を踏みしめる。

まだだ。まだ、まだ——。

——今！

『皐月賞、今スタートしました。まずサバンナストライプがロケットスタート！ アイネスフウジンがこれに続きます』

「一！二」

今回のぼくの作戦は逃げ。それもただの逃げじゃない。加速力任せにスタートからハナを奪い、尻尾も大回転させるほどの大逃げだ。

中山レース場2000mのコースは、その構造上ゴール前のみならずスタート直後にも坂が待ち受ける。それもただの坂ではなく、3ハロン近くも続く長い坂だ。

皐月賞……中山レース場2000mのコースは、一般的に先行ウマ娘が有利と言われている。よってスタート直後は先行争いが激化する傾向にはあるのだが、同時にここは「先行争いを制しながら余力を残す」という微細な調整が必要になる難所だ。

まっとうに考えればここで大きな消耗は避けるべきで、一旦控えておくのが定石だろう。

(けど、関係ないッ！)

だが、だからこそ全力で行く。

定石というものは「ほとんど」「大半の」ひとにとって有効な戦術を指すが、時と場合によってはそうではない。ぼくのように「普通」からある程度以上離れている場合はより顕著だ。

極端なことを言えば、坂路で速度が落ちないだけのパワーと、その上でその後速度を落とさず走りきれる膨大なスタミナがあれば定石を外れても問題ないわけだ。

「大逃げだとお!?」

「トレーナーさんあなたストライプの走り見る度に驚いてませんか？」

「仕方ないだろ！」

「あの子は勝つためなら卑劣な手以外は何でも使ってきます。この程度は想定して然るべきですわ。ですが——」

——ストライプへの対処法は教えています。

客席の方から聞こえてきたその言葉で、先程のライアン先輩の態度にも納得がいった。

これまでのレースでぼくの弱点はだいたい見えているはずだし、最初の模擬レースでもぼくは一度テイオーに負けている。

恐らく、マックイーンはライアン先輩にこう教えているはずだ。

(ペースを乱されず自分の走りを貫けば勝てる)

「ペースを乱されることなく、ライアン自身の走りを貫けば勝てる可能性は高くなります」

そのことはよく知っている。模擬レースでテイオーに負けた理由も、言わばそれだ。

中距離を走る時、ぼくは結局のところ相手をなんとかして乱さなければ勝ち目を作れない。

——やろうと思えばできないわけではないけれど、それは今やっても仕方ない。

『スマートファルコン6番手、続いてハネダマーズ、サンダーセレク

ト』

ファル子先輩は6番手——ファル子先輩の苦手な芝で、既にあの位置だとまずいのではないだろうか。

ライアン先輩は……もつと後ろにいるようだ。現状はほぼ最後方だろうか？ 全体の様子を見渡せる位置なのがいいが、一気に追い込んでくるとは思い辛い。差すために中盤で上がってくるはずだ。

『坂を登りきって2コーナーへ。先頭から4バ身ほど離れて2番手アイネスフウジン。続いてグリーンコンゴウ。トピックウエスト——』

アイネス先輩も、どうやら2番手につきつつ様子見の姿勢は崩せないようだ。シードリングカップで罫にハマたことが効いているらしい。

思い切り尻尾を回す。大逃げの状態が維持できるなら、この状況は望むところだ。

「——ドーベル、この状況……」

「そうね。マックイーン、ラップタイムってどうなってる？」

「ラップタイム、ですか？ トレーナーさん、いかがですか？」

「ああ——」

そろそろ800m。客席から俯瞰的に見ているからか、アルダン先輩やドーベル先輩をはじめとした既にシニア級でしのぎを削っていたメジロ家のひと達は気付いているようだ。

トレーナーさんに聞いたということは、マックイーンも把握するかな。うちのチームメンバーは皆状況もぼくの作戦も理解しているので、何か言いたげなような、それでいて嘘だろとでも言いたげな表情で固まってる。

『1000mを通過してここまで1分3秒！ 遅いペースでレースが推移しています！』

「なあっ!？」

「ええっ!？」

「やっぱり！ ライアン！ 急いでええ!!」

「アイツマジでやりやがった……!」

「にやはは……まさか、2000mで幻惑逃げ、なんてねー?」

ぼくの第二の弱点、それは、全力で走る時にあまりにも「特徴」が出過ぎるところだ。

ひとつは種族的特徴。本能が刺激されすぎて、せいぜい行動のオンオフの切り替え程度のことしかできなくなる。これはマルチタスクの訓練を積んで必死に克服しようとしているが、本当の意味でどうにかなるまではまだ時間がかかりそうだ。

もうひとつは……尻尾だ。スパートに入るとどうしても回転してしまう。加えてそうしなければ速度がガタ落ちする。

でも、ぼくは尻尾を回さないと全力で走れないと言ったことはあるけど、「尻尾を回したら必ず全力で走る」とはひとつも言っていない。

6戦かけて印象を付けてきた甲斐があった。もつとも、単純に尻尾を回すということだけでは引つかかってはくれない。だから同時に「何をしでかすか分からない」「とにかく一緒に走り辛い」、そして「ペースを乱してくる」ということも印象付けしておいた。

こうすれば皆思うだろう——自分の走りを貫き通せば勝てる。だから、ハナから前提を崩すことにした。

ぼくが全力で行っていたのは、坂道を登りきるまでだ。それ以降はずっと尻尾だけを回してスピードは徐々に緩めていた。

他のウマ娘はぼくの動向を気にして……というのもあるが、大逃げは膨大なスタミナが要求される戦法。いくらなんでも、序盤の坂路を全力で駆け抜けた上でその後もペースを維持し続けるなんて芸当、できるわけがないと誰もが思っているはずだ。

実際できない。なので、ここで一息入れる……ついでに尻尾を回したままにする。坂路を登り切る頃にはそれなりの差がついているため、後ろに行くウマ娘にはぼくが全力で大逃げをかまそうとし続けているように見えるだろう。

後々の展開のため、そして何より「自分の走り」を貫き通すため、差を詰めて余計なスタミナを使うわけにはいかない。それこそぼくの思う壺だ——と、思い込ませる。

——結果、1000mを通過した時点で差を維持したままに、ペースが落ちて一息入れる余裕が生じている。

「こんな馬鹿げたこと、本気で考えたの!？」

「よりにもよって……! G1でなんて……!」

当然、普通はこんなことしない。皐月賞、中山レース場2000mの構造あつての奇策だ。

皆の体内時計が正確に1000m1分のラップを刻んでいたらこの作戦も無意味だし、先にサブトレさんに言ったように3ハロン辺りでスピードを落とした段階で看破される可能性も否定できなかった。けど、皆が一流の選手でぼくのことを警戒してくれているからこそ、少しばかり話が変わる。こちらの動向を常にかがいがいながら1000m1分ピタリのタイムを刻むというのは至難の業だから。

ここからが——本当のスパート。

『サブナンラストライプ速度を上げた! 速度を上げた!? アイネスフウジンが追いかける! 後続もグングン上がってくる! グングン上がってくるぞ!』

アイネス先輩は生粋の逃げウマ娘。一瞬の切れ味で勝負するわけではない以上、直線の短い中山レース場ではとにかく前に出なければ話にならない。これはいい。

ただ、焦って上がってきた他のウマ娘の行動は悪手だ。

一般的に、スローペースでレースが推移した場合、逃げ、先行ウマ娘に有利と言われる。中団以降と差をつけたまま、スパートをかける余力が残るためだ。

反対にハイペースで推移した場合は、先行集団がバテて速度を落とすため、後方で控えていた差し、追い込みのウマ娘に有利と言われる。ではこの状況がどうかと言うと……どちらとも言えないというのが現状だ。ここままで皆脚を残すことはできているだろう。だが、ここからはゴールまでフルスロットル。全身全霊でただ駆け抜ける超ハイペースの消耗戦だ。

最高速が劣ってる、それはどうしようもない。仕方ない。

だから、1000mの間全力を維持し続ける。

『まもなく3コーナー回って縦長の展開。このまま流れるか! 後ろの子たちは間に合うのか!』

「間に合えええっ!」

「っ……届いてえっ!」

——けど、ああ、やっぱり速い。

この場にいる皆は一流のウマ娘だ。作戦が上手くハマっても、もう足音が背後から聞こえてきそうなくらい迫ってきている。だけど……!

「抜かせるかあっ!!」

ぼくの取り柄はスタミナとパワー。速度を落とさないことにかけては誰にも負けはしない。

一瞬の切れ味で最後方から上がってこようとも、根性と執念で並びかけてこようとも。

『さあ最終直線に入った! アイネスフウジン並びかける! サバンナストライプが粘るか!』

「!?!」

「っ!!」

——そして一瞬、アイネス先輩たちの脚ががくりと落ちかける。

中山の最終直線の関門、心臓破りの坂だ。

中山の直線が短いと呼ばれるのは単に第4コーナーを抜けてからの直線の長さだけを言っているわけじゃない。坂を抜けてからの直線が極端に短いというのも一因にある。

だから、大半のウマ娘のスタミナが尽きるここで、差が決定的なものとして表出することになる。

けど——ぼくのスタミナはまだ残ってる!

『ここで粘る! グンと伸びてきて今! ゴール!!』

最後の最後にもうひと伸びを見せて、ぼくは誰より早くゴール板を駆け抜けた。

確信を持って、片腕を振り上げる。

『電力を無尽蔵に生み出すタービンの如き回転を見せて! 一着を手にしたのはサバンナストライプ!!』

——直後に聞こえてきた実況の言葉で、思わず冷静に「あ、そう来たかあ」と思考してしまった。

史上最遅の

数万の観客が見守るウイニングランの最中、ふとした拍子に観客席からこんな声が聞こえてきた。

「皐月賞は『最も速いウマ娘が勝つ』と言われている」

「どうした急に」

いつもの人たちである。

あ、見に来てくれてたんだーとのんきな思いを抱くのと同時に、いつもなら始まる前に話し始めるよねこの人らと思わなくもない。

「古くはイギリス2000ギニーがそう言われていたことに由来するが、皐月賞でもそれは変わらない」

「実際、アグネスタキオンやヤエノムテキなど、皐月賞ウマ娘はスピード自慢が多いな」

「……ベテルギウスのウマ娘も多いな」

「多いな……」

……タキオン先輩にスカイ先輩にシャカール先輩。そこに加えてぼくだ。いや本当に多いなベテルギウス所属の皐月賞ウマ娘。

そこ言い出すとダービーウマ娘が多い（予定の）スピカや三冠ウマ娘がいるリギルも大概ヤバいんだけど、そこは置いとこう。

「そんな中で勝ち上がったのが『レースに向いていない』と言われる速度の縞毛のウマ娘だ。これは業界としても間違いなく異例のことと言えるだろう」

「確かに異例だということは分かるが……あれは結局何がどうなって勝ったんだ？」

「……………」

「……………」

お兄さんたちは二人して首をかしげていた。

表面的には、尻尾の回転を逆用した幻惑逃げを決めて押し切った、までは読み取れる。

同時に、「何でそこまで上手くいったのか」を読み解くことは難し

い。

幻惑逃げとは本来、長距離での逃げ切りを狙うための戦術だ。序盤の1000mをハナに立ってオーバーペース気味に差を広げ、次の1000mでペースを緩めて息を入れる。最後の1000mで息を吹き返して速度を上げ、先頭に立ったまま逃げ切る……という流れになる。

それをわざわざ中距離でやろうというのがまずどうかしてるし、加えてスピードこそが重視される皐月賞で、他のウマ娘が皆して速度を抑えるのがもうおかしい。様々な要因が絡み合った結果なので、分析してみても多分二度と再現不可能だよコレ。

そうなるように仕組んだとはいえ、全員を罠にハマられたのは我ながら出来すぎなのは確かだ。

ひと通りウイニングランを終えて戻ると、ライアン先輩とアイネス先輩にふたりして背中を軽くペしペしされた。

「あたたた」

「ナイスラン……だけど、こんなに悔いが残るレース初めてだよ」

「せめてベストを尽くさせてほしかったの」

「そう言われても……」

ぼくにとつてのベストとは、相手に全力を出させないことにある。一方的にぼくが全力を出せる環境を作らないと勝負にもならない。

情報戦や心理戦、印象操作や、どこまで能力を見せるかという駆け引きまで。全部がレースの一環だ。

ゲーム的なことを言うと、ぼくはデバフを常時撒いてくるタイプのクソボスだと思ってる。

後からすれ違ってくるウマ娘もこぞって背中をペしペししてくる。そりやまあレースってそういうものだとは分かっているけど、イラッとはするよね。普通に考えて。

「一着おめでとうっ★」

「うわっ」

その中に、一際強く背中を押す手があった。ファル子先輩だ。

その表情はウマドルらしく笑顔を絶やさずにいるけど、悔しさや悲

しみの色は隠しきれない。

——18着、という結果は、残酷なほど明確に彼女の芝への適性の低さを物語っていた。

「ホラホラ、お客さんに手を振ってあげて！ 今日のセンターはストライプちゃんなんだから！」

「……はいっ！」

そうした内心の感情を飲み込んで背中を押ししてくれる先輩に感謝しながら、ぼくは再び観客に手を振って応えた。

……≠……

世界初、日本のクラシック三冠における縞毛のG1勝利。それは、「winning the soul」のライブ映像と共に大々的に報じられた。

元々カレンのせい——というかおかげというか——で変にコアな知名度があつたんだけど、これによって全国的に爆発的に知名度が向上した。これは単なる勝ちじゃなく、皐月賞の大本命であるライアン先輩とアイネス先輩を破つての勝ちだったのが影響したせいもあるだろう。

急に各所でダービーの本命、なんて持ち上げられるようになったのはだいぶ居心地悪いけど。

で、だ。

「また取材……!?!」

「また取材です……」

皐月賞から数日。連日取材が続いてそろそろぼくはうんざりしかけていた。

インタビュー用の原稿を作るためにパソコンのキーを打つ手は動かしながら、しかし上半身はその場に投げ出すようにしてでると机に突っ伏す。サブトレさんやトレーナーさんも今回は少なからず疲弊しているようだ。

ここんところ学校、取材、トレーニング、取材、トレーニングのローテーションで一日が終わってしまっている。いくらショートスリーパーでも寮生なのだからルームメイト、というかミークにかかる迷惑も考えないといけないし、この上に仕事となると相当キツイ。

サブトレさんも申し訳無さそうにはしているけど、これ自体は別にサブトレさんのせいというわけでもないから何とも言い辛いし……。

「この調子で一週間か。ダービーへの調整もしなければならんし、そろそろ学園の方からより強く制限をかけてもらわんといかんな」

「現状ですら制限はかかっているんですか……」

「メディアとして質の良くない会社というのは必ずありますので、そういうものを弾いてはいるはずですよ」

「四六時中密着取材とかはされてないからまだマシではありますけど……」

「何十年前のマスコミじゃないんだぞ」

我ながら基準が古いのは否めないし、オグリ先輩がそういう目に遭ったという話も聞かないので多分大丈夫だろうけど、どうしても想像してしまうのは強く印象に残っていることだ。

変な話、頭の中で「マスコミと言えば偏向報道と捏造ですよねー」とばかりに良くないバイアスがかかっている。なんというか古いながらも過激な実例を知っているがゆえの悲しいサガだ。

「ミークもずーっと取材受けてますし。というかぼくらふたりセットで」

この前は雑誌の表紙、その前はオフショットで特集インタビューだった？ で、明日は合同トレーニングの風景をテレビ取材して……これ全部ミークとだ。

同じチームだからってスナイパーⅡサンとスカイ先輩が二人で合同でやってたのは見たことあるけど、ミークは専属、ぼくはチームで境遇が違うのに……。

「縞毛に白毛、走らんと言われとるウマ娘がふたりしてクラシックの一冠をもぎ取ったんだ。そうもなる」

「毛の色で走る、走らないという見方をする事自体が偏見では？」

縞毛と白毛の絶対数が少ないからそう見えるだけで、走れるかどうかという点はあくまで個人の資質によるもの。オグリ先輩やタマ先輩に対するスカイ先輩のように、将来的に大勢後を追うひとが出てくるはずです。ここまで大々的に扱う必要は無いのでは？」

「その第一人者として先駆けになった以上大々的に扱われて当然でしょう。詭弁を弄さないでください」

「はい」

「お前という奴は本当に……」

「どうか私達に言ったところで逃れられるわけがないでしょう」
「ですよねえ」

逃げちやいけないのも分かってるし逃してくれないのも分かってる。言わばこうやってテキトーなことと言ってガス抜きしつつ、逃げないことを再確認してるようなものだ。

思いつきり体を逸らして椅子を……体格のせいで、揺らしたらそのまま後ろに向かってガツチャンするのが目に見えてるのでやらない。

「……ちなみに、依然無敗ですがダービーの方はいかがですか？」

「どうでしょ？ 言っても一番マークがキツくなりますから、無敗期間はそう長くないと思いますよ」

既にぼくは史上最遅の皐月賞ウマ娘、なんて名誉なんだか不名誉なんだか分からない呼ばれ方されてるし。実際にあの場にいたひとたちは勿論注目してくるし、聞く人が聞けば「遅いのに皐月賞を制するなんて何かあるに違いない」と思って研究もしてくるはず。

「ぼくもやる分には勝つつもりですけど」

「……それはそうでしょうね。インタビューまで利用してわざわざ意図的に勘違いさせやすい情報を撒くとは思いませんでしたよ」

「ふほほ」

——せっかくなので、一応。インタビューなどで色々根掘り葉掘り聞かれるのを利用して、今後の布石は打っているつもりだ。

こういった雑誌インタビューや一問一答、対談というものは人が思うよりも遥かに多くの情報を読者に与えてしまう。逆にそうして与える情報に指向性を持たせて、恣意的にある程度の「歪み」を持たせ

られればどうか？ これは一種の実験でもある。

全部のインタビューや雑誌をチェックするとも思えないし。数撃つて当たればいいな程度の認識だけど。いずれにしろやらない理由も無い。

「いずれにしろ、練習通りに行けば……」

「レコードギリギリくらいの走りはできるな？」

「多分ですけど」

現在のダービーのレコードは2分25秒半ば。坂やコーナーでの減速を考慮に入れつつ、現状の9割5分の力……60kmで走行し続けることができればあるいは……レコードに迫ることはできるかもしれない。

逆に言えば今のところ、ぼくにできるのはそこまでだ。等速ストライドができていればもしかしたらレコード更新までありうるけど、この基礎能力じゃこれが限度。データは嘘をついてはくれないし、騙されてもくれない。

だから、人を騙す。人は限界を超えてくるものだ。それを前提に動く。

「ひと月程度で仕込みが機能するかは未知数ですけどね」

「ひと月丸々使って仕込みをしようというのが異質なんだお前は……」

「トレーニングみたいなもんですよトレーニング」

まあぼくの能力向上じゃなくて他人の（レース中の）能力低下を狙った仕込みだけど。ひひ。

外枠不利

春の天皇賞、今年の注目選手は主に三人に絞られる。

前年の覇者であり、ステイヤーズステークスで大差勝ちの偉業を成し遂げたメジロブライト先輩。

菊花賞で逃げ切り勝ちを果たし、3000mの世界レコードを持つスカイ先輩。

そして、前走の3000m……阪神大賞典においてブライト先輩を破り、驚異的な成長を見せたスペ先輩。

フクキタル先輩も出走しているが彼女はムラっけが大きすぎ、かつ今は不調のため本命からは外れていた。

ぼくらとしてはやはりチームとしてスカイ先輩を応援していたのだけど、逃げ切り……はならず、惜しくも3着。スペ先輩の恐ろしいまでの潜在能力をこれでもかというほど見せつけられたレースだった。

ヴィクトリアマイルには、スナイパーサンが出走。なんかぬるっとした動きで横から1着をもぎ取っていた。

が、直後の勝利インタビューの場で海外挑戦することを表明。観客も騒然と……はしなかった。

良くも悪くもベテルギウスは海外挑戦するウマ娘が多いチームだ。「あそこならまあ行くか」くらいの認識で済んだのは、良いことなのやら悪いことなのやら……。

ただ、ぼくが思うにチーム的な傾向もだけど何かこう、運命的なものを感じて海外挑戦に行くひとが多いと思う。ぼく含め。

続いて、オークス。ダービーの前週に行われるティアラの二冠目のこのレースでは、なんとミークが連勝をあげてトリプルティアラに王手をかけた。

ミークはここまで阪神ジュベナイルフィリーズ、桜花賞と順調に勝ち上がってきたが、それ故にマイラーなのではないかと距離適性を不安視されてもいた。しかし現実には2400mという長距離に

片足を踏み込んだこの距離でも全く苦にせず走りきっていつも通りの調子でインタビューに応じてのけた。

実は適性もつと広いんですよ、とは流石にぼくから言えなかったけど。桐生院トレーナーの作戦というセンも否定しきれないし。

さて、ともかくひと月が経過して、問題はぼくのことだ。

本格化の状況としては、完全にピークに達したことで速度は……特に上がらなかった。皐月賞の時点でピークになるように調整していたので当然だ。

なので磨くのは相変わらず小技だ。今回は特に、皐月賞以前から鍛えていたことなどもある程度完成に向かうことになった。流石に等速ストライドなどは無理だけど。

東京レース場、控室近くの通路。他のウマ娘がパドックに急ぐ中、ぼくはひとり壁にもたれかかって外套のフードを被りながらぼんやりしていた。

ダービーは最も運のあるウマ娘が勝つ、と言われていた。もっと言えばこれは、ダービーまで上がってくるウマ娘は実力が伯仲していることが多いため、すべての要因を削ぎ落としていった結果最後に残るのが「運」だけになる、ということでもある。

——ともかく今回の運を占う大事な枠番抽選。ぼくは8枠16番という、東京レース場で不利とされる外めの枠番になってしまった。「……………」

外枠不利、というのはなにも東京レース場に限った話でもない。コーナーリングのために内へ切り込もうと思うとロスが生じやすいので、新潟レース場の1000直でもなければ、ぶっちゃけどこでも不利は不利だ。

それでも殊更に東京レース場が挙げられるのは、その構造によるところが大きいだろう。2400mコースと2000mコースは特に、スタートしてすぐにコーナーが待ち受けているため斜行の危険性が生じやすい。このため先行争いに混ざり辛く、より不利な状況に陥りやすい、ということでもある。

(うーん……………こうなると、逃げはやり辛くなる……)

奇策を使う、と思わせておいての正攻法というのは何かとハマリやすい。と言うより、正攻法をより通しやすくするのが奇策だ。最後の最後には自分の力こそが頼りになるのだから。

だから不安を煽るためにインタビューでは今回も奇策を使うという旨のことを発言しておいた。インタビューからはこれまでの作戦の中身について聞かれたりもしたが、それについても応じた。——それぞれのインタビュアーに別々の策を明かす形で。

こうすると各紙別々の策を取り上げる形になるため、対策を打つにも多種多様な雑誌、媒体をチェックする必要が生まれて、それ相応の手間をかけないといけなくなる。そしてぼくのダービーでの作戦はそもそもここまでやったこととは別のことになるため、対策があんまり意味をなさない。

……まとめサイトやwikiに取り上げられてインタビュー要約された時は思わず悲鳴上げたけど。熱意のあるファンは怖いと思いき知らされた瞬間だった。

(ま、逃げを打つのに制限が出るだけならなんとでもなるか)

とはいえ、ぼくの脚質はそもそも差し。それも、後ろからつついて無理矢理走者を前に押し出す、トレーナーさん曰く「煽り」と、レースで言ういわゆる「まくり」第3コーナーや第4コーナーなど、レース中盤後半から一気にロングスパートをかけて先頭に向かう戦法を内包した異質なものだ。これはこれで、本来の走り方に戻す良い機会ではあるだろう。

加えて、「外枠で逃げ切りなんて無謀なことを狙うはずは無い」と思われているはずだ。だからこそ行く——と、思ってもらおう。

——そもそもぼくは予想外のことならある程度何でもやるつもりだけど、だからと言ってメリットが無いことをする気は無い。

8枠16番という大外に近い枠から逃げのペースで内側に向かつて切り込んでいくのは、はつきり言って無駄だ。……いや、他のひとならどうか分からないけど、少なくともぼくには。何せ最高速が最高速だ。ロスが発生しないよう走らなければ、そもそも逃げの格好にすらならない。

奇策も珍策も、基本的にリターンがあることを前提にやるものだ。リスクだけを負うんじゃないやそれは博打や投資ではなくただの投棄に過ぎない。

それでも「やりかねない」と思わせる印象操作が大事なのだけど――

「うわあっ!?!」

「?」

深く思索に入り込んでいたせい、他人が近づいてきているのに気づかなかったようだ。

顔を上げてフードを取ってみると、アイネス先輩がひどく驚いた顔でこちらを見ていた。

「どうしたんです、幽霊でも見たような顔して」

「こんな暗がりです、フード被ってるから実際幽霊とか暗殺者とかに見えるの……」

「そんな大げさな」

「そうは言ってもいつもより雰囲気かピリツとしてるし」

……前にも似たようなこと言われたことあるな。もしかしてぼくはぼくで緊張感が表に出やすいのだろうか。

その上で無理矢理明るく振る舞ってるっぽいから余計不気味に思われるとか。無いとは言えない。

「まあ、ピリピリもしますよ。今年のダービー、本当の本当に大入り満員じゃないですか」

「確かに。第1レースからすごかったの」

史実における正確な動員数は……覚えてないけど、たしか史上最多、とも言われていたと思う。公式発表では19万6517人。

――勝者は、「アイネスフウジン」。

……もつとも、史実通りにいくとは限らない。これはレースだ。不確定要素が一つ増えるだけで何もかもが変わりうる。それこそ、ぼくという不確定要素の塊が一つ混じれば……。

「ところで、パドック行かなくていいの?」

「はあ。え?」

「あたしもう行ってきた……ちよつと控室に忘れ物取りに来ただけ
ど、ストライプちゃんそろそろじゃないの？」
パドック。

あ、そういやアイネス先輩何枠何番だったけ？

えー、確か6枠12番——6枠12番？　ぼくが8枠16番
で、パドックでの紹介は4つ後……で、時間的には……。

………ほはひよえあ？

この瞬間、ぼくはパドックまでの一路で自己最速を更新した。

……≠……

地下バ道を抜けると、十万をゆうに超える満員の大観衆が放つ熱気
と歓声が、瀑布のようにコースに降り注ぐのが感じられた。

正直、だいぶ怖い。

いくらなんでもこんな来る!?　とか、入場料も安いと言ってもタダ
じゃないはずなんですけど、とかとりとめのない困惑した思考が浮か
ぶ。ぼくはそれを全部押し殺して、なんでも無い風を装って笑顔を貼
り付けた。

まあ、ここ数年のダービーは色んな意味で見応えがあったし、注目
度が高まつても仕方ないと思う。フラッシュ先輩の3ハロン32
秒7の閃光の差し脚とか、エル先輩とスペ先輩の同着とか……同じよ
うに、ぼくも「何か」してくれるんじゃないかという期待の現れだ
ろう。加えて、今年はここまで無敗で来た縞毛という話題性の塊がい
る。人が詰めかけても仕方ない。

……あと、東京レース場はトレセン学園から目と鼻の先なので生徒
が大勢やってきているというのも一因だろうけど。

「……よっ」

前に一歩踏み出すと、それだけで大歓声が始まるのを感じ取った。
うう、一挙手一投足が見られてる。それだけで大騒ぎが始まるとか
怖い辛い帰りたい。

もちろんそんなわけにはいかないので、必死に背筋を伸ばしながら

虚勢を張ってさも気にしてない風を装う。

態度は武器だ。弱気な姿も使いようだけど、競うにあたっては強気であるに越したことはない。曲がりなりにもぼくは臆月賞ウマ娘だ。それが自信满满々であるというなら、一緒に走る相手はどうしたって威圧感を覚えるし警戒もしてくるはずだ。

「……………」

「ふん……………」

見る限り、こつちをマークしようとしているひとがいるようにも見える。

ぼくも同じ立場ならそうする……………だろうけど、さて、どうするだろう。マークについたらそれを逆用して翻弄する、というのは以前のレースで見せたし……………かと言ってマークせず自由にさせておくのも問題だろう。結局のところ「マークしておく」という結論は変わらないはずだ。

『さあ、今日の出走ウマ娘が出揃いました。3番人気はアイネスフウジン。朝日杯王者の実力を今度こそ見せつけることはできるか!』
「なんだかあんまり嬉しくない紹介なの」

最後の18番のウマ娘がコースに出てきた段階で、実況の人が今日の注目ウマ娘の紹介を始める。最初はアイネス先輩のようだけど、どうやら紹介のされ方が不本意らしい。

当然か。前回は力を発揮できなかった、と断言されているようなものなのだし。

「実際、前は悔いが残るって話してましたもんね?」

「ストライプちゃんのせいでしょう?」

「えへっ」

『2番人気は臆月賞ウマ娘サバナストライプ。ダービーではどんな作戦を炸裂させるのか。一体何をしでかしてくるのか。必見です』
「ぼくの紹介も大概おかしくないですか?」

「……………こういうこと言っちゃいけないけど、ストライプは言われても仕方ないと思うよ」

「えー。でもしでかすって表現は……………」

まあライアン先輩の言う通り言われてもしょうがない。でも「しでかす」はやっぱりひどくない？

「いや『しでかす』でしょ」

「『しでかす』だよね」

「『しでかす』だろ」

「ひつど」

ライアン先輩たち以外の出走者の皆さんにも言われてしまった！

いや、やっぱこの表現微妙にひどいって！ 普通の枠組みに入らないのはそうだけど、まともじゃないって言われてるようで気が滅入る！

『そして一番人気、メジロライアン。メジロ家の誇りを胸に、ダービーウマ娘の栄光を手にするか！』

「ひとりだけやたらカッコいい紹介されてますよ」

「これが大手の力なの」

「ちよ、ちよつと、変な言い方しないでよ……」

軽口を叩いていると、少なからず緊張が和らいだ気がする。

クラシック級三冠路線における最大のイベント、日本ダービー。そこで緊張感のせいで思ったような走りができないなんてことになったら悔やんでも悔やみきれないし、正直、少し精神をリセットできて助かった。

係員の方の誘導に従ってゲートに入る。つい今しがたの少し緩んだ雰囲気が一気に引き締められた。

心臓が高鳴る。一瞬のうちに無数の思考が駆け巡るのを止めることなく、スタート直後の展開を計算に入れた上でまとめ上げる。

まずは、スタート直後から一手……！

『——各ウマ娘ゲートイン完了。日本ダービー、今スタートです!!』

日本ダービー

——ゲートが開いたその瞬間、ぼくは皐月賞のそれに負けずとも劣らない好スタートを切った。

この中では頭一つ以上抜け出た加速力任せにグンと前に踏み出し、機先を制する。

『スタートからハナを奪ったのはサブアンナストライプ！ 皐月賞のように周りを翻弄する逃げを見せるのか！』

「くっ……い！」

「そうはいかないのー！」

そうはさせない、とばかりに逃げや先行策を得意とするウマ娘たちが一斉に肉薄してくる。

まあ、そうなるだろう。そうする他無い。

大外に近い位置からの逃げ、なんてのは現実的じゃない。加えて皐月賞と違ってスタート直後に坂があるわけでもない。コーナーも近く、構造的にそんなことをすれば逆に自分の首を絞めることになる。

だが、皆の記憶には鮮烈なまでに皐月賞での逃げ切り勝ちが焼き付いているはずだ。先頭に出ることを許せばこの二の舞いになりかねない。だから、考えれば考えるほどこの誘いに乗らざるを得ない。

『しかしアイネスフウジン、ピリカコマンドー、アリススクロース上がってくるー！』

まもなくコーナーに差し掛かる。当然だが、ここから内へ切り込むわけにはいかない。確実に斜行だ。かと言って外めを回るのは論外だ。ロスが大きすぎる。

では、先行集団に紛れるというのは——これも現実的ではない。「それなり」の結果にはつながるだろうけど、ぼくの狙いは最低でも入着。よく頑張った、で済ます気は全く無い。

わずかに速度を落として、周囲を観察できる程度の落ち着きを取り戻す。さて、本番で例の技がどこまで使えるか未知数だけど……。

『流石に外からでは苦しいか。先頭アイネスフウジンに替わります』

コーナーに合わせて内に切り込もうと一瞬考えたが、他のウマ娘の位置取りでそういうわけにもいかない。流石にダービーだ、上手い子が多い。スタートダッシュで振り切ったはずのマークも再開されているし、とにかくこちらを動きづらくさせようという意図を感じる。

——好都合だ。

こちらの思惑を見逃すまいと団子状態になっている今のタイミングなら、背の低いぼくは前傾姿勢になることで他人の視界から一瞬消えることができる！

「あの技って、スナイパーちゃんの！」

「精度は低いかな」

「わあっ!？」

どうやらミスディレクションもどきに反応したらしいスぺ先輩が、更にそのことに気付いてスピカのいる席にやってきたスナイパーⅡサンを驚きで迎える。

「フッフッフ……あれぞまさにカクレミ・ジツ。基本的なニンポだがそれ故に奥が深く見抜くのも難しいのだ」

ワタシなら観客も含めて術中に入れて見せるがな、なんて言っつてふんすふんすと鼻息を荒らげているが、実際彼女の隠れ身の術は、来ると身構えていてもなお引つかかってしまうほど巧妙だ。観客すら手玉に取るというのも大言壮語ではなく、実際に実況さえも術中にはめてしまうほど。

現状のぼくでは、完成度は50%がいいところだろう。

「でもさ、それってすぐに見えなくなるものなの？」

「いい質問だテイオーⅡサン。たしかに普通はそう上手くはいかぬ。しかし、あやつはギャップを上手く使っているから練度が低くとも同じコース内にいるウマ娘を幻惑することくらいはできる」

「ギャップって何なんすか？」

「……なるほど。回る尻尾に、縞毛ですわね」

ぼくは全身どこを見てもだいたい何かしら変な特徴がある。髪は白黒、耳は長いし、尻尾もレースに向いてないと言われる短毛。しかも、それを回転させる。そもそも日本人ですらない。街に出ると変な

目立ち方をするので髪を隠してられる帽子は必需品だ。

——というのは、目立たせない手法を取れば、普段の姿とのギャップから、ぼくの存在に気付かれないようにすることができるといふことだ。

フードをかぶる、ということとは流石にレース中にはできないが、代わりに今の状態でできる範囲で耳を畳んで目立たないようにし、尻尾の回転も止める。速度は伸びなくなるけど元々速度は落とすつもりだったのでちようどいい。

これだけでも、つい一瞬前までの「サバンナストライプ」の姿を見失う。本来のミスディレクションとは用法が異なるが、それでも一瞬の幻惑にはなる。その間に――。

『まもなく2コーナー回ります。先頭からアイネスフウジン、アリススクロース……』

思いつきり……下がる！

『――メジロライアン、フルサイクル、最後尾にエマーシング。並んでサバンナストライプ……、……!?!』

「最後尾!?!」

「下がりすぎだろー!」

……正直言うと、ぼくもウオツカの言う通りだと思う。下がり過ぎなくらい下がってるんだよ、今。女性実況の人も一瞬困惑してる。

しかしこれも、枠番が決まった時にトレーナーさんたちと打ち合わせた作戦の内だ。仮にこれをぼくが一人で考えていたら自信を持ちきれないだろうけど……ぼくの能力を数値として把握しているトレーナーさんたちと一緒に組み立てたんだからそこに疑いを挟む気は無い。

——お前に追い込みができるほどの切れ味は無い。そのことは競争相手も織り込み済みだろう。「まくり」をしてくることを前提として動くはずだ。

——始動のタイミングは任せるが、お前の体力なら……。

「あれはまくりを狙っていますわね。ストライプの脚では追い込みというわけにはいきません」

「先行の位置から行けばいいじゃない。アタシならそうするけど」
「……あの子は多分それができないのよ。と言うより、そうしたら多分、埋もれちゃうんじゃないかしら」

「どういうことですかスズカさん？」

リハビリも終わったが復帰の目処が未だ立っていないスズカ先輩だが、ぼくの現況への分析は正確だ。レースの勘は未だ失われていないらしい。

そう、この状況で前めの位置につけてしまうと、ぼくは十中八九沈むのだ。

「臯月賞で勝ってるからマークもきつくなってるし、バ群の中にいるとブロックされる可能性が高くなると思うの。それなら、後ろからの方が視界も広くてまだ比較的走りやすいのかも……」

「なるほど……」

更に加えて言うなら、前からでは後ろにいるぼくの姿を確認し辛い点が挙げられる。

こちらの目論見を見抜くことができなくなるというのは他の走者にとつては相当なプレッシャーのはずだ。

『まもなく1000mを通過。道中縦長の展開になっています』

——だから、展開はこうなる。

現状のペースメーカーはアイネス先輩だ。前走の臯月賞でぼくが遅めのペースを作ったハメたことを意識するため、どうやってもペースは多少早くなる。

それに対して他のウマ娘はこちらの動向をうかがうことになるため、アイネス先輩を追走しきれず、かと言って下がるわけにもいかず膠着状態に陥る。結果がこの縦長の展開だ。

「仕掛けてくるとすれば、ストライプの適性と残る体力を考えると……恐らく1600m付近、ですわね」

「いやいや、マックちゃんよー。そんな大人しくしてるタマかあいつ？」

「いくらあの子でもそこまで無謀なことはいないでしょう。2400mの距離を本番で走るの初めてですのに」

『ここで上がってきた！ 後半に入ったと同時にサバンナストライプまくつてくる！』

「……あら!」

1200m地点。向正面の坂を登ったところで、ぼくは仕掛けを始めた。

臯月賞よりも長めの距離のダービーだ。マックイーンが考えるように、臯月賞で見たような1000m一気に駆け抜けるようなスパートは見せないはず……と他のひとも思うことだろう。

だが、ぼくの適正距離は3000mとも4000mとも言えるレベルの超長距離。確かに、もし臯月賞と同じペースだったら、もう少し配分を考えなくてはいけなかっただろうけど……。

(一度ペースを落としたおかげで、息は整ってる)

最後尾まで下がるほど減速した甲斐があった。体力は十分すぎるほど残っている。

そこに加えて向正面の3コーナー手前という状況のおかげで、ちょうど縦長の——ほぼ一直線の隊列になっている。これなら、ほんのちよつと横に出るだけで——!

『ここで! ぼう抜き! サバンナストライプが上がってくる!』

「嘘っ、早……!」

「くうっ!」

開けた道を一気に上がっていく。残り1000mに差し掛かる頃には3コーナー……流石にそこまでで全員を抜く、なんて芸当はできそうにないが、東京レース場の勝負どころは非常に長い最終直線。皆は確実にそこまで脚を溜めるはず。コーナーリングで生じる数メートル分のロスは許容してでも、ここは強引に突っ込む!

『グイグイ上がってくるぞ! 他のウマ娘は上がってはこないか!』
『仕掛けどころまでまだ距離があります。ここは我慢のしどころですよ』

「——そうは言っても、なかなか我慢しきれぬ子は多くありませんよ」

「悪い顔をしとるぞ利紗」

「そうですか? ウフフフ」

サブトレさんは普段柔らかい態度や表情を心がけているけど、時々なにやらひどく好戦的な笑顔を見せることがある。今、ちょうどそんな感じだろう。

気持ちには分からないでもない。

「ふむ、まあ間違いないく焦れるだろうが……他のウマ娘では全力疾走は長く続かん。体力的にも肉体的にもな。ここで我慢できなければ沈む他ない」

「あの子は減速しませんからね」

「今の最高速度はおよそ63km。数値だけを考慮すれば他のウマ娘の足元にも及ばんが、3ハロンの間それを維持できればタイムはおよそ34秒3。ダービーの時のスペシャルウィークをも凌ぐ……！」

「……まあ、机上の空論ですけどね。現状」

「うむ……」

本当にそれができてれば皐月賞はもつと楽に勝ってた。というか、実際のレースは坂がありコーナーがあり、とそう思うようにいくものではない。

だが、いずれにしろ――。

「追い………ついたッ！」

「！」

『4コーナー回って最終直線へ！ アイネスフウジンとサバンナストライブがここで並んだあ！』

捉えた！

東京レース場525mの最終直線！ 他のレース場と比べても相当に長い直線だ。ここからは地獄の削り合いに付き合ってもらおう！

『先頭はふたりの鏝迫り合いだ！ 後ろからメジロライアン!! 更にカメラケオロチ突っ込んでくる！』

流星にここまで来たウマ娘だ。ぼくもそうだけど、欠片も譲る気が無い。

アイネス先輩は逃げ、ぼくはなまくら。理由の違いこそあれどお互い分かっているんだ。末脚の鈍いぼくらの競り合いは、恐らくちよつとした要因が勝負を分けるのだと。

『400を切った！　ここから坂がある！　高低差2mの試練の坂！』

——しめた、坂ならばくの方が得意だ！

グンと勢いをつけて踏み込めば、ここで僅かながらも確かな差が生じる。ほんの数センチ……それで十分、あとはこの差を維持できるなら！

「っ、うあああああっ!!」

『大外からメジロライアン！　メジロライアンだ！　ここで横一線！　サバンナストライプ真ん中にいるが、ここから粘りきれるか!!』
ライアン先輩の差し脚は流石だ。ここに来てついに追いついてきた。

けど、まだ。彼女にとつては適性ど真ん中とも言えるこの距離であつても、一つ計算に入れていないことがある。500m超もの間差し脚を維持できるのかという点だ。

ライアン先輩はこれまで未勝利戦を除いて全て中山レース場で勝利している。長い直線が全くダメだとは言うまいが、少なからず影響は及ぼしているはず。ただでさえ未経験の2400m……ここままで正確で完璧なペース配分ができていると断言はできないはずだ。

アイネス先輩はペースを作る立場だったから脚を残している可能性はあるけれど——。

「や、ああああああっ!!」

『ここでアイネスフウジン抜き返したあっ!!』

「っ——!?!」

息を、吹き返した。

息も絶え絶え、フォームも正確なものじゃない、にも関わらず、アイネス先輩は気合と共に前に出てきた。

そこで気付く。彼女の瞳はこちらを映していない。ただひたすらに前を……ゴールだけを見ている。

彼女は、間違いなく至っていた。全てをなげうつかのような、忘我の境地。明鏡止水の領域へと。

「——だああああああっ!!」

気付けば、ぼくも思い切り前に踏み出していた。これまでよりも大きく、強く。

そんなことが関係あるものか。大仰に言っているだけで、それは言わば精神の高揚。パフォーマンスを限界まで発揮する状態を指した言葉であり、絶対の勝利をもたらすものじゃない。

計算する。計測する。自分の体の動きの無駄を切り捨てる。恐らくぼくの能力の限界値では届かない。だからここで限界を一つ超える。

体を前に投げ出すように前傾姿勢になり、風を裂いて脚を限界以上に回す。ストライドを維持したまま回転数を上げ続けるんだ！

『ゴールインッ!!』

——そして、過去最高の勢いを保ったままに、ゴール板を駆け抜けた。

差は、ごく僅かだった。そして熾烈なデッドヒートを繰り広げたからこそ、感覚的にどちらが勝ったのか分かる。

『——アイネスフウジン、堂々の一着！　そして、レコードタイムです!!』

公式戦初めての敗北は——限界を超えたデッドヒートを経たおかげか、思っていたよりもさっぱりとした気分の中で迎えられた。

リミッターが外れた

基本的に、レースの規模の大小にかかわらず、勝利ウマ娘は観客の声援に応える形でコースを再度一周するウイニングランを行うのが慣例だ。

これはクールダウンとファンサービスを兼ねているため、通常、これを終えずに次のレースに移ることは無い。のだけど……。

「アイネス、遅くない？」

「……ですね？」

アイネス先輩のそれは、クールダウンであるにしても明らかに遅かった。

ぼくのせいだろうか。いや、まあ、あんな勝負を挑んだぼくの責任割合もいくらかあるのは否定できないけど、それにしただって動きが良くない。

「ライアン先輩」

「ん？ んー、そうだね」

目配せすると、こちらの意図をおおよそ察してくれたらしいライアン先輩が頷いて返してくれた。

他の出走者の皆にも、もしかしたら怪我をしているかも、ということとを簡潔に伝えて、動きやすくなるように協力してもらおうことにする。

そうと決まれば話は早い。ぼくはコースへ、ライアン先輩たちは客席の方へ……熱気が冷めやらぬ空気の中に飛び込んでいく。

何事かと会場が本格的にざわつくよりも前に終わらせないと。

「ひゃっ、なにになっ！」

アイネス先輩を追走していくと、そう時間もかからず追いついた。ぼくは今にも崩れ落ちそうなほど震えてる足の間で頭を突っ込むと、そのまま肩車の姿勢になって体を持ち上げた。

「なんなの〜!？」

「せーの！ ア・イ・ネス！」

「ア・イ・ネス！ ア・イ・ネス！」

ライアン先輩の号令に併せて、トレセン学園生が率先してコールを送る。それに触発された観客もまたコールを送り、やがて場内には満員の観客が送るアイネスコールが響き渡った。

アイネス先輩はというと、多少困惑はしながらも、応援に押されるようにして大きく手を振ってそれに応じた。

……一方のぼくはと言えば、発起人として表面的にはおどけて見せているものの、その実ぼくより圧倒的に体格で勝るアイネス先輩を肩車するために必死でバランスを取りながらコースを駆け回ることになっていた。

で、そんなこんなで一周。ウイニングランも終わらせて歓声に見送られたその後で、ぼくらはそのまま別の場所へと向かうことになった。

医務室だ。

「——脚の熱感が強いね。折れてはいないだろうけど、しばらく安静にするように。ウイニングライブでは、できるだけ動かない振り付けを考えたほうがいい」

で、診断はこのようなものだった。

逃げるにしても、無理をしすぎ。領域に入って軽くハイになったせいで脳内物質が吹き出し、一時的に痛みを忘れさせているようだけど、腱も傷めているとのこと。

脚が折れなかったのは不幸中の幸いというところか……。

「それにしたって、ここまでおおごとになくってもよかったのに」「もしものことがあったらと思うと、ついいても立ってもいられなくて」

「わが社は社員の福利厚生を万全に、がモットーなので」

「明らかに何やら毛色が違うことを言い出したの……」

「あはは、多分照れ隠しだよ」

「そういうこと言わなくていいんですよ」

……なんか恥ずかしいし、キャラじゃないし。

さて。控室に戻ってみると、なんとというか表現のし辛い生温い視

線に迎えられることとなった。

主に視線を向けてきてるひとはシャカール先輩とスカイ先輩だ。

「お疲れ。まま、座って座って」

「2着とはいえレコードタイムだ。今までのデータ以上の能力を出してんだから負荷も相当だろ。違和感があったらすぐ言え」

「ヤダふたりが優しすぎて怖い」

気を遣ってるのがありありと感じ取れる。

言ってることは正しいんだけど、それよりも違和感の方がはるかに強く出てしまってる……。

「ハッ、そこで憎まれ口叩けるなら大したことなさそうだな」

「——とは限らないよ?」

「? いきなり何してるんですかタキオン先ぱいたたたた!!」

座ってみたところで足を取られたかと思うと、そのまま少し動かされただけで脚に相当な痛みが走った!

ぐわああああ痛い痛い! 冗談じゃなく痛い! い、いくらなんでも折れてたら流石に走ってる途中で分かるはずだけど……。

「た、タキオン先輩! これはいったい!?!」

「冷静になって脳内物質の働きが落ち着いたせいだよ」

こんな話さつきもしたぞ!?

「現在のデータからうかがえる限界を、レース本番で踏み越える、というのはそういうことだよ。昨日できなかったことが今日突然できるようになる、なんて道理は無いだらう?」

「アツくなつてリミッター外れたってことか」

「限界、というものが設けられている一つの理由だね。くくっ」

「……しかし、リミッターが外れたのになぜ筋や腱を傷めた、程度で済んでいるのでしょうか?」

「わかりません」

確かに、自分の体を守るためにリミッターというものは設けられている。限界を超える力を出した結果、骨が折れたり筋肉が断裂したりというのも聞く話だ。

ただ、昔からぼくはやたら頑丈で、怪我や病気ともあまり縁がな

かった。

これは予感だけど、牛くらの質量の物体に撥ね飛ばされても無事で済む気すらしている。多分気のせいだろうが。

「……ともかく、今日は惜しかったがやりようによってはもう1km以上速度が底上げできる余地があると分かったのは収穫だろう」

「感覚を忘れないうちに定着させましょうね」

「うーい」

この夏は例年以上に大変になりそうだ。

……商売の件含めて。

「次走についてはどうする？ 菊花賞に直行するか？」

「んー……そうですねー……」

菊花賞はそこまでに行われるレースの中では最長の3000m。当然ながら適性が合わずに見送る、という有力ウマ娘も多い。そのため、繰り上げで出走できる人が増えて、それまで頭角を現していなかった意外なウマ娘が出走して活躍する、というケースも見受けられる。

流石に皐月賞一着、ダービー二着という成績で出走できないということは無いだろうから、直行でも問題はないけど……ここまで月一でレースに出てたから、いきなり間隔を開けると勘が鈍る可能性も捨てきれない。

「どこかで一度走っておきたい気持ちはありますけど」

「となれば、定石なら神戸新聞杯だろうが……」

どうせお前はそういうことはせんだろう、とトレーナーさんは片眉を上げた。

ぼくはそれに応じるように、にんまりと笑顔を作って見せた。

……≠……

後日、検査の結果ぼくに下された診断は腸脛靭帯炎——いわゆるランナー膝だった。

ぶつちやけ軽度も軽度。1〜2週間運動制限すれば完治するくら

いで、なんなら来月の宝塚記念に出ても問題なく走れるくらいだ。出ないけど。

そもそも宝塚記念をクラシック期に勝ったウマ娘はひとりもない2022年4月現在。連対率も0%。近年はクラシック級での出走自体もほぼ無い。宝塚記念に出られるほど人気を集めているならダービーにも当然出られるはずだし、距離も2200mと2400mでほぼ同じ。賞金額もダービーの方が上回っているから、宝塚記念に向けて調整する理由がなのこと無い。ローテーションが過密なおかげで怪我をする可能性も高くなるし……。

極めて稀にクラシック級で安田記念に勝つ例もあるG1に認定されて以降はリアルインパクトのみ。けど……いや本当にどうなっているんだろう……。

話がそれた
閑話休題。

問題は、アイネス先輩の方だ。診断は——屈腱炎。数々の名ウマ娘を引退に追いやった、ランナーにとつての癌とも呼ばれる難病だ。根治したという例もあまり聞かない。

屈腱炎は治りにくく、それでいて再発しやすいという最悪の特徴がある。腱が元の状態に戻ることも稀だ。数ヶ月、時には一年以上をかけて根気強く治療していく必要がある。その間に本格化の期間が終わってしまうならいつそ……と思ってしまうのも、ある意味では仕方がないかもしれない。

もちろん、日常生活を送ることに支障はないだろうけど……正直、ぼくが不安視してるのは、もしかしてぼくのせいなんじゃないかとか、アイネス先輩が引退するかもしれないという点ではなく——いやそっちももちろんあるけど——この一連の話を耳にしたタキオン先輩が「だが今は違う！」と言い残してダッシュでアイネス先輩のもとに向かつてしまった点だ。

何をするつもりなのか予想もできないが、何かしでかすつもりなのは想像に難くない。

あと既に引退してる身なのにぼくより速くて普通に凹む。

……ともかく、現状はなるようにしかならない。まずは自分のこと

からだ。

「めっちゃ人来るやん」

昼休みのカフェテリア。ぼくはクラスメイト3人と、来年ダービーに挑む身として感想なんかを聞きに来たテイオーを交えて食卓を囲んでいた。

今でこそ流れも落ち着いているけど、ぼくはちよつと前まで教室で友人知人問わずなんか大勢のひとに囲まれるハメになっていた。

主にダービーでの激走のせいだ。聞くところによると、レコードタイムでゴールしたこともあって、皐月賞の一件はフロックではないと知られたせいもあるのかなんとか。

「そりや来るでしょ」

「来るよねえ」

「正確には『来ていた』ですが。レコードタイムでのダービー2着となれば話を聞きに来る方が多くて当然かと」

「やっぱりそう思う？」

「はい。特にストライプさんの場合は話を聞きたいという方が多いでしょう」

「あんまり参考になんないと思うけどねー」

「テイオーはそうかも shouldn't けどさあ？」

「他の人もそうだと思うよ」

ぶっちゃけぼくの走りなんて見習っちゃいけない。というか他のウマ娘じゃ見習ってもどうにもこうにもならない。だって組み立てた戦術も戦法も全部ぼくの体質や能力に合わせて調整しているんだから。

ハイ、じゃあここから急減速してここで急加速、ここから時速60kmオーバーで走り続けてゴールイン。なんて無茶なことをしたら普通に脚が折れる。

「ぼくのやり方真似たって変な癖つくだけだよ」

「それでも、能力的に劣ると評されているウマ娘にとって、あなたの出した結果は希望を抱くに足るものだと思います」

「作戦練って一芸に特化すればG1でも勝てるかも！ って雰囲気は

「ちょっとできてきたかもねー」

「ねね、ネイチャ、その『一芸』レベル高すぎない？」

「1000mずつとスパートかけっぱなしができるくらいかあ」

「無理だわ」

「こいつあどうにもならないわ、なんて言つてネイチャはお手上げのポーズをしているけど、多分その気になれば差し切る算段はつけられると思う。ちょっと自信が足りないから踏み込みきれないだけで。」

「で、次は菊花賞だけど、どう？」

「菊花賞は次じゃないんだ。次の次」

「あ、次走別？ えーつとストライプだから……」

「分かった！ ハイ！ 札幌記念！」

「あー……」

札幌記念。札幌レース場で行われる芝2000m……その賞金額や毎年出走者の顔ぶれの豪華さで、スーパーG2とも称される競走だ。

札幌レース場は、日本では数少ない、芝コースに洋芝を用いているレース場でもある。このため、海外挑戦を行う際の前哨戦として札幌記念が選択されることが多い。

ぼくの適性を考えると、それも悪くない選択なのは間違いない。来年はそうしよう。

「いやこの雰囲気は違うっばいね」

「ふっふっふ、ここはワガハイが当ててしんぜよう！ ズバリ、ここは

あえての宝塚記念！」

「それは無い」

「うぐう」

色々理由はあるけど宝塚記念は論外である。

「となると、夏に一戦を？」

「短距離多めでストライプに向いてなくない？」

「ひとつドンピシャのがあるじゃん」

「あつたっけ？」

距離的に問題なく、それでいて時期的にもあまり制約が多くなさ

れでいてダービーから十分に休養が取れるレース。

夏と言えばサマースプリントシリーズなどころはあるけど、それ以外にも目玉イベントがひとつ確実に訪れる。

「——ジャパンドートダービーだよ」

ネイチヤが箸を取り落とす、テイオーが悲鳴を上げかけ、タンホイザがひっくり返り、イクノのメガネが光った。

神出鬼没なもの

サバンナストライプ、ジャパンダーツダービーに参戦か!?

出走登録を行った翌日から、校内外はこの話題でもちきりだった。皐月賞ウマ娘が突然ジャパンダーツダービーに参戦。これだけで普通の人は何を言っているのか分からなくて混乱することだろう。

元から適性について隠しているつもりは無いし、チームメイトは知っている。一年の頃から親しい友達にもダーツが得意なことは最初から明かしているけど、そこまで親しいわけではないひとだとダーツも走れることに気付いていないはずだ。ここまで芝コースでしか走っていないから気付ける余地が無いし。

さて、ぼくの話に紛れてしまった形になるが、他方でスナイパーIIサンは海外を転戦することを表明した。夏にフランスのジャック・ル・マロワ賞。秋にイタリア、ローマ賞。冬に香港の香港ヴァーズ……

転戦に次ぐ転戦で明らかにおかしなことをしている。これを本人に聞いてみたところ、「ニンジャは神出鬼没なものなのだ」という回答が得られた。ただ正直、出走登録してる時点で公に存在は知らされているのだから神出鬼没にはなり得ないのではないだろうか。ぼくは訝しんだ。

ともかくそんなわけで、スナイパーIIサンはまず单身フランス遠征に向かった。トレーナーさんは日本に残っているが、レースが近くなるとあちらに向かう予定だ。

さて、ともあれダービーからジャパンダーツダービーへは、これまでと同様ほぼ一ヶ月半程度の間隔を開けたローテーションになる。

6月の間は取り立てて誰かがレースに出走するということは無い。そういうわけで、ぼくの負傷（軽傷）のための休養期間も設けないといけないこともあって、しばらくは——トレーニング漬けの日々だった。

「ぼくもうちよつと心穏やかにしてられると思ったんですけど」

「今からまたG1正確にはJpn1。に出ようかって子が悠長にしていられると思ってるんですか？ ペースが落ちていきますよー」

「ひーん」

「というか余裕だねえ」

「普通に走りながら喋ってますね……」

今日の主要トレーニングはペース走。と言っても、ウマ娘として相応の負荷をかけるための長距離トレーニングだ。おおむね30kmほどを一定のペースで走り続ける。

限界を超えて先のダービーと同じだけの速度を出す……あるいは出し続けるためには、なんとかして筋肉の損傷を抑える必要がある。筋肉に耐性を作る方法のひとつが、ペース走で負荷をかけ続けて一度断裂させ、超回復でより強い筋肉を作ることだ。そのため、ペースもそれ相応……以上のものが求められる。

なにせこれまで以上の速度を出せると自ら実証してしまったわけで、当然ながら求められるトレーニング強度もこれまで以上だ。

いやあ、キツイ。走る最中に喋るわ一見すると余裕っぽいわけで絶対コレ言うほどに感じてもらえないけど。本当に限界なんです。信じてください。

真面目な話すると筋肉の限界と心肺の限界はまた別物なんです。

前者はその場でぶっ倒れるやつで、後者は息が絶え絶えになって喋れなくなるやつ。

結果、ぼくはペース走が終わったらぶっ倒れて動けなくなっていた。

「これで勝ったと思うなよ……」

「いつ勝ち負けの問題になったの？」

「ウマ娘はいつでも勝つか負けるかのシーソーゲーム……！」

「何アホなこと言ってるんですかアナタ」

ふざけて気を紛らわせているだけだ。

ここまで満身創痍になっても恐らく十数分もあれば十分回復するので、その間の暇を持て余しているとも言おう。

その後はしばらくスカイ先輩とフラワーの基礎トレ風景を見守る

ことになった。

そして案の定、15分もすれば体力はおおよそ全快した。

「復活早っ」

「これって体力だけの問題なのでしょうか……？」

「相変わらずの様子で安心しますね。ストライプ、走れますか？」

「ハハハいきなりここで走らせますか」

相変わらずの絶妙なところを突いてくるスパルタっぷりだ。実際、できないとは言わないけど。

「そろそろフラワーも実戦的なトレーニングに移ろうと思います。手伝っていただきたいのですが」

「いいですけど、スカイ先輩の方が適任では？」

「スカイではどうしても手加減してしまいますので」

「ええ〜？」

加減は……まあ。しちゃうだろうなあ。無意識的にでも。

あと、実戦的にと言うなら、サブトレさんの思惑は多分……駆け引きを学んでほしいってところかな？

スカイ先輩は逃げが得意でどうしてもそつちに偏重しちやってるし、そこへ行くとある程度どんな脚質も演じられるこちらの方が適任か。

「ご要望は？」

「思い切り走り辛くしてあげてください」

「了解です」

アップを終えたらしいフラワーの隣に立つと、軽く頭を下げてください。うーん……ぼくこの子を今から思いっきり沈めないといけないんだよなあ。

……まあ、いずれレース中にやられるか今経験しとくかの違いではないしトレーニングでやっつくに越したことも無いか。

「はーい、じゃあ、位置についてー」

「ほーい」

「はいー」

「スタートー」

トレーニングなので今はゲートを使用しない。サブトレさんのホイスルに合わせて、ふたり一斉にスタートした。

本来スタートは……加速だけならこっちの方が早いけど、トレーニングなのでまずはフラワーに先に行ってもらおう。これは主に先行が脚質として合っているだろうとトレーナーさんに判断されたのもあつてのことだ。

走り辛くするならまずは……そうだなあ。

「おっ、後ろについた」

「あの子の常套手段ですね」

「んー」

状況的には、ぼくがわずかに斜め後ろに立つ形になっている。いつものポジションニングだ。

普段はもうちよつと遠目に位置を取るんだけど……実戦を想定して走り辛くすることが趣旨となれば、もうちよつと近づいておいて……。

「っ……」

うん、やっぱり走り辛そうにしてるしてる。

フラワーは現状、トレーニングにおいてはあまり大きな負担をかけるないように、また、怪我をしないように細心の注意を払っている。そのため、並走でも万が一にも接触したりしないようにある程度——各メンバーが自発的にという形だけど——距離を保って危険が無いように調整している。

そのため、こうやってレース中に間近に迫られるということに慣れておらず、ついぶつかってしまわないかと萎縮してしまう。

身長が近く、人数もいないせいでどうしても実際のレースでの威圧感と同じようにはならないけど……まあ、多少は感じ取ってくれるかな。

「ほい」

「うっ……」

そこで脚を軽く前に差し込んで見せてみると、少なからず速度が上がるのを感じ取れた。

まあかかるよね。経験したことの無い事態だもの。どこから抜きに来るか分からないっていうのは結構なストレスだろうし、単純に他人の足先が自分の視界に入ってきたら一瞬なりとも危険を感じてしまうはずだ。だから前に出てしまう。

この調子でやっていくと、まあ当然ながら……。

「はあっ、はあっ、ううっ……!」

「こうなっちゃうんだよなあ」

1000mを走り終える頃にはもうフラワーは满身創痍だった。

今回は勝ちを狙わず本気で妨害に注力していた分、スプリンター寄りのマイラーだからというだけではないレベルで明らかに体力の消耗が激しい。

「セイちゃんいきなりハードル高すぎると思っんですよアレは」

「スプリントでもマイルでも駆け引きが無いわけじゃないんですから、まずは強い相手に慣れさせた方が後で楽ですよ」

「だからって釣り初心者にいきなり本マグロ釣らせるひといないでしょ」

「しかしあの子は戦術よりも戦略の組み立ての方が上手くこの環境では実力の半分も」

「サブトレさん結構な頻度でズレてますよね」

「ね」

「ええっ」

ぼくが言うのもなんだけど、普通のひとはタキオン先輩の実験に嬉々として付き合ったりしないんですよ。ぼくが言うのもなんだけど。

あとズレてるというか割と人の心がない。何事にかけても設定するハードルがやたら高い。応じられる程度に抑えられてるけど、多分想定はもつと上だと思う。ぼくが限界超えた時、心配もしてたけど何やら満足そうにこっそりニヤツとしてたし。なんていうか人は限界を超えられる! って根拠なく信じ込んでそうな感じ。悪いことと言いい切れるわけじゃないんだけど。

・・・≠・・・

「ふいー」

激しめのトレーニングも終わり、お風呂に入って一息つき始めた頃。ぼくは部屋でここ最近の収益の勘定をしていた。

人件費の増加は想定した範囲で収まり、基本的には黒字。贅沢を言うともっと欲しかったけどまあいいとしておこう。そこんとこ追求し始めるとどうしようもない。

臯月賞一着、ダービー二着。このネームバリューは今のところ有効に働いているらしく、5、6月における収益の伸びは極めて良好だ。

もつとも、前の月と同じだけの伸び率を期待することは難しい。基本的にこういうのはどこかで頭打ちになるし、そもそも維持するということ自体が非常に難しい。時に前月比のみを見て業績を判断してしまう人もいるが、そのところを考慮しないと数字に騙されかねない。というか割と騙されてる人が多い。確かに伸び率は大事な数字だけど、見るならまず業績だけを見ないと。

ともかく、賞金も入ったことだしここからは一時的な赤字を覚悟してでも設備投資をしていって……ムフフのフ。

「顔つきが違う……」

「ええ？」

そんな折、ふとした拍子にミックが雑誌の……ダービー特集だろうか？ そちらに映っているレース中らしきぼくの顔と今の表情を比較しているようだ。

そりゃあ、まあ……違うだろうね多少は。どつちも真剣と言えば真剣だけど、運動中とそうじゃない時という違いがあるし。

「そんなに？」

「今はじゃあく」

「邪悪」

………金勘定をしてる時は確かにそんな雰囲気は漏れててもおかしくないかもしれない。

いや、でも、顔くらい緩むよね多少。大金見たら。緩むよね？

「言うほど……？」

「と言うより……しまりが無い……？」

フラツシュ先輩情報によるとファル子先輩は部屋にいる時油断して口元ゆるゆるになつてるといふ話だけど、そんな感じになつてしまつてゐるのだろうか。

だとしても気が緩んだ結果邪悪な表情になつてゐるって何なんだ。本質が邪悪だとしても言うのか。あんまり否定出来ないかもしれない。軽く凹む。

「ええ……」

「あんまり気にしなくても……いいと思う……」

「ええ……？」

いや気にはするよ……。

それにしてもミーク、ダービー特集を熱心に見てるな。何か思うところでもあつたりするのだろうか。

路線が違えば通常、それぞれの路線のレースに注力することになる。同日ではないのだから、やろうと思えばオークス出てダービーも出る……なんてことも日程的に可能であるけど、体力、肉体、精神……どれを取つても現実的ではない。オグリ先輩じゃないんだから。

あのひとでさえ結局マイルチャンピオンシップの翌週に出たジャパンカップでは2着に甘んじ……あのローテで何で2着取れてるんだ……？

いや、そこは気にしないでおこう。オグリキャップだから仕方ない。それでいいんだ。

ともかく、路線を定めはしたけど、ローテーションが許すならダービーにも出たかった……と考えるひとがいるとしてもおかしくはない。

「さつきから見てるのダービーの特集？ どうしたの？」

「……………」

ミークはこちらをぼんやり見つめながら、何やら言葉にしかけて……すぐにやめた。

時々こういうことがある。最近は頻度も増えただろうか。そろそ

ろ付き合いも二年を超えるし、何か言いたいことがあるなら汲み取ってあげたいんだけど……うーん？

「トレーナーに相談する……」

「何を？」

「レース」

「んー」

なるほど、レースの話か。学年は違ってもトウインクルシリーズを走る上では同期にあたるわけだし、その辺を相談するにできなかつたってところかな。

確かにこればかりはぼくから何かアドバイスしたりするわけにはいかない。言葉を濁してもしょうがないだろう。

それに桐生院トレーナーなら、相談の上で納得のいく答えを導き出せるはずだ。ぼくは領いて自分の方の思索に戻った。

——そして後日。唐突にジャパントダービーにハッピーミーク参戦が報じられた。

ぼくは思わず声を上げて驚きをあらわにした。

大入り満員の大井

ジャパンダートダービー。東京都品川区に設立された大井レース場で開催される、J p n i日本独自に制定されたG 1。国際G 1ではないが国内においてはG 1の一種として扱われる。に認定されたダート2000mのレースだ。

ところで品川区にある大井レース場を地方と表現することに強烈な違和感を覚えるのはほくだけだろうか。

いやU R A直轄じゃないという意味で法的にそう呼ばれてるわけなんだけど。U R A、国がお金を出している公的機関が「中央」と呼ばれていることに対して、それぞれの地方自治体や公共団体がレース場を管理しているから「地方レース場」。一応これには明確な区分けがある。

……「地方」という言葉が普段、東京などの都市部以外を指しているから勘違いしがちなだけと言えるだろうか。

スポーツでは常用語とは別の使い方やをされる用語という例は少ない。例えば野球なんかではエラーという言葉が使われるが、これは野球では守備者の失敗を意味する。対して日用語の場合、エラーという言葉は主にプログラムの誤りなどを意味する。

ともかく、ジャパンダートダービーは地方レース場で開催されている地方のレースだ。

時刻は午後八時前。地方でのレースは午後からの開催のため、メインレースがこの時間になることも珍しくはない。

基本的にゴールデンタイムでの出走になってしまうことから、時間的に夕食やプライム帯の花形番組のテレビ放送と被ってしまうため、観客はやや少なくなってしまう傾向にある。

——しかしこの日、大井レース場は地方レース場としては異例とも言える観客動員数を記録した。

史上最遅の皐月賞覇者、サバナストライプ。白い二冠女王、ハッピーミーク。都心部という絶好の立地に抜群の話題性のせいで、興味

本位だったり不安半分だったり、感情はまあ様々なんだけど、ともかく地方主催のレースとしては想定外と言えるほど人がギツチギチだ。それこそ、ダートを主戦場とする出走ウマ娘たちが困惑してしまうくらいには。

「あわわ……ダートに……ダートにこんなに人がたくさん……」

そして約一名、何やらアイデンティティがクライシスしかけていた。

ファル子先輩はダートの発展を願い精力的に活動しているウマ娘のひとりだ。よつて今回は正直なところ、ファル子先輩には複雑な心境だろう。なにせこの大入り満員の状況を作り出した要因の大きな部分は、ぼくとミックだろうし。

元々芝で活躍しているウマ娘が来たから賑わっている、というのはあまり望ましいことではないはずだ。本来想定しているのはダートを活性化させた先で芝の実力者を招致して……という方向だろう。狙うのは人気の定着であって、一過性のブームではない。

(さて)

ここで観客や他のウマ娘が感じているのは恐らく、果たしてぼくとミックはちゃんと走れるのか？ という点だろう。

脚に負担を大きくかけないことからダートトレーニングは多くのチームで行われているが、芝と同じように走れるかは別問題だ。パワーを鍛えるトレーニングとして採用されているだけあって、ダートでのレースは相応のパワーやスタミナ、砂上で走るためのコツが必要になる。

つい先日まで芝でしのぎを削っていたウマ娘にそれが備わっているか、不安視するのは当然だろう。中には明らかに敵意を向けてきているひともいて、話題性目当てで安易にダートの世界に踏み込んできた、なんて思われていそうなほどだ。というかネットで見た。

しかし当然、ぼくは勝つ気でここにいる。悔るつもりも全く無い。全力で勝ちに行く……んだけれども。

(ミックの考えが読めない)

残念なことに、ミックの考えが全く読めない。流石に話題性に興味

は無いだろうから勝つ気でいるのは間違いないだろうけど。むん。つてしてるし。

何で出走する気になったか、というところが正直よく分からない。うーん。

「ストライプちゃん、ミークちゃん！」

「あ、はい？」

「？」

少し悩んでいると、そこで唐突にファル子先輩に声をかけられた。ぴしつとこちらに指を突きつけてきてひとこと。

「ウマドルとして負けないよ！」

「ウマ」

「ドル」

どうしよう。ファル子先輩、何やら変な対抗意識持つてしまってる。ぼくらウマドルのつもり無いのに。

いやファル子先輩的に言う和在り方がウマドルとでも言うのか？しかし、そもそもこうして盛り上がってるのはあくまで縞毛や白毛という物珍しさに由来するものだ。そりや確かに観客ウケする要素は多いけど、アスリートに加えて経営者、そこにウマドルまで加えて三足のわらじを履くつもりは今のところない。去年の聖蹄祭で懲りたよもう。

「ウマドル……」

ミークは言われたことがよく分かっていないようだ。そりやあそうだよ。ぼくはフラッシュ先輩経由だったり実際に皐月賞で一緒に走って、かつ知識として人物像を知ってるからこの程度の困惑で済んでるんだけど、予備知識が無いところからいきなりぶっこまれたらこうなる。

少しずつ噛み砕いて考えると分かるんだけど、噛み砕くまでがなんというか長い。

「そういうえばミークは何でこのレース出る気になったの？」

「ん……」

ぼくは一端、余計な考えを打ち切らせるためにひとつ話を振った。

元々気になってたことでもあるし、ちようどいい。

ミークは顎に軽く指を当てて少し考えると、こう返してきた。

「一緒に走りたかった」

「へ」

予想外の回答で、いいパンチでももらったように一瞬脳が揺らぐ。

一緒に？ 走りたかった？ ぼくと？

去年今年と一緒に走りたくないウマ娘ジュニア級クラシック級と連覇しそうなの？

「オークスはレコードが出てない……」

「……そうだね？」

「だから一緒に走ったら、どっちが勝つかわからない。むん」

「むん」

まあそれはそうなんだけど。

ミークはいい具合に先行策から差し込んで快勝、だったけど、レコードが出たわけではない。

対してぼくは負けこそしたが、タイム自体はレコードタイムにクビ差。明確にどっちが強いか、というのは、今現在はずきりしているわけではない。

……もしかして、それが理由で？

「やるなら、クラシックの舞台でやりたい」

「おお」

違う路線のウマ娘が一堂に会して走る機会は、あるにはある。たとえば代表的なのは有馬記念だろう。

しかし、これはシニア級とクラシック級混合のレースで、現在クラシック級のウマ娘から見た時は格上挑戦という趣が強い。

ライバルと競う、ということが一番に考えるなら、クラシック級に限定されているレースの方が適しているのはそうなんだけど……こ
う来るかあ。

あ、ヤバい。シマウマ娘の本能的なアレが少しワクワクしてきてる。ステイぼくステイ。

それにしたってこんな選択肢取れるの、ミークくらいのものだろ

う。いや、ぼくやデジたんパイセンもできるか。なんだ思ったよりいるじゃん。錯覚。

「こつちだつて負けないよ」

「ふぁいとー」

「おー」

こつんとお互いに拳を軽く打ち当てる。そしてぼくは——高揚感をまるごと振り払った。

普通のウマ娘にとって、テンションは高い方がポテンシャルを発揮しやすい。しかしぼくの場合、ポテンシャルと言つてもたかが知れる上にテンションが高ければ高いほど頭が回らなくなるので、むしろ本気でレースをするためにはテンションは多少下げ気味なくらいがいい。

本当の本当にテンションを上げないといけないのは、限界を超えないといけない時だけだ。

ジャパンダーツダービー

『異例の観客数にてここ、大井レース場からお送りします砂の祭典ジャパンダーツダービー。今スタートしました!』

ゲートが開いたその直後、真っ先に飛び出したのはファル子先輩だった。

彼女の逃げシス逃げ切りシスターズ。スマートファルコンが(勝手に)設立した逃げウマ娘のアイドルユニット。活動を知っていれば分かることだけど、そもそも彼女は生粋の逃げウマ娘だ。しかしながら、ここまでのレースではそのような素振りほとんど見せず、どちらかと言うと差して勝つレースが目立つ。

そのため、同じコースで走るウマ娘たちの反応は半々。この大舞台で解禁するだろうと読んでいたひともいるし、完全に転向したものと思っていたためか驚いているひともいる。

冷静に考えれば、ここまでのレースの結果が振るっていないのは抑える走り方が合っていないということ、いずれ必ず逃げに戻すだろうということも容易に推測できることではあった。

Jpn1^G日本独自とはいえJpn1もG1の一種であるため、実況などでは呼びやすさ・わかりやすさを考慮してG1と読まれることが多い。の大舞台だ。ぶつつけ本番という不安こそあるだろうが、それ以上に本来の走り方に戻すことのメリットの方がはるかに大きいことだろう。

皐月賞で逃げをしなかったのは……単純に芝が合わなかったせいだろう。適性というものがそれだけ大事という一例だ。

そして、枷が外れた今、ファル子先輩の走りは本来の輝きを取り戻していた。砂上の隼の名に恥じない飛ぶような力強い走りだ。

『ハナを取ったのは4番スマートファルコン! 12番サバンナストライブがこれに続きます!』

「ストライブさんは、ファルコンさんをマークする作戦のようですね」「ストライブからの徹底マークって……うげえ」

露骨に嫌な顔をしているスカイ先輩の顔が横目に見えた。

同じチームなのにそこまで言うことなくない？ とちよつと思っただけ、基本戦術がとにかく相手に全力を出させないこと——正確には本気の出しどころを誤らせることなほくに後ろにつかれるのはそれだけ神経をすり減らすのだろう。トレーニング中でも実際あまり良い顔はされない。

まあ、だからこそやる意味があるのだけど。

「前に出ない、斜め後ろあたり……それにしても位置取りが早すぎる。ファル子が逃げると決め打ちしてきたのか……!？」

軽く歯噛みしながらファル子先輩のトレーナーさんらしき人がそんなことをつぶやくが、決め打ちというのもちよつと違う。

ファル子先輩の脚質や能力、性格から考えて、抑えた走り方が通用するのは恐らくG3までだ。Jpn1の大舞台ともなると逃げを打つことが勝利の前提条件の一つ。逃げないということは現状「ありえない」。だからマークにつくことは半ば決まっていた。これが第一^Aプラン。

逃げなかったら、その時はぼくが先頭に回って皆に地獄のペース走に付き合ってもらおう。これが第二^Bプラン。

いずれにしてもペースは爆上げするので地獄は見てもらおう。

「でも、ストライプちゃんなら絶対何かしてくるって分かってるから……!？」

「信頼が身に染みますねー」

これを信頼と言っているのかどうかはともかく。

『さあ長い直線が終わりコーナー、先頭は依然スマートファルコン、2番手にサバナストラライプ。3番手はハッピーミックです』

さて、位置取りはファル子先輩の斜め後ろあたりだが、ある程度のロスを許容してでもこの位置に陣取ったのは、キックバック芝や砂などの蹴り返し。ウマ娘の脚力なので意図するしないに関わらず砂が顔にぶつけられたりということが起きる。を避けるという以外にもいくつかの理由がある。

ひとつは、単純にこの方が煽りやすいこと。少し視線をずらすだけ

でこちらの足先が見えるくらいがベストだ。これはぼくの悪名が広がれば広がっているほど、こちらを意識せざるを得なくなるので有効にはたらく。

もうひとつは、ミーク——のみならず、後ろにいる全走者の牽制だ。位置的にぼくとファル子先輩の前に出てハナを奪うためには、外側から回り込むしか方法がない。そうなるとぼくが妥協している以上の大きなロスが生じるため、ほぼ確実に後半まで脚が残らないだろう。では長距離を走れるミークならどうかと言うと……実はミークが前に出るのも難しい。

長距離を走れるというウマ娘にはいくつかのタイプがある。ぼくやマックイーンのように、元から膨大なスタミナを持っているタイプ。パーマー先輩のように根性で走り切るタイプ。スカーレットやオグリ先輩のように恵まれたフィジカルで不利を覆せるタイプ。そして、ペース配分が抜群に優れていることで、最後までスタミナを残せるタイプだ。ミークはこれにあたる。

どこまでもマイペースで走れるのが彼女の強みだけど、裏を返せば、マイペースで走れなければ菊花賞のような超長距離にまでは対応できないとも言えるわけだ。

「スマートファルコンさんを抑えながらミークを牽制する……言葉にすれば簡単なことですけどあの精度でできるなんて……!」

「ふふ、いかがですかうちの次世代エースは。桐生院家の秘伝トレーナー白書にもああったタイプのウマ娘は例がないでしょう?」

「ええ、残念ながら……」

おや、桐生院トレーナーにサブトレさんが接触しに行った。珍しいことだ……と思ったけど、あのふたり年齢はそう遠くなさそうだし、裏で仲が良かったりしても不思議は無いんだろうか。

いやそれより、エースって……冷静に考えるとそれはそうなのか? 今ベテルギウスにクラシック級のウマ娘はぼくしかいないわけだし。その上で皐月賞も勝つてるとなると、そうなるのか。

改めてこう考えると少し照れくさいな。チームのエースか……。

「あの子は他人の嫌がることを考えさせたら天才的です。そう容易に

対応などできませんよ」

「言い方を考えんか！」

「あいたあー！」

字面だけ見ると最低の人格やんけ。

サブトレさんだつて別に貶す意図があつて言つてるんじゃない。単にちよつと……だいぶ……結構……デリカシーが欠けてるだけだ。

真面目で理想が高いからつい率直なことを言つてしまうのもあるだろう。慇懃無礼というか、指導者としては（トレーナーさんと比べると）割と未熟でサブトレーナーの地位に甘んじているのも頷ける話だ。

……ともかく、気を取り直そう。

（だつたら徹底的にイヤなことやってやる！）

それがぼくのレースにおける強みだと言うなら突き詰めていくべきだ。

……悪人っぽい才能だけど、才能の用途自体は限定的だし商売に活かして人の役に立てることもできる。ヨシ！

長めのストライドを活かして足先をチラつかせ、わざと足音を大きく立てて威圧または威嚇。どのようにアクションを返してくるかによつてこちらの返し方も異なるけど、想定されるのはおおよそ3通り。速くなるか、遅くなるか、鋼の意志でグツとこらえるかだ。

個人的には——有り体に言つてしまえばどうなつても構わない。

速くなればそれだけスタミナを削れるから目的は達しているし、遅くなるならばくが前に出て主導権を握る。我慢してくるなら……その時は精神の削り合いの始まりだ。全力で嫌がらせを継続する！

字面が最悪!!

「っー」

どうあれ、ファル子先輩の選んだ手段は……そのままスピードを上げることだった。

絶対に先頭を譲らないという気概を感じる。先頭——つまりはウイニングライブのセンターを求める意志がそれだけ強いということ

だろう。

あるいは、スズカ先輩のように本能レベルで先頭を譲りたくないという感情の発露なのか……もしそうだとしたら大変なことになるけど今は置いておこう。

いずれにしても今ここで速度を上げたことには変わりない。目測……1000m⁶1分⁰少^kしの^mペース^h。砂に足を取られて速度が芝と比べて伸びにくいことを加味しても、クラシック期ならかなりのハイペース。

……恐らく、ファル子先輩はこれを維持できる自信がある。

『まもなく1000m。レースはハイペースで推移しています。先頭は変わらずスマートファルコン、続いてサバ>NNストライプ。4バ身ほど離れてハッピーミーク』

ぼくは変わらず、ファル子先輩を追走し続ける。

位置は依然斜め後ろ。いつでも抜ける、そしてどれだけでも煽れる絶好の位置取りだ。

スピードを上げてでも食らいつく。ここから更にスピードを上げて突き放そうとするという場面は、もうラストスパートでしかありえない。一度速度を上げたのに離せなかったことで、体力の消耗を避ける必要が出てきたからだ。ここでは我慢してくるはずだ。

(意識しちゃダメだと考えるほど、結果的に動きには強く影響が出る) こういう時、本当に意識しないでいられるのは、スズカ先輩のように走っている間は何も考えずに最適解を選んでいられるひと……あとは場合によっては、ターボのようにがむしゃらに走って周りを見る余裕がないケースに限られる。ファル子先輩は今はまだそうじゃない。これまで抑える走り方ができていたというのはそういうことだ。彼女は割と考えながら走るひとで、それ故に精神の削り合いが成立する。

人間もウマ娘も疲労は体だけに溜まるものじゃない。心にも当然ストレスや疲労が蓄積していく。

なにも鬱になるまで追い詰めるというんじゃない。ほんの少し焦らすだけで十分だ。瞬時の判断が求められるレースの中でなら、

ちよつぱり判断力を奪うだけで平時の数十倍もの効果を発揮する。

現に今、ファル子先輩はわずかに脚を速めている。近くにいないと分からないほどにほんのちよつとだけけど——その「ほんのちよつと」が、毒のようにじわじわとレース全体を蝕んでいく。

残り800m。

ぼくが仕掛け始めるとしたらここからだ。

『サバンナストライプ、スマートファルコンをかわして先頭に立った！ 後続は上がってこないのか！』

「上がってんだろ見えてねエのか実況！」

「にやはは、相対速度で判断しちやっつてるとこれは騙されちゃうかもですなー」

一見すると差が詰まっていけないように感じられるが、そもそもここで全力スパートをかけた以上あくまで現状は詰まっていけないように「見える」だけだ。

パワー・スタミナの勝負になりやすい大井レース場2000mのコースは、ロングスパートをこなせるウマ娘に有利と言われるがそれは一般論だ。スパンと切れ味良く上がってくるウマ娘が勝つことも当然ありうるし、800m地点ではまだ脚を溜めておくひとも少なくない。

一方、先行から逃げのウマ娘はと言うと——。

『上がってくるか！ ハッピーミークここで来た！ スマートファルコンも食らいつく!!』

（——やっぱ来るよね！）

本気のスパートが始まったそのタイミングで、ファル子先輩とミークも勢いよく上がってくる。

逃げ、先行のウマ娘は末脚で勝負するわけではない。多少鈍くとも先頭を譲らず、ペースを維持し続けることで押し切る必要がある。

こちらの最高速がナマクラであることは周知の事実。対してファル子先輩やミークは末脚を發揮できるポテンシャルは元々持っている。

だから、ぼくは競り合いには弱い。並ぶことができれば、あるいは

……そう思うのが当然だ。実際今それをされると超辛い。

ソラを使う集中力を欠くこと。先頭に立つことで他のウマ娘の姿が見えなくなり一瞬気を抜く、などのケースが該当。のを誘発するために一時的に一着を明け渡す——却下。既にファル子先輩とミークがデッドヒートを演じている今、気を抜くことはまずありえない。

となればあとできることは……！

(最短距離、最速で！)

最内に寄せて距離のロス無くし、ややストライドを狭めてコーナーに対処。同時に後ろから迫ってくるファル子先輩とミークに外側から抜く分のロスを背負わせる。

策だ何だと言いながら最後はこの力押し。不格好極まりないが、スマートさなんて元から求めてはいない。あとはもうこのまま押し切

「たああああああっ!!」

「っっ!!」

「!!」

嘘だろ……!?! 想定以上の速度でファル子先輩が上がってきた! それにミークも! ミークは元々脚質として差しにも適性を示しているから不思議は無いけど、これは……。

データから推測できる成長曲線からするとまだ彼女の能力は「逃げ差し」できるほどに成熟しきってない! そのはずだ!

いや、だとすると——だとしても——………。

——考えを改めよう。

現に今起きていることだけを見て分析する。推測よりもよほど確実だ。0・1秒で結論を導き出せ。

クラシック級という舞台、未だ未完成の能力。ウマ娘を探せば、レースの最中にも成長をし続ける怪物が存在するというのは実例がある。それに領域ゾーン。これはそもそも入れるか入れないかはその場の精神状態で決まる不確定要素の塊。では、その上でこの場でそれを上回るには……。

「ッあああ!!」

「……！」

「くっ……!?!」

腹を決める。のこりほぼ500m……400m²を、速度を落とすこと無く今のぼくの100%——最速63km/hで駆け抜ける。

『ここで更に加速!! 突き放すか、いや後続も追いつがる!!』

「二段階加速か! だが……」

「ミークの方が早くゴールに辿り着けます!」

「いや、ファル子の方が速い!」

分かっているよ、そんなこと。

このままじゃ勝てない。それは並びかけられてるぼくが一番理解してる。坂もほとんど無い長い直線、パワー勝負にはなり得ない。

けど……。

「っ!?!」

「……!?!」

——忍ばせていた遅効性の毒がここで牙を剥く。

前半に散々ファル子先輩を追い回した結果だ。ミークに関してもこれは同じ。数バ身分も距離を離していたのに、一気に末脚を使ってしまうと途中で筋肉疲労が顕在化して当然だ。一気に速度が落ちるということは無いまでも、速度の上がり具合は徐々に鈍くなる。

「加速が鈍った!?!」

「前半に後ろから速度を上げさせられたことが今になって効いてきたようですね」

「あ、でも……このままじゃ」

フラワールの指摘通り、加速が鈍ったとしても最高速は変わらない。このまま行けばそのうち追い抜かれることは間違いない。

だから、やるべきことは一つ。

——⁶⁴_{km/h}の限界を超えた速度を出す。

「くっ、うあああああああッ!!」

「三段階加速だ?!」

常識破りの三段階加速。それでも押し切れるかは賭けだ。速度を上げたと言っても、所詮時速1kmの違い。加速能力のおかげで今こ

の一瞬だけは前に突出できている。

更に体勢有利の状態を作り出すため前傾姿勢に……！

『三人並んだあ！ 行くか！ 誰が前になる！ ——三人並んだままわずかに差をつけてゴールインッ!! スマートフルコンか！ サバナナストライプか！ ハッピーミックかつ!! 電光掲示板にはレコードの赤い文字!!』

——2分4秒0。掲示板に表示されたその文字を見ながら、ぼくらはしかし誰も腕を振り上げるようなことができなかった。

同時に表示されているのは「写真」。1着から3着までの全て、本来着差が表示されるべき場所にその二文字が灯っていた。

『えー……これは大変難しいレースです。3人並んでのゴール、現在写真判定を行っております』

当然、ウイニングランなど行わなければならない。

激烈に痛みを訴える脚をクールダウンさせるべくゆっくり歩きながら、着差の発表を待つ。

正直、微妙だ。全力も全力で走ったから理性トんでたし、差がどのくらいあるか、よく分からない。

1分、2分。ひどく長く感じる時間が過ぎていき、やがて判定の文字が消えた。

掲示板の一番上に載った数字は——12。

『結果が出ました。1着サバナナストライプ、2着スマートフルコン、3着ハッピーミック!! 狩人が隼を撃ち落とし、砂の栄冠を手に入れたあっ!!』

——着差は、上からハナとハナ。わずか数十センチの間隔の中に3人が収まっていたということだ。

ぼくは喜びの声を上げるよりも先に、疲労感と緊張感で凝り固まった体が弛緩するのを感じ取った。

基礎トレしたら屋台引く

レースの世界には必ず勝ちと負けがある。

同率の一着というのも、確かに中にはあるだろうけど、極めて稀なケースだ。皆が本気でやっているからこそ、そこには確かな勝ち負けが生じる。そうでなくてはならない。

それがわかっていいるからこそ——ぼくはその場でうずくまるファル子先輩に声をかけることができなかった。

勝者は常に敗者の思いを背負って走っていく。それがトウインクルシリーズの——。

(いや、そういう空気で走るキャラじゃないなぼくは)

そこまで考えて、考えてたことを全部投げ捨てた。

そもそも、そういう話を通じるのは「次」が無い場合だ。トーナメント形式とか。確かにクラシック期のジャパンダーフトダービーはこのタイミングでしか走れないけれど、トウインクルシリーズにおいてなら同じ相手と走る機会はこれから作ることはできる。だから今の場合かけるべき言葉は一つ。

「——次はシニア級でやりましょう！」

「しよう」

「……！」

ぼくが声を上げるのに合わせて、ミークもファル子先輩に言葉を投げた。

次走はそれぞれぼくが菊花賞、ミークが秋華賞。その後は有馬記念に出ることになるだろうから今年のダートグレード競走に出ることは難しいだろうけど、来年以降はある程度融通もきくようになる。

……流石にJpn2やJpn3となると色んなしがらみがあるの
で出走は難しいだろうけど。ハンディキャップ背負わないといけな
くなる可能性高いし。あとこう言っちゃなんだけど賞金額がちよっ
と……。

ともかく、出走するウマ娘のレーティングによっては今後の賞金額

の見直しもありうるから、ダート競走の活性化のためにも出走すること自体は悪いことではない。

……いや、まあ、ぶっちゃけその、ぼくの場合勝っても全然着差離せてないからレーティングそんなに高くないんだけど。悲しいことに。

ほんのわずかな間を置いて、ファル子先輩は顔を軽く拭って……笑顔を作ってこちらに向き直った。

「もっちゃん！ 次は絶対負けないから！」

ほんのわずかに涙の跡が見える。間違いなく複雑な感情を抱えているだろう——けど、追求はしないししちやいけない。

強さの格付けはまだ終わってないし、終わるものじゃない。まだこの先いくらでも競うことがあると気付いてくれればまずはそれでいい。

冷静に考えると実質敵に塩を送って再起と覚醒を促しているようなもののような気がするし、そもそもそうなら勝てるビジョンが見えないんだけど今は置いておこう。重要なことじゃない。

いややつぱ相当キツいな。間違ったかな。でもいくらレースにはつきものと言っても誰か泣いたり苦しんだりするのを見るとこっちも悲しくなるし……。

「次は勝つ……」

「こちらこそ……と言いたるところだけど、ごめんちよつと肩貸して」
「むむ」

不満感むき出しのミークにそんなことを言われるが、当のぼくの脚はと言うとそろそろ限界を迎えようとしていた。

筋肉めてるっぽいのをヒシヒシと感じる。なんだか前に一度やったのを覚えているせいなのか、脳内物質が誤魔化してくれない。

「……大丈夫？」

「一週間くらいトレーニング禁止かも」

多分この後説教だろうな、と思いつつ、たははと無理やり笑い飛ばす。

しかしぼくに勝ち筋はあれしか無かったんだから仕方ない。この

後のウイニングライブに……どのくらい影響出るだろ。

地方のレース、遅い時間に始まる分セットリストが詰め込み気味なんだよね。まあ、対処する時間くらいはあるか。

……≠……

「——というわけで全治三週間の靭帯損傷でした」

「思ったより軽いね？」

「私たちが重傷なだけじゃないかな……」

後日、ぼくに下された診断は全治三週間の靭帯損傷。

合宿所には戻ったものの、結局夏季合宿の時間の多くをファイにするハメになってしまった。ロクにトレニングもできないので、今日は屋台で商売が主だ。本日のお客さんはパーマー先輩とアイネス先輩。怪我人と怪我人と元怪我人が揃ってしまった。

全治どのくらいになるかイマイチ不明な屈腱炎を発症しているアイネス先輩と、去年の京都ジュニアステークスでの骨折からつい最近復帰したばかりのパーマー先輩と比べると、まあ確かに軽微と言えれば軽微だ。

……本当にこれパーマー先輩の言う通り、ふたりの状態が特別悪いだけじゃないかな？ 正直、ぼくくらいの怪我くらいしてるひとは割といると思う。

「というわけでしばらく基礎トレしたら屋台引く生活です」

「後半がおかしいなあ」

「普段からやってることだし、今更なの」

「焼き鳥丼お待ち」

「わーい」

「普通に頼んでる私達も、思えばずいぶん順応してるなあ……」

そりやもう屋台始めて三年目だし順応くらいするでしょうとも。

ところでアイネス先輩に出した焼き鳥丼だが、これは別段特別な素材は使っていないごく普通ものだ。ただ一点、目の前で焼いているということを除けば。

あとは一般のご家庭でできる程度に下処理をしてタレの調合と使う部位の配合を頑張るだけ。ジユウと鶏肉が焼ける匂いと音はそれだけでお客さんを呼ぶスパイスになる。

皮はできるだけパリパリに焼くのがぼく流。出た鶏油も後で再利用できる。

「はいパーマー先輩はサマー・デイライト」

「うわあ、どうしようアイネス。オシャレなノンアルコールカクテルが出てきた……」

「他に出してるお店は方向性しつかりしてるのに、この屋台だけ何が出てくるか分からないびっくり箱みたいなレパートリーしてるの」

「ていうか……居酒屋？」

「ああー」

「学生が居酒屋経営はコンプライアンス的によろしくないのてただの食堂でーす」

口元で指を使って？マークを作る。

いや、ホント……未成年なのにお酒を扱ってるってその要素だけでも割とよろしくないコトだから……。

「そういえばストライプちゃん、今年は偵察に行かなくてもいいの？」

「あー……うーん……別にしてないわけじゃないんですけど」

言ってるいいかな？

言っちゃうべきかな？

……まあ、ふたりとも今はそこまでトレーニングに集中できる状態でもないし、大して問題でもないか。言っちゃえ。

「関係各所にはもう話は通してあるのは前提にしてもらいたいんですけど」

「うん」

「あそこにあそこにあそこ。移動販売のひとつか見かけるでしょ？ あればくんとこの社員でスパイです。他にもいます」

「ちよつと待って？」

初年度はそもそもぼくが偵察しているという想定にたどり着くひとが少なかつたためぼく自身が行った。

二年目は去年の件で明らかに警戒されてるだろうことを把握して
たので、ここであえて他のひとに行つてもらつた。

しかし当然毎年同じことをしては対策を取られるので、今年は潤沢
な資金を活かして単純かつ最も効率的な手段に出ることにした。つ
まりは人海戦術だ。

「毎年グレードアップして行つてない!？」

「そりやあまあ、毎年更新しないとマンネリ化して何するか読まれ
ちやいますし」

芸人みたいなことを言うようだが、割と真面目な話だ。策でもなん
でも、同じことをし続けて効果を上げ続けるのは難しい。

「つまりストライプも……」

「ぼく?.. ぼくは何もしませんよ」

「『は』って言ったね」

「むほほ」

こういう時は虚実を織り交ぜるのが有効だ。こちらが本当に何も
しないとしても、自然と疑心暗鬼になつてくれる。

評判というものは上手く使わないとね。

「ぼくの話はいいんですよ。それよりアイネス先輩、足の具合はどう
なんです?..」

「んー……正直分かんない。注射はしたんだけど……」

「注射つて……アブないクスリじゃないよね?..」

「そんなわけないの。かん……ナントカつて言つてたけど」

「自分が受けた施術の名前、もうちょっとちゃんと覚えててください
よ」

「あはは。治る可能性が高まるってだけで舞い上がつちやつて」

……良い言い方をすると、実態だけを正しく見てると言えなくもな
い、のだろうか。

ともかくタキオン先輩の話によれば治癒の可能性が上がるとい
うことだし、復帰も……近くはないだろうけど、一年後とかにはならな
いかもしれない。

あとはリハビリの具合次第だろう。少し安心して息が漏れた。

「というわけで今は腱を強くするべき時期なの。おかわり！」
「うー」

鶏肉や鶏皮にはコラーゲンが多く含まれている。腱を形作り、強くするにはもってこいなわけだ。

……ぼくも後で食べとこっかな。限界超えての怪我は腱の問題だし。

自信が持てないならそんな時は

いやあ、大怪獣オグリは強敵でしたね。

……いや本当、なんだろうねあのひと。もうテツペン本格化の最盛期。「テツペンを越える」などの用法で使われた場合は本格化が終わったことを意味する。越えてるはずなのにあの食事量。本当に同じウマ娘か？ ……いや亜属が違うが。ウマはウマ亜属。シマウマはシマウマ亜属。いずれも同じウマ科。

ぶっちゃけそこまでは良かった。オグリ先輩の襲来は天災のようなもの。お金はちゃんと支払ってくれるので、収益的には万々歳。

しかし問題は直後のシン・スペチャン襲来だった。

もう食材がありませんと泣き言を吐くのは、まあ別に大したことはないのだけど、それを告げてシヨンボリしてるスペ先輩を見るのが忍びなく、翌日使う分の食材まで使ってしまったのであった。

情に流されたばかりがマヌケなだけと言われると何も否定できないのだけだ。

ともあれ結論を言うと、ぼくは結局何もおやつを食べることができなかったということだ。

「困った話だよ」

「なんて言ってる割にその手元にあるお茶漬は何……？」

「コンビニで買ったんだよ」

身も蓋もない返答に、ネイチャはその場でガツクリ肩を落とした。

お茶とインスタントごはんとお茶漬けのもとで完成。あとおつまみコーナーにあった鮭の皮を買って軽くあぶって乗せれば軽く高級感が演出できる。鮭とぼとかも可。ついでに漬物でも横に添えれば気分的にもなんとなく満たされる。

という旨を説明するとネイチャはちよつとだけ納得したように頷いた。

「おふくろが本当に冷蔵庫に何も無い時やってるやつだそれ」

「ネイチャの家って確か……」

「スナック。んだからおつまみは結構残ってることがあつてさ」

「豆腐残ってるなら枝豆と一緒に片栗粉混ぜてすりつぶして火にかけてたらちよつとした料理になるよ」

「よくまあそういう案ポンと出せるよね」

正確なことを言うのと、出せるように日々何かしら考えてるといふところだろうか。

自ら屋台を引いているわけだし、トレセン学園生はノリの良さのせいで時々変な注文をしてくるときもある。そんな時のために予めどうするかを計画しておくわけだ。

「個人的にはたこわさとかイカの白造り肝が入っていないイカの塩辛。肝が入っているものと比べてクセが少なめ。をご飯にのつけてお茶漬けにするのが好きだけど——」

「アタシ時々ストライプが何人なのか分かんなくなるよ」

「魂は日本人！」

「あ、うん」

「ここツッコミどころぞ？」

「ツッコむようなことある？」

「？」

「ごく自然なことみたいにTKGたまごかけごはんに納豆かけて食べる外国人いないでしょ」

「フラッシュ先輩」

「いたわ……」

フラッシュ先輩は単純に納豆フリークなのでノーカウントではないかと言われるとこつちも言葉を返し辛い部分があるが。

……まあ冷静に考えるとぼくも自分みたいな外国人いたら、まず外国人かどうか疑うか。魂が日本人とか言われても「そうだね」くらいしか返しようがないわ。

「で……何か食べるだけのためにぼくのところに来たわけじゃないんでしょ？」

「まあね。あ、でも小腹すいてるから何か欲しいかも」

「だから、売り物もう無いって……あ、お刺身の残りならあるよ」

「何で!？」

「その辺で釣ってきた魚だから売り物にできないんだよ……漁業権の侵害で密漁になっちゃうから」

日本の海岸はそのほとんどに漁業権が設定されており、遊漁——非営利目的での竿釣りなど、基本的に環境に影響が無い行為のみが認められている。

なので、ちゃんと許可を得ている漁師さんなどでなければ、釣った魚を売るというのは法律違反になってしまうわけだ。大漁だったからおすそ分け、というような事例は問題ないとは思うけど。

なので、ぼくが普段お店で出すような魚は市場で買ってきたものだけだ。

「はいカワハギのお刺身と肝ぽん」

「うわ、絶対美味しいやつだこれ……」

「半身焼きにしてもいいけど」

これを美味しくしようと表現できるあたりネイチャはお酒飲みになる資質があると思う。

というか少なくとも現時点で既におつまみの味に親しんではいると思う。多分おやつ感覚で。

ともかくネイチャが食べ終わるのを待ってから、話の続きを促す。

「アタシさ、そろそろデビューじゃん」

「うん、まあ時期的にはそうなるね」

まだしばらく時間はあるけど、それでも半年足らずで確実にデビューにはなるはずだ。

「でも、毎日トレーニングしてもさあ、すぐ近くでテイオーがジャンジャンバリバリ自己ベスト更新していつてるの見せつけられるのよ」
「……まあ、そうだね」

チームスピカとカノープスのトレーニング場所はそう遠くない。日によっては互いの練習時の声が聞こえてくるということもあるだろう。ちよつと覗きに行けば練習風景も見ることが出来る。

で、テイオーは今この時期でも既に頭角を現しているうちのひとりで、会長とやった模擬レース——話によると伸びた鼻っ柱を一度折る

ためにやったらしい——以外で未だ無敗。2400mの自己最速タイムをちよくちよく更新し続けていて、本格化の最盛期が近いことを予感させる。

「だからナーバスになってると」

「そんなところ……で、そういうの一番割り切れてそうなストライプさんや、どうすればいいですかね？」

「同じ土俵に立たないか全力を出させない」

「も……もーちよつとこう実力差を埋める方法とか……」

「あつたらばくが欲しいくらいなんですけど」

「だ……だよねー……」

あつたらこんな必死に頭回してないんですけど。

あえて言うならなんとか頭回して不利を無理やり覆しに行くのが実力差を埋める方法なんですけど！

……ちよつと恨み節が出かけた。反省。

「ともかく、たとえ『最強』でも『無敵』じゃないんだよ。会長さんだつて『このウマ娘には絶対がある』って言われてるけど、なんだかんだジャパンカップや天皇賞では勝てなかったしアメリカ遠征も失敗してるんだから」

「逆に言うとその外全部勝ってない？」

「まあそれはそうなんだけど、全16戦のうち3敗してて……およそ20〜25%の確率で勝てると思うと、なんとなく何回かやれば勝てるような気はしない？」

「詐欺師の論法じゃん」

まあうん。数字のトリックです。

実際会長さんが現役の時にやってたらずまず間違いなく負けてるはずだ。流石に同条件かつ重バ場通り越して不良バ場の3200mとかなら勝ちの目もあるけど……あるかな……あると信じたいが……。

「でも、絶対に勝てないわけじゃない。10回に1回……100回に1回は勝てるかも」

「それは……うん」

「ならあとはその『1回』を引き寄せる努力をしよう。天気やバ場状態

を見極めたり、自分に有利な距離を選んだり……それこそ、人生に1回しか使えないような作戦をぶついたりさ」

少なくともぼくはそうやって勝ってきた。

問題は人生で1回しか使えなさそうな作戦がいくつもあるということだが、まあそこはバリエーションということ……。

「それでもどうしても自信が持てないならそんな時は」

「時は？」

「——特訓だね」

ぼくは山を指差して、そんなマツチヨイズムの権化じみたことを宣言した。

……≠……

「それでどんなヤバいことするかと思ったら登山で」

「いくらなんでも他人に危害加えるようなことはしないよぼかあ。いや、それより問題があるんだけど」

そして準備を整えてやってきたのは、合宿所近辺にあるそれほど高くない山だった。

登山。多くの人が趣味として興じている……広義的に見ればスポーツの一種だ。

老若男女問わず様々な人に親しまれており、特に運動不足解消のために老人が山に登るといふ話をよく耳にすることから侮られがちだけど、毎年何人もの死者・行方不明者を出す過酷かつ危険な側面も持ち合わせている。

そのため、登山道が整備されていて登りやすい合宿所近辺の山を選んだのだけ……それとこれとは関係無い問題がひとつあった。

「何でしようか」

「そうやって何食わぬ顔でここにいるイクノたちだよ」

「だそうですよタンホイザ」

「ぶーぶートラちゃんたちだけ秘密の特訓とかズルいぞー」

「まあタンホイザたちはまだいいとして」

「いいんだ」

「テイオーとマックイーンまで来てるのは何なのさ」

ネイチヤだけ呼んだはずなのになぜか友人たちが大集合していた。イクノとタンホイザはまあいいとして、どうしてよりにもよってネイチヤのコンプレックスの根源とも言えるテイオーや、ぼくにとつては目下最大のライバルとも言えるマックイーンまで来ているのか。これが分からない。

首を傾げていると、マックイーンはひとつため息をついた。

「脚を怪我した友人が突然山に登るなどと言い出したんですのよ。心配になって見に来るくらいのはしてもいいでしょう」

「あ、うん、ごめん」

真面目な理由だった。反省。

「でもさ、何で急に登山なんて言い出したの？」

「理由はふたつ。まずネイチヤの長距離適性の高さを伸ばしたいことと」

「え、アタシそうなの？」

「言われてみればそうですね。常々思っていましたけど、ネイチヤさんは重心のすわった安定感のある走り方をされるので、長距離にも向いているはずですよ」

「おー……ステイヤーのふたりに言われるとこそばゆい……んだけど、長距離路線の壁として立ちはだかつてくるじゃんこのふたり……」

そこは仕方ないと思っていたらこう。ぼくだって得意距離のレース走りたいし。

ともかく、登山というのは過酷だからこそ、トレーニングとして多少なりとも効果がある。特に足腰への負荷が強いため、先程マックイーンが指摘したような安定した重心を更に伸ばすには効果的だろう。

加えて——ここはそれほど標高が高くないけど——多少なりとも高い場所に行くことで低圧・低酸素状態になるため、心肺機能も鍛えられる。ぼくのスタミナが豊富なのは単純な生まれつきのものだけ

ではなく、ケニアという国土のほとんどが高地で占められている場所に生まれたことで鍛えられたことも一因だから、まさしくぼく自身が自分の体でトレーニング効果を実証していることになる。

それに……本当はテイオーがいないところまでつてというのが一番面倒が無かつただろうけど、考えようによっては近くで行動する分、よりネイチャがテイオーと異なる自分の良さというものを見つめ直す機会にもなるかもしれない。本人がどう思うかは分からないけど……。

「で、もうひとつは、申し訳ないんだけどぼくのリハビリ」

「えっ、リハビリで登山？」

「たまにあるよ。一般的に言うリハビリとはちよつと感覚が違うけど」

そもそもぼくの怪我自体は大したことないし、本格的なトレーニングに戻るための前準備という趣の方が強い。

本当は高山トレーニングがしたいところだけど、流石にそれは色々各方面で問題があるのでやるわけにいかなかった。

「皆分かってると思うけど、順路からは外れないようにね。遭難するかもしれないから」

「ボクらの脚ならフツーに抜けられない？」

「と思つたら運の尽きだよ。木の根が張つてて足元はデコボコだし、急斜面があつたりしてウマ娘だろうとまともに走れないからね。下手したらコケて頭打つてそのままお陀仏」

「ひええ」

山をなめたら死ぬ、なんて伊達で言われていないというわけだ。

それから、注意した成果もあつて皆特に道を外れたりということもせず、トレーニングという目的もあつてやや早足気味に山を登つていくことになった。

途中、ふと思ひ立ってマックイーンに話しかける。

「そういうえば今年屋台に顔出さなかつたね？」

「……行けば確実に食べすぎてしまいますもの。自制しなければ」

「そこは……量を控えればよくない……？」

「あなたのお店は誘惑が多すぎますわ」

「マックイーンの自制心スポンジか何かでできてんの？」

「うるさいですわよー」

そうなると理解しているから行かない、というのもまあ立派な自制心と言えば自制心かもしれないが。

「——次にあなたと当たるであろう菊花賞、そこでコンディションをベストに持っていていかなければ勝つことはできませんから」

「マックイーン」

少し驚いた。どうやら、マックイーンはかなり本気でこちらを難敵と定めてくれているらしい。

思わず口元が少しだけ緩む。警戒されているということとはそれだけ難しいレースになるということだけど……それでも、強敵と認めてくれているのはやはり素直に嬉しい。

……しかし、待てよ？

「……菊花賞、賞金額足りる？」

「……うっ」

メジロマックイーン。連対率は非常に高い強豪ウマ娘である一方、現在は1勝クラス。

オープンウマ娘が上がってこれていない現状、次のレースで勝てないともしかすると菊花賞への出走そのものが危ぶまれる状態なのだ。

「不戦勝だけは勘弁してよ」

「……もちろんですわ」

マックイーンの声は震えていた。

糖分足りてなかった

夏合宿を終えて9月。

初週のレースのマックイーンは2着だった。

どうすんねんこれ。

——と、現状を嘆くのは後回し。重要なのはここからのことだ。正直都合4、5分ほどマックイーンの周りでテイオーと一緒に踊って煽り散らしてやろうかと一瞬思ったが、流石に人の心が無さすぎるのでやめておいた。

で。流石に菊花賞に出られるかどうかすら危うくなるとなると、基本的に放任主義なチームスピカのトレーナーさんも重い腰を上げる。

ぼくもそれと合わせてレース映像を確認したりしたのだけど、その結果判明したのは、どうやら敗因は糖分不足であるということだった。

なんで？ と割とガチめにテイオーが困惑していたが、まあ、納得と言えば納得の理由ではある。糖質というのは体を動かすエネルギーであると同時に、脳にとっての燃料だ。平均時速60kmで走ることのできるウマ娘にとってみれば糖分不足というのは文字通りの死活問題だ。下手すると死ぬ。その上時速60km以上で動き続ける視界の情報を常に処理し続けなければいけないし、レース中は一瞬の判断が求められるので余計に脳は糖分を欲する。

マックイーンが太りやすいというのは、裏を返せばそれだけ栄養を取り込みやすいということと、同時に「それだけの栄養を必要としている」ということでもある。長距離を走る上でこの体質は良い面と悪い面の両方が混在しているが……ともかく、1勝クラスや2勝クラス、それも中距離以下の距離だとまず絞る必要があるため、この体質は有利に働きづらい。結果、絞るために糖質を制限してしまい、脳に行く分の栄養を摂りきれないということになってしまっている。

……要するに、マックイーンは糖分不足で集中力を欠いているということだ。

これは一般人がダイエットをする時にもありがちな話だ。無理な糖質制限をしすぎて集中力が散漫になったり、思考力が落ちたり、イライラしやすくなったり……いずれにしても、これはマックイーンがしっかりと節制できているからこそ起きている事態と言えるだろう。変なところで加減を知らないのはマックイーンらしいと言えらしいが、こういう方面の加減のしなさは要らなかった。

というわけで、栄養管理だ。

と言っても、切羽詰まっている今、次走までの間隔が無いのでまずはブドウ糖を直に補給してもらった。

1着で帰ってきた。

どれだけ糖分足りてなかったんだよと声には出さずにツツコんだけど、多分一番困惑していたのはマックイーン自身だったと思う。今回は応急処置的にシャカール先輩のラムネ貰ってきただけなのに。オマケにマイル戦なのに。

で、それからまさかの連闘。一週間の間ちよつと糖分を調整したメニューで過ごしてもらった上ですぐ翌週の2勝クラスに出走すると、こちらでも1着。得意の中距離以上ということもあつて今度は1バ身以上離れた快勝だ。

「マックイーンってもしかしてメチャクチャ難しい体質？」

「んだね」

レース明けの平日。カフェテリアに情報のすり合わせにやってきたのはぼくとテイオー、それからマックイーン本人だ。

とりあえず、ぼくらとしてはそう結論付けざるを得なかった。

マックイーンは糖質を脂肪に変換しやすい。それでいてちゃんと走るためには糖分が不可欠。

そのことを理解した当の本人はと言うと、机に突っ伏してうなだれていた。レースのためにはと思ってやっていたことが裏目裏目に出ていたというのは、やっぱりショックだろう。

「ストライプの方は全然太ったーとか痩せたーとかって言わないよね」

「ぼく、逆に糖質ほとんどエネルギーに変換しちゃう体質だから」

「ズルいですわ……ズルいですわ……！」

「体質ばかりはズルとか言われてもどうしようもないよ……」

あと、ぼくはケニアの方の高糖質メニューに慣らされて腸がそれに適応してるから吸収効率が良いというのもある。

……ちなみにこの、腸を適応させるという方法は一朝一夕でマネできないので、普通の人にはオススメできない。すぐに必要なことなのに数年はかかってしまうと本末転倒だろう。体質が変わる前は体調も悪くなるだろうし。

「で、次の出走は——」

「……来週ですわ」

「ローテギツチギチちゃん……」

「ボクも菊花賞まで間を開けたほうがいいとは思うけどさあ……そのためにとはいえやつぱり間隔詰め過ぎだよマックイーン」

「その前に脚壊しそう……だけど全然堪えた様子無いね」

骨膜炎発症してデビューが遅れたウマ娘の脚か？　これが……。

「ええ、イクノさんに蹄鉄を選んでいただいてから調子が良くて」

「蹄鉄く？　それだけでそんなに変わるもんなのく？」

「厚さや硬度の問題で走り方が多少は変わるから、効果はあると思うよ。普通はそこまで劇的なものじゃないと思うけど」

いや、実例が目の前にあるからな。どうだろう。

もしかすると怪我しやすいテイオーにとって、蹄鉄で改善というのはある種の福音になりうるかもしれない。なるといいんだけど。なるかなあ。効果には個人差がありますとかそういうオチっぽそうだしなあ……。

まあ、普通に考えるとそういう方面からのアプローチも維持したまま、医学的な見地からどうするかを考えるのが先決か。

本当にちゃんと医学的な見地から話せるかどうかは別問題として。次の瞬間には体がピカピカ光ってる可能性も否定できないし。

……さて。

「じゃ、ぼくそろそろ行くね」

「あれ、もう行くの？」

「うん。聖蹄祭の準備と当日学校の外で出すぼくの会社の打ち合わせとクラスの出し物と」

「いくらなんでも多いですわ!?!」

「去年よりマシだよ」

「これで!?!」

自分でも過労気味なのがわかるくらいだった去年と比べると、人を使うことができるようになった分、段違いに疲労が少ないのがわかる。

それに、問題のクラスの出し物の方は展示物になったからこちらも大した負担じゃなくなつた。イクノの強い推しで蹄鉄の歴史とかになつちやつてるけどまあそこは置いといて。

「とういわけで色々忙しいんだよね。マックイーンたちも将来人を使うような立場になつたら人件費はケチっちゃダメだよ」

「心配の方向性が異次元ですわよ」

「そうは言っても立場的にそういうのはついて回るでしょ、ふたりとも」

マックイーンはメジロ家だし、テイオーも一応旧家のご令嬢だ。本人がそれを望むかどうかによる部分はあるけど、家業に関わるつもりなら避けて通れない問題でもある。

もちろん、一般企業でもこれは同じことが言えるし、人を雇う雇わない以前に何かしらの契約関係が成立するなら、切っても切れない話でもある。

言った張本人であるところのぼくが一番頑張らないといけないんだけどね。むん。

・・・≠・・・

『それで結局聖蹄祭ではお菓子は出さない方針で?』

「出し物とパイの食い合いになつちやうからね、あとB級グルメ方面も避けたほうが無難かな……焼きそば屋台は去年あったから……」

「あの、トレーナーさん、ストライプさんが走りながら仕事のお話して

います」

「あれはあいつがおかしいだけだから絶対に真似をせんように」

午後のトレーニング時間、ぼくはスマホに繋いだハンズフリー機器を使って仕事のミーティングと同時にトレーニングをしていた。

……広義的に見ればこれもマルチタスクの訓練！ と強弁して押し切ったのは触れないでおく。

「あの子の発想が異次元なだけで普通はやろうとも思いませんよ、チーフ……」

「俺もストライプがあればペースを維持できていなければ許可は出しとらん」

「逆に何でストライプさんはペースを維持できているんでしょう？」

「慣れじゃないかな……アレは」

慣れるほどやってるかと言われると……自主トレの時は割とやってるな……。

他人の目がある時にしからしいからトレーニング強度を落とさないことには成功してるけど。

いや何か主題がおかしいな。問題はそこじゃない。

「慣れもあるだろうが、あれは膨大なスタミナがあるから成り立っている面も大きい」

「走ってる最中に普通、喋れませんかもんねえ」

「そこに加えて普段からやっている『煽り』——走っている最中でも0.1秒刻みで速さの微調整ができる計算能力と、体に叩き込んだ1000m1分の体内時計が為せる技だ」

「すごい……」

「そう、あいつは頭がキレるすごいウマ娘だ……があの優れた技能をああいう珍妙なことに使っている凄まじいアホだ」

「すごい……」

「ちよつとおー!! 人聞きの悪い風評ならともかくそこまで行くとななる罵倒なんですけどー!!」

今フラワーの発言のニュアンスが前半と後半でまるつきり変貌してたんですけど！

先輩としての威厳が！元から無い。

ともかく、ラップ走から戻った後は、クールダウンを兼ねて次のレースの出走予定者のレース動画を漁って対策を練る。その最中、ふとした拍子にサブトレさんがスマホを覗き込みながらひとつ尋ねてきた。

「菊花賞に向けて、調子の方はどうですか？」

「まあ、いつも通りです」

「本当に崩れませんかねあなたは」

ある意味その辺の……なかなか調子が崩れないというのはぼくの取り柄と言えるかもしれない。より正確なことを言うとな崩れてられるほど余裕がないって感じだけど。

「逆に、サブトレさんはどう見ますか？」

「勝機は十分あるかと思いますが……あなたの走り方が少し気になります」

「え、今更……？」

「ああ、今更煽り運転みたいなあの走り方についてどうこう言うというわけではありませんよ。戦法の問題です」

「って言うത്？」

「あなたは……データから伺い知れる相手の限界を無理やり引き出して、疲労困憊にすることが基本戦術ですよ。勝つ時も負ける時もいつもギリギリです」

「まあ、言葉にするならそうですね」

要はいかに疲れさせるかって話だし。

余裕を持たせたら意味ないし、相手に余裕を持たせたまま勝つたのは、結局臯月賞の一回こっきりだ。警戒されるのであれと同じことは一生できない。

「だから、ダービーでは限界を超えてきたアイネスフウジンに敗れ、ジャパンダートダービーでも限界を超えてきたスマートファルコンたちにあと一步のところまで迫られている」

「……ですね」

「あなたの戦法は相手をとにかく追い詰めることに特化しているた

め、『限界を超える』ことのできる超一流ウマ娘には……恐らく一歩及びません」

「まあ、そうなります」

めつたにいないんだけどね、そんなの普通。

レースの中でも成長している！ とか漫画とかじゃよくあるけど……現実には、普段のトレーニングの積み重ねをいかに上手く示すかが本番で問われる。

しかしいわゆる超一流というのは、その『レースの中で成長する』という漫画じみたこともやってのける。

ただ、中距離におけるぼくにはそれしか手が無いのも事実。

「顔色一つ変えませんか」

「事実ですし。でも——長距離からなら、使える手札はグンと増える」では、長距離ならばどうか。

——特に3000mという超ロングゲイスタンスならば。

「ここからが本当の実力勝負。今までの戦法は全部塗り替えます」菊花賞まであと数週間。

調子はいも変わらず好調だ。

鏡見ろ

10月始め。ぼくらのもとにマックイーン2着というニュースがやってきた。

今回は残念だったね、と寮で多少なりとも慰めの言葉をかけようとしたところ、ニュースを耳にした瞬間にテイオーとゴルシパイセンがタンバリンとカスタネットを持って煽り舞い散らしに行っただけの言うまでもない。

「あれ？ 普段ならストライプも煽りに行くと思っただけだ」

「ん？ んー」

「何だよノリ悪いなあ」

「ノリで他人を煽るのやめていただけます!?!」

いや、まあ……そういう気分じゃないっていうか……そういうことできる立場じゃないっていうか……。

「はあ……確かに、まるでストライプの戦法でも真似たような走りをしてくる方に負けた直後ですから、当のストライプに煽られでもしたら冷静でいられないでしょうしありがたいですけれど……」

「あ。そっか。マックイーンに勝ったヤツ、オマエの店で見たことあんぞ」

「うっ」

「なんですって?」

ぼくは思い切り目を逸らした。

……まあ、うん、その通りなんだけど。

「詳しく、話を聞かせていただけます? 私は今冷静さを欠こうとしていますわ」

「そんなに複雑な話じゃなくって、マックイーンに勝ったあのひと、ぼくの経営してる店でバイトしてる先輩で……」

「ええ」

「最近勝てないって言うからじゃあコレコレこうしたらいいんじゃないですかーってアドバイスしたらその通りに」

「貴方、私のサポートをしたかと思えばそういう方面でアドバイスを送ってみたいどちらの味方なんですの……」

「敵味方って問題じゃないよ。マックイーンは友達でそれはそれ。先輩は雇用主ってことでこれはこれ。レース中のアレコレには流石にぼくも関与できないし、結果がどうなるにしてもそれは本人のことでしょ？」

「それは……まあ……そうですね」

「ストライプってその辺割り切りシビアだよー」

「シビアっていうか、競技者としての勝ち負けと人としての好き嫌いとは別物でしょ。ライバルだからって日頃からバチバチにやりあわなれないといけないわけでもなし……」

まずぼく自身マックイーンと親しくはあるけど、他の場所での交友関係が無いってわけじゃない。当然チームのアレコレもあるし、会社を興した以上そちらの雇用関係だってある。単純な雇用関係のみならず、もうちよつと踏み込んで話することだってある。だからどっちの味方とも言えない。しいて言えばどっちにも勝ってほしいと思ってる。

レースはあくまで個人競技だ。ポテンシャルを出し切れるように支えることはできるけど、やれるのはそこまで。今の彼女たちにできるベストを尽くしてほしいから求めには応じたけど。一応これでも責任は感じてるから煽ることはやめとこうと判断したわけだ。

「つーかマックちゃんか油断しなきゃ差し切れてたって話じゃねーかよ」

「ぐううっ」

「先輩も油断を誘ったわけじゃないと思うけど、いい具合の位置取りされた時点で……ですね」

「で、コレってマックイーン菊花賞出られないってことだよー？」

「んー……ここまで連対率高いし、賞金は積んでるんだよね。ひとりでも回避したら出走できると思うけど」

さて、ここに来てせっかくのG1を出走回避とかするかな。

そこに関してはあんまり期待とかするようなことではないんだけ

ど……。

……≠……

「和メイド服着てるフラワーはすっごいかわいいんですけどちょっと犯罪的じゃないです？」

「鏡見ろ」

聖蹄祭当日。バックヤードでふとした拍子にそんな疑問を投げかけると、シャカール先輩に一発で切つて捨てられた。

……はて。10歳そこらのフラワーに和メイドコスをさせるというシチュエーション自体が、どうにもちよつと背德的な……と思つたのだが、何か思い違いでもあつただらうか。

「でもフラワーの年齢を考えると」

「10歳児の平均身長未満のためエが言えるこつちやないっつー話なんだが!」

「……おお!」

言われてみればそうだな？

……言われてみればそうだな!?

三年間毎年やってたけど、初年度にウオツカに指摘されて以降自分のことを省みることがあまり無かつた分忘れてた。

「つまりぼくは合法ロリ粹……?」

「違法だバカ」

違法か。

14歳は違法だわ。

錯乱してんのかぼくは。

「つーか現実逃避してねエでとつとと表行け」

「シャカール先輩もですよ」

「あゝ……」

今年、シャカール先輩は去年までとは異なり和メイド姿だった。

原因はファインモーション殿下だ。「和風のメイドさんを? シャカールが? 見てみたいなく」という鶴の一声で決定してしまった。

なので去年までのそれとは異なりシヤカール先輩は——本人曰く「オレには似合わねエだろ」という——フリフリ姿だ。気持ちは、まあ分からないではない。

「ンだこのロジカルじゃねエ格好……」

「恥ずかしいって気持ち毎回『ロジカルじゃねエ』って言葉で表すの、アレ正確に意図汲めなくて配慮できないからやめた方がいいですよ」「母親みたいなこと言ってるじゃねエ!」

「ははは」

「てめエこそ一気にファン増えたからって逃げようとするんじゃないぞ……」

「……ははは」

一方、ぼくは急激に増えたファンへの対応に苦慮していた。

夏合宿の時はまだ良かったけど、一般公開となった聖蹄祭になると想定してたより大幅に多いファンを迎えることになった。

去年の聖蹄祭もあってぼくの自分自身に対する認識というのは、戦法も見た目も基本「ニッチ受けするウマ娘」である。それでもG1を勝ったこともあって、多少ならず一般の人気を得たということも把握はしてた……のだけど、基本的にファンの姿はレース場で見ることになるし、どの人が誰のファンかなんて判別できないし、実態がどうかというのはよくわからなかった。

そしていざ開場してみるとなだれ込んでくる人の山。いきなりこんな人が来るものかとビビったぼくは、一度バックヤードに駆け込んでしまっていた。

いや、うん……良くないことはわかってるんだけど……。

「ここまで増えますう……?」

「増えるんだよ。お前単にG1勝ったってだけじゃねエんだぞ。クラシック三冠の一角取った上でダートG1勝つようなウマ娘なんざ史上初だぞ」

「……おお?」

……そうか、「winning the soul」と「UNLIMITED IMPACT」の両方でセンター取ったひと今のところい

ないのか！ヴィクトワールピサが皐月賞とドバイワールドカップを勝利していることから該当する可能性あり。ただしドバイWCの馬場はオールウェザーだったため、ダートと捉えてよいか、また海外レースのため実際に「UNLIMITED IMPACT」が歌唱曲になるか不明。

「単純に中央で縞毛のデビューが初な上に縞毛のG1獲得が初、この上また史上初が増えたらファンも増えるに決まってるだろ」

「そんな相乗効果が……」

言われて考えてみればそりゃ一回見に行ってみようとはなるわ。

なるほどよし、ファンサする気力湧いてきた。客商売ならともかくファンサとなると何すればいいかろくすっぽ分かんないけど！

ぼくはシャカール先輩の手を掴んだ。

「それじゃあ行きますか」

「オイ何だこの手は」

「いや、ぼくも表に出るんですからシャカール先輩も行きましょうよ」
「お前普段そんな強引なことするヤツじゃ……待て、まさかファインの差し金か!？」

「……身近な方からお願いされたとだけ」

「お前が身近な『方』なんて言い方すんのファインしかいねエだろ！」

「まあまあまあ！　まあまあまああー！」

「クッソこいつ力超強エー！」

殿下からのお願いだからどう、というのが——無いと言ってしまおうと嘘になるのでまあちよつと一旦置いとくけども。

それを抜いても、せつかくの聖蹄祭なのだから友人と一緒にある程度ノリに任せて楽しまないと損というものだ。いつもと違う格好を見に来たというのに、一向に出てこないじゃあちらも楽しめないだろう。

あと基本、先輩後輩同期問わず「お願い♪」とか言われたらぼくはあんまり断れないタチだ。

その後、ぼくは大勢のファンに押しつぶされかけながらなんとか接客をこなしした。

シャカール先輩はと言うと……フアイン先輩にベタ褒めされて悪態をついていた。褒められたことそのものは嬉しいのかもしれないけど、やはりああいう服は似合わないと判断しているのかもしれない。ギャツプがあつてお客さんとしても面白いと思うんだけどなあ。

——他方。菊花賞に関しては出走者がひとりトレーニング中の怪我で出走を断念。素直に喜ぶわけにはいかないけど、マツクイーンは無事(?) 出走が叶った。

それはそれとしてゴルシ先輩にしばらくこれをネタにされることになるだろうことは言うまでもない。

菊花賞

クラシックG1最長距離、菊花賞。

トレーナーさん曰く「お前の場合普通にやれば十分勝ち目がある」という話だが、当然それだけでなんとかなるほど甘いレースでもない。

10月終わりの京都レース場。天気は——雨。昼を過ぎて徐々に強くなってきた雨は、重バ場を通り越した不良バ場。コース外から見るだけでも水たまりがあることが分かるほどに荒れたバ場はぼくにとって有利だが、同時にこれはマギレ能力が発揮できないこと。高速馬場に特化しているため重馬場でパワーが必要になることで実力が出せないなどの例がある。が出やすく、今まで隠れていた才能が芽を出す可能性が高まる。実は良バ場が苦手で道悪の方が得意でした——とか。そういうった意味で未だ油断はできない状況だ。

時間は徐々に近づきつつあるが、流石にコースに出られる人はそう多くない。体を冷やしてしまいかねないからだ。

「まさか中止にはならないよね？」

「台風なら前例がありますけど、そこまで酷いわけじゃないので出走にはなると思いますよ」

凱旋門賞などでも、芝がワカメのようになってしまうほどにふやけてしまう不良バ場になってなお開催された例がある。

そのレースは下位人気が一着を奪うなど荒れたレースで、場合によつては怪我すら懸念されたほど危ないレースだったけど……それでも開催はした。よっぽど、それこそ台風が来ることが確定しているような状況でも無い限りレースが中止になることはないと示す好例——むしろ悪例？——と言えるだろうか。

「それにしても、まるで狙ったかのような大雨ですわね。まさかストライプが雨乞いでもしたわけじゃないでしょうけれど……」

「……………」

「しましたわね？」

「まあちよつと待つてよマックイーン。仮に雨乞いなんてしてたとし
て科学的に因果関係が証明できるものじゃないでしょ？ それにも
し天候を変えることができたとして罰則があるわけじゃ」

「したんですのね？」

「はい」

こういうとき、例えばシャカール先輩は理詰めで呪いと刑事罰との
関連性から雨乞いとルールの穴、それにまつわる罰則まで絡めて流れ
るように反論してくるので誤魔化し辛いが、こういう風にずらした論
点をまた戻して普通に突いてくるのもまた誤魔化し辛い。

まず論点をズラすなどと言われるとその通りすぎて反論すらできな
くなるけど。

とりあえず雨乞いをしたのはマジなので周りにいた先輩方に外套
を剥がれた。

「うあー」

10月末の大雨の日は、寒い。

「割引券よこせー」

「そろそろ新メニューを出せー」

「さすれば返してやるぞー」

「卑劣なー」

「もしかして皆さん結構余裕があたりですの……？」

「というか余裕を作るために小芝居してる面が」

「ね」

レースに出る上で、確かに緊張感は大それたけどずっと緊張感を維持
するのは難しい。しかしそもそもを言うと、そんなに長時間緊張感を
維持していてもいたずらに体力を消耗するだけだ。

だから本当に寸前になるまでは、こうやってテキストに空気を緩ま
せるくらいの方が結果的にポテンシャルを良く発揮できる……と思
う。あくまで個人的な意見だけど。

別にぼくは余裕綽々レース中盤が迫ったとき疲れにくくなるへ作
戦・先行〳〵ってわけじゃない。むしろ余裕が無いから必死こいて作戦
を組み立ててるくらいだ。

——それに、そもそもこんなことで集中切らすようなひとはG1に出られないだろう。

さて、ともかくそろそろ集合時間だ。雨の強さに皆して軽く辟易しながらゲート前に向かう。観客席は……流石にこの雨だ。普段のG1よりはやや少ない——それでも数万人規模で来場客がいるんだけど——風に見える。

『雨の京都レース場、バ場状態の発表は「不良」となりました』
『パワーを要求されるタフなレースになりそうですね』

『本日の1番人気は1枠1番サバナストライプ。前走のダートで勝利を上げていることが高評価されたようですね』

『ストライプが1番人気か……逆に不安だなこりゃ』

『ストライプさん、1番人気になったことが無いんですか？』

『だいたい2〜4番人気デス』

ひどくない？

同じチームなのに1番人気取ったら不安視されるって……気持ち分かるけど。周りが全然油断してくれない上に注目すごいから相当やりづらいし。

あとドーナツ先輩も2番人気以降での勝率の方が高いし、その辺感情移入してる部分もあるのかな。

それはそれとして走者としてのタイプ全然違うから感情移入されても困るんですけど……。

「で、マックイーンは4番人気ね〜」

「重賞に出るのが初めてと考えるとこれでも出来すぎなくらいだろうな。追い切りレース直前の、本番を想定したペースでのトレーニング。でメジロライアンより上のタイムが出たことが評価基準だろう」

隣の席での人気語りに触発されてか、テイオーたちスピカの方も同じような話を始めた。

確かにここまでパツとしない成績なのは間違いないけど、それでも殆どの場面で2着まではキープしている。何が良くないって実力を出しきれない状況に陥ってるのが一番良くなかった、というのが実情

だ。

骨膜炎に糖分不足、慣れない距離……いやコレ半分は自己管理の問題でもあるな？

うん、まあ、置いとこう。ともかく、いずれにしても菊花賞に向けて調整は万全にしてきているはず。追い切りのタイムが良いことがその証拠だ。

「マックイーンさんと比べて、ストライプさんの追い切りのタイムは伸び悩んでましたけど——」

「あれはどう考えてもストライプの仕掛けてきている罠っす」

「絶ツツ対意図的にタイム落としてます、あの子」

「でもそれも皆分かかってるんでしょね。一番人気ってことは……本人も、それをわかってないってことは無いと思うわ」

はいスズカ先輩正解。しましまポイント10P。ストライプの偏見と独断で付与される謎のポイント。溜まると時々割引してくれる。欺瞞工作をしていると読まれることまで織り込み済みです。どこ

まで意味あるかは分からないけど、それでもやらないよりよっぽど良い。なにせこれまで走ってきた中で最長はダービーの2400。一応レコードタイムは出ているけど、じゃあ3000は？ となった時に正確な数値を知られたくない。

「今日のレース、親爺おやつさんたちはどう見ます？」

「どうもこうも始まるまでそれは分からん。データは指標にこそなるが、常に変動し続けとるからな」

「私は頭ひとつふたつ抜けているメジロ家のおふたりと、ストライプがどう出るか——と思っっています」

「利っさんは明確な答え返してくれてありがたいねえ」

「——もちろん、そういったデータ面は置いても、サブトレーナーとしてはストライプが勝つと信じています」

ぬあ、小っ恥ずかしいこと言われてる。

いやそりや常に勝ちに行くつもりでやるけども、だからってこうもはつきり信頼向けられるとそれはそれで気恥ずかしい。

褒めたと思ったら貶したりして評価を乱高下させてるのに。

褒めたと思ったら貶したりして評価を乱高下させてるのに！

しかし、もう少し客席での話を聞いておきたいところなのだけどころそろそろゲートインだ。

まあ、レース中でも話は聞こえるから別にいいか……こういう時ホントこの聴覚便利。

『さあ各ウマ娘ゲートに入りました。2番人気メジロライアン。メジロ家の名に懸けてG1の栄誉を掴み取れるか。3番人気はハルスプリング。G2で好成績を残しています』

『不良バ場での菊花賞、さあ——スタートしました！』

バタバタとゲートの屋根に雨が降る音が響く中、しかしゲートが開くその瞬間を見逃すことだけは絶対にしない。

ぬかるんだ地面に脚を取られないよう思い切り力を込めて、それこそ吹き飛ばすくらいの心持ちで思い切り蹴り込んで——前に出る。

「やっぱりかアイツ！」

『1番サバンナストライプロケットスタート！ さあ出場する度見せてくるスタートダッシュですが今日は特に出が早い！』

『足元が悪いですからね。ここまで思い切ったスタートはできません

——おや』

『おおっと、2番メジロマックイーンこれに食らいついている!?!』

やっぱりか。そうなるよね。胸中で納得しつつも、しかしここまで思い切った手を取ってくるというのが少し驚きだ。

「——やあマックイーン、今日は徹底マーク？」

「ええ、後ろから貴方の走りを見せていただきますわ」

「やあ、プレッシャーだなあ」

「欠片もそんなこと感じていないでしょうに」

挑発するように笑みを向けると、マックイーンもまた余裕の笑みを返す。足元は最悪の状態だというのに、まるで堪えた様子は無い。

もつとも、それはどちらも同じことが言えるのだけれど。

強く踏み込み、一つギアを上げた。

——長距離とは言えど序盤から既に勝負は始まっている。

これは、正気と体力の削り合いだ。

最強の名をかけて

——最序盤から後ろについて徹底マーク。いきなり仕掛けられたことに、ぼくは内心冷や汗モノだった。

こういうの、ぼくの専売特許だと思うんだけど、やり返されたらやり返されたでちよつと有効な対処法が思い浮かばなくて困る。

なにせ、相手はこちらに勝るとも劣らない脅威のスタミナモンスタ―。対処法が無い。マジで無い。本当にどうしようもない。

(けど、勝ち筋はある……！)

マックイーンはぼくよりも遥かに最高速に優れる。その一点だけでも十分に優位性があるが、普段の愉快なやり取りとは裏腹にいざレースとなると極めて冷静だし、安易に策にハマってくれない頭の良さも兼ね備える。

対してぼくの取り柄はと言えばスタミナとパワーだが、実を言うとこれはやや過剰な面が目立つ。3000mを走りきつてもすぐ回復しかねないほどというのは、やはり以前サブトレさんが言っていたように4000mのカドラン賞などの方がよりぼくに向いているのだろう。最高速に優れたウマ娘の方がより短い距離にもすぐに対応できる分、競技者としては優秀だ。

しかし、特化したパワーとスタミナは、それを必要とするバ場でも最高のパフォーマンスを発揮する。例えば今日のように、ドロドロの不良バ場——とか。

ぬかるんだ足元は普段と異なり余計にパワーを要し、それに伴ってスタミナも大幅に削られる。3000mという長距離と合わせて、最も有利な状況と言える。

「ストライプの適正距離は本来、3000mよりもまだ上だ」

「モンゴルダービーモンゴルで行われる1000kmの耐久レース。

くらいです?」

「やりかねん部分はあるがそこまで極端でもない」

なんすかやりかねないって。

「最適なのはおそらく3600から4000。日本のレースでここまでの長距離を走ることになるのはせいぜいステイヤーズステークスくらいのものだが……これだけの雨となれば、擬似的にとはいえ4000m走るほどの、あるいはそれ以上の体力の消耗になるだろう」

「なあ親爺おやっさん、ストライプが雨乞いして天候変化させたってマジか？」

「突然アホなことを言い出すんじゃない。雨乞いしただけで変わる程度の天気ならてるてる坊主でも天候を変えられるだろうが！」

い、いや……場合によっては変わるかもしれん……。チームレースのアイテム「てるてる坊主」。天候を「晴れ」、バ場を「良」に強制変更する。

……友達が何人か、別のタイミングでてるてる坊主作ってたことあるけど、結局晴れにはなつてなかったし流石に効果があるわけじゃない……だろう、多分……。

靈魂が実在する世界だけに確証が持てない……！

『さあハナを切ったサバンナストライプ、バ場状態の悪さにも関わらず軽快に進みます。続いてメジロマックイーンマークしている様子。3番手ノーミスロック、ややかかり気味か』

基本的に重バ場以上の荒れ具合の場合、逃げウマ娘の方が有利だと言われている。もちろんこれは一般論で全部が全部そうというわけじゃないんだけど、先行集団についていくにはそれだけパワーもスタミナも消耗するわけなので、脚が残り辛いわけだ。だから正直、3番手の彼女が前に出てきてしまっているのも、もしかするとかかっているんじゃないかって作戦の一環ということもありうる。

対策、という意味では逃げていることそれ自体が差し・追い込みウマ娘への対策となりうる。悪いけど――。

『序盤ですがこの雨の中とは思えないほどのハイペース！ 先頭集団はスタミナがもつのか!? あ、いや、これは……』

「あなた、まさか……！」

序盤も序盤に――更に加速する。

「お――」

「大逃げ……!」

「スズカさん! 身を乗り出さないください!」

体感、時速60km前後というところだろうか。雨の中なのでもう少し速度は落ちてしまうだろうし、坂で減速することになるのは流石にどうしようもないけど、逆に言えばそれ以外でスピードが落ちる要因はほぼ無い。

数少ない、ぼくが速度で勝ることができない一要素。それが、最高速を維持する能力だ。他のウマ娘なら最高時速70kmオーバーの速度を出せるだろうが、その速度は何十秒と続けられるわけじゃない。最高時速63km——限界を超えればもう1km速くなる——であつても、それを1000mの間続けられれば単純計算で57秒と少しで走破できるコーナーや坂などの要素は除く。——、とっ!

「マークを外すにしてもあんな強引に……」

「坂の状態が悪い。今日は別の意味で『ゆっくり登りゆっくり降る』必要があるかもしれんな……」

いけない、やつぱり滑るな下り坂は。危うくスライディングしかけた。

京都レース場の坂は一般的に、「ゆっくり登る」、「ゆっくり降りる」ことがセオリーとされている。これは、それだけ高低差の大きな坂なので怪我をしやすいことと、迂闊な入り方をするとそれだけ大幅に体力がもつていかれるせいだ。

加えてここに新たにもう一つ理由が加わった勝手に加えただけ。

雨が降ると、坂の角度のせいでもちやくそ滑りやすいのだ。

「ていうか、理屈は分かるけど、本気でストライプはそんなことする気なの!?!」

「あ、でも——」

「んにゃ?」

「セイちゃんと同じチームだから、どうするかは……」

確かに、去年のスカイ先輩の走りは、幻惑逃げの例として非常にわかりやすいものだ。必要ならマネをすることも考えられたし実際臍月賞ではぼくも幻惑逃げをしたが、今回わざわざ惑わす気は無い。重

要なのは二点。菊花賞参加者が去年のスカイ先輩の走りを知っていることと、今年のぼくの走りを知っていることだ。

ぼくは長い時間をかけて皐月賞までの仕込みをして、やや異質な方向性の幻惑逃げを成功させた。おかげで「あいつはレースのたびに何かしでかす」という評価が固まり、ここまでの結果もあつて皆がぼくのことを警戒してくれている。

だから、スペ先輩のように、スカイ先輩と同じ手を取る可能性を否定できない。流石にそんなことはしない——「かもしれない」。そう思わせておいてやる——「かもしれない」。可能性を提示するだけで対策をしないわけにはいかなくなる。

——この瞬間こそ、正攻法が最も効果を発揮するタイミングだ。

皐月賞のためにそれまでのレースを全て囿にしたというのと同じで、菊花賞のためにぼくはこれまでの全てのレースを囿にした。

奇をてらう必要はない。今この場でやるべきことは、最短最速で駆け抜けることだけだ！

「くうっ……！」

『先頭サブナストライプどんどん上がっていく！ まもなく1000mを通過！』

スピードを上げていくと共にマックイーンたちの位置がわずかに下がっていくのを感じる。まだレースは中盤戦に差し掛かったばかり、となれば当然だ。どれだけマックイーンがスタミナで優れていると、同じだけの速度とバ場を踏みしめるパワーを維持し続けるのは極めて困難なはずだ。脚を溜めておくという判断はむしろ必須だろう。

『まず一周目を越えて1コーナー。かなりのハイペース。後方まで縦長の展開です。これはいかがでしょう？』

『長距離での大逃げです。そう長く続くものではない、というのが普通の見方ですが、ダービーで見せた勝負強さもあります。これはもしかすると大変なレースになるかもしれませんよ』

「Ah……タイヘンなレースなのは、最初からそうだと思ひマス……」
『『大変』のニュアンス違いだ』

「いやどっちも間違つてなくねーか」

どっちも正解である。雨の不良バ場とは思えないハイペースきは、走者にとつては非常に大変な思いをするレースになり、見る側はなにやら大変なことが起きていると感じることになる。

そして、流石にそろそろ皆も状況を理解してきただろう。ぼくのこれは本当にただの大逃げで、最後の最後までペースは落ちることが無いと。

『さあ向正面に差し掛かってきた。後続もここから徐々に上がってくる。京都3000mはここから本番!』

問題はここからだ。京都レース場の坂は高低差4mもの急坂。下りの勾配は更にきつく、ここで加速しすぎてしまうと最終コーナーで外に出てロスが生じてしまう。

淀の坂は恐ろしい。それは皆の共通認識だし、今もハラハラした面持ちでこちらを見ているトレーナーさんたちもここでミスをしたくないと祈っているのが分かる。

うん——いいや、行つちまえ。

『坂の前にサバんなストライプここでスパートをかけたっ?!』

「あのバカ!!」

「やりやがった! マジかよアイツ! やりやがったツ!」

この坂を目にした瞬間、ぼくはロングスパートの体勢に入った。

分かつてる、正気の沙汰じゃない。普通に考えればそうだ。だがそもそもぼくはその「普通」の定義に入ることができない。

狂気と言われようと勝ち筋は狂気の中にしか無いのだから、飛び込む以外に道は無い!

「——はっ!」

——そこに、「待った」をかける声がわずかに響いた。もうひとりのスタミナの怪物、マックイーンだ。

ロングスパート勝負にも対抗できると踏んでのことだろうし、追いつく自信があつたのこともある。リードこそ取つてはいるが……実際、捉えられる可能性は高いだろう。

だとしてもこの雨の中、滑りやすい芝の上でなら……!

『まもなく坂の終点4コーナー！　ここで、あああーっ!?　加速したア!?!』

客席から大きなどよめき上がる。

かのミスターシービー先輩とゴールドシップ先輩の他に、淀の坂の「ゆつくり降りる」という鉄則を破ったウマ娘は少ない。それは単純な話、そこまでロングスパートに優れているわけではなかったり、そもそも走者としてのタイプが違いすぎて鉄則を崩す必要が無かったためだ。

その必要があるならば、できる自信があるならば——ここでやれば勝率は大きく上がる。

「いやアタシでもこの足元でここまでではしねーわ」

「当たり前だ！　このままじゃ滑っ……」

一瞬ゴルシパイセンらしからぬ冷静なツツコミが入ったけども。

滑る、という指摘も決して的はずれなものではない。「転倒」の二文字が観客の頭の中によぎるその中で、ぼくは一周目のおかげである確信を得ていた。

行ける。

過剰と言われたパワーもスタミナもここで注ぎ込むように、ぼくはこの不良バ場をパワーでねじ伏せた。

「なっ、ん……………え、何だ今の」

「あ……………あいつパワーだけで強引に方向捻じ曲げやがった……」

ここで外に膨らんで余計なロスを生じさせるわけにはいかない。なら、どうするか。

外に出そうになるのをパワーで強引に持ち直し、ぬかるんで滑る地面を強く強く、それこそ足元が爆発するほどに踏み込んで強引に内へ持っていけばいい。

まもなく最終直線。残り400m——短くはない距離だ。しかし、ここまでに稼いできた差がゴールまでを後押ししてくれるはずだ。そう確信して——刹那、ぼくは背筋に冷たいものを感じた。

差は。

差は——どれほどついている？

『——メジロマッククイーン猛追!! グングンとスピードを上げ、サバンナストライブに肉薄するッ!!』

わずかにずらした視線の中、ありえないものを見た。

パワーにまかせてバ場をねじふせることで速度を確保する多くの走りと対象的な、巧緻を極めたかのような柔らかい走り。その瞳には常と異なる光が宿っていて、彼女が明らかに通常の状態ではないことが見て取れた。

領域。

文字通りの超集中は、既にこの雨粒ひとつひとつが認識できるという状態にまで達しているのだろう。アイネス先輩のそれとは異なる方向性……しかし別方向の極地とも呼ぶべきその走りは、パワーを必要と「しない」わずかなバ場の隙間を読み取り、極めて正確にそのルートを辿っていた。

天候に恵まれ、持てる力の全てを使い、これまでに積み上げてきたものの全部を使って——獲れる、と半ば確信してみたものはあった。

だけど油断があつたわけじゃない。勝てる、という積み重ねはあつた。

——それでも、天才というやつは一瞬で全てをひっくり返すことができる。

「——、あ」

全力全開、限界を超えた先の速度を發揮する。

それでも、この脚は「最速」を發揮した相手には、届かない。

『差し切ってゴオオオール!! わずか半バ身ほどの差! しかし確かな差でこのウマ娘が前に出た! 1着はメジロマッククイーン!!』

爆発的な歓声の中で、ぼくはその背を見送ることしかできなかつた。

・・・≠・・・

——いつ、どうやって学園に戻ってきたか、正直記憶は曖昧だ。

ただいくつか確かなのは、ウイニングライブをなんとか終えて、一

泊の後ぼんやりしながら寮に戻ったということだけだ。

レースでの疲労の色も濃いために、基本的に翌日から少しの間は完全休養になる。それでもなんとなく脚は部室に向いてしまい——気づけば再びぼんやりと、寮の門限近くまで、ぼくはコースの近くで立ち尽くしていた。

「そろそろ門限ですよ」

努めて優しい声音を使っているのだろうサブトレさんの呼びかけで、ぼくはようやく我に返った。

もしかして、ぼくがずっとこうしているのに付き合っていたのだろうか。そうだとするなら申し訳無い。恐縮しながら礼をすると、サブトレさんは軽く首を振った。

「ある意味、あなたにとっては初めての負けでしょう。そうなくても仕方ないところは、あると思つてます」

「……………そう、ですね」

別に負け自体は初めてじゃない。ダービーでも一回負けているし、それ以前にも模擬レースなどで何度も負けている。

しかし思えば、適正距離での本気の勝負も、敗北も、これが初めてだ。

「やっぱりショックですか?」

「ショック……………ですね、はい。何が一番ショックかって……………負けてこんな風になる自分が、一番ショックです」

「競技者ですから、そういう風になることくらいあるでしょう?」

「いえ……………2着ですから、賞金も出ますし。元々、賞金出るならいや、って公言もしてたんです」

それなのに、2着で終わったことに強いショックを受けた。自分の中にまだ悔しいと思う気持ちがあったことにビックリした、というのがここしばらくの上の空の原因だ。

負けたことそれ自体に打ちのめされて……………のも半分くらいはあるけど。

「ぼくは元々、レースを作るのが夢でした」

「はい。そのために大金稼ぎを、でしたね」

「……夢なんです。世界各国の最強ウマ娘を集めたレースをしたい、っていうの。別にグレードは何だっていいですし、トウインクルシリーズでなくなっちゃっていいけど。ぼくはその舞台で走りたいと思ってます——思ってたました」

「過去形なんですか?」

「今は、そのレースに出て、勝ちたい」

今回の敗北で、忘れかけて、意識しないでいたものが「悔しい」という気持ちと共に溢れ出したのが分かった。

「世界最強を集めてレースをして勝って、自分こそが世界最強なんだって示したい」

「また随分大きく出ましたね……」

「そうなんです。大きく出たんです——負けて、遠ざかったからこそ改めて気付きました」

暫定的に、今長距離のクラシック日本最強はマックイーンだ。

遠ざかったからこそ、その名の重みとそれに恋い焦がれる自分がいることがようやく分かった。

あるいはそれが、本来「サバンナストライプ」が抱える原初の感情だったのかもしれない。

最強の名をかけて、世界各国の「最強」ともう一度競いたい——と。

サブトレさんはそんなぼくを見て、くすりと小さく微笑んだ。

「少し、シンパシーを覚えてしまいますね」

「シンパシーですか?」

「……いい機会です。強くなりたいと言うのなら、小技のトレーニングを更にもうひとつ上に進めて行きましょう」

「はあ」

え、急に何?

そう思っているとサブトレさんは、不意にいつも着けている帽子を取って見せた。

そこにあったのは……一対の、ウマ耳。

月明かりの下、ぼくはこれまでの彼女とトレーナーさんの言動の積み重ねが力チカチと音を立てて組み上がっていくのを感じた。

「無減速クロスステップは私が編み出しました。技を磨くと言うならこれ以上適したコーチもいないでしょう」

「え……いや、ちよっ……さ、サブトレさん、って、もしかして……」

「ギンシヤリボーイ。それが現役時代の私の名前でした」

脳筋思考

菊花賞を走り終えたその翌日。夜も更けてきた頃、寮の食堂で紅茶を嗜むメジロマックイーンの状態は絶不調そのものだった。

初めて領域ソーンに突入し自分の限界を超える処理能力を発揮したせいで脳が過負荷を起こし、視界が明滅する。得意でないはずの末脚を發揮した両足はボロボロで、触れると痛むを通り越してただ座っているだけでもずきずきと痛みを訴える。メジロ家の主治医によればヒビが入っており、この調子では年末の有馬記念への出走は難しいだろう。

しばらくの間温めた紅茶を口に運んでいたのは、痛みから気を紛らわすためだ。一つため息がこぼれる——その中で、ぱたぱたと近づいてくる足音があった。

「あ、マックイーンがたそがれてる！」

「ネイチャさんと呼んで来ましようか」

「誰も呼ばないでくださいまし！」

友人たちが変な悪ノリを敢行して更に頭が痛くなる前に、マックイーンはやってきたトウカイテイオーとイクノデイクタスに釘を刺した。

「菊花賞一着、おめでとうございます。マックイーンさん」

「ええ、ありがとうございますわ」

「切り替え早っ……」

こういつた時にイクノデイクタスの切り替えは早い。普段ことあるごとにサバナストライプたちの悪ノリに追従しているせいだろうとマックイーンは察した。

それはそれとして、切り替えが早いことそのものはありがたいことだ。話がいちいち横に逸れずに済む。

「……でも、ありがとうって割に、あんまり嬉しそうじゃないね？」

「ええ、まあ……」

「先程から何か考えていらっしやるのも、その件ですか？」

「そうですね。ただ……ううん」

募る思いを言語化出来ず、マックイーンは頭かぶりを振った。

先のレースの結果には、微妙に納得ができていない。結果が覆ることとは無いのだが、だとしても自分が勝ったことになにやら釈然しやくぜんとしない気持ちがある。あえて言葉にするとすれば――。

「……私は本当にストライプに勝ったのですか？」

「急に何言い出すのマックイーン……」

どことなく、夢心地だった。

あるいはそれは、初めて領域ソールに入ったことで感じる酩酊感ソールが生み出した感情であるのかもしれない。

ただそれでも、レースの途中で覚えた「このままでは間違いなく負ける」という絶望感ソールは確かなものだ。メジロ家のウマ娘としての使命感と矜持ソール、そして何より負けたくないという強い意地で覚醒した領域ソールの境地に入っソールてなお、半バ身もの差をつけられるほど能力差がついたとは思えないというのが正直なところである。

「今回はあちらに有利な条件がほとんどでしたわ。私も作戦そのものは読み切りましたが……」

「まあ、確かにそうだよね。実績から見ても、ストライプが勝ちそうだし」

「最終直線でも、あれだけの迫力ある走りをしていたので……それこそ、突然ストライプが遅くなるという異常事態でも起きない限りは抜けないと思ったのですが……」

サバンナストライプはG1を既に2勝している、様々な意味でおかしな能力を持った変則ステイヤーだ。対するマックイーンはメジロ家である一方ここまでなかなか芽が出ず、菊花賞にも滑り込みで出走が叶った立場。能力、実力、実績、環境。序盤の位置取りの段階で大逃げのペースに入られると、勝ち筋があるかどうかと自己判断していた。

それ故に、釈然しやくぜんとしない。

そんなマックイーンに、イクノデイクタスは首を傾げながら言葉をかける。

「ストライプさんは遅くなっていましたよ」

「え？」

それは、京都レース場に直接赴いて「いない」イクノデイクタスだからこそ把握していた、ふたりの知らない事実だった。

ギンシヤリボーイ。その名前は「皇帝」シンボリルドルフと並んで日本トウインクルシリーズ界限において最強の代名詞として語られることが多いが、その行方はトウインクルシリーズ引退以降語られることがほとんど無い。

「あの人は今！」みたいな番組に出ることもまるで無く、ネット上などでは自分探しの旅説死亡説主婦やつてる説……などなど。様々な噂が囁かれては消えていく有様だった。

その実態は、父親であるチーフトレーナーのもと勉強中の、チームベテルギウスの若干脳筋思考が目につきやすいサブトレーナーであつた。

いや順当っちゃ順当だしレース業界から身を引いたとかでもないし、決しておかしなことでもないんだけど……。

「え、何で名前隠してたんです……？」

真っ先に生じた疑問はそれだった。

いや、よく考えればその辺も分かるんだろうけども。今ちよつと頭回ってない。

「ネームバリューが大きすぎるんですよ。私が困るだけなら問題ありませんが、チームに所属してる子たちの重圧になってしまいます。『あのギンシヤリボーイが育てたのに』なんて言われることもあるでしょうし……」

「ああ……」

そりやダメだ。

改めて考えると、名前をわざわざ出すメリットがほとんど無い。三冠ウマ娘という名前に惹かれて集まって来たウマ娘の期待に必ずし

も応えられるわけじゃないし、それで逆にバッシングを受けることだつてありうる。大きすぎる期待感そのまま重圧になりうるし、負ければその期待感そのまま批判に転換しうる。チームに所属するウマ娘のことを考えるなら、名前を表に出さないのはむしろ当然か。「それに私自身はトレーナーとしては半人前です。名前を出して人を呼んでも、ロクなことになりませんよ」

「確かに」

「そこで肯定されると指導能力を貶されているようで甚だ不服なんですが」

「自分で半人前つて言ったじゃないですかあんだ」

「卑下するのはいいんです。人に言われるのは嫌なんです」

「子供か！」

「そーいやこのひと割と子供っぽい部分あつたわ。」

打ち上げの時絶対お寿司食べたがるし……それを毎回強行してるし……あとナチュラルに説明放棄したりするし……。

「ともかく」

「都合悪くなったからつて急に話題変えるのやめてくださいよ」

「あなたの常套手段でしょう」

「それはそうなんですが」

クソツッ！ 当たり前前だけどギンシャリボーイだつて分かつててもサブトレさんはサブトレさんだわ！ 普段と全然変わらねえ！

「……ともかく、無減速クロスステップの実例なら何度でも見せられます。これから習得速度を上げましょう」

「はい。けど、それならもつと基礎能力の向上も……」

「承知しています。習得を急ぐというのは、早期に習得してそれ以外の能力を伸ばすための時間を取るためです」

限界を超えて時速1km伸ばせるならもう1、2km伸ばせるでしょう、なんて恐ろしい独り言が耳に入ってきた。

マジか。そろそろ折れるぞ脚。今回の強引にコース変更したのだつて大概だったのに。

「……さて、そろそろ門限も過ぎますよ。反省会含め、具体的な話は明

日詰めましょう」

「あ、はい。……そういえばサブトレさん、タキオン先輩の実験って……」

「私自身が本格化の上がりを迎えたウマ娘なんです。実験台としてちよūdいでしょう？ 見た目も変わって素性もバレなくなるからお得です」

「……………」

そこの狂気は据え置きかよ。

……≠……

「先の菊花賞の分析はデジタルにやってもらうことになった」

「ウヒヨ~~~~!! 萌え上がってきましたよおお！」

「トレーナー！ 人選大丈夫かよ!？」

「観察眼は確かだ」

「そうじゃないんだなあ」

「観察眼は確かなんだ」

今トレーナーさん人格面には一切触れませんでしたね？

いやちよつとハッスルしやすくウマ娘愛に溢れすぎなだけで悪いわけじゃないんだけども。

ともあれ後日、ぼくたちは部室で先日の菊花賞のレース分析を行うことになった。

解説はトレーナーさんとデジたんパイセン。観察眼が確かなのは本当のことだけど、普段はハッスルしすぎてすぐ死ぬ^{きせつする}ため基本的にトレーナーさんたちが代わって解説しているのだけど、今回に限ってはどうかやらデジタル先輩本人じゃないと正確な分析が下せないようだった。

トレーナーさんたちにその辺太鼓判押されてるの地味に……いや派手にすごくないこのひとつ？

「では僭越ながら、デジたん解説に移らせていただきまヒヨオオ！」

「本当にコイツで大丈夫か!？」

「真面目になる必要があるときは真面目にやるやつだと信じる！」

「論点をずらすんじゃない？」

映像が始まった途端にデジたんが死んだ。

しかしトレーナーさんも時々変な方向に突っ走るよね。ぼく含めこのチームのメンバー我が強すぎて放置するしか無い部分もあるからだろうけど。

「今回のレース、敗因が分かる者はいるか？」

気を取り直して発せられた問いかけに、答えられるひとはいないようだった。ぼくは遠慮がちに手を軽く挙げて応じる。

「マックイーンが領域ソーンに入ったからだと思います」

「領域ソーンはそんなに魔法のように能力が向上する現象じゃない。一因ではあるがフアクターとしては弱いな」

「あの……ちよつといいです？」

「何だスカイ」

「逆にストライプが負ける理由が見えてこないんですけど。めっちゃくちや有利な条件整ってましたよね？」

「ああ。いくらメジロマックイーンがあの場合で殻を破ってそれまでのデータを更新したとしても、容易に勝てる条件じゃねえ」

「でも負けたのは事実ですし、マックイーンがただ強かったっただけじゃ……」

「オメーはちよい黙れ。ストライプな、お前マックイーン好きすぎてバイアスかかってんだよ。主観が入り込みすぎて正確な評価できてねーんだ」

「えっ」

いや、それは……そういうことは……無い、とは言い切れない……かも……？

「ドーナツツの言う通り、ストライプは現状主観でしか語れん。自分では認識できてない何かが起きている可能性が高いから、最も分析に長けているデジタルに見てもらいたいんだが……」

「ヒョオオ〜！ ここの、これいいですよね、一瞬滑りそうになるけど持ち直したこの時の」

「すみませんデジタル、もう少し先に進めてください！」

「あ、はい、お任せを！」

本当に任せて大丈夫だろうか。不安感が急激に高まってきたぞ！
「本質的にあの辺りの走りは問題ない、ということだろうが……」

ええと、だからデジタルパイセンも存分に興奮していられる……つてことなのかな。

まだ本質的に指摘しないといけない部分に到達していない、との滑ったところがそうじゃないとすると、他に原因なんて何かあったっけ？

「あ、ここからですね！ 坂……はまだいいです、あ、でもこれゴルシさんを彷彿とさせてエモいんですよねえ」

「もう少し先のようだ」

「もう少し先っていうと……」

坂を下ったところ？

首を傾げていると、映像は確かに続いてぼくが坂を下るシーンに移っていた。うん、あそこで絶対に滑るから、力を込めてこう、ズドンと……。

「問題はここですね。コーナーを曲がるために力いっぱい踏みしめたところ」

「え？」

「は？」

「ん？」

わけがわからず、周りの何人かを巻き込んで疑問の声が上がった。

そこは……そうするのが最短だし、度肝を抜いてたわけだから効果としては上々では……？

「正確に言うと、これだけじゃなくてここからの一連の流れですね。あ、見てください。足元。爆発したみたいに勢いよく泥が飛んでいます。すっごいパワーですよ！ これを見てももうたまらんです！」

「説明を続けてくれんか」

「あ、はい。あのですね、パワーがあれば重いバ場に適応できるという

のは確かなんですけど、ストライプさんの場合はそのパワーが強すぎるんですね」

「……いいことじゃないんデスか？」

「もちろんいいことです！ 普通にレースをするにあたってこれほど加速力を生み出せる脚は知りません！」

——「普通に」レースをするにあたって……？」

「なんですけど、ここ、見てください」

言って、デジタル先輩はモニタに映ったぼくの足元を指さした。水分を多量に含んだ泥が、バシャバシャと勢いよく……まるで水柱が上がるように跳ね上げられている。

「菊花賞のバ場は『不良』の発表でした。排水性の高い日本のバ場では実はこれ、滅多に起きないんです。間違いないく相当な量の水を吸つてます、それこそ芝……より下の地面も」

「うむ……ああ、なるほど。そういうことか」

「はい。ですので、ストライプさんは最終直線、全力を出そうと力いっぱいになるあまりターフを『踏み抜いて』走ってたんです。当然力は後ろに抜けて散っていきますし、脚でバ場に穴を開けてそこから力づくで抜く、みたいな走り方になってしまうのでとんでもないロスが生じてしまいます。その結果——」

そこまで説明されて画面を見ると、ようやくぼくにも理解できた。全力全開、全身全霊で限界を超えて走ろうとしていたからこそ、脚に込められた力で無駄に芝を踏み抜いてしまっている。

見ると、コースも穴ぼこだらけだ。気付かなかった、というか気付けなかった、というか……本気の本気で全力出すと理性が飛ぶ悪癖が、完全に悪影響になってる。

「スピードを上げようとしているのに遅くなる、という現象が起きてしまいます。対してマックイーンさんは領域ソーンに入った影響で徹底的にロスを避けてますね」

「なア。つまりストライプは……」

「本人は最高の条件だと思いついてたが——不良バ場との相性がすごぶる悪いということになるな」

「ええ……」

足元が悪いからパワーが必要になる、というのは間違っていない。しかし定石がどのウマ娘にとっても最良の選択ではないように、パワーがあるからと言って必ずしも不良バ場に適応できるものではないらしい。

……そもそも不良バ場のサンプルケースそのものが少ないというものもあるし、それを想定したトレーニングを積んでいない——とか水を大量に含ませないといけないからおいそれとそんな経験は積めない——というのもあつて気付けなかったようだ。

ダートに適応できる、重バ場は得意、という先入観が強すぎたと言うべきか……。

「……デジタル、お前の見立てだどどのくらいのバ場まで対応できる？」

「重バ場までなら行けるんじゃないかと！ そのくらいまでなら、芝は滑っても地面は固まってると思いますので」

「となると、本当に不良バ場だけがダメなんですね……」

「軽くショックなんですけど」

雨だから有利とフカしてたのが恥ずかしい。いや、まあ、実際単なる雨で稍重とかならむしろ有利になるんだろうけど……。

「ストライプ、パワーを制御とかできないんですか？」

「や、まあ、はい。全力出すこと意識しすぎなければ多少イケると思いますけど」

それでも「多少」という表現になってしまうのは、やっぱりそういう野生のサガというかなんというか。

やるからにはどうしても全力になってしまおうというかなんというか……。

「ともかく原因は概ね分かった。問題は次のレースだが……」

「ステイヤーズステークスでどうでしょう」

「となると有馬記念は見送るか？」

「……投票次第ですかね？」

「コイツファン投票での特別出走奨励金狙ってやがる……」

「いつもの調子に戻って安心したと言っていいやら悪いやら……」
「この子気落ちしてた時も勘定だけは欠かしてませんでしたよ」
……あとこっちの金銭欲も制御しきれないというかなんというか。

走る上での大きな下地

10月終わり。この時期になるとトレセン学園はハロウインの雰囲気にも包まれる。それに伴って様々なイベントも催され、校内外から大勢のお客さんが訪れる。

もつとも、トレセン学園所属のウマ娘は必ずしもイベントに参加しなければならぬというわけではない。イベントの委員に立候補でもしていれば話は別だが、今年……というか例年、ぼくはそういう立ち位置からは離れるようにしていた。文字通り忙殺されかねないためだ。

とはいえ商売人としてはこのチャンスを逃すわけにはいかないのだが――。

「トリックオアトリート。今日のオススメ料理をくれないとこの拳銃が火を吹くぞ」

「脅迫やんけ」

開店早々やってきたのはガンマンのコスプレをしたオグリ先輩とミイラのコスプレをしたタマ先輩だった。SSR「やったれハロウィンナイト！」タマモクロスに映っている仮装。

対するぼくはごくオーソドックスな魔女のコスだ。特に奇をてらうつもりは無い。

……オグリ先輩が来たことで早急に次の仕入れを手配しなければならぬことを確信することになったが、今は置いておく。

「そうか……この言い回しだと脅迫のようになってしまふな……」

オグリ先輩が肩を落としながら引き金を引くと、銃の先端から旗が飛び出してきた。なんて典型的なオモチャの銃だ。しかもこの旗デフォルメされたオグリ先輩と共に「EAT ここで食べる IN」と描かれている。ちよつと欲しいぞこれ。

「ご心配なく。ちゃんと用意してますよ」

「ん……そうか。感謝する」

「ところで、なあストライプ。いつもなら表に出してんのに、何で今日

「はひっそりと店構えとん？」

「それですか」

普段ならできるだけ良い立地を探してお客さんを呼び込むことになるのだけど、今日は校内の奥まった、あまり人が来ないであろう場所に屋台を持ってきていた。

正直大した理由でもないのだけど……。

「生徒会から『混雑するから表でやらないでくれないか』って」

「ああ、うん、せやろな……」

「それにしてもこんな奥の方でやることは無いと思うんだが」

「それはアレです。『隠れた名店』とか『知る人ぞ知る店』とかあってあるでしょう？ そういう雰囲気を出して逆にお客さんを呼び込む手もあるんです」

「そうなのか……」

「テキスト言つとるんやないやろな？」

「ぼくにそういうフシがあるのは認めますけど今は別にそういうわけじゃ」

なので「今回はここでやります」とSNSで宣伝をすると、意外に食いつきが良い。今は開店直後だからオグリ先輩たちしか来てないけど、時間が経てば結構な人数がやってくるだろう。

その前にオグリ先輩の注文で消費した食材をなんとか補充しないといけないのは……誤算と言えば誤算だし、想定内と言えば想定内ではある。夏合宿での教訓を活かして仕入れはしているんだよね。今この場に現物が無いだけで。

「お待ちせです。ハロウィンシーズンといえばカボチャですけど、もうこの時期しよっちゅう食べて少し飽きていらっしやるでしょうし」「飽きることがあるのか？ カボチャ……」

「……食べ飽きる人もいますでしょうから今日は各国のハロウィン料理にしています」

「オグリが食べ飽きることってあるんか？」

「うーん……食べ飽きる、というのは考えたことも無かったな。ああ、でも、毎日同じものしか食べられなかったら、少し辛い……かもしれない」

ない」

それでも残すとか別のもの食べるとか言わないあたり、オグリ先輩の食に対する真摯さがうかがえる。

あとはもうちよつと食べる量を制限というか、せめて十人前程度に抑えてくれると飲食店こちらとしてもありがたいんだけども……。

「アイルランド料理のゴルカノンとボクスステイです」

「マツシユポテトとパンケーキだな」

「今説明あつたやろ」

「まあ大雑把に言うത്とそれで問題ないです」

「それでええんかい」

「いいんですよ。名前が直接味に関係するわけじゃないし」

大雑把な言い方をすると、ゴルカノンはマツシユポテトに数種類の野菜を混ぜ込んで作ったもので、ボクスステイはジャガイモで作ったパンケーキだ。

当然——と言つてはなんだけど、量はそれぞれ少なめ盛りと超が4つくらいつく大盛りだ。

ボクスステイはパンケーキ状にこそなっているが甘くない。外国ではパンケーキは主食として扱われることも多く、これもその一種と言えるだろう。タマ先輩は一瞬戸惑っていたが、説明を受けるとなるほどと頷いてちよつとずつ食べていた。

「ところでなストライプ、アンタ次走つぎどうするんや？」

「ステイヤーズステークスで考えてます。有馬も、まあ可能なら」

「可能ならつて……十分出られるやろ」

「キミは自己評価が低いな」

「そうは言つてもダービーと菊花賞と負けましたし……」

「イヤミか！ 逆に言やダービー菊花賞以外負けなしやんけ！」

「そうだな、確かにその時の印象は強いと思うが。今は……10戦で、8勝だったか？」

「ですね？」

「その上連対率100%とか何の冗談やねん。ウチの戦績聞かせたろか。18戦やつて9勝やぞ」

「ぼくが悪かったですごめんなさい……」

「おう、よー反省しとき。ウチに対してやないで？ 負かした相手に失礼やからな」

「はい」

反省しながら、ぼくは次の料理を出した。デビルエッグとマカロニ&チーズ。どちらもアメリカの料理だ。

デビルエッグは、卵の黄身をくり抜いて、代わりにタルタルソースなどを詰めた料理だ。どちらかと言うと前菜の趣の方が強いが、国ごとにまとめるために今回は途中で出させてもらった。

マカロニ&チーズは、書いて字の如くマカロニにチーズソースを合わせたものだ。本場のものはマカロニ&チーズ&チーズ&チーズ&チーズというくらいチーズをもりもりにかけることがあるが、流石にそこまで行くと日本人の口に合わない可能性もあるので抑えておく。ここに更にプルドポークというほろほろに崩れるほど煮込んでほぐした豚肉を添えれば更にアメリカ風になる。これらはリムジン先輩に教わった。

「ところで、逆にお二人に聞いてもいいですか？」

「なんや？」

「領域に入るのって、どんな感じですか？」

「あー……」

「領域か……」

「正直何とも言えん。ストライプの言いたいことってのはつまり、自分がそこに到達したいってことやろ？」

「……はい」

ここまでの2敗、いずれも敗因……の、一つとなっているのは領域の有無だ。もちろんそれ以外にも様々な要因が絡んでいるが、やはりそこに到達できたかできなかったかというのは大きい。

アイネス先輩はガムシヤラながらも限界を超えて、一見すると崩れそうなほど不安定でありながら驚異的な粘り強さを見せて勝利を収めた。マックイーンは最速ならぬ「最適」の走りを披露し、最後の最後で大きな口スを生んだこちらを突き放して見せた。

あるいは、負けた二戦。ぼくも同じところに到達できていたなら——そう考えてしまうことは傲慢だろうか。

「やめとき。ウチらの話しても参考にはならん」

悩むぼくにかけられた言葉は、残酷なほど明確だった。

めちやめちやバツサリ切って捨てられとる……オグリ先輩まで領いてるし……。

「ぬええ」

「分からんとは言わさんで。アンタは基本、レース中はメチャクチャに計算して策練って走るタイプや。確かにそれはレースのためなんかもしれんけど、レースに『集中』しとるわけやない」

「領域は……『超集中状態』、だからな」

「言葉遊びの範疇じゃないですか……？」

「まあできんとは言わん。超が3つ付くくらい難しいだけや。ただ、この上ウチらからこうだって示したら、それがアンタの足枷になる。なまじ頭ええヤツつちゅーんは、『知ってる』からこそ先入観が視界を狭めてまうんや」

「むう」

そう言われると、こちらも言葉を返し辛い。考えてみると先入観＝知識というのはこれまでぼくが走る上での大きな下地ではあった。

それが「枷になった」実例がまさしく菊花賞。自分自身の適性への正しい認識を欠いたことで、田んぼのようになった不良バ場に文字通り穴を開けながら走るハメになっている。

超集中状態と銘打つこともあって、マックイーンが見せた走りのように、領域への突入は情報処理能力の向上も見込めるはず。ぼくにとっても大きな武器になりうるはずだけど……そう簡単にはいかないか。当然だ。

「キャラメルアップルです」

続けて出したキャラメルアップルは、りんご飴のアメリカ版とか飴の代わりにキャラメルをつけたもの……なんだけど、日本のりんごは基本的に甘さを追求した種が多い。これはりんご飴と同様、酸味の強い姫リングゴなどを使用することで対応するのが普通なのだけど、

タマ先輩含め少食なひとは結構多い。こちらの場合には、普通の大きさのりんごを6等分したものを提供することにした。

オグリ先輩は長い棒に数個のりんごが連なってる特別製だ。野菜とか果物とか、物理的な制約で大きいものを出せないときはもうこれ以上どうすればいいのか分からん。多分これ秒で消えると思う。消えた。

「ま、そう急がんでもええやろ。ウチかてちゃんとできるようになつたんはシニアからや」

「それよりも、有馬記念の対策に動いた方がいいかもしれないな」

「そや。次の有馬、順調に行けば出走者エライことになるやろ？」

「……エライこと？」

少し深く考えてみる。

今年のクラシックでは怪我人が多かった。その内、アイネス先輩は出られないし、マックイーンも怪我で今年いっぱい出ないってことを表明してる。

ライアン先輩とぼくと、最終的にダブルティアラでクラシックのレースを終えたミークが半ば確定してるとして、シニア級以降は……。

「……うん？」

まずスペ先輩とグラス先輩、それからスカイ先輩にキング先輩。場合によってはエル先輩。ツルマルツヨシ先輩もか。香港ヴァーズ出走予定のスナイパー先輩除けばあとブライト先輩……？

なんじゃコレ地獄か？

「出る前から微妙に恐ろしくなってきたんですけど？」

「頑張れ」

「フアイトだ」

せめて助言をおくんなまし。

思いつつもそういうわけにはいかないんだろうなあと、頭のどこかで冷静に考えるしかなかった。

スナイヤーズステークス

秋の天皇賞。スカイ先輩にスペ先輩、ブライト先輩にキング先輩、ツルちゃん先輩……。数々の有力ウマ娘が参加したこのレース、熾烈なデッドヒートの末に勝利を掴んだのは、最終直線で上がり最速を叩き出し全員を撫で切りに見せたスペ先輩だった。

スカイ先輩も数々の策を弄したものの、残念なことに中盤でバ群に飲まれてしまい逃げ足を発揮しきれず3着史実では5着。春の天皇賞を彷彿とさせる結果のためか、レースが終わってからもしばらくはフラワーですら話しかけられないほど憔悴していた。

2000mは皐月賞と札幌記念で勝ったことから、スカイ先輩にとっては得意距離のうちの一つだということが見て取れる。菊花賞で負けたぼくもだけど、得意な距離で負けるというのはなんとというか芯に響くようにズンと堪えるものだ。しばらくはそつとしておくべきだろう。

ジャパンカップ前日のキャピタルステークスはスズカ先輩の復帰戦となった。心理的な抵抗から大逃げができなくなっていたスズカ先輩だが、トラウマからバ群で走れなくなったことのあるタマ先輩を彷彿とさせる後方一気の追い込みで見事な勝利を収めた。ぼくはテレビ越しに泣いた。

そしてジャパンカップ。今年の凱旋門賞でエル先輩を下したモンジュニアアニメではブロワイエ。を含め、中距離路線における世界最強格のウマ娘たちが集結。

ダービーウマ娘、そして天皇賞春秋連覇という偉業を成し遂げたウマ娘……。日本の総大将としてスペ先輩がこれに応じた。

壮絶な叩き合いの末に領域ソーンに入った両者だが、結果は僅かな差でスペ先輩が勝利。日本のウマ娘の実力が世界にも通じることを確かに示した。

有名な台詞アニメ1期第12R。「調子に乗んな！」のこと。は出なかつた。

12月はじめ、中山レース場。冷え込みがきつくなり始めてきたこの時期は正直そんなに得意じゃない。いや夏も正直あんまり得意じゃない。一年を通して気温がそれほど変わらないナイロビと比べると、やはり寒暖差がキツすぎる。

トレーナーさんとチームメンバーの数名は、今は香港に行つてスナイパー先輩の香港ヴァーズの応援に向かっているので今日の観戦はチームメンバーの半数ほどになっている。

「勝負服が欲しいい」

「あー、あのマントあつたかそうだもんね……」

その中、控え室でぼくは軽く身悶えしていた。

ジャージこそ着てるんだけど、気候に対して比較的対応力の高い勝負服のマントが恋しい。今思うとあれ結構便利……影も作れるから日除けもしやすいし、毛布代わりに暖を取ることもできるし……。

そんなぼくに、ドーナッツ先輩が肩を叩いて軽くサムズアップしてみせた。

「分かるぜその気持ち……」

「分かりますか」

「おう」

オーストラリアの年間の気候は、南半球に位置していることから日本と逆転しているとよく言われるが、実際のところ気温という意味ではオーストラリアの方がやや安定している。国土が広いだけあって州によって違いこそあるようだけど、ドーナッツ先輩は比較的気温の変化が安定している州出身のようだ。

一方、同じく海外出身のリムジン先輩とフラッシュ先輩はあまり動じていない。アメリカとドイツは平均気温が低くなり、氷点下まで冷え込むことも多いためだろう。

「G2でもさあ……勝負服解禁しましょうよ……」

「とうとう胡乱なこと言い出したぞ」

「ルドルフにでも意見陳情上げてみればいいんじゃないですか？」

「それは勘弁です」

テキトーなこと言い出すと絶対ガチの討論になっちゃやし、会長さ

んに対して気楽な軽口叩けるほど親密というわけではないし……これがテイオーならハハハ面白いことを言うなあくらいで受け流してくれるんだろうけど。

「おい、それよりんな呑気してていいのかよ」

「いやあ、ナーバスになりすぎると逆に調子出ない？　みたいな」

「みたいになって何だよ断言しろよ」

「断言したら逃げ道が無くなるじゃないですか……」

「こつすいヤツだなお前……」

そりやそうですとも。

なんならこつすいからこそ勝ってるフシすらあるしね、現状……。

「じゃ、そろそろ行ってきまーす」

「お前その緩いままで行っていいのかよ」

「何事も緩急ですよ緩急。変に力入れすぎても逆に実力発揮できなくなるだけですって」

「それらしいこと言って煙に巻くんじゃねエ」

へへへと揉み手をしながら高速で下がって部屋から出る。

まあ、もうちよつと言いようはあったかなと思わなくもない。ただ、緊張を解くには緩いくらいの方がいいのは違いない。

——というのは、まあ、要するに緊張してることの証明なんだけど。

正直、菊花賞の一件以来常に「長距離でも負けるかも」という意識が浮かんで思った以上にしんどい。

2400、3000と距離延長するたびに2着になってるのだから、その辺の考えはどうにも抜けないのだろう。

ふざけてないと「もしかすると」で頭がパンクしそうで仕方ない。はつきり言って絶不調もいいところだ。

「——まずは走らないと」

それでもレースの時間はやってくる。調子を好転させる巧い手があるわけでもないし、思考が止まらない分にはもうどうしようもない。

走れば余計な思考は削ぎ落とされる……はずだ。

・・・≠・・・

『まもなく始まりますステイヤーズステークス、1番人気はこの子、サバンナストライプ』

『3000での実力を評価された形ですね。しかし2番人気のインナーステラーも決して劣っていませんよ』

ステイヤーズステークスに出走するウマ娘の傾向は、どちらかと言うところまであまり実力を発揮できなかったひとが多い。加えて半月後には有馬記念を控えていることから人気の、つまりここまでG1で結果を出しているウマ娘が回避してしまうため、注目度はあまり高くないレースと言われるても正直、仕方ない部分もある。

しかしそれでも、去年のブライト先輩のように、この先大きなレースで実力を発揮するウマ娘が出走しうるレースでもある。

隠れた実力者の実力が発揮されうる……あるいはそれまで判明していなかった適性が証明される超長距離。それがこのレースだ。

今回の出走者を見ても、油断できるものでは決して無いのは確かなのだけ——。

『さあ全ウマ娘ゲートに入りました。今、スタートです！』

『——ああつと、10番サバンナストライプ出遅れた!』

「あつ」

「あのバカ!!」

「うっそお!?!」

やべっ!?! 不安感抜けきらないままだったせいか考えごとに集中しすぎた! 一気に加速して集団に追いつくが、最後尾についてしまった!

『珍しいですね、ここまではスタートダッシュで機先を制するレースをしていたのですが』

『先頭はローズナイト、続いてツキジストライカー。レースは緩やかに進んでいます』

うっわ、サブトレさん口元は笑ってるのにすっごい目で見てる。これ後で説教受けるやつだ……。

あー……うん……まあそうなる……だが……。

レースになつたらとりとめのない考えがもうちよつとまとまると思つただけで、そうでもないか。

—— だったら、無理矢理思考をまとめて切り替えよう。

現在の位置は最後尾。前の様子が見やすいこの位置も、悪くない。先頭での力押しが一番やりやすいってだけで、脚質自体は別に追い込むのも差すのも向いてないわけじゃない。

それにこの3600という距離はこれまでのレースと全然違う。いきなり急坂からスタートし、コースを合計2周と更に少し。長丁場のレースになる上に急坂を三度も超えないといけないため、ぼくでも多少スタミナを温存して走る必要がある。

だから、まずこの一周は後ろから様子を見る。「何もしない」ことを選択することで皆の警戒心を高めておこう。

『まもなく3コーナー、未だ大きな動きはありません。先頭は変わらずローズナイト。2番手—— 変わりました、ヒドウンコールド』

「大丈夫かよストライプのヤツ……!?!」

「どう、でしょーね……?」

—— なるほど。

1周目、チームの皆の顔が見えたところで既に焦れていることが見て取れた。

ここでチームの皆が焦れているということは、同じレースを走っている他のウマ娘の皆もまた……同じくらいか、それ以上に焦れているということだ。

レースは現状、ロスを生じさせず可能な限り体力を維持するための縦長の展開。

ならば。

(……)

仕掛けどころは「ここ」だ。

中山の直線、ゴール前の急坂。他のウマ娘たちの脚が衰えたその段階で力を込める。

—— 坂は、ぼくの得意分野だ。ここで加速すること、あるいは減速

しないことにかけては誰にも負けはしない。

『あああーつと！　ここで最後尾サバンナストライプが伸びてきた！』

「！」

「っ！」

「なあっ!？」

先行していたウマ娘を抜いて横を通り抜けていくたびに、お前は沈んだはずだとも言いたげな表情がうかがえる。

まあ普通ならそうなる。出遅れからなんとか速度を上げて最後尾につこうとしたら、普通はもうついていくことが精一杯になってしまおうだろう。

だとして、それはただの一般論だ。ぼくにも全く同じことが言えるわけじゃない。最後尾にいたことでぼくはむしろスタミナを温存できていた。これまでのレースを考えると、消耗は過去最少と言ってもいいだろう。

残り……ここから1800m……くらいかな？　となると、今の体力の残りから考えると……行けるか。

——ここから全部全力で。

『グイグイ上がってくる！　まくってグイグイ上がってくる！　まもなく向正面、先頭サバンナストライプに変わったあっ!!』

中山レース場、天気は晴れ。当然、足元はカチカチの良バ場だ。

思えば、ぼくは今までずっとバ場は重いほうが良いと思ってきたのだが、ここまで走ってきた——そして勝ってきたレースはその大半が良バ場だ。

先入観と固定観念を除いて考えると、良バ場でも「苦手ではない」と表現するのが正確なのだろう。

同時に、ぼくはこれまで多くのレースで先入観や風評を利用して、何事に関しても「やりかねない」と思わせておく……ブラフによる心理戦を展開してきた。

それに対しても先の例と似たようなことが言える。「ブラフなのだから実際にできる必要は無い」とか、全く思ってたとは言い切

れない。いくら体力自慢でも2000mを全て全力疾走で駆け抜けるなんて無理だろ……なんて、思っていなかったと言うと嘘になる。「はっ——！！」

こうやって、改めてレースに出てようやく、頭でなく体で理解した。まずは、既存の先入観を全部捨てて、自分の限界を定めているネガティブな価値観を一掃する。限界の壁を壊せるのは、きっとそれからだ。

勢いよく地面を蹴りつける。これまでの力任せのものじゃなく、「最適」を目指して強く、しかし確実に。

『4コーナーを抜けて一番にやってきたのはサバンナストライプ！後続とは既に大差がついています！』

何度も限界を超えるべく、実際に限界速度を超えて何度も走ってきた。限界を超えたその速度を定着するためのトレーニングだって何度だってやってきた。

だったら、今の限界速度を維持し続けて何十、何百メートルも走ることも……2000mまるごと全力で走ることだって不可能じゃない！ 限界を決めつけるな！

「だあああああっ！！」

『——衰えない！ スピードが全く落ちない！！ 後続も一気に追い込むが、まだ来ない！』

後ろは見えない。ぼくの勝負どころでの弱さは、土壇場で他に注意を向ける点にもあるかもしれないからだ。

ただゴール板だけを見て駆け抜ける！

『そして今！ ……大差でゴールイン！！ 前々年のメジロブライトに続いてここ中山レース場で大記録を打ち立てました！！』

握り拳を振り上げる。自分こそが勝者なんだと掲げることもそうだが——何よりも、まだやれる、成長した先がまだあるはずだという自分自身の思いをぶちまけるように。

『無尽蔵のスタミナは自ら電力を生み出す発電機か、はたまた発電所か。本日もまさしくタービンの如き回転を見せてくれました』

ぼくは振り上げた手をそのまま降ろした。

い……。キレの良い実況はいいけどそういう羞恥が混ざる方面は求めてな

控え室で正座

「正座」

「はい」

レース終了からしばらく。おおよそ脚の熱が取れたところでぼくは控え室で正座させられることになった。

……いやね、分かるよ？ そりゃあぼく自身あれはマズかったと自己分析できるしこうなることも分かるんだけども。

勝者の姿か？ これが……。

「まあ色々言われるのは分かるんですけどお……大差つけましたしい……」

「大差がなんですか私は無敗三冠ですよ」

マウンントが強すぎる。

この実績に言い返せるの日本で今のところほとんどいないじゃん……。

「ていうかそれ言って大丈夫なんですか？」

「チーム内に留めて漏らさなければ大丈夫です。そもそもこの場にいる子は皆知ってます」

「アタシは無減速^アクロスステツ^レップ教えてもらおう時にな」

「ちよつと考えりゃ分かるだろ」

えーつと……この場にいるひとが皆知ってるってことは、ドーナッツ先輩とシャカール先輩、スカイ先輩、リムジン先輩にフラッシュ先輩は知ってるわけか。

逆に今香港にスナイパー∥サンの応援に行ってるひとたちが知らないかって言うそれは無いな……タキオン先輩は当然知ってるだろうし、デジたんパイセンも、何かの拍子にすぐ気付くだろう。少なくとも知らないとは思えない。ただ、フラワーと……あとスナイパー先輩はどうだろう。その辺はちよつと分からない。

……いやチームの大半が知ってんなこれ。知らないのぼくだけまであったぞ下手したら。軽く疎外感を感じる。単に伝える必要が無

かっただけなんだろうけど。

「問題は記録ではなくレースの質です。押しも押されぬG1ウマ娘のあなたがそのザマでは後に続くウマ娘にも良くありません」

「続くひといいます?」

「続こうにもコイツと同じような能力あるウマ娘滅多にいねーだろ」

「いないわけじゃないでしょう、同じ縞毛なら。これだけ先達が活躍すれば自分もという子は必ず増えます」

「やけに目がギラギラしてますよスカイ先輩」

「これはスカウトする気満々なヤツだねえ……」

まあ、トレーナー自体スカウトも含めて仕事だという話でもある。

サブトレさんも何人もスカウトして、スカウトを受けたウマ娘がG1で勝利するなど実績を残してる以上目は確かだ。何事に関して自分基準でものを語りがちという致命的な欠点こそあるけど、そのあたりも含めて現在進行形でトレーナーさんに矯正を受けてる最中だ。あと2、3年もすれば一人前……になれるだろうか、トレーナーさん自身は不安視していたけど。

なんとというか典型的な勉強「は」できるタイプっぽいんだよねサブトレさん。勉強ができる代わりに、他の何かこう……対人能力を投げ捨ててきたというか……改善しつつはあるんだろうけど……。

「ともかく、あの出遅れは論外です。自覚はあると思いますが……」

「……まあ、はい……考え事しすぎてました」

「珍しいねー、ストライプ、こういう時切り替え早いじゃん」

「普段はそうですね」

「何だ? いっちょ前に負けたこと気にしてやがったか?」

「はい」

「お、おう……意外と素直に言うじゃねーかオメー……」

なんだか勘違いされがちだけど、ぼくは別に嘘をついたり捻くれたことを言うのが好きというわけじゃない。単にその必要があるからブラフと隠し事、明かすべき情報とそうでない情報とを選別して高効率を求めているだけだ。それこそ必要な素直なことを言うのも別に躊躇いはしない。

はず。

「素直ついでにもひとつ聞いてーんだけどよ、お前今日の走りの方がイキイキしてたけど、差しの方が向いてるとかねーの?」

「ありや差しってより捲りじゃねエか」

「うっせ」

「んー……まあやりやすいというか性に合ってるのは差したり捲ったりする方なんですけど」

「ですけど?」

「差せないんですよね残念ながら」

これまでマトモに差すことができたのは、シードリングカップでの一回きりだ。それだつてスカーレットやアイネス先輩の気質を利用した奇襲であつて戦術として確立できてるわけじゃない。どんなに加速に優れていても最高速で劣るといふ問題は依然つきまとう。

限界を超えるために固定観念は捨てないといけないが、それはそれとして現実には直視する必要がある。我ながら難しい話だ。

「競争相手全員、とまで言わずとも注意すべき相手が逃げや先行型の脚質であれば、差すことも戦術の内ですが……今のところ、ストライプの出走しているG1級のレースにはメジロライアンが出走していることが多いので、どうしても逃げで前残りを狙わなければなりません」

「油断を狙うだけなら差すのでもいいんですけどねえ」

そうするとどうしても差しウマ娘との追い比べになってしまう、最終直線での切れ味勝負ということになりやすい。

ここまで逃げを主体としてきたのはそもそもライアン先輩の差し脚を最大限警戒しているからこそ、という側面もある。同じ土俵に立って瞬発力勝負となったら、最高速が遥かに劣る今のぼくでは勝ち目が薄いんだもの。

「そこまで自覚しておきながら……」

「いやホントすみませんって……」

我ながらあれは無かつたとは思いますが本当に。

それから結局、ウイニングライブに影響を残さない程度に脚を痺れ

させられることになった。

サブトレさんこそ一度も出遅れなかったんですかー！ と苦し紛れの軽いジャブで反撃したら、マジで一度も出遅れしたことが無かったことが判明した。

ぼくらはドン引きした。

・・・≠・・・

12月中旬、有馬記念を目前に控えたこの日は公開枠順抽選会、及びそれに伴う記者会見が都心部のホテルにて行われることとなった。例年の抽選会に倣い、ぼくたちも勝負服でホテルに訪れた。当然と言うべきか、大きなハプニングなどは起きず、まずは粛々と枠順の抽選を終えた——のだが。

「……………」

「……………」

ぼくとミックは、出走表を見て固まるハメになった。

周りから見たら何を企んでいるのだろうと思っただろうが、正直何も考えてない。そんなことよりも頭痛薬が欲しい。

2 枠3 番、スペシャルウィーク。

2 枠4 番、メジロドーベル。

3 枠5 番、メジロライアン。

3 枠6 番、キンイロリョテイ。

4 枠7 番、グラスワンダー。

4 枠8 番、サバンナストライプ。

5 枠9 番、キングヘイロー。

5 枠10 番、ツルマルツヨシ。

6 枠11 番、セイウンスカイ。

6 枠12 番、ハッピーミック。

7 枠13 番、メジロブライト。

7 枠14 番、マチカネフクキタル。

挙げた面々以外もG1やG2を複数勝利している。これだけの役

者が揃うのは、異例と言っても過言でないほどのオールスター具合である。

なお、怪我や体調不良が重ならなければ、ここにアイネス先輩とマックイーン、エル先輩が加わることになり、予定が合えばスナイパーIIサン。投票がもつと集まっていればパーマー先輩……のどちらかが加わっていた可能性まである。

キング先輩は短距離・マイル路線に転向したのでは？ 史実1999年ではスプリンターズステークスが12月開催だったため有馬記念に出走できていない。とか、ドーベル先輩もそろそろ引退のはずだったのでは？ 史実では1999年エリザベス女王杯で引退。とか色々言いたいことはあるマチカネフクキタル及びセイウンスカイは史実1999年時点では怪我のため出走できていないが本作では特に怪我をしていない。が、ツッコむのは一旦よそう。

どちらにせよはつきりしているのは、現時点で既に地獄のようなレースになるのが確定していることだ。

例えばドーベル先輩も上がりに近いし距離適性もそこまで合っているわけじゃない……って言ったって、それまでに鍛えた基礎能力は疑いようも無く高いし、キング先輩なんか短めの距離に転向したって言うっても、皐月賞で2着、スカイ先輩が引つ掻き回したあの菊花賞でも5着で掲示板入りしてて、実際の距離適性がよく分からないと言われる筆頭だ。去年の有馬で沈んだって言うっても6着なら大したものだし、他の面々に関してはもう……説明するまでもないレベルの高さだし……。

「——無論、前年よりも上。宝塚記念よりも更に上。より研ぎ澄ました走りをお見せすることを誓います」

「ありがとうございます」

……と、色々悩んでいるうちにグラス先輩へのインタビュが終わったようだ。枠番的に次のインタビュはぼくの番ということになる。

「続いてサバンナストライプさん、今回の有馬記念に対する意気込みはいかがでしょう？」

「素晴らしい活躍をされている先輩方ばかりで気後れしてますので、今回は胸を借りるつもりで走ります」

「……………」

「……………」

すごい目で見られてる！

みんな絶対「こいつ絶対こんなこと思ってないぞ」みたいなこと考えてるよコレ！

今日のぼくいつも以上に素直なんですけど！ こればっかりはまじりつけなしの本音なんですけど！

「日頃の行いだねえ」

「人の心を読まないでください」

にやはは、とからかうように笑いかけてくるスカイ先輩だが、実際のところそんな信じてないっぽいのが見て取れる。同じチームなのに信用度低すぎてウケる。

いや、疑ってるようだけどマジで何もできないのが実情だ。ぼくの基本戦術は、データや経験則、知識から「強い」ウマ娘を封殺するための作戦を立てるのが主体となる。結果論として他のウマ娘も作戦にハマることになるのはよくあることだけど、全員を罠にかけることは根本的に不可能だ。あえてひとつ「全員を罠にかける」ことに成功した事例があるとすれば、戦略レベルでアレコレいじくり回して半年以上かけて準備した皐月賞くらいのものだ。

では今回の出走者はどうか。見ての通り全員が超一流である。そして見事なまでに逃げ、先行、差し、追い込みと脚質がバラけていて、ひとつ対策を打つと別のひとつがフリーになってしまつて対策が対策の意味を為さない状態に陥っている。

これガチで万策尽きましたわ♡

「……………今回は何も企んでませんよ?」

「嘘ね」

「うっそだあ」

「それは無い」

「ありえませんね」

「ストライプさん！ 嘘はダメです！」
「ちつくしように誰も信用してくれねえ」
——地獄の有馬記念が幕を開ける。

現実には出走者なので悪夢のレースである

『まもなく始まります、年末のグランプリレース有馬記念。例年にもまして豪華な顔ぶれが揃った、まさしく夢のレースと言えるでしょう』

ゲート前のターフ。ぼくは軽い準備運動をしながら緊張で目が回りそうだった。

夢のレース……うん、まさしく出走者を見ればそう言っても過言はない。

ぼくだつて見る側に回ったら夢のレースだつて大興奮してただろう。現実には出走者なので悪夢のレースである。ワハハ。

「はあ………」

「ちよつと、ストライプさん！ 隣で重々しい溜め息をつくのやめてくれる!？」

「あ、すみませんキング先輩」

……原因の一端はキング先輩にもあるわけだが、言葉にはすまい。昨晩は結局ほとんど眠れなかった。ミークはスツと寝てたけど、あれはあれでもう考えすぎてもしょうがない、みたいな境地に入ってるんだと思う。

「いやあ、ストライプは色々考えちゃうからねえ。昨日は寝られなかったんじゃないの？ なーんて」

「スカイ先輩、クマ隠しきれてませんよ」

「え、嘘っ」

「嘘です」

「ちよつ……」

「あなたね……そういうことから色々言われるのよ」

「カマかけたらボロ出したスカイ先輩が悪い部分もありますか？」

「こいつう」

「責任転嫁しないの」

そうは言っても隙を晒した方も晒したほうである。悪役の理屈。

同じチームで数年も一緒にトレーニングしてきただけあって、スカイ先輩はぼくの能力や戦術、思考パターンをよく知っている。それは逆説的に言えば、ぼくもまたスカイ先輩のやり口や能力は知っている、ということだ。

スカイ先輩も相当考えすぎる性質たちで、こういう大レースの前となると緊張して……いるかはともかく、ずっと思考に没頭しているのがよく見受けられる。

だからもしかするとと思って引っ掛けてみたらこれだ。もしかすると考えてることが同じかもしれない、ということまで含めて。

『ここで出走者の紹介です』

さてそろそろ出走かな、と思ったところで、ふとアナウンスが入る。

『ファン投票第5位はメジロライアン。クラシック戦線ではレース展開が向かず惜しくも戴冠を逃しました』

『しかし、全てのレースで3着以内に入り、ポテンシャルは一級品です。今回こそ鋭い差し脚を炸裂させてくれるかもしれませんよ』

出走者の紹介——パドックで一度やってはいたけど、改めて、つて形式か。

紹介を受けてるライアン先輩は、照れてるような恐縮してるような、それでいて今までよりも強く力が入っているようにも見える。

メジロ家三人出走してる分、家からかかる重圧は分散されてそうだけど、それでもライアン先輩はちよつと背負い込みがちな性格だ。仕方ない面もあるだろう。

……だけどこのひと、同時に重圧を力に変えるのも得意なんだよな。ちなみに、なにげにトップクラスの女性人気を誇る。やや判官鼻質な面こそあるが、毛色や出身というどうしても人目を引きやすい要素を持つぼくやミークを除けば、クラシック級で最高峰の人気の持ち主なのは間違いない。

『ファン投票第4位ハッピーミーク、ダブルティアラ、白毛の女王』

『どのようなバ場でも距離でも走れるのが魅力の、極めて安定感のあるウマ娘ですね。現在初の白毛G1ウマ娘。2500mは初めてですがオークスウマ娘ということで期待は高まります』

「むん」

ミークは見るからにいつも通りだ。

惜しくも人気投票は4位に落ち着いてしまったが、これは……他が人気投票という面で強すぎたと言うべきだろうか。

白毛ウマ娘の期待の星であることは間違いないが、それでもトウインクルシリーズで一定数の出走者がいる。このため観客への訴求力という意味ではやや他に分散してしまった面があると言えるだろう。

夏以降、勝利から遠ざかっていることも一因……これに関しては勝利を奪ったばかりが言及していいことでもないか。

『ファン投票第3位、グラスワンダー。春秋グランプリ連覇の偉業を達成しています』

『中長距離路線のここぞという時の勝負強さはまさしく驚異の一言。果たして史上ふたり目のグランプリレース三連覇はなるのか』

そして第3位、グランプリ春秋連覇を成し遂げ、更に有馬記念の連覇……合計三連覇を狙うグラス先輩。柔らかな笑顔をしてこそいるが、鋭い気配がダダ漏れだ。

直近では毎日王冠で勝利。さらにその前は宝塚記念。秋シニア三冠のレースにここまで出走こそしていないものの、やはり以前一度スぺ先輩を真正面からねじ伏せたことが評価点となったのだろう。

やはり強さというのは明確な指標だ。以前言われていた怪物二世という異名も、現在ではあまり聞かなくなってきた。

怪我に悩まされながらも復帰し、常に高い結果を残してきたことから、今では不死鳥と呼ばれることの方が多いだろうか。

最も注意すべきウマ娘を挙げるなら、やはりこのひとだろう。

『ファン投票2位は、尻尾を回すサバンナストライプ。前走では大差勝ちを演じた驚異のステイヤー。母から貰った耳飾り』

「ストライプさん。あなた個人情報漏れてるわよ」

「インタビュで言ったことなので問題ないですけど今言いますかアレ」

『中央トレセンにおける唯一の縞毛ウマ娘、そして初のG1制覇者。セイウンスカイとの新旧トリックスター対決、そしてメジロブライト

との新旧ステイヤーズステークス覇者の対決も見ものです』

……2位はぼくだった。

要素を分解して考えるとそうなる理屈は分かるんだけど……あー
……いや、うん。

正直に言う和小つ恥ずかしいというか、グラス先輩を抜いて2位に
選出されるのは恐れ多くて萎縮してしまう！

グラス先輩だってほら、闘志剥き出しに……してないな。コントミ
たいな紹介のせいでちよつと笑ってしまってる。

……中央唯一の縞毛ウマ娘、いくつもの史上初の記録を残した上に
ダートも走れるので、そちらの方面での需要というか、ダートG1を
取ったウマ娘として頑張れ、という方向で応援を受けている。老若男
女、国籍、芝砂と言った要素を問わず、色んな意味で満遍なく票を獲
得した形だ。

とはいえ正直、半分くらいネタ的な意味での人気があるのだろうな
と考えてしまう。実況の紹介も踏まえると。

『なお主な勝利G1レースは2000m』

余計なこと言つてオチつけるんじゃないよ。

『ファン投票、堂々の1位、1番人気はスペシャルウィーク。秋の天皇
賞、そしてジャパンカップでの活躍は記憶に新しいでしょう』

『このレースを勝利すれば史上初、秋のシニア級中長距離路線の三冠
を達成することになります。モンジューを破った日本総大将は伊達
ではないと示してほしいところ』

そして1位、日本総大将スペシャルウィーク。

日本における史上初の秋シニア三冠にリーチをかけたこと、加えて
ジャパンカップでのモンジューとの激戦。期待感、という意味ではこ
の中で最も集めていることは疑いようもない。

そして疑いようが無いという点で言えば——疑いようも無く、強
い。

シニア級、3年目の年末に至って、早くも上がりが見えつつあるのか
もしれない。しかし肉体的なピークと技術的なピークがほぼ一致し
ている現在のスペ先輩は、間違いなくキャリア中最強の実力を発揮し

ていると言つていい。

だからこそ、競い甲斐がある——。

……いやいや。これだけ極まってる単純にクラシック級のぼくだと勝ち筋が見えないんだって。どうすりやいいんだ真面目に。他のウマ娘も含め同じことが言えるんだけど。

「そろそろね」

「ええ」

「そうですね」

ゲートに入り、横並びの三人で領きあう。

レースは今、ここからだ、と。

『さあ、冬のグランプリレース有馬記念。今——スタートしました!!』
ゲートが開いたその瞬間、まるで示し合わせたかのようにぼくとスカイ先輩は弾けるようなスタートを切った。

——そうするよね、と、一見するとゆるい笑みながら一皮むけば闘志に満ちた表情を向けられる。

——そうしますとも、と、ぼくは半ば苦し紛れに苦笑いを浮かべて応じた。

今回の出走者、それぞれ脚質が分かれているが純粹な逃げウマ娘は実質スカイ先輩のみだ。ツルちゃん先輩はメイクデビューで逃げ切り勝ちを演じたが本質的には先行・差し。今回ほど有力差しウマ娘過多の状況で勝ちを狙おうと思つたら、超ハイペースの前残りを狙う以外に手が見つからない。

『スタートからチームベテルギウス二本の矢が飛ぶ！ 4バ身ほど離れてハツピーミック、ツルマルツヨシが続きます』

「アイツらいきなり同じチーム同士で潰し合いとか大丈夫かよ！」

「大丈夫じゃないが」

『大丈夫じゃないが』あ!？」

「アレしかやりようはあるまい。これだけ役者が揃つたレースだ。差し脚の勝負になったらストライプは確実に沈むぞ」

概ね、トレーナーさんの言うとおり。ちよつとタイミングが遅れたらまくつていくのも間に合わなくなるだろう。

勝つだけならやりようはあるんだろうけど……そっちは論外だろうし。

「まあ、もっと勝率が高い方法も無いではありませんが……」

「というの？」

「スカイを先頭に、ストライプを最後尾に置きます。ストライプが後ろにいれば前にいるウマ娘は迂闊には動けなくなるでしょう。そのままゴールまで全員牽制し続ければ、スカイが一着になる可能性は高くなります。逆にスカイが暴走ペースで走り続ければ、ストライプが体力を温存できるのでそのままごぼう抜きできるでしょう」

「Ah……それは……」

「ええ、一方は一着でゴールできるかもしれませんが、もう一方は確実に下位に沈みます。犠牲にすると言い換えてもいいかもしれませんがね」

——が、当然ぼくらはそんなことやりたくはない。

本当に勝つこと以外に目を向けないならそれも一つの手だろうけど、アスリートとしてここに立つてる以上、そんな八百長めいたマネはしたくないし、するわけにもいかない。

「追^{ラビット}せ兎^トかよ。日本じゃ違反だろ」海外競馬において逃げ馬は主流ではないため、有力馬の馬主がペースメイクのためだけに逃げさせる馬を出走させるケースが多い。日本では「勝つ意思の無い馬を出走させてはならない」という規定があるため基本的に違法とされる。

「ええ。なので、方法はあるけど使えない、というところですね。もつとも使えたとしても——」

「カラテとカラテのぶつかり合いを所望するスカイとストライプがそのような手段を取るはずは無いのだ」

「スナイパー、オメーいつの間^ニいたんだ」

「ウカツなりドーナツツ^ニサン」

……まあ、そういうわけでもある。

規則として考えても道義的にも、そんなことをするわけにいかない。何よりぼくらが勝ちたいというのは、あくまで競い合ったその結果だ。チームメイトの間柄だろうとそれは同じこと。勝ちを譲られ

るなんてことあってはならないし、勝ちを譲ることもありえない。

勝負は本気でやるからこそ価値が生まれる。曲がりなりにもそうした「価値」から利益を得ようとする以上、勝負に対しては常に真摯でなければならぬ。

——勝てるかどうかは別として!!

大混戦の団子状態

逃げというものは難しい。単純に膨大なスタミナが求められるのは元より、コーナーワークの精緻さや、レースをしつかりコントロールしてペース配分を誤らない思考力も必要になる。大逃げの名手であるところのスズカ先輩だって何も考えずに走ってるわけじゃない。多分。一時期は先行策で走っていたこともあつて、それを念頭に置いたペース管理もしつかりやっている。

では、今回のぼくとスカイ先輩はと言うと——開始30秒で既に汗だくだった。

(今のはフェイント、前に出ようとこつちを牽制してるだけ。けどこつちの出方で多分スカイ先輩はやり方変えて——腕の振りが甘い、誘い？ だとしてもスカイ先輩はハナにこだわるだけの理由がある。揺さぶりをかけてるのはむしろ内枠のこつち……)

「……………」

「……………」

ここまでに行つた攻防は、心理戦も含め数十にも及ぶ。

コンマ1秒の判断で内側を奪われてハナに立たれかねない状況だが、そもそもぼくは既に先頭を奪わせることは決めている。あとはどのタイミングでやるかだ。タイミングを誤れば確実に自滅する。

という考えをしていることくらいはあちらも分かっている、こちらは裏の裏を読んでいかなければならない。

あるいはそれも含めて読んでいけないので……ええい、頭痛くなってきた。

何が酷いって、コレお互いに手の内知り尽くしてるから、お互いの一挙手一投足に「もしかすると」の可能性を感じてしまう点だ。何気ない動作でも「あ！ 今もしかしてこつちの動きを封殺しにかかっているな!」とか考えてしまうからヤバイ。本当にまずい。理屈で考えればありえないってことはすぐに分かるのに、勝手に自縄自縛に陥ってしまっている。

唯一の救いは、スカイ先輩も同じように思っているらしく、こちらのフェイントやブラフ、どころか何もしてなくても逐一引つかかりを見せてくれるところだ。……ん？　もしかしてこういう態度もブラフなのか？　とも思うが明らかに動揺が見え隠れしているので必ずしもそういうわけではない。

この場に至ってぼく自身が一番痛感していることだけど、集中力も思考力も決して無限にあるものじゃない。頭を回せば回すほど糖も使うことになるし、無駄な動きも増える。連動してスタミナも削れていく。

——と、そろそろ800m。ここでそろそろスカイ先輩に露骨じゃない程度に先頭を譲り渡さないと。

（——けど、このまま精神力の削り合いをしていけば有利になるのはぼくの方だ。純粋な体力ならこっちの方が上のはず……）

それをスカイ先輩が分かってないはずはない。

加えて、これはぼくらふたりの勝負じゃない。差しに来る諸先輩方を牽制しつつ先行してきてるミークやツルちゃん先輩を可能な限り離して、ペースを維持して……ああもう、やることが多い！

それでも二番手からつつき回せばそれだけ状況は有利になる！

元々ぼくの脚質は差し寄りの自在ごと通称煽り。後ろから押し上げることでペースを乱すのが本来の主戦法。ここからが本当の意味で本番だ……！

『まもなく1000m、先頭はセイウンスカイ。サバンナストライプが続きます。3番手にハッピーミーク。続いてツルマルツヨシ。5番手キンイロリヨティ。後方は団子状態になっています』

『ペースはやや早め。しかしまだ脚をためていますからね、どのように転ぶかはわかりませんよ』

本当に分かんないから困るんだよクソア！

「普段のレースであれば、ここまでセイウンスカイさんとストライプに先行されれば間違いなくあのふたりのペースですわね……」

「マックイーンがこんなこと言うつてことは外れるんだ！」

「ちよっとテイオー!?　人の目が節穴みたいな言い方やめていただけ

ます!？」

「でも菊花賞までマックイーンの予想当たったこと無かったじゃん」
「はうっ」

しかし残念ながら(?)今回はマックイーンの予想も大当たりである。

普通のレースなら間違いなくぼくやスカイ先輩のペースなのだが……今回はまずい。本当にまずい。上げたはずのペースに食らいつかれてる。

普段差して勝負してるはずの先輩方も、ペースを上げているのに対応するためか途中で先行策に切り替えてきてる。特にスペ先輩やライアン先輩のような、ステイヤーとしての資質に優れたひとはその傾向が顕著だ。多少前に出ていたとしても差しきれるといいう強い自信がうかがえる。

反対に、後ろに控えているひとたちに自信がないかというところなことは無い。彼女たちはスタミナを温存する必要があるから後ろで控えているだけだ。つまりこちらはこちらで最終直線でぶち抜いてくる自信がある。

どちらも制するにはやはり、先行に切り替えた相手のスタミナを奪い、かつ差しきれない位置に上げていける前残りが必須……!

残り1200mほど。スカイ先輩を煽って前に行ってもらわないと。フェイントを交え、脚を差し込みに行き……その途中、不意に氣付いた。

——スピードが、上がってない。

「……!!」

「おやあ?」

まさか気付いてなかったの? なんて言いたげな瞳が一瞬こちらを射抜く。はいそうです気付いてませんでしたあ!!

くっそ、当たり前じゃん! ぼくのやることを知ってて戦法も知ってるってことは、煽ってくるのも知ってるってことだ。加えて想定外なのは、顔色を見る限りどうやら体力の消耗が思ったほどではない点。さっきまで明らかに全開で頭回してただろ、と思ったが、どうや

らあれはさつきまでのぼくとの攻防の中だけでのことだったらしい。今はただ、こちらの誘いに乗らないことだけを注意してラップを刻んでいる。前に出ないわけだよ！ 完全にスカイ先輩がペース作ってる！

ぼくもかなり正確に脳内でラップを刻めるけど、同じチームでより長くトレーナーさんから教えを受けて、かつ逃げという脚質である以上スカイ先輩だってできてもおかしくない。普段はそれをやる理由が無いだけで。

……だからって勝手にぼくが後ろを牽制してくれるからってマジでも考えずに走るかなあ普通!! いくら逃げだ何だとは言ってもぼくより遥かに末脚に優れてるから、ぼくも含めて封殺しようって言ったらそりゃ自分のペースに巻き込むのが一番だろう。

ある意味そこまで含めて、自分が何もしなくてもぼくが確実に何かするから自分が何か企む必要は無いのでは、っていう信頼というか信用の賜物だけど……!!

速度を上げるか? ……いや!

「っ……!!」

『2番手サバンナストライプ競り合いません。慎重な様子』

「あれ……?」

「……………」

息を整える。3番手にいたミークの姿が見えるがそれはもう仕方ない。

脚を溜める。

普段のぼくなら絶対ありえない戦術だ。ただ、何もかも前提が崩れた今、勝ちを狙うなら……………!

『さあ、レースは終盤戦。向正面を越えます。まもなく残り800m、そろそろ仕掛けどころになる子も出てくる頃でしょう』

『おっと、ここでセイウンスカイを抜いてサバンナストライプ上がってきた! ロングスパートに入る!』

「おっ……………!?!」

——ここから全力だ。

1ハロン11秒を切るなんて上等な脚は持つちやいないが、MAXスピードなら直線で11秒半。それを維持し続ける。

普段なら残り1000m地点か、場合によってはもつと前で仕掛けることもありうるが今日はやりようがない。タイミングを逃した。

だからこそ溜めた。ここからのスパートで限界ギリギリの速度を出し、できるだけ長く限界突破した脚を使うために。

『続いてメジロブライト仕掛け始めます。先行集団もコーナーに差し掛かる。グラスワンダー、急激に上がってくるぞ!』

っ……速い!!

グラス先輩だけじゃない。全員の途轍も無い圧が後ろから迫ってくる!

残り400——そろそろ皆この辺を仕掛けどころと認識したか。

強い。ヒシヒシとそれを感じ取る。ああ、くそ……! 横に並べられてる。この感じはスペ先輩か。流石に速い。秋三冠に手をかけてるだけあって、格別だ。

『これは——すごいレースになってきました。全ウマ娘一気に上がってくる! まもなく中山の坂が近付きます。試練の坂!』

残り200。ここで勝負をかけないとあとがない、そう思っただけで焦ったのが良くなかったのだろうか。

「うお……っ!?!」

限界を超えようとしたその時、いつものそれと異なる重さが全身にのしかかってきた。それだけじゃない。眼の前も霞む。

(——序盤の応酬か……!)

最序盤でのスカイ先輩との先頭争いで集中力が切らされてる!

一瞬、違う場所に飛びかけた思考を持ち直して最適なストライドと姿勢で坂を登ることを体に命じるが、0.1秒遅かった。隠しきれないほどのロスが生じる。

『さあ並びに行くスペシャルウィーク、セイウンスカイ、メジロライオン! 全ウマ娘一斉に先頭を狙う!! グラスワンダー横から凄い勢いで上がってきた!? 大混戦の団子状態、誰が抜け出すのか!』

坂を登りきったその直後、もはや抑えきれないとばかりに全員が一

気に並んできた。

わずかに視界の端にスペ先輩の靴が映るのが見える。スカイ先輩もだ。ああ、くそ。この速度だと——ダメだ。間に合わない。抜かれてしまう。

(抜かれる?)

チリチリと危機感と、そして飢餓感で脳の奥が焦げるような感覚があった。

相手はモンジューを倒して暫定的に中長距離路線世界最強を手にしたウマ娘だ。まだ成長途上のぼくでは負けてもしようがないかもしれないけど、じゃあ他の場面でも同じように同じことを吐くのか? そんなことはありえない。

(そういう「しようがない」って思いはもう捨てるって決めただろ!!) 最強を目指そうというんだ。相手が誰だろうと全力で挑戦するのが筋だろう。

理性よりも野生を前に出す。思考力は今は足枷だ。何も考えず、ただ本能だけで走る他無い。

頭のスタミナ 集中力は削られてても、本来の意味合いでの「体力」はまだ残ってる!

「く、うおおおおおっ!!」

「やああああああっ!!」

「はああああああッ!!」

気合とともに、不格好でも走り抜く!

もう何も考えない。誰が前にいるとかどうでもいい! ただ、前に!

『だ——団子状態、一塊となったままゴールイン!! 1着は——……少々お待ちください。1着、2着、及び4着、5着……が写真判定です!!』

「「ええええええええええっ!?!」」

——そうしてゴール板を踏んだばかりに告げられたのは、「決着までもうちよつと待ってね」という旨のアナウンスだった。

・・・≠・・・

「1着、グラスちゃんで2着、数センチ差でスペちゃん……」

「3着がアタマ差でセイちゃん……」

「4着ライアン先輩、ハナ差5着……」

「ストライブ」

控え室付近。今回の有馬記念のウイニングライブで行われる楽曲は「NEXT FRONTIER」だが、「今回は是非出走者全員で歌ってほしい」との上からの要請や観客からの突き上げもあって、立ち位置などの打ち合わせのために出走者が皆して集まることとなった。

全員、疲労の色は濃い何がやかやスツキリしている。これはほくも含めてのことだ。いやあ、負けた負けた——というのも違うけど。

「10着まで10バ身差以内に収まるレベルの大接戦……ぬぐぐ、あと少しかしこみご利益があったならば……」

「私もバ群に飲まれると少し、ね……ご利益は別にして……」

「そうですねえ……あと100mあれば、展開も違っていたかもしれません。ご利益は、別にして」

「別にしないでください!!」

いやご利益の問題ではないと思う……。

「ううー……今回こそグラスちゃんに勝てると思ったのに……」

「うふふ、スペちゃんったら、思わずウイニングランしそうになっていましたね」

「それは言わないでよー!」

「確かにグラス先輩強かったと思いますけど……なーんか、最初っから動きがこつちのこと先読みしてたっぽくなかったです?」

「あら、まあ。そういう風に見えましたか?」

「そ……そうなの……? グラスちゃん……ケホゴホ」

「つ、ツルちゃん、走ったばかりなんだから……」

「え、ええ。と言つても、方針だけ、ですけど……」

ほうほう。グラス先輩の方針とな。

今回の作戦はまあ、色々問題はあったけど、場合によってはそれこそそのまま着でゴールできた可能性があると思えるほどのものだ。スカイ先輩が実際ほとんどペースを握ってたようなものだし、これを打ち破る手があるなら今のうちに聞いときたい。

「先読み、というほどのこともありません。ただ……セイちゃんの強さを信じていたんです。きっと今回のレース、ストライプちゃんに負けじと策を練ってくるだろうと。そうすると、ペースはセイちゃんが握ることになるでしょうから。あとはそれを前提にタイミングを計れば」

「にやはは、読み勝ちしてたと思ったらそれも読まれてたかあ……」

「あ、セイちゃんの顔ちよつと赤くなってる」

「うつさい」

「ストライプさん、あなたすごく苦々しい顔してるわよ」

「うるさいですね……」

……そりや確かに読み負けたけどさ。こればかりはレース経験の差って部分もあるからどうにもならん。

スカイ先輩の強さを信じてたって言うのも、まあ領ける。何より、同じクラスで一緒に走りたい相手だろうから鼻眞目で見ちゃうだろうしね。

ただ読み負けるだろうと想定されてたのは悔しい。相当悔しい。ぐええええ。

「地を這い泥漉ってでも次は勝ちますからぬエ……」

「何があなたをそうまで駆り立てるの……?」

「レースで負けても作戦で負けたくなかったんですよほかあ……」

「そ、そういうつもりではなくて……」

グラス先輩がフォローを入れてくれる。やさしい。

けど負けたのも事実だ。くやしい。

それはそれとしてこの後のウイニングライブはしっかりとやり通した。

この前みたいな不覚はそう何度も取らないようにしなければ。

露骨に気を使われている気がする

地獄の有馬記念を終えてしばらく経った大晦日の夜。今年もキング組（非公式名称）取り巻きーズはネコちゃん（仮名）ネコ目のウマ娘とボブちゃん（仮名）ボブヘアのウマ娘の部屋に集結していた。

今年の疲労を吐き出すようにこたつでぐっでりする。ぼくもキング先輩も先日激戦を繰り広げたばかりで、まだ疲れが抜けきっていないのだった。

ぬあああとうめきながら鍋に鴨肉を投入する。今年のお夜食は鴨鍋……からの、メにうどん、ではなくソバを落とす変わり種鴨南蛮風。卵はお好みで。

「ストライプちゃん、お疲れならこっちでやるよ?」

「ぼく作るひと、みんな食べるひと。OK?」

「そんなにキツカリ役割を分けなくてもいいのよ。さ、キングの配膳を見せてあげあつっつ!!」

「キング〜!」

なんか露骨に気を使われている気がする。けど、何かそういうことしたっけ?」

有馬の結果に関してはキング先輩もぼくも揃って勝ち逃したから、ぼくだけの話というわけでもないし……そう思って訝しんでいると、視線に気付いたららしいキング先輩はついとそのまま視線を逸らした。対してふたりは、それに代わるように語り始める。

「ストライプちゃん、連対率100%が途切れちゃったでしょ?」

「それに、去年まではお金が無かったから帰れなかったただけなのに、何でか今年帰省もしてないし……ね? キングもちよつと不安なんだよ」

「えっ、別にぼくどっちも気にしてない……」

「あ、あら? そうなの?」

まず連対率だけど、これは元々狙ってやったことではないので執着もしてない。今後の結果次第でいくらでも覆るものだし。こうい

うのを気にするとしたら、引退後に「あの時ああだったら」と回想する程度でいい。

家族に関して言えば、定期的に連絡は入れているし、何より距離が距離だ。渡航に時間がかかりすぎるとトレーニングに差し支えるし、事業的にも今トップのぼくが何日も留守にしたいと思えない。ホームシックにかかるような精神構造でもないし……。

「あと家族、今年はこっちに呼んでて」

「あ、そういう流れ？」

「お待ちなさいな。ストライプさん、あなた確か結構な大家族と聞いたけど？」

「そうですね——ああ、その辺の問題が解決できたから呼んだんですよ」

「あなたに限ってお金の問題は心配してないわよ！　そうじゃなくて……ほら、ご家族と長く会ってないんだから……」

「それならもう昨日まで一緒にいましたので」

「抜け目無いよねえ」

『『学生の間は友達と一緒に過ごした方がいい』だそうで』

色々理由はあるだろうし、今現在学生であるべく自身が言うのもなんだけど、その辺は同感だった。

コネや何やというのには抜きにして考えても、気兼ねなく付き合える友人というのは一度社会に出てしまうとどれだけコミュニケーション能力が高くとも得難いものだ。

もちろん、家族との時間も大事にするべきだ。兼ね合いを考えて折り合いをつけつつ、というのが理想になるだろうか。まあ理想論なので、できるかどうかはどうにもこうにもなんだけど……。

「というわけでご心配なく。あ、そっちの白菜煮えてますよ」

「話題の変え方が急よ！」

「そんなこと言われましても……」

しょうがないじゃないですか煮えたもんは煮えてるんだから。

食事に関してぼくは費用対効果が見合う限り、最適な出来栄にこだわっていききたい。たとえ話の途中でも！

……ダメかな？　ダメか。

……≠……

1月中旬。例年であればこのタイミングでUR A賞の発表になるが——今年のぼくは呼ばれていなかった。

……いや分かってはいたよ、分かっては。トレーニングに打ち込んでるのも別に現実逃避というわけじゃあない。元から気にしてないんだから気に病むも何も無い。

「……気にしてないっていうのに何でみんな見に来ますかね」

「それだけお前の発言の信用度が低いということだ」

「え。辛辣……」

「お前も弱味を見せないために何かと強がりと言うタイプだろう」

またトレーナーさん直々に指摘が来た。いや分かるし納得しか無いけど。

しかし、ぼくはこういう表彰に対して興味がない……と言うと嘘になるけど、別に直接お金が動くわけでもないから、優先度がそんなに高くない。

すすす、と音もなくスカイ先輩たちの方に近づいていくと、変な悲鳴と「シマシマの……ニンジャー！」というシャウトに迎えられた。

「変に感情移入するのやめてくださいよー。特にスカイ先輩」

「そうだけどさあ。ストライプひとりだけあの世代でG1を2勝してるのに……」

「それは見方の問題ですね。UR A賞があくまで『記者投票』である以上今年のぼくに受賞はまず無いです」

「なにゆえ？」

「最優秀クラシックと最優秀ダートで票が割れとるんだこいつは」
「あー……」

今年のぼくの勝ち、皐月賞とジャパンダートダービー。これでもし芝かダートでもう一勝していればどっちかに偏るだろうけど……芝のウマ娘だという記者と別に、いやダートウマ娘だと主張する記者

もいるので、このあたりの意見が統一されない限り受賞はまず無い。「あとは印象論だな。シーズン後半のストライプは決して弱いわけではなかったが、G1では結局勝てとらん」

「ステイヤーズステークスで大勝ちしたじゃないですか？」

「けしからんことに、G2の勝ちを考慮に入れとらん者は大勢いる。そこも含めて『印象』ということだ」

珍しく、トレーナーさんが叱るでも説教するでもなく、違うベクトルで明確に憤りを見せている。

今在籍しているぼくらのG1勝利数は結構なもので、客観的に見ればこれがチームとしての全盛期としても過言ではないほどだ。しかし、以前……ギンシヤリボーイ、サブトレさんが引退した直後の話については、基本的に話題に上がることは無い。

とはいえ推測はできる。例えばデザイナーになった人はいる。社に出で働いているひともいるし、ぼくはそうしたひとをスカウトして社員として引き込んでもある。が……ドリームトロフィーに関わっているひとはほとんどおらず、大抵は競技の最前線から外れている。

偉大な先達というのは、やはり後輩にとつては重いことだろう。場合によってはそれこそ、G2やG3を勝てていてもG1で勝てなかったというだけで批判に晒されたひともいるかもしれない。そういうことを思い出すと苛立ちも募るのだろう。

サブトレさんも顔をしかめてる。普段ふざけて実績マウント取ってくることはあれど、やはりそういう点では苦々しい思いを抱えているようだ。

「……まあ、今はそこは置いておくか。問題は、今年をどうするかだ。ストライプはどうする？」

「天皇賞直行で。ちよつとこの年末で色々思いついたことあるから、手の内見せたくなくて」

「オヌシこうポンポンと色々思いつくな……」

「で、どんなの？」

「言うわけないじゃないですか……」

と言うか毎度のことだけど、ぼくの作戦というのは基本的にぼく専用でチューニングされているので他のひとが聞いてもあんまり意味無い。

その上対策ができるかと言うとそれもまた別問題だ。言っても構わないと言えば構わないんだけど……いや、なんか気分的に嫌だな。黙っところ。

「スナイパーはどうする?」

「うむ、去年と同じく海外路線を狙いたい。二度あることは三度四度と続くだ」

「そうか。では、スカイについてだが……」

「あー……私はー……どうしたもんかなあ……」

「では私から提案を。スカイも海外挑戦を視野に入れてみるのはいかがでしょうか?」

「うえ。私があ〜?」

苦笑いしながら、スカイ先輩は頭の後ろに手をやった。あれ本当に困った時にやってるやつだ。

うー……ん、用意してないのに突然言われると困るのも分かるっちゃ分かるんだけど、ぼく個人としてはサブトレさんのこの発言も理解はできるんだよね。

「札幌記念勝ったじゃないですか。ぼくはあれ、ある程度海外視野に入れてたからやってたものだとばかり思ってたんですけど」

「こちらとしてはそういう意図のもと出走を勧めた。札幌レース場の芝は全て洋芝だからな、ストライプのように明確にどのバ場にも適性を示してるような特例と違って、一度走らせてみないと分からんことも多い」

「幸い、スナイパーやエルコンドルパサーが海外挑戦をしたことで導線は繋がってます。今ならむしろ海外挑戦のチャンスですよ」

「あー、いや、突然言われるとこっちも困るので、もうちよつと考えてからにさせてくれませんか?」

「分かった。だが、そう長く時間は取れんからな。俺もそろそろ引退だ」

「了解でーす……は？」

「え？」

「今なんて？」

「ちよつと待ってくださいいお父さん!」

いや今突然聞かされたばかりより何で実の娘が一番狼狽してるんだよ。

皆この勢いのせいで困惑より先に疑問の方が来てしまっている。

「前々から思ってたことだがな、もう還暦だぞ俺は。利紗に引き継ぎができるよう教育はずつとしとつたんだ。それに、あくまでチーフの地位を退くだけだな。まだ全面的に任せるといわけにはいかん」

「立場的には、タキオン先輩と似たような感じですか」

「そうなるな。それに長いことURAの医学会からも声がかかっつたから、流石にそろそろ誤魔化しきれん」

「そうなんですか!?! 私聞いてないですよ!?! まさか普段の意趣返し!?!」

「いや、何でサブトレさんが一番驚いてんですか」

こりや家でほとんどそういう話してなかったなこのひとたち……。

いや、仕事の話の家でまでしたくないって気持ちはなんとなく分かるけど。

「はっはっは。そういうわけだ。引き継ぎの書類はどうに作つとるかから安心しろ」

お父さん!! と鳴き声を上げながらサブトレさんは去っていきそうになるトレーナーさんを追いかけていった。

まさしくこれこそが報連相をしないことで起きる弊害だということを見せつけられたかのような気分だった。

……ギンシャリボーイを翻弄するのってどんな気持ちなんだろう。いや、トレーナーさんにとってはただ娘をからかっただけか。

逆指名だろうか

2月はじめ。バレンタイン商戦もクラシック戦線も激化しつつある中、ぼくらはつい最近勝ち星を上げた同級生と一緒に祝勝会としてケーキバイキングにやってきていた。

もつとも、人数はそこそこと言ったところだけど。本日の主役はテイオーとカレン、ネイチヤたちモブウマ娘含む。主催側としてぼくとマックイーンとマヤノ、マーベラスにイクノ、などなどモブウマ娘含む。タンホイザたちは用事があるので今日は来られなかった。

テイオーはデビューから2連勝。カレンはメイクデビューこそ逃したものの、その後連勝をあげている。

「おのれ、当てつけかあ……!」

……一方、ネイチヤは先日の若駒ステークスでテイオーに先着され2着史実は3着。あいにくと、今回の催しは残念会になってしまった。

「うーん、でもネイチヤちゃんも惜しかったよ。もうちよつとタイミングが合ってたたら、差し切れてたかも!」

「タイミングって何よ」

「えっ? んー……?」

「ストライプさん、言語化できますか?」

「あと3、4歩分くらい我慢してスパートをかけ始めたら、差が広がってテイオーが一瞬気を抜くことがありうるよね。負担は大きいけど、その我慢した分が残った体力振り絞って一瞬の速度を重視すれば、テイオーがゴールするのとはほぼ同時に、奇襲気味にゴールして写真判定に持ち込めたかも……って感じ?」

「そんな感じ!」

「さっきの言葉からそこまで翻訳できるのおかしくない!」

「あとそんな計算がレース中にできるのはあなたくらいのもですわよ」

「マヤできるよ」

「例外を煮詰めたようなちびっこ二人がアタシを追い詰めに來てる……!」

「ちびっこ!」

「ちびっこ……!」

確かにマヤノもぼくも小さいが。オマケにぼくはマヤノより小さいが。

耳含めたらギリで同じくらいの身長ということではイケるか……? いや、どっちにしてもネイチャの言う「ちびっこ」状態から逃れられないのでは……?」

……それは置いてこう。ともかく、ぼくは計算でやってるが、感覚でそれができるマヤノは改めて恐ろしい。まだ頭の回転でのみ突出しているからいいけど、身体スペックまで備わったらもう手が出られないだろう。

「まあ、でも、もしそうなってもボクなら勝ってただろうけどね」
「言うねえ」

連勝中なおかげというのもあり、元々の気質もあり、ともかくテイオーは得意満面だった。

大絶賛調子乗り中とも言える。まあ、半分はそう宣言することで自分の逃げ道を塞ぐ意図もありそうだけど……。

マックイーンはその辺の機微に敏いためか、露骨に溜め息をついている。メジロ家の誇りを頻繁に掲げている自分にも心当たりがあるためだろう。

「目標は無敗の三冠だからね! ちょっとやそつとじゃ負けないよ」

「ステイヤーズステークスでぼくと握手!」

「スプリンターズステークスでカレンとコラボ★」

「うわあ!?! 急に絶対有利な条件で挑もうとするのやめてよ!?!」

「自信満々に言うから……!」

しかしちよつと待ってほしい。ぼくらは別にテイオーの心を折りたくてこんなことを言っているわけじゃあない。ただ自信満々な相手には挑戦したくなる、ある種ウマ娘らしい本能的な衝動に従って

るだけだ。

それはそれとして、自信があるならということではくらの主戦場に招いているだけである。無敵のテイオー様ならこの試練にもきつと打ち勝ってくれようぞ。

「でもテイオー、に限った話でもないけどさ。3600走れとは言わないけどそれくらいのスタミナは必須だよ。去年の菊花賞見たでしょ」

「あれは特殊な事例でしょうに……」

「ですが、時期が時期ですから非常に天候は変わりやすいはずですが。ただ3000m走るというだけではないスタミナが求められる可能性はあります」

「ふたりはどうやって乗り切つ……あ、いやいいわ。アタシが参考にできるやつじゃないパターンだし」

「そう？　ボクは聞きたいけどなあ。案外何でもできることかもしないしねっ」

うんうん、と別のテーブルに座っている子も同じように頷いて返す。軽く首を傾げて考えながらマックイーンと視線を合わせて、何を喋ったらいいかを視線だけで打ち合わせる。

……何言えばいいんだコレ？

「生まれて10年ちよつと標高2000m以上の高地で過ごして心肺機能を強化する」

「幼少期から適性を見てそれに合わせてトレーニングをして参りましたからなんとも……」

「本当に参考にならないやつだったよ……」

「どうしようもないわコレ……」

「そうかな？　カレン、今の話もうちよつとちゃんと深掘りすれば、トレーニングに活かせると思つたよ？」

流石カレン。本当に賢い。

要はぼくのやってることは高山トレーニングの延長だし、マックイーンは自分の適性をしっかり見据えてそれに合ったトレーニングをしているということだ。これを個々に合わせて最適化することで、

「個人に合った」トレーニングになる。

マヤノは一見よく分かってなさそうな表情をしているが、これはアレだ。実際には超速理解してるやつ。ぼやーっとしてるように見えて頭はメチャクチャな勢いで回転している。なので多分カレンの言う「もつとちやんと深掘りすれば」というのを、何も言わずとも極めて自然にやってのけている。

うまく行けば、それこそ徐々にでも適性を伸ばしていくことは可能だ。1200までの適性だったのが1400まで伸びた……というようなケースもある。

どうすればいいのか、と軽い悩みを植え付けた形になってしまったが、トレーニングのことはトレーナーさんと相談してもらおうしかない。あくまでぼくらがやれる、というかやっていいのは方針を示すまでだろう。

……あ、そうだ。トレーニングと言えば。

「そういえばテイオー。タキオン先輩がテイオーのこと呼んでたよ」

「うええええええ!!? タキオン!!? なんで!!?」

「フォームのことで話があるとかで……詳しい内容は聞いてないけど」

「ヤダよー……ストライプが聞いてきてよー……同じチームじゃん……」

「え、そんな嫌?」

「薬の臭いがする」

あ、そういう……。

普段から予防接種とか採血とか嫌がってるの何度か見てるし、そういう絡みか。

「……あと、ぼくはあくまで元同じチームってだけで、今のタキオン先輩の所属は学園だよ」

「そういう問題じゃないよお!」

「今後の走りのことに関わってくるんだから、個人的には行くのをオススメするよ。ていうか引っ張ってでも連れてくよ」

「助けてネイチヤ」

「いやこれはストライプが正しい。こういう風に言われるってことは、行かなきゃだよマジで。アタシの知ってる病院嫌いだっただおっちゃんも、一回大病見過ごして酷い目に遭ったことあるんだから」

一瞬ギクリとしたが、話のネタにできるといふことは無事なようだ。まあ「だった」って言ってるわけだから、今はある程度病院嫌いの改善されたのだろう。

この辺はある意味、アスリート全体にも通じることだ。普通の人より遥かに頑丈なせいである程度「自分は大丈夫」という考えでいるひとも多いし、病院嫌いのひともいる。テイオーなんか病院嫌いの典型だ。

「……あ、タキオンお医者さんじゃないじゃん!? だったら行かないくつても——」

「お医者さんじゃないなら行けるよね」

「うわあああ!」

自分で墓穴を掘りおったわ。

……≠……

「少しいいだろうか?」

テイオーを、ウオツカとスカレットを交えて三人がかりでタキオン先輩に引き渡した少し後のこと。ぼくは突然白いふわふわとした形容のできないウマ娘うまねこに呼びかけられることになった。

「でっか」

思わず声が漏れた。

目算、身長170cmくらいだろうか? リムジン先輩と比べたら小さいかもしれないが、それは単純に比較対象の問題だ。ぼくの周囲にいるひとと比べると、身長として一番近いのはシャカール先輩だろう。

それにしたって全体的なボリュームがエグい。ぼくからすると、見上げるしかない状態な上にちょうど頭の位置にご立派なものが来る形になってしまう。髪かみの量と体格の良さも相まって、凄まじい威圧感

だ。

「——誰の頭がでかいと!?!」

「誰もそんなこと言つとりませんが」

と、その発言のおかげでぼくはようやくその人物が何物なのかを把握した。一瞬何者かと思つたけど、ビワハヤヒデ——年齢的には先輩アプリ版では推定オグリキャップの下の学年、かつゴールドシチーより上の学年と推測される。——じゃないか。

まあいいか。突然何の用事だろう。

「んん、っ……………突然すまない。私はビワハヤヒデという」

「これはどうもご丁寧に。サバンストラライブです」

「よろしく頼む。…………さて、単刀直入に用件を伝えた方がいいだろうね。君のチームのトレーナーに紹介を頼みたいのだが…………」

「え、うちです?」

急にどうしたのだらうと思わないでもないが、ぼくが知る限り「ビワハヤヒデ」というウマ娘は、データ重視な上に、ある程度ウマ娘の自由にやらせる気質のあるうちのチームとの相性は良い。逆指名だろうか? いや、だとしてもチーフトレーナーが一線を退くのを発表している時期だ。もっと別の理由があると考えるべきだろうか。

「構いませんけど、どういう用件ですか?」

「本格化の時期についてどれだけの個人差があるのかと——少し、友人のことについての相談をね」

「わかりました。取り次ぎますね」

どういう状況なのかを判断するのは難しいが、どういう状況であるにせよ判断を下すのはトレーナーさんたちの仕事だ。

わざわざぼくを訪ねてきたのは…………まあ、単純に他のひとを窓口代わりに訪ねてみるのが難しかったという事情もあるかもしれない。スカイ先輩はなかなか捕まりそうにないし、スナイパーIIサンは根がシャイなので人前に姿を現すことが苦手。シャカール先輩たちは…………間違いなく面倒見の良いひとたちなんだけど、それぞれ人付き合いの仕方に微妙に癖があり、特に一見常識人であるフラッシュ先輩はスケジュール管理が非常に厳格で、行動パターンを知っていなければ

なかなか捕まえられないウマ娘のひとりだ。

まあそういう点、ある意味ではぼくはチームの窓口役としてうってつけなのかもしれない、なんてトレーナーさんたちに連絡を入れながらふと感じた。

トレーナーさんたちに連絡が通じたのは数分後のことだった。

そのまま流れでハヤヒデ先輩を連れて部室に向かうと、渋い顔をしているサブトレさんと、対照的に朗らかな表情のトレーナーさんが目に入った。

「大変だろう、チーフトレーナー」

「本当にまいったくその通りなのであと一年長くやる気は……！ つ、と……ストライプ？ と、そちらは、連絡にあった？」

「はい。トレーナーさんたちに用事があるそうなので連れてきました」

「ふむ」

少し椅子に深く腰掛けたトレーナーさんの目が、どことなく値踏みするもの変わった。

これもある種、トレーナーとしての職業病だろうか。知らないウマ娘を見るとどんな才能があるか見ようとする、みたいな。

「お初にお目にかかります。私はビワハヤヒデ。本日は、お二人にくつか質問させていただきたく思い、参りました」

軽い挨拶から入り、まず問いかけたのは「自分を含め、今の年齢で本格化を迎えていないウマ娘がいるのだが、どの程度個人差があるか。また、学園への在籍は問題ないのか」という点だった。

こちらはまあ、軽いジャブのようなものだ。トレーナーさんたちは過去の事例を交えながら、トレセン学園の英語名に大学^{College}の名が含まれている歴史などを踏まえて軽く回答してのけた。遅ければ成人間際にといいこともありうるとのことだった。

これに関しては先輩も回答を予測していたらしく、でしようね、とすんなり納得を見せていた。友人たちが不安がっていたというのが本旨らしく、ハヤヒデ先輩はほとんど気にしていないようだ。

一般常識をある程度深掘りした程度の問題なので、「専門家に聞い

た」という体裁が一番大事なのだろう。焦り始めた同級生や友人たちに説明するのに、本職のトレーナーに聞いたという前置きをするだけで一気に信憑性は高まる。

本題は、むしろ後半だ。

「私の友人に、食が細く体格に不安があるウマ娘がいます。栄養学やトレーニング方法など、何か指針になるものを教えてはいただけませんか？」

その切実とも言える訴えに、トレーナーさんは少しばかり困ったような表情を見せた。

「言いたいことは分かるが、その友人の普段の食生活やトレーニング、食事がデータとして分からん以上こちらから『こうだ』と示すのは難しい。まず、一週間分ほどデータをまとめてきてはくれんか？」

「逆に言えば、それさえあれば……？」

「断言はできませんが、方向性は持たせられるだろう」

「そうですか。それだけでも十分です。ありがとうございます」

丁寧に頭を下げるハヤヒデ先輩。もつ。と髪が追隨していくのを見つつ、ふと思った。

うちのチーム、ぼくを含め体格で不安があるのにG1獲ってるウマ娘ふたりもいるんだけど。

サブトレさんも同じことを考えたのか、苦笑しながらこちらに視線を寄越していた。

「そう焦らなくとも大丈夫ですよ。ベテルギウスに訪ねてきてくれたということは、このチームの戦績もご存知ということでしょう？」

ドーナツツや、それこそそこにいるストライプも、体格に恵まれなくともG1戦線で結果を残しています」

「なんならうちのチームでしばらく見るといふことはできません？」

「……………いや……………それは……………」

今度はハヤヒデ先輩が渋面を作る番だった。そんな表情なる？

と思うが……………なるんだろう。多分……………

少し考えて結論が出たのか、眼鏡を光らせながら先輩は手を前に出した。

「……友人付き合いをすることに問題は無いが、チームという枠組みに、こういう形で入れるというのはタイシン……その例の友人には向いていないと思う。せつかくの申し出だが、すまない」

「いえ、ちよつと言つてみただけなので……」

……ぶつちやけ、ぼくの知る限りだとハヤヒデ先輩がそう評するの
も領ける。

結構気難しいひとだろうし、専属で公私に渡つて綿密なサポートができるトレーナーを探るのがベストだろう。一概に必ずしもそうだと断言するのは難しいけど……。

「ビワハヤヒデ自身はどうだ？　うちのチームに入つてみる気は無い
か？」

「……私ですか？」

驚くことに、ここで動いたのはトレーナーさんだった。

ここ数分のやり取りで何か感じ取つたのだろうか。その瞳は普段のトレーニング中に見せる程度の鋭さがある。

「なにぶん急な話ですし、私も今日は友人のことを相談しに來ただけ
です。少し考えさせてください」

「構わんよ。こつちも急な話で悪かった」

「いえ。それに——スカウトなら、どうか選抜レースでお願いします。
私もそれに相応しいレースを見せましょう」

丁寧な礼をして話を終えたハヤヒデ先輩を見送る。

先輩の足音が遠くに行った頃合いを見計らうようにして、トレー
ナーさんの口元がニヤリと軽く持ち上がった。

「利紗、ありやあ優秀な子だぞ」

「それは分かりますが少し自重してください」

「分かるんですか」

「それはまあ分かりますよ」

……トレーナーってこの短時間で、それも走つてすらないウマ娘の
実力を見極めることができないとなれないもんなんだろうか？父：長
年の経験から来る洞察力／娘：直感。必ずしもできないとトレーナー
になれないわけではない。

三女神の像

3月末——春の三冠の第一冠となるG1、大阪杯。

春の天皇賞への直行を表明しているぼくにとつてはそれほど大きく関係のあるレースではないが、今日のぼくは身を乗り出してモニターにかじりついていた。

『——まさに堂々復活ツ!! 屈腱炎を乗り越え帰ってきた風神は強かった! 一着はアイネスフウジン!!』

「や………ったああああ! っしやあつ!」

「……………」

「……………」

思わず声が上がると共に、椅子を蹴倒してガッツポーズまで取った。

……しかしながらここは食堂である。周りで一緒に観戦していたひとたちに見咎められて、ぼくは粛々と椅子を元に戻して再度席に就いた。

「ストライプってミック先輩の時といい、観戦してる時のテンションやたら高くねえか?」

「……そうね」

ウオツカとスカーレットからもやけに生ぬるい視線を向けられる。

でもさあ、屈腱炎との長い戦いを乗り越えて10ヶ月ぶりの復帰を勝利で飾ったんだよ。そりゃあ興奮するし入れ込むし、このくらいしても不思議はないと思うんだよぼかあ。

それに……。

「ぼくより遥かに強火なファンがいるんだから、気にすることなくない?」

指し示した先には、滂沱の涙を流しながらうちわを振るデジたんパイセンがいた。

多少歓喜の声を上げて立ち上がるくらいぶつちやけ大したことないのではないだろうか。

「ウマ娘全体を箱推ししてるようなひとと比べんなよな」

「ストライブ、あなた感覚麻痺してるのよ」

「そんなに感覚が麻痺してるかな……してるかも……」

確かに思えば、前からそうではあるけど完全にオーバーリアクションに慣れてるフシはある。関東圏でレースがある時、ぼくはキツチンカーの出店やらのために現地へ赴くことがあるけど、そういう時はたいていやばい方のアグネスが両方とも同乗してくる。おかげで、寮やカフェテリアでの観戦とあわせてデジさんのオーバーリアクションはすっかり見慣れたものになった。ちよつと感染うつったのではとと言われると否定もできない。

「ていうか問題はそこじゃねーんだけど。アイネス先輩ってお前にとってライバルのはずだろ？」

「ライバル応援して何か悪いことある？」

「え……いや、ねーけど」

「でしょ？ みんな画一的に考えすぎなんだよ。もっと混沌としてるくらいでいいんだよ、友達でありライバルであり……みたいに」

言っても人間関係なんてそんな簡単に割り切りができるようなものじゃない。一単語だけで関係性を表すなんていうのは至難の業だ。まさしくウオツカとスカーレットの関係性のように。

「それに……えー……誤解されそうなこと言うけど」

「何でわざわざ誤解されそうなこと言うのよ」

「ぼくは他人と仲良くした方が得だなーって思ってる」

「損得勘定かよ！」

「誤解って話と関係ある？」

「うん、まあ。得っていうのはお金の話とかだけじゃないんだよね。いがみあってばかりいると辛いじゃん。仲良くしてたほうが心穏やかでいられるし。それって精神的にもお得でしょ」

「……最初からそう言えよ!？」

「例えばぼくが理屈抜きに『普段は仲良くしてただけだよ』って言ったら信じるっ!」

「……………」

「無理でしようね……」

「でしょ?」

だからこういう説明するときは、ある程度理論先行の方が相手に納得してもらいやすく楽だ。

いや、楽か? よく考えたら二度手間じゃない? 普段の風評のせいで損してないコレ?

……よし、この話考えるのよそう! それこそぼくの心の健康に悪い。祝福する時は祝福一本に絞ろう。うん。

「おーい、ストライプー!」

「あれ、ターボだ」

「呼んでるみたいだけど」

気を取り直したそんな折、ふとした拍子にターボが駆け寄ってくるのが見えた。

ウマ娘の「駆け寄る」だ。割と大概な速度である。ちよつとばかりハラハラしながら見守るが、そこまで大きな問題はなく、思ったよりは普通にこちらに到着した。

「特訓するぞー!!」

「特訓だつてよ。え、特訓?」

「急にどうしたのよ……」

「急つてワケじゃないんだけど……」

登山である。

夏合宿の時、ネイチャやタンホイザたちと登山に「特訓」に行った後のこと。ズルい! と言われてそのしばらく後に、ターボも交えて登山に向かったのだった。

これがまたなんというか——なにせターボだ。こう言つてはなんだが、結構な難物である。遭難する可能性を考慮すると、絶対に目を離すわけにはいかなかった。結局その時は、ネイチャたちも一緒になつて疲労困憊に陥つたと思う。

で、まあその後もちよいちよい特訓ということで登山に出かけているのだった。

「言つとくけど、今回は誘わないよぼく」

「それはそれで寂しいわね。何で？」

「……スカーレットかウオツカのどっちか来たらどっちも来るでしょ。張り合って自由に走ったりしてみなよ。絶対遭難するよ」

「うっ、それは……」

「ターボだけでも結構キツイし、正直悪いけど……本当悪いけど……抑えられるって自信が無い限りはほくもOKは出せない……!」

多少ならず自覚はあったらしい。ふたりは微妙な表情を返して頷いた。

「ええ〜!? スカーレットとウオツカも一緒に行けばいいじゃん!」

「えっ」

「あ、お、おう……」

次いで、「どうすんだよコレ」みたいな表情を返される。

まずい。未っ子気質のターボに言われると(ぼく含め)断りきれなくって弱い。そこまで言うなら……みたいな雰囲気ですたりの腰が上がりかけてる。

……よし、ネイチヤかタンホイザ、マックイーンやテイオーのうち誰か巻き込んでどっちかの様子を見てもらおう。そうしよう。

(こんなに頻繁に付き合わされるなら、ターボのスタミナのためとはいえ「山を登りきったらウマ仙人と会えるかもしれない」なんて言ってみたのは軽率だったかもしれない……)

嘘にするとターボに悪いから、それとなくセットを組んだり色々な仕込みをしていたりするが、どうしても準備できる場合とそうじゃない場合がある。

ガツカリしてるターボを見るのは心が痛む。こうなると、もうちよつと安易に食べ物で釣ったりごほうび感覚の何かしらを考えるべきだったのだろうけど……そうすると関心を引き出せそうになく、遊び感覚でのトレーニングとはなりそうにないし……。

「ストライプ、なんか『策に溺れた』って感じの顔してんぞ」

「まさしくそんな心境だよ」

今回はタンホイザにターボは任せよう。

代わりにぼくがスカーレットとウオツカをなだめながら行けば、遭

難はしないだろう……多分……。

……≠……

美少女と美少女の間スカート ウオッカに挟まれるという貴重な体験をしたにもかかわらず、ぼくの心境はどちらかと言うと焼成機プレスに押し込まれたワツフル生地の方が近かった。

何かと張り合いがちなふたりだ。多少なりともぼくの存在が緩衝材になればと思つて間に入ったのだけど、甘かった。

ぼくの頭越しに言い合いを始めた二人は、ヒートアップするにつれてどんどん接近。最初のうちは間に挟まってるお陰でちよいちよい冷静になってくれたのだけど、それも途中までだった。売り言葉に買いたままそれに巻き込まれてどんどん圧縮されていくハメになってしまったのだった。

全体的にこう、やつれて縦に伸びた気がする。気のせいだろうかど。

「はあ……」

ぼくは一旦皆と離れて学園の方にやってきていた。流石に疲れたというのもあり、予定外の運動についてトレーナーさんに報告するのもあり……夕方近い今の時間帯なら人も少ないから静かだろうという憶測もあった。実際、今のところほとんど他人は見えていない。

そんな折、ふと目に入ったものがある。学園の名物オブジェ、三女神の像だ。

「三女神の像か……」

全てのウマ娘の始祖と呼ばれるのが三女神だ。それはこの世界でも同じだが、冷静に考えるとぼくのいるこの世界はウマ娘と言うよりウマ科娘という種族的な括りになっているため、ぼくの知るいわゆる「三女神」——恐らくはサラブレッドの三大始祖とは異なる可能性が高い。

可能性としてはウマ科それぞれの亜属、ウマ、ロバ、シマウマの始

祖だろうか。そうになると尻尾が異なっているけど……女神のモデルとなったウマ娘を実際に目にしたひとはいない。後世の創作である可能性も否定できないし……そうでない可能性も否定できない。

まあ、全ては可能性だ。

しかしこの独り言、なにやら継承の場面っぽい――。

「!?」

――その時、不意にイメージがよぎった。

駆け抜ける二条の光。それは静かに形をなし――長い鼻を持った巨体と、それを上回る体高を誇る、長い首を持った四足歩行の存在を映し出した。

「ウワーツ!!?」

ジャンボナンプラーとジラフじゃねーか!! ペンキの幻臭がする

!!

ちよつと待って駆け抜けないで! これぼく何の因子を継承すんの!?

というか百歩譲って近縁分類の偶蹄目のジラフジャパンワールドカップ第一回出走。主な勝鞍は凱旋門賞。首の長いハイネック種。はまだいいとしてもジャンボナンプラージャパンワールドカップ第二回及びアニマル国際に出走。主な勝鞍はクイーンエリザベス2世ステークス。鞍上はムワイ・サンコン。非常に体の大きなヘビーウエイト種。はカスリもしない長鼻目^{ソウ}じゃん!! 何をどう継承すんの!?! キャンセルは!?! 無い! そうか! 諦めよう! せめて不利益が起きませんように!!

「っ……う……」

程なくして、イメージは視界から消失した。

同時にずしんと疲労感が全身にのしかかる。ちよつと待つてほしい。継承つてもつとこう……なにやら理屈は分からないが力がみなぎる……! みたいな感じじゃないの!?

あの、まあ、単純に登山してきた直後にコレという気疲れのせいという考えるのが正確だろうけど……。

「トレーナーさんたちに伝えるべきなのかな、これ……」

あまりにもオカルトとトンチキが全開すぎて言ったところで信じてもらえる気が全くしない……。

他に同じような事例があるならまだ話せる方なんだけど……これ、天皇賞を前に精神に変調をきたしたとか思われたりしないよな……。

継承らしきもの

後日。定例トレーニングの時間になると、この日学園内にいるチームメンバーが一度部室に集合することになった。というのも。

「ビワハヤヒデだ。チームメンバーとして引き続きよろしく頼むよ」
これまで、何やかやで仮入部のような扱いでチームに出入りしていたハヤヒデ先輩が、とうとう正式にチームに入ることになったためだ。

本人曰く、どうにもこうにも心配性で、実際に行動に移すまでが長くかかってしまったのだとか。気持ちは分かる。

拍手の音が響く中、ハヤヒデ先輩は照れる……ということもなく、眼鏡をクイツと上げながらごく自然体でそれを受け取っていた。

「フラワールの時は照れ照れだったよね〜」

「そ、そこまでじゃあ……」

そこまでだったんだなあこれが。

まあ、その辺は経験の差というやつだろう。フラワーはあくまで飛び級。周りは年上ばかりとなれば、気が引けたり照れが出るのもごく自然なことだ。むしろぼくらとしては、反抗期に入る気配も無くずっと素直なフラワーなのでそっちの方がちよつと驚く。

さて。挨拶はほどほどにして、この日のトレーニングメニューは、数日後にチーフトレーナーに就任することが決まっているサブトレさんから、今年の目標と併せて発表されることとなった。

「はい、ではスナイパーは年末のBCマイルを目標に据えて……昨年はパワー不足が目立ちましたからね、ダートトレーニングをメインにしていきたいでしょう。目標はストライプくらいで」

「ワッザ!？」

「理想高すぎる上に過剰ですってばサブトレさん……」

「理想は高く持つておくべきですよ。たとえその通りにはならなくとも、届かせようという努力はいずれ別の形ででも実を結びますから」

それは例えばセクレタリアトの等速ストライドを真似ようとして、結局無減速クロスステップになっちゃったギンシャリボーイサブトレッキンみたいにだろうか。

まあ、スカイ先輩の言う通り、ぼくと同レベルのパワーとなるとそれは流石に過剰だ。いくら海外の芝が足が埋まりそうになるほど深いと言っても、そこまで必要になることはあるまい。あくまで目標値ということもあるだろうし、単純に身近にいるから比較しやすいというのものもあるだろう。チームでは一、二を争うほどとなれば、まあ理解はできる。

ちなみにチーム内最強はリムジン先輩だが、これはあの大きな体ありきのもので、かつ本格化の山を越えてドリームトロフィーに移籍したので、比較しようにも辛いものがあつたりする。そこで同じく現役のぼくに白羽の矢が立ったところだろう。

「次にスカイ。まずはスタミナをもっと伸ばしていきましようか。2000m程度の中距離でのスピードも良いですが……海外選手の差し脚の切れ味を考えると、余力が残りにくい長距離が恐らく最も望ましいはずです」

「はーい。目標はストライプ？」

「もちろん」

「ぼくをバロメーターにするのやめてくれます!?!」

「しかし、やはりあなたはこの中で最も突出したスタミナの持ち主ですから。一番わかりやすいんですよ」

そりや分かるけど……なんか恥ずかしいんだよねこういうの。何の裏もなく褒められてるだけっていうのが、ちよつと背筋ムズムズする。

チームメイトやトレーナーさんからの称賛を素直に受け取れないって、もしかしてぼく結構屈折してるな？

……いや、称賛を素直に受け取れないのって、そもそもぼくが作戦のために悪名を広めたせいでは？ ははーん。つまるところ自業自得だな？

はは……は……はあ……。

「ストライプ君はなぜ急に落ち込んだんだ……？　今褒められてたはずだが……？」

「ゴヤツの精神構造は色々複雑なのだ」

「多分、何か思うところがあつたんだと思います……」

「話を続けますよ。スカイは十分な能力があると思いますが、しかし海外での活動経験が不足しています。早め早めに行動できるようにしておかなければ。水が合うとも限りません」

「水って？」

「文字どおりの意味じゃないですか？」

「でも、ちよつと水が合わないくらいなら……」

「水を甘く見るではないぞスカイ。下手をすれば死ぬぞ」

「なんて？」

「死ぬ」

スカイパー||サンが珍しく真面目な話をしている……。

いや真面目に話したことが無いわけじゃないんだけど、圧倒的に真面目なこと言う頻度が低いんだこのひと。

「インストラクション・ワンだ。日本と海外は基本的に水質が異なる」

「それは知ってるよ。軟水と硬水でしょ？」

「それが分かるなら、スカイならばもうちよつと深く考えればすぐに分かるはずだ」

「具体的にどういう理屈？」

「……説明してやれストライプ！」

「えー」

話し始める前に理論構築してなかつたんじゃないだろうなスカイパー||サン。

スカイ先輩はスカイ先輩でなんとなく理解してそうな顔してるけど。慌てたスカイパー||サン見てちよつと面白がつてるフシがあるし。

あのひと感覚派な面が多少あるから「日本と海外の水は違う」の一点だけ把握して話し始めたんじゃないかな。単に説明するのが面倒になった可能性も否定しきれない。

「飲み水も料理に使う水もその土地の水なんだから、水のせいで海外で一度体調崩すと海外にいたままじやなかなか復調できないって話でしょう?」

「うむ。そう言いたかったが言葉にできなかった」

「もつと深く言えば、海外の水……硬水にはマグネシウムが多量に含まれていることが大きな理由だな。これは下剤にも含まれている成分で、腸を刺激しやすい。料理に使った場合は……化学反応が起きて変質するだろうから一概には言い切れないが、やはり成分は残留するだろうね」

「なるほどなるほど」

ほとんどハヤヒデ先輩に補足されたけど、理屈はそういうことだ。

これは海外挑戦を視野に入れていているウマ娘全体に言えることで、体質が合わず断念という危機には常に晒されることになる。

まあ、海外と言っても一概に全ての国が硬水というわけではないし、実際よくが住んでたナイロビの水も軟水だ。……いやそもそも水の安全性って問題があるんだけどねケニア。

「あと単純に味に慣れないひとも多いでしょうね」

「その点はコーヒーにしたりお茶にしたり、味を変えれば解決するだろうね」

「あー……それ、お茶のパックとか買うなら日本の方がいいですよ」

「うむ、基本的に砂糖が添加されておるからな……」

「……そうですね」

サブトレさんが遠い目をしている。海外についていつて観戦する時に緑茶を買って痛い目でも見たのだろうか。

お寿司が好きならみか、お茶あがりにも一家言あるからな……流石に海外SUSHI文化に物言いまではしないけど、常々何か言いたそうにしているのは見る。

「……ともあれ、そういうことです。まずは慣らすところから始めましょう」

「はーい」

「次は、ストライプ。あなたは……まあいいでしょう」

「いきなり扱いが雑！」

「信頼の賜物と思ってください。ローテーションまで含めて頭の中にあるでしょう、あなたは……」

「まあありますけど……」

「あるのかストライプ君……」

元々ぼくの強みはそういうところでもある。それをもって信頼していると言われるとこちらもそういうことならしやうがないと言わざるをえないし、実際考えてはいるのでその点で文句を言う気はない。ただ、ひとりだけ扱いが雑なのは流石に文句言っても構わないだろうか。

「では、今年の締めを有馬に据え——」

「ないです」

「ええっ!？」

「何で!？」

「有馬は……もう勘弁してほしいっていうか……」

「トラウマになっておるぞこやつ」

「あんな陣容になるなんてこと今後10年はありませんよ」

「10年にひとり出るかどうかというはずの三冠ウマ娘がシービー先輩、会長と2年連続で出た話します?」

「ああ言えばこう言いますね本当に……」

「なので出るとしたら東京大賞典で」

「そっちなあ……」

フアル子先輩との約束もあるしね。

時期柄、帝王賞は……色々条件が厳しいから見送る格好にはなりそうだけど、せめてこっちは出走しておきたい。

さて、ハヤヒデ先輩とフラワーについては、こちらはどちらも基礎トレを重点的にということになった。

フラワーは今年デビュー予定のため、やや大きめの負荷をかけることになる。万が一のこともあるが、ぼくらはぼくらでトレーニングがあるため、強く注意するというのも難しい。約一名トレーニンングに向ける意識が散漫になりそうなのとがいるがそこは触れずにおこう。

ともあれ、トレーニングだ。問題はここからで、先日のあの……継承の一件で自分の能力がどう変化したのか、まだぼくは把握していない。

能力が何かしら向上しているのか、何も変わってないのか、はたまた落ちているのか。流石に能力が落ちてるとは思いたくないが——そう思っただけでタイム計測に臨むと、それだけで何か異変があったことに気付いたのか、サブトレさんの視線が険しくなる。

実際に計測になれば、ぼく自身も何が起きているのかはつきり分かった。

「ストライプ、あなたパワーがまた強くなっていますか？」

「ええ……」

元々、やや過剰気味だったパワーが更に強くなってる。

過剰通り越して余分出てる。いや、まあ、加減すればいくらでも「適切」な力加減に持つていくことはできるだろうけども……動物界最大級にパワフルな二匹の継承ともなると、そうやって仕方ないかもしれないが……。

「それに、体幹も。一朝一夕でどうにかなることではないと思うのですが……」

「ですよね……」

「パワーはともかく、体幹が鍛えられたのは良いことです。練習していた無減速クロスステップも——」

「あの……サブトレさん、ちよつと耳に入れたいことがあるんですが」

「——と、なんですか？」

「三女神像の前を通りかかった時、暗闇の中駆け抜けていくゾウとキリンの幻覚を見まして……」

「何がどうしてどうなったと言いましたか？」

明らかにサブトレさんは困惑していた。当たり前だ。変な薬でもやっているのかと心配になっていることだろう。でなければ高熱でうなされている時に見る夢か何かだ。

おでこに手を当てられたが、特に熱は出ていない。サブトレさんは首を傾げた。

「……秘伝の、こう、例えば精神がトリップする薬を使っているとか、そういうことはありませんね?」

「ぼくを何だと思ってるんですか」

「必要とあらば何でもやる子だと……」

「それは……そうなんですが……」

ヤバいクスリをやることに必然性も必要性も欠片もないじゃないですか。

むしろアスリートとしても人としてもリスクしか無いのに何でそういう発想が出てくるんだ。普段のぼくの振る舞いのせいかな。泣きたい。

「現役時代似たようなことがあったりしませんでした?」

「ありませんよそんな……そんな……いや、あつたかも……」

「あつたんじゃないですか」

「もう十年以上も前のことですし、ええと……そうそう。たしか、見慣れないウマ娘が見えて……」

ふむふむ。思ったよりかなりオーソドックスなようだ。

いや、出自も含めてぼくがイレギュラーすぎるだけか? まあ、どっちでも話は通るが……。

「カンパチと並走していて……」

「なんて?」

ちよつと待ってほしい。雲行きがドチャクソ怪しくなってきた。何で魚と並走してるんだウマ娘が。

なんすかその熱帯夜にうなされながら見る悪夢みたいな光景は。

「……きつとストレスと疲れで変なものを幻視したのだと思って、その日はそのまま寮に戻って寝ましたが……」

「でしようね。その後何か変化は?」

「いいえ、何も。しいて言えばちよつと体調が良くなったような……?」

このひと、まさか元から能力が高すぎて多少のことは誤差みたいになつてたんじゃなからうか。

ともかく、こうなるとサブトレさんはあまりアテにはできそうにな

い。次にスカイ先輩とスナイパーⅡサンを呼んで聞いてみるとことにした。

前提となる状況を説明したところで、やはりふたりとも大困惑だった。そりゃ困惑するわと思うけど。

「うくん……確かに何か、『あ、誰か走ってるな』って思っただけで走り出しそうになったことはあるけど……」

「力がみなぎってきたり、みたいなことは？」

「えー……？ 流星にそれはどうだろ……」

ふむ。ぼくみたいなイレギュラー的な存在のみならず、スカイ先輩も——多分まつとうな方式で——継承らしきものを経験している。

基本的に皆記憶が曖昧だが、これは一瞬の出来事で、かつ非現実的な光景のため、「気のせい」ということで記憶を処理してしまうと考えられる。実際、ふたりとも「そんなことあったっけ？」程度の認識で止まっているようだし。

この分だと、一定の時期に達したウマ娘はだいたい経験しているものと見るべきか。特別なものじゃないのはちよつと残念にも思うが、しかし同時にそれで良かったとも思える。勝負は何事もフェアであるべきだ。

「スナイパーは何か無かった？」

「ワタシがベンチに座っていると、不意に周囲が暗くなり背後から駆けてくる影があった」

「ほうほう？」

「ニンジャである」

「待つて」

いけない。ソウル違いが起きている。

「黒いニンジャと赤いニンジャはワタシの前でアイサツを行った。その後は瞬時のことだ。『イヤーツ！』『グワーツ！』交錯！ やがて二人のニンジャが駆け去るが、ワタシはそれを見過ぐすこともできず、心が命じるまま追いかけた——」

「何で一人だけ世界観が違うのさ……」

まさかサバンナストライプと同じように、よそから存在の支柱にな

る何らかのソウル的なブツを持ってきているのだろうか。そしてそれがニンジャのそれとか……。

いや、このひと単なるフリークのはずだよな？

……はず……だよな……？

心に縦縞

スナイパー先輩に先行してもらおう形で、緩やかにコースを走る。中距離からマイルを主戦場とする先輩と、長距離をメインにしているぼくとの併走となると、併走そのものに大きな効果は期待できないが、これが技術習得のためのトレーニングなら話は変わる。

ミスディレクションと緩急を利用した翻弄をメインの戦術にしているスナイパー先輩は、相対速度の把握と調節に抜群の才能を発揮する。「抜かせそうで抜かしきれない」というシチュエーションを作るのが恐ろしく上手いので、前を行く走者を抜かすための技術であるところの無減速クロスステップを学ぶには絶好の練習相手なわけだ。

ドーナッツ先輩に度々捕まっていたのは、このあたりが理由でもあったりする。

「っ……」

今回の状況設定は、「全力を出せば抜かせるかもしれない相手が前を走っている時」だ。

だいたい時速60kmちよつと。だいたい、ぼくが全力で走れば追いつけるギリギリまで速度は上がっていく。本当は、もつとこの上に「ゴール目前」とか、「下手な抜き方すると差し返される可能性がある」とかの条件も重ねてよりレース本番を想定した臨場感のある状況作りをしたかったのだが、まだしっかり習得できてもないのでそういうわけにもいかなかった。

(この技のキモは足先の動きよりも、体の「振り」で生み出す遠心力を強靱な体幹で制御すること——ある意味ドーナッツ先輩にはここが鬼門だった)

当然だが、ドーナッツ先輩も相当体幹が鍛えられている。そうじゃないとヒョイヒョイ八艘飛びなんてできないし、普段からあちこちびよんぴよんと飛び移ったりもできない。

ただ、致命的にウエイトが足りない。そのせいで制御しきれず、コックスプレートでは最後の最後で吹き飛んでしまっていた。

そのあたりは技術力で補うことができるが……一応、ぼくの場合ドーナツツ先輩に足りなかったウエイトが（身長15cm分くらいは）ある。加えて、この過剰通り越して余分まで出てきたほどに有り余っているパワー。技巧の欠片も無いが、強引に方向を変えることもこれなら難しくない。

パワーがより高まったということは、今現在「最適」であることを目標にするべくにとつては、実のところ不利なことばかりではない。感覚に慣れるまでに苦労はするだろうが、限界を超えると周りが見えなくなるという悪癖があるべくにとつては、全力を出し切ることなくこれまでの「全力」と同じだけのパワーを發揮できるようになったのは、明確な利点だろう。

直線に入る。真後ろについたことでやや視界が狭まるが、そのあたりは何度も練習してきているので織り込み済みだ。

筋肉のバネを活かした「しなり」を作り、一瞬のステップを——踏み切る！

「！」

技術よりもパワーを重視したせいか、他の使い手と異なり、スパン、という足元を切るような音が響き、しかしぼくの体は狙い通りに速度を維持したまま横に躍り出て、スナイパー先輩を抜かしていた。

「……できた……っ、つあ……!?!」

ちゃんとそれが「完成」したことを認め、緩やかにスピードを落とすしていく中、不意に足に痛みを感じた。

無意識のうちにカクンと膝が折れる。ちよつと待て。一回でコレってダメージ深すぎんか。

「大丈夫ですかストライプ!?!」

「あ、はい。とりあえ——速^はっや」

「隠す気ゼロじゃないですか……」

「生徒が怪我をしているかどうかという時にそんなこと言ってられま
すか」

言わんとすることは分かるけど速すぎるわ。

あなた今からトウインクルシリーズ出たらOP戦くらいなら完勝

できるんじゃないですか。

サブトレさんに軽く足先を回されたり弄られたりするが、大きな痛みは無い。折れているという事は無いようだ。

「……少し捻っただけのようですね。大事が無くて安心しました」

「ぼくが頑丈なのは分かっているじゃないですか」

「不測の事態は常にありうるのだぞ。注意は一秒、後遺症は死ぬまでだ」

語録がシャレになってないマジな色を帯びている。

いや当たり前つちや当たり前だし言ってることも間違っていないが。

「これではまだ未完成ですね。パワーで強引に持っていくのでは、脚にかかる負担が大きすぎます」

「できたと思っただけだなあ」

「レースも近いですし、当日までに完成をというのは難しいですが……仮にやるとしたら、MAXスピードで一回だけ、限界を越えて速度を出している時は使わないように」

「はい」

とかそのシチュエーションだと、使いたくても使えないだろうなどと思う。

限界を超えろというのの容易にできることじゃない。どうしても後からそれなりの負担はのしかかってくるし、闘争心に吞まれて技術をまともに発揮できないということもあるのだから。

「そもそも、やるならせめて技巧テクニックでやってください。あなたに本当に習得してほしいのは等速ストライドなんですからね」

「クツソ難易度高えですわうおほほほほ」

パワーが高まっていくにつれて等速ストライドの領域が遠ざかっていくのを感じる。

まずはコレ、有り余るパワーを制御する方向でやっていかないか……。

……

4月。入学と編入、進級の季節だ。

ぼくらはどうかというかようやくというか、ともかく無事に高等部への進級を済ませることができた。

——なお、今年のクラスメイトはテイオーにマックイーン、ウオツカにターボ。それからマヤノとマーベラスという顔ぶれだ。

昨年度の落ち着きっぷりと比べると凄まじいアツパーテンションになる顔ぶれと言えようか。悪い言い方をすると、ブレーキ役が足りない。

まあ、それはいいんだ。問題は、今までよりも顔見知りの数が増えていることだ。これは学年を上がるごとに生徒数もクラス数も減っていくことに起因する。

中央は厳しい。好成績を残せなかったウマ娘は地方へ移籍したり、場合によってはレースそのものを引退することになるため、毎年二桁ではきかない数のウマ娘がトレセン学園を去ることになる。中にはどうしてもレースに携わりたいということで学園スタッフの研修コースに転科する場合もあるが、絶対数は少ない。

そういう事情もあるので、ぼくの立ち上げた会社は今後、引退して学園を去ることになるウマ娘の受け入れ先の候補の一つとして期待されているとも聞くが——今問題なのはそこじゃない。閑話休題。

そういうわけで、いつものメンバーが同じクラスになる確率が……複雑な気持ちながら、上がることになるのだった。さて。

そんなわけで、ファン感謝祭が近づいてきたある日のこと。タマ先輩とマックイーン、そしてふたりに連れられてきたライアン先輩に呼び止められたぼくは、少しばかり嫌な予感を覚えていた。

「今年はずえひとも野球してもらえたらって思つとるんやけど」

「縦縞のユニフォームが似合いますもの。ねっ。ねっ」

「Vやねん」縦縞の球団が2位以下に10以上のゲーム差をつけて首位に立っていた絶好調時に発行された雑誌のタイトル。ファンのトラウマ。最終的に首位も逃したしCSも敗退した。前祝いをするとう優勝を逃すというジンクスの走りともされる。

「ゴツフオ。」

「あ、あ、ッ」

縦縞の球団トラウマ多すぎねえか。

悶えるふたりに目にして、ぼくは少しばかり同情した。

——ファン感謝祭の競技をどうするか、という問題である。

まあ例年このあたりは……あまり大きく問題として捉えてはいなかったのだけど、今年はナーバスになってる時期にこれだ。もうちよつとなんとかならんかったのだろうか、時期。

マックちゃんよお。ぼかあキミとの対決のためにも新必殺技の習得をどえれエ頑張つてただけだ。

そりや阪神大賞典で強い勝ち方して菊花賞はマグレじゃなかったと知れ渡つたし、ぼくも映像越しに見てこの半年で相当仕上げてきたのも分かつたけどさ。何で率先してこの緊張感を粉碎しに来るの？
そういう策略なの？

「ご、ごめんねストライプ。ほら、さ。マックイーンも悪気があるわけじゃないから！」

「いえ、別にぼくは誘われた分にはやりますけど」

横からライアン先輩のフォローが入るが、そもそもぼくだってトウインクルシリーズに関わるひとりのウマ娘として、ファン感謝祭を盛り上げることには賛成だ。

ライアン先輩も素で縦縞の勝負服ユニフォームだから誘われたっばいけど、まあこれも別に大きな問題は無い。本人も乗り気のようだし。

「じゃあ何で今口撃しましたの……!？」

「条件反射でもあるし……天皇賞でバチバチにやり合うつもりで気を張つてたところにコレだからちよつとイラツとしたのもあるし……」

「あ、はい」

「あかん優勝してまう「Vやねん」とほぼ同様の事例。好調時に「あかん優勝してまう」と冠した番組を放映したが、優勝も逃したしCSも敗退した。し……」

「サラツと追撃するのやめーや」

ぶつちやけ誘いに来るにしても人選が悪い。

ライアン先輩も天皇賞には出走するけど……何だろうな。ライア

ン先輩に誘われてもあんまり抵抗感が強くないのは。

うん、やっぱマックイーンとタマ先輩の圧が強すぎて思わず反逆しなくなってしまうのが悪い。あとレースに傾けるべき情熱が別の方向行っちゃってねえかという勘繰りからくるフラストレーションもあるか。まあ、流石にそれは無いだろうし、ただ息抜きという趣の方が強い……はずだ。

「それで、相手は？」

「テイオー率いる星のチームですわ」

ハマのテイオーってか。

「あ、そういえば。そもそもだけど、ストライプって野球はできるんだっけ？」

「ルールは大体わかりますし、草野球程度ならやったことも何度か」

「まああんだけスラング知ってるんやから内容も知つとるやろ」

アフリカ大陸全体の傾向としてサッカーの方が盛んだが、野球が行われてないわけじゃない。

前世知識を除いて考えても、日本に来てからしばらく暇な期間もあったので、遊び程度に野球——に限らず球技全般だけ——をかじってみたりもしている。大して問題はない。

「ポジションはどないするんや？」

「キャッチャーでしょう」

「キャッチャーですよね」

「ぼかあもうちよつと体格とか考えても良いんじゃないかと思えますよ」

「あなたレベルのいやらしい配球ができそうな方は、セイウンスカイさんくらいしか心当たりがありませんわ」

「うわあい喜ぶべきか悲しむべきか悩む評価」

というかファン感謝祭なのにそこまでガチな対戦始めると観客がついていけなさそうなんだけど。

「そういえば、ファン感謝祭なんだから縦ユニフォーム縞じゃなくて勝負服だよね？」

「……………そうですわね」

「……ええねん、心に縦縞を掲げていれば」

心に縦縞ってなんだよ。

心にシマUMA宿してるぼくがピンポイントで該当するじゃねーか。

春のファン感謝祭イン野球（前編）

本気と遊びとに関わらず、ウマ娘がレース以外のスポーツに関わる時、身体能力の関係上会場のスケールはどうしても大きくならざるをえない。

基礎体力や瞬発力、持久力の差もあるから一概にこうと断言はできないまでも、スピードだけ見れば2000m競走における人間の世界記録が4分45秒ほどで、時速換算するとおおむね25km/h。ウマ娘はだいたい時速60kmで走れるから、単純計算で2.5倍ほどの速度が出せるわけだ。

で、パワー面。一般論だが、ウマ娘の身体能力は成人男性の約三倍ほどともされている。が、そこんとこどうだろうと思わせるパワーを發揮しているウマ娘は割とそこら中で見られる。ベンチプレスの世界記録は508kg、2021年時点。これは強度的な問題で、人間の骨で持ち上げられる限界とも言われる。ただこの記録は、専用の器具を装着していることが前提だ。何も装着していない状態では300kgと少し、程度だとか。

一方、オグリ先輩は500kgをトレーニングでヒョイと持ち上げる。バンブーメモリーのSSRサポカのエピソードより。ぼくも……無駄に負荷をかけるだけに終わりがねないからやらないけど、まあ普通にできる。ボノ先輩は牧場で突進してきた牛を受け止めた例があるヒシアケボノのSSRサポカのエピソードより。し、ファル子先輩が夏合宿の時蹴りで海を割っているのを見たことがある。

これを考慮に入れた上で運動場の広さを定めないといけないのだから、ルールを制定する側は大変だ。

基本的にファン感謝祭では、広大な敷地面積を誇りかつ色々と融通のききやすい練習用のコースを利用してイベントが催される。

広ければ広いほど良いというわけではないけど、ある程度広ければ選手同士が激突したりというリスクは減る。……サッカーみたいに一つのボールを追うことになる場合はそれもちよつと難しいけど、そ

の辺はルールで縛るのが慣例だ。

そういうわけで春のファン感謝祭イン野球。ぼくたちは野球をしにコースにやってきていた。改めて見ても字面がおかしいなこれ。

そして問題はチームだ。

「黄金世代全員揃つとる!!」

「ああつ、ストライプが何らかのトラウマを……」

「いっやー、スペちゃん誘ったらそのままみんな来ちゃってねー」

ハマのテイオーチームことAチーム、このチームの顔ぶれはもう壮観としか言いようのないものだった。

テイオーにスペ先輩、スカイ先輩にキング先輩、グラス先輩、エル先輩、ツルちゃん先輩にスナイパーIIサン。ここに堅実な活躍を見せるネイチャと、つい先日ぶつちぎりの1着でデビューを飾れたターボが加わる。現役勢と引退後のスター選手が揃った夢のチームだ。有馬思い出して吐きそう。

「そっちのチームも大概デース!!」

「せやな」

対するチームタテジマ(仮)。タマ先輩とマックイーン、ライアン先輩とぼくは既に決まっていたがそこからの追加メンバーがえげつなかった。

「タマが出るなら私も」とオグリ先輩。それに引つ張られてきてイナリ先輩。更に「オグリさんが出るなら」とヤエノ先輩にチヨ先輩。加えてそこにぼくが誘ったリムジン先輩とドーナッツ先輩が加わる。これもまた途轍も無いチームと言えよう。

ちなみにクリーク先輩はアルダン先輩の付き添いついでに応援の方に回っている。

「冷静になりなさいなストライプ。レースならまだしも、野球ですわよ……」

「言われてみればー!」

——もっとも、それはレースをする上では、という話である。

アスリートとしてのフィジカルならともかく、普段門外漢であるところのぼくらが別の競技にまで適性を発揮できるかと言うとそんな

ことは無い。勝手が違いすぎるし、普段使い慣れない道具を使うことになるせいで普段通りの身体能力を発揮できるとも限らない。

だからこそ、こういうファン感謝祭における競技が成立してる側面もあるわけで。

「アイツ普段思考ブン回してる反動か知らねーけど、ふとした拍子に知能指数^Qぶん投げるよな……」

「ハイ……」

はい。

意図的につてわけじゃないけど、ほどよく知能落としていかないと面倒なことが多すぎて何も考えたくなくなるし……楽しむ時は余計なこと考えずに楽しんだりしたいし……。

さて。ともかくお互いに礼をしてベンチに向かう。先攻はこちらだ。

『さて、間もなくプレイボール。実況・解説は私イクノデイクタスと』『ゴールドシップ様お届けするぜー。ピスピース！』

「あら……誘ったのに来ないと思つたら」

「誘つたんだ……まあ、ぼくとしてもイクノ誘つても来ないと思つただけど……」

「誘つたんですの……」

残念だけど、実況や解説、アナウンスも花形なので仕方ない。

しかし、そこを言うならマックイーンが誘つてなかったのがちよつと驚きだ。実況をやるという風に伝えていたのだろうか。

「ミークは誘わなかったのかい？ お前さんたち、よく一緒にいるじゃねえか」

「ミークはもう先にバドミントンに決まってるみたいで」

「なるほどねえ」

イナリ先輩に指摘されたミーク以外にも、何人か声をかけたが別の競技に出るなどの理由で断られた。

たとえばハヤヒデ先輩は級友^{B_NW}でフットサル、フラッシュ先輩は野球があまり好きじゃないのもあるし、フェンシングに出る予定もあった。タンホイザはフクキタル先輩とテニス。アイネス先輩に至って

は今客席で移動販売してる。シャカール先輩は、たしかトレーナーさんたちと運営の手伝いに回っているはずだ。

『一番、ピーピードーナッツ』

① ピーピードーナッツ 「シヨート」
最近のマイブームは水族館巡り。

今なにか変なテロップ出なかった？

「よおし。にひひ、スパツと三振にしちやうもんねっ」

「おうおう、できるもんならやってみろや！」

さて、ピッチャーはテイオー。エースで四番という最も目立つポジションを所望したそうな。

第一球。振りかぶって——投げた。

「ボール！」

「あれ？」

『一球目外してボール。出だしは様子見でしようか』

『あれ外したんじゃなくて外れてねーか？』

『どうしたんですかテイオーさん!』

急に難しい顔になるテイオーと、対して悪い顔わるをしてみせるドーナッツ先輩。

フッフ、自信家のテイオーも流石に理解したようだな。

「……ストライクゾーン狭っ!？」

「フハハハ今頃気付いたかア！」

ドーナッツ先輩の身長は大概小さいと言われるべくよりも更に小さい。タマ先輩◇ぼく◇ドーナッツ先輩というくらい小さい。

一般的に、ストライクゾーンはバットを構えた時の姿勢で決められる。無理矢理体を屈めて構えたりしたら、審判の裁量で元々のストライクゾーンとして判定されるものの、ドーナッツ先輩は素であるの身長だ。正確にストライクゾーンを判定するなら、下手をすると一般女性の半分ほどになるのではないだろうか。

これがプロの選手なら低めに集めてストライクを取れるのかもし

れないが、ぼくらは皆たまに暇な時にやる程度。狙ったコースに入れることに意識を向ければ球威やスピードは相当落ちて絶好球になつてしまうことだろう。

結果は、案の定フォアボール。この出塁率の高さがドーナツ先輩が一番に選ばれた理由だった。

姑息コールに高笑いであえてるあのひと……。

『二番、タマモクロス』

② タマモクロス 「外野手」

たこ焼き屋の経営を後輩に打診。

「ほなひとつやらしてもらおうで」

そう言うと、タマ先輩はバットをスツと上に持ち上げ、ある地点を指し示した。

それは……。

『これは予告——ファールです』

「何で!？」

『いや違うぜ……よく見る。完ツ全にアタシを指し示してやがる』

「もつと何で!？」

「おどりやゴルシィ! ウチは借り物競争の恨み忘れてへんぞ!!」

『おおっと、こいつは場外乱闘発生かあ!! 必要とあらばグランサイファアグランブルーファンタジー やパルペプラワールドフリッパアを渡り歩いた既コラボ作品は2022年10月現在Shadowverseがある。アタシの戦闘力が文字通り火を吹くぜ!』

『胡乱なことを言っておりますが試合は続行します』

なんだか今聞き捨てならないことを言ってる気がするんだけど?

三女神様これスルーして大丈夫なやつ? 真偽は不明。テキトーなことを言っているだけかもしれないし、そうではないかもしれない。というかイクノこれで即続行の判断下せるの敏腕すぎない?

「チヨ先輩」

「なんですか?」

「これ完全にぼくらのが悪者じゃありません？」

「……『ターフに善悪の境無し』です！」

さて。

「ストライク！ バッターアウト！」

「ぬああああああ!!」

『おい何やってんだー!!』

さつきよりもストライクゾーンが広がった結果、比較して入れやすくなり普通にアウトを取られてしまった。

当のゴルシ先輩から野次が飛ぶあたり、ある意味オチがついてオイシイ状況ではあるのだが。

『三番、オグリキャップ』

③ オグリキャップ 「サード」

飲食費がかさみすぎてトレーナーが会計士の勉強を始めた。

オグリ先輩が打席についたところで、観客席から大きな歓声が上がった。

流石オグリ先輩。引退後もドリームトロフィーで活躍してるおかげで、人気は未だ衰え知らずだ。というか、人気が完全に定着してるど表現した方がいいかもしれない。

「ここはタマの分まで私が頑張ろう」

「タマモクロスさんの分まで……ということとは、二番の役割として送りバントを——」

「いや、ここは普通にヒッティングで」

「ストライプ、何で？」

「細かいこと考えるより思う通りに楽しんでくれた方がオグリ先輩には適していますから」

あと、そもそも観客の皆さんはガチガチの戦術のやり取りを見に来てるわけじゃない。そういうのはプロ野球の領分だ。

送りバント自体が難しいのもある。下手に構えただけでは勢いを殺しきれずにゲツツーコースに行くだろうし、何より当てるのが難し

い。だったら普通に打つ方がいいのは間違いない。

——で、結論から言うと、オグリ先輩は難なく理想的なライナー性のセンター返しを見せた。

これでワンアウト一、三塁。得点圏に送ったところで、次のバッターは四番、こちらの主砲だ。

④ ヤエノムテキ 「外野手」

格闘ゲームに熱中しすぎてレバーを破壊。明鏡止水の域は遠いと本人談。

そこはかとなく感じる不安感は胸に押し込めておく。

「よろしくお願いします——押忍ッ!!」

「気合入ってますね〜」

ああ、いけない。スカイ先輩に気合の入り過ぎを気取られてる。

生真面目なのが……悪い方向に働いているとは言わないけど、これはどうなるか分からないな。

一球目、二球目はタイムングを合わせるために空振りで見逃しですトライク。そして三球目で構えを取ったところで——。

「おや、子供さんも来てるんですね」

「ん——あつ」

あ、やつべ。

ヤエノ先輩は可愛く小さく、庇護欲を掻き立てられるものに対して非常に弱い。それでパワーを発揮するケースもあるけど、多くは力み気味で適切な力加減を保つことができてない。結論から言うと、力みすぎによる空振りだ。

「ささやき戦術とは……!」

「まあスカイ先輩ならやるか……」

多分ぼくでもやる。通じるかどうかは度外視して。その方が面白いから。

それにしたって、通じる相手を見定める手腕は流石だ。

「あつちがやると思うなら先言つといてや、っていうのは野暮か？」

「先にやると言われて対処できます?」

「アカン、ドツボにハマるやつや……」

言っても言わなくても、知ってても知らなくてもハマてくるのがスカイ先輩の怖いところだ。

いや、そこはそうなるように仕向けている、と言うべきなのだろうけど。ぼくも度々参考にさせてもらってる。

これでツーアウト。

『続いて五番、ハリウッドリムジン』

⑤ ハリウッドリムジン 「ファースト」

免許を取得。身長のせいで乗れる車が少ないのが悩み。

「よろしくお願いしマス」

しかし、元から分かっていたことだけど、デカイ。ドーナッツ先輩と比べると更にその辺がわかりやすく浮き彫りになる。

それは同時にストライクゾーンが、下手をするとドーナッツ先輩と比較すると倍ほどの大きさになっているということでもあり……五番になったのも、それらを原因とする多少の不安定さからだ。

しかし、パワーだけを見れば間違いなくチームトップ。ヤエノ先輩と方向性こそ違うが、当たれば飛ぶ主砲には間違いない。

「そういうえばストライプ、オグリさんの時も思いましたが、あなた指示とかしませんの?」

「監督でもないんだししないよ。というかマックイーン、ぼくのこと過大評価しすぎじゃない? 野球は専門外だよ……」

「てつきりあたしはそういう知識も仕入れてるもんだと思っただけどねえ……」

仕入れてると言ってもせいぜい漫画知識だ。普通にテレビ中継とかで試合見てる人の方が遥かに詳しいと思う。

アドバイスできることがあるとすれば、何だろう。作戦の仕掛け時とか、虚の突き方とかだろうか。

試合の方は——まず一球目、ボール。球威は良いが、厳し目のコー

ス突きすぎだ。二球目もボール。

これはストライクゾーンに入れたくても入れられない——言葉だけだとドーナツツ先輩と同じだが、ニュアンスはかなり違う。物理的にストライクゾーンに入らないのがドーナツツ先輩。リムジン先輩のそれは、フィジカルが凶抜けているため「ストライクゾーンに入ると打たれそう」という心理的な圧迫感が原因だ。

テイオーが不満顔なのを見るに、際どいコースを指示してるのはスカイ先輩かな。タマ先輩に目配せすると、スツとリムジン先輩にサインを送った。

「なんですか？ 今の」

「そろそろ甘いコース入りそうなので」

「なんなんですか、その読みは……」

「あ、本当に甘いコースに」

『打ったあああ!! ここで痛恨の直撃イ! こりやあデカいぞお!』

「……指示できてるじゃありませんの!？」

そう言っても多分このくらいはマックイーンでも予測できる。一回既にフォアボールを出している現状、テイオーは何度もフォアボールを出すことは避けたいはず。スカイ先輩が大局を見て際どいコースを要求しても、「そろそろストライクを入れたい」という気持ちで勝って、指示に対して首を横に振ってしまうわけだ。

大きい、が、ホームラン……は無さそうだ。だいたい外野ギリギリ、ライト深い位置。ターボが全力疾走で追っている。

「うりやああああああああ!!」

「ターボさん、こつちに投げなさい!」

「わあかったあ!!」

『中継——できてなあい! あらぬ方向に大暴投ツ!』

「ちよつとおお!!」

中継としてセカンドのキング先輩に投げてもらおうという指示は的確だったが、応じられるかは別問題だ。狙ったところにものを投げるというのは相当難しいことで、何ならターボじゃなくても同じことが起きることは十分ありうる。

——が、今回のそれは更に想定と違った。暴投だと思つて速度を上げたリムジン先輩を追い越すようにして、ターボの投げた球は吸い込まれるようにしてサードのエル先輩のグローブに収まったのだった。ウマ娘の筋力は桁外れだ。暴投でもその速度は相当なものだった。「ケ!?!」

「……A h……ア……」

走り出したウマ娘は簡単に止まれない。下がりにくく、リムジン先輩はそのままエル先輩にタッチされアウト。まさかの珍事に、会場は大いに盛り上がることとなった。

春のファン感謝祭イン野球（後編）

……さて、今度はぼくらの守備の番だが……ぼくがキャッチャーマスクを被った途端、嫌な顔をする先輩たちの姿を見かけた。ひとつ言わせてもらおうと、スカイ先輩がキャッチャーやるのも大概やぞ。

『一番、ツインターボ』
「いづくぞおー！」

① ツインターボ 「外野手」
最近ウマ仙人と遭遇した。

さて、一番は大方の予想——と、あと多分本人の希望——通り、ターボだ。

バットのスイングも様になっている。バッティングセンターに行くなどして練習したのだろう。

こちらのピッチャーは、元々多少の経験があるライアン先輩。これはほぼ満場一致で決まっていた。オグリ先輩案もあったけど、当のオグリ先輩自身が辞退したのでその辺は頓挫した。

（さて、どうやってアウト取っていいのかな……）

野球でアウトカウントを重ねていく方法は主にふたつ。三振にするか、打たせて取るかだ。

ライアン先輩の場合、向いてそうなのは前者。聞きかじりの知識だが、緩急を使い分けるのが三振を取るコツ、だとか。

じゃあ、最初は緩い球を見せるためにボールに……。

「うりゃあああつー！」

「え」

「あつ」

「はっ」

『打ちに行つたあー！』 だがコイツは当たりが弱いなあ!? いや、な

んかイイとこ転がつてんぞ?!』

……ターボがセオリー通りに行動するわけがないってこと失念してた!

ボールになってしまおうような球を振りに行つて、結果はコロコロ転がる程度のごろ。だけど、いい具合に虚を突かれたおかげで皆の反応が残念ながら遅れてしまっている。

ターボはもう、当たったと思つたら即座に走り出してるし……。混乱を鎮めるためにも、ここは一旦墨に出すだけ出しておこう。

『二番、セイウンスカイ』

② セイウンスカイ 「キャッチャー」

魚拓が大きすぎて同室から苦情。

続いてのバッターは、なるほど。小技使いのスカイ先輩が来たか。二番バッターとしては最適なのだろう。

「ふっふっふー。どうかな? この奇策」

「してやられましたよ」

なるほどね。一番バッターでターボ、というのはいこうやって浮足立たせるための手段でもあるわけだ。さっきのささやき戦術といい、カマしてくるなあ。

ライアン先輩が不安そうな表情を向けてくる。うくん……まあ、実際読み勝負となるとやや分が悪いし……よし、仕込み発動。ぼくは一つサインを送った。

さて、一球目はボール。二球目、ストライク。ここまではポンポン取つていった。続いて――。

「ありや?」

読みを外してストライク。よし、うまい具合にいった。

更に続いてボール球を空振らせて、三振。スカイ先輩は思いつきり首をかしげているが、これ、理屈は簡単だ。単にベンチのイナリ先輩に代わりに指示してもらっただけである。

ちよつと考えれば分かることだが、逆に言う「ちよつと考える」余

裕が無い限り容易には見抜けない。

時間的な問題と運動量による負荷を鑑みて、野球の試合は5回までしかやらないという事情もある。打順は回ってもせいぜい3回。その間に完璧な対処ができるようになるかというのは——ちよつと非現実的だろう。

『三番、スペシャルウィーク』

③ スペシャルウィーク 「外野手」
利き牛乳を外して二日寝込む。

「よろしくお願いしますー！」

ここからクリンナップだ。相手はスペ先輩。

うくん……レースでもないし、実力は完全に未知数。定石どおりが一番堅いな。

冒険する理由は無いらしい、まずは緩いカーブから……ボール。次は速球でストライク。

ふーむ。

「そういうえばスペ先輩、スズカ先輩が留学してからちゃんと朝起きられてます？」

「うっ……せ、セイちゃんに、ストライプさんの話には乗るなって言わ」

「ストライック！」

「あぁーっ!？」

「こすい！」

「こつすい!!」

「惑わされるなってせつかく言ったのに！」

ワハハのハ。

集中力を奪うにしても、タイミングというものがある。

例えばスカイ先輩のように事前にカマしておくのもアリだけど、バットを構えたところで行くのも悪くない。

言葉に惑わされないように注意を受けていたとしても、言葉を返し

た時点で応じちゃってるし、集中も途切れちゃってるんだよね。

仮に何も言葉を返してこなかったとしても、意識を向けた時点で目論見はほぼ達成していると言っている。そして、こうやって注意を向けたところで……。

「ストライク！ バッターアウトツ！」

「なしてえー!？」

ここで速い球を打とうと意気込みすぎたせいで、スペ先輩は遅めの緩いカーブに思いつきり空振ってしまった。

『ここまで皆さん緩急の差に翻弄されていますね。投球技術の巧みさを感じますが、ゴルシさん。どのように対処するのがよろしいでしょうか』

『考えるんじゃないやねえ——感じる！ あ、これマジだかな？』

本当、ゴルシ先輩は時々核心をついてくるな……。

レースと違って、野球はチームスポーツだ。比較すると、スカイ先輩はレース展開などを先読みして状況をコントロールするのが得意な方で、ぼくは他人の心理状態を読んで行動をコントロールするのが得意な方。何も考えないという対策は実のところそれなりに有効だ。

こうやって考えるとぼく自身は個人競技よりチームスポーツの方が向いている気がするがその辺は一旦横に置いておく。

『四番、トウカイテイオー』

「待ってましたあ！」

④ トウカイテイオー 「ピッチャー」

テイオーストップ封印中。世界の注射という注射が全部飲み薬になればいいと発言。

さーて、問題のテイオーだ。ぼくにとつての苦手分野。日常生活はともかく、ことレースなどについては本当に揺るがない精神的モンスター。

普段ならここは萎縮するところだけでも……。

(普段テイオーたちとやり合いたくない理由はガチのレースになると

勝ち目が薄いから。けど今日は野球だし、能力的に引く理由も無いんだよね)

ぼくはあくまで配球指示する立場。ピッチャーはライアン先輩。なーんも怖くないやワハハハハ。

『打ったああー！ こいつは綺麗なセンター返しィ！』

「いつえーい！」

「んゝんゝんゝんゝん!!」

「こんな悔しそうにしてるストライプ菊花賞以来初めて見た……」

クソツ！ 素のセンスがあげつねえ！ 何でウマ娘の身体能力でメジャー級の球投げることができる上にフロントドア打者の体に近い方のボールゾーンから変化してストライクゾーンに入れる技術。とバックドア外のボールゾーンから内側に変化させてストライクゾーンに入れる技術。投げ分けできるライアン先輩の球普通にパカスカ打ってんだよ!!

というかやつぱり長打力不足してるテイオーはバッターとしては三番が適性だろおお!!

『現在ツーアウト一、三塁。続いて五番、エルコンドルパサー』

⑤ エルコンドルパサー 「サード」
メキシコ人と間違えられすぎて最近対応が手慣れてきた。

「申告敬遠ってダメですか？」

『ダメに決まってんだろ』

くつ。実況にいるゴルシ先輩からすらツツコまれた。そりやダメか。エンタメとして良くないわな。

「ふっふっふ……逃げることは許しませーん！ ここはファン感謝祭の舞台。真剣勝負こそファンに求められていることデスからね！」

「一言一句正論……い！」

逃げ場が無い……い！

まあ、結局のところ正面からどうにかするしか無いよなあ……これ……。

エル先輩のレース以外の専門はプロレスだし、パワーはあるけど……って方向でなんとかできないかな。できないか。あのモンジューに認められるレベルの能力だし、動体視力もエグいでしょこれ。

ああ、もうとりあえずカーブから入って様子見……。

「ストライーク！」

「んんっ!？」

「……ん？」

……………。

も一球カーブで。

「ストライーク！」

「あれえ!？」

分かった。エル先輩落差のある変化球にドチャクソ弱いわ。

いや、しかしどうだろう。そういう弱みをあつちのチームのブレインであるスカイ先輩が把握してないわけが無いんじゃないか？ 疑心暗鬼にさせるのも含めて作戦か？

「ちよつとタイムデース！」

そう言うと、エル先輩は打席から出て感覚を修正するように少し素振りをした。

これアジャストしてくるか？ してくるなコレ。ON砲プロ野球のレジエンドO氏を三番に、N嶋氏を四番に据えた某球団の主砲コンビ。で言うところのNっぽさがすごいんだよエヌ先輩。間違えたエル先輩。

よし、ここは釣りだ。

ストレートを高いところへ。ボール。もう一球。ボール。よく見てる。しかし体はウズウズしているようだ。ここらでもう一球ボールゾーンに。ふむ、スイングをしかけて止まったな。焦れてるのは間違いない。

スカイ先輩がいるせいで、こちらは軽い疑心暗鬼にさせられているが、ここはひとつ仕返しとしてエル先輩を軽く疑心暗鬼にさせてみるでしょう。

「決め球行きまーす」

「ケ!?!」

「惑うがよい。ちなみにだが――。」

「ストライク! バッターアウトツ!」

「ううわあー!?!」

「ここで言う決め球とは、ここまで一度も見せていないチェンジアツプである。」

「あのさ、ストライプ……こんなだから、余計にこっちのチームが悪役みたいに見られるんじゃない?」

「悪く見られるのはぼくらくらいですから問題ないですよ」

ライアン先輩の懸念ももつともだが、他のメンバーはヒーロー性が強すぎるのでそういう目で見られる下地がない。となると、まあ悪役になるのは実際に指示しているぼくやドーナッツ先輩あたりになるだろう。

特にドーナッツ先輩は元から悪役演出してきたし、ぼくも手の内明かした段階で害悪戦法と呼ばれてかなり批判食らってアンチコミュニティもあるし。個人宛に会社経由で口汚いお便り^{フアンレター}が届くなんて珍しくもないぜガハハ。

「アタシらみたいなのはアンチがついてこそ一人前つてもんよ。ワハハハ」

「公式動画につくBAD数は勲章つてなもんですなあ。ウハハハ」

さて、今度はこちらの攻撃でバッターはライアン先輩。ある程度経験があるから、実は四番、五番のふたりと比べても相当手強いバッター……なのだが、ピッチャーとして一回投げきった直後のため、結構な疲労がある。今回は凡退で終わってしまった。

「続いては……。」

『七番、サクラチヨノオー』

⑦ サクラチヨノオー 「セカンド」

サクラワンコオーを本物の犬と勘違いされ生徒会から家宅搜索を受けかける。

『散らぬ桜は無かろうと、チヨの桜は枯れず』です！」

「なんだかよく分からないがすごい自信だ」

「散ると枯れるで前後半意味違ちやうやんけ」

「ばつちこーい！」

「チヨノオーさん、逆です。バッターの掛け声じゃありません」

あるあるだよね。知識が無いからとりあえず聞きかじったこと
言っちやうの。

JWCを本当に存在するレースだと思いこんでいたぼくが言うか
ら間違いない。

ちなみに意味合いとしては「バッター打ってこい」が短縮されてな
まったようなもので、現在は野次や挑発を禁止している野球部が多い
こともあつてほとんど死語らしい。

「大丈夫でしょうか、チヨノオーさん……」

「彼女は私達の世代のダービーウマ娘。そう簡単に崩されることはあ
りません」

「これ野球っすよ」

まあプレッシャーをも力に変えられるひとという意味ではそうだ
ろうけども。

そう思つて見ていると、ここぞとばかりにスカイ先輩が動くのが見
えた。

「おや、マルゼンさんが観客席にいるみたいですよ？」

「本当ですか!?! マルゼンさん見ててくださいいよ！」

「えっ」

それは一瞬のことだった。置きに行ったというわけでもなく低め
に投げられた初球を、チヨ先輩は当たり前のようにバットを振り抜い
てライナー性のヒットを繰り出したのだった。

チヨ先輩だからなあ……マルゼン先輩に見られてると思つたら、緊
張するよりも逆に奮起したのだろう。

「策に溺れるのはぼくの専売特許なだけだなあ！」

「挑発やめーや」

「半分くらい自虐じゃあないか？」

もっさもっさとはちみつ漬けにしたレモンを丸のままふたつくらい頬に押し込めたオグリ先輩にそんなことを言われた。

ええい、余計なことは言わないでよろしい。

『八番、メジロマックイーン』

⑧ メジロマックイーン 「外野手」

春天に向けダートトレーニングを重点的に強化中。併走に入ったチームメイトGからは「砂がピンポイントに目に飛んでくる」と不評。

「さあ、ここで突き放して差し上げますわ！」

「ダメな予感がする」

「オイシくない予感がするわ」

「やたら私に対する当たりが強くありません!？」

それは……だってマックイーンって基本的にこう……塩試合しそうな印象があるっていうか……。

絶対撮れ高そんな確保できそうにないっていうか……。

「活躍よりもネタを気にするのやめてくださいまし!」

「ネタが求められてるんだよファン感謝祭なんだから」

ガチでやるならこっちだってカッチカチの塩戦術でやるわい。なんて、ネクストバッタースサークルでぼくは軽くぼやいた。

そして結論から言うとなックイーンはそこそこの綺麗なシングルヒットを決めただけで特筆するようなことは無かった。

「もうちよつとこう……あるだろ!？」

「ヒット打ったのに文句言わないでいただけます!？」

それはそうと思うに、ぼくを勧誘しに来た時とは裏腹に、この場では野球なんて興味ありませんわ、みたいな風を装ってるのにあの堂に入ったスイングに関しては軽くギャグ入ってるよ。

ただこれは平時の態度とセットで語らないといけないから、ファン向けの話にならなくてもどかしいな。

『1アウト、一・三塁。続いて九番、サバンナストライプ』

⑨ サバナナストライプ 「キャッチャー」
四男六女の長女。妹が英トレセン学園に受験で不安感。

「じゃ、それなりに頑張りまー……」

「皆、注意だよー!」

「何してくるかわかんないからね、油断大敵!」

……おい……何でオグリ先輩やリムジン先輩たち以上に警戒されている……?」

見ての通りタマ先輩よりも小さいくらいなんだよぼかあ。そこま
で警戒すること無いと思うんだけどなあ。

「ご覧の通り子供みたいなサイズですよぼく」

「京都レース場のコースに数日消えない足跡残したウマ娘のセリフ
?」

「え。アレそんなんなってたんです……?」

「ストライイク!」

「あ」

「にやはは。みんな警戒しといてー!」

自分でもビックリなんだけど——と思っていると、もう投球に入っ
ていた。あ、ちくしょう。意趣返しされた。

二球目はボール。続けてボール。バットの構えを少し変えて……
もう一球ストライイクで並行カウント2ストライイク2ボールの状態。

スカイ先輩のことだからこっちの予想を外そうとしてくるかな?
となると、五球目は……ストライイクゾーンに入れてくるな。

「よっ」

「!？」

『ごいつは……スリーバント2ストライイクから行うバント。後ろに逸
らすなどしてファールになった場合、通常のファールと異なりアウト
になる。スクイズ三塁にランナーがいる時にバントすることでホー
ムインを狙う作戦!!』

「みんな上がっ……いや違う!」

『しかもプッシュバントだあ!!』

プッシュバント、つまり構えたバットを「押す」ことで、通常のバントと異なり勢いを殺すことなく打ち返す技術だ。バントしてくると思っていた相手の意表を突くことができる。

これを走り出したチヨ先輩と逆方向、一塁側にやることでぼくをアウトにすることで1点取らせるか、既に本塁に手を伸ばしつつあるチヨ先輩に対してイチかバチかでアウトを狙うか、を選ばせる。特にファーストにいるツルちゃん先輩は、更にここでも前に出るかそのままでの位置にいるかの選択も迫られる。ぼくは体が小さいのでタッチアウトを狙おうとしても躲される危険があるわけだしね。

さあ、どうする!?

「ああ、観客席の後ろの方で腕組んでるシブめのおじさんたちが皆して訳知り顔で頷いてる……」

「誰あの人たち!?!」

彼らはぼくの主要ファン層、トリックプレーや変則プレーになにやら一家言あるらしい玄人おじさん、または玄人おばさんと呼ばれている人たちである。

その中でも野球おじさんを併発しているタイプの人達がああいう風に後方で鼻を高くしている。実害は無い。

で、プレーの方だが、ツルちゃん先輩は手堅くぼくをアウトにするに留めた。

既に飛び出したチヨ先輩をアウトにするのを狙うにはリスクが高いので、そうするのが自然だろう。しかし、これでこちらは1点追加。3-0でツーアウト……相当有利な条件だ。

だからと言って勝ったなガハハとできるような圧倒的な得点差というわけでもないのが困る。

実際、ぼくの後に打順だったドーナツ先輩は、ストライクゾーンに投げ込まれたのを焦って打ちに行つて凡退。追加得点とはならなかった。

さて、続いてはあちらのチームの攻撃だ。トップバッターは……。

『六番、キングヘイロー』

⑥ キングヘイロー 「セカンド」

ネタで投稿したお料理動画クツキングヘイローが100万再生を達成。名実ともに一流動画投稿者に。

「さ、キングの打撃を見せてあげるわ！」

「さつきいい守備見せてくれたんだから加減してくださいよー」

「それとこれとは話が別よ！」

さつきのドーナッツ先輩が凡打になったのは、キング先輩が原因だ。凡退とひと口に言っても、実際のところ打った球自体は二遊間のイイ感じのラインに行ってたんだ。

キング先輩はそれを見事に横っ飛びキャッチ。アウトにこそなったが、おかげで全身土まみれ砂まみれでドロドロだ。その捨て身さと思わず尊敬の度合いを深めたが、今は勝負中なのでそれどころではない。

「専門外のスポーツでも輝くほどの才能を發揮するウマ娘の名前は？」

「キング！」

「ヘイロー！」

「……………敵チームのあなたが言っちゃダメじゃない！」

「あ……………つ、つい……………」

応援のネコちゃん（仮名）ネコ目のウマ娘たちに続いていつものようにキングコールに加わってしまった。

じゃあコール始めないでくださいと思わないでもない。ついやっちゃうんだから。

……………ま、勝負とこれとは話が別だ。アウトを取らせてもらいに行こう。

一球目を外さずストライク。二球目にボール。三球目、変化球で空振りストライク。次はボールで焦らせる……………と、可能な限り見せかける。こちらが慎重策を取ることが多いというのは知っているはずなので、ここでひとつ隅のストライクゾーンとボールゾーンの境目あた

りに投げ込むように……。

「ごー！」

「むっ!？」

逆にそうした狙いを見透かされていたのか、キング先輩は狙いすましたように追っつけてボールを打ってみせた。

もつとも、やや変な姿勢で打ったこともあつてか、その弾道はゴロのそれだ。

しかし……。

「あっ!？」

『ここでイレギュラーイレギュラーバウンドのこと。石やベースに当たるなどして通常とは異なる跳ね方をする場合を言う。！うわ、すっげえ変な方向飛んでる』

近くに石ころでもあつたのか、それともウマ娘特有の筋力で深めの足跡でもついていたせいか、チヨ先輩がキャッチしようとしていたボールはあらぬ方向に飛び上がってしまった。

思い返すとあそこ、キング先輩がさつき飛び込んだ場所に近かった気がする。そう考えると自分で引き寄せた幸運と言えるかもしれない。

というかそうとしか言えないんだけど。狙ってイレギュラーバウンド起こせるなんて野球漫画でもないと無理でしょ普通……。

『七番、グラスワンダー』

⑦ グラスワンダー 「ショート」

とっておきの玉露に合わせようとした大福がきんつばに変化した。

続いて七番はグラス先輩。

「この打順詐欺でしょ」

「……ストライプちゃんがそれを言うんですか？」

そんなことはないですよ。パワーの云々と言いつつも主には脚力なので。

しかしグラス先輩、やたらスイングが鋭い。どうするんだよコレ隙

が見えないぞ。

なんかレースでも同じようなこと思ってた気がするう……。

「そうですね……確かに、エルのように簡単にはいかないつもりですが」

「なにやら酷いことを言われている気がしマース！」

「言うほど簡単じゃなかったですよ……」

偶然見え見えの弱点があっただけで、普通にストレートを投げ込んでいたら多分ホームランになっていた。そういう迫力がある。

その辺はグラス先輩も同じだけど、さてどうしたものか。まずは投げてもらって考えるか。

一球目はカーブからボールゾーンに入れてもらって……。

「！」

「ストライーク！」

「あら」

え、怖。

何でこのひと初球から振っていったんの？ 完全にぼくが変化球要求するの読んでない？

……いや、本当に読み負けているのか？ グラス先輩ってそんなにガチになって思考読みにくるタイプじゃないだろう。むしろ……。

少し考えて、ぼくはライアン先輩へ「好きなように投げてほしい」というサインを送った。

次の一球、ど真ん中ストレート！ は、打ち損じのファール。続いてストレート、これもファール。

思った通りだ、グラス先輩は勝負ごととなると相当燃えるタイプ。多分、今求めているのは投手を相手にした一対一の果たし合いだ。チームスポーツなのに。

だから基本ぼくのことには気にせず、ボールが来たままを打っている。当然揺さぶりなんて動じない。逆に言うと、純粋に高スペックな球を投げられると弱いということだ。

「っ！」

ライアン先輩の速球のおかげで長打にはならず、一、二塁。ぶっ

ちやけ今はこれで抑えるのが限界だろう。

『八番、ツルマルツヨシ』

⑧ ツルマルツヨシ 「ファースト」
麺類から呼吸器に執拗に攻撃を受ける。

……おや、アナウンズがかかったのにツルちゃん先輩が出てこない。
い。

いや、なんかBGMが新たにかかってきた。なんだこの演出!?

「ツルは千年カメは万年……ツヨシは人生五十年……」

「何で今敦盛突っ込んだ?」

「ここで一つ、ツヨシ、一花咲かせてみせます!」

ツルちゃん先輩さては年始の例の特番好きなひとだな?

さあ来い! と見せたフォームは、テイオーのそれと似ている。なにかと親しいっぽいし、参考にしたのだろうか。

ともかく、まずは第一球——投げた。打った。と思つたらツルちゃん先輩は肘に当たった自打球で悶絶していた。

大丈夫かコレ。いや大丈夫じゃないなコレ。

「ツヨシがやらかしましたね」

「セイちゃん!」

結論から言うところの打席、ツルちゃん先輩は凡退に終わってしまった。
た。

が、何やかや一、二塁にいたキング先輩とグラス先輩はそれぞれ二、三塁に進んでワンアウト。ここでバッターは……。

『九番、ニンジャスナイパー』

⑨ ニンジャスナイパー 「外野手」
こしあん派だがつぶあんも嫌いではない。

いや々な打者が来た。

レースでもトリックプレーはお手の物、マジ忍術を使うこともあ

る、ある意味ぼく以上に何をやらかすか分からないのがスナイパーⅡサンだ。

それにしても姿が見えないな。どこ行っただら。

「どこを見ているのだ。ワタシはここだ」

「アイエエエ!?!」

虚空から突如現れたかのように見えたスナイパーⅡサンにより、ぼくはN^{ニンジュツリアリテイシヨック}R Sを発症! 害悪シマウマは哀れ恐慌状態に陥った

! ナムサン!

「フフフ……カラテが足りぬぞストライプⅡサン」

「マスク剥ぎますよ」

「ゆるして」

これしきのことで揺るがされるとはチャドーが足りぬぞスナイパーⅡサン。

しかし指差されて煽られればちよつとイラツとして反撃食らうと思わんのだろうか。

さて、問題は何をしてくるかなんだよなあ……まさかN I N J U T S Uを使ってくるとはあんまり思いたくないが……。

一球目——バントの姿勢!?

「オヌシの技を使わせてもらおうぞ」

『いきなりスクイズだああー! しかもプッシュバン……』

『各内野手動いていません。そのままホームに投げてアウト。ツーアウトです』

「ワツザ!?!」

「警戒されていないのにプッシュバントしてもただのゴロでしょ!?!」

問題点はだいたいキング先輩の言うとおりである。そもそも何してくるか分かってない状態なのだから、意表を突くなら初手でバントするだけで十分なわけだ。

そこでなぜか相手の予想を外し裏の裏をかくためのプッシュバント。意趣返しのもりだったのだろうか、使い所を完全に誤った形になってしまっていた。

「あのウカツなところはスナイパーだわありや」

ドーナッツ先輩から酷い言い草が飛んできた。

……いや言わんとすることは分かるけども。

ともかくこれでツーアウト。初球打ちしてくると分かればさつきのような奇襲にはならず、ターボがアウトになってこの回はチェンジとなった。

三回は流石にテイオーも慣れてきたからか、大きな番狂わせも起きず三者凡退でチェンジ。三回裏では反対にこちらの配球を読まれ、2点を奪われる結果になった。

そして四回。先頭バッターのリムジン先輩が三振で抑えられると、続いてはライアン先輩の出番だ。

⑥ メジロライアン 「ピッチャー」
入場曲をキン肉マンにされかける。

さつきと違って今度は一人分の打撃時間が間に挟まれたこともあって、いい感じに疲れも緊張も抜けている。いけるかなあ、と少し思う。同時に、あとひと押し欲しいなとも思う。

うーん……絶妙なところだ。

「頑張れライアンせんぱーい！」

「ファイター！」

おや。流石、学外のファンのみならず、校内の後輩たちも一緒になって声援を送っている。

それだけじゃない、どうやら声援を受けたライアン先輩はいい感じの力具合になっているようだ。ベストなコンディションと言って間違いないだろう。

いやあ、声援を力に変えられるウマ娘ってやっぱりいいね。同じレースで走るのは勘弁してほしいけど！

そろそろテイオーも疲れが出てきつつあるはずだ。甘い球のひとつも投げてきておかしくないはず……。

第一球、投げた！

「やあっ！」

「あ!？」

『打ったあ! こいつは大きい! 入るか、入るか——入った! ホームラン!!』

やるかもしれないとは思っていたけど、まさか本当にやってのけるとは。これには会場も大きく揺れた。

なぜかマックイーンが腕を組んでうんうんと頷いているが、キミ次の次の打順なの覚えてる?」

「じゃ、続けて行ってくるでい!」

『七番、サクラチヨノオーに代わりまして、イナリワン』

⑦ イナリワン 「セカンド」

陣中見舞いになり寿司を持っていくこと考えてしまい自分のセンスを疑い始める。

さて、続いてイナリ先輩の出番だ。これでチームの平均身長が更に低くなった。図抜けてるリズムジン先輩がいるおかげで平均150cm半ばくらいはあるけど。

イナリ先輩はぼくよりも大きいけど、タマ先輩とほぼ同じくらいの身長だ。代わりに、元々は主にダートを走っていたせいか体格がガツチリしていてパワーがある。連続ホームラン、とまでは流石にならないと思うけど……。

しかし素振りがやけにアッパースイングだな。当たったとしてホームランかフライかってくらいの飛び方にならない?」

『第一球、投げた』

「てやっ!」

「うわっ!」

一球目を打った! しかしファール。ただ、軌道は綺麗な山なりですごい勢いで打ち上がっている。

打たれたら持っていられる、というのが視覚的に分かる。警戒を植え付けるには十分だろう。

『ファールボールに「注意ください」』

「キャロットジュースいかがですかー？」

今アイネス先輩の声しなかった？

……ともかく、次の球は続けて二球ボール。そして四球目。

「あっ！」

『打った、だがこれは大きなフライ！』

「フライ？」

「オグリは黙つとれ」

いかん。試合終了後に揚げ物屋が全滅することが確定してしまつた。

ん〜……しかし、ライトへのフライか。ライトへの……ライト？

「あ」

「ターボおお!？」

「走りやイナリい！」

「お、おう!？」

フライを取る練習をしていなかったらしい。ターボはバンザイ状態でボールを取りこぼした。

結果、ライトのエラーが記録されワンアウト一塁。流石にそろそろ時期も良い頃だと思つたのか、ここでターボがネイチャと交代した。続くマックイーンは三振。更に続いてぼくの番だ。

⑨ サバンナストライプ 「キャッチャー」

ケニア発売のトレーディングカードで高額取引されるレアカードに指定される。

——が、打席に入った直後にそれは起きた。

「左で打ちなよ……」

「ええ……」

予想外のささやきである。

いやいやいや……。

「ぼく素人ですよ？ 左でなんて打とうとしたらどうなることやら……」

「いやあ左で打つ練習してるの見たよ？ リードしてるんだからさあ……打つちやいなって」

「ヤな精神攻撃だな。」

「いや大して通用してないんだけどねこのくらい。このくらい。」

「次代のトリックスターなんて褒められちゃってるのにさてはスイツチもできないんだな？」

「やってやろうじゃあねえかよお!!」

「今の一瞬で知能投げ捨てたな」

「あいつレース辞めてもいっぱい仕事あるやろな」

「タマ、もうストライプは仕事がいっぱいあるぞ」

「せやったわ。なんなんあいつ」

「できるかどうかはやってみないと分からん！」

「試してみようじゃないかさあ来い!!」

『一球目投げた!』

「しゃあっ!」

「えっ!？」

『打ったああー! 左中間真つ二つー!!』

素人が左で打とうとなんてしたらどうなるかとは言った。

打てないとは言っていない。

「やっぱりの子の体格であのパワーは詐欺じゃありませんの?」

「それがレースに必ずしも繋がってるわけじゃねえから別にいいだろ」

「いえ今話してるのはそういうことではなく……」

エレファントパワーとジラフパワーを継承すればこうなれるよ!

だから皆もあの継承を経験しよう。

しろ。

ぼくと同じ混乱を抱け。

……恨み節は置いといて、その後ぼくがホームに帰ってこれてとりあえず更に2点追加。対して、裏の攻撃。打順を変更したテイオーのチームはそれが功を奏し反撃で更に2点を返して7―4。そして打順は回り――。

『打順代わりまして二番、ナイスネイチャ』

② ナイスネイチャ 「外野手」
おつまみをつまみすぎて塩分過多。出汁の効いた味とは塩分が無いわけではないことを知る。

「おー……プレッシャーでお腹痛い……」

ツーアウト二塁。得点のチャンスにネイチャの打順が回ってきたのだった。

「気を楽しにして行こうよ。別にこれで負けても何かあるわけじゃないし」

「リードしてる方は余裕かもだけどさあ……」

「余裕大事だよー。別に仕事じゃないんだからさ」

「え？ ん？」

「んえ？」

やり取りの間にも、ネイチャがなかなか集中を切らしてくれないもののカウントは重ねている。さて、これで決まるかと思ったその時、さっきまでのやり取りを思い返しながら、ネイチャは軽い感じで一つ返してきた。

「なんか言いたいことちよつと違うかもだけどさ、アタシたちにとつてはこつちの方が仕事じゃない？」

「——え？」

その瞬間、頭が真っ白になった。

それと同時に球が投げ込まれ——あ、と思った時にはもう遅い。ネイチャはバットを振ったが、ぼくは後ろにボールを取りこぼしている。振り逃げ成立だ。

「ほあ!？」

「やば……!？」

まさかの事態に反応が遅れたぼくに、まさかの事態に反応が遅れたネイチャ。グツダグダの攻防の始まりだ。

結論から言うところではアウトは取れなかった。何より一瞬上の

空になっていたのが良くなかった。ウマ娘にとってみれば十分すぎる隙……一応は走る体勢になっていたのと、上の空になっていた状態から回復して走り出すのでは相当な差がある。

……そんなわけで一、三塁。慣れてきたスペ先輩に打たれて2点が入りチェンジ。

次の回はこちらのチームが点を入れられず、最終回。エル先輩の同点ホームランが最後の得点となった。

7―7の同点引き分け……これが本当の試合なら渋い顔の一つも出そうなものだが、あくまでエキシビジョンであるためこれはこれでヨシ、というところだろうか。

——そうした一方で、ネイチヤとのやり取りはぼくの心にしばらくトゲのように刺さり続けることになった。

高地トレーニング

「ストライプが行方不明になりました」

定例のトレーニング日——ではない、自主トレーニング日。トレーナーに呼び出されたセイウンスカイとピーピードーナッツは、唐突にそのような話を聞かされた。

「あいつ自主トレの日はしよつちゆう行方不明になりやがるじゃねーか」

「正直、かなりいつものことですよ？ サブ……っと、トレーナーさん」

しかし、セイウンスカイたちにとって、その程度のことは今更の話だ。

サバンナストライプは、自主トレの日に必要なトレーニングを終えて自分の時間を確保したり、休日になると、仕事の取引などのためにあちこちを駆け回っている。友人と遊んでいたりすることもあるが、ともかくトレーニングをしていなければ学園内にいないことが多い。彼女と親しいウマ娘たちからすれば大して気にしていないというのが実情だ。

どうしても必要なら電話をすればすぐに通じることもあって、心配することも無い。

もつとも、金城梨紗キンシャリボーイもそれを把握している。普段であればこのようなことは言わないと嘆息しながら、彼女はそつと一枚の紙を差し出した。

「このような置き手紙がトレーナー室にありました」

「ん？ なになにー……『自分探しの旅に出ます。探さないでください。夕飯までには帰ります』……何これ？」

「プチ家出ですらないじゃねえか何だこのみみっちい手紙は」

「電話は？」

「電源を切っているようです」

「ナイーブな女子中高生じゃねーんだぞ」

「15歳ですよ」

「……今一瞬マジで忘れてたわ……」

「チーム内であなたたちが知らないとなると、他に心当たりもありませんね……スナイパーは……こういう時あまり頼りにはなりません」

同室のハッピーミークなどは知っているかもしれないが、梨紗とはほとんど関わりがないため改めて聞くというのも難しい。加えて、このような置き手紙を残した以上、そもそも誰にも行き先を告げていないことがありうる。無駄に計画性が高いのがサバンナストライプというウマ娘である。夕飯までに戻ると言うなら確実に夕飯までに戻るだろう。

そういつた部分で抜かりがないからこそ、会社経営とレースと学生の三足のわらじを履いてなお結果を残すことができているのだから。

「ほっときやいいだろ。晩飯までに戻るんだから」

「今の私はチーフトレーナー、チームの責任者です。こんな手紙を見てしまった以上、もしものことを考えて行き先を知っていないと問題になるんです……」

「大変ですね〜」

にやはは、と一見脳天気な風に見せるセイウンスカイだが、急にいなくなるといふ意味では彼女もそう大差ない。逃げ出すクセのあるニンジャスナイパーと併せて、下手な逃げ方をすればこの新人チーフトレーナーの胃に穴が開くことが容易に推察できて、背筋に一筋の冷や汗が伝った。

「しかしあいつがそんなことまで予想できないもんかね」

「まあ、たしかにちよつと考えれば分かることですけど……あ、裏に追伸が」

「はっ」

『P. S. 居場所を把握する必要がある時は位置情報アプリを使ってください』

「あ、あッ!!」

「落ち着けトレーナー!」

梨紗は思わずその場に帽子を叩きつけた。

「気の回し方の！ 方向性が！ 違う!!」

「耳、トレーナーさん、耳」

責任を負う立場になっていろいろなものに限界に達して思わず激した梨紗に対し、ピーピードーナッツは平然とアプリを開いてサバんなストライプの位置を特定した。

それと共に軽く首を傾げる。確かにサバんなストライプはことあるごとに知能を溶かして奇行に走るからこそあるが、よりにもよって春の天皇賞が迫っている今の時期に無駄なことをするほど愚かでもない。仮に商談があるとしても、わざわざ自分探しの旅などという胡乱な言い訳など使わないだろう。

「見つけたぜ。でもなんであいつ長野の山ン中にいるんだ？」

「は？」

「長野？」

——サバんなストライプの位置情報は、彼女が今府中から遠く離れた長野に示していることを示していた。

・・・≠・・・

長野は日本でも数少ない、高地トレーニングが行える施設がある県のひとつだ。

ぼくはそこに設けられたウマ娘用のコースで、かれこれ数時間ひとりで走り続けていた。

標高にして1750m。ケニアの故郷に近いこの環境で走っていると、心地よさと同時に小さな飢餓感に見舞われる。

長く、長く、何も考えずに走っていると、余計な感覚が徐々に削ぎ落とされていく。

あのファン感謝祭の日、ネイチャに言われたことはしばらく頭に残り続けていた。

——アタシたちにとってはこっちの方が仕事じゃない？

その言葉は、ほとんどのウマ娘とぼくの中にある意識の違いをより

明確にしていた。すなわち、走ることを目的としているか、手段としているかだ。

……もちろん、自己実現のために走っているひとも少なくはない。カレンは「カワイイ」のために走っているし、タマ先輩もお金のためと公言している。けど、それらはあくまで始点だ。がむしやらに走っているうちに走り競い勝つことそのものに思いを馳せ、やがて重ねた成果とそれによって積み上げられた矜持によって、レースをすることそのものに大きな意義と価値を築き上げていく。

(ぼくはまだビジネスとしてレースを捉えてる)

だからこそ、咄嗟にレースを「仕事」として——ファン感謝祭のようなそれ以外のイベントを「余暇」のようなものとして捉えて発言してしまった。

一着を逃した。でも、お金が貰えるからいいか。

周りが強すぎて勝ちの目が見えない。まあ、それでもお金が貰えるなら問題ないか。

強いストレスに対する心の自己防衛機能もあるだろう。一線を引いて「これは仕事なんだ」と捉えることにすれば、何事に対しても許容できる範囲が広がる。

——それは同時に、何事に関しても諦める範囲が広がるということでもある。

身体能力だってそうだ。限界値を定めてそういうものだと思って、それ以上があるとは考えてなかった。だからこそ、制約の中で勝つための思考力を養ったとも言えるのだけど……今はそれが枷になっている。

このままでも勝てるは勝てるだろう。少なくともそれだけの研鑽を積んできたし、策も練ることができる。けれど超一流どころが集まるレースでは……分からない。

だから、自分の根本を見つめ直すため、無心になるために走り続けることにした。

(しかしマズいな。全然頭空っぽになる気配がない) させて。

そもそも、こうしてわざわざ学外のトレーニングコースにやってきたのは、負荷なんかの諸々の事情を考えずにただ走って走って疲労の極地に達することで、余計な考えを一旦全部抜いてしまうためだった。

しかし冷静に考えてみると分かるのだが、ぼくはトレセン学園の中でも有数の体力自慢だ。ちよつと息を入れようものならすぐ回復してしまうし、マルチタスクを鍛えたおかげで走っている最中の思考もより明瞭になっている。ぶっちゃけ全く思った通りの結果になってくれていなかった。

……このままがむしやらに続けても、ただ脚に疲労を蓄積してしまっただけに終わるだろう。せっかく高地トレーニングができるような環境にやってきたのだから、もうノルマのトレーニング終わらせて今日はもう帰った方がいいだろう。

小さな落胆とともにそう判断すると、まずはクールダウンのために徐々に速度を落として野外コースから整備された側へと戻ることになった。

「待っていましたよストライプ……！」

「えっ」

戻ってみるとなんかいた。

身長はだいたい160cm半ばで服装はジャージ。普段から圧力をかけてしまっているせいだろう、ウマ耳がやけにへにやっているのが特徴的だ。が、それ以上に目を引くのは、なんか変な粒子でも出しているのかと思ってしまうほどキンキラな毛と、恐らく顔を隠すために装着しているらしい紙袋だ。

言うまでもなく梨紗トレーナーである。

見なかったことのできねえかなこれ。

できないだろうなあ。

周りの人の視線が痛い。

「何してんすかトレーナーさん」

「今の私はトレーナーではありません。私は——……………」

「そういうことするなら何で先に偽名用意しておかないんですか」

「……マスクドお寿司！」

「ダッセ」

あつ、ガチ凹みしてる。

今即興で考えただけの雑な名前で何でここまで凹めるんだこのひと。

「ところで何の用すかお寿司マスク」

「恐らくあなたが的外れなことをしているのではないかと思って来たのです」

うぐ……変なところ鋭いな。いやしかし、何でそれを察知できたんだろう？

「不思議そうな顔をしています、あなた結構読みやすいですよ。今回の件にしても、数日前からなにやら悩んでいるようでしたし——何らかの後ろめたさがあるからこそトレーナー室に置き手紙など残したのでしよう。そう推測できれば、黙ってオーバーワークでもしようとしているのだらうとわかります」

「それはそうだったんですけど……」

「どうせ悩みを解消しようと思つて疲れ果てるまで走つてやろうなどと思つていたのでしよう」

何で一言一句当たつてるんだよ。

多分これだと、結局それで体力有り余つてるせいで失敗したつてところまでバれてるんだらうな……ぼくのスタミナのことよく知ってるわけだし……。

「あなたではスタミナがありあまりすぎて無理です」

「うぐう……客観的に見てもそうですか……」

「ですが唯一、あなたが体力を使い切る瞬間があります」

「と言うと？」

「レースのゴール直後です」

そう言うのと、仮面オスシーは軽く準備運動を始めた。

……この姿勢にこの勢い。よもやこれはやる気なのか？　ここで？

「そういうわけで——私とあなたでレースをしましょう」

「……ウソでしょ?」

「大マジですよ」

え、ええ……!?

そりやあなた確かに咄嗟の時の速度すごいし、下手すりやOP戦くらい勝てそうなスゴ味があるけど、じゃあ現役選手に対抗できるかって言うとなんて難しいだろう。

そもそも普段デスクワークばかりだし、レースから遠ざかって……10年以上? 流石に勘も鈍ってるはずなんだけど……。

「引退して10年以上も経った相手に負けるのが怖いとか?」

「やってやろうじゃねえかよお!!」

「あなた実は沸点低くありませんか?」

高地にいと気圧差の関係で沸点低くなるんだよ! ってやかましいわ。

ともかく、そういうアレコレを抜いても、単純に今この状態が手詰まりなのは事実だ。挑発というか意図に乗っておくのも悪くない。

こちらは幸い事実上アップが済んでる。よっしゃ、と気合を入れて軽くスタートの構えを取ると、不意にハリボテボーイが頭に手を当ててその場にしゃがんだ。

「……すみませんちよつと待っていただけますか? さっきから頭痛が酷くて」

「気圧差ア……!」

ぼくたちの今いる場所は標高2000m少し手前。

高山病にこそならなくとも、悪影響が出るひとがいて不思議はない程度の位置だった。

地の利を得ているぞ

謎（特に謎は無い）の覆面ウマ娘お寿司ウーマンとの野良レースは、まずぼくが先手を取る形でスタートした。

頭痛に気圧差、オマケに顔を隠すための紙袋。慣れない環境のオンパレードな上に、久しぶりに併せで走る事になっているはずだ。ハナを奪えたのもある意味自然なことではあった。

対して、ぼくにとって今の環境はケニアのそれによく似ていて走りやすい。地の利を得ているぞ！

（……読めないな）

ただ、その有利な状況であっても、なにぶんあちらの顔は紙袋で隠れている（流石に空気穴は増やした）ので、見たくても見る事ができない。

動揺が多少でもあるのか、普段どおりなのかさえ分からない。覆面選手と走ることなんて普段まず無いし。

……あー……いや、待てよ。エル先輩も広義で言う覆面選手だ。スナイパー＝サンもメンポつけてるからそうだな。これいないわけじゃないな……レアケースだけど……。

まあ、あくまで「顔が見えない」というくりにしとこう。エル先輩もスナイパー＝サンも表情は見えるし。

そういえば、「ギンシャリボーイ」のレースは見たことあるけど、トレ……マスクドトレーナーの走りってほとんど見たこと無いんだよな。そういう意味でも今回の野良レースは勉強になるかもしれない。そう思っていた時のことだった。

「ふっ——」

「！」

鋭く息を吐くと共に一気に後ろから追ってくる。この100メートルほどは様子見か、はたまたアップの代わりか……いずれにしろスタート直後のそれとは明らかに違う。

しかし、勢いがつきすぎている。このままじゃぶつかってしまうん

じゃないか……!?

——その危惧は杞憂に終わった。ぶつかるかと思われたその軌道は次の瞬間に速度を変えないままに変化し、ぼくを抜き去っていたからだ。

(今のが……!)

本家本元、無減速クロスステップ!

——すごい。

初めて体感した。使い手自体はドーナッツ先輩がいるけど、実際にこの目でオリジナルを見るとその精度が段違いだ。

単純に走りの迫力に押されて本当に激突するんじゃないかと思つたし、コースの変え方もほとんど無駄がない。そして何より特筆すべきは、その「自然さ」だ。常識はずれの技だというのに、梨紗トレーナーはこれを息をするように当然のことのようにやってのけた。

(しかし、それにしたって速すぎる……! 本当にこれが上がりを迎えたウマ娘のスピードか!?)

確かに、本格化が終わったとしても瞬発力を上手く使えばぼくを抜き去るくらいのことではできるだろう。けど、持続力に関してはそうもいかない。本格化が終わってなおぼくよりも最高速度が上だとしても、その速度を維持するために必要なスタミナは桁違いなほどに跳ね上がる。

特にこの分野に関しては、確実にぼく以上のウマ娘はそうそういはいはずだ。いや……しかし……。

……待てよ? 髪がまたまた変色してるってことは、まず間違いないタキオン先輩のアブないクスリをやっているということだ。研究テーマから考えるとこれは……。

「さては体を全盛期の頃に近付ける薬でも使ったんですか!?

「ノーコメントです!」

使ってるじゃん! 絶対使ってるじゃんこれ!

くそっ、ふざけた見た目してるくせにテクニクもフィジカルも最強クラスとかなんて詐欺だ。オマケにT大クラスの倍率と難易度がある中央のトレーナー試験に合格するほどの頭脳まである……なん

だよこれ無敵かよ。

無敵の無敗三冠だったわ。

こなくそ、と声が漏れる。

確かにこの三冠仮面はレジェンドもレジェンドだ。けど、だから勝つのを諦めるなんていうのは嘘だろう。

何よりぼくは今、現役の走者なんだ。ここで「ダメだ」なんて弱音を吐くのは競技者失格だ。挑む気持ちは捨てるな！

先を行くギンシャリボーイはその動作全てが完璧に近いほどに洗練されていた。ひとつひとつの動作にまるで無駄が無く、それ故にほぼ同じ速度で走っているにもかかわらず細かいところで差が生じてしまっている。

どれだけ追っても差を埋められないんじゃないかという危惧があった。なるほど、フィジカル自体は衰えが来てるだろうけど、技術は年を経ることとそれに比例して円熟している。総合力という意味ではその当時と遜色ないほどだろう。当時のウマ娘たちはこの絶望感を相手に戦っていたのかと思わされる。

(上等!!)

ぼくが競わないといけない相手はこれからが本当の意味で最盛期を迎えるメジロマックイーン。大阪杯を復帰戦に選び鮮烈な勝利で飾った、ここまで掲示板を一度も外したことの無いマイル中距離の覇者、シニア期に入って更に成長を遂げたアイネスフウジン。そして、G1戦線で（主にぼくにメタられたせいで）結果こそ残せなかったものの、潜在能力と筋力は随一のメジロライアン。それだけじゃなく、後から才能に溢れたクラシック級の猛者もうじゃうじゃとやってくる。

これで退こうものなら、この先もずっと相手が格上というだけで退き続けることになる。この野良レース、距離は短めに抑えているからここで抜きに行かないと勝ち目も無いし……！

「……」

ちらりと、わずかに視線がこちらを射抜いた。

勿論トレーナーさんの期待通り、動きを実際に見て反芻して学ばせ

てはもらいますとも。けど、学んだところで体格や筋力に差がある以上そのまま吸収はできない。

今はとにかく、「限界以上」を引き出すことを意識する……！
「ふう——」

気圧の薄さはそのまま空気の薄さに繋がる。春先のこの時期の気温と併せて、ひとつ息を吸ったこの感覚はケニアで走っていた頃のそれに似ていた。

だからこそ、この場所を選んだとも言えるのだけど。自分を見つめ直すのにこれ以上の環境というものも無い。ぼくにとつてこの感覚はよく慣れ親しんだものだ。自然と、過去に抱いていた思いや情景が頭に浮かぶ。

木々が生い茂る長野の高原と違うのは、山と言うよりも草原という点だ。降水量が少なく、木々はまばらにしか生えていない。土地もあまり良いとは言えず、走るのに適してるかと言うと……表現を選んでも、「微妙」がせいぜいだろう。

環境も良くはなかったし、生まれもそれほど良くはなかった。なにせ何もかも無い無い尽くしだ。あるのはせいぜい食べ物くらい。それだって気候によって平然と収量が変わる。ぼく——正確にはその「半分」——は、いろいろな贅沢を知っていたから、正直に言つて相当辛い生活だった。何より娯楽が無い。

様々な不便を解消するために必要なものは、何よりお金だ。JWC開催——は、ミークに教えられて初めて知ったことだけど、お金に対して強いこだわりを持ち始めたのはこの頃からだろう。何を欲するにしても、お金が無ければ何もできないと思いついたのだから。レースでお金を稼ぐという発想が明確化してきたのはこの時期だ。

それ以上に、お金があつても解決できないことも多かった。

人の心や価値観は生半可なことでは変わらない。数年前は、最高速で劣る縞毛はレースに向いていないということ、併走の役にも立たないと判断され一緒に走る相手すらいなかった。同じ縞毛でも、やつても無駄だという諦めが強く、付き合ひを持つてくれるひとも極めて少なかった。

例外的に姉妹はぼくに付き合っただけで走ってくれなくともあったが、年齢が年齢だ。併せて走れば長女であるところのぼくが勝つに決まっている。結局、独りで草原を走ることばかりだったように思う。

当時、偶然とはいえぼくを見出してくれたナイロビのトレーナーさんには頭が上がらない。あれから色々なものが変わってきた。

そうなんだよな。ぼくは――。

「ちよつ、待つ……待つて……」

「あ」

今日、ぼくが本来抱えていた目的は、頭を一度真っ白にして自分を見つめ直し、悩みを解消することだった。

結論から言うと体力的心理的両面で自分一人ではどうにもならなかったことで、一瞬でも自分の世界に没入できた現状は期待通りというか、期待以上というか。いや本当にありがたいのはありがたいんだけど……肝心の併走相手であるおコメ仮面はここに来て体力切れでへばっていた。

カーブでもたれて倒れ込みかかり、そこで野良レースは打ち切りと相成った。

髪から生じていた謎の発光現象も止んだ。高地に適應するために時間を使ったせいで制限時間が来たんだろう。

……いや、悪いとは言わないんだけどさ。

「もうちよつとでいい感じの答えが出そうだったんでもうちよつとなんとかありません!? 菊花賞で余裕持ってゴールしてた頃のスタミナどこ行つたんですか!?!」

「じゅ……10年以上前の話をされても困ります……確かにあの頃は多少の無茶もきいた頃でしたが……」

多少無茶してたんだ……。

いや、そうじゃないと無敗三冠なんてできっこないか。ローテーションもキツイし。

「あなたもあと12、3年もすれば分かるようになります……!」

「実感ももってますね」

いやその辛さはぼくも知つとるが。

腰から来るんだよね。基本。

「それで——何か掴めましたか？」

「掴みかけたところで終わったんですけど」

「それは……ええ、正直申し訳ないのですが。しかし、あなたならいずれ必ず本当の意味で大切なものをつかめると信じています」

「耳触りは良いけど要はこれ丸投げだな？」

「冷静な分析をやめなさい」

まあ、とっかかりをくれたのは強く感謝したいことだけど。

酸素缶を取りに行つて戻つてみると、トレーナーさんは紙袋をつけたまま器用に酸素を補充していた。外せばいいのに。

「そんなに顔見られるの嫌ですか？」

「少し詳しい人がいればすぐにバレますからね。騒ぎにならないためにも……普段の心がけを台無しにしないためにも、隠しておかなければ」

「そんなもんですか」

これまでの発言から、その趣旨は全面的に理解はできる。

——ただ、それはそれとして、こんなに呼吸と視界が制限されるようなものを身に着けていては、当然全力のレースなどできるはずはない。今日のこれだつてまさしくそうだ。

そもそもあれだけの技術、使わなければ錆びつくのが当然だ。今もまだ使いこなせるということは、すなわちぼくらに隠れて衰えない程度にどこかでトレーニングは積んでいるということ。

(本気の勝負してみたいなあ)

不意にそんな思いがよぎった。

ドリームトロフィーはその性質上本格化を終えたウマ娘しかいないから、より広い世代のウマ娘が参戦しても自然だ。

もしも運営側が許すなら。もしも本人にその気があるのなら。元々抱えていたJWCに対するぼくの思いもあることだし、一緒に走ってみたいんだよなあ。

……ま、考えるとしても一年二年は先だけど。

もう少して4月が終わる。

天皇賞の日が、近づいている。

ぼくらは競いに来た

G1最長距離3200m、天皇賞（春）。今年もこの日が訪れた。事実上、国内におけるステイヤー最強決定戦であるこのレースは、春の三冠の一角というだけあって長距離レースにしては珍しく注目度が高い。同時にその距離も相まって、日本でも有数の難レースに数えられる。

春の三冠の一つ——あくまで近年できた括りだけ——として数えられているのも、三冠を狙うひとにとっては曲者だ。大阪杯と宝塚記念と比べ1000m以上も長いとなると、天皇賞だけ適性外というウマ娘は多いだろう。逆に中距離ではなかなか勝ちきれないというパターンもある。だからこそ三冠という榮譽に相応しいとも言えるのだろうか……。

いずれにしろ、秋シニア三冠と比べると桁外れに難易度が高いのではないだろうか。宝塚記念が特に6月の暑い時期に催されるため、体調を崩しやすいという时期的な都合もある。やっぱもうちょっと時期を考えるべきでは？

變うのは後にして
閑話休題。

ともかく、天皇賞は天覧試合が執り行われることもあるほど歴史と伝統のあるレースだ。グレード制になる前の「八大競走」という大枠で格式が示されていた頃から最上位のレースとされており、天皇賞の盾を目標にしているウマ娘は数多い。

その筆頭が、まさしくメジロ家だ。世代を跨いでもなお天皇賞の制覇に対して強いこだわりを抱いている。

「……………」
「……………」

そして、マックイーンとライアン先輩、そしてようやく参戦してきたパーマー先輩はまさしくその渦中にいるウマ娘だ。

マックイーンは特に春の天皇賞で勝つことを悲願と言ってはばかりないし、ライアン先輩もまたメジロ家の誇りを持ってレースに臨

む。パーマー先輩は気負っている様子は無いようだけど、あくまでそれは外から見ただけの話だ。実際のところはどうかは本人のみぞ知る。

彼女たちの気迫はいつにもまして高まっていて、普段と異なり喋りもしないことでより大きな威圧感を発していた。

——そう、喋らない。

もう集中の極みにいるのだろうか。まだコースにすら行っていないのに、もう緊張感が辺りに蔓延している。

ぼくはスティック状に整形して中に濃いめの味付けをした具材を仕込んだウガリケニアの主食。穀物の粉を練って作る。をもっちゃもっちゃ食べながらそんな様子を見据えていた。

他の皆にドツかれた。

「何のんきに食べてんの!?!」

「常々思うんですけど、こんなところで無駄に緊張して体力消耗するのも良くなぶえ」

「生意気だぞー」

「だぞー」

「ほっぺぶにぶに」

「うえうえうえうえうえ」

なぜこう……周りからつつき回されるような状況になると、決まってエライ勢いで群がってきて頬をつんつんされるのだろう。

いや、理由は諸先輩方から聞いたから多少は分かる。曰く、「普段してやられてる仕返し」だそうだ。ぼく自身はレース以外で何かしよって気は（情報戦以外）特に無いし、これで先輩方の気が済むなら好きにさせておこう。パドックに行くまでもうちよつと時間はあるし。

だからわざわざ栄養補給スキルではない。してるとも言えるんだけど。3200mの長丁場ともなると消耗も半端じゃないし。

「逆にですけど、長距離でちゃんとカロリー補給できなくて大丈夫ですくわぶえ」

「ここに来る前に食べて来たし」

「本番直前に食べたたらお腹痛くなるよ」

「緊張でそれどころじゃない……」

呆れてるひと、論してくるひと、潰れそうになってるひと、色々いるがどれも主張は間違っていない。

ただ、こういう問題は体質による部分があるので正解は無い。なんなら精神状態も踏まえると、日頃からやってるルーティーンが正解とも限らない。

——それは、ぼくの視線の先にいるマックイーンたちも同じだ。

緊張状態にあったり、ストレスを受けることで逆に最高のパフォーマンスを発揮できるという例は確実にある。

それとは別に、気合を入れて臨んだ結果、力を入れすぎて逆に動きが悪くなるという例も間違いなくある。

アスリートは、常にそうした狭間で揺れ動いている。

「緊張感がありませんわね……」

集中力を高めるのが終わったのか、はたまたこちらの会話に集中を乱されたのか、ともあれマックイーンは深く考えに入り込むのをやめてこちらに向き直った。

「そういうマックイーンはトゲトゲしいね」

「チクチクしてるわね」

「ツンツンしてる」

「あなた方が丸すぎるだけですわよ」

「マックイーンのほっぺたはこんな丸いのに」

「挑発ですよ!?!」

「ははは」

挑発した程度で乗ってくれるなら……その程度で勝機が増えるならどんなにか楽だろう。

今だって、態度は間違いなく怒っていてもレースになればすぐに冷静になる。菊花賞の時から見ても、更にひと皮もふた皮も剥けたような印象だ。

阪神大賞典の勝ち方も鮮やか……いや、あれを鮮やかと言っているのか迷うな。好位置につけて自分より前にいるウマ娘をスタミナで

すり潰し、差し、追い込みなどの後方集団は上げたペースについていけずに脱落。ある意味「メジロマックイーン」のレースの黄金パターン、その基本形にして完成形……の雛形を見せた形だった。

たとえ心を乱したとしても、この戦法を破れない限り勝つことはできない。

「——あなたがその調子では、私も張り合いが無いと言えば、少しは気を張っていただけますか？」

「え？ いや」

「ちよつと!!」

「あのさマックイーン」

「なんです!？」

「大事なものは緊張することじゃなくて、ベストなコンディションでレースに臨むことですよ？　ひとそれぞれやり方は違うんだから、自分のやり方を押し付けるのはよくないよ」

「そ……それはそうですわね……」

「またマックイーン言いくるめられてる」

「……はっ!？」

マックイーンは面白いなあ。

パーマー先輩が横から指摘しなきゃこのままうまいこと説得できたのに。

まあ、マックイーンはマックイーンでこちらの言うことに一理あると思ってくれたのか、そこで矛を収めてくれたけど。

「はあ……調子が狂いますわね」

「落ち着いてマックイーン、ストライプの術中だよ」

メジロ家ぼくのこと時々詐欺師か呪術師か何かと思ってない？

警戒の度合いがライバルに対するそれと若干違うんだけど。

「ストライプ」

「何さ?」

「私は菊花賞で『勝った』とは思っていませんわ」

「はい?」

思わず素で疑問の声が漏れた。

何言つとんねんこやつ。

「あれは不良バ場に対する理解不足だったぼくの負けでしょ」

「ほんの少し水はけが違えば、あなたに多少の慣れがあれば覆っていた程度の差など認めませんわ」

「それこそ『もしも』だね。思考実験としては好きだけど、現に今ここにいて語るべきことじゃない。結果が全部だよ」

「強情ですわね」

「その言葉、利子と熨斗つけてそっくりそのままお返しするよ」

ぼくは挑戦者だ。そこに関して譲る気は無い。

レース内容に納得いかないとは言うけれど、常に納得のいくレースができるウマ娘がどれだけいることだろう。天候、体調、レース場やバ場状態。ウマ娘が思う通りにできることなんて数えるほども無い。

誰かにとつての「得意」は別の誰かにとつての「苦手」に容易に変わらう。本当の意味で全員が最高の状態のできるレースなんてものは、存在しないと云つていいだろう。

今日のレースなんてまさしくその実例だ。照りつける太陽にカチカチの良バ場。他のウマ娘からするとまさしくこれこそ！ という状態なのだろうが、ぼくにとつては相対的に見てベストと評するのは難しい。かと言つて、雨が降りすぎるのも良くないけど。

……まあ、この辺の話は、普段のレースに対する考え方の違いが影響してる部分もあるだろう。ぼくは勝つためなら正道も邪道も問わず様々な選択肢を考慮に入れておくけど、マックイーンは「メジロ家の誇り」を掲げている。その戦法だつて、良くも悪くも王道の先行策偏重。勝てば何でもいい、なんて軽々に口にできない立場も相まつて、勝ち方にもこだわりが生まれていておかしくないほどだ。

だから、ぼくにとつては運否天賦も何もかもを含めて「勝ち負け」でしかない。勝ちも負けも負け。それ以上の付加価値を感じない。一方で、マックイーンはだからこそ「ベストの状態で勝負する」ことを望み、それが最も誇り高いことだと考える。

同じやりあうなら、ハンデが生じてほしくないというのはアスリー

トとして十分理解できる感情ではあるけど。

ぼくはウガリを口に運んで頭を落ち着けた。

「なぜ今おもむろに食べましたの……!？」

「……エネルギー補給？」

「今!？」

「今」

シリアスな空気になると余分にエネルギー使っちゃうんだよね。
こう、身構えて。

だいいち、ここに来てしまえば問題はそこじゃない。

「そりゃ補給するよ。こうやって語るのも悪くないけどさ、ぼくらは
競いに来たんでしょ？」

天皇賞（春）

ピーカン照りの京都レース場。Extended区分「Springt」、「Mile」、「Intermediate」、「Long」、「Extended」の5つに分けたSMILE区分と呼ばれる中で最長距離の区分。の長距離レースとしては異例とも言えるほどの観客数に、小さく感嘆の声が漏れた。

同じG1でも菊花賞の時とも違うし、シニア級と考えてもステイヤーズステークスの時ともまた違う。ある種の「圧」と言うべきだろうか。シニア級G1だからこそ、観客の目が肥えているというか、やや厳しい雰囲気なのを感じる。

彼らはこのレースがクラシック級で見られるものよりも激しく、速く、そして見ごたえがあるものになることを望んでいる。その視線が強く期待の色を帯びていることが感じ取れた。

「こつち視線くださ〜〜〜い!!」

「完全にただの厄介なカメラ小僧と化してるじゃねーかオメー」

「小娘では?」

「そういう話じゃねーよ」

……その視線のうちの一つ、になってないデジたんパイセンに手を振り返す。あの辺りはいつも通りすぎて安心感すらあるな……。

ともかく、シニア級に上がってきて初めてのレースは基本、チームの方も少し緊張感が増す。ぼくらのチームに関しては元々老舗チームということもあって落ち着いている方だが、今後を占うという意味でも、よそのチームの方はある種独特な雰囲気が漂っていた。

「今日の1番人気はメジロマックイーン、2番人気はサバンナストライプだ」

「どうした急に」

「片や直接対決を制し、前哨戦で1着。間違いなく大本命だが、対する側もステイヤーズステークスでぶつちぎりの1着。菊花賞よりも少し距離が伸びた以上、実力では互角なのではという見方もできる

……」

「それでも直接競って勝っているというのは大きいな」

「人気の差に繋がっているな」

「だけど年明けや夏休み明けのウマ娘は、休養期間に励んだトレーニングの分、成長著しい」

「難しいな」

「……結論を言うと」

「どっちが有利か……さっぱり分からん」

さてね。実際どっちがどうなんだろう。有利不利と言われると微妙なところだ。

ぼくはあれから成長した、と思うのだけどなにぶん有馬以降実戦から4ヶ月近く遠ざかっている。対してマツクイーンは菊花賞の後本格的に覚醒を遂げ、前哨戦の阪神大賞典で圧巻の走りを見せつけた。というのは、能力的に未知数な部分が少ない……ある意味では底が見えたとも解釈できる。

が、だから対処可能かは別問題だ。例えばシンボリトルフ会長さんやギンシャリボーイボーイトレーナーさんの能力の限界を目にすることができたとしても勝てるわけじゃないだろう。底が見えたとしても深すぎてどうしようもないやつだ。

能力的な問題もあってその辺にはとっくに折り合いはついているけど。あとはどういう風にあちらにとっての「未知」という変数をぶつけて勝ち目をひねり出すかだ。

「そういや、この中で良バ場でストライプと走ったことのあるやつって……」

「あ、私走りました」

「アタシもよ」

む。どうやらウオッカ……というか、チームスピカがなにやらぼくの能力面について気にしているようだ。まあ、会場に到着した今気にしても仕方ないことだけだ。

「そんなこと言ったら、アンタもテイオーもストライプとは一度走ってるじゃない。ほら、入学後の模擬レースで」

「あれはデビュー前だからノーカウントだろ？」

「それもそうね。じゃあアタシのレースもノーカウントかしら」

「スペ先輩はどう思います？」

「うーん、走り方はともかく、考え方はセイちゃんとかよつと似てるかな……って思うんですけど……弟子？　って言うのも違うと思いませんし……」

そりゃ弟子じゃないし。

あくまで同門というか、同じトレーナーさんのもと学んでるチームメイトだ。有馬でもやりあつたし、次やり合う機会があるなら絶対負けねえとも思ってる。

別にチームメイトであることや先輩後輩として仲が良いことと、ライバルであることは矛盾しない。これはプライベートで比較的仲良く過ごしているマツクイーンも同じことが言える。

「ああいう性格だから何しても不思議じゃない雰囲気があるよねーストライプ」

「テイオーはそう思うか」

「雰囲気があるだけだよ？　本当になんでもはしてないでしょ」

「そうだな。むしろ戦術というだけなら、最終的に正攻法を通すために、途中まで奇策を使っているとも言える。実際、ステイヤーズステークスじゃあ策もロクに使わず能力だけで押し切っている」
「なるほど」

「まあ出遅れちゃいたが……」

「あ、あはは……」

……あれは今後ずつと言われるんだろうなあ。多分。いやぼくのポカミスだからしょうがないけど。

「ライアン先輩も相当強いよなあ」

「そうね。力を発揮しきれないって言っても、ふたりに食らいついてきてるわけだから——」

おっと、ぼくの話じゃなくなったらなら、流石にこれ以上文字通り聞き耳を立てているのは良くないだろう。客席側に傾けていた耳を元に戻す。

一方で、聞こえてしまったものは聞こえてしまったものだ。ちよつと考えが巡る。

ライアン先輩が強敵なのは間違いないし、パーマー先輩も間違いない。今後のトウインクルシリーズを牽引する存在になりうる——ただちよつと今は能力的・精神的両面で不安定さが強く、晩成型のためまだ完成を見ていない——のだが、このレースに関してはどちらも実力を発揮しきれるとは言い切れない。

原因はマックイーンだ。

同じメジロ家なのに何でだ、と思う部分も無いではないが、こればかりは仕方ない。まず、逃げのパーマー先輩はどうやってもマックイーンの前に出ないといけないので、最も矢面に立ってスタミナをゴリゴリ削られないといけない立ち位置にある。ライアン先輩はそれと比べると多少安定していると言えなくもないが、多分マックイーンが殺人的なペースを作るので差し脚が残るかは疑問だ。

ぼくなら……もしかしたら対応はできるかもしれない。ただ、前にいたことで撃沈したのが菊花賞だ。あれはぼくの脚力が原因で逆に遅くなっていたのだとはいえ、前回と同じ轍を踏みそうでなんか嫌だ。できるだけ避けたい。

(目下、最大の脅威がマックイーンだ。封じられる手があるなら封じたいのが本心だけど……)

そう思って横目で見ると、見ていることに気付いているのかいないのか、マックイーンは懐から白い錠剤を取り出しておもむろに口の中に放り込んだ。

「自分はいだけ言つといてえ!？」

「何ですのいきなり! ブドウ糖ですわよ!？」

「気を張れつて言つたじゃないか! 気を張れつて言つたじゃないか!」

「あなたのように人前でもきゅもきゅ炭水化物バーを食べるような無法はしていないでしょう!？」

「はあー!? あー……! あー……ああ……うん……」

「自分から突っ込んできておいて勢いを落とさないでくださいまし

!!

「ストライプさては勢い全部だな？」

はい。

なんかツツコめそうだしその方が面白そうだから。実際に口に運んでたのはただのブドウ糖タブレットだったので特に面白みも無かったのだが。

……まあ、これはこれでマックイーンがちゃんと対策をガチガチに練ってきてるといふ証拠になるからいいんだが。

消化吸収のプロセスの問題上、糖分が脳に回るには多少ならず時間を要する。固形のブドウ糖を接種した場合でもそれは変わらない——点滴という手段もあるにはあるがこういう場面では事例として適さない——が、やはり吸収効率はこの方が良い。今摂取すれば、タイミングとしては糖分が脳に回るピークはおそらくレースの最中。パドックでの選手紹介、本バ場に来てからの事前準備などを計算に入れてレース中に栄養が回るよう意識していたべくとはまた異なるが……まあ、普通にやるならあちらの手法の方が常道だろう。

油断してると思わせるとか、気が緩んでると思わせるとか、そういうことする必要も無いだろうし。

「はあ……私もレース中の疲労については考えているということですが。けれど、あなたほど超人的な消化力があるわけではありませんから——」

「今超人的な消化力という話を誰かしていなかったか？」

「——こういった手段を用いているだけです」

今ハヤヒデ先輩が変な反応してなかった？

「ぼくは吸収が良いだけで量はそこそこなんだけどね」

「知っていますわ。おかげでスペシャルウィークさんが試食の標的にされていることも含めて」

オグリ先輩もいいんだけど、あちこちの番組に引っ張りだこなのでなかなか試食をお願いするという雰囲気にはならない。

そもそも素材が全滅する可能性もあるので迂闊に頼めないとも言う。

——さて。そろそろか。

「じゃ、今日は勝つよ」

「その言葉、そっくりそのままお返し致します」

ゲートの準備が終わり、次々に入っていくのに追従してぼくらもゲート入りする。今日の枠番は1枠2番。最内に近いとはいえ、超長距離だ。あまり枠的な有利は無いだろう。

腕を鳴らし、足を軽く伸ばす。熱も冷たさも入れずに、平常心を保つ。

なんとなく、前にトレーナーさん全身筋肉痛。と走った時のことを思い返すと、そうすべきだと感じた。前までのレースでの精神状態は、冷静でいよう、気合を入れようという姿勢をそのまま表に出しているようなもので、気負いを生みやすい。だから野良レースの時の精神状態に近づけようという意図もある。

『まもなく始まります、天皇賞（春）。今、各ウマ娘ゲートイン完了』
静かに集中する。眼の前の情報を処理することに神経を傾ける。

そして。

『スタートしました!』

大きな拍手と歓声の中、レースが始まった。

ゲートが開くと同時に思い切り踏み込み、勢いよくスタートを切る。

『全ウマ娘綺麗なスタート、まず飛び出したのは13番メジロパーマー、続く形でメジロマツクイーン。更にサバンナストライプ』

『ストライプは先行策か?』

『珍しいな……』

『——……最後方、メジロライアン、マルイアトラクト、サバンナストライプ……サバンナストライプ?』

『は?』

『え?』

——そして、ぼくはここで思い切って下がった。

スナイパーIIサン直伝のミスディレクション技術を応用した、可能な限り周りに気付かせない下がり方だ。どうやら実況も欺いた、とい

うかスタートをきれいに決めすぎた後で急激に順位が下がったため、実況が間に合わずに二回名前を呼ぶ形になってしまったらしい。

見れば、マックイーンやパーマー先輩がギョツとしている。驚かすこと自体は主目的じゃないんだが、少し警戒してくれるならそれでいいや。

最後尾にいる、という意味ではステイヤーズステークスと同じ。しかしあちらと違うのは、明確な意図を持って下がったということだ。(同じ立場だったら怖いだろうな)

ベテルギウスは同じチームだけあって流石に動揺は最小限——いや、ハヤヒデ先輩は疑問をトレーナーさんたちにメチャクチャぶつけてるな。まあ、それ以外の面々は特に大きな動揺も見られない。

逆に、よそのチームは戦々恐々としている様子が見て取れる。序盤からカマしていくつもりは無い。だからこそ、こういう雰囲気は効果的だ。

まだまだ、ここは長いレースの第一歩。ぼくは軽く息を吐いて精神を整えた。

「競う相手」は目の前にいる

レースの立ち上がりは、大方の予想に反して穏やかなものになった。

正確に言うと、外からはそう見えるようなものになった。実際の走者たちは、ぼくから見える限り戦々恐々とした雰囲気醸し出している。

走りそのものは、皆堅実そのもの。基本に忠実……なのだが、どこか意識が前後、つまりマックイーンとぼくの方を行き来している。少し足元を強く踏むだけでピクリと軽い反応を見せるほどだ。

(ま、ぼくを気にしすぎるのが良いこととは限らないけど)

前方、ハナを切って進むパーマー先輩は、気持ちよく逃げ……：……られてない。ぼくがしよつちゆうやつてるのと同じように、その場を踏みしめることによるフェイントや最接近しての威圧を駆使してペースを握るべくマックイーンが動いている。

……：……つーかあれ、本当にぼくがやってるやつとほとんど同じやつじゃねーか。

同じ技術何度も使いすぎたつてのもあるだろうけど……：……ああ、くそつ、いやらしいくらいマックイーンの走法にマッチしてるなアレ。「メジロマックイーンめ、ストライプのスタミナ食いまで身につけるとかなんつー貪欲な……」

「と言つても、そこまで難しい技術ではないでしょう?」

「いえ、あれは膨大なスタミナがあつてこそその技術です。フェイントを交えると言えば簡単に聞こえますが、前に行くように見せかけてその場に留まるのは想像以上に筋力を使います。扱ふ適性が無いウマ娘が無理に真似ようものなら逆に自分の体力が枯渇するだけでしょう」

「技術盗用対策のデストラップじゃねエか」

「ワルい奴だぜストライプ……」

え……いや別にそういう意図無い……。

なんかドーナッツ先輩納得してそうな雰囲気あるけど、これ単なる偶然なだけで。ぼく用にアジャストしてる技術を他人が使うとか想定してないし、使おうと練習してみたところで無駄だと分かるだろうからいちいちそんなこと言わないだけなんだけど……これ戻ったら弁明すべきやつ？ いや、弁明したらしたで逆に疑われるやつか？ ……いや、今はそこ考えても仕方ない。重要なのは、それを使うことで無理が出るかどうかだ。

確かにマックイーンは最高速でぼくに勝る。ぼくはパワーやスタミナで優れているが、普通にレースをする分には過剰だ。事実上、マックイーンはぼくにとって上位互換のようなものと言える。

しかし、それは「普通にレースをする上では」という話だ。足元での小技を駆使した騙しは、余計な動きを挟む分普通よりも更にスタミナを浪費する結果になる。これはあくまで余分なパワーやスタミナを有効活用するためのテクニクだ。

つまり「ウマ娘としては最高峰」でも「規格外」ではないマックイーンのスタミナでは、本当の意味でぼくと同じように後ろから煽ろうとすれば必ず無理が出る。

(……かと言ってマックイーンがそれを把握してないとは考えづらい)

となれば、まず間違いなく中盤までにやらなくなる。やる必要がないとも言えるか。

よりにもよって天皇賞にぶっつけ本番の新技术をぶっつけてくるなんてこと、絶対にありえない。確かにぼくもイチかバチかの賭けはよくやるけど、それはあくまで勝率を上げるためだ。情報が漏れるのを危惧して人前でトレーニングすることを避けたりといったことはあるが、それでもある程度そうした上で「走りきれる」という確信を持てるくらいに精度は上げている。

マックイーンが慎重なのかどうかは解釈が分かれるところだが、天皇賞にかける思いは本物だ。中途半端を一番許さないのはマックイーン自身に違いない。

『綺麗なスタートから一気に沈んだ二番人気サバンナストライプ。故

障がなければ良いのですが』

『このウマ娘は作戦としてこういうことをします。どうなるかはわかりませんよ』

ははーん。これ本当に怪我しても気付いてもらえないやつだな？

オオカミ少年（ウマ娘（シマウマ））とかもうわけわかんねえな。

まあいい、自業自得だ。その時はその時として潔く受け入れよう。

「後ろからのストライプのレースか、不気味だな……」

「そう？ トレーナーもあのレース見てたんじゃないの？」

「うーん、私も、差してくる印象はあまり無いんですけど……：テイオーさんたちは違うんですか？」

「ボクたちは一番最初の模擬レースで差そうとしてきてるの見てるしね〜」

「ま、トレーナーはデビューしてからのデータとにらめっこしてることのが多いから、逃げのが印象強えーかもな」

まもなく800m。

テイオーたち、模擬レースの印象強いな。当たり前つちや当たり前か。他のレースでは結局一緒に走ったというわけではないんだし。

特にテイオーは危うく1着を奪われかけて「無敵のテイオー様」のアイデンティティを崩されかけているんだから尚の事だろう。

だからこれで油断してくれることは無いだろうな。あの場にはマックイーンもいたのだから、テイオーたちと同じように差してくるイメージはバツチリ残っている。

芝を踏みしめる。ここまで10レース行われたこともあって、単に整備しただけでは元に戻すのは難しい。コースの内側はもう随分と荒れていた。

このレース、今ここで前に出ることはしたくない。それじゃあ後ろに下がった意味がない。

春の天皇賞のこのコース、京都レース場3200mはほぼ菊花賞と同じ。スタートの位置がずれて200m伸びたものになっている。

ぼくにとってはそう大した差ではないが狂人のたわ言。この微妙な差がランナーの脚を蝕む。「たかが」1ハロンと捉えているひとは

吹き飛ばされたスタミナの上ののしかかる1ハロンの重みに泣く羽目になるし、1ハロン「も」と捉えているひとは仕掛けどころを見失って沈んでいく。

だからぼくの捉え方はやはり、「1ハロン増えただけ」だ。それ以上でも以下でもなく。

向正面から始まったこのレース、再び動かす——動くのは半分、2コーナーを曲がりきって2周目に入ったところだ。

『スタンド前入ってきます。レースはまだ動く様子がありません』

『長丁場のレースです。ここであまり焦りすぎないでほしいところ』

スタンド前に入れば、どうやっても観客は湧くものだ。このタイミングであまり大きすぎる声援を上げるとウマ娘のパフォーマンスに影響してしまうことから、一周目はあまり声を上げないようにする……というのはマナーとして周知されている部分だ。しかし、それでも感情を押し留めるといえるのは難しい。応援が思わず大きくなってしまふというのも、ある意味では醍醐味と言える。

同時に、G1級のウマ娘というものは得てして声援を力にできるものだ。だからこそキツイ場面でもうひと踏ん張りする力が湧いてくるし、差すために必要な大きなパワーをひねり出すことができる。

だが、それは意図してできることではない。精神状態に大きく影響を受けるといふ意味では領域に似た性質を持っている。そして今、間違ひなく走者の皆は強い高揚の中にあるはずだ。

そこに、ぼくは踏み込みの音と衝撃を轟かせた。

「っ!?!」

「——!!」

それをひとつの合図として、前方で走っていたひとが一瞬だけ速度を上げた。

それに触発されたひとがまた更に反応する。ライアン先輩はこちらの手がある程度知っている、とは言っても流石に意識を向けることはやめられなかったようだ。

数秒の間に引き起こされた連鎖は見る間に走者たちを浮足立たせ、一部は暴発すらしているほどだった。

——ぼくはちよつと前に出ただけで、依然最後尾なのに。

「何だ今のは……!?!」

「おー、そーういやハヤヒデは見んの初めてか」

「ンー……あれが、詐欺師……とか、扇動者……言われる理由デス」

「相変わらず酷エ異名だ……」

「言われるほどじゃねーだろ。アイツは確かに嘘はつくし他人騙すし
銭ゲバ——コレ否定しきれねえな?」

「否定してやれよ」

「オメーもな」

……商売に関わることに無い範囲ならレースに利用できるからこ
ういう風聞もあり!!

ただ、先輩たちが否定してくれないのはこの辺ちよつとシヨツクだ
な。自分で作り上げた風潮とはいえ……。

ともかく、1コーナーが見えてきた。レース展開もいい具合に荒れ
ている。予定よりちよつと早いが——そろそろいい頃合いか?

レースは水物だ。想定していた通りにことが運ぶとは限らない。
特に今回は、ぼくが後方に下がったことと併せてマツクイーンのパ
スが結構早まつてる。頃合い、と言うよりそろそろ行かなきゃ間に合
わなくなるだろう。

『スタンド前を抜けて1コーナー。後続の子が徐々にペースを上げて
いきます』

『まだ中盤です、スタミナが残るか心配ですね』

「残させる気無いだろあいつら」

「マツクイーンが前でペースを壊して、ストライプが後ろからペース
崩して……わあ……エッグい……」

もしこれが海外のレースでかつ同じチームだったら、チームの勝利
のために煽るのに徹するようなこともあつただろう。多分今の僕ら
のレース運びにはそれだけのシナジーがある。

けど、ぼくは勝ちに来たんだ。ぼくらは競いに来たんだ。当然、そ
んなの冗談じゃない。

煽るのではなく、徐々にペースを上げて前方のウマ娘を躲す。ひと

り、ふたり——ほぼ全員が軽い混乱状態に陥っている現状からなら、前に出るのは容易だ。

だが、この状態からでは左右に振られてしまうので嫌な感じにロスが出る。ロスの有無が最もよく出るのは競り合いになってからだから今はまだ許容範囲内だけど……。

「ストライプ……！」

「——……」

一瞬、ライアン先輩と視線が交錯した。

迷いを見せたのはほんの一瞬だ。次の瞬間には彼女はもう決断したらしく、ぼくに併せて徐々にペースを上げ始めた。

超一流どころは、必ず作戦に対応してくる。それがフィジカルであれメンタルであれ、勝つことに全精力を傾けるひとが対応してこないわけがない。

（——面白い！）

同時に、昂揚を覚える。ぼくのライバルたちはこんなにも強い！だからこそ競い甲斐がある！

差しからまくり気味の先行策に切り替えか。しかし長く脚を使えるだろうか？ その辺りも含めて、ここからはマジの体力勝負だ。

ぼくがやるのは差すでもなく逃げるでもなくまくり。言わば差しながら逃げる状態だ。逃げはペースを崩されかねないし、差しでは追いつけない。半ば消去法での選択だが、今はこれしかやりようがない。

「——つとお？」

と、思った矢先のことだった。目の前に広がっている光景は、混乱の中大きく横に広がった中団のウマ娘たちだ。

「いけません、前が塞がっています……！」

「まーた策に溺れてんのかアイツは」

当たり前だが、元から前にいたウマ娘が進路の邪魔になっても、それは斜行と認められることは無い。このまま悪く行けば、横につけられて展開に蓋をされる危険があるだろう。

……だが。

(あと1ハロン)

2コーナ―を抜けたそのさきには、ぼくが求めるものがあつた。

——1周目に踏み荒らしたインコースが。

『さあここから向正面、後半戦に入ります。残り半分を切りました。おつとここで猛烈な勢いで上がってくるサバンナストライプ。……サバンナストライプ!』

『内ラチ側の荒れたバ場を苦もなく上がっていきますね』

「ゴルシワープ!」

「オラー! アタシの技じゃねーか特許料よこせー!」

「そういう問題か!」

春の天皇賞のコースは、京都レース場をおよそ一周半する形になる。淀の坂は当然難所中の難所だとしても、次いで問題になるのが1周目に踏み荒らしたコースだ。

菊花賞の時はそもそもバ場状態が最悪に近いおかげで元から荒れ放題で問題が顕在化していなかったが、良バ場の際はまた話が別だ。あるタイミングで突然荒れたバ場が現れるのだから、普通のウマ娘は当然そこを避ける。

ぼくのように荒れたバ場を得意とするのなら、そこが最大のチャンスだ。内ラチひとり分を開けて競馬で言う内ラチ一頭分ルール。安全のためにラチから少し離れた場所を走らなければならない。踏み込む。

——ここからが、ぼくにとってのラストスパ―ト。

『い、一気に上がってくるサバンナストライプ! メジロライアン追走! メジロパーマー、辛いところだが先頭をキープし続けています!』

残り1200m——淀の坂。ここを一気に駆け上がる!

菊花賞と同じタブ―破りの3コーナ―からの仕掛けだ。だがあの時と違うのは、こちらが追う側で、あちらが追われる側だということ。追う、つていうのは、気分がいい。本質にある凜猛さをそのまま解き放てるかのようで、解放感が胸を満たしてくれる。

けど、これに身を任せるのは危険だ。本能を制御して冷静にレース

を俯瞰しなければ勝ちは掴めない。

——今まではそう思ってた。

「まずいな、ストライプはあのペースでは思考を手放しかねん。大丈夫なのか梨紗……!?!」

「大丈夫です」

見つけたのは、トレーナーさんとの野良マッチレースの時だった。前チーフの言うことも理解できる。安全策として、そして定石としてそうあるべきだとも思ってる。少なくとも普通に、それこそG3やG2を勝つにはそれが最高到達点でも問題ない。

けれど、それでは一手足りない。本物の超一流に勝つためにはまだ足りない。

「あの子はもうそこに留まる器ではありません」

ぼくにとつて、走るということの言わば一人遊びだった。

一緒に走る相手はいない。並外れたスタミナについていけないひとがいらないし、ぼく自身は皆の求めるスピードについていくことができない。だから常に独りで走り続けてきた。

だから、ずっと求めてきた。競う相手を。

トレセン学園に来てからというものの、「一人遊び」の頻度は減った。頭の中でレース展開を予想したり策を練ったり、それでも多少自分だけで何かすることはあったけど、それでも何やら試す時は他人に頼ることができるようになった。

いつしか、求めるものが減った。

お金も手に入ったし生活も安定した。昔ほど無い無い尽くしの生活じゃなくなつたし、自分の力が通じることも証明できた。

だから、心のどこかに今の状況に満足する自分がいた。これでいいじゃん、とその場に腰を落ち着けようとしていた自分にんげんがあつた。

同時に、それだけでいいのかと呟く自分もまた、いた。多分それが表に出てきたのは菊花賞での敗戦から。

求めているものが全部が手に入ったわけじゃないだろうと心が叫んだ。何より欲していたものを目の前にかつさらわれたことに腹を立てる自分シマウマがいた。

——じゃあ、どっちも手に入ればいいじゃないか。

友達と仲良くしていたい。安寧が欲しい。娯楽も欲しい。競い合いたい。勝ちたい。もっと高みへ行きたい。稼ぎたい。遊びたい。贅沢三昧したい。最強になりたい。世界一のウマ娘になりたい。

矛盾した思考のようでもそれは全部自分自身の内から湧いてくるものだ。混沌としていい。混沌としていくくらいがいい。欲張れ。強欲であれ。掴もうとすらしなければ何も掴めはしない。

それも全部 サバンナストライプ 自分だ。冷静さも獯猛さも捨ててはいけない。捨てるべきは先入観だけだ。「理性と野生を両立できない」という常識を捨て去れ。

あれほど求めていた「競う相手」メジロマックイン は目の前にいるんだから！

「——入った」

かちり、と何かが噛み合う音がしたような気がした。

意識が加速し、視界が停滞する。眼の前の全てが今までよりも遙かに鮮明に映ったようである——唐突に理解した。

これが、領域だゾーンと。

同時に、マックインがそこに到達したこともまた自然と理解できた。本番はここからだ！

『メジロマックイン、メジロパーマーを躲して先頭に立つ！ 後ろからはメジロライアンとサバンナストライプが猛追してくるぞ！』

『第3コーナー、淀の坂を超えます。まもなく4コーナー。ここから巻き返すことはできるでしょうか』

視界の中の情報が瞬時に処理できる。今までなら処理できるかも分からなかったくらいの些細なロスをも即座に処理できるようになり、走りから無駄が消えていくのが分かった。

行ける——最高速のその先を維持できる！

「っ!!」

そう思った4コーナー、マックインが一気に体を内ラチ側へ寄せた。あの場所は……ぼくが今まで通ってきた荒れ放題のルートか!?

「バカな！ あんなコース取り、ストライプでもなきややれねえぞ!」

「——いや、菊花賞の走りができるならアイツも同じことができる！

それだけじゃねエ、メジロマックイーンの勝ち星のうちの2つはダートだ！」

つまり、仮にあのコースを行っても、マックイーンならばフルスペックのぼくと同じだけの走りが可能。

……上等!!

『ぐんぐん差を詰めていくサバンナストライプ！ あ……つと、メジロライアンはここでスタミナ切れか!? まもなくスタンド前！ 京都の長い直線に銀と縞のラインが描かれる！』

京都レース場の直線は約2ハロン。坂を越えてもなおまだ長い。普通のウマ娘ならここで心が折れることもあるだろう。

けど、ぼくもマックイーンも、むしろここで加速する。垂れないことがぼくらステイヤーにとっての矜持だ。最短、最高速度でゴールまで突っ込んでいく——。

「クソツ、ダメだ！ あれじゃあマックイーンを躲しきれねえ！」

その途中、流れていく光景の中でこのレースの結末が計算された。

ゴールまであと300m。ぼくとマックイーンの相対速度、残ったスタミナと減速の可能性を考慮すると——間に合わない。

今、ぼくの視界にはマックイーンの背中が真正面に映っている。コーナーの時のロスを考慮し、殆ど同じ最内のコースを選択したせいだ。

無減速クロスステップの制御ができるのは最高速度の一手手前まで。通常の躲し方ではどうやってもロスが効いてくる。行けてハナ差敗北がいいところだろう。

行くか。行かないか。いや——。

決断するか、しないか。

残り150m。マックイーンの背はもう目と鼻の先に来ている。この速度のままでは追突。それだけは選手としてやってはいけないし何よりどうやっても勝ちにはならない。

横にずれれば速度が落ちてハナ差惨敗。今の時点で最高速だ。これ以上絞り出しようが無い。

残る手段は、イチかバチかの大博打。

——ごめん、トレーナーさん！ 約束破る!!

内心で謝罪した直後、ぼくは全意識を脚に集中させた。

歯を食いしばり、体幹を安定させるために腹筋に力を入れて全力で踏み込み——遠心力を味方につけながら歩幅を調節。そして、一気に踏み切る!!

「うおおあああああああッ!!」

「やあああああああッ!!」

『長い長い京都の直線のデッドヒート！ メジロマツクイーンか!? サバンナストライプか!?』

——限界を超えた速度での、無減速クロスステップ。

ゴール手前で発動させたそれはぼくの体を上手く横へと運び、マツクイーンに並ぶのとほぼ同時にゴールへと飛び込む形になった。

『ゴオオオール!! ゴールイン!! 3着はどうやらメジロライアンか!? 1着は——』

徐々に徐々に速度を緩める。ぼくらの視線の先、電光掲示板には「写真」の二文字が輝いていた。

『判定です！ 只今判定を行いますのでしばらくお待ち下さい。4着はミセスマリア。5着にはコズミックシャインが入ります』

視界が元に戻るのと共に、息が上がる。久しぶりに本気で疲れた気分だ。

同時に、どこか清々しい。ある意味では、初めて肉体的な限界を引き出し「全力」というものに到達したから、だろうか。

「……………」

「……………」

判定は、まだ出ない。

速度を落とすきつたところで、ぼくとマツクイーンは示し合わせたようにコースの真ん中で無言のまま対峙した。

息を吐く。

互いに今出せる全力を出し切った——と、思う。ほとんど未知の領域にも、ぶつつけ本番ながら突入できた。悔いは…………。

(いや無理だな。負けたら悔いだらけだ)

どんな結果でも残るだろう。勝っても反省点が残るだろうし、負けたら当然死ぬほど悔しい。

だがとにかく、今はまず結果を厳粛に受け止めることだ。判定は——

「……判定は？」

「……終わり……ませんわね」

……判定全然終わらねえ。

「……ただけ審議してるんだコレ？　そろそろ5分？　……なんか緊張の糸切れてだんだん足元が覚束なくなってきた。」

「……痛っ……」

それに少し、無理しすぎたか。やけに右脚が痛みを訴える。

……いや、それにしても判定まだ？

「……マックイーン、1時間くらい経ってない？」

「まだ10分も経っていませんわよ……ちよ、ちよつと待ちなさい！」

顔面蒼白ですわよ!？」

「脚痛つたい……」

まだか。もう体感二時間も三時間も待ったような気さえしてくる。

そろそろ限界だ、と思って崩れ落ちかけそうになったその時、横から支える手があった。マックイーンのものだ。

「私のライバルがあまり弱気な姿を見せないでくださいまし」

「……へへ」

ライバル。

ライバルか。いい響きだ。

菊花賞ではミソが付いちやっただけど、今回こそは本当の意味で真正面から競い合えて、そうなれたと思っただいかな。

少し、痛みが和らいだ——ような気がした。

『——大変長らくお待ちせしました』

「お」

「判定が出るようですわね」

……えーっと、時計見る限り15分近く審議してたんだな。確かに接戦だったけど大接戦ドゴーン2008年天皇賞（秋）で飛び出した

空耳。この時は13分間の写真判定が行われた。レベルで競り合ってたのか？

ちゃんと競り合いの形にできてたと考えられるなら、それもまあ成長の証と考えると良いかもな……。

そう思っていると、会場が盛大に沸いていることに気付いた。マツクイーンの顔もピタツと固まっている。これは——どっちの顔だ？

分からん。ともかくこっちもこっちで見してみるしか無いだろう。そうして掲示板に目を向けたその時、ぼくの目はある二文字を捉えていた。

「同着」。

「あ？？」

「これは……」

『た……大変珍しいことが起きました。同着です！ 一昨年のダービーに続きG1で同着！』

「はあああああああ!!」

同着!! あれだけバチバチにやりあつて同着!!

嘘だろ!! 結局決着ついてないじゃん!!

「マツクイーン!! あと2000m追加痛あああ!!」

「ちよ、ストライプ!? な、納得できないのはわかりますけれど、今のその状態でレースになると思ってますの!?!」

「やるって言ったらやるんだよ!! まだ勝負ついてなああああがががががが」

ち、ちくしよう! 脚が全く言うこと聞いてくれない!

ただでさえ熾烈なレース展開で脳内物質が噴き出してるのに加えて初めて領域ゾーンに入ったのも相まってゴールまでは脳内物質が痛みを覆い隠してくれてたようだけど、今はそういうわけにもいかないか……!

「こ……こんな決着なんて認められるくわ!!」

「結果は結果と言ってたのあなたでしように」

「うるさい!!」

結局のところ、結果が覆ることはついで無く。

ぼくはチームメンバーに取り押さえられるような形で担架に乗せられて医務室に運ばれることになったのだった。

何か弁明は？

「恐らく骨折です」

「でしようね」

『『でしようね』じゃねーよおバカ』

「あだっ」

着順確定後の医務室。ぼくに下された診断はある意味想像していた通りのものだった。

原因は……まあ、わかりきったことだが、ひとつは最高速の限界を超えた上で無減速クロスステップを使ったこと。もうひとつは、クロスステップの習得を急ぐために練習を繰り返して足首に疲労を蓄積させすぎたこと。そして最後に、体幹が急に強くなりすぎたこと。

体幹が強くなれば無理な姿勢からの復帰もできるようになるが、そもそも体に悪いので無理な姿勢になどならない方がいい。今回は無理に勝ちに行った結果、そのあたりの理屈を考慮し忘れて「できる」からと無理な体勢になってしまった。結果、関節に負担がかかって……という流れだ。

医務室だから簡単な診断しかできてないけど、病院に行つて実際にレントゲンを撮ったりしても診断は同じだろう。

「怪我人に対してなんて乱暴な」

「オメーが自分で言わなきゃ説得力もあるがな？」

そりやそうだ。少しでも場の雰囲気暗くしないために言ってるんだから。

例えばフラッシュ先輩。差しウマ娘相手にした時の練習に付き合ってもらうことが多く、疲労骨折の可能性を察することができなかったことを多少なりとも悔いている。例えばリムジン先輩。こちらとは同じく骨折を経験したこともあるし、内面がやや大人しめなので同情で気分が落ち込んでる。

こういう雰囲気は良くない。息が詰まる。

「で、何か弁明は？」

「何か悪いことしましたかぼく？」

「こいつ……！」

「悪いことと思っただけなら弁解する必要も無いということですか……」

「えへっ」

「……いや、まあ確かにトレーナーさんの約束を破ったことは悪いなどとは思ってるけど。」

それと、勝ちにいくためにリスクを飲み込んだことは別だ。結果的に勝てなかっただけで、その選択を悔いてはいない。勝てなかったことは悔しいけど、今はそこは重要じゃな……いや重要ではあるが……思い出したらまたむかつ腹立ってきたな……何だよ引き分けて。」

「つーかよお、同着自体はまあいいんだけど」

「よくない」

「ウイニングライブどうするんだ？ コイツ動かすわけにいかねーだろ」

そこは確かにそうだ。

仮にも、分け合ったとはいえ一着には変わりない。興行である以上ウイニングライブで主役不在という事態はURAとしても避けたいところだろうが、同時に骨折したと既に分かっている選手の脚に負担をかけるような真似はするまい。

「……正直なところ……いずれやるとは思っていましたが……」

「教え子が犯罪者になった教師みたいな発言やめてくれませんか？」

「そのいずれやるってどっちの話？」

「どっちもです。この性格ならいずれ何かしらの要因でリスクを飲み込む可能性があるだろうと思っただけだし、あの戦法なら同着になることもありうると思っただけです」

あれ……？ ぼくの性質読まれすぎなのでは……？

「ちなみに同着になる可能性って……？」

「あなたは実力が拮抗している相手を差す時、相手が『必ず』差し返してくるものと考えてゴール入線間際で頭だけ出して勝とうとする手段を取りますね？」

「同着になる可能性高くて当然じゃねエか」

「うぐう」

それは……そうなんですが……。

でも差し返してくるじゃんきつと皆。そういうある種のスゴ味があるからこそG1で勝ってきてるのであつて、考慮しないのも違う気がする。

なにぶん色々知ってるからな実例……加えて、差し返すことができないウマ娘のまさしく実例そのものなスカーレットを近いところで見えたのもある。アイネス先輩とかも絶対やるじゃんと思うし……。「G1を走るお姉さんたちは、やっぱり差し返してくるひとたちが多いんですか?」

「いやコイツの周りに異様にそういう傾向があるだけだ。フラワーはここまで臆病になる必要はねエよ」

「臆病て」

「臆病でしょう」

「臆病だろう」

「やーいビビリ」

「ぐう」

「ぐうの音が出たな……」

「案外余裕だな」

シマウマは獰猛な生き物だが、それは臆病さの裏返しだ。未知の事物や害を正しく恐れているからこそ、近付けまいと必死になる。臆病さというものは動物の生存戦略だ。

……という自己正当化のための理論武装を一瞬思い浮かべたが、そもそも焦点は臆病さの正当性じゃなくてそれが同着になる原因になったかどうかだ。そこにに関して否定はできないので口をつぐむことにした。

「話は逸れましたが、こうなると予測していたので用意はあります。まさか同着と骨折を同時にやらかすとまでは思いませんでした……まあ、過去の事例から対応は可能でしょう」

「URAも歴史が長いからな。同着の事例もあるし、骨折しながら

勝った事例もあるということか」

それこそ一昨年のダービーがまさしくそうだ。

骨折して勝った……というのはなかなか無いかもしれないが、それでも勝つてから痛みを訴えるケースは枚挙にいとまがない。その後、検査したら結局骨折だったというケースも数多くあるだろう。

幸いというか、「NEXT FRONTIER」は動くことは動くけど大きく脚を動かすようなことはあまり無い。演出も派手な方だし、多少のごまかしはきく。お客さんには悪いけども。

「……それと」

「まだ他に何か？」

「次走のことですが……」

「オイオイオイ、今話すことじゃねーだろ」

「治療の方が先だと思いません……」

「完治させるにもある程度展望を定めておいた方が良いでしょう。勿論、時期は考えますが、精神的に『こう』と定めておけば体にも作用します」

「あア——プラセボ効果か」

プラセボ効果。日本ではプラシーボ効果と言ったほうが広く伝わりやすいだろう。思い込みの力が体に作用する一例だ。

期間を定めてその日に向かって治るよう自発的に努力させることで、単純に治療効果を高める意図もあるだろう。いずれにせよ今のように決めておくべきなのは間違いない。

リハビリの問題もあるだろうし……。

「そうですね、じゃあ——」

……≠……

ウイニングライブを終えてしばらく経った頃。今回の宿泊先に指定されている京都市内のホテルの一室。

ライアン先輩とパーマー先輩、そしてマックイーンの今回の天皇賞に出走したメジロ家三名が集まっている部屋にやってきたばくは――

」。

「和風カプレーゼです」

「おっ、来た来た」

「……なぜ!? 今このタイミングで食事を!？」

——夜食を持ってきていた。

トマトをスライス、モッツアレラチーズと豆腐を薄めにスライスしてこの三種類を適当に組み合わせる。臭み取りの青じそをこれに挟むか、もしくは適当にざく切りにしてふりかける。ここに塩と、京都ということで粉末のお茶をひとつまみ。オリーブオイルにだし、醤油、少なめのお酢を混ぜたドレッシング風の調味料をかけて完成。火を使わないので比較的安全だ。

「いえそもそも！ あなた怪我したのでしようになぜ食事を配膳など……!？」

「あ、骨折だったよ」

「ちよつと!!」

ははは。今更どうこうできるわけでもないのにオロオロし始めたのウケる。

「おあいこだよおあいこ。菊花賞だとマックイーンが折ったじゃん」

「そういう問題ではなく！ 負担がかかりそうなことをやめなさいと言っているのです!」

「そこまで莫大な負担がかかる行為ではないよ配膳は」

心配性だなあマックイーンは。

「となると、復帰はしばらく先かあ」

「ですね。全治二ヶ月って話だから……まあ宝塚は無理かな」

「元々出る気は無かったでしょうに」

「どうかな？ 考えは変わるものだよ」

……いや万全だとしても実際グランプリレースに出る気は無いが。どうせあれじゃん。有馬に勝るとも劣らない地獄じゃん。加えて夏じゃん。死ぬって。勝ちたいは勝ちたいけどコレに関してはそういう問題じゃない。

「まあ、できれば早いうちに決着はつきたいけど」

「……ええ。今度ははっきりと勝ち負けをつけたいところですね」
「えつと……どこで？」

「今明らかに萎縮しましたわね。パーマー……？」
「ふたりがいるレースだと実力発揮しきれそうにないしねえ……」

それはぶつちやけその通りだ。ただ、それは長距離での話。中距離であればまだ手立てはあるだろう。

ここから年末にかけてのG1レースは概ね中長距離、長くとも有馬の2500mが限度だ。勝ち筋はある。あとはパーマー先輩がそれに気付くかどうかだろうか。

もつとも――。

「まず秋の天皇賞は無いね」

「距離の問題ですわね？」

「ううん。その頃は海外にいるだろうから」

「は？」

「海外!？」

ぼくは小さくうなずいた。

海外遠征。これは前からずっと考えていたことだし、トレーナーさんたちともコンセンサスが得られている。

具体的に言うと、行き先は欧州だ。9月あたりのG2が復帰戦になるよう調整も行っている。

「正確にはフランス。フォワ賞に出られたら出ようと思ってる」

「つまり目標は――」

「エルコンドルパサーさんが惜敗した凱旋門しょ」

「カドラン賞に出ようと思って」

「そっちなー」

あ、マックイーン顔赤くなってる。ワハハ。レースの場から外れるとよくよく予想外すな。

まあ皆フランスと聞くとそっち行かせたがるよねだいたい。

「アリかナシかで言うのアリなんだけどね。やっぱりステイヤーとしては最高峰の舞台に挑んでみたいのが本音」

「まあ……ダメとは言いませんけれど……」

「言える権利がない、が正確じゃない？ マックイーン……」

「というわけで、世界最強のステイヤーになってからもう一回やり合おうと」

「順序がおかしい」

「おかしいですかね？ どこから始めたって別に悪いことは無いと思いますよぼくは」

「順序が問題じゃないんだ。結果が問題なんだ。勝てるならそれでよし。勝てないなら……それはその時。」

「幸い、ぼくは海外遠征するにあたって実績は十分なくらいある。」

「まあ、日本と同じようにはいかないというのが問題なところはあ
けど……」。

「とすると、一番やりやすいのは……有馬記念……」

「有馬はダメだ」

「トラウマ強すぎるでしょ」

「こればかりは強く心に刻まれすぎたので仕方ないと思う。うん。」

フオロワーが増えている

怪我の休養期間はやる事が無くて困る、と走者の皆は口々に言うものだ。

本当にやる事が無いわけじゃあない。ただ、いつもと比べるとやるべきことは格段に減る。マックイーンなんかも、怪我をしていた最中は暇そうな姿を目にすることがそこそこあった。

——が。

(やりたいことが……やりたいことが多い……!!)

ぼくの場合は暇になる時間が皆無だった。

リハビリメニューは当然として、まず仕事。市場調査、メニュー開発と今後の事業拡大に関する計画立案、税理士やコンサルタントとの相談に就職希望者との面接と書類審査他諸々。

それから趣味。お金を手に入れて以降暇になったらやろうと思つて積んでたゲームや漫画、録画していた番組もあるし、食べ歩きとかも行きたい。映画も観に行きたい。マヤノに動画出演してほしいとも言われてる。

更に、トレーナーさんからはフラワーとハヤヒデ先輩のトレーニングについて助言と協力を求められている。高等部に上がって後輩が増えたせいとか、そちらの方面でアドバイスやアルバイトの斡旋なども求められることが多いし、今日なんかチームスピカに呼び出しを受けている。

まあ、呼び出しと言っても「ちよつと顔貸せや」的なアレではない。やるかどうかで言えばノリノリでやるのがスピカだが、今回はそういうメニューアンスでもなかった。

——というわけで、ぼくは屋台に新メニュー候補を山と積んで部室前にやってきたのだった。

「だから！ 脚を折つたのに！ 何をまた屋台など引いているのです！？」

めっちゃ叱られた。

「安心しろ、引いたのはアタシだけマックイーン！」

「あなたが協力などするからまた調子に乗るじゃありませんの！」

「この言いぐさよ」

「なー」

「いや普通にストライプも悪いからね？」

じろ、と湿った視線がティオーから向けられた。

そりゃ、まあ……そうかもだけどさ。

「そう言うなら呼び出しせずにはぼくのいる方に来てよ」

「……………」

「忘れてたね？」

「普段のストライプ、フットワークすっごい軽いからつい……」

気持ちにはわかる。なにせぼく自身もときどきうつかりケガしてることを忘れて普通に動こうとして悶絶するからだ。

最近は徐々にその不便さにも慣れてはきたが、それでも日に一度くらいはやらかすほどだ。

……まあいいんだ、そこは。お互い様というか皆怪我人という意識が足りないってだけなんだから。

「そんで、何で呼び出したはすの俺たちがごちそうになることになってるんだ？」

「別にごちそうするために来たわけじゃないよ。これ試食用だから。食べてもらって好感触を掴めないと商品化できないんだよ」

当然だが、単純にタダで食べてもらうために来たわけじゃない。何事もギブアンドテイク。皆にやってほしいのは、商品として出してもよいかどうかの批評だ。

ただの食事ならばくだけだけが美味しいと感じるだけでいいけど、「商品」にするなら一定水準以上の味は欲しい。なおかつ万人ウケしないといけない。

というわけで、こういう場面で必要なのは他人の意見だ。複数人に、色んな角度から「美味しい」と言ってもらえれば、商品として提供できる味ということにできる。

で、本題は？ とスぺ先輩に料理を提供しながら促すとまずそれに

応じたのはマックイーンだった。

「あなた、自分のフォロワーが増えているのは存じていますの？」

「ウマスタの話……？」

「いえ、そちらではなく」

「レースの話よ。ストライプの戦法を真似してる子が増えた……って話」

「地方でもそれで勝ってるヤツが結構出てきたとか聞くよな」

「走りにくくってヤになっちゃうんだよね」

「……その対策よくに聞く？」

「答えるでしょう？」

「まあ答えるけど」

「答えるのかよ」

せつかくの頼みだし……。

何より他の人にアドバイスするのにテイオーたちにアドバイスしないってのも違うし。

「助言ひとつでダメになる作戦ならそれまででしょ」

「意外に厳しいこと言うわね……」

「後輩にも言ってるけど、作戦って一つ立てたらハイおしまいじゃないんだよ。状況は常に動き続けてるし、他人は思ったように動いてくれることは少ないし……」

「実感ももってるなあ」

実際にガチツとハマった作戦なんて皐月賞の時しか無いんじゃないだろうか？

それだつて仕込みが半年以上必要だし。G1ひとつ取れるならそれでも安いと言えるかもしれないけど。

「対策は……まず思いつくのは、相手の予想を外すこと。レース中だとそう簡単に修正はできないから、結構効くよ」

「ストライプさんやセイちゃん予想を外しても対応してくる印象がありますけど……」

「ストライプを基準にしちゃダメだよスペちゃん！」

「ただ、それをするにも少し問題があつてね。相手が何を目的にして

るかがわかってないと効果的に対策が打てないんだ」

「目的って？」

「一着狙いでレース自体をグチャグチャにしに行くか、安定狙いで掲示板入りを目指すか」

ちなみにぼくは基本的に前者だ。結果的に後者の目的も果たせるが、やるなら勝つという気でいる以上勝ち以外に目を向ける気はない。

一方で、後者の安定志向も理解できる。特に、中央では勝ち上がることで自体が本来難しく、トレーナー契約に際して用いられる「一定の成果」というのは掲示板入り以上を求められるのが（稀に素質に優れたウマ娘は何が何でも一着！ くらいの感覚でいることもあるけど）通例だ。

掲示板入りすればウイニングライブでも比較的目立つ立ち位置に行ける可能性は高くなるし、注目度も上がる。ファンがつけば宝塚など、グランプリレースのファン投票でそれなりの順位に入れて出走の可能性も生まれる。気の長い話だが、これもひとつの道だ。一発逆転にばかり賭けようとするとしても勝ち上がれないという問題もあるしね。

ともかく、ウマ娘によってその辺の傾向は異なる。大博打前提で勝ちに来るか、一着は逃してでもなんとかして掲示板入りを目指すか。そこを見極めきれないと、的外れな対策をすることになりかねない。

「まあ、そんなところ。もうひとつの対策は……」

「対策は？」

「……これ言っているのかな。元も子もない話なんだけど」

「俺たちは言われなきやわかんねえし」

「まあそれもそうか。えつとね、策を弄されても関係ないくらいフィジカルでねじ伏せるって話なんだけど」

「本当に元も子もありませんわ……」

「でも一番確実だよ。スズカ先輩に策とか通じそうにないでしょ」

「あ……」

やりようはある、と思うけど。強引に先頭に立ちに行って展開の邪

魔をするとか。

まあその辺はね、実戦になってみなきやわかんないから考えすぎるのは禁物だ。

「で、テイオーの場合は……」

「ちよつと待ってよストライプ、何でボクの話だつて決めつけてるの!?!」

「ぼくのフォロワーが増えつつあるって話ならクラシック世代つてことでしょ。同世代以上でそんな言い方しないし。で、スピカでレースを目前に控えてるウマ娘つて言ったら——」

「うぐう」

別にいいじゃん、と思うんだけどここで素直に言つてこないあたり、プライドが邪魔したのかぼくを騙せる可能性があると思つたのか……。

まあどつちでもいいや。大した問題でもない。

「テイオーはもうとつくに対策ができてるから問題ないと思うよ」

「うえ?」

「……最初の模擬レースのことですわね?」

「ああ、アレね」

「相手の走りに惑わされずに、自分の走りだけを貫く。それさえできれば、ぼくに勝つたのと同じようにやれるよ。逆に言うと、対策が対策がつて言つて思考が逸れすぎると、普段通りの走りはできないだろうね」

テイオーの強みはその総合力の高さと、それを余すところなく表出できる体の柔軟性だ。時に柔軟性が高すぎるからこそ、可動域を無視して負荷を与えてしまつたりもするが……適切な走り方をする分には強力な武器に違いない。

あとは、そこにどれだけ不純物を混ぜ込まないかだ。特にテイオーのように高い実力と自信を兼ね備えるウマ娘は、精神の揺らぎがパフォーマンスに影響しやすい。対策という意味で言うなら、ただ個人としてベストを尽くすことが間違いなく最大の対策になるだろう。

「ぼくから言えるのはそのくらいかな。じゃあ皆、オープンキャンパ

スの案内準備頑張ってる」

「お、ー……思い出した……」

「お前らも大変だな、これ食って元気出せよ」

「何でゴルシが他人事みたいに言ってるの!?!」

「ゴールドシップさんいつの間にかストライプさんの隣に……」

言いつつ、(勝手に)ゴルシパイセンが差し出したのは、鮮やかな緑色のペーストを芯にした海苔巻きだった。

「涙巻きわさびだけを具材にした海苔巻き。当然辛い。じゃん!?!」

「へっ、このゴルシ様がそんな普通のもを出すと思ってるのか……?」

「作ったのはストライプでしょう」

そうだが。

まあ色んな意味で変化球なのは間違いない。どうぞ、と促すと、まず食に対する興味が強い(穏当な表現)スぺ先輩が先んじてひとつを口に運ぶ……と。

「あれ、辛い……これ、もしかしてアボカドですか?」

「そうですね」

正確にはアボカドをメインにワサビっぽく見えるよう具材を混ぜたペーストだ。エセ涙巻きということになる。

へえ、と納得の聲が上がると共に他の面々も手を伸ばし始める。概ね好評だが、唯一「当たった」マックイーンはその場で悶絶していた。

「えっ!?! ホントのワサビ!?!」

「ロシアンたこ焼き、みたいなものがあるといいなと思って、ロシアンお寿司……思ってたよりキクみたいだね」

もうちよつと、お寿司そのものの味をブラッシュアップしてもいいかもしれないと思いつつジュースを渡すと、ひったくるように受け取ったマックイーンはすごい勢いで飲み干し始めた。

甘党だからなマックイーン……こうもなるってものか……。

その後はぷりぷり怒るマックイーンをなだめて皆に系列店の割引券を渡し、トレーニングに行くのを見送ることになった。

ダービーまであとちよつと。

一度レースから離れて俯瞰すると、学園の皆が浮足立っているのがよく分かった。

余計な助言したかな

無敗の皐月賞ウマ娘。それが現在のテイオーを示す言葉だ。

ちなみにぼくもダービーまでそう呼ばれていた時期があつたのだが、ギリギリの勝利が多くテイオーほど「三冠確実か!」とか大々的に報じられはしなかったと思う。ここで「ぼくも当時無敗の皐月賞ウマ娘だったよ」なんて言う縁起が悪いので何も言わずにおいた。

そして言わずにおいたらイギリスの重賞を勝って一時帰国してきてスペ先輩と談笑していたスカイ先輩に言われてしまった。

ぼくの努力を返してほしい。

さて、そういうわけでダービーの前日。

……ぼくはトレーナーさんとだいぶ揉めていた。

「東京レース場行くくらいいいじゃないですか! 一ヶ月経ったんですよ!」

「現地に行くとは絶対に高揚してあなた抑えきれないでしょう」

「……………そんなことないっすよ!」

「そんなことあるようですね」

最近のぼくは、欲を抑えなくなったから以前よりも少しワガママだ。

当然だがダービーなんて現地で見ようもんなら、熱に浮かされて心が揺さぶられることも間違いない。走りたい欲が刺激されるだろうから、それをなんとかして発散するために色々と試行錯誤することになるだろう。

……いや試行錯誤で済むだろうか。普通に走りに行くんじゃないか?

「だってもうほぼ治りましたよ……!?!」

「……まあ、あなたなら癒合していてもおかしくありませんが」

ぼくの骨が変な信頼を受けている……。

いや、実際痛みはもうほぼ無いんだ。ちよつと違和感があるかも? くらいで。

「それでも医師の判断を優先しましょう。あなたはこういう時の判断は専門家に任せられるはずです。そうですね？」

「それは判断が難しい時で」

「そうですね？」

圧がクソ強い。ぼくは頷かざるを得なかった。

実際専門家の話を出されると弱い。ぼく自身、素人判断は避けて専門家の意見に耳を傾けるべきというスタンスなのでこの話を出されると本当にどうしようもなかった。

忙しいこともあつてか、病院に行つて再検査ということも特にはしていない。通常の診療の範囲だけなので、治療期間が短縮されたということも無かった。

「先に言つとききますけど」

「何ですか？」

「……テレビの前にいる時のぼかあ史上稀に見る浮かれポンチですからねー」

「噂には聞いてましたけどあなたそんなにテンション変わるんですか」

「だいたい」

自覚はあるというか自覚を促されたけど、ぼくが友人を応援する時の姿勢はデジさんのそれに似てしまう。

東京レース場は学園から目と鼻の先だ。よつて通常、ダービーを見るために寮のテレビを使用することはまず無い。

よつて明日、カフェテリアのテレビ前では浮かれきつたシマウマが独りでダンサブルすることになるわけだ。

ハタから見ると軽いホラーである。

・・・≠・・・

——というわけで翌日。

カフェテリアにはマジで誰もいなかった。
寂しい。

「あーあー普通こういう時誰か残ってくれるもんじやないのかなー！」

と、言っではみたが当然誰も反応してくれるひとはいなかった。

しようがないね。基本中央に所属してるウマ娘は走るのが大好きだし他人が走ってるのを見るのも大好きだ。中央で働いてるひともだいたいそうだ。現地に行けるなら当然行くだろうとも。

しようがないついでにフライヤー借りて揚げ物パーティーだ。まあパーティーと言いつつだーれもないんだけどな！　ワハハ。

「寂し」

作り上げた高級(当社比)ポテチは、外はパリパリ中はもっちり。心の寂寥感と裏腹に試作はうまくできていた。

いいさ。大画面テレビで一人で見えるダービーも乙なものよ。ケニア産の仮面まで装着しちゃったりして。イエイエイエ。

「うおっ!?　森の精霊!」

「あ」

——そんな投げやりな感情でダンスブルしていたところ、カフェテリアに入ってくる人がいた。

元チーフである。

ふざけて仮面までつけてるせいで外見上のヤバさは倍増だ。オマケに知り合いが来たせいで一気に冷静になった。

……………。

「元チーフ、いったい何をしてるんですか？　びつくりさせないでくださいよ」

「恥ずかしいのを誤魔化そうとしてるのか知らんが、こっちが悪いよ
うな言い方をしてるのはやめんか」

とりあえず責任転嫁してみたが想像より圧倒的に早く見抜かれた。残念だが見抜かれた以上どうしようもない。ぼくは仮面を取って向き直った。

「それで、ご用件は？」

「レース場に行けないだろうから、寂しがっているだろうと利紗が言っついてな」

「さみっ……寂しがつてるといふほどではありませんが！」

「しかしな……その有様はどう見ても暇人かよっぽど寂しい人間の……」

「……………」

いや、分かつてるけども。

実際今の今までクツソ暇だったし寂しいし……だから揚げ物やりながら奇行に走っていたとも言えるんだけど……。

だからって指摘されたら本当にそうだと認識するしかないじゃないですか。やめてよ現実を直視させるの。

「まあまあポテチどうぞ」

「どんだん誤魔化し方が雑になってきていないか？」

「そこで追求しないでください」

だから雑になってくるんですよ、とは思っても言わないことにした。そろそろレースが始まるからだ。

今回のダービー、テイオーはまさかの大外枠の8枠18番。客観的に言って運が悪い。前年のぼくもそうだった。縁起が悪いのでぼくは本人には言わなかったけど。

他のひとは言った。

「ストライプ、お前ならどう見る？」

「大本命はやっぱりテイオーです。外枠なのは気にかかりますけど、それほど影響するコースじゃないですし……ただ、リオナタールアニメ2期登場のモブウマ娘。も青葉賞から順調に勝ち上がってきてここまで二連勝なので相当強いですよ。イオンシーズンも、ジュニア期にかかりの場数を踏んできている巧者です。今までの勝ちレースと比べて距離が長いのが気にかかりますけど」

「他は、そうだな。身体能力で圧倒される範囲とも考えられるか……」

「他にも色々ありますけど……マイラーなら2500まで対応できるでしょうし……」

「お前は何を言っているんだ」

マイラーは有馬を走れる。これはオグリ先輩から学んだ教訓だ。グラス先輩も朝日杯を勝っていて有馬を勝ち、とある安田記念覇者も

有馬で半バ身差の二着に入った史実で秋の天皇賞及び安田記念を制したギャロップダイナ。ことからこれもこれは有意なデータとして数えられるはずだ。当然そんな事実はない。

ほどなくして、レースが始まる。全体的に見て好スタートを切ったウマ娘が多い中、最も良いスタートを切ったのは間違いなくテイオーだった。

それを想定しているかは別として、イニシアチブを取るには間違いなく好スタートを切る方が良い。ぼくがほとんどのレースでロケットスタートしているのもそのためだ。控えた位置に下がるにしろ、前に出るにしろ選択肢が多ければ多いほど良い。

ただ、問題は……外枠が影響しているせい、内側に切り込めてない。これではコーナーに差し掛かる時に小さくないロスが生じてしまう。

(いや、テイオーならいいのか)

……もつとも、その辺のロスが問題になるのはぼくのように最高速が劣る場合だ。

スタミナさえちやんと確保できていれば、時間と速度を調整すれば多少のロスはすぐに巻き返せる。外から直線で一気に駆け上がるということもできるだろうし。

レースの流れとしては、想定通りの先行策。全体の能力を考えるとレースが動き出すのは後半、特に4コーナーからになるだろう。

あとは……それ相応の不確定要素は確実にあるか……。

「誰が仕掛けてきますかね?」

「ふむ? お前も最近策を弄するウマ娘が増えたという話は聞いたことか」

「というより直接相談受けたっていうか……」

それも対策^テされる側^イと対策^オする側^{それ以外のひと}の両方から。

「……む」

と、そこで動きがあった。テレビの画面越しだから上手く把握できないが、どうやら後ろにいる走者が何か仕掛けたようだ。12、13番手にいるウマ娘がペースを上げている。

……しかし、このまま行くのは少し危険だろうな。後ろのペースが上がるということは全体のペースが上がるということ。全体のペースが上がればそれに伴ってタイムも縮む。そうになると、身体能力で劣る側のウマ娘の勝ち筋が一つ消える。

理論上、常時ほぼ等速で走りきれぬぼくはそれでもやる理由があるが、普通に考えると……まず避けるべきだろう。

加えて、オーバーペースを誘発して潰すならもつと速度を上げさせるべきだ。今のままでは半端という印象は拭えない。これでは――。

『まもなく4コーナーに差し掛かります。外からトウカイテイオー、トウカイテイオーが来た!』

――テイオーを抑えきけることはできない。

余計な助言したかな。ここまで冷静なレース運びができるようになってると、次やり合う時に絶対面倒くさいことになるよな。

上がったペースに無理に対応せず、順位が落ちることまで含めて計算に入れて、確実に外からスツと上がっていく。これをやられるとどうしようもない。

まあいいか、それはそれで。強い相手なら強い相手で競い甲斐がある。

『差し切って……ゴールイン! 一バ身差で一着はトウカイテイオー、これで二冠達成つ!!』

「圧巻ですね、やっぱり」

「怖い、と思うようなことは無いか?」

「常々、後からやってくるウマ娘の能力がどんなもんかと戦々恐々はしていますよ」

中でもテイオーは、入学直後から付き合いがあつて能力の高さも知っていることから、別格と言っている。

それでも最近のぼくの状態から考えると、競うことに抵抗感はない。……そこまで無い。

「けどやり合おうという気持ちに変わりはないですし……いざやるなら長距離を^{ホームグラウンド}選ぶからそう簡単に負けませんよワハハ」

「戦略的に見ればそれもそうだがな……」

トレーナーさんも元チーフもそうだが、正々堂々やりあう、とか同じ条件で競う……その上で勝つ、ということに対して少なからず理想を持っているように思える。

当然、指導者としてそういう理想を持っていることは大事だと思うし、指針としては正道だがぼくに合うかどうかは別だ。まあ、その辺も汲んで合わせてくれてはいるのだけど。

「……ん？」

そうしたところで不意に、テレビ越しではあるがテイオーの歩き方に僅かな違和感を覚えた。

まさか、と背筋が粟立つ。いや、でも……しかし。

必ずそうだというわけじゃないが……だとしてもテレビ越しだ。本当にそうか、と言われると確証は無い。レース直後なんだ。これまで実戦として走ったことが無いだろう2400mという距離もあり、体の各所が痛みを訴えても不思議じゃない。

……しかし。

「どうした？」

「テイオーの歩き方、少し違和感ありませんか？」

「……俺には分からんが」

……普段同じ学年同じ寮で一緒に生活しているからこそ、見抜ける程度の違和感、かもしれない。

一応、タキオン先輩なんかにも連絡したほうがいいのだろうか。でも、確信できる要素は特に無いし……。

結局、それからしばらく悶々とした思いを抱えながら過ごすことになった。

ポテチは美味しくできたし、テイオーは二冠達成したし、嬉しいことの方が多はずなんだけど……悩ましいなあ。

後日聞いてみると、軽度の捻挫だった。

結論から言うとただの杞憂である。

すり減った神経を返してほしい。

中距離は一旦捨てよう

6月中旬。宝塚記念を間近に控えた時期だが、身近なウマ娘で出走することになってるのはマックイーンとライアン先輩だけなので、今のところチームや個人としてはそれほど関係があるわけではない。

特にぼくは、もう痛みはまるつきり消えたとはいえまだリハビリ期間だ。医師の指導のもとトレーニングは再開しつつあるが……まあ、本格的なものしばらくできないだろう。

そんな初夏のある日のこと。ぼくはカフェテリアにネイチャから呼び出しを受けていた。

「ここ最近呼び出し多いな。」

「それで、用件は——だいたい察しはつくけど」

「つくんだ」

「この時期だしね」

若駒ステークスで好成績を残したネイチャだが、その後トレーニングのしすぎで骨膜炎シンスフリンを発症。皐月賞とダービーに出走はできなかった。

しかしながら、実力そのものの高さは証明されている。夏のトレーニング次第では、いわゆる「夏の上がりウマ娘」何らかの要因で急速に力をつけた結果、怒涛の勢いで昇給してG1などの重賞で結果を残したものを言う。として菊花賞に出走できる程度の地力はあるんじゃないかな……とも思う。

さて。

「……で、何で皆来るかな」

「その方が効率が良いかと思ひまして」

今回も、やってきたのはネイチャにターボ、イクノにタンホイザのチームカノープス（何やかやで全員入部した）の誇る主力四名だ。

まあ主力というか将来性に期待してる面が多いとは思うけど……そこは一旦置いてこう。

「ネイチャはテイオー対策でいいんだよね」

「……うん、菊花賞でぶつかる……ようにするから」

「ターボは？」

「菊花賞でテイオーに勝ちたい!!」

「そうだね。まずは勝ち上がりを優先しようか。イクノは？」

「トウカイテイオーに勝ちたいですね」

「シニア級でしょイクノ!? まだやる機会無いじゃん……タンホイザは？」

「トウカイテイオーに勝つよお!」

「デビュー前じゃん!!」

ダメだ。なんか変なギャグ空間的なものに巻き込まれてる。

いや言ってること自体は別におかしなことでもないんだけど……それこそ、テイオーに勝つくらい在意気込みでいるということなら気持ちも理解できる。ぼくだっていぎやるなら常に勝つつもりでいるから、気持ちは同じだし。

しかし、デビュー前のタンホイザはまずメイクデビューを制するところから考えるべきではある。

四人ともノリで発言してるでしょ今。

「で……テイオーか……」

「すっごい悩んでるね」

「悩むよー」

ネイチャとターボに関して言うなら、次やるのは菊花賞。以降は中長距離の路線でぶつかるだろう。

イクノとタンホイザがテイオーと当たる可能性があるとしたら、シニア級の……春三冠と秋三冠。少なくとも短距離からマイルで当たることはまず無い。

対してイクノの適正距離は、ここまでの勝ちレースから考えるとおむね短距離く中距離……いや適性広いな。

となると必然的に中距離戦を想定しないといけないわけだけど、テイオー相手に中距離戦はあまりにも分が悪い。引きずり出せる最短距離で想定できるのは、恐らく1800mが限度……大阪杯のステップで中山記念、秋の天皇賞のステップで毎日王冠があるから想定でき

ないわけではないが……どっちもステップ競走としては2000m以上のレースが他にある。わざわざそっちを選ぶ理由が無いんだよな。

2000か……2000なあ……。

……よし、中距離は一旦捨てよう！

「とりあえず長距離想定でいい？」

「アタシはそれでいいけど、イクノもそれでオツケー？」

「構いませんよ」

「じゃあ長距離を前提に考えるけど……多分、テイオー自身の適正距離は……3000までは無いと思う」

「無い……かなあ？」

「ダービー見る限り、多少の余裕はあると思う。けど、それでも多分もうちよつと距離を伸ばしたら無理が出る」

十全に能力を発揮できる限度は、2800くらいだろうか。あくまで他のウマ娘も色々見てきた上で、比較するとおおよそのくらいだろうという推定だけだ。

クラシック級はフィジカルで勝ちきれない範囲だと思う。ただ、それ以降は厳しい部分があるだろう。

「その点で言うなら今のところ一番勝ちの目があるのは……多分ターボ」

「えっ!？」

「おおー。ターボすごい」

「ターボすごい!？」

実際すごい。

大逃げを貫徹できるひとは少ない。それで勝てるひともだ。スズカ先輩は間違いなく異質だが、ターボも一歩踏み込めばそこにたどり着く資質が確かにある。

普通のウマ娘なら、周りからの勧めや指摘でスタンスを変えることもある。それが勝ちに繋がる可能性があるなら尚更だ。本能的に勝ちを求める傾向にあるウマ娘は基本、トレーナーさんに「こうした方が勝てる」とアドバイスを受けると素直に受け入れる傾向がある。

それでも揺るがず、これと定めたものを武器として磨き続けるのは、良くも悪くもひとつの強さだ。

「今のスタミナとしてはマイルが適正なんだろうけど、2000でも勝ってるから中距離以上でもダメってわけじゃない。あとは、駆け引きができるなら……」

「いきなり難しい注文が来たね」

「さもないや3000逃げ切るだけのスタミナを身につけるか」

「もつと難しいよお……」

「そうだね。でも菊花賞ってそういう舞台だから」

ただでさえ一流どころが集まるG1、中でも菊花賞は「最も強いウマ娘が勝つ」とまで言われる通り、フィジカル面に自信を持つ強豪が集う。

それこそ、夏の間成長して勝ち上がってきたような隠れた逸材もそうだし、ダービーを経て菊花賞に出ることを決めたようなひと、長距離に対応できるという自信があるはずだ。それを突き崩すのは容易なことじゃない。

大逃げは、大逃げというだけでレース展開を壊せる可能性を秘めているが、展開が壊れるだけで勝ちに繋がるわけではない。むしろ、大逃げした本人は早々に沈むまでありうる。

単なるスタミナのみならず、思考力や精神力、何より天候などの運が——運こそが！トラウマ。揃ってはじめてレースになると言っても過言ではない。

「場数を踏むのはいかがですか？ 実戦の場でこそつかめるものもあります」

「イクノらしい意見だけど、それもちょっと難しいんだよね。何せ長距離レース滅多に無いから。それに——」

「ストライプ、なんか否定ばかりでつまんない！」

「こらターボ」

「ううん、ごもつともな意見だよ」

可能、不可能を明確化してから実践に移るというのはぼくの基本スタンスだ——が、わざわざ思考の流れを他人に明かしたりしないので

行動が唐突に映ったりする——けど、こういう作業が肌に合わない人がいるのは当然のこと。

うちのチームだと、トレーナーさんとかシャカール先輩とか、議論を始めるとすぐ乗ってくってくれる人が多いから忘れがちではあるんだよね。

「じゃあ、ターボもこう言ってることだし、早速実践に移ろうか」

「実践って……何するの?」

「ぼくもそろそろ走つときたいから併せを少し」

「ストライプと勝負!」

「勝負じゃないでしょ」

「勝負でもいいよ。むしろそのつもりの方が、もっと菊花賞実戦を想定したトレーニングになるだろうしね」

勘を養うというのはそういうものだ。

デビュー前のタンホイザはそこまですると脚を壊すからほどほどにするとして、リハビリとしてなら、クラシック級のネイチャとターボ、シニア級だが長距離は適性外のイクノが相手でちょうどいい感じかな。

それじゃあ——。

「皆には今から3000mの距離感覚を肌で覚えてもらうよ」

ネイチャの顔が露骨に青くなった。

……#……

2時間後。コースの上は死屍累々の惨状だった。

ターボは途中で逆噴射。ネイチャはゴールと同時に倒れ込み、イクノはバテバテでラチにもたれかかっている。タンホイザは2000m目標ということで1000m時点で途中参加だが、ターボと一緒に目を回している。

とりあえず全員リヤカーに乗せてコース外に連れ出した。

チームでコースを占有している時間帯ではない今、他の子も順番待ちしている。用事が終わったら退散がトレセン生のマナーだ。

「動き理解した？」

「理解できるかつ！」

今のぼくはここ一ヶ月のブランクがある上にまだ大してリハビリも進んでない。維持のためにある程度のトレーニングは欠かしてないけど、実質、現状はクラシック級の頃のような能力だと思う。

まあ2、3回走っただけでは3000mを走る時の動きが分からないというのも仕方ないと言えば仕方ない。

「じゃ、もう一走」

「待つて。本当に待つて。せめてあと30分……」

そこから皆が喋れる程度に回復するまで、10分ほどの時間を要した。

「めっちゃ潰す気で走るじゃんストライプ……」

「それでもな……ん……ないよ？」

「あ、今言い淀んだ！」

まあ……うん……実際足技は使ってたし、否定しきれない状態に追い込んではいいる。

ただ、これに対応できないなら本当に負ける可能性は高くなってしまふ。

「今はちよつとした策を交えながら走るのがトレンドでしょ？ 例えばテイオー自身はフィジカル一本で勝負しに来るとしても、他の走者のうち何人かは確実にペース崩そうとしてくるよ」

「……自分たちだけが策を使うわけじゃないってワケね」

テイオーは強い。よつて三冠の阻止を目的として皆対策を練つてくるのは間違いないが、忘れちゃいけないのは対策しているのは自分たちだけではないということだ。

トウインクルシリーズはマッチレース一対一ではない。複数名のウマ娘の思惑や信念が絡んで初めて「レース」になるんだ。

例えば、ぼくは常套手段として、ターボのようなウマ娘を後ろからつついてペースを上げさせることが多い。しかし、ぼくがそう考えるなら、同じように考えて他人のペースを上げようと画策するウマ娘は必ずいるだろう。そうやって複数人が策を弄すれば、勘付かれて逆に

ペースを下げる……。…。

………ターボがペースを下げる………？

事例として不適切だな。スカールレットを例に上げよ………いやスカールレットが引くか………？

アイネス先輩とパーマー先輩は根性で逃げ切り狙い……マルゼン先輩は根本的な速度違いだから結果論……ファル子先輩はスズカ先輩と同タイプだから引く余地がない……

どうしよう。知ってる逃げウマ娘がペースを上げる姿しか思い浮かばない。スカイ先輩なら退くのも含めて作戦を読み切るだろうが……。

………ともかく、一般論として、複数人がペースアップを画策していると勘付けば、逃げウマ娘はそれに対応してある程度速度を調整してくるのが普通だ。

が、言葉で伝えるだけでは「そういうものなのか」で終わってしまふ。実感の伴わない知識というのはハリボテ同然だろう。なので、ここで一度「ペースが上がって脚が潰れる」という確かな経験を積んでもらう。本番のレースのように本気で潰す気は無いにしろ、その半歩手前くらいは味わってもらわないとトレーニングの意味がない。

「だからペースを崩されるのも潰されるのも一度経験してもらいたい。こういうことがあった、って経験があればそれだけで視野が広がるからね」

「だからって本気でやるかなフツー！」

「本気だと思う？」

「………本気じゃないの？」

「本気でやってもいいよ」

「ゴメン、今はいい」

「今は」ってことはいずれ本気のぼくとやる気はあるということになる。

楽しみだ。

「いやあ、それにしてもトラちゃんの求める水準は高いなあ。もつと頑張らないと」

「まあ……目標が高いならそれに合わせないとだしね。ただでさえ、長距離の経験値って点だとチームスピカに勝てるチームはそれほど多くないんだし」

「そんなにだっけ？」

「マックイーンとゴルシ先輩が菊花賞と春の天皇賞を勝ってるし、スぺ先輩は天皇賞春秋連覇でしょ。ステイヤーが強いよあのチーム」

既に長距離戦を制しているウマ娘には、それ相応のノウハウが蓄積されている。そうした先達がいるチームは、後に続く世代に併走などを通じてノウハウを継承していくことができることだろう。

ベテルギウスでも、ぼくはスカイ先輩から色々教わっているし、ぼくはハヤヒデ先輩に色々教えている。そうやって、チームとしてある種の継承のラインが構築されているのが理想ではあるが……その点で考えると、カノープスは少し長距離に弱いかもしれない。

「カノープスの場合……どっちゃかって言うとな坂トレーナー、マイルと中距離寄りの指導が多いでしょ？」

「なぜ知っているんですか？」

「うち主要なチームはデータ揃えてるから。あと、ぼくトレーナー寮の前に屋台出してるからそれで話聞くことがあって」

「時々夜にいなくなってるのそれか！」

ちなみに売れ筋はお茶漬けと甘い卵焼きをセットにした夜食定食（300円）だ。次いでにゆうめん暖かい出汁で煮たそうめん。がよく出る。

条例の兼ね合いもあるので、万一のことも考えてぼくは基本22時までには退散するが、それでも有益な話を聞く機会は多い。

さりげない日常会話からでも情報を得られることがあるし、週一程度の頻度でしか寮の夜間外出許可が出ないが、何かと重宝している。

近年のレース傾向から考えても、長距離路線をあまり重要視していないと語るトレーナーは多い。長距離レース自体が縮小傾向なのもある。時代の流れというものだろう。対して短距離路線が苦手なトレーナーも中にはいる。チームスピカのトレーナーさんなどがそうだ。あつちはあつちで特異な才能が必要な面もあるので、致し方ない

部分はあるだろうが。

「——というわけで、まずはチームスピカに負けない程度の長距離の場数を踏まないかね」

「お、お手柔らかに……」

「ここで「やらない」という選択肢が無いネイチャがぼくは大好きです。」

新兵器を導入します

宝塚記念の激戦を制し、ライアン先輩が悲願のG1ウマ娘になってから少し。今年も夏合宿の時期が訪れた。

ぼくはこの合宿をもってトレーニングに完全復帰。今年も例年通り、(各所に許可をもらいに行った上で)偵察に移ることとなったのだが……。

「今年からはこの新兵器を導入します」

と、示して見せたのは複数枚のプロペラが揚力を生む最新鋭マシン
マッスライン
……。

「ドローンってお前」

「ついに行き着くところまで行き着いたって感じだな……」

空中から俯瞰的にトレーニング風景を記録できるということ、当初から考慮はしていたが金銭的な問題で断念していた。

去年の時点でも他に投資すべきものが色々あったので購入にまで踏み切る事ができなかったのだけど、今年になって経営の安定もあつてようやく導入したというところだ。

そこそこモーター音が大きいのが難点だけど、それを補って余りある利便性を誇る。

シャカール先輩はかなり興味が向いているらしく、一台手に取ってしげしげと眺めていた。

「な、なあ……行き着くところまで行き着いたとは何なんだ？ ストライブ君は去年までいったい何を……？」

「Ah……そういえば、知りません、でしたね……」

「二年目はコイツ自身が偵察行つて、二年目はストライブが行くつて見せかけてアタシたちに任せたりして」

「去年は外部スタッフを雇い入れていました」

ハヤヒデ先輩が無言でドン引きしている。

「へへっ」

「何を得意げな顔をしとるんだお前は」

「ストライプさんが用意したものにしては、台数が少ないですね」

「あ、言われてみれば」

「もう何台かは動かしてるので」

チームの集まりの場に持ってきたのは3台程度だが、本当はもっと買っている。

既によそのチームのトレーニングが始まっているので、この場に持ってきているもの以外はだいたい稼働中だ。よそに貸し出しているものもあるけど。

「しかしなストライプ、確かドローンの操縦は専用の資格が必要2023年1月より。特定の要件を満たした状況でドローンを飛行させる場合、国家資格が必要とされている。16歳以上で取得可能。じゃなかったか？」

「大丈夫です、持ってます」

「お前いつの間に……」

脚折ってから忙しかったのは確かだが、その理由の一つが資格の取得だ。

趣味……ってことはないけど、今後の仕事のためになるだろうと考えて色々欲しい資格はあったんだよね。いきなり活用できたように何よりだ。

「まあ仮に資格無くても、資格持つてるヤツ雇ってんだらうけどな。じゃなきや今外で動いてねエだろうし」

「一人で全部動かせるわけじゃないですし、そですね」

何でも自分だけでやろうとするとパンクするだけだ。任せられるところは他人に任せるくらいでちょうどいい。

今回は個人的にも資格欲しかったから自分でやってるんだけど。ドローン配送とかビジネス的にも発展の余地があるし……。

ともかく、こうしてドローンが導入された夏合宿が始まった。流れそのものは例年と同じだ。午前中に密度の高いトレーニングをして、午後からは別のことをする。

今回は、午後からの時間はブランクを埋めるためのリハビリが主軸になった。出店の方は人を雇っているので問題ない。

……で、そういう具合で数日ほど。そろそろ体のサビつきも取れてきたかなという頃合いのことだった。

「トウインクルシリーズ現役ウマ娘砂浜リレー大会……?」
「うんー!」

またなんとも、ある意味夏らしいお祭り企画の情報がテイオーから寄せられた。

ウマ娘の体質上、トウインクルシリーズの走者とそれ以外で区分けするのはある程度仕方がないことだ。やりようはあるんだけど、面倒を避けるなら単純にこういう形式が望ましい。

で、砂浜でレースとなるとほぼダート……ぼくにとっては得意分野だ。誘ってくるのも自然と言えば自然かもしれない。

「なるほど、で、ぼくをチームに誘いに来たと」

「そーゆーこと! リハビリにもちようどいいでしょ?」

「そうだね。で、他の枠何人? 出場者決まってる?」

「んーん、でも勝ちに行かならまずストライプかなーって。参加人数は4人だったかな?」

こういうふうの評価してくれるのは非常に嬉しいところではある。が、しかし勝ちに行くか……単純なリレーだとぼくの場合勝てるかどうかは微妙なんだよね。ひとりが走る距離も1000mほどだろうし。この海岸線全部がトレセン管轄ってわけでもないし……となると……? いけるか……?

「賞品とか出る?」

「えーっと、何だったかな……トレセン学園の近くのお店でスイーツがいくつ無料? とかだったと思うけど」

「しよっぱいな……まあいいけど」

「いいんだ」

スイーツなのに。

トレセン学園周辺ってことは帰ってからじゃないと食べに行けないし何ならばは合宿中に抜けてフランス行くからしばらくお預けになるぞ。

いやそこはいいんだ。考え方を変えよう。近隣店の人気スイーツ

がどういった理由で人気なのかをリサーチする好機だ。

「ファル子先輩呼ぶ？」

「ああ……それがね、ダートで強い子は1チームひとりまでなんだって」

「ちえっ」

となると、ファル子先輩やミークとで固める手はナシか。

基準は……ダート重賞で好成績を残したひとつとところかな？

単純にダートレースに頻繁に出てるってことだとチーム作りようがないってこともあるし。

ってなると、ジャパントダービー着は間違いなく制限の対象だな……砂浜で走ることを前提にすると芝よりも砂の適性が重要になる。

「じゃあ候補は絞られる。ツルちゃん先輩とマックイーン——それから、ターボとネイチヤ」

「マックイーンは分かるけど、ターボとネイチヤとツルちゃん？」

「うん。ぼくが知る限り、一度はダートのレースで勝ったことがあるはず」

「……ストライプ、もしかして皆のレースの記録だいたい覚えてる……？」

「いつものことじゃん。そんな不思議そうにすること無いでしょ」

「ボクの4戦目は？」

「稍重の若葉ステークス。上がり最速で逃げ気味の先行策」

「こっわ……」

しかしぼくの知識はあくまで競走者としてのものだ。トレーナーさんや元チーフに聞けばもっと具体的に詳しく聞けることだろう。

さて、いざ決まれば行動は早い。まずマックイーン、次にネイチヤ、ターボと参加の可否について聞いていく。

が。

「……ダメだ、こっちは全滅。マックイーンはメジロ家が出るしネイチヤとターボはイクノとあともうひとり誘って出るって」

「えー」

「えーっ」

間が悪いというよりは、想定が甘かったと言うべきだろうか。

冷静に考えると、チームで行動することの多いカノープス組と、メジロ家組でまとまっていることの多いマックイーンはそうなることを予測しておくべきだった。

結果、ぼくは全くの素寒貧。一方、テイオーはツルちゃん先輩を呼んでくるのに成功したので格付けが完了してしまった。

……格付けとかするような状況かこれ？

「ストライプはいつも詰めが甘いんだから」

「いつもってほどいつもじゃないでしょ!？」

「どうだろ……ストライプちゃん前の野球の時も結構予測甘かったし」

野球の時の判断されても困るんだけど……こま……いやツルちゃん先輩の判断材料そこしか無いから言いようも無いか……。

「どうしよ。現役つくくりだとアイネス先輩はメジロ家に取られ……あつ」

「誰か思いついた？」

「……現役、いたなあ」

ちよつと待ってて、とふたりを置いてぼくは心当たりのもとに向かった。

そうして連れてきたのは――。

「ニシノフラワーです。よろしくお願いしますっ」

「フラワー!？」

「大丈夫なの？」

「安全安全。 実際安全」

――つい先日、夏合宿に入ってすぐにデビュー戦を済ませた我がチームベテルギウスのニューエース、ニシノフラワーである。

いやあ……一瞬焦った。でも冷静に考えると「現役」なんだから新人でデビューしたばかりの新人でもそのカテゴリには入る。

「現役」という括りに対する認識が、この時期にデビューを果たすような新人がそう多くないこともあって、クラシック級以降にはばかり

偏ってたせいだろう。実際、フラワー以外でもデビューを果たせる新人の数はそう多くない。

ちなみに、年齢のこともあるからちよつと心配で、チームメンバー全員がレース場に向かうことになった。これも夏合宿Ⅱ夏休み中という状況あつてのことだが、何やかんや怪我とか接触とか、危惧したような事態にはならなかった。

……むしろ引退したはずのタキオン先輩まで含めてチーム全員が来たせいで威圧感が強く、オマケに食い入るようにレースを見つめるものだから保護者会と揶揄された。フラワーも恥ずかしがって次以降はもうちよつと少人数で来てほしいと言われてしまう有様である。

閑話休題。

ともかく、趣旨を考えると実はフラワーは最適な人選だったりする。

「フラワーは強いよー。何せメイクデビューはダート1000m、5バ身も離しての一着だからね」

「へえー！ まあ、ボクもメイクデビューは一着だったけどね！」

「私も！」

「ぼくも」

「……………」

全員そうだった。

まあともかく、砂で短距離めのリレーということなら、フラワーは間違いなく相当な戦力になる。本質的なところでは芝向きなんだけど、ダートで一回勝つてるといふ経験は重要だ。

さて、こうなると……。

「じゃあ……ツルちゃん先輩」

「うん、どうかした？」

「ん？」

「テイオーに砂の走り方教えないと……」

「あッ」

……この中でダート競走の実績が無いテイオーに、少しレッスンは必要だろうか。

水の上を走ってるようなもの

ウマ娘の脚質というものは残酷だ。どんなに望んでも芝では一線級の走りができないひともあるし、その逆もまた然り。

更に洋芝と土ダート、オールウェザーの適性まで含めるとまさに千差万別。生まれた国によっては、そもそも自分に合うバ場すら無いということまでもがありうる。で。

——天性の芝ウマ娘であるテイオーをダートに引つ張り出したらどうなるか、という実例が今まさに証明されることとなった。

「これそのうち怪我するやつだな？」

「えーっ!？」

速いこたあ速い。けど、高すぎる柔軟性で適応「だけ」してる状態。このままじゃそのうち変な姿勢になるだろうから怪我が避けられそうにない。

クツション代わりになってくれるダートであっても、全く怪我と無縁というわけではない。ツルちゃん先輩たちにも通じるものだが、現状は能力だけで走っている状態だろう。

「しようがない、気は進まないけどダートの走り方について教えるしかないか」

「やつぱり、ライバルに塩を送ることになるのイヤ？」

「……ってより、走り方変えるとそれだけ負荷の質も変わりますから。ダートトレーニングするのに今まで通りにできなくなるの、トレーナーさんたちに悪いなって」

速くはなるが、負荷が上がった、とかだとダートトレーニングにかける時間を縮めたほうがいいだろうし、負荷が下がったなら、「トレーニング」として適切な負荷に何かしらで調整する必要がある。どっちに転ぶとも分らないんだよね、これが。

まあ、このイベントひとつなら負荷の増減も特に問題は無いだろう。ぼくはともかく、他の皆はダートに出る予定無いだろうし。

ぼくは、その場で砂をひとつかみした。

「基本的な話だけど、砂はサラツとしてて形を変えやすい。だから、ちよつと極端だけど、水の上を走ってるようなものだとも思ってます」

砂はそれ単体で見れば固体だが、地形として成り立つほどの量が集まった総体として考えると、細かな粒子が集まった流体となる。

普通の人間でも砂の上を走れば足を取られるのに、ウマ娘の脚力ともなればなおのこと。もはや沼に脚を突っ込んでいるのに等しい。

「芝の時は主につま先に力を入れて地面を蹴ってただろうけど、砂の時は足裏全体を使うようなイメージで蹴ってみて」

「うえ〜……なんか違和感……」

そりやそうだ。普段の走り方と全然違うんだから違和感くらいあつて当然だ。

その違和感に対して適応できるかどうか、またはそもそも最初から違和感が無いかどうか、砂に対する適性を分ける。ツルちゃん先輩とフラワーもやや苦慮しているようだ。

「ストライプちゃん、これ色々原理があるけど、要するに砂と接する面が大きい方がいいってことだよな?」

「ですね。接地面が小さいと踏み抜いて脚が埋まりやすいんです」

「……………」

「どうしたのフラワー?」

「あ、いえ。こういう時ストライプさんは『ぼくの菊花賞の時みたいに』って言いそうだなあつて……」

「……………いや、まあ……言ってるけど、ウケが良くないから」

自虐ネタすると笑いより先に引かれるんだよ。

気を遣わせないためにネタにしてるのにネタにもならないんじゃないや自虐する意味が無い。

……確かに菊花賞でのぼくの状態がそのまま当てはまりはするから、言っているタイミングではあるんだけども。

「あー! ダメだ、きつついよコレー!」

一方、コツが掴めないのか、テイオーがその場でジタバタし始めた。

ぼくの説明、何かまずかったところあったかな。とりあえず一回目の前でやってみてほしい、と言ってみると、テイオーはその場で実演してみせた。

……のだが、ああ、これはまずい。なるほど、ぼくの説明が良くなかったわコレ。

「テイオー、たしかにぼくは『足裏全体を使うような』とは言ったけど、本当に足裏全体地面にくっつけて走れとは言っていないよ」

「えええ……」

テイオーはぼくの言うことをそのまま鵜呑みにしてしまつたらしい。なまじ柔軟性に優れているせいか、本当に足裏全体を砂にくっつけようと試みたようだ。

当然そんなことは人体の構造上ほとんど不可能だと言っている。さつき言ったように、足全体でというのはあくまでイメージだ。

「ちよつと足先埋めればいいんだよ。地面蹴る時斜め向きになるんだから、それに合うように砂の形の方を変えてさ。力の向きも、普段よりも斜め下方向にして」

「あつ。あー、あー……こういうことか！ んもーストライプ、もうちよつとちやんと説明してよー！」

「えつ、これぼくが悪いの？ ……いやまあぼくが悪いけど……」

もうちよつと正確に説明すりや良かったなとは思うが。

さて、そんなこんなで皆で軽いトレーニングを経てから、しばらくしてリレー大会が始まった。

第一走者は脚質先行としてスタートを切るのが上手いテイオー、続いてツルちゃん先輩、フラワー。最終走者がぼくになる。

最終走者が長めの距離を走るというのもあるが、最後の最後まで垂れないスタミナがあるというのもある。

ただ、何が問題かって、他のひともだいたい同じこと考えてるから最終走者はほぼダートの強者だということだ。

右を見ればファル子先輩にマックイーン、左を見ればミークをはじめダート強者がずらり。

実績で言うところにも決して負けるわけじゃない……っていうか、実

績だけで言うとG1級3勝してるぼくはミーク、アイネス先輩と並んで世代トップだったりするんだけど、ダート路線のひとたちは全体的にギラギラした印象が強く、威圧感もそれに伴って大きい。

ぼくは見た目からして威圧感の欠片も無い。入学から数年経ったおかげでフラワールの背も徐々に伸びてきて、そろそろぼくが抜かされかねないほどだ。

チームで取材を受ける時なども、なんというかマスコット枠のように扱われることが多い。まあシャカール先輩たちに「マスコットにしちやあまりにも人格的に可愛げが無エだろ」と言われる始末なのが。

「ストライプちゃん、今日は負けないからねっ☆」

そして、ファル子先輩もまたなんだかやけに奮起しているようだった。

……あれか？ 夏はダートレースが盛んだからダートウマ娘も元気になるのだろうか。

「なんだか今日は張り切ってますねファル子先輩……」

「ウマドルはいつでも全力勝負！ いつ、どこでファンが見てるか分からないんだもん。だから今日『は』じゃなくって、今日『も』かな？」

さすが、プロ意識の塊。そうだね、少なくともトレーナーさんファン1号は見るもんね。

さて、じゃあミークはと思つて見ると、こっちに向かってブイサインをキメてきた。

「リベンジ」

どうやらぼくは標的にされているらしい。なんやかんやミークも敗戦を気にしていたようだ。視線はぼくだけでなく、ファル子先輩の方にも回っていた。

「……対照的に、と言いますか、あなたはどことなくぼやつとしていますわね」

「マックイーンこそ」

一方、ぼくらはというと、どこか頭がフワフワしていた。

熱中症ではない。が、やはり気候は如何ともし難い。

ぼくはそもそも一年の気温が安定している国の出身だし、マックイーンは芝が主戦場な上に秋の天皇賞を目標にしているものでちょうど今が谷の時期。気が抜けてしまっても仕方ない。

ファル子先輩はこういうのも苦笑するだけで済ますけど、もちろんこういう状態を好まないひとの中にはいて――。

「ふんっ、砂で走る気が起きないって言うつもり？」

闘争心の強いウマ娘、中にはこうして突っかかってくるひともいたりする。

日本において、ダート路線というものは低く見られがちだ。賞金額のせいもあるし、ダート＝地方という先入観もあるし……とにかく、ひとによっては劣等感を煽られやすい環境だというのは間違いない。

当然、中には攻撃的になってしまいうま娘もいたりして……こういう時、マックイーンが対応しようとするのと良くも悪くも正論で返しがちだから話がこじれるだろうなあ……。

「いやあ……先輩、砂で走る気が起きないんじゃないんで、走れないんですよ脚質的に」

「むっ……それはそうだけど……」

しょうがない。ぼくはそのまま先輩に揉み手をしながらにじり寄った。

「ダートで走れないってことは本場アメリカのダートレースやあのドバイワールドカップやサウジカップで走れないってことなんですよ。ぼく個人はその方が辛い……耐えられない……!」

「ストライプ出ようと思えば出られますわよね？」

「もし出られなかったらって話だし出られても勝てないよ距離短いのだから」

というかおよそ大半の高額レースに出走できないのがぼくだ。

マイル戦のサウジ然りドバイ然り短距離戦のジ・エベレスト然り。

「走る気があっても走れないひとだっているんです先輩。あんまり強く言わないであげてください。ね？」

「まあ、そこまで言うなら……」

「今日は実力を見せつけるついでに楽しんでやりましょうよ。あ、ファル子先輩、ウイニングミニライブとかでも企画しちやったりします?」

「え? う、うん、できるなら嬉しいかな?」

「手配しまーす」

「手際良すぎない?」

わずかに釈然としないような様子ながらも、先程よりも敵愾心を削がれた様子で去っていく先輩を見送ると、マックイーンが小さく息を吐いた。

「気を遣わせましたわね」

「バチバチにやり合うのはいいけどギスギスしてるの好きじゃないし」

そういう方面で欲張ることだって悪いことじゃないだろう。

イベント用のウイニングミニライブなんて計画したのも別に言いくるめのためだけじゃないし。現役ランナーのミニライブ。周辺は別に無人というわけでもないし、経済効果が多少なりとも見込めるはずだ。こつちも手配しとこ。

……ともかく、そんなこんなで。

うちのチームはテイオーがトップで走り抜けたものの、ツルちゃん先輩が突如突風と砂埃に襲われ気管支に攻撃を受けたため順位を落としてしまった。

フラワーも好走を見せたがなにぶんジュニア級。クラシック、シニアの強豪がひしめく中では力が足りなかった。最終的にぼくがなんとか差していったけど、総合順位は3位。「悪くない順位」という程度のところ収まる結果となった。

ちなみに総合1位はミックたちのチームで、2位はファル子先輩たちのチーム。見事にリベンジを決められてしまったのだった。

ジャンク&チープ

「ストライブはカレー作らないでね」
「何でさ」

リレー大会のミニライブを終えた後の打ち上げは、そんなご無体な発言から始まった。

料理なら任せろーと意気込んでいたところでコレである。え、もしかしてぼくのカレー嫌われてんの……と不安に駆られかけたところに、ミークチームで抜群のスタートを決めたカレンが補足を入れた。「ストライブちゃん、ライブも打ち上げも企画や準備ずつとしてくれてたでしょ？ お料理くらいはみんなに任せてもいいと思うなっ。お友達が色々やってくれたのに、何もお手伝いしないなんてカワイくないでしょ?」

「あとストライブのカレー美味すぎ」

「美味いのはいいことじゃん!?!」

ネイチャこれデイスってんの持ち上げてんのどっちなの？

「雰囲気合わない、ということですよ。私もたまにご相伴にあずからせてもらいますが」

「食べてるんだイクノ」

「マックイーンさんがよく試食を頼まれていますので、その時に」

まあ、うん。高級志向のスイーツとか、舌が肥えてるマックイーンに批評してもらうと参考になるんだよね。なので結果的に同室のイクノにも試食してもらうこともある。

「ストライブさんが得意にしているのは、洋風ホテルカレーや牛すじなどがとろとろになるまで煮込まれたいわゆる『お店のカレー』。しかし、この場で求められているのは——例えるなら、からあげギガ盛りMAXの塩っ辛いカレー……!」

「ジャンク&チープ……!!」

そういうアレかあ……!!

分かってないわけじゃない。むしろ空気感から言えば納得……!!

ただ、そう……カレー作りは一度グレードを上げてしまうと、下げるのが難しい代物だ。個人差があります。

洋風やインド風、エスニックにスパイスとレパートリーは増やしたものの、じゃあくオリテイを落としたものを出せと言われると……どうしても負けず嫌いな部分があるから顔を出してくるのでそれができない。クセでつい工夫を加えようとしてしまうのもあるし……。

ぼくは思わず砂浜に膝をついた。

熱^あツツツ!!

「こ、これで勝ったと思うなよ……」

「何の勝負してたのボくら？」

「かくなる上は大量の唐揚げを揚げてきてくれるう……」

「それも愚策ですね。この場の雰囲気合うようなカレーに合うのは……味の抜けた冷め気味のもんです」

「がわっば」

「ストライプって何かしてないと死ぬの？」

一回死んで青春の大事さを知ったからか、時間を無駄にするわけにいかない！ という気持ちになって何かしてないと落ち着かない性格になったのかもしれないのはある。

ただ、やつぱり一番大きいのは溢れ出る闘争本能を別の形で昇華するためだ。

閑話休題。

ともかく、一定の盛り上がりを見せたイベントが終われば、今度はフオワ賞に向けての本格的なトレーニングだ。

と言っても、他のひとのように海外環境や洋芝に適應するための訓練は主ではない。対応できること自体はほぼ分かっているからだ。

それよりも今はブランクを埋め、基礎能力を向上させることに重点が置かれている。まあ相変わらずスピードの伸びは悪いのだけど。

「一発でこうスパンと最高速が伸びる手段とか無いんですかねー」

「無エよんな美味い話」

当然手段は無かった。

知ってますうー言ってみただけですうーとブーたれながら必死に

脚を回す。

とにかく脚の回転だ。回らないと速度は出ない。この加速力の高さはむしろ短距離で輝くのではないか？ と一瞬思いかけたこともあるが、あつちはあつちで1000m1分を切るのが当たり前という怪物揃いだ。最初から選択肢に上がるわけも無かった。

「じゃあ任意で領域ソーンに入る方法とか」

「領域ソーンに入る条件が集中力の高まりである以上、不可能ではありませんが極めて消耗が大きく非効率です」

「フラッシュよお……消耗なんて気にするタマかよこいつが」
「あつ……」

横走りダブルピースしながらフラッシュ先輩を横切る。

春の天皇賞、ぼくは確かに骨を折ったがスタミナ面では限界というほどではなかった。精神的、肉体的負担が増すことはそこまで大きな問題じゃない。むしろ効率面だと、余ったスタミナを有効活用するための手段とも言える。

スタミナを削る代わりに最高速が上がるスキルとかありやぼくもなー！ ……いや、これ他のひとも同じようにスキル使うだけだから結局そんなに差が生まれないわ。ちくせう。

「そういえばフラッシュ君、ストライプ君の行く……フランスをはじめとする欧州の芝質は彼女と合うのだろうか？」

「Ja、ドイツもそうですが、欧州あちらの芝は日本と比べ非常に『重い』です。むしろ日本よりも合う可能性があります」

特にフオワ賞とカドラン賞の舞台となるロンシャンレース場では、その傾向が顕著だ。

日本は欧州のレースを参考に発展したと言われるが、日本で主に使われている芝と洋芝とは種類が異なる。芝が深いとよく言われているが——実際エル先輩に同じこと言われた——実際のところ芝の長さは日本より短いそう。

実際に異なるのは根張りの良さだ。ロンシャンのコースは根っこの密度が高く、脚を弾き返すような走り味だという。

というか海外コースの多くは、日本と違ってイチから作られたコー

スではなく、平原に「じゃあここからここまでがコースな」として作られたのが原型だ。水はけも悪いから雨が降るとワカメみたいになるとすらよく言われる。

ぐ、とその場で砂を踏み締める。トレセン学園内でも洋芝のコースを何度も走っているが、この感じともまた違う。実際に現地入りしてからじゃないとどうかは分からないにしても、パワーを十全に発揮できるのはあっちのコースなのかもしれない。

と、そんなことを考えていると不意にふたつの影が差す。

「やはり欧州ですか。いつ出発されるんですか？」

「桐生院」

——同じく海外遠征を表明している桐生院トレーナーとミークのふたりだ。

トレーニング自体は合同でやるわけじゃないけど、ミークとぼくは同室だ。色々と互いにそれらしいことは示唆していた。明言はしていなかったし、マスコミ発表ももうちよつとしてからになるから、実際にどこに行くかは今ここで初めて聞いたことになるのだろうけど。

「私たちも同行します……」

「はい、なので打ち合わせに参りました！」

「そーいやあっちに行くって言ってたねー」

「ふふふ」

スイツとミークもダブルピースを返してきた。

「ちなみにどういうローテーションを？」

「フォワ賞から」

「凱旋門賞を……」

おや、エル先輩ローテ。しかも内一戦はぼくと同じフォワ賞だ。

……凱旋門賞を狙うなら、ステツプレースとしても当然の選択だ。

問題があるとしたら……うむ。

「ミーク、洋芝適応できるかな？」

「Je ne comprends pas」フランス語で「わかりません」。

「フランス語もよくできてるじゃん」

「どや」

「いいのかお前ら今の時期にンな和やかなやり取りしてて」

「これがぼくらのスタンスなので」

「なので」

「そーいやぼくら全然レース論の話とかしないな。」

PCでリクガメの食事シーン垂れ流しにしてるのぼーっと観てたりいい感じに料理できたー、なんて言って食べたり……アスリートの共同生活じゃないなこれ……？

ともかくぼくらは基本そんな空気感でやってるわけなので特に普段と何か変わるといいうわけでもない。

「ともかく、実際に一度走ってみなければ、適応できるかどうかともわかりませんから」

「ふむ……まあ、そうだな。ストライプのような例は極めて稀か」

「つーかおやつさん、何でこいつその辺分かんのか？」

「分からん、が……たまにははぐらかさずに理由を言えたりせんか？」

「超頑張つて適性調べたんですよ。砂走ったり土走ったり原っぱ走ったりじつくり小さい頃から」

「想像より遥かに地道だったな……」

「今も小さいけどな」

「ぼくより小さいのに何言ってるんすか」

ともかくその辺は地道にやらないとどうしようもない。マジで。

何事に関しても、物事を証明するためには地道な裏付けが必要になる。幼い内からそれを考慮に入れられた分、ぼくのスタートは早かったと言えるだろう。

対してミックはそういうわけでもない。適性の広さは知っているが、判明したのはデビューのためにトレーニングをこなしていく中でのことだ。

「ストライプ、出発時期ですが、8月の中旬からに変更でよろしいですか？ 我々だけなら問題ありませんが……」

「ミックも同行するなら調整期間引つ張らないとですね」

その辺も勘案して、トレーナーさんの方で方針も決まったようだ。

フオワ賞は凱旋門賞のおおむね3週間前に開催される。だいたい9月中頃。一月分あれば調整は……まあ可能だろう。万全とは言い難いかもしれないが。

エル先輩のケースだと調整のために早期にフランスに渡っていた。芝質や気候、時差に慣らすという点でもその方が本来適しているのだからけど……さて、今年の挑戦はどうなることだろう。

フランスの芝の具合

8月中旬。合宿を途中で抜けることになったぼくらは、およそ15時間ほどをかけてパリ、シャルル・ド・ゴール空港に到着することになった。

久しぶりの海外渡航だ。とはいえ、ぼくは日本に来る時にまずパスポートを取って手続きをして……というところまで済ませた経験があるので多少の手間も問題じゃない。

ぐっ、と伸びをしながら入国審査の順番を待つ。流石に長時間のフライトは堪えた。トレーナーさんは慣れてるからかほとんどダメーシが有るように見えないけど、一方で桐生院トレーナーやミックは疲労の色が濃い。

「Why are you here?」ここに来た理由は何ですか？

「Business」仕事です。

「Business」

「ちよつと待ちなさいストライプ」

「さいとしーいんぐ」観光です。

「ちよつと待つてくださいミック」

サムズアップしながら告げた渡航目的は即座にトレーナー二名に抑えられた。

いや実は間違つてないんだよ。観光には行く予定だし、ぼくに関しては仕事の販路拡大や外国の市場調査も含むし。トレーナーさんたちは社会人だから総合的に見てビジネスで間違つてないだろうけど。

で、実際のところは――。

「Race」走りに来ました。

ウマ娘かつトレセン学園の制服を着用しているので、これで通じる。

・・・≠・・・

レースの本場、欧州フランス——パリ。レースそのものの起源は古代ギリシャまで遡ると言うが、近代レースの原型が構築されたのは16世紀イギリス。そこから17〜18世紀にかけて欧州各国に伝わることとなった。

フランスで最古のレース場はシャンティイレース場。世界トップクラスのレースと呼ばれる凱旋門賞だが、フランスオークスやフランスダービーと比較すると実のところ100年近く歴史が浅い。それでも日本のレースと比べると数十年以上の歴史を積み重ねている。

ともかく、パリにやってきた時に感じたのは、言わば歴史の重みとも呼ぶべき何かだ。街を行く現地住民……らしき人も、そうした重みの中を生きているという自信や自負のようなものを感じる。

とはいえ、だ。

「皆さん、気をつけてくださいいね。パリは観光都市ですが、治安は日本と比べると悪い方ですので」

「そうなんですすね……」

トレーナーさんの言う通り、フランスの治安はそこそこ悪い。

世界の治安ランキングを見ると50位未満2023年時点。日本は概ね1桁台を推移。と、備えもせず歩けば、スリや置き引きに遭ったり詐欺に遭ったりということが考えられる。

元チーフに同行して海外渡航経験の多いトレーナーさんはこの辺をよく理解しているのだろう。華やかな印象に反して語られる剣呑な話に、桐生院トレーナーは気を引き締めたようだった。

「まあほかあ更に治安悪いケニアの出身なんですけどね！」

「あなたはそうかもしれないませんが」

ちなみにケニアの治安ランキングは全世界で100位未満である。スリや万引きひったくりは日常茶飯事。頻度はそう多くないが強盗や銃撃も起きるし、観光客と見たらまず間違いなくボられる。ぼくが住んでたのは農村部だったのでそこまで剣呑なことにはなっていなかったが、それでも市街地の方はかなりダメ寄りのダメな治安だった。

なので……まあ、多少は治安の悪い場所での歩き方は理解しているつもりだ。

「トレーナーさんお財布持ってます?」

「は? ……持っていないと何もできませんが……?」

「あ、いえ、そうじゃなくって、強盗に差し出す用の」

「想定外のところからガツンとカルチャーギャップで殴りつけてくるのはやめませんかストラライブ」

物騒な地域では、昼間でも強盗が現れることがある。たとえウマ娘でも武器を持たれると非常に危険だ。銃、ナイフ……ちよつと対処を間違えたら大怪我は免れない。普通にしてれば逃げることも自体は難しくないが、相手が必ず人間の男性とは限らない。ウマ娘が相手だと逃げようにも逃げられないというケースがあるし、袋小路に入ったらそれこそ逃げるのは難しい。

なので、そういう時の備えが強盗に渡す用のお財布だ。

心理として、犯罪を行ったというならそのひとはすぐに逃げ出しははずだ。周りに別の誰かがいて、見咎められれば反撃を受けることもあるし、警察を呼ばればもつとまずい。なので「とりあえず」の成果を渡せば、その後のリスクを考慮して大抵はそれで去っていく。この「財布」というのはそうやって危機を脱するための手段だ。

もちろん使わないに越したことはないんだけど。

「一番の対策は『危険そうな場所に近寄らない』ことですよ」
「おっしやる通りです」

——そして一番の危険への対策とは、つまり「危険に近寄らないこと」だ。

治安の悪い国、地域、区画へ近寄らない。それだけで相当危険は減る。

……まあ、ウマ娘三名にそれに比肩するんじゃないかという運動能力の人が一名いれば多少強盗を相手にしても制圧できそうだけど。

はてさて、フランスにやって来はしたが、ぼくらはフランスの所属じゃないためフランストレセン学園の設備は基本使えない。そのため、ジャパンカップへの来日ウマ娘のようにシンデレラグレイ6巻参

考。レース場を借りたりトレーニング場を借りたりしてはじめて調整ができるようになるわけだ。

その辺うちのトレーナーは、元チーフから受け継いだノウハウがあるため抜かり無い。到着当日は時差ボケや長時間の渡航による体力の消耗の回復のために、宿泊先で休むことに集中することになったが、翌日からは即トレーニングが開始できる態勢が整うことになった。

やってきたのはサンクルーレース場。8月はレースの開催が無いため、ぼくら以外に練習に使っているらしいウマ娘の姿も見ることができた。

「老舗チームのトレーニング、拝見させていただきますね！」

「葵が思うほど特別なことではありませんが……」

トレーナーさん桐生院トレーナーのこと下の名前で呼んでるんだ。まあ年齢的に近い同性だからそうか。

さて、トレーニング理論に関してだが、うちのチームも親娘二代で長い歴史があるが、代々トレーナーを輩出してきたという桐生院家も大概だ。長年の経験で蓄積したノウハウはトレーナー白書という形で長年受け継がれており、それも毎年更新されている。

ミークの存在は、そんなトレーナー白書に大きな影響を与えているはずだ。距離万能、バ場不問なんていう、どう導くかが問われるウマ娘の極致のような子なのだから、ノウハウの蓄積がエグいことになっていそうな気がする。こういうことをやってみてほしいと言われたら大抵できるし、基本的に素直だからトレーニングの指示にもちゃんと従う。基準値としてはもってこいの能力と言っている。

一方ぼくは外れ値の極みみたいな存在なので果たしてトレーニングのノウハウの役に立っているかは疑問だ。

それでも、元々ベテルギウスは最新のデータを常に調査し導入し続けている、データ主義や効率主義を突き詰めたようなチームだ。このやり方を学ぶのは少なからず刺激になるだろう。トレーナーさんも、桐生院トレーナーのやり方というか桐生院家のノウハウからなにが学び取れるものは必ずあるはずだ。

「ミック、芝はどう?」

「まあまあ」

さて、一方のぼくたちは軽く併せをしてみずフランスの芝の具合をよく確かめることにした。

ぼくはとくに引つかかりがなく、対応できたが、ミックの回答は「まあまあ」。しかしこれ、違和感があるとかそういう話ですらなく、だいたいどのバ場でも同じように言ってることである。つまり他のバ場と同じように走れるという宣言だ。

万能具合が凄まじい。ぼくの言えるこつちやないが。

入念にストレッチをこなし、洋芝を走る方向に頭を切り替えてコースを眺める。うーん、原っぱ。芝って印象よりも草が生え放題の草原という感が強い。

これはケニアにいるときに走っていた地形とよく似ているということだ。

靴放り出して走りたいな。ダメだけど。

「見たところ、やはりストライプは問題ないようですね」

「そうですね」

腕立て、折りたたみ体操、ジャンプ、側転、バク宙。うん、いけるいける。

その場で披露した一連の動きにトレーナーさんは渋い顔をしていたが、ミックと桐生院トレーナーは素直に拍手で返してきた。

「無茶な動きをしたらまた怪我をしますよ?」

「大丈夫ですよつと」

その場でひよいこらひよいこら、心が概ね満足するまでバク転をして着地。パドックでのパフォーマンスとしては危険極まりないから絶対やらないけど、ここは草地だし大して問題はないだろう。成功したし。

それにこれはぼく個人というより魂の奥の方からサンコンさんが騒いでるのが悪いと思う。流れるような責任転嫁。

「あなた日本でそんなことほとんどしてなかったじゃないですか」

「なんでなんでしようね。ぼくも何でこんなことし始めたか分からん

のですよ」

「そんな馬鹿げたことが——あー……無いとは言いませんが」

「無いと言わないでいいんですか!？」

「経験上……はい……」

うちのチーム、突飛なことをしだすひとが結構いるので自分自身及びトレーナーを含む。何しても大概「そういうこともあるか」で済ませてしまう土壌ができてる。

何がアレってタキオン先輩が日常的に出入りしている以上何が起きても不思議じゃないんですよマジで。

まあ桐生院トレーナーには分からないか、この領域レベルの話は……多分分からない方がいいだろうし、分からなくてもトレーナー業に何ら支障は無いけど……。

「……ともかく絶好調なようで何よりです。フオワ賞はステップレースとはいえ、軽視していいレースというわけではありませんので、分かっているとは思いますがそのつもりでお願いします」

「はっはっは。イカダにでも乗ったつもりで見ててくださいいよ」

「それは不安視しろという意味ですか？」

「だって海外レース初めてで情報戦も心理戦も何もあつたもんじゃないですし……」

強みがひとつ完全に消されてるもんだから、安心して見ていてくれとは口が裂けても言えなかった。

……まあ、もしかしたらなんやかんやでこのイカダが魔改造されてないとは限らないわけだけど。今回は出たとこ勝負で行ってみよう。

海外で有名なヤツ

『何を負けていますの?!?!?!?』
『耳が痛い!』

二重の意味で。

フオワ賞を終えた翌朝のこと。鬼電に耐えかねて取った電話からは、マックイーンのような怒号が発せられることになった。

同室で眠っていたトレーナーさんが何だ何だと起きかけるが、ぼくが一旦移動して、そのまま眠ってもらうことにした。耳出てるし。時刻は午前6時前。多分こちらが起きている時間を見計らおう……として先走ったのだろう。

フオワ賞は、ぼくは残念ながら2着に終わった。あれだけ激戦を繰り広げたマックイーンとしては、ライバルがここで負けるという事実が腹に据えかねたに違いない。ぼくもマックイーンがG2で負けたら多分煽りに行くと思う。気にするなという意味も含めて。

しかし、海外初挑戦で2着なら上出来じゃないだろうか。そりやあタイキ先輩とか海外で即1着取ってるし、エル先輩……は厳密には海外初戦は2着だったけど、長く海外に滞在して環境に慣らすという意味では成功してたのでこれも上出来の範疇。ただ、ぼくはそういう総合力の暴力で攻められるほどのものは無い。……少なくとも2400mでは。

カドラン賞の前哨戦として扱われることの多いグラデアトウル賞G3、ロンシャン3100m。に出なかったのは、この環境下でどれだけやれるかの確認の意味合いもある。やっぱり中距離が走れるとだいぶ違うし。

もつとも、環境の違いや様子見の色合いが強いことから領域には入れなかったし、相手が警戒してくれてもないしで結局力試しどころか調整程度にしかならなかったのだけど。

「一応言い訳させてもらっていい?」

『聞きましょう』

「自慢じゃないけど——自慢に聞こえるかもしれないけど、ぼくって結構知名度高いよね。国内外問わず」

『ええ、世界初の縞毛G1ウマ娘ですものね』

「うん。でも戦法に興味があるひとは思ったより少ないんだよ」

『……そうなんですの？』

「マックイーンもさ、海外で有名なウマ娘のことは知ってるだろうけど、脚質とかは知らないな……ってこと無い？」

『言われてみれば……』

例えばぼくも今すぐモンジューとかデイジュール1990年代欧州の短距離覇者の脚質とか聞かれても、一度調べてみないと分からないと思う。

……まあ、海外、特に欧州の強いウマ娘なら十中八九先行から差しなんだけど。

「だからぼくのは皆『海外で有名なヤツ』程度の扱いで、作戦に対する警戒が無いんだよ。おかげで全部空回り」

『でしたら、あなたの実力は半減もいところでしょうね……』

「オマケに今回は誘いをかけるために逃げただけだけどこれがまあ良くなかった」

『誰も乗ってこなかったとか？』

「うん。全然誰も全く乗ってこないからただのペース走にしかならなかった」

加えてバ場も日本よりスピードが出ない。それ自体はいいんだけど、海外選手の情報ってあんまり無いせいか色々読み違えるんだよね。末脚とか。

「完全にラビット代わりになっちゃってるんだよね」

『ラビット……ええと、確か、レースのペースを作るために出走する逃げウマ娘……でしたわよね』

「複雑そうだね」

『日本では馴染みのない風習ですもの。何より、勝つために走るのではない……という点が』

「まあ、その辺はね。海外と日本じゃルールも考え方も色々違うし

……」

言つて、少し考える。——本当にそうだろうか。ルールが違うのはその通りなんだ。その辺はざっと見たから分かつてる。

けど、個々人の気持ちはどうだろう。中にはそりやあ走ることに對して意義を感じられないひともあるだろうが、トウインクルシリーズに出ているからには走ることが嫌いなひとがいるとは、あまり思いたくない。

……他のウマ娘を勝たせるためだけに走るのは……ぼくは正直無理だ。だから欧州のトレセン学園は選ばなかった側面もあるし。ともかく。

「今回は規則正しいペースで走り続けちゃうのがまずかった。完全にペースメーカー状態で、あっちの環境だと差すのに絶好のターゲットになつちやつたんだよ。G2でラビット出てきてないし……」

『なるほど、それだけ不利な要素が……あるにしても、あなたの走りなら他を置き去りにするのは難しくなかつたでしょう?』

「1着がモンジューだった」

『な、なるほど……』

イカれた速度で上がってくんのあのひと。

既にG1を6勝してるのは伊達じゃあなかつた。この上、エル先輩やスペ先輩とバリバリに張り合ってた時はあれでクラシック級……つまりぼくの同期だつて言うんだから驚きだ。

ともかく、見た感じマックイーンも随分冷静になつたらしい。モンジューの強さはよく理解していると見える。まあ、スペ先輩と同じチームだし、ジャパンカップで見たしね。そりやそうだ。

『モンジューさんと走ってみていかがでした?』

「クソ強い」

『もつと具体的に』

「流石に去年の凱旋門賞ウマ娘だね。キレも凄いい涼しい顔してあのその辺の原っぱみたいなのロンシャン駆け抜けてんの、もう圧倒的だよ」

『なるほど……う？』

「つまりはいつも通りってこと」

もし次やるなら全力で対策打って勝機引きずり出す。戦力差があるなんていつものことなんだから。

10回に1回しか勝てない相手でもその1回を本番で持つてくればいい。

ちなみに、ウイニングライブの打ち合わせなんかの時にモンジュー本人とは話したけど、レース中のビリツと来るような威圧感や獰猛さ、激しい走りとは裏腹に、レースを離れると涼やかで気さくなひとだった。連絡先も交換したりして。ふへへのへ。

『調子が変わらないようで安心いたしましたわ』

「だいいち、怪我明けの第一戦でモンジュー相手に2着なら上出来じゃない？」

『日本にいるファンは勝つのを期待していたようですけれど』

「言っとくけどぼくだって勝てるもんなら勝ちたかつたわい」

『でしょうね。それで、カドラン賞に向けての調整は？』

「そつちはバツチリ。布石も打ったしね。次はいつも通りの走りができると思う」

少なくとも今回のフオワ賞でぼくがモンジューと張り合えるだけの能力があることは示せた。確実にこちらに注目が向くことだろう。

そうなればようやく心理戦に入る目が出る。そしていざ心理戦に入ってしまったらこちらのもの。ひとりハメられれば連鎖的に全員ハメることができるし、勝率も大きく上がる。

カドラン賞本番は、グラディアトゥール賞を勝ち上がってきたウマ娘が出てくる。フランス三冠は、現在のところ日本で言う菊花賞のよくな長距離レースが無いプール・デッセ・デ・プーラン（通称フランス2000ギニー、1600m）、ジョッケクルブ賞（通称フランスダービー、2100m）、パリ大賞典（2400m）の三レース。古くはロワイヤルオーク賞（3100m）が三冠のひとつに数えられていたが参加資格がクラシック限定ではなくなったことで三冠と扱われることが無くなった。ため、カドラン賞やその関連レースに出走して

初めて重賞を勝ち抜くことになるような隠れた強豪も必ずいることだろう。

本当の情報戦はここからだ。

不安半分、高揚半分でぼくは軽く笑ってみせた。

・・・≠・・・

フオワ賞を終えた直後ということと、凱旋門賞やカドラン賞に出走するに当たったの事前インタビューなどが控えていることも鑑みて、今日のトレーニングは軽く流して終わった。

流石にトレーナーさんもモンジューにエンカウトしたのはもはや事故のようなものと割り切ってくれたのか、先のレースについて大きく触れてくることは無かった。次やれば勝つ可能性が多少なりともあるとお互い理解しているのもあるし、今すぐ当たるわけじゃない相手の対策を練るのもどうだろうと考えているのもある。

ともあれ、今日はそんな感じで適度に流すに留まったのだけど、その最中にふと視線を感じた。

視線を送られるのは珍しいことでもない。ぼくもミークも毛色からして珍しい上にG1をいくつか制覇している身だ。この程度ならよくあることなのだが、視線の主を探してみれば、珍しいことにミークと同じ白毛のウマ娘だった。

目測、だいたいぼくと同じくらいだから（自分を基準にすると露骨に背の低さが際立つから嫌だけど）小学生だろうか。普段ののんびりしていて穏やかなミークとは対照的に、ツリ目でどこなく鋭さを感じる雰囲気を感じている。剣呑……というのはいささか違うか。どことなく、焦りのような苛立ちのようなものを感じる。

コースに入ってきていることから、彼女もこのトレーニングコースの利用者なのは分かるのだが、ひとりだというのは珍しい。あの年頃の子供なら、友達と一緒に走るのが一番楽しい頃合いだろうか。保護者くらいは近くにいるのかもしれないが。

なんとなくその様子が気になり、珍しい毛色という共通点もあつて

ぼくはその子にそれとなく声をかけていた。

「やあ。ずつとこつち見てたけど、なにか用？」

かがんで視線を合わせる——必要がないのが悲しい。

最初からかち合っている視線が交錯すると、急に声をかけられたことで焦ったのだろうか。女の子は大粒の汗を流してしばらくまばたきを返した。

少しして、意を決したように身を乗り出すと、二枚の薄い板状のものを差し出して話を切り出した。

「あの」

「はい」

「サインをくださいませ」

「うん。……うん？」

——どうやら、異国の地でできたファンらしい。

フランス語は日常会話程度にはできるようになっている。通訳代わりになりながらミックと一緒にサインをしてしばらく、ようやく緊張が落ち着いたのか、女の子は汗を拭きながら事情を語った。

曰く、先日のフォワ賞で、自分と同じく異質な毛色のウマ娘がふたり、あのモンジューとやりあって良いところまで競り合った挙げ句に2着3着の大健闘。この結果は、未だ白毛ウマ娘に対してレース向きではない、という偏見が強かった彼女の周囲の認識を改めさせたとのことだ。そうしてぜひともその張本人と会ってみたいと思っらしい。

こういう方面のファン珍しくって情緒こわれる。うひよほほほ。

……インタビューはしばらく後なので、まだ十分時間はある。トレーナーさんたちにも時間になったら伝えるということで許可が貰えたので、今度はこちらから切り出してみることにした。

「何かぼくらに聞きたいことがあって来たんじゃないのかな？」

「いえ、そのような不躰なことは……」

「でも、ただサイン貰いに来たってだけにしては緊張しすぎじゃない？」

単にサインを貰いに来たミーハーで行動力にあふれている子とい

うだけなら、あんなに汗はかかない。

それならレース場でもいいだろうし、機会は他にいくらでもある。その場に腰を落ち着けて答えを待っていると、女の子はためらいがちに口を開いた。

「……私わたくしも将来、トウインクルシリーズの舞台に上がりたいと思っていますの。けれど、生まれつき体質がレースに適していなくて困っているんです」

「体質？」

「体温が非常に上がりやすく……そのせいで体力の消耗が激しくて」

ほーん。

なるほど、基礎代謝が異常に高いわけだ。やたら汗が出てるのも体温を下げるためか。結果、汗が出る量が多くて体力がガンガン削れてしまう……と。

「まず認識を改めよう。体温が上がりやすいということは、基礎代謝が良い……それだけ筋肉の密度が優れているってことなんだ。他のひとより、よくお腹がすくことない？」

「そんなこと！……ま、まあ、多少は」

「それだけ体が栄養を必要としてるんだよ。よく食べてスタミナをつければ、それは途端に利点に変わる。他のひとよりも速く走れるようになる」

それこそオグリ先輩やスペ先輩みたいなものだ。あちらは根本的なエンジン……心臓の機能が優れているからという点もあるだろうけど、ウマ娘の中でも特によく食べるひとというのは、それだけ体がフルに働いて栄養を欲しているということだ。十全なパフォーマンスを維持するには当然それなりの食事を取らなければならない。

いわゆるミオスタチン関連筋肉肥大何もしていなくとも筋肉が異常に発達を続ける特異体質のこと。よくバトル漫画などで取り沙汰される。……とまでは言わないけど、近い状態になっていることは容易に想像がつく。あとは根本的なスタミナをつけさえすれば、ともすると三冠すら夢じゃないほどの実力者になれるはずだ。

「君さえ良ければトレーニング見ようか？」

「本当ですか!？」

「空いてる時間にね。君、名前は？」

「はい。ピンクフェロモンと申します！」

「ほおおおおおおおおお」

「!？」

「!？」

想定外のところから来た衝撃でぼくの脳が打ち砕かれる音がした。

偵察や潜入が趣味なのでは

運命的な何かを感じると思ったら同郷JWC産駒だった。

衝撃でその日の記憶が全部飛すっぽんぽんしたんだが、よく思い返せばなるほど、それらしい部分は多かった。

フランスだし、白毛だし、三冠も夢じゃないくらいのポテンシャルを秘めているし、暑がりですっかり汗っかきでちよつと走ったら上着脱ぐし。見抜けなかった、この視力11.0諸説あり。の眼をもつてしても！視力は関係ない。

「不思議な気分だなあ」

「たしかに」

ぽつりとこぼしたつぶやきがミークに拾われたが、多分お互いが思っていることはだいぶ食い違っていると思う。

ピンクフェロモン判明から一夜明けて、充分に休息が取れたところでトレーニングの強度は徐々に戻ってきた。ピンクフェロモンは今日もやってきている。

少しでも視線に移せば、汗だくになりながらも熱心に基礎トレに励む姿があった。異常上昇する体温と戦いながらになるため、休憩の頻度こそ多いがやはり素晴らしい身体能力があることが分かる。大人げない話だけど、少し嫉妬してしまうくらいにパワーもスピードも優れている。ただ思うままに走るだけでも、「それなり」では済まないほどの結果が得られることだろう。

人の言うことも素直に聞き入れて咀嚼し、血肉に変える度量と素直さもある。

これ本当にあのピンクフェロモン？ この子がムンムンしてすっぽんぽん！ になるの？ いや確かに（高熱にうなされて）ムンムンしてるし（暑くて）すっぽんぽんになりかねんとは思うけど。

（少し冷静に考えよう）

そもそも論として、鞍上ソウルの発現には個人差がある上にそこまです強く表出するものではない。

ぼくはとりわけ強く出てる方だとは思いますが、それ以外の面々に関してはそんなでもなかったりするのだ。影響が強いのは国籍くらいのものだろうか。

トレーナーさんはちよつと例外的に語るべきじゃない実在騎手のため。が、今のところ、ぼくが見た中で人格に大きな影響を受けているひとはさほど多くないと思う。ドーナッツ先輩が悪童なくらいだが、それだって元々「ピーピードーナッツ」が素で八艘飛びしてるのを踏まえて考えると、そこまで含めて元来の性格だと思える。

ピンクフェロモンに話を戻そう。彼女——もつと言うとモデルになった「ピンクフェロモン」についてだが、実のところ映像からイメージするほどトンチキなキワモノというわけではない。全裸にはなるが。

しかし二足歩行するわけでもなく、斜行上等な掟破りの地元走りするわけでもないしバイクにも乗らない。胴も伸びないし跳躍しないし勿論カワリミ・ジツを自在に使いこなすわけでもない。

じゃあ何が特別なのかと言うと、鞍上のゾラ姉妹だ。やたら長いムチを振り回すし現在海外競馬においてムチの連続使用は制限されているケースが多い。日本でも近年導入。第1回JWCのピンクフェロモンの勝ちパターン時は44回連続使用を確認。鞍の上で立ち上がるし他の騎手をコントロールするし、ビジュアル的に倫理的に問題があるとすればどっちかと言うと馬の方じゃなくて騎手の方だ。

ちなみにこの辺「サバンナストライプ」にも同じことが言える。サンコンさんがなんか色々やってるだけで、あの（シマ）ウマ自身は何も特殊な能力を使わずに普通に差し切っているからだ。

本質的に口バであるぼくとはまた別枠だが、本人（馬）は真面目に走っているだけという点で、実はぼくらは似た者同士であると言える。

閑話休題。

さて、ぼくらがトレーニングに精を出している一方、ピンクフェロモンのトレーニングも見よう見まねながらもなかなか堂に入ったものになっていた。

我らが日本トレセンが誇る才媛2名はと言うと、反応はそれぞれ対照的だった。

桐生院トレーナーは微笑まじげな表情で見守っている一方で、利紗トレーナーは瞳を爛々と輝かせている。いやあれ物理的に輝いてるな。さてはタキオン先輩の薬飲んでるな、海外の環境だどう効くかの実験がてらに。

ともかく、これはアレだ。自分を超えるかもしれない逸材を見つけた元選手の日だ。

「ストライプ、トレーニング内容は頭に入っていますね？」

「うい、どうぞ」

「話が早くて助かります」

ウツキウキやんあの日本トウインクルシリーズ界のレジエント。

そーいやぼくを勧誘に来たのもトレーナーさんだったな。運命的な何かを感じたのもあるかもしれないけど、元チーフと比べて採用基準が攻め攻めで能力が一方に特化してるウマ娘に惹かれやすいんだろう。視点がどうやつても元選手だから、総合力の怪物としか言いようのない自分自身ギンチャリボーイに勝つには能力的に特化してる方がいいという観点だろう。

ミークに目を向けると……少し不満顔だ。何か不満に思う要素あつたっけ？

「どうしたのミーク？」

「同じ白毛だから、トレーナーにもスカウトしてほしかった……」

「あー……ははは……」

愛想笑いでお茶を濁す。同じ白毛がほとんどいないという気持ちはわかるけど、よそのチームの所属であるぼくが何か言うのは違うだろうし。

ただ、桐生院トレーナーは今現在マンツーマンでの指導を主にしており、チームとしての指導ノウハウが十全にあるとは言い難い。まずはミークを育てきってからと考えるのはごく自然なことだろう。

対して、うちのトレーナーは早くからチームトレーナーとして教育を受けている。前提から違うんだから仕方がない。

「後輩が入ってくるのは嬉しい……？」

「んー……どうだろ。入ってきてくれたら嬉しいけど、まず日本に来るとは考え辛いし」

いくら運命的な何かを感じ取ったとしても、わざわざ日本に来るだろうか？

レースの格式は欧州の方が上だ。賞金目的でもないといわざわざ日本に留学に来る必要も無いし。

アメリカから日本にやってくるウマ娘は少なくないが、これはあちらが土ダートが主流だからという明確な理由がある。合わない土よりは砂や芝で走りたいと考えることはごく自然なはずだ。転居などの理由もあるので一概に言えることではないが……いずれにしても、ピンクフェロモンにはそうした理由が無いはずだ。

身なりや言動から鑑みるに、どうにも彼女は裕福そうな家の生まれに見える。でなければ、思い立って即レース場の使用許可を取りに行くなんてしないだろう。レース場を借りるといえるのは思った以上にお金がかかるし、手続きも子供ひとりではできるようなものではない。それだけ経済的な余裕があるのなら転居するとは到底思えない。

ぼくも白毛に対する偏見は払拭したけど、結局のところそれだけだ。彼女の中での位置付けは「尊敬する諸先輩方のひとり」くらいのものでらう。モンジューに食らいついたことを評価されてこそいるけど、評価の主体はあくまでモンジューだ。基準点になっているウマ娘の方がはるかに比重が大きいのは間違いない。

実際、トレーナーさんは丁重にお断りを食らっていた。例えばこれで現役時代のギンシャリボーイトレーナーさんの走りを見ていい具合に憧れで脳が焼かれてたりしたらわからなかったけど……。

(全員が全員日本にいる必要も無いし)

繋がりを持つたので問題ないだろう。もし将来ぼくがJWCを開催できたとしたらその時は招待するくらいのスタンスであれば問題ないはずだ。

……

フランスは移民が多いことでよく知られており、その割合は世界でも有数のものだという。

政治的なアレコレはあるにはあるが、面倒なのでそこは触れないでおく。ともかくこうした環境ではぼくの外見というものはそこまで奇異には映らないようで、視線こそ送られてはいるがいつもほど注目を受けるわけではないのが印象的だった。

(変装が楽でいいや)

自由時間を貰ったある日の午後、ぼくはフランストレセン学園の方に訪れていた。

頭にウィッグを装着。耳にメンコを装着し尻尾を偽装して、あとはその辺で買った普段着に着替えるだけで潜入の準備は完了だ。

フランスに縞毛は決して多くないため髪色を見られれば特定が容易いんだけど、ここを青鹿毛のウィッグなどに変えてしまえばそれだけで印象は薄れていく。ま、知り合いでもない限りそうそうバレはしないだろう。

カドラン賞は、世界から招致された強豪が出走しているが、そちらはぼくらと同じく外部のコースを借りなければならぬわけなので、探せばすぐに見つかるのが良いところだ。

問題は、フランス所属のウマ娘。こちらはデータが無いわけじゃないんだけど、実際のレースはほとんど見ることができていない。データに無い急激な成長は映像越しでは判別がし辛く、こればかりは自分の足でしっかりと偵察しておきたかった。

偵察や潜入が趣味なのではと言われると否定しきれない自分もある。

「ボディチェックよろしいですか？」

「どうぞ」

守衛のウマ娘に身分証を見せ、ウィッグを取って本人証明をする。

これだけでも驚かれたが、偵察目的だと言うと更に驚かれた。

選手本人がそこまでやるか!? だそうな。ごもつともである。

日本は主にぼくのせいで偵察や調査を「ここまでやってもいいの

か」と基準がガバガバになってしまっているから、色々ゆるい（情報漏洩対策は緩くない）のだけど、対して欧州、特にイギリスやその影響が強いフランスなどでは、淑女のスポーツであり、正々堂々——基準やルールは日本とは異なる——と競うことや誇り、名誉といったものが尊ばれている状況がある。ぼくが好んで用いる手段に関してはどうしても首を傾げることになるひとが増えることだろう。

あと、フランス……というか欧州は全体的に結構な数テロが起きるので、迂闊に怪しげな行動をすると非常に危険だという点もある。ともかく、入り込むことにはなんとか成功した。

見たところ、建築様式なんかは日本のトレセン学園とそう変わりないようだ。当たり前か。運営母体は各国提携して連携を怠らないようにしているのだし。それなりに特色というものは出るにしても、校舎の外見なんかには即反映されはしないだろう。

すれ違う生徒の視線は、基本的に生温かい。初等教育^{エコー}フランスにおける小学校。最中の学生が見学に来たと思っっているのだろう。

狙い通りだ。まさしくそういう立場を装って来た。

状況的に仕方がないが、測定器具のようなものは今は手元にない。自分の目とメモだけが頼りだ。

すれ違うひとと挨拶を交わしながら、コースを探す。本題はカドラ賞の対策だけど、凱旋門賞に出走するウマ娘もいるならそちらのデータも集めておきたい。ミークのためもあるし、今後ジャパンカップなどに出るなら、出走しに来日するかもしれないし。

（さてと、やってるかなー）

うん、下調べした通り、ちょうど練習日だったようだ。チームのラビットらしきウマ娘を相手に差し切る練習をしているのが見受けられる。

……別にラビット自身も練度が低いわけじゃないんだよなあ。だってそもそも、G1に出てこられる程度の戦績は積んでるわけだし。

その辺も踏まえて作戦を立てないといけないのは、うん。確実に収穫だな。ちゃんと逃げられたらオープン戦くらいは勝てそうだし、G

2クラスでもいいところ行くはず。

それだけに勿体ない。勝ちきれぬ能力もあるだろうに……本人が納得してるならぼくから何か言うのも違うかもしれないけど……。

ああ、急にイギリス行こうとしてる妹のことが不安になり始めた。

(……今考えてもしようがないか)

ラビットのことも妹のことも、正直考えたところで今のぼくがどうもこうもしようがない。

まずは偵察の本分を果たさないと。実際、差しに行ってるウマ娘の能力は素晴らしいものだ。結構長く走っていたらうに、最後まで伸び切るスタミナがあり、日本基準で考えると荒れ放題とも言えるあのバ場で押し切れるパワーもある。なかなか勝ちに恵まれなかったのは……中距離だともっと速いひとがいるからだろう。それこそモンジューとか。

他のコースも見に行ってみれば、そちらも見事な走りを披露しているウマ娘の姿があった。

いずれも感じるのは、パワー偏重ということか。やはりそういうバ場で走ることを前提としているだけあって、鍛える方向性も日本と全く異なる。例年感じることで、凱旋門賞はただ日本で強かったからどうにかなるというものでもなさそうだ。

その点で考えると……ミークはどうなるかな。こちらはどちらかと言うと器用さであらゆる状況に対応しているという側面があるから、単にパワーが求められるとなると適応しきれるかどうか……。

「……少しいい？」

——日本語？

不意に聞こえた声に思わず反応しそうになって止まる。が、よくよく聞けば聞き覚えがある声。

あ、まさかと思うと同時に、そのウマ娘がぼくの目の前に躍り出て怪訝そうに首をかしげた。

「——何をしているの？ サバンナストライプ」

「……Bonjour、モンジューさん」

前年凱旋門賞の覇者。

そして本年フオワ賞を制したことで当然ぼくとも知り合いである
モンジューが、そこにいた。

知り合いでもなきやバレないと言った。
知り合いがいるという想定が漏れていた。

あのモンジューが困惑している。

その事実になんともなく満足しそうになりかけたが、そもそもそういう思考自体が現実逃避の産物だと気付いてぼくは軽く半笑いを浮かべた。

もう笑うしかねえとも言う。

「どうして分かったんです？」

顔を覗き込んできた時も半ば確信を持っていたようだった。が、だからと言って付き合いが長いわけではない。彼女にバレた理由はよく分からないというのは正直なところだ。

一応、悪あがきとして応答はフランス語で行う。日本語を使っていると、周囲から見て違和感が強くなるだろうからもっと大勢にバレかねない。

そんなこちらの意図を理解してくれたのか、モンジューはすぐにフランス語での会話に切り替えてくれた。

「動きに拙さが無さすぎるし足取りに迷いも無い。なら、ただの初等教育^{エコール}の学生ではない」

「はい」

「だからスペシャルウィークたちに確認を取ったら、『サバンナストラップはそういうことをする』と言われたんだ」

「はい……」

冷静に見極めて冷静に判断して冷静に正解を引き当てていらっしやる。

そうだね。日本のウマ娘ならぼくのことよく知ってるね。だからって教えなくてもいいじゃんスペ先輩たち……。

「それで——その格好は……」

「好きでやってると思いますか？」

……いや、まあ、偵察のためにある程度装ってる部分はあるが。

あるが……それはそれとして、この身長だとそもそも女兒向けの服

くらいしか選びようが無いというのもある。日本における規格だと、レディースでもSSサイズは概ね145cm以上を目安としているからだ。

海外でもちゃんと合うサイズとなるとジュニアサイズくらいしか無い。なので不自然にならないようにするにはそれなりの格好をしなければならなかった。さもなければオーダーメイド。

とりあえずここではいつもの交渉カード「明言せずに相手に考えさせる」を発動。仕方なくやっつてるといふ雰囲気を出せば、あとは認知バイアスがかかって勝手にある程度こちらに都合の良い解釈をしてくれるという寸法よ。

ちなみにこの手は使いすぎると知り合い相手には通じなくなるので注意しよう。(n敗)

「それで？ 偵察の方は上手くいったかな？」

「ええ、必要なものは見せてもらいました」

さて。こうなると少し方針を変更した方がいいかもしれないな。

偵察していると知られていない状態なら普通に偵察するだけで終えられたが、バレてしまったからには方針を切り替えるのがベターだろう。バレることを前提に布石を敷くのは、ぼくにとってはよくあることだ。

「そろそろティータイムですし、お茶でもしながら話でもどうですか？」

「そちらにもそういう風習はあるということ？」

「故郷では『いつでもティータイム』という言葉があるくらいなので「Anytime is Tea time」と表現される。毎食後や食間などどんな場面でもチャイや紅茶が嗜まれる。また、茶葉の主要産地としても知られる。」

——というわけで、ぼくらはふたりでフランスストレセン学園のカフェテリアへ向かうことになった。

しかし、カフェテリア……と日本に合わせて言い換えるが、その実態はどちらかと言うとレストランのそれに近い。流石、世界三大料理の一つに数えられるフランス料理の発祥地というものだ。

あ、いや、レストランじゃなくてこの場合は大衆食堂ピストロって言った方が的確なんだっけ？ この辺の文化的な事情には詳しくないから深掘りできないけど。

モンジューはファンファールというフレーバーティーを——絶対これレースのファンファールを思い出して好きなんだろう——選んだ。ぼくは基本そんなに考えず、郷に入っては郷に従え的にフランスでは主にミルクティーなどよりもフレーバーティーなどの香りが強く味わいの淡めなものが好まれる。適当なフレーバーティーを砂糖多めで頼んだ。

「偵察した感想はどうだった？」

「色々な違いが見えてきたのと……やっぱり皆さん強いですね。勝ち筋を作るのに苦労しそうです」

「あなたがそういうことを言う時は注意しろと教わっている」

そういうこと教えなくてもいいんですよマジで諸先輩方。ぼくの強みのひとつはちよつと情報伝達を密にされるだけで死ぬか弱さなだけです。

「いや事実そこまで速くないんですよ。見ての通り」

「私の目には青鹿毛のウマ娘しか見えないが？」

「ご存知の通り」

意地の悪いことを。

……変装してることを忘れて発言したぼくにも責任の一端はあるけれども。

ともかく縞毛が速度を出せないことは一般的によく知られた事実だ。

「けれど勝っている。それもG1を3勝……」

「正確には2勝1分。次が本当の3勝目になる予定です」

「さっきの発言と違ってやけに強気のようだ」

「負ける気で挑むひとは誰もいないでしょう。それに、強さは必ずしも勝利の絶対条件ではない。伊達に史上最遅の皐月……あー……2000ギニーの勝者、なんて言われていませんよ」

「ほづっ？」

モンジューの目の色が変わった。

流石、言ってる意味も即理解するか。史上最遅と言われるほど遅いウマ娘が勝つほどレベルが低い、ではなく、能力が低くとも勝てるように全力で手を尽くしたということくらいは。

「お好きでしよう？　こういう革命劇」

フランスは、その歴史から革命の国などと呼ばれることもある。現代でもストライキやデモが頻発している原因には、そういう背景があるからじゃないかと噂されることもあるが……そこまで詳しくないので明言はしないでおく。

しかし、まあそんな国に生まれ育ったこともあってかモンジューの根本にある反骨心も小さくはないらしい。気に入った、とでも言いたげに彼女は小さく笑った。

「——話は変わるが、今回あなたが最も注目しているのは誰？」

「結論が出せるほどの判断材料はまだありませんが」

「では私から一名、グラディアトウル賞を勝ったVictoria
プラージュ
Pragueを推させてもらおう」

「それは……まあ、確実に有力候補だとは思いますが」

「何を隠そう、彼女は同期だね」

なるほど、鼻肩目アリアリでガチで推しを示してるだけだわコレ。

正直分かる。ぼくも次の天皇賞(秋)、ステイヤードだから2000の短めな距離はどうか？　と思いつつマックイーン推すだろうし。

いや何だかんだ中距離でも実力は十分発揮できるのは知ってるけど……推すってそういうことじゃないんだよ。実績の有無は関係なく応援するっていうか……話変わってるな。

「勿論、注意は向けさせてもらいますよ」

「そうか。フフフ……」

満足げだ……これも分からんでもないんだけど。

例えば同期の、G1でまだ結果を残せてないパーマー先輩が注目されてたりしたらぼくだって思わず満足げに後方で腕組みしてるかもしれないし。フフフ。

その後は至って和やかに話は進み、モンジュー直々に学園の案内を

受けて解散となった。

……ぼくが偵察に行つた、という話こそ広まったものの、高校生の分際で女兒のようなスタイルでやってきた不審者がいるという話は広まらなかった。

武士の情け——地理的には騎士の情け？——というやつだろうか。ともかく足を向けて寝られなくなったことは事実だった。

朝、守衛さんとモンジューに向けフランスストレセン学園方面を向いて平伏したせいで、起き出して来たトレーナーさんがめっちゃ不気味なものを見る目をしていた。

……≠……

「ッ、あああつ!!」

「うん、いいね」

偵察からしばらく経って、数日後にカドラン賞を控えたある日のこと。ぼくらはピンクフェロモンとの併走に興じることとなった。

本人曰く、もう友人知人の大半には勝てたとのこと。ほんのひと月程度のことなのに凄まじい成長だ。

なので、この辺で一発へし折っておくことにした。

……まあ、正確には折ることを提案したのはトレーナーさんなのが。

この年頃の子は基本的に自分の周囲の世界こそが全てだ。どうしても視野は狭く、友人に勝ちさえすれば何だか自分が最強になったような気になってしまう。結果、全能感が頭を支配し、いつかどこかで必ず手痛いしっぺ返しを食らうことになるだろう。

その前に一発お見舞いするという寸法である。相手に指名されたのはぼくだが、理由は「なんか勝てそうだから」である。

何じゃそりやと思うところだが、これにはしつかりした理由がある。(気を抜いた程度の状態なら) 初等^エ教育^コ生徒のピンクフェロモンでも勝てそうなくらいぼくの速度は大したことが無い——というかコレに関してはピンクフェロモンが速すぎるだけとも言おう——けれ

ど、それだけでは絶対に勝てないからだ。

スタートの技術が無い。加速力が足りない。コーナリングの精度が低い。動きに無駄が多すぎる。ただ速さだけでは勝てないから「競走」だ。ひやりとさせられる場面こそあるが、ここまで数度、ウォーミングアップ代わり程度の力加減でも、ここまでの併せで負けは一度も無い。

やがて限界が来た。ピンクフェロモンは、湯気を噴きながら大の字になってターフに倒れ込んだ。

服を脱がす……のは流石にどうかと思うので、大きな血管の通り道に氷嚢や冷却シートを当てて体を冷やしていく。合わせ技というわけじゃないが、ここに更に体を冷やす効能のある野菜や果物を使ったスムージーを一杯。むせながらもその場で完飲した彼女は、気落ちしたように言葉をこぼした。

「こんなに差があるなんて……!」

当たり前なんだよなあ。

むしろこれで負けたら……いや、割と負けの目はあるな。ただ、それを引く条件が整わなかっただけで。

ともかく、トウインクルシリーズの最前線で走ってる身としては負けるわけにはいかないのは確かだ。

「技術があるからね。まだ負けるわけにはいかないよ」

「まるで老人のような……」

「こらミークこら」

確かに技術でパワーをいなす系の老人達人キャラっぽい発言だったけども!

「どうやったらすこまでの技術を身につけられますか?」

「えー……経験?」

元も子もない話だがそういうものだと言うほかない。

ちゃんとした指導者のものとしてしっかりと学ぶことができればいずれ技術も身につくだろうし、結果よくを負かすだけの実力も得られる。同時にこんなこと、一朝一夕では無理だ。

そもそも言えば、そのためのトレセン学園だ。今は体作りに専念

して、技術はいずれしつかり学べばいい。

「では、その……競走相手をコントロールする技術は？」

「そこは……考え方の違い、かなあ。文字通り……」

「どういうことなのです？」

「本当にコントロールするべきなのは、競走相手と言うよりもコース、レースそのものだよ」

個々人の性質を読むことはあるし、それで対策を打つこともある。けれど他のウマ娘の動きをコントロールしようとするだけでは勝てはしない。本当にコントロールするべきなのは、レースの流れそのもの。ウマ娘ひとりを動かしたところで、大きな流れが変えた行動を引き戻してしまっただけだからだ。

「主導権を握るんだ。レースの流れそのものを支配しよう」

言うと、何やらピンクフェロモンは雷にでも打たれたかのようにその場で固まってしまった。

何か変なこと言ったかな……それとも仰々しすぎたか？ 小学生相当の年齢の子にするべき発言じゃなかったかな……。

「あのー！」

「うん？」

「でしたらカドラン賞で見せていただけますか？ レースを支配するということをして！」

妙にグイグイ来るな。

……何かさっきの発言が琴線に触れたようだ。レースを支配するとはどういうことなのか見せてほしいって……G1の舞台でそこまですることができるか不安なところが多いけど……。

さっきの仰々しい言葉が何か気に入った……？ ようだし、ここは偉大な先人の言葉を借りてみるのも一興か。

「La victoire est amoi」

ピンクフェロモンは、上気した顔のまま笑顔を見せた。

カドラン賞

カドラン賞。19世紀半ばに成立した、フランスの超長距離レースだ。

成立当初は2500mの中長距離レースだったが、早いうちに4000mに延長。その後は延長と短縮を繰り返し、現在では世界のステイヤーが目標とする格式高いG1レースとしての地位を確立している。

凱旋門賞ウィークエンド1日目、大勢の観客で賑わうロンシャンレース場で、ぼくはようやくその時を迎えることになった。

コンディションは良好。芝の状態も……脚に馴染むという意味では悪くない。他の日本のウマ娘なら違和感は拭えないだろうが。

(4000は……流石に初めてだな)

いや日本の環境で走ったことあるひとがいるなら逆に驚きだが。

あれだけの距離だ。走ろうと視野に入れることも稀だろう。

長距離路線は基本的に結果論として「長距離を選ぶ他なかった」ウマ娘が集う。ぼくもその類型と言えるが、長距離路線が合っていると理解したのが極めて早いうちで、鍛え方もそれに応じたものになっている。最初から4000mを視野に入れていたという点で、ぼくは他のウマ娘と比べて若干の優位性があると言えるだろう。

自信はある。ただ……。

(……自信がある時に限って勝ててないんだよなあ)

菊花賞は絶対の自信があつてかつそれで負けたし、春の天皇賞は結局引き分け。長距離が得意と言いつつコレである。こればかりはマックインが強すぎる毎回相手が悪いとも言えるが、ぼくの力不足があることも同時に確かだ。

このカドラン賞が成長の一助になってくれるといいんだが……と思いはするものの、実戦経験が必ずしも成長に繋がるものとは限らない。こればかりは行き当たりばったりだろう。

ま、慣れたことだ。

計画を立てながら行動しているとはいえ、実戦は常に不確定要素の塊だ。いざやってみないことには何も分からない。ぼくはある意味で常に出たところ勝負だ。どんなに策士だの何だのと言われていようと、その辺は何にも変わらない。ぼくがやっていることの本質は、常に出たところ勝負で行き当たりばつたりの博打だ。策士よりも博徒の方がより正確だろう。

「やあ、どうも。今日は良いレースにしましょう」

「ええ、こちらこそ」

だから、大事なのは博打の成功率を上げるために最大限手を尽くすことだ。

「手を尽くす」という対象になるのは、今挨拶をした鹿毛のウマ娘、モンジューイチオシのヴィクトリアプラーージュ——ではない。

彼女も強い、それは実際その通りだ。理解できる。だがそれ以上にやるべきことがあった。

「どうも」

「……何か用？」

次いで話しかけたのは、最内の枠番に割り振られた黒鹿毛のウマ娘だ。

他にも何名か候補はいるが、一番分かりやすく釣られてくれそうなのは彼女だろう。こちらを睨んでくる瞳からは、敵意よりもフラストレーションや腹立たしさの方をより強く感じ取れる。

ラビット。海外レースでは頻繁に用いられる、ペースメーカーの役割を負った逃げウマ娘だ。

是非について語る気は無い。文化的、歴史的な背景が違うし何よりルールとしてこちらでは認められている。

ただ、何度も言うようだが、ラビット役になったウマ娘が必ずしも全員本心からやってるわけじゃない。チームが勝つためとはいえ、個人としては負けるために出走しているようなものだからだ。栄光を影で支えるという見方をされることも中にはあるだろうけど、多くは勝ったウマ娘だけに目を向ける。

勿論、能力的、実績的に、真にチームのエースとも呼ぶべきウマ娘

よりも劣ってしまうからラビット役を割り振られるという事情はあるだろう。けど、レースに「絶対」は無い。状況が整えば、展開が向けば、あるいは天候に恵まれれば、調子が、バ場が……様々な要因が絡んで格下と目されていたウマ娘が下剋上を果たすというのは大して珍しいことでもない。

「挨拶に来ました。今日は頑張りましょう。展開が向くといいですね！」

「……ええ」

言葉で揺さぶりをかける。

知らない風を装って、互いの健闘を祈る言葉に毒を忍ばせる。「展開が向けば勝てるかもしれない」という、ほんの僅かな疑念だ。

そんなのは誰しも持っている感情だろうけど、今からチームを勝たせるために自分は負けようとしているウマ娘ともなれば、努めてそうした感情を頭から排除しようとしているはずだ。

日常のふとした瞬間、嫌なことや状況にそぐわないこと、過去の恥ずかしい思い出がふつと思い出されたり、本心に反する内容の想像があふれて止まらないということがある。ぼくが狙っているのは、そうした状態の再現だ。

勝ちたいという本能が強いウマ娘ほど効力は強い。本心というものは、奥底にしまい込もうとすればするほど、些細なきっかけで噴き出してしまうものだ。

同じように他の参加者と挨拶を交わす中、ラビットと思しき相手に小さく揺さぶりをかけていく。

ま、効くかどうかは半々だろう。誰にも通じないまでであるし。その時は自分の走りをするだけのことだ。

「ストライプー」

「はいはい」

スタートまでの間に、脚を慣らすのと暇つぶしのために軽くジャンプしていたところ、トレーナーさんから声がかかる。見ていて違和感があったとかそういうわけではないと思いたいが……。

「なんですっ？」

「あなたの作戦や思惑を先に聞いておこうと思ひまして。勝つにしろ負けるにしろあなたのことですから確実に記者対応に追われるようなことをしでかすのが目に見えています」

「ひどくない？」

「やらかすのが前提みたいなこと言うじゃん。やらかすけど。」

確かに皐月賞やステイヤーズステークスで勝つてもそれはそれで色々問題が浮上して、マスコミ対応を任せざるを得なかったことはあったけど……うん、まあ、全面的にぼくが悪いんだが……。

悪いついでにもうちよつと悪いこと仕込んで。こつちに耳だけ向けて話聞いているっぽいウマ娘もいるし。

「今日は差します」

「ストライプさんにしては、意外なほど素直な作戦ですね？」

「……長丁場のレースですから、そのくらいがいいのは確かです。しかし、言ってしまったてもいいのですか？」

「日本語ですし分かりませんって」

「そうですね。だったら流れに乗るよりも前目、先行策と差しの中間あたりに位置取るのがよいでしょう」

「……ぐつどらつく」

その方が無減速クロスステップも上手く活用できるはずですが、とトレーナーさんは自身の経験から語った。多分分かっていながら語ってはいるんだろうけど。

ミークは何か読み取ったのか、激励の言葉を送った後は口をへの字にしながら首を傾げている。付き合ひ長いからなあ。言わずとも分かる部分はあるんだろう。

フランス語や多国籍の言語が飛び交う中に、いくつか混じる日本語の声援に軽く手を振り返しながら、ゲートへ向かう。んく……結構な啖呵切っちゃったし、いるといいんだけど。

ああ、いた。客席に、ミークとはまた異なる白い輝きがある。ピンクフェロモンだ。流石に今日は家族と来ているらしい。

……ん、いや、あれ家族か？ 家族だろうけど……なんか多くない？ マックイーンと一緒にいる時に見かけるじいやさんっぽい人も

いるし……確かに良いところのお嬢様だとは思ってたけど、執事を雇うレベルって想定以上の名家なのでは？

よし考えるのやめよう。マックイーンもテイオーもそんな感じだし、いるよ、そのくらいの大い家の生まれのウマ娘……うん……。

「まもなくレースが始まります。1枠1番から——」

場内実況も入ったか。ゲートに入るとしよう。

「——3枠5番サバンナストライプ。日本でG1を3勝しています」

2勝1分だと叫びそうになったが抑え込む。一般的に同着というのは勝ちと同じだからだ。

さて、今回ぼくはかなりの内枠だ。ただ、ロンシャンとなるとこれがあり意味をなさない。スタートからしばらく、フォルスストレートを走ることになるので位置取りの調整はもうここで済ませてしまえるからだ。

勿論、ロスを生まないという意味では十分な意味があるが……皆抑え気味で走る関係上、日本のレース場ほど顕著な差は生じないだろう。

選手紹介も終わったしスタートも近い。精神を集中させよう。

今回のレースはG1の中でほぼ最長距離の4000m。百年以上の歴史の中ではレース途中での脱落者なども記録されており、それだけ過酷なレースであることがよく分かる。

フランス出身の方がその辺もよく知っているだろう。ある意味では「だからこそ」レース展開を握らせるペースメーカー、ラビットを出走させる意義が生じる。

実はカドラン賞、過去には一着ですら6分半以上という極めて緩いペースによる長時間のレースになったこともある。当時は一定のペースで走るという習慣があまりなく、残り200m程度になってようやく全力で走り出すというレース運びが主流であったためだが、ラビットはそういったあまりにも緩慢なレース展開を防ぐ目的もあると言っているだろう。近代ですらそういうことはあるし……。

ともかく、そういう状況なので皆ゲートの中では緊張感は強くない、むしろどう中盤まで流すか、体力を温存するか、という点に着目

しているように見受けられる。

「カドラン賞、全ウマ娘今一斉にスタート！」

だからぼくは——全身全霊のロケットスタートをカマした。

「は？」「は？」

グリップがよく効く芝に一瞬脚を取られかけるが、パワーでねじ伏せ一気に前に出る。

客席にいる桐生院トレーナーが一瞬悲鳴を上げかけたのが聞こえた。一方でトレーナーさんやミークは苦笑いだ。

そもそもである。

日本語だからフランス出身者の多いここではどうせ分からない——そんなことはありえないんだ。だってモンジューが普通に日本語通じるから。

日本語が通じるフランス人という知り合いがいる以上、それを前提にして当然だ。加えてぼく自身もマルチリングルなだから、他国の言葉に精通してるウマ娘は決して少なくない。だからそこを利用させてもらった。ひとの話を盗み聞きしてそれを作戦に組み入れる方が悪いということ勘弁してほしい。

もつとも、トレーナーさんの記者対応しないといけないという懸念自体は間違ってるだけだ。今回はタイミング的にも都合が良かったのでそこに乗っからせてもらった形になる。まあ、あつちはぼくの言ってることがアテにならないということなんてとつくに知ってることだろう。

「はっはっは。A u r e v o i r !」さようなら。または、また会う日まで。

「あのペテン師があ!!」

「早い！　しかしあのペース……」

「つつつ……!!!」

ラビットというペースメーカーはカドラン賞に必須の存在だ。

だからこそ、ペースメーカーという明確な標的を崩せば、ペースをこちらが握りやすい。

ぼくにとつては、恐らく最も騙しの手を使いやすいのがカドラン賞

だ。

ここからはただの体力勝負だ

選択肢というものは、常に多ければ多いほど良いというわけではない。

適切に情報を処理できる状況や頭ならともかく、コンマ1秒の判断が勝敗を分けるレース中ともなれば判断力は平時の半分未満にまで落ちると言っても過言じゃない。

スタミナは一步ごとに確実に減っていく。周囲のウマ娘の出方、位置取り、仕掛けのタイミング……処理しなければいけない情報は多く、それだけ脳に疲労も蓄積する。そんな中で、正しい選択肢を常に選び取らないといけないという思考は常に重圧となつてへばりつく。プレッシャーは大きいし、当然、焦りに苛まれもする。

——というわけで、ラビットの皆様には選択肢を用意させてもらいました。

下がってもいい。上がつてきてもいい。競りかけてもいい。ラビットの本分に従つてもいい……それにしたつて、自分がペースを握るか他人にペースを握らせるかの違いはある。チームのペースに花を持たせるために下がるのも仕方ないだろう。

もちろん、勝ちに行つてもいい。

もはや状況は定石から完全に外れてしまっている。「セオリーを無視して大逃げするバカ」がレース開始直後から引つ掻き回すなんてこと、この先何度あるだろう？

トウインクルシリーズにおける現役期間は短い。あと何度同じG1レースを走れることか。対戦相手まで同じ確率ともなれば、気が遠くなるほど低いと考えていい。今回を逃せば、同じことがもう一度起きる可能性はほぼ無いだろう。

逃げ道もある。ラビットは公の^{チーム}のために「私」を殺して尽くすのが仕事だが、今回は特にどうすれば仕事を果たしたことになるのかが曖昧だ。

自分が先頭に改めて立つことだろうか？ ペースを崩さず様子見

に徹することか？　いつそ前に出ないで下がっていくことか？

少なからず、こういうった事態の前例はあるのかもしれないが、この場でとつさに類例を思い出して対策を練るなんて不可能だ。個人として今この場で判断を下すしか道はない。

（効果覲面だなあ）

結果はすぐに出た。先頭集団としてスタートを切ろうとしていたウマ娘のうち、ひとりには前に出ようとせずに様子見、ひとりは迷いと躊躇いで勢いを失って硬直。そしてもうひとりは——前に出た。

現状は、カドラン賞としてはあまりに特異な状況だ。前に出るべきじゃないタイミングで強引に前へ出た上に例年に無い早いペースで走っているわけのわからないシマシマがいるのだから。

予定外のことをしても仕方ない、結果的に勝つかもわからないが、あの荒らしとも愉快犯とも混乱の元とも言えるサバンナシマシマロバムスメが悪い。

——だから、勝ちに行く走りをしてもいいんだ。

きつと、そう思うウマ娘は必ずいる。

人というものは外からの誘惑に対しては防衛本能のはたらきもあって、思ったよりも自制心が働くものだ。

しかし一方で、自分の心の声というものに対しては極めて抗い難い。言い訳ができる状況ならなおさらだ。そしてひとりでもタガが外れてしまえば、自分もそうしていいのだと連鎖的にそれに追随する者も現れる。

『1000mを通過して1分と少しのハイペース。先頭からサバンナストライプ、カーボン、アランダスピス——』

カドラン賞のゴールタイムは安定しない。4分20秒前後が多いとはいえ、距離が距離なので割とすぐに時計は重くなる。近年でも5分超えというケースがあった。史実の1982年。よって1000mを1分強は異常なオーバーペースと言ってもいい。

ぼくもその辺は自分の体をもって実感している。ロンシャンじゃないとはいえ、シーズン外で借りられたレース場も同じフランスのため芝質がよく似ている。無茶苦茶やるのを前提にしてるんだから、当

然予行演習として大逃げペースでの4000mは試したわけだ。結果——体力より先に脚の方がもたなくなると判断した。日本の高速バ場とはワケが違う。適応しきれず勝てないと感じたら、流すような走りに切り替えて怪我を防ぐ、という判断すら求められるのは伊達じゃない。正直もうちよつと整備した方がいいとも思う。

「ストライプさんは大丈夫なのでしようか。あれだけのハイペースだと、体の方が先にどうにかなくなってしまいましたが……」

「そうですね。いくらなんでもあのペースが続けば脚が壊れます」

「おや、流石にトレーナー陣は冷静だ。じゃないとトレーナーなんてできないとも言うが。」

俯瞰的に見ることでできているからという側面もある。レース中のウマ娘なんて視野狭窄の極みにあると言っても過言じゃないレベルだし、当然ながら「このペースだと潰れる」と判断できない場合がある。まだ1000mしか走っていないから、疲労の具合がイマイチ体で理解できない段階だからだ。

まずいと理解しているらしいフランスのトレーナーたちは怒号を上げているが、果たして届くかどうか。意図的に周囲の情報を取り込もうとしているぼくはともかく、普通に走っているウマ娘は、集中するために周りの音をノイズとして流すものだ。声援も、極限状況では逆に集中を妨げ普段とは別の行動に走らせるといった邪魔なものにだつてなりうる。

たとえ聞こえたとしても、トレーナーの意図する方向で結実するとは考えづらい。コースと観客席からは文字通り観ているものが違う。それこそ、最初にぼくがやったように余計な選択肢を提示して混乱するという結果になりかねないだろう。だから、多くのウマ娘はレース中に取り入れる情報は最小限に抑えるし、作戦は予め決めておく。

もしかしたら相手側トレーナーの方がぼくの作戦への貢献度は高いかもしれない。

「やってくれるじゃないシマシマの……!」

「ビーも」

後ろから聞こえる声に反応して視線をずらすと、あの黒鹿毛のウマ

娘が猛追してきていた。忌々しげな言葉とは裏腹に彼女の口元はかすかに獰猛に持ち上げられている。

気合乗ってるなあ。

『手品』はこれで終わり!？」

「まさか、タネはいくつも用意しておくものでしょう?」

「ふんっ、あんたのせいでレースは無茶苦茶だ! これは責任を持って私が主導権を握らないと!」

喉の奥で小さく音が鳴る。やっぱり建前って大事だなあ!

「待ちなさい!」

次いで、追ってきたのは芦毛のウマ娘だ。面白いことに待ちなさいと言っている割にはグイグイグイ近づいてくる。

このひとたち建前ひとつでメチャメチャ来るやん。

「この格式高いレースであなたたちのような狼藉者に身勝手はさせられません! 私がペースを握る!」

「できるならどうぞ!」

まあとつくにその握るべきペースはぶっ壊れてるんだけど。

それでも、主導権を握ることができれば息を入れるタイミングは先頭に行く走者が任意で決められる。仕掛けのタイミングもまた然り。前に出ることは必ずしも正解ばかりではないが、逃げ同士の競り合いならまず前に出なければ始まらない。

まあいずれにしろ完全に勝つための思考だ。そのように誘導したとはいえ、何か思うところがあつたのは間違いないだろう。

もう少し視線を後ろにやると、差し・追い込みのウマ娘の反応は、想定外の事態を起こされた困惑と苛立ち、それから、こんなペースもつわけがないという呆れが入り混じったものだった。

更に、観客席方。桐生院トレーナーなどは心配の色が濃い。

「ストライプさんのスタミナを考えれば逃げも有効なのは分かりますが、もっと有効なのは恐らく、途中で先頭に立ちに行くまくりの方……ですよね?」

「ええ、まあ……」

脚への負荷やリスクを考慮すると、途中まで脚をためて中盤から逃

げに回るまくりも有効なのは確かだ。奇襲性もあるし、普段からよくやつてる戦法なので確実性も高い。

が――。

「……あの子、多分ラビット含めた全員と全力でレースがしたいだけなんだと思います」

「へえあつ!？」

「……本質的にエンジョイ勢」

一石二鳥じゃん？

レースの構造自体を破壊してしまえば、こつちが有利になると同時に本来勝ちに行くことの無いラビットも本気の走りができる余地が生じる。あ、レースコントロールの実例も示せるから一石三鳥か？

先に述べたような有用性も踏まえた上で、実のところぼくの場合逃げでもまくりでも勝率に大きな差があるわけではない。しいて言えば、最も大事なのは作戦を選んだ場合にノれるかどうかだ。

何でもかんでも勢いに身を任せればいいというわけではないにせよ、適度な自信は自分を大きく見せてくれる武器になるし、流れや勢い、テンションの高さは細かな粗を気にせずに踏み越えていけるパワーになりうる。ハツタリをカマすにも自信満々な方が相手は信じやすい。

レースはノリの良い方が勝つ! ……つてのは流石に違うけど。単純な基礎能力の差とかもあるし。

その点、欲張ると決めたぼくは精神コンディションは最高潮に近い。正直に言おう。

最高に楽しい!

『2000mを超えて先頭は依然変わらず。勢いも変わらない! なんと現在タイムは2分と少し!』

スツ、と小さな息が聞こえた。真後ろに回ってきた黒鹿毛のウマ娘の息遣いだ。

残り2000m弱。体力の消耗、脚の痛み……大半のウマ娘はここで「まだ」半分と考える。ぼくも正直思う。特に厄介なのがこの大きなパワーが必要なバ場だ。とにかく脚への負担が半端ではなく、疲労

もそうだが脚が折れるのではないかと思うと迂闊に脚を踏み出すことはできない。ほんのわずかとはいえ、息が入ればそれだけ脚は鈍る。

ぼくはそこに合わせて、自分の速度も相手から分かり辛い程度に落とした。

レース中のウマ娘は根本的に視野が狭く、相対速度でものを考えがちだ。疲労で無意識的とはいえ、息を入れて速度を落としたところでこちらも合わせて速度を落とせば、相手の方からは速度を落としたということが分かり辛い。

一方で、後ろからなら先頭集団の様子がよく見えるため、速度が落ちた場合にそれと気取られる可能性は高い。が、それも大した問題ではなかったりする。なぜなら、ぼくはあちらにとっては「スタートから大暴走をカマした大マヌケ」なので、速度が落ちるのは当然のことだからだ。

この状況でわざわざ前に出てくるのは、よっぽど焦った先行脚質か、マツクイーンレベルのスタミナ持ち、もしくはフランスではあまりデータが無いはずのぼくのことをある程度でも知っているウマ娘くらいのもの——。

「そういう作戦ね？」

「ヴィツ——……」

ヴィクトリアプラージュ!?

バカな、欧州のウマ娘がここで前に出る判断をするのか!?

位置は逃げ三人のやや後ろ。少し無理に出てきたせい、玉のような汗が浮かんでは風に弾ける。

会場がどよめくのが分かる。ここでまさか大本命がかかって前に出てくるなんて誰が予想できようか。

(——いや)

予想してそうなひとはいるけども、観客席で今ニヤツとしたモンジューとか!

かと言ってあの口ぶりだと入れ知恵したってワケじゃなさそうだし……同期のふたりだから知らないけど観察眼まで似るかね普通

！
それに別にこれはかかっているわけじゃない。戦術的に「前に出る」ことを選んだんだ。

あー、もう厄介極まるこれ。楽しい。

「まずいですね、恐らくストライプの顔色を観られました」

「顔色、ですか？」

「2000m走って平然としていられるウマ娘なんて何人もいません。私の知る中でもせいぜいマンハッタンカフェやスーパークレークくらいシンデレラグレイ第91R参考。でしょう。ですがあの子はロンシャンのバ場状態でなお汗ひとつかいていない……」

「暴走なんかじゃないと見破られている……!?!」

「十中八九。ただ……」

暴走、と表現するのならば今のヴィクトリアプラージュの方が暴走に近い。本来、終盤まで抑えて走ることが求められているはずなのに一気に前に上がってきたんだ。発汗量からも見て分かるくらいには消耗しているはず。

だが、彼女も一流のステイヤーだ。そんなことを考慮せずに前に出てくるなんてことはありえない。レース途中から先行に切り替えてでも走りきれぬ自信があるからこそ、あんな一見無謀とも言える真似ができる——はずだ。

脚の回転を緩める。精神論では肉体的限界はどうにもならない。まずはひと息入れて脚の負荷を軽減するべきだ。

ふたりに前に行かれるのは……この際仕方がない。予定通りにいかないならこちららも柔軟にやらないと。

先頭も主導権もくれてやる。今必要なのは途中で脚を壊さずに最後まで走り切るためのひと息だ。

『ここで先頭変わってカーボン。第3コーナーを回る！』

ここは極めて分かりやすいコーナーだ。揃って内ラチ沿いを通り、コーナーの頂点へ。ここから残り800m地点に至るまでは緩やかな坂になるため、転倒の危険と体力の消耗を考慮するなら、通常は脚を緩めるのが得策だ。

こういうところで勝負をかけるのがぼくのいつものやり口だが、今回は負荷の強さを考えるとそうもいかない。これが2400mとかせめて3100mだったら行けるんだけど……勝負はもう少し先。

『まもなく4コーナー、ロンシヤンの名物フォルスストレート。仕掛けどころをよく考えなければ——ここで縞毛のサバナストライプが仕掛けた!?!』

既に一度このコースは走っている。その上で、ぼくの最高速を考慮した上で仕掛けどころはここだと判断した。

近年、フォルスストレートはその問題点がよく情報共有されていることから、仕掛けの位置を間違えるウマ娘はいないとまで言われている。

が——フォルスストレートから仕掛けることが有効な場合は確実にある。ひとつは、加速力に劣るが最高速に優れ、長く脚を使える場合。最終直線が短ければ切れ味勝負になってしまうので、仕掛けは早い方がいい。そしてもうひとつが極めて特殊な例だ——というか下手するとぼくしかいない——が、最高速で劣るが、残りの直線で垂れることなくゴールまで最高速を維持できる場合。

つまり。

「じゃあ、ここからはただの体力勝負だ」

「——なんですって?」

——残り4ハロンの間全力全開を維持し続けるという、知性の欠片も無い力技ができるかどうか。

「よいつ、しよおッ!」

「なっ……!?!」

外側に切り込む無減速クロスステップで、内ラチ沿いを走っていたふたりのウマ娘を抜き去る。

この技については海外にデータがあるかは少し怪しいところだ。本家本元のギンシヤリボーイは基本国内に専念していたし、他の使い手としてドーナッツ先輩はオーストラリアで見せたきり。ぼくは天皇賞で披露したが、それも正しく海外に伝わっているかは疑問だ。

まあ、そもそも「やる」と分かったところでもならないのがこ

の技だ。下手なことをすれば斜行、または進路妨害として降着までありうる。

最上は、それこそ最高の能力の持ち主がやる本家本元スノウオークなのだろうけど、他の走者が全力を出すに出せない今のタイミングならぼくも似たことができる、はずだ。

ふたりを抜き去り、先頭に躍り出たその瞬間に、パツと視界が拓け——集中力が極限に達する。

天皇賞以来、再び入ったことを実感すると共に、視界に映る余計な情報が白く塗り潰され消える。動きから無駄が削ぎ落とされて最適化。限界を超えた速度に到達した。

『ここで更に一気に上がってきた。体力は底なしか！ まもなく最終直線、仕掛け始めたヴィクトリアプラージュ猛烈な追い込み！』

周囲に熱気が迸り、重圧が増したのが分かる。

——恐らく、ヴィクトリアプラージュが領域に入ったんだ。

元からできたのか、あるいはこちらにひきずられてこの領域に到達したのか……いずれにしろ、間違いなく彼女の素質は証明されたと言っている。

これはぼくの個人的見解だと前置きするが——領域には2つの特性がある。

ひとつは潜在能力の発揮。分かりやすい言い方をすれば、リミッターが外れること。もっとも、これは爆発的な能力上昇というわけじゃなく、極限の集中力で本来の能力が発揮できるようになった、というのが正確か。

なんだその程度か、と思うひともあるだろうが、レース終盤に入つて疲労がピークに達している上に、衆人環視というプレッシャーの中で「本来の能力」なんて発揮し切ることが不可能だ。結果的に、領域に突入できるウマ娘の走りは他の走者と比べてひと回りもふた回りも力強く、鋭いものになる。

もうひとつが、感覚の強化。脳内物質の働きによって周囲がスロームーションになったかのように感じられ、五感の全てが鋭敏になる。必要な情報が脳内で高速で処理できるようになるし、不要な情報はそ

の場でシャットアウトされる。ゴールとコースと対戦相手しか見えなくなつた、というような証言が多いのはそのためだ。

ウマ娘によつて、この2つの傾向はどちらが強くなるかは変わる。例えばアイネス先輩やスぺ先輩、オグリ先輩のようなタイプは……言わば潜在能力偏重型。ぼくやマツクイーンの場合は情報処理能力偏重型というところだろう。

恐らく、ヴィクトリアプラージュは前者。これだけの強烈なプレッシャーや熱気は、ダービーで感じたそれとよく似ている。

『残り400を切つた！ 先頭は依然サバンナストライプ、ヴィクトリアプラージュはまだ来ない！』

「まだ！……ここか……ッ!？」

闘志を燃やしてヴィクトリアプラージュが迫る、その最中。残り1ハロン半ばというところで、彼女はわずかに失速した。

——領域^{ゾーン}には、先に述べたメリットとは別に、明確なデメリットが存在する。

それは、消耗する体力の大きさだ。超集中状態に入つたことで疲労をある程度無視して最善の動きができるようになるが、無視したからと言ってスタミナの総量が変わるわけじゃない。動きが良くなればなる分体力は確実に消耗するし、超長距離レースとなると、「使われない」というのも選択肢としてある。

体力勝負と表現したのは領域^{ゾーン}に突入しての持続力勝負じゃない。どちらかと言えば極めて単純な、「どっちの体力が最後までもつか」という——それだけの発言だ。

『サバンナストライプ独走！ 今、ゴール・インッ！ その差は3バ身以上！』

研ぎ澄まされた感覚が色を戻す。熱い息を強く吐き出すと共に、ぼくはその場で大きく右手を掲げた。

ふと、視界の端に白い影が映つた。ピンクフェロモンが客席からずいぶんと前に出てきているようだ。

危ないな、と思うと同時に、そういえばレース前の約束——とも言い難いような大口だけ——を果たせたのだと考えると感慨深い。

このまま放っておくとそのままコースまで来そうだ……っというのは考えすぎか。

どっちにしろ、今この場で話すわけにはいかない。ウイニングランもあるし、ウイナーズサークルで取材も受ける必要がある。ぼくは機先を制するように、軽く指を突き出して一言を投げた。

「A t t o u t a l , h e u r e !」また後で。

調子に乗んな

ウイナーズサークルは、異様とも言える雰囲気に含まれていた。当たり前と言えば当たり前だろう。大本命であるヴィクトリアプラージユを制し、オマケにレース結果は完勝の3バ身差以上。しかもこれをやらかしたのは、イロモノ枠としか言いようの無い意味のわからないシマシマのウマ娘である。

唾然としているひともいるし、不満を隠しきれないひともいる。記者なんかは勝利者インタビューの準備に追われてる上に予定外のウマ娘が勝ったことも相まって、記事の差し替えを迫られてんやわんやだ。

応援のためにフランスまで来てくれたらしい日本のファンは純粹に祝福してくれているようだけど、それ以外は健闘を称える気持ちと自国所属のウマ娘が勝つてほしかったという悔しさと、あとなんやコイツウ!? という驚きがないまぜになった極めて複雑な感情を向けてきている。歓迎の色はあまり無い、というのが正直なところだろう。

まあ、観客の大半からするとぼくなんてよく知らん国に所属してるよく知らん国出身のわけのわからない毛色をした小さいの、くらいのもんだ。

別にぼくは大して気にもしてないんだけど、面白いことにぼくより先にトレーナーさんの方が半ギレになりかけている。入れ込みやすい性格だからなあのと。フラワールのメイクデビューの時もまるで自分のことのように喜んでたし。

直後に元チーフにたしなめられてもいたけども。よりにもよってチームトレーナーがあんまり心を揺らしすぎるな、だそうな。勝ちも負けも数多く目にしないといけない立場だし、ごもつともだと思う。

さて……。

「それでは、勝利者インタビューに移ります」

グダグダ考えているうちに準備が終わったらしい。

うーん……んー……このアウエー感どうしよつかない……。

お国柄とか歴史とか考えると……あー……どうだろ。なんとかなるかな。なるか。

「本日は見事な勝利でした。縞毛ウマ娘のフランスG1初制覇、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「普通の返答してますよ」

「あれ??」

「はーん。さてはトレーナーさんぼくがこういう場でカマすと思ってたんだな？」

「……思ってたそうだな。日本だとネタに走ることも無いではないしな。まあそれが許される環境だからだけだ。」

「日本は良くも悪くも何事に対しても寛容な部分がある。出身自体は違うとはいえ、ぼく自身も日本のトレセン所属だ。よく自分のことを知られていることもあって、ある程度のごときは「オメーはよおー」で済ませることが出来る土台があるわけだ。」

「一方、海外におけるぼくは何の活動実績も地盤も持っていないよわよわござごこのシマシマだ。欧州での知名度よわよわ♡活動地盤スツカスカ♡余計なことをしでかせばぼくだけじゃなく他の縞毛の立場も悪くなってしまうだろう。個人としても、それは避けなければならぬことだ。」

「今回のレース、少し……定石外れのレース展開でしたね。どういった意図があったのでしょうか？」

「来た。早いなこの質問。想定はしていたが……。」

「日本だと、こういう時はできるだけ手の内を隠す。この先のレースもあるし、こちらの手札を晒すことにも抵抗があるからだ。」

「が……うん、そうだな。」

「何よりも重視したのは、ペースを崩すことです」

「——全部明かすのが筋だろう。」

「自分は血筋として、他のウマ娘よりもスピードに劣っています。しかし、スタミナ面では誰にも負けないと——自負しています」

ぼくは基本的に日本で活動することになっている。今後も海外レースに殴り込みに行くことはあるだろうが、シーズンの大半は日本で過ごすことになるはずだ。

そのため、作戦をひとつ明かしても日本と比して大きな問題は無い。まして今回は4000mの超長距離レースで、かつぼくの膨大なスタミナがあつてこそそのバリツバリの力技だ。

対策があるなら教えてほしいし対策してみてほしい。

ともかく、作戦を明かすにしてもそれなりに意図はある。ちゃんとしたルールに則った上で心理戦を仕掛けただけ、徹底的に思考を回せば誰にでもできること、というアピールだ。批判も多少はあるだろうが、作戦勝ち以上にスタミナで押し切ったことは見れば分かる。双方の相乗作用ということも理解してくれることだろう。

……というか単に作戦練っただけであんまり大きい批判受けちゃこつちもたまらない。天候やバ場状態、人間心理を考慮に入れて作戦を組むなんて誰でもやってることのはずだ。ぼくの場合、情報戦も心理戦も何もかもを武器として取り入れるくらい徹底して突き詰めていっただけで。

「欧州のレースではラビットがペースメーカーとなってレースを動かすことが多いでしょう？ それは構造的に、ラビットにある意味『依存』していると言えます。ラビットのペースを崩せば、レース全体のペースも崩れることになるわけです」

「それができれば苦労しないんですが」

外からちやちや入れるのやめてくださいトレーナーさん。
勿論、必ずしも全部が全部そうできるといわけじゃない。差しでも正確な体内時計で完璧なレース運びができるというひともあるだろうし、状況に合わせて立ち位置を変えられる器用なひとも少なくない。

それでもG1レースでラビットがいるというのは、欧州のレースにおける根幹だ。日本よりも遥かに長い歴史の中で醸成された一種の「常識」のため、意識から外すことは極めて難しい。

「ヴィクトリアプラーージュには途中で気付かれて追いかけられました

し、こちらでも少々無理をしています。ラビットの皆さんも、もう少し状況が違っていれば……展開は違っていたかもしれない」

「なるほど、事前に作戦を練った結果ということですね」

「はい。日本に所属しているウマ娘として、数多くの偉大な逃げウマ娘を先輩に持つひとりとして、『逃げ』の強さを見せられたのなら嬉しいです」

同時に、こちらでの「逃げ」、つまりラビットの地位が多少なりとも向上するのならそれがベストだ。

視界の端で、赤い「R」の文字が踊る。レコード勝ち——少なからずぼくの実力が証明された今、それに猛追して掲示板入りを果たしたラビットのウマ娘の実力も、決して引けを取らないものだということが証明されている。

彼女たちも、コースに上がった以上は勝ちに行っている……と、ぼくは思う。

完全なエゴだけどき。

後で聞いたことだけど、このインタビュの反響そのものは世界的に見ても悪くなかったそう。

「では、次のレースの展望などはいかがでしょう？」

「はい！ 次走は——イギリス、チャンピオンステークスです！」

後で聞いたことだけど、この発言に限っては調子に乗るとボロボロに炎上したそう。

……≠……

『4000走ったのに中一週でイギリスまで渡航してG1出るなんてバカじゃないの!?!』

「そ……そこまで言うこと無いじゃん……?」

その日の深夜、ぼくはテイオーからそんな辛辣な電話を受けることになった。

『4000だよ4000！ 負荷半端じゃないじゃん！ 折れるよ!?!』

「なんかテイオーにそれ言われたくなかったな」

『どういう意味〜!?』

いや、まあ……色々知ってるし……タキオン先輩然り、手を尽くさないで折れる可能性自体はまあまあ高かったわけだから。

言ってることは理解できるし妥当な話とも思うんだけど……。

「オグリ先輩のローテマイルCS↓ジャパンカップ（中0週）よりマシだし……」

『オグリは勝てなかったじゃん!』

「ワールドレコードとクビ差なんだから展開次第で勝ってたでしょアレ」

つまりぼくが次勝っても何もおかしいことは無い。暴論

「それより先に祝福してほしかったな〜」

『LANEで我慢してよ、日本までストライプの話めっちゃ届いてるんだから。っていうか脚大丈夫なの?』

「んー……まあ、普通?」

ウイニングライブも終えて軽くストレッチもしているが、熱を持っているくらいで大きな痛みは無い。ロンシヤンのアホみたいに重いバ場を走った程度の負荷は確実にあるが、逆に言えばそれだけだ。数日休めば疲れも抜けるだろう。

この辺、馬だと輸送と検疫の問題があつて中一週は物理的に不可能だが、ウマ娘は人間の一種だから検疫は必要無いし飛行機でひとつ飛びだ。そのまま人型の利点を享受していると言えるだろう。

『でもさあ、2000だよ? ストライブにとっては相当短いよね?』

記念出走つてわけじゃないんだからさー』

「それマックイーンにも言われたけど別に勝算ゼロつてワケじゃないんだよね」

4000から2000、距離はもう文字通り半分だ。

ぼくのごっこまでの勝ちは……レコード勝ちを叩き出した今回のカドラン賞に、出遅れからの大差勝ちのステイヤーズステークス、同着の天皇賞（春）が結果としてはよく目立つことだろう。

が、実のところ最も勝率が高いのは2000だ。皐月賞までの大半

のOP戦は2000で走って全勝だったし、皐月賞もジャパンダー
タービーも策を弄して何やかや勝てた。ぶつちやけ現時点では全勝
だ。

2000という距離は、短くはあっても負け確定というわけじやな
い。海外の無駄に重いバ場なら尚更だ。もつとも、勝ち確定とも言え
ないが……ステイヤーが短い距離に挑む、というのは一般的に無謀な
挑戦だろう。欧州G1を制した直後でちょうど「調子に乗っている」
という印象が根強いぼくは侮られることだろう。それも強烈に。

この際だ。炎上も利用させてもらおうとしよう。

「試してみたいこともあるんだ」

『えく……あんな世界的な舞台で試すって何試すのさ』

「ヒミツ」

『えく!?!』

明かしてもいいけど、明かしたところでどうなるって話でもない
し、下手をすると変な印象を根付かせてしまつて今後のテイオーの
レースに差し支える可能性がある。

特にテイオーは……いや、言うべきことでもないだろう。それこそ
秘密にしておくべきことだ。こればかりはテイオー自身が気付か
ないとどうしようもない。

「まあ見ててよ。分かれば分かるから」

『なんか日本語おかしくない?』

「アイアムケニアン」

『普段日本語の使い方完璧な癖に!?!』

見て分からないなら、それは仕方ない。まだそういう状態じやな
かったと考えられる。見て分かるなら、きつと理解してくれる。

レースはいつでもそれまでの積み重ねの集大成だ。次のレースも
カドラン賞までに学んだ全部を出して勝ちに行く。

必要な技能についてほしい「コツ」は掴んだ。あとはレース本番
に精神状態をピークに持つて行くことができれば……。

「しばらくフランス語使ってたから日本語へタになったかもね」

『無茶苦茶言ってるよ』

「次も勝って、なんならもう一回炎上しちやおうかな」
『無茶苦茶言ってるよ!?!』

凱旋門賞

「先生と呼ばせてください」
「なんて？」

翌日。ロンシャンにやってきたばかりにピンクフェロモンから痛烈なジャブが浴びせられた。

思わず日本語で返答するくらいには衝撃的な発言だ。先生？ とは？ 何の……？

「え、何て？」

「それとも『師匠』の方がよろしいでしょうか」

「ちよつと待つて話が見えない」

「あら、とんだご無礼を。失礼致しました」

丁寧に頭を下げるピンクフェロモンだが、やはり全然話が見えない。一方でトレーナーさんは何か知ってる……何か勘付いた？ のか、困ったように苦笑いを浮かべていた。

改めて、ひとつ咳払いをしてピンクフェロモンはこちらに話を切り出した。

「カドラン賞、拝見させていただきました。まずは一着おめでとうございます」

「あ、うん。ありがとう」

「レースコントロールとはどういうものかということももしかして教えていただきました。ですが」

「レース中の考え方やレースに至るまでの行動、方法論……まだまだ教えていただきたいことが多いのです。これから日本トレセン学園への入学を目指して留学しますので、後輩となりました暁にはどうぞよろしくお願いいたします！」

目の前に宇宙が広がった。

……何が……起きている……？

そりゃあ、先達として良い格好しようと思ってカッコつけたのは事

実だけど……あの話は「この先お互いそれぞれの道で頑張ろうね」的なメダったのでは……？」

「では、来日の暁にはチームベテルギウスをよろしくお願いしますね」「そのようにさせていただきます」

ぼくが話の中心にいるのにぼくに関わりないところで話がトントン拍子に進んでいる。

というかトレーナーさんはあーわかるわかる、みたいな顔してるくせに何で話を加速させてるんだ。

「ストライプ」

「う……はい？」

「あなたはあまり……熱烈なファンというものに縁がないと思ってるようですが、欧州のG1を制したとなれば今後もうこういうファンは増えますよ」

個人としては国内に専念してはいたものの、チームとしては海外挑戦に重きを置いてるせいかな、その発言には言い知れない説得力があった。

しかし、なるほど。玄人好みの——という聞こえは良いが、ひと目見ただけでは強みが分かり辛い地味な——走りでも、実績が伴えばそれは「なんかよく分からないけど勝ってる変なの」とは言い切れない。

まして、前走では手の内を明かしている。不可解な走りでもそこに明確な理論が伴っていると知られば「理解できない」——ではなく、意図的に「理解させない」という強みを持った走りだ。そういうものだとも多少でも理解できるなら、そこには共感や関心が生じるもの。ファンが増えると言うのも、そういう面がある……だろうか。

……まあ、それはそういうものとして。

「それはそれですよ。ぼくはぼくの走りをするだけです。今更王道の走り……やらないと勝てないならやりますけど」

「ええ、あなたはそういうスタンスでいいんです。やりたいようにやるのが、結果的に人に夢を見せることに繋がりますから」

色んな意味で縛られてた過去がありそうなのひと言と重みが違

うんですけど。

まあ、ぼくが夢を語るなんて似合わないのはそうだ。縞毛の先達として道を示すことができて、ここまで。走りたいように走って、夢を見るならご勝手に……くらいでいいだろう。ぼくが率先して夢だ何だと言いつつと胡散臭いし。絶対変なもの売り込みに来るとか思われる。

「流石にイギリスまで応援に行くことはできませんが、次走も応援しております」

「……ありがとう。でも、次は……流石に勝てるか分からないけど」

「あら。次も勝つ、とは言っていただけなのですか？」

「2000はちよつとね……」

中距離も中距離、ド中距離だ。モンジューのような強いウマ娘が出てくるなら相当キツイ展開になることだろう。

そしてチャンピオンステークスという絶好の大舞台でそんなウマ娘が出て来ないわけがない。つまり絶対に超絶キツイ。もう分からんねこれはワハハ。

「でも、確かに2000は個人的に短い距離だけど、だからこそ世界の強豪と渡り合うことができれば今後の中距離で戦う算段がつけられる」

「モンジューさんでは試金石として不適切でしたか？」

「そういうわけじゃないよ。ただ、フォワ賞は策を立てる余地が無かったから『自分のレースが通用するか』って基準にするには不適切なだけ」

「だーれもぼくのこと警戒しないんだもの。」

カドラン賞の前準備としては十分かもしれないけど、中距離において頭脳面、パワー……単なる身体能力ではなく「総合力」が通じるかを試す本番はここからだ。

最大限の警戒をさせた上で覆せるならよし。今後の活動に中距離路線も選択する余地が生じる。例えば、それこそ春三冠とか。

ダメならそれはそれでしゃーなし。今後は長距離メインで力押しを考えることにする。

菊花賞からこつち、フオワ賞除けばできる範囲で長距離に専念してきたし、そろそろ選択肢も広げたいんだよね。

カドラン賞は賞金がちよつと……アレだった2022年時点で1着171,420ユーロ。(日本円換算で約2500万)日本のオープン戦並みかそれよりもやや少ない。し……。

「さ、話も済んだことですし、凱旋門賞の応援にしましょう。今回は特に——激しいレースになるでしょうから」

トレーナーさんに促され、ぼくらは観戦と応援に注力することにした。

今回のレース、当然ながら1番人気はフオワ賞1着かつ連覇がかかっているモンジュー。ミークはフオワ賞3着だったからか、あまり大きく人気は掴めず3番人気。

注目は——2番人気。今年のフランスダービーウマ娘のスプリムシンガー。前走はアイルランドに遠征してアイリツシユチャンピオンステークスストライプ出走予定のチャンピオンステークスとは異なる。愛チャンピオンステークス、英チャンピオンステークスと呼び分けされることが多い。に出走しており、こちらでも1着をもぎ取った強豪だ。

一見すると穏やかな雰囲気で、線も細く華奢に見えるが、その実フランスとアイルランドという全く異なる環境を踏み越えてきた豪脚金スキルではない。の持ち主だ。ふたりに対抗しうるとしたら、彼女がそうだろう。

『全ウマ娘の枠入り完了。……スタートしました!』

ほどなく、今週の大一番——凱旋門賞が幕を開けた。

緊張に負けることなく、ミークは絶好のスタートを切る。逃げの背ラビット後、概ね3、4番手の絶妙な位置につけることができた。モンジューたちは中団。やはり差しの姿勢か。

「うん——ミークは今日も自分の走りができていますね」

桐生院トレーナーの感心したような言葉につられて見ると、周りの力強い走りとは対照的な、ミークの……フワツとした軽い走りが目に入る。

海外のウマ娘たちと対照的ということは、つまりぼくと比べても対照的ということだ。足元が爆発するほど深く、強く、強引に踏み込んで、考えながらその時々で作戦も何もかもを適宜変えるのがぼく。

一方、ミークは基本的に最小限の接地で駆け抜けていく、王道の先行押し切り型。バ場の軽重を問わない（一見）ふわふわした走り方が特徴的だ。実はコレが意外と侮れない。というのも、見た目ふわっとしていかにもズブいように感じられてしまうため、周囲が速度を誤認しやすいのだ。

ぼくは意図的にペースを上げ下げして相手を幻惑するが、ミークの場合あの走り方のせいで「あれ、なんか思ったより速いぞ」「あれ、なんだか思ったより遅いぞ」という認識とのギャップが頻発して勝手に相手が幻惑される。本人が独特のペースで走ることもあって、これが余計にキク。

ミークはある種教科書通りのオーソドックスな、良く言えばシンボルドルupp会長さんのような王道の先行策に徹しているだけなのだけけれど。

加えて、幻惑されるのは速度だけではなく、体力もだ。領域ソーンに入った時のマックイーンほどではないにしろ、最小限の力加減で最大のパフォーマンスが発揮できるということはそれだけ「最適」の走りに近いということだ。領域ソーンに入ることなくそうした走りができるということは、それだけ体力の消耗が少ないということに繋がる。

「行けるよミーク、頑張れー！」

「あと少しです……どうかこのまま……!!」

流石にぼくのカドラン賞の時みたいな大波乱が起きることは無く、フォルスストレートの中頃に差し掛かる。

ここでじりじりと前に上がっていったミークは、絶妙なタイミングで先頭に立った。——後ろとはまだ距離がある！

このまま行ければ……!!

『ここでモンジュー、スプリームシンガーが上がってくる!!』

——そう思っていたタイミングのことだ。真の最終直線に入ったそのタイミングで、フランスの英雄ふたりが牙を剥く。

「……!!」

「はああああああつー！」

「やああああつー！」

ここでミークの走りが変わった。ここまでに温存してきた体力全てを振り絞るラストスパートの一手だ。

だが、モンジューもスプリームシンガーも凄まじい差し脚だ！ 海外のウマ娘は差し主体というだけあって切れ味が凄まじいとは頻繁に言われているが……フオワ賞でのモンジューの末脚よりも更に鋭い！

カドラン賞だと、超長距離で翻弄し回してとにかく差し脚を使わせないようにしてたけど……本気の中距離戦となるとこのレベルか……！

「行けえー!! ミークううー!!」

残り1ハロン。思わず声を張り上げる。そこで、一気に三人の集中力が最高潮に高まるのが感じ取れた。

雄叫びとともに、ほぼ同時に三人がゴールへと飛び込んでいく。

『ゴオオール!! これは判定か!』

……判定。思わず、祈るように握る手に力が込められる。

やがて、十数秒ほどの間を置いて告げられた勝者の名前は――。

『――凱旋門賞! 一着となったのは……スプリームシンガー!!』

――クラシック級からの刺客、挑戦者スプリームシンガー。チャンピオン

次の瞬間、会場を大歓声が包んだ。

ミークは……アタマ差の2着。出走者の立場ではないというのに、思わず悔しさが胸を突く。前年の凱旋門賞のこともあって、日本のウマ娘の勝利にかかる期待は大きかった……という以上に、友人が勝つ姿を見届けることができなかつたのが、残念だ。

それと同時に、新たな凱旋門賞ウマ娘の誕生は素直に祝福するべきだ。ぼくは大きく拍手を贈ることにした。

モンジューに継ぐ、新たなクラシック級凱旋門賞ウマ娘……新しい世代の代表者として、今後彼女も長く一線に立つことになる、はず。

・・・≠・・・

「トレーナーを凱旋門賞トレーナーにできなかった……」

「当初の想定よりだいぶ理想が高いな？」

レース後。控え室のミークを尋ねると、開口一番にそんなことを言われることになってしまった。

割とノリでフランスに來た部分があると思ったんだけど、そうか。桐生院トレーナーにとって初めての専属ウマ娘がミークだ。ずっと二人三脚で一緒にやってきたんだし、返せるものがあるならせめて名誉だけでも渡してあげたいと考えるのは自然なことだろう。

考えてみればぼくも似たようなものが無いとは言えない。元チーフが引退するのは唐突なことだったとはいえ、できれば最後にG1タイトルをあげられたら……と思う部分が無かったわけじゃあない。重賞大差勝ちは見せられたけど。

「いいんですよ、ミーク。もう既に何度も大きな夢を見せてくれたじゃないですか」

「うーん……………」

「それに、エルコンドルパサーさんは半バ身差で、ミークはアタマ差ですよ！ 日本のトレセン所属のウマ娘として快挙じゃないですか！

また何度でも挑みましょう！」

それはまあその通りだ。モンジューに先着してリベンジを果たしたことも確かな快挙と言っただろう。

……問題はその、ぼくが知ってる知識の上だと、こういう善戦が積み重なってだんだん日本全体が凱旋門賞に対して怨念じみた執着を向けるようになってしまっただよな……素直にめでたしめでたしにしていいんだろうかコレ……。

と少しばかり悩んでいると、同席しているピンクフェロモンが口を開いた。

「ハッピーミークさん」

「……………め、めるしー」

「急に対応できないならテキトーな単語言うのやめなよ……………」

しかも本題切り出してないし。

仕方ない、通訳するか。

「本日はお疲れ様でした。結果そのものは少し残念でしたが、白毛ウマ娘の底力を見せていただきました」

「メルシーはこのタイミングだよミーク」

「めるしー」

少しだけ空気が和んだ。

が、まだここまでの話も本題というわけではなかったのだろう。ピンクフェロモンはひとつ咳払いをして続けた。

「今回のレースを見せていただいたおかげで、決心が付きました。私は将来、凱旋門賞に挑みます」

「……え、長いよ。大丈夫？」

「体力は必須……」

「勿論、そのための努力は惜しみません。私は——おふたりに感銘を受けたウマ娘として、白毛の先達として拓いていただいた道を行きます」

なるほど、進路か。確かにピンクフェロモンはぼくに教えを受けたがってたけど、どういう方向のレースに出たいかは明確じゃあなかった。

クラシック路線……は、体力の都合上元から勧められるものではなかったけど、こう考えるとピンクフェロモンのような体質を持つウマ娘にとって、ミークの辿った道筋はそのままひとつの指針となりうる。

やはり同じ白毛ウマ娘として、ミークの姿はこれ以上無いくらい分かりやすい目標となるだろう。……ぼくのローテは極まったステイヤー用だろうから何の参考にもならないしね。

「道を……開拓したかな……？」

「ミークの自覚が無いだけで、これ以上無いくらい白毛ウマ娘の目標になってると思うよ」

今まではアイドル的な人気こそあれど、そこ止まりで決してランナーとしては主流ではなかったのが白毛だ。

もつとも、これは白毛の絶対数が少ないせいである。芦毛と同じで、「走らない」とされていたのはもはや迷信でしかない。

そのことを示したミークと同じ道を辿ろうと考えたのは、その場限りの衝動とは決して言い切れないだろう。

「む……でも、まだまだ凱旋門賞にチャレンジはできるから……」

「そうだね。何なら先に奪^とっちゃいなよ」

「あら。でしたら私はそれ以上の偉業を成し遂げてみせます」

思わずふふつと息が漏れた。……この子のポテンシャルなら本当にやりかねない。

やめだやめ。考えるのやめた。凱旋門賞の呪いとかバカバカしい。

このふたりなら、いつかどっかで「呪い」なんて言われるようになる前にスツパリ勝って断ち切ってくれそうな思いがある。

——少なくとも、ぼくは友人としてそう信じたい。

過去最高に頼もしく見えています

凱旋門賞ウィークエンドの全日程（とオマケの出走者親睦会）を終えた翌日、ぼくとトレーナーさんは早速イギリスへと向かうことになった。

日程の問題もあるため桐生院トレーナーとミックとはここで解散。次は日本で会おう、ということ。今日までのお互いの健闘をたたえた。

さて、一路パリからロンドンへ。言葉にすると国を跨いで移動ということでもかなりの時間がかかりそうに感じられるが、その実鉄道一本、二時間と少しで到着するというお隣感覚での移動だ。東京から京都に行くまでとそれほど時間的には変わらない。

そうしてイギリスに到着して数時間。

——早くもトレーナーさんは滞在先のホテルでフラストレーションを全身で大いに表していた。

「スシ……」

いかん。言語能力がどこぞの有名ゲームの魚類程度にまで減退している。

ことの発端はというと、イギリスに到着したのがちやうど昼頃だったので昼食に、という話になったことだった。

イギリスといえば言わずと知れたメシマズの国である。もちろん、全部が全部そうだというわけじゃないが、長い年月をかけて培われてきた価値観は容易には変わらない。まだ多くの人にとって食事というのはあくまで栄養補給であり、「楽しむもの」という認識は根付いていないのだ。

ここ2、30年の料理番組の隆盛やウマチューブの発展、多くの外国人が国にやってきたオリンピックの開催によって徐々に意識改革が行われているとは聞くが、産業革命時代から醸成されてきた感覚がひっくり返るのは果たしていつになることか……。

そんななので、店売りの食品というのは当たり外れが大きい。試し

にとその辺の屋台で買ってみたサンドイッチを食べたところ、トレーナーさんはひっくり返ってしまった。

「口の中、パッサパサですよ。パッサパサ！」と憤慨し、味の薄さに仰天し、更に日本ではまず具材として入るはずのないフライドポテトに目を白黒させた。

ちなみにイギリスにおいて味が薄いのは標準的だ。これは客側がソースなどで好みの味付けにするためだと聞く。そんななので、そのまま食べれば当然味はうっすい。

ともかく、長くフランスという食の面で恵まれていた国に滞在していたばかりはイギリスに来ていきなり一発目に重めの洗礼を食らったのだった。

屋台じゃなくてレストランなら大丈夫！　と思つたら、そこもイマイチ口に合わず、元から割と深かったダメージが更に加速。宿泊先に来て意気消沈してのこれである。

どうやら長いことお寿司を食べてなかったのも含めて、元からそれなりにフラストレーションが溜まっていたのもあるようだ。昨今、いわゆる「SUSHI」は日本食の代表としてごくポピュラーなものになりつつあるが、やはりその国に合わせて魔改造されているため必ずしも日本人の口に合うとは限らない。

探せば本格的なお店もある。ただ、開店しているとも限らないし、値段もお高い。

なのでとりあえず自作することにした。

「スズキとサーモンです」

「今あなたが過去最高に頼もしく見えています」

「言い方よ」

今まで頼もしかったことが無かったとでも言うのかと言いかけたがそもそもぼくは頼れる系ではなかった。

レースの作戦も基本的に表に出さないから何をしでかすのかという目で見られてもいるしそっち方面では完全に着外である。

ちよつと複雑な感情を抱いていると、トレーナーさんはひよいと寿司を口に運んだ。

「意外なほど丁寧に仕込みをしていますね。2000円前後のセット寿司と考えれば確実に及第点はあるでしょう」

「基準が高い……」

スズキもサーモンも、イギリスではごくポピュラーな素材だ。特にサーモンは本場北欧に近いこともあつて高い鮮度のものが楽しめる。

スズキは、その臭みのせいで人によってかなり好みが分かれる魚だ。この辺は本場だからなにか違うということも無いが、だからこそ仕込みが大事な魚ということでもある。こちらは氷水で洗うなどして先にある程度の仕込みを済ませた上で、薬味などに気を使つて違和感無く食べられるようにしている。

「サーモンは江戸前にはありませんので、いわゆる高級店のお寿司としては選外ですね。しかしスズキはしっかりと臭みを抜いていてなかなか……」

「今サーモンも豊洲とか銀座のお寿司屋で使つてるみたいですけど」「よく市場をリサーチしていますね……いや何で寿司方面の市場をリサーチしているんですかあなたは?」

「今後のことを考えて?」

しかしメチャクチャ語るなこのひと。寿司漫画から出てきた評論家か何かか。

……いやそのくらいには舌肥えてそうだな。現役時代の貯金もあるだろうし、打ち上げはだいたいお寿司屋だし平日でも発作的にランチ寿司に行ったりしてると聞くし、休日は豊洲に行ったりするとも聞く。

このままほつとくと朝まで語りそうだなしかし。苦笑いしながらテレビのチャンネルを変えると、ちょうど目当てのチャンピオンズステークスの特集が映った。出演者は……。

(前年度勝者、デイブレイク——)

今年が一番人気、前年優勝者の芦毛ウマ娘、デイブレイク。他にも数名の有力なイギリス所属のウマ娘の姿がある。

番組は、今回の有力ウマ娘の紹介PVから始まった。次いで、出走者へのインタビュー。現在の意気込みを語ってもらう程度の短いも

のだ。

ほどなく、今年の出走者の寸評に入り……中ごろでぼくの話題になった。

『次はこの日本トレセン学園所属のサバンナストライプ。前走はカドラン賞で一着のスーパーステイヤード……何で2000mを走ろうと思っただらうね?』

テレビから笑い声が漏れてきた。

イギリスの番組若干ノリ軽いな。

「あなたの話のようですよ」

「どうか低く見てくださいですよーに」

「どういう祈りですか……」

無理か。日本のG1だけなら「でも欧州は前提が違うぜ!」という理屈のもと侮ってくれる可能性があったが、もう欧州G1勝ってたら侮るとかそういう段階じゃないよなあ……。

もうこうなるとどういう発言が飛び出すか分からないぞ。

少し身構えていると、デイブレイクが少し考えてから口を開くのが見えた。

『縞毛ウマ娘の特性上「速い」わけではないでしょう。体格や毛色、尻尾を回す奇っ怪な走りで判断を乱されやすい選手だと思えますが……一つ確実なことを言えるとすれば、彼女は「強い」』

流星にそろそろ尻尾そこツッコまれること無くなったと思ったのに今更来るかちくしょう!

『しかし、その強さは他者に依存した強さです。先のカドラン賞でも、その後のインタビューで語っていたことで考えても……彼女は他人のペースを崩し、乱すことを主眼に置いています』

「言われていますよ」

「気にしませんよ別に」

事実だし。

それでも実績出してるから、言いたいひとには言わせておけというところだ。

『よって、彼女の弱点は根本的にペースを乱せない相手と競り合うこ

と……勝利の秘訣は、自分のレースに徹することです」

「ふーん」

「気のないセリフですね……」

「できれば苦勞しないですからね」

「あなたもそういう『それができれば苦勞しない』ようなこととしてるじゃないですか」

「難易度が違うでしょ……」

スタミナで全部押し切れるという理想論が通じるなら苦勞しねえ！ とはよく言われるが、ぼくの場合スタミナ有り余ってるんだからできちゃうんだよ。

それは身体能力に起因する理想論の体現だが、デイブレイクの掲げる理想論はまた違う。常に変わり続けるレース展開の中で自分のレースを貫き続けるというのは並大抵のことではない。

そもそもレースを作るのは個人ではない。出走者全員という「群」だ。別に対象をデイブレイクひとりに絞る必要は無い。他を乱せば、自動的にレースのペースは徐々に乱れていく。ひとりでレースを作ることができるウマ娘がいるとすれば、それは最初から最後まで一定のペースで大逃げし続けるような異次元の走りができるようなひとだけだ。

ただ——単に理想論だと切って捨てるには問題がある。他ならぬぼく自身が体質のおかげで長距離における理想論を実現できている以上、同じく体質なり訓練なりで理想論を体現できるウマ娘が現れても何も不思議じゃない。世界のトップクラスの舞台ともなれば尚更だ。

なまじ、ぼく自身「理想」と呼ぶに相応しい——主に逃げウマ娘の——走りを見ているわけだし。スズカ先輩「最初から最後まで先頭ならずつと先頭の景色を楽しんでいられるわ」という大逃げ＋溜め逃げタイプ。とかスカレット「最初から最後まで一番なら一着よ」というフィジカルゴリ押しが通じてしまうタイプ。とかマルゼン先輩「普通に走ってたら何故か先頭だったのよ」という周囲の能力との隔絶で結果的に逃げになるタイプ。とか……できないと考えるのは早計だ。

この場合に考えるのはおおむね三通り。テレビ放送の場でリップサービスとして大きなことを言った可能性。本当にそれができるという可能性。そして、逆にこちらを餌にかけるためのブラフの可能性。

……「できる」上に引つ掛けに来てるという可能性もありうるが、ともかくあちらだって本気で勝ちに来てるんだ。あらゆる手段を使うのは当然と考えた方がいい。

ぼくがカドラン賞で取った作戦とは逆。こっちの選択肢を狭めにくている。

(……手の内を見せすぎたか)

いや、いずれ対策は取られていた。今回はそれがちよつと早かっただけだ。

むしろ、これは「双方が」全力で2000mを走るにあたってどれだけ通用するかを知る絶好の機会だ。

「悪い笑顔をしていますね」

「そうですか？」

むほほ。

あつちからこっちの土俵に上がってきてくれるなんて、それこそ楽しいことこの上ない。

単純な頭脳戦とは決して言い切れないが、それ自体はいつものこと。根本的なところで一般的なウマ娘の方が中距離では絶対有利なのだから、「ただの頭脳戦」になるわけがない。いかにあちらはこちらの強みを潰すかを考えることだろう。

そのやり取りの狭間に、これまで積み上げてきたものが本質となつて顕れる。

「トレーナーさん、明日はトレーニングの前か、後か……少し外に出ませんか？」

「構いませんが、どちらに？」

この状況で行くとなると場所は決まってる。

「——イギリス、トレセン学園に」

今回のテーマは

イギリス、トレセン学園。その歴史はトウインクルシリーズの歴史とほぼ等しく、100年以上の長きに渡って競技の最前線を牽引し続けている。

その歴史の長さ、レースの格式の高さから世界的に入学希望者は多く、様々な人種、国籍のウマ娘が所属している。

「ジエームズ某のような潜入作戦でも？」
「しません」

超法規的措置が容認されるのは世界の危機くらいでのものだ。スポーツで適用されるわけがない。

例えばそう……世界大戦の危機とか、宇宙ウマ娘中山2500m星人が地球に襲来したとかそういう状況でも無い限り、無断での潜入はただの不法侵入でしかない。

「となると、フランスの時のような手を？」

「同じ手を二度使うわけにはいきませんよ。あと、妹がいるんでモロバレです」

「ああ、そういえば」

なのでヘタな変装はそのまま社会的死に繋がると言っている。毎回モンジューの時みたいにすんなり話が通じるとは限らないんだから。

「では何を？」

「んー……」

ぼくも移動時間に色々考えてきたが、妹の存在という一点が気がかりで立てた作戦ごとごとくボツにせざるを得なかった。

となれば、ここに至れば結論は一つしか浮かばない。

「今回のテーマは『正面突破』です」

……#……

正面突破という言葉とぼくの性質があまりにも通じ合わないことはもはや知つての通りだろう。

しかし策とは常に正攻法を彩るためのものだ。正攻法では不足している部分をカバーする、ないしは正攻法が通る確率を上げるために策を講じる、という状態が一番望ましい。

そして普段策を講じるウマ娘であることを全面に押し出した上で、ごく普通にトレーニングを見学に行くという正攻法を用いた結果が、この騒然となったイギリストレセン学園の構内である。

「何企みやがったクソ姉貴!!」

「むはははは」

そして混乱はぼくの周囲にも起きていた。

拳を振り上げ追ってくるのは、同じ縞毛の、ぼくよりもう少し小さな体格をしたウマ娘——妹である。

実家では取っ組み合いのケンカもよくあることだったが、今は流石にお互いアスリートの身。オマケにぼくはイギリスから見れば海外選手なのでヘタに手なんて出そうもんなら最悪国際問題にすらなりかねない。というわけで振り上げた拳の降ろしどころが無く、「何もできないけどとりあえず威嚇して追っかける」という珍妙な状態になってしまっているのだった。

「す……ストライプ、そちらは？　まさか……」

「妹のサバンナモノトーンです」

「分かる言葉で喋れオラア！」

「先程からその……Fワードや四文字言葉を連発しているようですが……」

「見ての通り凶暴なもので——ちよつと黙れトレーナーと話してる最中だぞ」

「……………!!!」

「——程度や!方向性の違いこそあるけど、縞毛ってこんなもんであるんですよ、本来」

軽く説明を加えると、目に見えてトレーナーさんが戦慄するのが分かった。

ぼくと接してきた時間が長いこともあって、縞毛のイメージが「サバナストライプ」以外に特に無かったのも原因だろう。しかし、縞毛というのはその大半が気性難だ。

臆病で繊細だが、怒りっぽく衝動的で我が強い。「縞毛はレースに向かない」とされるゆえんは単純な能力面の問題だけでなくこういうところにもある。

……ここまでの情報だと精神性がもうどうしようもないアレな風に見えてしまうが、あくまで傾向であって全員が全員そうだというわけじゃあない。陰気だったり陽気だったり、大人しかったり活発だったり、根本的な性格はそれこそ千差万別だ。

ぼくみたいなものもいるし外れ値の極みのため事例として適さない。普通のヒトやウマ娘とそう変わりないと言っつていいだろう。ただちよつと……野生の部分が強すぎて持て余してる子が多いだけで……。

良いところもある。とにかく身内と認定した相手には優しく、「身内」の範囲も広い点だ。大元になつてるシマウマも、ヌーやダチョウといった別種の草食動物と行動を共にしているとされている。

まあ、今のぼくは他校の所属。それもチャンピオンステークスに殴り込みをかけにきたわけで、モノちゃんから見れば「敵」のカテゴリそのものだ。縄張り意識も強いからなこの子。

……こう考えるとアレだな、ひと昔ふた昔前の不良マンガみたいな生態してるな、縞毛……。

手持ち無沙汰になったモノちゃんは逆立ちしてめっちゃこつちに威嚇してきていた。ウケる。

「それで結局何しに来たんだよ、毒でも仕込む気か？」

「モノちゃんの様子見るついでに偵察に来ただけだが？」

「嘘をつけ!!」

トレーナーさんは苦笑いしている。だって今回奇をてらう気は無いつて既に伝えてあるんだもの。

裏とか無くマジで妹の様子見てチャンピオンステークスで当たる相手の様子を見ておしまい。その後も別に何かするわけでもなく直

帰する。

先のカドラン賞の件と日本での風評から、こちらでもいわれない悪評が立つことは想像に難くない。そこに噂の人物が来れば……勝手にドカンだ。

「こちらでも正規の手続きを踏んでいます。あまり道を塞がれると困るのですが……」

「あ、あん!? ……そっすね!」

流石に目上の相手ということもあってモノちゃんもトレーナーさんに対しては萎縮しているようだ。

耳を思いつき絞っている後ろに向けて倒している。が、前に「目上の相手への態度はちゃんとしておかないとトレーナーがつかないしレースにもまともに出られないぞ」と忠告したことを気にしているのだろう。対応はぼくに對するそれよりも遥かにマイルドだ。

しかしモノちゃん、可愛げが足んねえぞ! トレーナーさん! モノちゃんの可愛げ足りねえよな!

渋々といった様子で案内された先のトレーニング場では、既に数名のウマ娘がトレーニングに励んでいた。しかし……。

「モノちゃんのチームにいるはずじゃないの? 今年のチャンピオンステークスに出走するひと」

「ちやつかり調べ上げてるじゃねえかよクソ姉貴……」

そりゃ調べりゃ出てくるし。

先日、テレビで出ていたデイブレイクとはまた別のウマ娘だ。確か、名前はランフィニ——。

「呼んだかい?」

「ダメですよ」

——噂をすれば影が差す、と言うべきか。長身のウマ娘が、トレーナーさんの帽子を取って行こう……として、光速の反応速度に負けて手を払われていた。

あんたアラサーもいいところだろうに何だその現役選手顔負けの神速。本当に人類ウマ娘か?

「つとと、ジョークジョーク」

「先輩、お客さんにそれはまずいっす」

「ちよつとした挨拶じゃないか。それにホラ、その方がかつこいいだろう?」

イギリス所属なのにイタリア人みたいな伊達っぷり発揮しようとするじゃんこのひと。

イタズラとかする前に訴訟リスクも考慮してほしいところなんだけど。

トレーナーさんも注意にとどめているから問題は起きないだろうけど……と思っていると、ランフィニは涼やかな笑みでこちらに手を差し出した。

「改めて自己紹介させてもらおうかな、イギリストレセン学園所属のランフィニだよ。チャンピオンステークスではよろしく、サバンナストライク」

「……ええ、こちらこそ」

がつしり握手を交わしながら、これは果たして天然で名前を間違っているのか挑発のつもりなのかと思いを巡らす。

いや、冷静に考えるとどっちでもそう変わりないなこれ。本当にただただ間違ってるだけなら今この場で訂正を入れても変な空気になるだけだし、挑発のつもりなら反応した時点で負けだ。

あとモノちゃんが動揺しているから確実に天然だなこれは。

……逆にトレーナーさんは若干ピキツと来てるようだ。イタズラで帽子を取られそうになった挙げ句に（一応）チームのエースの名前まで間違えられたとなればイラツとくらいするだろう。

しかし直後、トレーニングに戻ったランフィニの走りを見てその苛立ちは即座に霧散する。

「速い……」

欧州の重いバ場にあつて、その脚は鮮烈なほどに鋭かった。

そういった驚きを顔にしている様子に、モノちゃんは鼻の下をこすって得意げにする。

「どうだ！ 見たか姉貴！」

「んー、うん」

「何だその気の抜けた返事!？」

別にぼくは速さを見にきたわけじゃあないし。

大事なのは速さそのものより対応力などを含めた総合力だ。突出した速さは武器になりうるし、実際それだけで勝てるウマ娘もいるが洋芝、それも重めのバ場となれば単なる速さだけで勝負が決まる環境じゃあない。

基本的に速さを求められる血筋じゃないぼくらが「速さ」に憧れるのは痛いほど理解できるけど、速さ「だけ」に目を向けるのも違う。

「だったら教えてやる! ランフィニ先輩の自己ベストは2分台!

最高のコンディションならチャンピオンステークスのレコードを更新することだってワケねえんだ!」

「ふーん」

「XXXXX!!!」 Fワード。

「口が悪いぞモノちゃん」

「あなたたちもしかして姉妹仲悪いんですか?」

「そこまでではないと思いますよ」

ちゃんと会話は成立しているし、どちらかと言うとモノちゃんの「敵」カテゴリに入ってるから機嫌が悪いんだろう。あと単純に口が悪い。縞毛の中では口の悪さはこの子に限った話でも無いけど。

「それってベストコンディションかつ学園内のよく整備されたコースでの話でしょ。チャンピオンステークスの前にはいくつかレースがある。バ場はどうしてもレースの度に荒れるし、ひとりで走ってるわけじゃあない。個人として出したベストレコードが必ずしも同じように適用されるとは考えない方がいい」

「……うっせー」

ついに答えに窮し始めたようだ。憎まれ口に近いものだが、ある意味、これもちゃんとこっちの話を理解しているからこそと言えるのかもしれない。

地頭はいいんだ。地頭は。気性がそれを妨げてるだけで……。

「今に見てるよ……姉貴がカドラン賞のレコード更新したってんな

ら、アタシにだってできるはずだ。ぶつちぎりの……4分切りくらいやってやる！」

「無茶苦茶言うねお前は……」

「何が無茶なんだよ」

「ロンシャンもアスコットと同じで芝質が重い。今のレコードを15秒以上も縮めようなんて非現実的だよ。脚が折れる」

チャンピオンステークス——2000mの2分切りならまだ分かる。現在のレコードは2分1秒041984年。後に2008年に2分0秒13まで更新。引退を視野に入れたウマ娘が脚が折れる覚悟で本気で走れば……または、数十年間の間にトレーニング理論が更に先鋭化され、ウマ娘の肉体強度がより高くなれば十分ありうると言っただけかもしれない。

だが、ゴールドカップやカドラン賞の4分切りは不可能だ。現在のカドラン賞のレコードはぼくが出した4分16秒フラット参考：1955年のタイムが4分16秒24。以降、2000年の4分14秒1まで更新されず。2023年現在最速が4分12秒22。1000m1分ペースなんてはつきり言って馬鹿げた話だ。脚への負担も大きいし、最悪……いや、まず確実に折れる。冗談でもそんなことやりにたくない。できたらそれはウマ娘じゃない。

1000m1分を切るのは日本の先鋭化した高速バ場やアメリカのカチカチの土ダートが主だ。それも、中距離からスプリントという比較的脚への負担が少ない環境でなくてはならない。

「だいたい、レースは「競走」であってタイムアタックじゃないんだ。「相対的に」一番速いことが重要ではあるが、怪我してそれ以降走れなくなるリスクを負ってまで、周りをぶつちぎって圧倒的なバ身差でゴールなんてする意味が無い。よっぽどレコードを刻むことに関心があるって言うならまあ、その人の勝手ではあるけど……」

「……姉貴って夢がねえのな」

「ぼくほど夢たっぷりなウマ娘もいないけど」

「はあ……っ？」

後ろでぼくらのやり取りを聞きながらトレーナーさんは小さく

笑った。

現実的に可能か不可能かを論ずる時にはできるだけ客観的にものを言うようにしてるけど、自分がどうか、という点ではまた別だ。

レース作って、世界から色んな「最強」を呼んで自分がそういったウマ娘を全員倒して最強になるなんて、なんならモノちゃんの大言壮語よりも更に非現実的で馬鹿げてるものだしね。

それからしばらく見学をして、ぼくらはすぐに帰路につくことにした。イギリスもフランスとそう変わらないくらいの治安だし、あまり遅くまで出歩くものではない。

その途中、ふとトレーナーさんが釈然としない様子でこちらに問いかけてきた。

「……本当に何もしてなかったですけど、あれで良かったんですか？」
「まあ、はい」

ぼくならもう少し何やら仕込みをしたり、もっと情報戦のためにわざとこつちから色んなアプローチをかけると思っていたんだろう。

しかし、結局やったのは本当にただの偵察だ。これではいつものぼくの様子を知るトレーナーさんから見ると違和感しか無いことだろう。

「いいんですよ。ただ偵察をしたってだけで、あちらはぼくのことを勝手に勘違いしてくれる」

「……と、言うとか？」

「見たでしょ、妹のあの様子。ただ見に来ただけなのに、反骨心が強くって敵認識した相手を悪く言うことだって全然躊躇しない。あの子は、勝手にぼくの悪評をバラまいてくれるんですよ」

普段イギリスで活動しておらず大した印象を与えられていないようなぼくが、イギリスに入学して他のウマ娘とも深く関わっている妹に悪く言われていたら他のひとはどう思うだろうか？

事実の有無は別にして、悪印象が根付くのは想像に難くない。実際に会ったことのあるウマ娘がほとんどいないからその悪評を訂正する術も無い。悪印象は勝手にイギリストレセン学園に蔓延していく。

——結果、実態とは別に印象が先行する。実態とは全く異なる「最悪のウマ娘・サバンナストライプ」という幻像が形作られるわけだ。

あとは日本と同じ、印象を逆手に取るなり印象通りに行動するなり、裏をかく手がいくらでも使える。

「……私は時々、あなたが敵じゃなくて本当に良かったと思いますよ」「競技者である以上『敵』なんていませんよ」

「言葉のあやですよ……違うチームで戦わなくて良かった、ということですよ」

「そうですか？」

ぼく個人としてはできればギン^トシヤリ^レボーイ^ナとも競いたいんだけど。

……ま、今は胸の内に秘めておこうか。

そろそろ限界だから

「流石にそろそろ限界だからご飯を作ってくれたまえよトレーナー
くうん!!」

「き、来よった……」

その日、ぼくたちは思い出した。

超光速のプリンセスの壊滅的な生活能力を――。

チャンピオンステークスを翌週に控えた日の週末、何かがぷつぷり切れたかのようにタキオン先輩が突如渡英。居場所なんかは特に伝えていなかったのだが、その天才性でもって即座に推測を立てて特定する探偵顔負けの推理力を発揮。姿を現したと思ったら開口一番のコレである。

まるでヒモのような発言だが、これで日本トレセン学園における薬学・医学・生化学分野における第一人者で高給取りなのだから手に負えない。普通に外食行きなさいよ。

……ともかく、タキオン先輩は今、学生という立場ではないためカフェテリアの学食無償提供は行われていない。では普段どうしているかと言うと、トレーナーさんがお弁当作ってくるのに便乗するのを除けば主にぼくが週何回か引いてる屋台メシだったり、フラワーにお弁当を貰ったり……だ。

流石に飛び級生にお弁当ねだるのはアレなので頻度はそうでもないが、普段のタキオン先輩の胃袋担当が2名離脱したため、その食生活は数日で崩壊した。

そして更に、遠征スケジュールの関係上1月ほど放置せざるを得なかったその果てがこの有様である。

なんか微妙に半泣きなあたり微妙なイギリス料理に当たったのだろう。見てて少し不憫だからなんとかしたいと思うことは思うのだが……。

「材料がないから無理です」

「えーっ!？」

冷静に考えてほしい。ある程度長期滞在を前提としているとはいえ、生鮮食品を自分たちの食べる分以上買い込んでるなんてことがあるだろうか。

……と、軽くなだめようとすると、タキオン先輩は超光速の脚でその辺のスーパーで食材を買い漁り、「はーやーくー」と強烈に催促してきた。

仕方ないのでふたりして腕を振るうことになった。

ぼくもうしばらくしたらレース控えてんだけど。

まあ、頼られたからには何もしないとこのもそれはそれで失礼だろう。買ってきてくれた食材は特に選別をしていないようだが、言い換えればごく普通にありふれた食材ということだ。どうとでもなるう。

というわけで、ぎつと数品。トレーナーさんはこっちの食材で和風焼き魚定食を作ってみせるなど器用なことをしていたが、あっさり目の味付けなのもあって少し物足りないところだろう。

「あんかけチャーハンと牛肉のオイスターソース炒め、エッグタルトです」

「ふむふむ、ストライプ君は中華で攻めてくるのかい？」

「エッグタルトは中華ですか？」

「中華ですよ。香港料理で有名ですし」

というわけで、ぼくの方は味濃い目の中華だ。引退したとはいえタキオン先輩もウマ娘。平均的な食事はそれこそ成人男性のそれを遙かに超える。満足感を得るにはうってつけだろう。

元々頭を回転させすぎて糖分が足りないとまで言っただけな紅茶チャンピオンミーンティングのインタビュより、湯量と砂糖の比率が1：1でブレンドした紅茶。飲むくらいなんだからカロリーはいつでも欲しているはずだ。

「しかしあなた、中華料理の技法まで……」

「一時期中華料理漫画にドハマリしてたことがあります……」

「ストライプ君もそういう健全に興味を楽しむことがあるのかい？」

「ぼくを何だと思ってるんですか」

「お金と策略のことしか頭に無いとばかり」
「ひどい」

お金稼ぎそのものが趣味みたいなものになってると言われると否定はできないが。

軽く笑うタキオン先輩はその次の瞬間、なにかに気付いたのかふと食べ進める手を止めた。

「ところでストライプ君、キミは意趣返しとか好きなタチかな……？」
「好きっちゃ好きですけど、なんですか？」

「ケニア旧英国領。出身のウマ娘がイギリスで香港旧英国領。の料理を……」

「ご想像におまかせします！」

しいて言えばシマウマソウルがそういう風に導いてるというか……ヒトソウル側はなんかティンと来たから中華にしようと思っただけっていうか……。

意図に気付いたトレーナーさんも苦笑いしている。

「……センシティブな問題はできるだけ避けてくださいね」

「ほかあ存在そのものがセンシティブの塊ですが」
「……………」

少数民族だし、肌の色もそうだし、髪の色もそうだし、出るところ出たら色々巻き込んで色んなものを破滅させられそうだ。

面倒だしメリット何も無いからやらないけど。

さて、食事も終えて機嫌も良くなり、普段の調子を取り戻したタキオン先輩は、（勝手に）ベッドに腰掛け指を一つ立てた。

袖で見えねえ。

「さて、トレーナー君。私がわざわざイギリスまで来たのはただ食事のためだけではない」

「違うんですか？」

「もちろん違うとも！」

「限界に達して決壊したのは事実じゃないっすか」

「そういう本当のやつはやめてくれたまえよストライプ君」

少し喉を潤すためにか、タキオン先輩は紅茶（の色をした実質的に

砂糖の塊）を口にした。

アレ逆に喉が渇くと思う。

「私が動くことがあるとすれば、検証か実験のときさ。カドラン賞はともかくチャンピオンステークスは私の研究テーマにはぴったりでね」

まあ、はつきり言つてぼくの脚はタキオン先輩の興味の対象外だろうな。そもそもカドラン賞自体も「速さ」を競う場でもないし。フランスに来る様子が無かったのも頷ける。

本来なら凱旋門賞の方は見に来ようと思つてはいたようだが、スプリンターズステークスが同じ週にあるからそつちを優先して泣く泣く諦めたそうな。

「ストライプのせいでレースが破壊される可能性が高いのですが……」

「へへっ」

「何を誇らしげにしているんだストライプ君」

変な話だが、「お前のせいでレースが壊れた」なんて言われたらそれはそれでこうなる。

だってレースのペース破壊すること狙つてるんだもの。他の人にとつての想定外はぼくにとつては狙い通りだ。

「そういった極限状態の中で発揮される速さもあるから、これはこれで都合だけどね。おっと、こういう話し方をするとキミには悪いかな？」

「別にいいですよ、踏み台上等じゃないですか。簡単に踏んでいけるとは限りませんが」

ある種、ぼくの存在というのはトウインクルシリーズ内では大きな壁のように扱われている。すなわち、「サブナストライプを倒せるかどうかが一流と超一流の境目」だそうな。

ぼく自身も徐々に成長していつてから一概にどうと言ひ切れはしないし、あくまでそういう噂があるという程度の話だ。

そういう風にレースを見ても別に構わないし、ぼく的能力が一種のバロメーターになつていてもそれは構わない。競うというのはそう

いうことだ。

でもぼくは天邪鬼なので踏み台になるにしても生半可なことでは踏まれないような仕掛けくらいは用意しておく。

試験というものはね、ちよつと当社比。厳しいくらいの方が成長を促せるんだよむはははは。

「ストライプは……試験官や問題作成には向いていないかもしれないね……」

「ぼくに限らず闘争心の強いひとはだいたいそうですよ」

最初がいい。しかし、だんだんエキサイトしていくとウマ娘なんかは受験生との「戦い」に感じてきてしまう。これは良くない。

問題を解かれると悔しがったり、問題を「解かれたくない」という感覚が出てきてしまうようなひとは致命的なほどに試験官なんかには向いていないことだろう。

試験の目的というのはそれに相応しいひとの選別だ。受験者との戦いなどはもちろんありえないし、本当に受かるべきひとが受からないんじや話にもならない。公平、公正な視点が求められる以上、競走ウマ娘はこの分野においてまず向いていないことだろう。

「まあ、何の見どころも無いではいけませんし、タキオン先輩にはそれなりに『面白いもの』を見せられたらいいなとは思いますが」

「ふうん？　ま、無理だけはしないように頼むよ」

こういうとき、怪我のことを気遣ってくれるのはありがたい……と思いつつ、あざまー、などと気の抜けた言葉を返す。

ぼくはスマホを手にとると、少し離れた場所であるひとの番号を探して電話を繋げた。その対象は——日本にいるタマ先輩だ。

『もしもーし、おう何やヤブからステイックに』

「お疲れ様ですタマ先輩。ちよい時間あります？　聞きたいことがあるんですけど」

『ほな1分10万円やで』

「カード払いで」

『ワハハハハ』

まあぶつちやけ払ってもいいくらいの情報なんだけど。

『ほんで何や?』

「つとですね、昔のレースのこと覚えてます?」

『当たり前やろ。どのレースか言うてみい』

「——オグリ先輩との有馬記念の時のことなんですけど」

チャンピオンステークス

英国最高峰の中距離レース、チャンピオンステークス。その歴史は100年以上と古く——こんなくんだり前にもしたな。

……由緒正しいレースとあってその注目度は極めて高く——こんなくだりも前にあったな。

ともかく、イギリス、アスコットレース場。天候に恵まれたこの日、出走ウマ娘のみならず観客の熱気もまた大いに高まっていた。

「晴れかあ。適度に雨降ってくれた方が良かったんですけど」

「あなたはレースを地獄に変える気ですか？」

「もちろん」

『『もちろん』!?!』

「噂の雨乞いはしなかったのかい？ データが取れると思ったのに、残念だよ」

「やる勇気が持てませんでした」

ぼく、ちよつと前に元チーフにふしぎなおどりしてるところ見られて恥かいてるから、ここで更に雨乞いの儀式みたいなトレーナーさんとかに見られるリスクを冒す勇気は無かった。

かと言って外でやると通報は必至だ。日本だと「またストライプが変なことしてるよ」という方向でネタで済むけど。

あとイギリスの場合、単純に常に天気が良くないというのがある。何もしなくともサツと雨が降るので必要ないだろうと見込んでいたのも確かだ。そんなことは無かったわけだが。

「あと、正直……あんまり大雨だと菊花賞がフラッシュバックしてエライことになると思います」

「思った以上にひきずる性質だねえ」

「そりゃあもう」

都合の悪いことは忘れよ！ という至言はあるが引退までこれは忘れられそうにない。ある種、自分の未熟さを痛感させられた一件だったからだ。戒めとして忘れることを自分自身が許さない、という

か。

時の運やレース展開が向いてない、前が壁になってたせいで負けたというときなど、記憶力の欠如が必要なこともあるが、不手際で負けた時は覚えとかなないと後でまた同じことを繰り返してしまう。

「それで、あれだけ言っていたからには勝算はあるんですね？」

「まあ、ありますけど……ぼくが思ってたのと警戒の質が違うんですよ。こう、普通なら刺さるような感じなのに」

「刺さる？」

「感覚的なもので説明がちよつと難しいんですが……」

悪意とか、敵意とか向けられてるとなんとというかこう……ピリピリ来るんだよね。野性の直感みたいな。

そんなことを言つて返すと、タキオン先輩は気のない返事ふうん。をして応じたのに、トレーナーさんからは「あーわかるー」とでも言いたげな納得の声が上がった。

普通のウマ娘が野生動物の生存本能にまで共感示すのはバケモンのそれではなからうか。

「悪いことでもないんですけどね、適度な緊張感もあるし警戒もされてる。ただ、方向性が妙に……まっとう？　というか、健全で」

「正しく怖がられている？」

「そんな感じですよ」

こいつは何かをしてくる、という警戒に加えて、それでも節度はあるという、ある種矛盾した——日本で感じるそれと似た——奇妙な信用。これはこれで罠にかけやすくはあるのだけど、初めて来た土地としては違和感が拭えない。

「妹さんはあなたが思うほど悪くは言わなかったのかもかもしれませんね」

「おや、家族まで計略に組み込んだのかい？」

「組み込んだっていうか、普段の言動を計算に入れて起こりうる状況を予測しただけで……」

「ククク！　ストライプ君は身内のこととなると評価が曇りやすいからね。自覚が無かったのかな？」

「あー……えー……？ まあ、あゝ……」

「そういう前に、マックイーンのこと話す時に友達や親しい相手は特に過大評価しやすい傾向にあるって言われたっけ。」

「逆に自分のことは既存の枠にはめ込みやすく、こっちはむしろ過小評価しやすい……とも。」

「もしかすると、ぼくは自分が思ってたよりもモノちゃんには嫌われてないのだろうか。トレセン学園に入学して以降、話すたびに悪態つかれるのに。」

「自己評価の低さと正確さが両立してるのがなかなか手に負えませんね。それが努力へのモチベーションと慎重さにつながるのとは分かりませんが……」

「というかキミ、あれだけ普段から心理戦に長けておいて、人の言葉を額面通りに受け取りすぎじゃあないかい？ 心理学とかやってない？」

「心理学くらいはかじってますよ。けどあれは表面的な部分やある程度普遍的に『誰にでも通じる』部分を語る学問で個々人の特異なパーソナリティには踏み込まないでしょう」

「そうだね。まあ知っているが」

「何で聞いたんスか」

「誰にでも通じる部分、誰でも同じように感じる部分を学ぶのは心理戦には有効ではあるんだけども。」

「……家族関係には特に影響しないんだなこれが。だってそういう問題じゃないし。」

「さて。ともあれ本番の時間も近い。ぼくはふたりに挨拶をして控室を出ることにした。」

「そこからしばらくしてパドックを終えると、今度はコースに出て返し本番直前にコースで行うウォーミングアップ走。の時間だ。」

「入念な柔軟の後、他の走者と離れて遅く、長めに走る。どうせスタミナは発走前に回復する。まずは気分をノせないといけない。」

「……我ながら頭がどうかしているな。その方が気分のノリがいってだけで定石を度外視してホイホイ走れるんだから。」

それでも気分は大事だ。気持ちよく走れるかどうか、楽しく走れるかどうかはそのままモチベーションに繋がる。そしてぼくの場合、モチベーションが高ければ高いほど、ノリにノってればノってるほど領域ソーンに入りやすくなる。

これは春の天皇賞とカドラン賞を経験して分かったことだ。辛く厳しいレースだと思えば思うほど、冷静すぎればすぎるほど逆に超集中状態は遠ざかっていく。変な話、ぼくの場合混ざりものが多いせいか全部やろうってくらい欲張って初めてレース以外のことから頭から抜けていい感じに最高のコンディションに到達するわけだ。

わりかし簡単な方法個人差があります。で領域ソーンに入れるようになったのを考慮するに、ぼくの情報処理能力や戦法を考えると領域ソーンに入るのは難しいとトレーナーさんが判断したのは、ある意味で正しくある意味では間違いだったと言えよう。もちろん、単にぼくが定型から外れているからこそその見誤りだ。普通に考えればトレーナーさんが正しい。

「や。調子はどうだい？ サバナストライド」

「どうも、ランボルギーニさん」

「ぐっ……」

いい具合に気分を上げていた折、何を思い立ったか突如ランフィニが横に並びかけてきた。

こんな調子じゃ並走になっちゃうから、返しの時は暗黙の了解として他人と一緒に走らないようにとはなっているんだけどなあ。

……まあ、流石に今回は名前の件についてはこちらも見誤りはしない。軽い挑発に興味返しすると、先日のガチ勘違いを思い出したのか彼女は小さくうめいた。

「流石に分かるかい」

「わざとやってる時は」

これでもそういうのには敏感な方だ。普段はこつちが仕掛ける側なので、時々防御側に回ると弱い……みたいな勘違いをされやすいが、そもそもぼくはスカイ先輩と一緒にチームなので散々慣らされている。別に紙耐久ってわけでもないのだ。

時によつては煽りに乗ることもあるが、それは乗った方が面白いからだ。真剣な場だと流石にそこまででもない。もちろん乗った方が面白いとか勝率が上がるとかなら遠慮なく乗るけども。

「モノトーンから色々と話聞いてるよ。厄介な手合いだつてね」

「お褒めにあずかり光栄です」

「お礼ついでに今日の戦法を教えてくださいませんか？」

「王道の先行策」

「……なるほど。息をするように嘘をつく、つてワケだ」

ランフィニの喉から乾いた笑いが漏れるのが分かった。

なんだ、意外と悪評撒かれてんじゃん。クククのク。もひとつクツクツク。

「奇策でいつまでも勝ち続けられるなどと思わないことです」

「テীবレイク」

「リミットブレイクさん」

「デイブレイクです」

次いで並びかけてきたのは、前年覇者のデイブレイク。あんたら大丈夫か注目株がこんな目立つマネして。

流石にこうなるともう返しというわけにもいくまい。……下手すると闘争心煽られてこのままマジになりかねないし。

「4000mは色々和小細工をする余裕があったことでしょう。しかし、2000mはそうはいきません」

「ビュウ。言うね」

「その気になれば、やってやれないことは無いかもしれませんよ？」

「こちらにもデータがあります。『そうする』と分かっていたら、対処は容易い」

フカシ——つてわけじゃなさそうだ。彼女も一度はイギリス中距離の頂点に立ったウマ娘だ。である以上、幻惑逃げは恐らく通用しない。

元々使う気も無いけども。あれ、長期間の仕込みありきの一発芸だし。持つてるデータは……皐月賞とジャパングダードービーだろうか。他のレースもある程度は見ているかもしれない。つまりこうま

で言い切るといふことは、そういうことだろう。

「安心してくださいよ。ぼくは同じ手は使わない」

「その言葉、覚えておきましょう」

怖い怖い。本当に怖い。

「おっと、私も忘れないでくれたまえよ、アウトブレイク」

「いいレースにしましょう、キープレイドさん」

「何度名前を間違えれば気が済むのです貴女たちは!!」

蜘蛛の子を散らすように、ぼくとランフィニはゲートへと向かった。

最近ほだいたい何言っても「はいはい」で流されることが多かったから、真面目にリアクションしてくれる人は貴重だ。

まあ、腹芸も使えるみたいだし、いつもこの調子というわけでもないだろう。ただ煽るのが得意なウマ娘がふたりいたのが運の尽きというだけだ。

さて、そろそろゲートインだろうという頃になって、ふと客席を見るとモノちゃんは何やらうちのトレーナーさんたちのところに逃げ込んでいるのが見えた。

暫定「敵」のところに逃げ込むとは、よっほどのつびきならない事情……というわけでもないか。同じチームか級友か、ともかく親しい相手にからかい混じりに追い回されているようだ。

仲の良い相手がいるようで安心したよよよ。

『さあ、長らくお待ちいただきましたチャンピオンステークス、まもなく発走です』

実況の声に応じて気を引き締める。ぼく自身は既にゲート入りは終えているが、他のウマ娘がまだゲートに入っていない。

強く息を吐く。そして、吐いた以上に空気を取り入れる。

あとは、そう。楽しくやろう。たとえ負けても悔いが残らないくらい全力で。

『全ウマ娘ゲートイン完了』

基本フルゲートで行われることの多い日本のG1と異なり、チャンピオンステークスは概ね10名程度で行われるのが通例だ。

ぼくの今回の番号は真ん中5番。とはいえ人数の少なさから、内枠はあまり有利不利がつかないだろう。——あくまで日本と比べて、という話だが。

周りの息遣いまで感じるほどの集中の中、係員が旗を掲げ——ゲートが、開く。

ぼくはそこで、ロケットスタートを切らなかつた。

コンマ一秒にも満たないほんの一瞬。出遅れ、と表現するのも難しいが確かに他のウマ娘が僅かに前に出たその瞬間。

「——やろうか」

ぼくは、誰よりも早く領域ゾーンに突入した。

技術の到達点

このプレッシャーを感じて理解できないのなら、説明しても仕方がない。

このプレッシャーを感じて理解できたのなら、説明の必要は無い。スタート直後の領域突入というのは、それだけ特異な状況ということだ。

何よりも、前例が無い。なんだかんだ言っても領域ソインに入れるウマ娘は希少だ。だいたい……各路線、各世代の各国トップ層がそうだろうか。領域ソインに入れるウマ娘と対決する機会だってそれほど多くない。

ぼくが去年の有馬以降全レースでそういう相手にぶち当たってるのは置いておく。

まずトップ層のウマ娘はよっぽどのことがなければG2やG3に出る必要はない。必然的にG1に集まりやすくはあるけど、じゃあ路線が被るかつてのは別問題だし、同じレースに出るとも限らない。ライバル関係に固執しないのなら、同じレースに出ることは避けて勝てる場所を選ぶのも十分アリだ。距離適性被りまくりでやろうにもできないという例は、残念ながらあるが。

関係ねえ戦いてえ、競い合って勝ちてえ、世界最強の座を手に入れてえ——とまで考えるのは少数派だ。海外ならなおのこと、G1の数自体が日本よりも多かったり、島国の日本と違って気軽に隣国のG1に挑みに行くことだってできる。

それでももちろん強豪と当たることはあるから、対領域ソインの戦術を練るウマ娘は必ずいることだろうが。

——では、定石外れを通り越して暴走とも蛮行と言える、レース開始直後の領域突入なんてやらかした輩を、他の走者はどう捉えるだろうか。

それが4000mをコースレコードで走りきった生粋のステイヤードだったとしたら？

「アツハツハツハツハ！ なるほど、こういう意味の『面白い』か！」

「できるならやる方が効率が良いのは確かですけどね……」

「できないんだなあコレが」

「任意で超集中状態に入れるほど微細に精神状態をコントロールなんてできないし、できたとしても体力の消耗で継続できるわけがない、ですからね」

別にぼくも完全に任意で超集中状態に入れるわけじゃない。

ただ、強い相手がいる！ 楽しい！ と思えば割とイケる。長めに返しをしたのはそのためだ。ランファイニたちが乗ってきたのは想定外だけど、精神状態を最高潮に持つていくという意味ではある意味功を奏したと言えるだろう。

いずれにせよ、発せられたプレッシャーは他の走者を一気に混乱に陥らせるには十分な威力を秘めていた。

いち早く我に返ったのは、デイブレイクをはじめとする前年から活躍を見せているG1覇者だ。場数と、何より大きく強いプライドの分の程度のことには揺らされるわけにいかないと見える。

(タマ先輩に多少領域ゾーンを維持するコツは聞いたけど……最後までもつかどうかはぼく次第か)

カドラン賞のぼくのレースを確認したひとは恐らく相当数いることだろう。良くも悪くも色々と言ひ草のレースだ。当然、ハナを切らせるとまずいと考えるひともそれだけいる。

だから、ここからの展開は……やはり、先頭に出たひとが一気に最内に寄って牽制しに来た。

「そうなりますよねえ」

「彼女らからするとやらない理由は無いだろうね。で、強引に出てスズカ君めいた大逃げでもするかい？」

「それは流石に無理でしょう。ですが、ストライプを意識して行動してしまつた時点でもう……ねえ？」

「それはそうだ」

前に出るか、後ろに回るか。少なくとも引くのは無いだろう。ぼくの脚では恐らく届かなくなる。となると前に出る方が重要だが——こちらもちちらであまり得策とは言い難い。どうしたつて軽微な口

スが発生する。2000mの環境でそれはまずい。

もつとも、やることはもうとつくにぼくの中では決まってる。前に出てくれたのなら、それこそ狙い通りだ。

「っ……」

「!?」

ここがぼくの小さい体の活かし所。領域に入ったことで向上した情報処理能力によって、包まれて逃げ場を失う前に隙間を見出してすり抜ける。

いざというタイミングで前が壁になって抜け出せない、みたいなこととなるわけにはいかない。

今この場で先頭を奪うことができないなら、選択肢はもうひとつ。先団に合流することだ。

「くっ……い」

先頭に立たされたウマ娘の喉から苦しげな息が漏れる。他に逃げウマ娘がいない時、先行脚質のウマ娘が前に出ることになってしまうケースは少なくないが、海外の場合はラビットの件もあるためもう少し状況は複雑化する。すなわち、駆け引きとしてラビットを出すか出さないかという点だ。

欧州では差しが主流だが、中には先行策に近い走り方をする者もいる。鋭い末脚が無いなら、好位抜け出しが最適解に近いためだ。

そういうウマ娘の場合ラビットが半ば必須なのだが、必ずしも毎回それができるわけじゃない。なにせアスコットで催されるチャンピオンステークス2010年までニューマーケットにて開催。アスコットは2011年から。本作ではレースの開催状況などアプリウマ娘に準拠のため、2023年現在の開催情報でアスコットでの開催として取り扱う。は、毎年ほとんどのケースで出走枠が10名前後の狭き門だからだ。

そこにわけわからん海外のシマシマが飛び込んで出走枠が潰されているので、ラビットを出す枠は更に絞られる。

結果、やりたくもないのに自分が逃げを打たなければならない……というような八方塞がりの状況が出来上がるわけだ。

(海外は逃げのノウハウに乏しい……というか、この場合日本が先進的すぎるだけか。ともかく、急に逃げにシフトしたってまともな走りなんてそうそうできない)
一部の例外はともかく。

だが、それでも諦めないからこそ一流は一流たりうるのだ。似た事態に遭遇したこともあるだろうし、逃げが実際に勝ったという事例も目にしたことはあるだろう。

だから必死になる。足を回す。いつも以上に周囲に注意を向ける。神経も鋭敏になる。擬似的に領域に突入したような感覚に陥ることもあるかもしれない。

(そこがまさしく命取りだ)

だからこそ、極めて煽りやすい。

足音を立ててスピードを上げる「フリ」をする足技はまさしく効果覲面だった。アスコットレース場2000m正確には1990mのコース構造もそこに拍車をかける。スタート直後から最初のコーナーまでずつと下り坂になっている関係上、非常にスピードが乗りやすいためだ。

それに加えてカドラン賞で逃げを打ってレースを破壊したほうが真後ろにいる。「こいつに逃げられるとまずい！」という心理が働くのも自然だろう。

『先行集団がいち早く飛び出してスタート。ややペースは早いか』
ピツタリと先頭のウマ娘の後ろにつく。

足先を覗かせ、音を発し、徹底的にこちらの速度を誤認させる。いつもやっていることだが、それを領域突入中の精度で行うというのが今回の重要なところだ。

相手がこちらに対する注意を切ったその瞬間に足音を立て、再び注意を向けさせて精神を削る。視線が揺らいだ一瞬を見て横から足を見せてペースアップを誘う。

言ってしまうえば普段やっていることの延長でそれだけのことだが、これまで「だいたいこのくらいじゃないか」という推測で行っていたものが確かな「観測」のもと行われるだけで効果は数割増しになる。

『スウィンリーボトム三角形のコースの頂点、2000mコースの最初のコーナーを指す。下り坂の底。を超えてペースは落ちません。これはタフなレースになりそうだ。先頭は依然6番……』

「スピードが落ちねえ!？」

「ん？ あー……どういことだい？」

「あ？ ……っス。アスコットはこっからずっと登り坂なんで」
「ほほう」

アスコットレース場は世界でも有数と言える20mもの高低差があるコースとして知られる。スウィンリーボトムを超えた後はずっと登り坂で、世界の強豪でも大いに苦戦させられるほどだ。

そのため、本来ならここからの登り坂は最も注意が必要な難所……なのだが。

「はあっ！ はっ、ふっ……!!」

先頭を走る彼女が勝ちを狙うなら、もう賭けに出るほか無い。

とにかく逃げて逃げて逃げまくる。デイブレイクなどは特にそうだが、上がり3Fの切れ味が鋭い欧州の強豪は、溜め逃げで足を残したギリギリの勝負をするよりも、いつそ前残りを狙って脚を残させない走りをする方がまだ可能性がある。ぼくも同じ立場ならそうしていただろう。

「しかしねえ、ストライプ君もあんなスタートを切ったんだから逃げに回ればいいのに。得意だろう？ 彼女」

「できたでしょうね。逃げが最適だったら、今回もそうしていたとは思いますが」

「おや、今回は最適じゃない？」

「本質的にペースを壊す側が作る側に回っても本領は発揮できないでしょう」

タキオン先輩はその場で腹がよじれるほど笑い始めた。
「貶されてんのか褒められてんのか分かんねえなこれ」

「後ろから押し上げて殺人的なハイペースに追い込んで、競り潰す。誤解を恐れない言い方をすると、あの子が本領を発揮できるのはメジロマツクイーンと同じ王道の先行策ですよ」

「王道……?」

「と言うにはいささか悪辣ですが」

「二択を迫って二択のどっちを選んで詰みの状況に持っていくのは『いささか』でいいのかい?」

「三択目を作ればいいでしょう」

「確かに」

「確かに」じゃないんだよ何だよこの超一流がよお。

こつちが必死で二択まで詰めてるのに三択目を容易に捻出されたらこつちが詰むだろうがよお……。

……その辺は置いといて。

実際のところ、ぼくが張っていた線は3つ。ラビットがいて先行策を取るか、ラビットがいないことで誰かが逃げに回ること、先行策を取れるか、誰も逃げもしないしラビットもないからひとりで全力で逃げるか。

差しや追い込みは最初から頭に無かった。ぼくのなまくらでは欧州の鮮烈な切れ味には勝てない。

だから、先行策か、大逃げか。いずれにせよ、そこに至るまでの策こそ組み立ててはきたがあととはほぼアドリブ同然だ。スタート直後の領域も、体力全部を余さず使うための一芸に過ぎない。

「はっ! ……はっ、あ……!!」

先頭を走るウマ娘の体が一瞬揺らぐ。慣れない逃げに加えて、前残りを狙った大逃げペース。そこに加えて高低差20mの延々と続く坂が体力を削ったようだ。

なら——この辺でこじ開けに行こう。

『ここで先頭が替わってストライプ! サバナナストライプ! 800mもの距離を残し、高低差のある坂の途中で先頭に躍り出た!』

「……マ……ツジかよ……! バカなのか姉貴!」

「バカだろうか?」

「大別すればバカですよ彼女」

「XXXXX!!!」 Fワード。

再びの無減速クロスステップで先頭に躍り出る。オールドマイル

と呼ばれる直線は、しかし、やはり坂の途中だけあって相当なパワーが必要になる。

ここから最終コーナーを回って最終直線に至るまで、アスコットレース場の坂はこの調子だ。1200mの間ずっと坂と言うとその異常性が理解できるだろうか。

と言っても、異常には異常。常識外れのパワーと体幹があるべくにとって坂はむしろ味方と言っていい。領域ソーンに入ったことによるバ場への最適化も併せて、減速は無い。

残り800。ここからは本当にただの押し切り体勢、真つ向勝負だ。

(——なんとなく、「まだ」だって感覚がある)

得意な状況、得意なバ場に、得意な芝質だからだろうか。ほぼトツプスピードに乗っているにも関わらず、もうちよつと行ける気がする。

——最終コーナーを回る。

背後から一気にプレッシャーが噴出した。恐らく、ランフィニとデイレイクのものだ。彼女たちも遅れて——むしろレースの常識で考えれば早いくらいだが——領域ソーンに入ったと見ていいだろう。

ぼくは今からの脅威的なプレッシャーふたつを退けなければならぬ。英国トウインクルシリーズ史に刻まれるであろう実力を秘めたウマ娘ふたりだ。その末脚もまた、豪脚と呼ぶに相応しいほどの威力を持つ。

不意に、汗が吹き出した。

スタート直後に領域ソーンに入ってそこから延々と継続していたこともそうだが、やはりそのデメリットは無視できないということだろう。ぶつつけ本番で試したことといい、多少無理は出てしまうようだ。

(いいね)

不思議と、心は高揚した。

領域ソーンは既に制御しきれそうになく、普段なら出ないだろう汗も半身を濡らしている。それでも、だからこそ楽しい。

ここから勝てばどれだけ爽快だろう。この圧倒的強者を出し抜け

ればどれだけ痛快だろう。

そう考えるだけで不思議と心の底から活力が湧き、道を示してくれる。

（———そうか）

ふと、気付いたことがある。

等速ストライドとは、あくまで一つの技術の到達点。常時最適なストライドを保つことで「最速」を常に維持するセクレタリアトが編み出した技術の極地だ。

セクレタリアトは極めて自然に、それこそ生まれた時からできるような自然さでこれを使いこなしていた。それだけのことができなければ本家本元等速ストライドと言えはしない。

だが——ある程度は等速ストライドを再現できるのではないだろうか？

例えばそれこそ領域^{ゾーン}に入って、目に映る全ての情報を余さずレースのために処理できる状態ならば。体を完璧にコントロールできる今の状態であれば。

本家本元のそれには敵わないまでも、あるいは。そこにある程度まで近付くことができるのでは——？

一步。この最終直線は常に登り坂だ。そこには一定の法則性こそあるが、一方でとところどころに段差や細かな勾配の差が生じている。力任せにそれを踏み砕くのではなく、ミリ単位で正確に踏み込む。

大丈夫。データは入ってる。データだ。ベテ^チルギウ^ムスの要にして根幹そのもの。常にぼくの作戦と走りを支えてきた最強の武器を信じて。

「うおおおおおおおっ!!」

「っ、はあああああッ!!」

気迫の声が近付く。

背後に、プレッシャーが迫る。

「ああああああアッ!!」

振り払うように放った裂帛の気合と共に、ぼくの脚は疑似・等速ストライドの領域に突入した。

頭が痛む。鼻の奥がツンとして粘っこい何かが漏れ出しそうになる。全身から汗が吹き出す。それでも計算は止まらないし算出は終わらない。1mm単位の修正、1nm単位の見極めがぼくの体をより速く前に進ませる。

「行けえーっ！ ストライプー!!」

「フフフフッ！」

「~~~~!! あああああもうツ!! みんな頑張れえええ!!」

視界が明滅する。音が遠退く。もはやゴール板しか、意識には無かった。

それでも、勢いは——止まらない。

『ゴオオオオル！ インツ!! なんと勝者は、まさかの……一バ身半!! 羽ばたくような走りで、まさかの！ チャンピオンステーキス勝者は——カドラン賞の覇者、サバンナストライプ!!』

「が……はッ……ハッ……! ハアッ……!」

喉が熱い。鉄の味がする。興奮し過ぎで鼻血でも逆流したか。

脳を酷使しすぎた影響か頭痛も酷い。歯を食いしばっていないとまともに立ってられない。

けれど、確かに聞こえた。今、見えた。ぼくの勝利を告げるアナウンスと、掲示板の数字が。

「ッ、はあ、どうだあああつ!!」

それでも勝者として、無様な姿を見せることだけはできなかった。

上を向いて鼻血を喉に流し、食いしばった歯が威嚇的にならないように唇を持ち上げて努めて笑顔を作る。

観客席に向けて拳を突き出せば——大きくはなくとも、それでも確かな歓声を感じ取ることができた。

語感悪すぎ問題

無理をした、という自覚はあった。

ただ、普段の調子が調子なだけにあまり深刻に捉えていなかったのはある。

——結論から言うと、ぼくはウイニングランの直後に血を吐いて倒れた。

……見たままを言葉にするとメチャ深刻なようだが、少し待つてほしい。これ、ただ逆流する鼻血に耐えきれずオエツと来たところに頭痛が来てそのままダバアしただけなんだ。

ただ、何せビジュアルが悪い。モノちゃんは卒倒するし一緒に走ってたウマ娘たちはビツクリ通り越して顔を青くして皆して医務室に運び込もうとするし。結局、勝利者インタビューどころではなくなっってしまった。

モノちゃんは「無駄な心配させんな！」とブチギレて帰るし、タキオン先輩は笑いすぎ、トレーナーさんには大いに呆れられた。

英国淑女たちからは無事だったことの安心と共に口々に皮肉を聞かされたが、今回は心配かけたぼくが悪いので素直に受け入れておく。

勝利者インタビューも別の機会に延期となり、日本の関係者以外が退室した頃。ようやくと言った様子でトレーナーさんが切り出した。

『アレ』は……等速ストライドですか？』

「モドキですよ。本物には程遠い」

「いつもならここで冗談を飛ばしてくるところだがね」

頭痛で今はそれどころじゃない。我ながらなかなか変な話だ、調子が悪い時の方が真面目になるとは。

史実のどっかの金色の旅程かな。一説には手抜き癖が酷く、海外レースを勝てた理由が「輸送疲れで手を抜く余裕すら無かったから」ではないかと噂されている。真偽は不明。

「2000mの間領域ソーンを維持なんて真似をすれば体に悪影響くらい出

ますよ」

「クククツ！ それよりも等速ストライドだよトレーナー君！ ウマ娘の技術の中でも一つの到達点とすら言えるものを、全く違うタイプのストライプ君が模倣したんだ。精度こそ及ばないが、感覚を覚えているうちにまずは原理を言ってみてくれたまえよ。再現性があれば一個の『技術』として陳腐化、改良が可能になるかもしれない！ さあ、さあ！」

メチャクチャ距離詰めてくるこのひと。

しかも興奮してまくしたてるから頭はかなり響く。ウボア。

トレーナーさんが止めてくれてはいるが、この分だと説明するまで放してくれなさそうだ。ゆっくり先程の状況を思い出す。

「まず領域ゾーンに入って……」

「ああ！」

「頭に叩き込んでるコースデータと実際のコースとを目視で照らし合わせて修正……」

「うん……うん？」

「あとは体の方をミリ単位で制御してコースの方に合わせるだけです」

「頭がどうかしているのかい？」

他の誰に言われても大概は納得するけどタキオン先輩に言われるのだけは納得いかねえ！

「ありますか？ 再現性」

「無いとは言わない。だが現実的じゃあないね。そんなやり方だと私なら2秒で息が上がるよ。ストライプ君と同レベルの異次元のスタミナ能力があつて初めてスタート地点と行ったところさ」

トレーナーさんの疑問に、誤って無糖コーヒードでも口に含んだような表情でタキオン先輩が応じる。どうやら相当な異常事態らしい。

もしかしてぼくの領域ゾーンって領域リョウいきって読んだりしない？ 突入するんじゃないって展開してない？ 他の走者に悪影響……は、別口で与えてるけど……。

「何にせよ、その疑似・等速ストライドは今後使用禁止ですね」

「……でしようね」

否定する要素は無かった。オーバートップスピードの無減速クロスステップは、まだ技術的に改善の余地があるからともかく、頭の中（物理）の問題は技術でどうこうなるものではない。

「距離にして1ハロン使ったかどうか、だというのに鼻血が出たり頭痛がしたりというのは看過できません。もっと早いタイミングでそうなってしまえば、自滅も同然です」

「濃密すぎる情報を処理するために、脳に血流が集中したのだろうね。頭痛は血管が急速に拡張したせい——偏頭痛でよくあるアレだよ」

「あー……ストレスとかホルモンバランスの崩れとかでなるやつ……」

「鼻血もそれと似たようなものかな。初めての経験で、まだ体が慣れていなかったのが幸いというところだろう」

「慣れてなかったのが幸い……ですか？」

「慣れたらそれだけ血管が拡張するのが早まるじゃないか。ひとがものを考えるためには酸素や糖分——血流が必要だからね。慣れれば慣れるほど血管は早く拡張し、頭痛は早く訪れるようになる」

あるいは、体の方がそれに適応しきつてしまえば違うのかもしれないが、ここまでの負担は慣れるだけでもいつになることやらわからない。

その間レースに出ないというわけにもいかないし、ずっと鼻血垂れ流し状態になるのも論外だ。次使ったらいつ頭痛が襲ってくるのか分からないというのも怖い。今回は1ハロンもたないくらいだったけど、じゃあ次はそれより若干短い距離で……となるとは限らない。もしかしたら50m、10m走る間にすぐ頭痛や鼻血が来るかもしれない。賭けとして使うにも分が悪いという段階を超えている。

呼吸はアスリートにとっての生命線だ。口呼吸すればいいという問題ではなく、片方の呼吸方法が不自由になったらそれだけで確実にパフォーマンスはガタ落ちになる。

こうなると「いざとなったら」とかそういうレベルの話じゃなくて、

完全に「禁止」だ。

タキオン先輩がこの話始めてずっと真顔なのも深刻さを物語っている。

「八艘飛びやミスデイレクションみたいなぼくだけの技ができたとか思ってたんですけどね……」

「『煽り』でいいじゃないですか」

「『煽り』でいいだろう?」

「語感悪すぎ問題」

煽りの名手って字面だけ見たらネット掲示板のタチ悪い荒らしじゃねえかよお……。

……いや……レースは荒らしてるけど……。

「スぺ先輩の日本総大将とかスカイ先輩のトリックスターみたいなカッコいい異名とかも無いし……」

「二代目トリックスターとは言われているじゃないですか?」

「『二代目』はやでーす」

「グラス君の二代目も継承する気かいキミは」

「だって未だに異名が詐欺師とか扇動者とかじゃないですか……世界を股にかける詐欺師! とか世界的犯罪組織のボスとかじゃないですかもうヤですよマジモンだと思われて税関で声かけられるの……」

「今見たらキミ、よそから急にやって来てレースを破壊して1着をかっさらうというのを繰り返したせいでテロリストという異名がつけられつつあるようだよ」

「うおお……」

ぼくは軽く泣いた。

また入国審査が厳しくなってしまう。

……≠……

「あつ、テロリストが来たぞ」

「出るところ出て大問題にすんぞ」

「ジョークジョーク、ブリティッシュジョーク。怒った顔は妹に似て

るね」

数時間後、頭痛も鼻血もおさまってウイニングライブの打ち合わせを終えた後、部屋の外で待ち構えていたらしいランフィニからそんなことを言われた。

これがレース中の挑発なら高い効果を発揮したことだろう。

「海外遠征に行ったらその調子で『ブリティッシュ』を僭称するのはやめなさい。国そのものの品位が疑われます」

「やあ3着のひと」

「お黙りなさいG1未勝利」

「ぐえ」

次いで姿を見せたデイブレイクは、そんなランフィニを一刀両断してみせた。反撃のマウント取りも返す刀で一蹴。

ぼくならここから「でも私の方が速い」みたいな返しをしてしまいそうだけど、そうなたら野良レースがこの場で勃発しかねないかもしれない。

「……改めて、一着おめでとうございます。まさか、本当に先行策を取ってくるとは思いませんでした」

「そう思わせるところまでが作戦です。裏をかくことができ、ホツとしました」

「待った」

「なんすか」

「砕けた態度を向けてくれて嬉しいよ。いやそれはいいんだけど。そう思わせる？」

「色々あるけど……」

ぼくは長距離で純粋な力押しができるレースを除けば、できるだけ策を弄してレースを組み立ててきた。相手がこちらに対応してきた場合でも、その想定を外したり手を尽くしたり——時には負けたり——してきたこともあり、「サバンナストライプは奇策を使ってくる」という印象を刻むことに成功しているだろう。

では、こんなウマ娘が奇をてらわれない先行策で押し切るなんて、見ている側は考えるだろうか。

ランファイニにも「先行策」と伝えたにも関わらず、その可能性を真っ先に排除したことを考えるとぼくが正直な作戦ストレートで行くと考えるひとはまずいない。

だからこそ、あえて正直に作戦を話したとも言えるのだけど。

そう伝えると、ランファイニは顔を強張らせた。

「な、なるほど……つまり、ここまでのキャリア全部を囚にした盛大な引掛けってわけか……」

「まあこんな手二度と使えないけど」

トレーナーさんに言った通り、今回のテーマは「正面突破」だった——というお話。

本当に誰も信用しやしないの。ウケる。いやウケとる場合か。

見せ札は大きければ大きいほど、強ければ強いほどいい。深く印象が刻まればそれだけ本命をグサリと刺しにいけるのだから。

こんなこと二度とできないだろうけど、出し惜しみして本格化終わって使う機会ありませんでした、とかになると本末転倒だ。ギャグにもなりやしない。

イギリス最高峰のレースともなれば、手札の切りどころとしては最良だろう。

「じゃあついでにもうひとつ、最終直線のあの自爆テグああああああああああ」

「最終直線の異様な伸びは一体何だったのですか？」

すげえ。まるで今まで何度も同じようにやってきたかのような

アームロックが綺麗に極まってる。

ランファイニこのひととだけ失言してんだ。

「セクレタリアトの真似……の、未完成版です。あんな状態になってしまうので、二度と使いませんが」

「……原理を聞いても？」

「いいですけど」

あつさりと原理を教えたぼくに、ふたりは怪訝な表情をした。

しかし話を聞いていくとその理由が見えてきたのか、ふたりして「こりやダメだ」とでも言いたげな表情で呆れていた。

後日真似したらしいランファイニがモノちゃんに発見されてなぜか
ぼくが怒られたのはヒミツだ。

理想をどう活かすのか

勝利者インタビューがウイニングライブの後に行われるという予定変更を経て翌日。予定通り、ぼくとトレーナーさん、あとタキオン先輩はロンドン、ヒースロー空港にたどり着いていた。

盛大なお見送り——なんてものがあるわけは当然無い。

正直言うところちょっと期待してしまつた部分はある。いつそのままだドイツに行つてバイエルン大賞ドイツG1。芝2400m。でも破壊して来ようかと思つた程度には。やらないけど。

とはいえ来るひとはいないわけではなかった。

「やあー。私だよ」

「帰れ」

ランフィニである。

最近このひとぼくからのぞんざいな扱いを楽しんでるんじゃないかと思つてきた。

もっとも、やつてきたのは彼女だけじゃない。呆れた表情を見せているデイブレイクもいるし——当のランフィニの後ろに隠れるようにして、白黒の尻尾を揺らす小さな影もある。

「おっと、帰っちゃつていいのかな？ キミの妹も一緒に連れて帰るけど？」

「ハイあまり意地の悪いことを言わない。……今回は色々勉強させていただきました。そう遠からずまた会うことにはなるでしょうが……またいずれ」

「はい。また」

この口ぶりからすると、デイブレイクはどうやらジャパンカップに出るようだ。確かにそれなら、近くまた会う機会はあるだろう。

ではランフィニはどうなのか……と視線を向けると、彼女は手を振つて否定を示した。

「私には行かないよ。年内休養で来年から始動」

「ふーん」

「で、キミは次何に出るんだい？」

「ジャパンカップ」

これはチャンピオンステークスに勝った時点で半ば自分の中で決まっていた。というのも——チャンピオンステークスで優勝したウマ娘がジャパンカップに出た場合、報奨金が出るためだ。現実においては2023年現在、チャンピオンステークスなど24競走が対象。1着の場合200万ドル、出走するだけでも10万ドルが報奨金として出る。

最近強さの方にフォーカス当ててるけど別にぼくはお金稼ぎをやめたわけでも比重を減らしたわけでもない。世界最強の座は欲しい。それはそれとしてお金も欲しい！ というだけだ。

トレーナーさんは苦虫を噛み潰したような表情をしている。そりゃトレーナーの立場からすれば今年全休でもいいくらいだわな。ぼくは全然いけるんだけど。

「では、もう一戦……ですね」

「ええ、次も勝たせてもらいます」

「キミその前に国内の強豪に勝てるのかい？」

「横から冷水浴びせるのやめてくださいタキオン先輩」

そこんところかなり危惧してるんだからマジで。国外での能力こそ証明されたけど、国内中距離はまだ試してないし……。

いや、多分できないことはない。……はず、なんだ。多分。実際走れてはいる。ただちよつと中距離だと強すぎる相手がいるだけなんだ。

「おい」

「ん？」

モノちゃん？

今まで沈黙を保っていたモノちゃんが突然口を開く。親指で別の場所を指さしてるのは、場所を変えようという提案だろうか。

トレーナーさんたちからは、目線や首肯で「行ってこい」と促されている。

「トイレか？」

「違わい！」

昔はトイレ行くのについてきてくれてぴーぴー泣いてたくせに。モノちゃんに連れられて近くのベンチに腰掛けるが、何か言いたそうに口をもごもごさせるばかりで喋る気配がない。

フライトの時間もあるんだけどなあ、と焦りが出てくると、モノちゃんもようやく意を決してこちらに指を突きつけてきた。

「……何で普通に走って強えーのに普通には走らないんだよ」

「は？」

スワヒリ語……他人に聞かれたくないからか、あるいは単にふたりだけだからだろうか。こっちは対応するには全然問題は無いけど……。

「ちよこまか汚え真似してき、評判も悪くして、何でそんなことすんだよ」

「まず汚いかどうかってのは認識の差が……」

「そうじゃなくって！」

「……？」

「納得いかねーの！ アタシらの中でいっちな強くてナイロビでスカウトされたりする姉貴がそういう手を使うのが！」

「……は、はあああ……!?!」

……いや、確かに下の子と比べるとモノちゃんは特にトゲトゲしかったけど、あれって原因こんなことなの!?

「あ……あのなあ、一地方、一国……って単位で多少強くても、世界って単位で見れば凡庸になって……」

「んなこと分かってるけど納得できないの!!」

「支離滅裂なことを言うな」

「………こいつ……まさかぼくの強さの認識が、昔家族でかけっこした時のままになってるんじゃないか……!?!」

年齢差もあるし知識の差もあるしでぶつちぎって当然だろあの時期は！

そりゃ幼年期の記憶は衝撃と共に心に残りやすい部分はあるけど……。

「あのな、そりゃぼくも理想の走りのひとつやふたつあるさ」

「あんの？」

「ある」

スズカ先輩の逃げ、会長さんの先行策、「ナタの切れ味」に等速ストライド、ギンシヤリボーイ。理想は常に頭にある……が、理想は理想だ。

ぼくの脚では模倣はできても、再現はできない。そこが限界。それでは勝てないんだ。どんな状況にも対応できてどんな相手にも勝てる走法なんてものは存在しないのだから。

「でもレースは甘くない。どんな走りをしてもしねじ伏せてきそうなくらい強いひともいる。だから必死で、自分の理想をどう活かすのか、どんな状況でそれを表現するのが最適なのかを考え続ける」

いつでも理想的な走りができるとは限らない。できたとしても、勝てるとは決まってる。

だから丁寧にシチュエーションを整える。出るレース自体を選別し、心理戦を交えて相手の行動を誘導し、自分の理想の走りこそがその状況に最適になるようにする。そこで初めて「やりたいこと」ができるようになるんだ。

「ぼくだって正攻法で勝てるならその方がいいよ」

「え!？」

「姉を何だと思ってるんだ」

「他人を陥れることが大好きなやべえ奴」

「ほう」

「あ」

「お前の仕送り3ヶ月間減らすわ」

「うわーん!」

バカめ。よりもよって学費や生活費を出している相手に墓穴を掘ったな!

貴様の仕送りはしばらく2万円生活費除く。だー応相談。

そもそもぼくはお金稼ぎも勝つことも好きだし、そのための努力もあまり苦にしないタイプだが、好きなのはあくまでレースにおける駆

け引きであつてひとを騙すことじゃない。

関わった相手を破滅させたりするわけでもないし何だよ陥れるのが好きつて。風評被害も甚だしいわい。

「……まあ、何がしたいにしても、レースはひとりでもやるものじゃないんだ。やりたいことがしたくても通らないことはいくらでもある。タイムとか、筋力とか、目に見える形だけじゃなくて『やりたいこと』を貫くための試行錯誤にも、少しだけ目を向けてほしい。モノちゃんだって、ランナーとしてのタイプはぼくとそう変わらないんだから」
ぼくに敵愾心を抱くことは別にいい。けど、そのために目を曇らせて自分の適性を見失つてほしくはない。

そういうニュアンスを込めて告げると、モノちゃんは「ん」とだけ返して元の場所に戻つていった。

伝わつたかな。伝わつてるといいけど。まあ、どちらでもいいか。妹の人生に干渉しすぎるのも良くない。できるのはアドバイスだけだ。

ともかく、これで今回の遠征は全日程が終了。

ぼくたちはようやく日本へ向かうことになるのだった。

・・・≠・・・

日本に帰国して三時間ほど。想定を大きく超える盛大なお出迎えなどはあつたものの、大きなトラブルも無く寮にたどり着いたぼくは、そのまま簀巻きで正座させられることになった。

「まさか帰つてきて早々に日本の風情を感じるようになるとは思つてもみなかったよ」

「言ってる場合か」

お出迎えに来たと思つたら即簀巻きにすんの。主にスカーレットとウオツカが。

そのまま寮のぼくの部屋にポイよ。足の下、負担にならないようにするためにか座布団敷いてあるけど。

石抱きじゃないだけマシとも思えないではない。

「ストライプちゃん☆ 説明」

正面でカワイく立ってるカレンだが、威圧感漏れてる。

ちゃんと何を説明してほしいのか言ってくれた方がいいのだけど、推測はできてるでしょ？ という無言のプレッシャーを感じる。

「等速ストライドを感覚じゃなくて理論で真似しようとしたら、過負荷に耐えられなくて鼻血出ました。なのであれば吐血でも喀血でもなく鼻血です。現場からは以上です」

「おバカー！」

どうやら重大事じゃなかったらなかったで心配させた罪というこ
とで怒られるらしい。反省。

石抱きの石の代わりにテイオーのぽかプチがスカーレットの手で
載せられた。

まだ領域ソーンに突入したことの無いひとの多い寮だと表面的なところ
しか話せないけど、どういう事情か理解したマックイーンはドン引き
しているようだった。

先に一度試しとけよなー、とウオツカに言われたけど、そもそも
領域ソーン前提の技だから試そうにも試せないんだよね。

「まったくもう……勝ったんだから素直にお祝いさせてくれないかし
ら」

「勝ったとして素直にお祝いになるケース少なくない？」

「今回は倒れなければ皆素直にお祝いしてたと思いますわ……」

「そうかなあ……」

「トラちゃん、ちゃんとお祝いされるのが少なすぎて疑心暗鬼に
なっていない……？」

……それは若干そうかも知れない。

感覚派の「天才」

慢心から痛い目を見ることになった菊花賞から約一年、今年もクラシック三冠最後のひとつの時期が近づいてきた。

この時期は日本も世界もG1開催が相次いでおり、ぼくの周りだけ見てもチャンピオンステークスの翌週に菊花賞、更にその翌週に天皇賞(秋)、しかもそれぞれ親しいウマ娘が出走という過密スケジュール2023年の日程ではチャンピオンステークスと菊花賞は同週だが、年毎にスケジュールは異なる。本作では大雑把に被らない日程を採用。になっている。

天皇賞からエリザベス女王杯まで1週空いてはいるものの、そこからはまた毎週のようにG1レース。日本の秋のレーススケジュールは激動だ。なんなら唯一空いてる11月の1週目もアメリカでBC本来はブリーダーズカップだが本作ではハクトウワシ杯(Bald eagle Cup)。34話参照。の開催がある。

タキオン先輩は毎週のようにうっぴようと全国を巡っていた。で、だ。

今年の菊花賞、特に親しい間柄のウマ娘の出走は、テイオー、ネイチヤ、ターボの三名となった。なまじ全員と親しいため、この中の誰が勝っても嬉しいが誰が負けても心苦しいのが友人の辛い所である。

毎度のことだが、こういう時にぼくはアドバイザーとしての役割を求められるため、よそのチームに顔を出すことが多い。

帰国から少しの間は完全に休養ということもあって、この日はスピカのチーム練習の方に顔を出すことになった。

「うーん……」

あれだな、一緒に走っていると何だこのバケモン共勝てる気が全くしねえ、としか思えなくなるんだけど、俯瞰してみると欠点も見えてくる。

特に今走ってるテイオーとマックイーン。マックイーンに関して、とにかく前に出て優位を形成しようという意識が強いためか、視

野が狭くなりやすい。無意識のうちにロスが出ない走りを求めてしまつたためか、内ラチ沿いに体を寄せようとする癖がある。

テイオーは単純に、スタミナに欠ける。——と言っても規格外ほくとマックイーンと比較してという話だ。平均的な基準で考えると十分スタミナはある方だろう。2400mを大外枠で勝つという並外れた能力も見せているし。

ただ、菊花賞で勝とうと思つたら半歩足りない。

(まあ足りないのはほくのせいなんだが……)

急速に広まつてるんだよね、スタミナを削つて頭回しまくる走り方。

なまじカドラン賞とチャンピオンステークスでぼくが結果残した分、これまでの流行を更に後押しする結果になつちやつたというか……。

スピードに多少劣つてもワンチャンどころではない。あると示してしまつたわけだから、後追いは出てきて当然くらいに思つた方がいいだろう。

結果、本来「勝てないほどではない」はずが、「勝ちの目が極端に少なくなる」というくらいに状況が悪化している。

今マックイーンと併せをしているのもその辺を体に覚えさせるためだが……。

「ぜえっ、ひい、ひえええ……」

「2800mを越えようとする露骨にスタミナ切れを起こしますかね……」

まあ「煽り」は元より、ペースを狂わせたりする走り方は膨大なスタミナを前提にしていることが多いから真似はし辛い方だろうけど……それでもさわりくらいならなんとかなる。

まして、今回の出走者のひとりはあのターボ。ペース壊れること確定してるじゃんね。自動で。

その上ネイチャを筆頭にぼくに戦術を教えてくれつつ頼んできたウマ娘は何人もいる。言い方はどうあれ、ある意味で出走者の全員が打倒・トウカイテイオーを掲げている現状は文字通り「全員」がテイ

オーのスタミナを削りに来る四面楚歌……。

「ぶつちやけマックイーンにスタミナパクパクされて3000mもたないようなら今回はスタミナもたないよ」

「何ですのその表現!？」

「いや下手するとぼくよりえげつねえスタミナの食いかたするじゃんマックイーン」

パターンこそ少ないけど、先行押し切りでハイペースを作り出して周りのウマ娘のスタミナを徹底的に食い散らすというのは、シンプルながらも極めて強力な戦法だ。下手をするとそれだけで勝てるくらいには。

というかぼくだってマックイーンがいなきやその戦法でゴリ押しできるんだよ長距離なら。ぼくより最高速が優れてるマックイーン相手に通じないからやらないだけで。

普通にやったら最後の最後、ギリギリまで叩き合いた挙げ句、ゴール間際に鼻先だけちよんと出してお先に失礼しますわ! だもんよ。無理で。

「問題は、今回は誰が何してくるか全くわからないってことなんだよねえ」

「ですわね。単に私のようにハイペースを狙う、だけではありませんわ」

結果的にハイペースになる可能性は高いけども。

それでも何らかの仕込みなり、他の走者の策略なり……トレーナーの指導なりで改善に向かう可能性はある。幻惑逃げを仕掛けてくることも含めて想定して然るべきだ。

ハイペースになる可能性が極めて高いが、ローペースで進行する可能性もまた十分に存在している。色んな思惑が交錯するというか交錯しすぎて混沌としてきてる。

ぼくがいたら? 全員まとめて地獄のハイペース走だよ超長距離なんだから。策を弄する必要が無いなら策を使わないことだって選択肢の一つだ。これで同時に他人の策も破壊できる。ただしマックイーンがいない時に限る。

「ストライプでも何してくるかわからないってこと、あるのね?」

「んー? むしろ分からないうことの方が多いいよ。でも全部こつちのペースに巻き込めば分かっただいようがいまいが同じでしょ?」

「焦土作戦かよ」

スカレットとしては、ぼくが競走相手の想定を全部見抜いて策を練っていると考えているようだが、それは違う。他人の考えなんて理解できてることの方が少ないくらいだ。

虚を突いたり惑わしたりするのは相手の思考を制限して無理やり型にはめるためだ。確かにそうすると結果的に他人の思考を読んでいるようにも見える。

あくまで見えるだけだ。なので、時によってはそれこそカドラン賞での一件のようにこちらが虚を突かれることもある。

「テイオーは作戦に動じない精神力と、相手の作戦を見抜くだけの頭脳はあると思う。ただ——」

「……性格が致命的に向いていませんわね。スペシャルウィークさんと同じように」

「何でさー!?!」

「なして今流れ玉を!?!」

「細かいこと考えて走るより、思うまま走った方がパフォーマンスが良くなるひとは確実にいるってだけですよスぺ先輩」

おそらく、緻密に作戦を組み立てて予測を立てた方が、テイオーの勝率は低くなる。

いちいち理論を組み立てるよりも、最初から頭の中に流れてくる「結果」のみを頼りに走ったほうがより優れたパフォーマンスを發揮できる。感覚派の天才というのはそういうものだ。

——その上で足りないのだから、問題はなかなか深刻だ。

「もう一手が足りないのなら……」

「……それは、考えたけど」

マックイーンからのアイコンタクト。

あまり意識させたくないからできるだけ領域という言葉を避けてはいるが、ニュアンスとしては領域に入ればあるいは、という思いが

あるのだろう。

だが、領域ソーンというものは諸刃の剣。使えば使うほど体力が削られるため、3000m級の距離ではよほど体力に自信が無ければ使用は推奨されない。

——そもそも、テイオーは領域に入ったことが無い。

これは先日のチャンピオンステークスの放送を見てもらった時に確信したことだ。

ある程度、推測はしていたんだけどさ。言っちゃなんだけど、テイオーはここまで、皐月賞でも……ダービーですらロクに苦戦したことが無い。それは例えば、スペ先輩にとつての黄金世代、オグリ先輩にとつてのタマ先輩、ぼくにとつてのマックイーンのような存在がいなことを示している。ここまで文字通り並ぶ相手がいなかった、まさしく、感覚派の「天才」。

そういうライバルとの競い合いという段階を飛び越えて素でできるひともいないではないんだけど……テイオーはそういう感じじゃないんだよね、多分。スズカ先輩のように一人でもバリバリ走るようなタイプじゃないし、タイキ先輩やぼくみたく楽しくなったらギアが入るようなタイプとも違う。おそらく、本当の意味で本領を発揮できるのはガチガチの叩き合いだ。

良くも悪くも、高すぎる身体能力のせいで「苦戦」が無い。超集中状態に入るような必要性が無い。——つまり領域ソーンに入ったような経験が無い。入れない。

あるいは、今回のレースで初めて領域ソーンに入れるようになることも考えられるが……。

「不確定要素が大きい。スタミナが足りないのにやるべきことじゃないと思うけど」

「逆ですわ。最後の200m……いえ、100mでスタミナが枯渇するからこそ、抜け出した後で差を広げて前残りを狙う方がまだ可能性があります」

「ちよつとちよつと、ボクのレースの作戦をふたりが考えないでよー！」

「とういふか、何の話?」

「ふたりだけに通じる話やめてくれよな」

「わ、私は分かりますよ!」

「え、ホントっすかスベ先輩……?」

いやそこはマジで分かつてると思う。

あつちのターフの上でドリブルサッカーバスケどちらも。始めるゴルシ先輩も何ならわかつてると思う。しかしあのひとどうやってラグビーボールでドリブルしてるんだ。

「それにしても、ストライプさんとマックイーンさんの意見が割れるのも珍しいですね。それも、ストライプさんがリスクを避けるっていうのも……」

「そりゃあぼくが個人的にリスクを負うだけならまだしも、他人にリスクを背負わせるのは違いますし」

「もー! だからボクの話なのにボクが分かんないこと話し続けるの何なのさー!」

自分のことなら自己責任、自業自得で済む。ただ、他人が絡むとどうしてもね……。

アドバイスをする上でこれをしろ、あれをしろ、は基本的にはご法度。あくまで助言であって相手の自由意志に任せるのが本来のあり方だ。そもそもぼくトレーナーじゃないし……。

それに、勝率が0のところから1を絞り出すためにリスクを取るならまだしも、例えば既に勝率が1割あるところから、勝率が上がるとも下がるとも言い切れない賭けを提案するのはちよつと……。

ぼく個人が分の悪い賭けをするのならまだしも、他人を巻き込んだらそれは自爆テロでしょもはや。ヤベ自爆テロって言っちゃった。

「ひとりに肩入れしすぎるのもフェアじゃないし、今日はこの辺で失礼するね。テイオー、こういう話か知りたいならマックイーンやスベ先輩と並走してみてね」

「えっ!? ちょっと、ストライプ!? 誰もがあなたのように自由に入るわけじゃありませんのよ!」

「す、スズカさんもないし……どうしましょうマックイーンさん!」

「じ——実戦形式!!」

菊花賞まで残り数日。その程度の時間でスタミナを補強するのはおよそ現実的ではない。マックイーンの言うことにも道理はあるし、ここから先どうするのかを本当に決めるのはテイオーだ。

ぼくは手をひらひら振って、次はネイチャたちのところに移動することにした。

……スタミナどうこうという話を一度しておいてスタミナ削るための策を提案しに行くぼく大概だな？

最後の一冠

京都レース場芝3000m、菊花賞。前年と打って変わって快晴のこの日、三冠最後の一冠を巡る競走が幕を開ける。

この場での世間の関心事と言えば、おそらく「いかにしてトウカイテイオーが三冠を手にするか」に集約されるだろう。

他の走者にはだいたい失礼な話だし、報道が過熱しすぎたこともあってできればもうちょっとトーンダウンしてほしいというのが、選手、学園、URA側の見方だ。皆頑張ってるんだから、ホント……。

確かにここまでのレースにおいて、テイオーは他と隔絶した能力を見せてきたが、これほどの長距離となるとどうなるか分からない——というのは、冷静になればすぐに分かることだろう。

もうちよつと誰が勝つか分からない風に宣伝してほしいと頼んでも、はい！ 分かりました！ と了承を受けた端から「無敗の栄冠を手」やら「新たな『帝王』の戴冠へ」やら、結局好き勝手煽られるとも聞く。理事長は憤慨ツ！ していたが、時勢や世論はどうしようもない。盛り上がるままにしておく他無かったようだ。

まあ、テイオー自身はあんまり気にしてないというか、注目を浴びることで逆に調子が良くなるからいいんだろうけど。

「ネイチャは『いやー、むしろ人気薄で変に注目とかされない方がアタシらしいし……？』って言ってたんだよねえ」

「まあ、その方が奇襲性はあるけど……」
タンホイザから聞かされたネイチャの現状は、まあ、予想の範疇ではあった。

今日の観戦は、東京・京都間のアクセスの問題もあるため、基本的には出走チーム関係者や出走者と親しい間柄のウマ娘が主だ。方向性はどうかあれとなくレースに対して多大な興味を持っているようなウマ娘——タキオン先輩やデジたんパイセン——などもいることはいる。

で、そんなぼくの席はというと……チームスピカとカノープスの

ちょうど間あたりだった。

フフフ……針の筵^{むしろ}！

『うわあ針の筵だなあ』などと思っていそうな顔をするくらいなら、そもそも八方美人な態度を取り続けるのをやめるべきじゃないかい？』

「正論は時に人を傷つけるんですよタキオン先輩」

まあぼくは正論も詭弁も使い分けて色んなことを誤魔化してn敗するわけだが。

というか別に、恋愛^ごことや戦争じゃないんだから、そこまでキツカリ関係性を分けてもレース以外の生活で支障をきたすだけだ。個人的には多少八方美人なくらいがちょうどいいんですけど。ぼく欲張りだし。

「ターボは？」

『ターボが勝つから関係ない！』……だそうですね」

言うと思った。

ターボは基本、精神面を言うなら割と無敵な方だ。身体スペックがそれに追いついてないだけで。相手が誰だろうと挑むしどんなレースだろうと全力で取り掛かる。そして何度負けてもへこたれない。これでもしもつと身体能力が高かったら果たしてG1を何勝することになるか知れないほどだ。

なんとなく要素だけ見るとどこぞの”特異点”を思い出す史実の要素だけ見ると、馬群を怖がるツインターボと競走が大好きという某特異点とで真逆。が、

「実際の所前評判ってどうなの？」

「テイオー」強ですわ」

「ストライプはどう思うよ？」

「……んー……今の状況から考えたら、第一にネイチャ、第二にブレスオウんだンスアニメの変名ウマ娘。同率でリオナタール同じくアニメの変名ウマ娘。……かな」

「トウカイテイオーさんは入ってこないのですね」

「スタミナの削り合いになることはまず確実。その時点でテイオーは

ある程度厳しい。ブレスオウんだンスは純粋なスタミナで勝ると思うけど、そうなった時の頭の回し方は多分ネイチャの方が上……って感じ」

あくまで個人的な見解である。あとネイチャについては若干臍肩目が入ってることは否めない。

で、ここに入つてこないターボだが……勝率は低いものの、不確定要素の塊という意味では最も厄介な存在と言えよう。

勝率は客観的に見ても低い。しかし作戦の都合上無視するわけにはいかない。普通の観点からすると厄介なんてもんじゃない。割ける余力があるかどうか分からないのに更に注意するべき相手がいるとか考えたくもない。

そんな風に討論しているうちに準備が整ったのか、次々に走者が姿を表す。中でもテイオーが出てきた時の盛り上がりようは凄まじいものがあつた。

テイオーはと言うと……緊張した様子も無く、当たり前みたいに手を振つて応じている。スター性っていうのはこういう時出るものなのかなあ。

「スター性ってやつかなあれは……ぼくならビビっちゃって大した返しできないや」

「嘘こけ」

「嘘はよくありませんよ」

「え、いや本当に……」

皆の中の「サバンナストライプ」像がさあ！ もう本人の手に負えない所に行きつつあるんだけど!!

「だいいち、国内での知名度はマックイーンやテイオーには劣るし」

「そうですか？」

今のぼくは、立ち位置的に国内での人気はいいところ4番手といったところだ。これはぼくがどうというよりも他が濃すぎる。

まず第一に三冠目前のテイオー。次いで天皇賞制覇、メジロ家のマックイーン。前年ダービーウマ娘で鮮烈な復活劇を見せたアイネス先輩がそれに続く。

海外G1を一気に2つももぎ取ってきたのだからもうちよつと注目度が高い、何ならテイオー並の扱いになってもいいんじゃないかと言われたこともあるが、甘い。世の中の人間、より身近によりセンチシヨナルな話題があればそっちに優先して目を向けるものだ。

あと大事なのが、トウインクルシリーズを支えるファンの大半を占めるいわば「浅め」のファン層にとって、海外のG1というものは「よく知らんレース」くらいの認識な点だ。有名なレースなら「よく知らないけどなんかすごいらしいレース」まではレベルアップするがその辺が限度だろう。

そこそこ深くまで切り込んだファン層や選手、関係者は海外挑戦の難しさと功績について正確に把握しているが、海外レースについて関心の無い多くのひとからしてみると、情報はろくに入ってこないわ中継も夜遅くにならないとやらないわで、「知らんところで何かやってるんだな」以上の感想はなかなか持ちようがない。

カドラン賞とチャンピオンステークスのネームバリューも、日本においてはそこまで大きくないことも原因だ。……というかこれに関しては、古い時代のスピードシンボリから連綿と続く長い歴史のせいで日本のウマ娘の悲願、なんて言われるほどに凱旋門賞の存在が大きく膨れ上がって、勝手にそれ以外が隠れてしまうのが大きい。

カドラン賞を見る。日本所属ウマ娘初挑戦で即勝利だぞ。おかげで「じゃあストライプじゃなくても行けたんじゃね？」という空気までできてる。ニュースでの扱いも「凱旋門賞の前日実施されたカドラン賞は、日本所属のサバンナストライプが勝利しました」の一文で済んでしまったレベルだ。ミークの話はたつぷり5分以上もかけて放送してたのにね。

『まもなくゲートイン完了です』

なんとなくなくなたそがれていると、全員の出走準備が整ったためかアナウンスが流れる。

よし、終わったこと考えるのよそう。とりあえずはこの菊花賞がどうなるかだ。

『——今、スタートしました。おっと早い、早速インターボが前に出

ます！』

「だろぅね」

「でしようね」

逆に大逃げしないターボとか嘘でしょ。

なんかもう見てる側としては軽い安心感すらあるよね。あれは……。

もつとも、一緒に走ってる方は若干うんざりするようだが、これは仕方ない。むしろ予定通りに走ってくれてると思ってるって諦めてほしい。

『スタートから波乱の予感です。先頭ツインターボ、2バ身ほどあけてコハクウイステリア、ネオデイグスノウ、センリフサカサゴ。トウカイテイオー、ここにいます。続いてナイスネイチャ……』

「テイオーさんが5番手、位置は悪くないですね」

「教科書通り、だが教科書通りすぎる気もするな……」

位置が上がってれば上がってるほど、当然ながら先頭集団のペースに飲まれる危険性は高い。スピカのトレーナーさんはその辺をどうやら危惧しているようだ。

チャンピオンステークスのような少人数で行われるレースと異なり、18名フルで実施されるこのレースで5番手というのは先行ウマ娘としてお手本のような立ち位置なのは確かだろう。

距離が伸びたらもう少し下げた位置取りでもいいのでは、と話したことはあるが、結局はいつも通りの作戦に徹することにしたようだ。「うう、でもネイチャあんなに前に出ちゃって、スタミナもつかない？」

「少し、厳しいところはあるでしょうね」

ネイチャはというと、いつもと異なる先行策——に、見える。初のG1で浮足立っている——ようにも感じられる。

ただ、どつちかと言うとコレは多分、ネイチャなりのマーク戦法だ。時に、テイオーのように頭一つ抜けた実力を備えたウマ娘は、包囲網と呼ばれるほど苛烈なマークを受けることがあるのだが、今日はどうでもない。

理由は単純。皆自分のやりたいことを優先しすぎているせいだ。

露骨にハイペースを作ろうとしているウマ娘もいるし、足技を見せようとしてるウマ娘もいる。やけにフェイントを駆使しようとしているウマ娘もいるし……とにかく「自分がペースを握る」という意識が先行しすぎて、マークという基本戦術が頭から抜けて疎かになってしまっているわけだ。人間、誰だつて新しいことを覚えたらまず試したがるもんだから……。

(ともかく、ネイチャはおかげでテイオーにピッタリマークできている……)

ネイチャ以外がまともにマークできてないとも言う。

まあ状況はそれほど悪くない。真後ろにしろ、若干横に回るにしろ、位置取りが一番しやすいところにつけられたのは、マーク戦術としては最善に違いない。

問題があるとすれば、テイオーはマークされることに慣れきっているという点だ。

あの会長さんに目をかけられているのは言わずと知れた事実だし、チームスピカも少し前は想像もできなかったくらいに強豪チームに育っている。そんな状態で皐月賞、ダービーと走ってきたのだから、マークがついたところで走りにくいという感覚には陥らないだろう。

流石にネイチャはテイオーのスタミナの内情までは詳しく知らないだろうが、「3000mスタミナをもたせることはできないかもしれない」というところまではアタリはつけてるだろう。というかこれは前103話「中距離は一旦捨てよう」に言ったので多分覚えてる。

なので、狙いとしては恐らくテイオーのスタミナ切れ直後の抜け出しだ。本当なら切れ味勝負に持ち込みたい所だろうが、ターボの大逃げで展開が縦長になっていることもあって、先行策を取っているテイオーに追いつけない可能性は高いだろうし致し方ないだろう。

この戦法が有効な理由はそれだけではなく、ネイチャ以外の大半の走者がペースを乱そうと躍起になっているため、突き詰めて考えるとそもそもネイチャ自身が無理に慣れないことをして体力を消耗しなくてもいいという点が挙げられる。これでマーク戦法に集中し、最適な速度と最適なタイミングを見計らうことができるはずだ。

何も自分から動くだけが策ではないというところだ。

「さて、ストライプ君はどう見る？」

「残り……うーん……半分近くまで動きませんよ、状況」

興味深そうにくつくつと喉を鳴らすタキオン先輩だが、返せるのはそんな味気ない推測くらいだった。

ターボが崩れるまで展開なんて動かしようが無いでしょ、現状。下手に前に出たら間違いなく共倒れだし、待ちに徹しておかないとペー
スに巻き込まれるのが目に見えている。

立ち上がりからターボが大逃げをかまして波乱こそあったし、観客も沸いた。しかし、どうやってもしばらくは単調なペースのまま進行する他無い。

——レースが動いたのは、1600m。2コーナーを目前にしたタ
イミングだった。

「ああああああああああああ……」

「ああつ、ターボが減速した！」

「早くない!？」

「坂……が原因でしょうね、これは……」

何が原因かと考えれば……状況的にはほぼ間違いなく一周目、一回
目の坂だろう。あれで相当スタミナが削られていたと見える。

結局、いつものようにターボは逆噴射スタミナが切れした。

タンホイザたちが頭を抱える横で、ゴルシ先輩が不意に付け髭を装
着して見せた。

「ふおつふおつふお。まだまだ未熟じやのう」

「坂で加速してこそ一流よヌフフ」

「奇人の理屈で喋らないでくださいまし」

ひどない？

ていうか何ならマックイーンも比較的奇人側こっちに近くない？ やれ
るでしょ定石破りの坂道スパート。

……ともかく、ターボはするする後退してほぼ最後尾まで。バ群を
怖がっている関係上、間に入ることもできず……うーん……脱落か
なあ……。

『向正面入ります。徐々に後続と前の距離が詰まってきました。先頭集団はこの差を維持できるのか』

いやー……キツイでしょ、相当。

ぼくが語ると説得力が足りないけど、とにかく菊花賞で難しいのは練習がなかなかできないことだ。

単に3000m走るだけじゃない。最序盤に一度目の坂、終盤にも一度坂、という特殊な構成を再現できるコースがなかなか無いというのが大きい。そこに加えてG1レースのプレッシャーものしかかり、常に思考を止めてはならない状況故の言うなれば思考疲れ、脳の疲労が重なる。

よく選手が考慮し忘れてるのが、これが「競走」だということだ。競う以上はそこに思考のやり取りが生じる。駆け引きのための思考というのは、それだけ強く深く脳を疲労させる。

「4コーナーで失速するよ」

「え？」

「3コーナーではありませんの？」

「そこはまだ下り坂だし、多分まだだよ」

まず間違いなく、慣性で加速してしまいそうになるのを制御しようとして足元に力が入る。それでも下り坂なだけあってスピードは実質それまでと同じほど……スタミナはどうしても余分に使うことになってしまいうだろう。それでも、向正面の登り坂の存在が他の走者が前に出ることを抑制する。

重要なのはその後、坂を抜けたところの平地だ。

『さあ4コーナー！ まもなく最終直線、ここでレースが動くか！』

——動いた！ トウカイテイオーが前に出た！ 出た！ ここで来た!!』

「来た！ テイオーさん！」

「行けるか!? 行けーっ！」

——そしてついにその瞬間は訪れる。

4コーナー中ほど、先頭の走者が徐々に失速していくその瞬間を見計らったように、テイオーたちが前に出た。

(相当息が上がってる。これはまずいか……?)

残り500mほど。やはり確実に状況が悪い。ネイチャも後ろからジリジリと詰めているし、ターボも最後尾から一気に距離を詰め――

「ターボ?!?!?」

「ターボ?!?!?」

「え、ターボ?!?!?」

「再噴射だ?!?!?」

「まさか死んだふりしてたのか?!?!?」

バカな……こんなことがありうるのか、あのターボが……!?!?

……いいいや、これは……。

「……多分死んだふりじゃない、今の今まで本当にスタミナは底をついてたんだと思う」

「じゃあ何で?!?!?」

「1600でスタミナが尽きたのが逆に功を奏してるんだ。一気に後ろに下がってスピード落としたから、そこで息を入れることができてる……んだと思う」

本来、ターボにそこまでの心肺機能があるかは疑問だが、ここでずっと勧めて続けてきた登山のようなトレーニングが生きてくる。

高地トレーニングとまでは言わないが、標高のある程度高い場所から低い場所への登り下りで、心肺機能が多少なりとも強化されたのだろう。結果、息を入れて体力を回復させる能力が……ターボ特有のド根性と相まって、再噴射という想定外の事態を起こしている。

テイオーの目の色が変わった。単にターボの足音が聞こえてきたから、だけじゃない。後ろにピツタリと張り付いてきているネイチャの足音が一向に遠ざからないというのもあるのだろう。

今、間違いなくテイオーは過去最高の危機感を覚えている。

「……あ、また減速した」

「ターボおとおお……」

それはそれとして、ほんの数百メートル、それも走りながら息を入れた程度では最終直線での競り合いに持ち込むには不足があったらしい。

再逆噴射という珍しいものを見て観客やファンはある意味盛り上がったが、重要なのはここから。最後の最後、競り合いを誰が制するかだ。

「……!!」

「っ……!!」

もはや声を発する余力すら無いようだ。残り200m——ここで一気にガクンとテイオーの膝が揺れるのが見て取れた。

一気に速度が落ちかけ、ネイチャがその横を縫うようにしてステツプを踏む。リオナタールがそこに待ったをかけるように上がってきて、更に、後方にいたブレスオウダンスが上がり最速で一気に直線を駆け抜けてくる。

テイオーの目が、彼女を抜き去ろうとする3人を捉えた。その一瞬、複雑な感情が瞳の中に渦巻く。

ひとつは驚き。自分を抜き去ることができたウマ娘はこれまでひとりたりとも存在しなかった、そして全てを負かしてきた——だからこそ、そういった相手が自分を抜き去ろうとしていることに驚愕をもって応えている。

もうひとつは恐怖。今まで経験したことが無い「敗北」が目の前に訪れ、確かな形を持ったことによつて夢敗れることが現実味を帯びているからこそ、焦りにも似た恐怖が湧き上がっている。

そして、最後のひとつは——怒り。大言を吐き逃げ場を封じ、それでもなお負けかけている自分自身への強い怒りの感情が見て取れる。それらは奇しくもこれまで欠けていたテイオーの「競争心」という根幹を埋める最後のピースだったのだろう。

「っ——!!」

入った、と確信した。

崩れかけた姿勢が急激に元に戻り、減速しつつあった速度もまた元の領域にまで引き上げられる。

「最適」を求める精神への作用と同時に「最高」のパフォーマンスを発揮するために体力の底の底まで絞り抜く根性の発露、その両者が高い領域で同時に発揮されている。

「まさか、本当にここで……！」

「ほら！ でしょう!？」

……マックイーンには謝らないといけないかもしれない。土壇場で領域^{ゾーン}に入るなんて土台不可能、仮に入れたとしても体力がすぐに尽きるだろうと見ていたべくと違い、最後の最後までテイオーのことを信じていたようだから。

ほんの100m強、たったそれだけの間走りきればそれでいいとばかりに体力が絞り出されていく。

差し返し、差し返され、更にまた差し返し——そして。

『……ゴール!! 今、ゴールインツ!!』

テイオーのこれまでのレースでは一度も見せることの無かった、大接戦のゴール。

誰一人として余裕など見せることは無かった。ネイチヤは疲労困憊、肩で息をしているを通り越してもう歩くことしかできていないし、テイオーは歩く気力すら使い尽くして、精根尽き果てた様子で転がるように倒れ込んでいる。他ふたりも似たりよったりだ。

観客もまた、結末を見届けようと息を呑んでアナウンスを待っている。

やがて、掲示板に表示された一着のウマ娘は——。

『一着は……トウカイテイオーツ!! シンボリルドルフより長い時を経て再び、無敗の三冠ウマ娘が誕生しました!』

ほんの僅かな、クビ差の一着。

大歓声が京都レース場を包み込む。その声が聞こえたからか、あるいは自分の目で掲示板を確認したためか——テイオーはその手を掲げて、三本の指を立てて見せた。

勝っても余裕は無し

トウカイテイオー、三冠達成。

この華々しいニュースの裏で、涙を流すことになったウマ娘の数は多い。

テイオー自身は悲願を果たしたことで喜びの涙を、観客は感動の涙を、そして同じレースを走っていたウマ娘たちは悔し涙を。

——競技の世界というものは、華々しくも残酷だ。

「負けたーっ！」

菊花賞の激戦から一夜明けて、月曜日の夜。残念会を開こうとしたら「屋台がいい」とせがまれ、ぼくは臨時で寮の敷地内に屋台と椅子、机を並べることになった。(寮長からは許可済み)

で、いぎメンツを募ってみるとこれがまた集まる集まる。「残念会」なのにテイオーまで来ようとしたくらいだ。菊花賞ウマ娘は出禁です！ 出禁！

ぼくはいいんだよ菊花賞勝ってないから。

おでんのタコ足をがじがじかじりながら、ネイチャは目の前で突っ伏した。

「完つ全に作戦ハマってたじゃん……ハマってたよね？」

「うん、まあ……」

「なーんで最後あれで加速するのか意味分かんなくって……キラキラ主人公系だからああいいうのでいいのかなあ……」

「う、うーん……」

どうしよう。アルコールなんて出してないんだけど、雰囲気酔ったんだらうか。えっらい絡んでくるんだけどネイチャ。

お互いに土壇場の覚醒でちぎられたからシンパシー感じてるのは多少あるだらうけど……いや、正直気持ちは滅茶苦茶分かるんだけど、じゃあ安易に同情や共感を向けるべきかというのは別問題だ。ネイチャはそういうのは……求めている部分があるのは否めないけど、本当に必要なのもっと建設的な意見だらう。

「牛すじ」

「タマゴとウインナー」

「はいはい」

ネイチャ以外の皆も例外なくなんかもうクダ巻いてる風になっている。

とか別におでん屋台のつもりじゃないんだけどなんか皆おでん頼んでくる。どういうノリだ。

ヘルプ頼んで回してるけど、これはそのうちおでんだけを追加で作ってくる必要があるだろうか……。

注文にひとつひとつ対応し、ネイチャの空いたグラスに琥珀色の液体を注ぐ。もちろんジンジャーエールである。

「完璧に作戦がハマったって感覚はほくも去年の菊花賞で覚えがあるなあ。負けたけど」

「ストライプが完璧に罠にはめたのに負けたって……」

「ん、あー、違う違う。完璧だって勘違いしてたんだよ。レース中はこれマジで完璧じゃね？ 絶対勝てるわコレって思っても実は結構穴があるってよくあることだし」

何せ走ってる最中は主観でしかもの分からないからね。

我が脚力^{パワー}は雨天にて最強……とか調子こいてたら実はそのパワーが過剰で逆にロスを生む原因になってたとか想定もしてなかったし。

「じゃあアタシの場合は？」

「テイオーを差すならゴール直前にしとかないと、えげつねえ勝負根性で絶対差し返してくるよねって」

「うにゃ~~~~~……」

ここらへんは今までのレースじゃ読み取れないから、同級生ならではのメタ読みだけど、逆に同級生なら知ってても自然なぐらいのことではある。

それでもレース中にアツくなってしまえば、容易にポンとそれが頭から抜け落ちる。ほくもそういうポカをすることはあるし。

では、それを予防する方法はと言うと——ぶっちゃけ訓練しか無い。

「ほくも大概長い時間をかけてマルチタスクの訓練をしてきたが、それでも思考との両立がほんとうの意味でできるようになったのは春の天皇賞で領域ソーンに入れるようになってからだ。両立できたらできたで今度はチャンピオンステークスで（使い方が悪かったとはいえ）鼻血を噴くほどの高負荷に見舞われたんだから、ままならないもんである。」

「反省点が見つかったなら、あとはそこを詰めてって次に活かせばいいんだよ。まだ走る機会はいくらでもあるんだから」
「うん……」

言葉の上では納得しているようだが、ネイチャの表情は未だに暗い。また同じ条件で走れることがあるのか、と考えているのだろう。確かに今回の件、出るレースをある程度絞って中距離に専念することを考慮するだけのものはあったが……。

「3000m級に出てきてくれるか不安っばいね」

「そりやまあ……ねえ？」

「んー……春の天皇賞なら出てきてくれると思うけど」

「そりやまた何で？」

「テイオーは会長さんを超えたいと思ってるわけで、七冠以上のものとなると、ほら」

「あー、春三冠に秋三冠」

「そういうことだ。あとは……会長さんが達成できなかった無傷の四冠シンボリルドルフはクラシック期のジャパンカップで3着のため無敗ではない。とか？」

「それだつてジャパンカップには出走して上位入賞してるから、本当の意味での「皇帝」超えとなるとこの上ジャパンカップで勝ちつつの五冠……とか？」

「ともかく、春三冠も秋三冠も、結局会長さんが達成できていない偉業だ。七つ以上の冠を獲るとか、七冠にしても海外冠を勝ち取るとか……方法は無いではないけど、近い目標として挙げられても不思議はないだろう。」

「ほくも中距離で勝てたし、出てきたつておかしくはないよね」

「なんかストライブを例として挙げるのは違う気がする……」

「苦手分野を克服したって意味では、ほら……」

「——待ってストライブ。その春天、よく考えたらマックイーンもストライブもいるんじゃない？」

「ウフフ」

「ダメだあーっ！」

……いや、まあ、そこはぼくも出るかどうか分かんないというのが正直なところもあるけど。海外挑戦してるかもしれないし。

もつとも、わざわざそれを言う理由も無いので笑って誤魔化しておく。

どうか心を強く持って臨んでほしい。

……≠……

「ジャパンカップでも有馬記念でも一着取っちゃうもんね！」

「無茶」

「無理」

「無謀」

「なんでえー!?!」

翌日のお昼。食事をしに集まったぼくらの前で行われたテイオーの宣言は、それはもう見事なまでに切って落とされた。

かつての会長シンボリドドルフさんの果たしたクラシックでのG1レース4勝、これを超えるなら単純な話、G1を5勝すれば明確に「超えた」と表現できさるだろう。

「ストライブちゃんとマックイーンちゃんは思う？」

「私（ぼく）の方が強い」

が、当然ながら勝ちを譲る気は全く無いので、カレンからのフリに對してはこう返答せざるを得ない。

間隔もロクに空いてない当然ながらストライブの前走・前々走の間隔の方が酷い。し相手も世界の強豪がズラリ。エル先輩も大概ではあるんだけど、じゃあ同じことができるかは話が別——というより

も、ぼくがさせない。といいなあ。

「マックイーンは先に秋天勝つ方考えた方がいいんじゃないの？」

「そこを考慮するのは前提ですわ。それに、最初から負ける気で挑むウマ娘などいないでしょう？」

「そう言うトラちゃんは有馬出ないの？」

「先約があるから年末は東京大賞典予定」

「……有馬に出たくない、ではありませんの？」

「そうとも言う」

さて。

テイオーが過去最高に有頂天になっているのはともかくとして、実はこちらも絶対の自信があつてぶつた切ってるわけじゃない。

正直、頭の冷静な部分ではややこちらの分が悪いのではないかと考えている部分がある。大きな原因としては、テイオーの中長距離^{2400m}に特化した能力もそうだが、アイネス先輩やダイブレイクなどの強豪が多数参加していることも大きい。

特にアイネス先輩は同じ距離、同じコースで一度負けているから、同じようにやりあえば同じように負けるだけなのは自明の理。どうにかして新しい手をひねり出さないといけないだろう。

(勝つても勝つても余裕は無し……なんて)

まあいつものことだ。

もう中距離で打てる策がほとんど残っていないなくて割と焦ってる部分があるけど、そのうちいい考えが来る……はず。多分。きつと。

頑張れ明日のぼく。過剰な稼働で頭痛を起こさない程度に。

涼しい顔をしながらそんな風に内心で懊悩していると、ふと何やら着信音がするのに気付く。どうやらぼくのようなのだ。

「ごめん、ちよつとメール」

「LANEじゃなくて？」

「海外の子だからLANE使っていないんだよ」

「え、LANE使ってるのって日本だけ？」

「うん」

少なくとも海外のチャットツール系アプリの主流からは外れてい

るだろう。

聞いてみると、やはりと言うかなんとか、ピンクフェロモンからのメールだった。うお……すっげえ長文……オマケにフランス語だから読み辛い……。

「どなたですか?」

「こないだの遠征の時に仲良くなった……仲良くなった? っていうか、ファンになってくれた子で……んー……えー……冬から日本に来るのに合わせてジャパンプ観に来るって」

「一体何がどういうことですか!?!」

フッフ分かんねえだろ。

ぼくも分かんない。

話が早すぎて当事者に近い所にいるのに何も理解できてない……。

しかしこのまま行くとピンクフェロモンが直接の後輩になるのか……なんとも不思議な気分だが、違和感を乗り越えて改めて考えると……これはこれでやる気が出てくる。それだけ先輩後輩関係というものが特別ということだろうか。

「……なんか、カドラン賞で見せた戦法に感銘を受けたみたいで……」

「ストライプの戦法に感銘受けて大丈夫かよ……?」

「言い方よ」

——ん、あ。今ふとティンと来た。

情報戦や頭脳戦まで繰り広げる今の流行りのことを考慮し、更に過去の戦法に感銘を受けた子までいるとなれば、今ぼくが持つてる情報や考え方というのは、自惚れじゃなければ一定の価値がある……はずだ。

後の世代のためとか考えるような年齢というわけでもないが、シニア級2年目に突入したら流石にもういつ本格化の終わりを迎えるとも知れないタイミングだ。引退を考えるなら、「後に残すもの」を考慮しておくべきでもある。

(解説動画みたいなの作ってみようかな)

これまで雑誌の取材などを通して作戦について語ったことはあったが、詳細な考え方などはまだ秘密にしたままだ。

改めて語っていつでも見返せる場があれば、きっとピンクフェロモンも見返しやすいことだろうし学びになるだろう。

僕自身も、良くも悪くも色々な所に影響力を持つ身だ。ネットの投稿動画というのは情報戦の媒体としても悪くはない。あとはどれくらい発言を信じてくれるかだが……そこは他のひとに客観的な意見を募りながらやるとしよう。

ここでひとつ、全部の情報を公開してしまうのも悪くはない。

ジャパンカップに向けて

秋の天皇賞はマックイーンが勝った。

——とだけ言うと味気ないが、では実際どうかと言われるとちよつと評価に困るのが今回のレースである。

圧倒的一番人気に支持されたマックイーンは、序盤で一瞬つまづきかけたものの、持ち前のスタミナを総動員して、2000mで使い切るような配分の超ハイペースを作り出して押し切った。

これでマックイーンは夢の天皇賞春秋連覇を成し遂げ、メジロ家の悲願を達成した——。

のだが、なんとというか……うん、史実のマックイーンって秋の天皇賞勝ってたっけ……？

15年以上も経つと記憶がだいぶ曖昧だ。負けてた史実及びメインストーリー。斜行により降着。っけ……？ 勝ってたような気もする育成ストーリー。史実でも入線自体は一着。ような……。

ともかく結果そのものはまさしく偉業だ。数バ身差をつけての快勝ということもあって、内容も文句をつけ辛い。これほどの相手とジャパンカップで争わないといけないというのは、今から身震いがしてくる話ではあった。

さて、ともかくジャパンカップまで約ひと月。トレーニングを再開したぼくはまた大きな壁に当たっていた。

「2400mキツくないですか？」

「今頃気付いたかあ」

そう——思ってた以上に2400mという枠組みはキツイのだ。

スタミナ的な問題ではなく、どちらかと言えばスピードとスタミナの配分の問題だ。当然2000mのように領域突入しつばなしというわけにはいかないし、海外勢は情報戦が通じないものもある。

一度……フオワ賞も含めれば二度も負けた件で、若干の苦手意識が根付いてしまった面もある。とにかく2000mほど振り切った策が取れないせいで、長さが本当に微妙としか言いようが無い。故に「キ

ツい」。

いやまあ全然走れないなんてことはない……んだけどお……クラシックの2400とシニアの2400はまた全然別物だ。

長距離に片足突っ込んでクラシック期は皆あまり慣れてないから優位を取れたが、フィジカル面が完成してる今はそうもいかない。ダービーウマ娘を筆頭として2400mに適応した能力を持つている者も大勢いる。彼女たちにとって2400mは未知でも長くもなるともないのだ。

スカイ先輩は過去を振り返るように苦笑し、シャカール先輩は小さく舌打ちをした。

「リベンジしなきゃいけない相手も多いですし」

「つーと、マックイーンとアイネス——」

「と、テイオーも」

「あん？ 何でテイオーが……ああ、選抜レースか」

ぼくが一番最初に「負けた」と言っているのは、入学後すぐの選抜レースでテイオーに負けた時だ。

記録にも——URAには——残っていないが、あの敗戦があったからこそ策により強く傾倒していったし、テイオーやマックイーンといった策を打ち破れる「個」としての能力に優れた相手への苦手意識が根付いた。今となっては解消されてはいるが、やっぱり負けっぱなしは性に合わない。

「全員ぶち抜いてやるー、なんて言えるようなら良かったんですけど」

「おやおや？ そのために情報戦の準備してたんじゃないの？」

「アレの情報戦の効果はオマケっす」

「あれでオマケ……」

動画の主目的は、あくまでより詳しい策の巡らせ方や情報戦についての考え方を広めるためだ。

単にぼくの走り方を上辺だけ真似るのも良くないし、レース中に考慮しないといけないことも多い。特に、正面から競わないってだけでも悪い印象を持たれやすいし、実際謂われない批判を受けることもあるのでルールは厳守した方がいい、とか。

足技についても、使えば使うほどいいってもものじゃなくてあくまで持て余したスタミナを有効活用するための作戦だし、場合によっては足元が不安定になることだってある。乱用は避けるのが無難だ。

基本的に策も技術もそのウマ娘に合ったものを使うのが一番だ。正攻法が使えるなら正攻法を、策を打つべきなら策を、使い分けこそが最も肝要と言える。

「疑似等速ストライド^レが技術として使えれば、まだ考える余地少なかったんですけどね」

「ダメだろ」

「いやダメでしょ」

「……ふたりとも、そこで即却下出せるのって」

聞くと、その場で即目を逸らされた。

試したのかよ。正気か？ いや、試さないと分からない部分があるのは分かるけど、だとしてやるか普通……？

ぼくはまだ初めてやってみたっていう理由はあるけども……。

「そりやお前よオ」

「試してみても……方が一戦術に加えられるならさっ？」
なんとる無茶を。

いやマジでなんて無茶するんだ。危険性も聞いていただろうに。

「んでそのアレって？」

「決まってるだろ、疑似……うおっ!? ゴルシ!？」

「どうしたんですゴルシ先輩」

「デュエルしに来た」ドン★

……さては作戦会議するのに茶化すから一旦部室から出されたな？

もしくは偵察とか。このひとどこに現れても違和感無いし偵察って意味で言うなら適任じゃあるんだよな……報告がテキストだから残念なことに致命的に向いてないけど……。

「んで何なんだよ？」

「擬似的に、技術だけで等速ストライドを再現しようって話ですよ」
「あれ、これ言っつていいやつなの？」

「別にいいですよ、知られたって何ができるってワケでもないですし」「そりやそうだがよオ」

「ほーん……ほれどういう技か言ってみるがよい」

「領域^{ソリヤン}入って脳機能強化して常時体制御して最適化し続けるっていう」

「狂ってんのかお前」

素で言うやん。

そういう反応されてもしようがないとは思うけども。

「だから新技をこう……破ア！　ってやったら出ないかとか？」

「フオフオフオ……ならば修行じやのうストライプや」

「老師……」

「ねえこの茶番どのくらい続くの？」

……≠……

ゴールドシップをサバンナストライプの偵察へと赴かせたその頃、チームスピカの部室ではジャパンカップに向けた対策会議が開かれていた。

チームスピカの想定する仮想敵の中で、特筆するべき相手は主に三名。ひとりには欧州の英雄デイレイク、もうひとりは前年のダービーウマ娘、奇跡の復活を代名詞とするアイネスフウジン。そして――。「ストライプを……どう対処すればいいんだ……!?!」

カドラン賞ウマ娘にしてチャンピオンステークスウマ娘。合計G1勝利は5勝の現時点における「世代最強」と目されるうちのひとり、サバンナストライプ。

彼女への対処法がろくに浮かばず、トレーナーは頭を抱えるハメになつてしまつていた。

「何でボクらよりトレーナーの方が頭抱えてるのさ」

サバンナストライプというウマ娘は、トレーナーの立場から見れば極めて厄介なウマ娘だ。

例えばサイレンススズカやシンボリルドルフのような「個」として

の強さを突き詰めた者たちとは毛色が——文字通り——異なる。断じて最速とはなり得ないが、問題はそのスピード以外全ての能力が桁外れに高いことだ。4000m走ってなお余力が見え隠れするほどのスタミナ、そこから2000mまで距離を短縮しても対応できる驚異の柔軟性、一足の踏み込みでトップスピードに乗せていく瞬発力、どれだけ重いバ場をも文字通り踏み壊していくほどのパワー、誰を相手にしようとも勝ちを拾いに行く勝負根性……何よりも、数々の相手を手玉に取ってきた頭脳。

性格に關しても、ややファンキーで享樂的なケコであるし間違いない。クセウマ娘と呼んでいい程度のもは持ち合わせているが、気性難と呼ぶほど荒いかというところでもない。むしろ人当たりも良く、素直でトレーナーの言うことをよく聞くあたりそういった面も弱点や難点にはなり得ない。

最も恐ろしいのは、あの年齢にしては異常なほどに情報戦や心理戦に長けているという点だ。誰にでもある普遍的な感覚について熟知しているためか、人が気にする、気になってしまうツボを突くのが上手く、たとえ警戒していたとしても「警戒されている」ことを逆手に取った策を弄したり、ハタから見れば全てを読んで全てに対策を打っているかのように感じてしまうほどだ。

速度に劣ることから勝ち筋そのものは意外なほどに多い。連対率はほぼ100%とはいえ敗戦も何度かあるし、他でもないマックイーンが一度は勝っているのだ。

「俺の見立てでは、ストライプに勝つには純粹に能力面で上回る必要がある」

「身も蓋もねえ！」

「だから悩んでるんだよ……」

「マックイーンさんは、以前ストライプさんに勝ちましたよね？」

「ええ、ですがあれを勝ちとカウントするのはちよつと……」

マックイーンは過去に菊花賞で勝利した経験を「勝ち」と認識していない。当時から現在に至るまで、春の天皇賞ですらも本人の気持ちは挑戦者のままだ。

何せ菊花賞は言わばストライプの自滅——少なくともマックイーンはそう捉えている——であり、春の天皇賞も引き分け。「まだ勝っていない」と認識するのに、彼女にとっては十分だった。

「その上、コレだ」

トレーナーが示したのは、先日の子チャンピオンステークスの映像だった。

マックイーンにとっては穴が空くほど見返した映像で、テイオーにとってはレース直後、しばらく間を開けてから見る映像になる。

以前見た際にテイオーは領域ソーンに入ることができていなかったため、ただ走っている以上の何かを感じ取ることはできなかった。しかし、改めて見ればその異常性は手に取るように分かる。スタート直後に領域突入など正気の沙汰ではない。

極めつけは最終直線、先頭から突然の加速。ハナ差やクビ差で競り勝つことが多い彼女には珍しい着差での勝利だ。

「こいつは恐らく等速ストライドか、それと同系統の技術だ」

マックイーンが眉間にギョツとシワを寄せる。ストライプの弱点は速度だ。そこが補われてしまえばいったどこから突き崩すべきか——負けるつもりは微塵もないとはいえ、勝つための手段を模索するのも相当に難しいことも確かだった。トレーナーが頭を抱えるのも無理からぬ話である。

「それともうひとつ」

「まだあるのぉ!?!」

続いてトレーナーが示したのは、有名動画サイトウマチューブのあるチャンネルだった。

アイコンはデフォルメされたライオンが腕組みをしながら「お前それサバンナでも同じこと言えんの?」と語っているイラストが使用されている。誰がどう見てもストライプのチャンネルだった。

「ちよっと前から連続でレース解説動画が上がってるんだ」

「最近何か変なことしてるとは聞いたけど、あの子こんなことを……」

「レース解説動画? これが何か問題なのかよ」

「……これ全部、自分のレース解説ですわね」

「どういうことですか!？」

ストライプが基本的に自分の手札を晒したがないのはこの場にいる者には周知の事実だ。

そんな彼女がわざわざ動画にして自分の策を披露するなど、何らかの利権が絡んだかもっと大枠で戦略を組んでいるのだろうとしか思えないところである。

「毎回手を変え品を変えてやってるのは知ってるけど、また同じ作戦を使わないとは限らないのよね」

「え、今からこれ全部に対策練らないといけないんですか……?」

トレーナーが頭を抱えているのはこういう点だった。

いつそ開き直ってレースに集中すればいいランナーはまだマシだろう。しかし、トレーナーはレース全体とそれを取り巻く環境に目を向け、俯瞰する必要がある。適度な量の情報を提示されるだけならまだしも、許容量を一気にオーバーフローするほど情報を投げつけられれば、下手をするとトレーナーとして機能不全に陥ってもおかしくない。

この動画、対ウマ娘としてはともかく、対トレーナーとして考えると効果的にしても度が過ぎるほど効果的だった。

——その後、帰ってきたゴールドシップから等速ストライドが使用不可能と知らされることで、部室にはようやく明るい雰囲気に戻った。

それはそれとして謀略も能力も据え置きであることをマックイーンに指摘されることで、数分後には再度暗い雰囲気が部室に蔓延した。

ナチュラルル強者発言

「そういえばあなた、無減速^アクロスステップ^レについては情報開示をしていないんですね？」

後日。小技のレパートリーを増やすためのトレーニングをしている最中、唐突にトレーナーさんからそんなことを問われた。

策について広める、全部話す——という前提で伝えたいだろう。

「作戦を開示するのは技術を開示するのは別問題でしょう？」

「わあ詭弁」

ウフフ。

でも実際語つてもしようがないんだこの辺。

作戦も——まあ個々人の資質に左右される部分が大きいが、走行技術はそれに輪をかけて資質と才能が求められる分野だ。

無減速^スクロスステップ^ウは努力である程度模倣できるが、ぼくがマスタートしたのはほんの最近のこと。ゼロからのスタートで概ね3年かかってる。

何度も言うようだが、普通のウマ娘ならその3年を使って基礎能力を徹底して伸ばしたほうが絶対に良い。あくまで能力的にほぼ頭打ちだったから技に手を広げに行ったんだ。下手に技について広めて、本来そのウマ娘のあるべき成長を妨げるのは本意ではない。

もちろん、戦略面でこれに関してあまり語りたくない、という思惑もある。どういう方向で推測を立ててもいい。どれも正解だ。そもそも独力で無減速^そクロスステップ^れの情報を得たんならギンシヤリボーイと同じ技だということはすぐに気付けるだろう。

動画の主目的は「作戦について考え方を広める」ことで、走行技術の開示じゃない。

「本家本元レベルまで鍛え上げていつでもどこでも使えるようになればともかく、領域^ソ突入の前後^ンくらいの集中力がないと使えないですからね、今は。話さなくて済むなら話しません」

「抜け出す隙間^クくらいは、まあアタシらの体格なら見つけられるだろ

うが、斜行や接触の危険があつからな

ドーナツツ先輩の補足に頷いて返す。

「ぼくも実戦で使えるように鍛えたけど、完成度は……まあ、八割くらい？」

ギンシヤリボーイのそれと比べたら、まだ粗さはどうしても残る。

「私は囲まれたことが無いのでわかりませんが——」

「出たよナチュラル強者発言」

「これはもうリアルニンジャであろう」

「どうなつてんですかねホント」

無減速クロスステップの生みの親は、等速ストライドの生みの親と同レベルに技をものにしてる。

領域ソーンに入るとか入らないとかの問題ですらなくて、息をするように使えるわけなので囲まれないうし、囲まれそうになった瞬間にはすぐに抜け出せてしまう。

当時一緒に走ってたウマ娘からすればとんでもない理不尽の化身だろう。だから同期から一緒に走るの辛いつて言われるんすよ。

「ぼくも辛さで言えばあんま他人のこと言えないけど。」

「——あなたもひとのこと言えないでしょう。囲んでくるなら分かりやすいからむしろカモだとも思っていそうですよ」

「分かりやすいしめっちゃ対処しやすいとは思いますがよ」

「こやつヤバイ」

「いや囲んでくるのどう対処すんだよ」

「横につけてくるのに合わせて前に出るか下がるかすればいいじゃないですか」

「そーいやこいつほぼ自在脚質だったわ」

「ストライプの言う通りですよ。多少はなんとでも」

「トレーナーさんサンは少し黙っていてくれ。今大事な話をしているんだ」

「酷くないですか？」

追い込みはそんなに得意じゃないので「ほぼ」である。

トレーナーさんは……少し離れた所に行つていじけてしまった。

あんたもういい年だろ。

いや、確かにこのひといると、現役時代無敵でした私の方が強いという話になるから雑談に入られると若干困るけど……。

「んでだよ、お前アタシらの技結局使えんのか？」

「いや無理っす」

「お前っ！」

「ぐえーっ」

思わず肩に軽いチョップが入ったが、正直こればかりはマジで無理。

だって八艘飛びはドーナッツ先輩の人並み外れた緻密な計算能力の賜物だし、スナイパー||サンノミスディレクションはこれまた天性の観察力からなるものだ。考え方やその「さわり」くらいまでは理解できるけど、技術で模倣するのはまず無理だ。

——そんなことを言って返すと、ふたりは得意げに鼻の下を擦ってみせた。

ぼくが真似できないことに怒ったくせによお……いや、まあ……自分の技が自分独自のもので他の誰にも真似できないっていう話は惹かれるものがあるけど……。

「勝率高めるっ！話どうなってんだよ、あーっ!!」

「まあ……どうにもならないもんはならないっていうか」

「オヌシ諦めが良すぎぬか」

「トライアンドエラーを繰り返すためには、無理と思ったことはパツと諦めることも必要なんですよ」

物事は繰り返し返すことで成功率を上げられるが、本番に間に合わなければ意味がない。きっちり取捨選択して物事に間に合わせるのが大事……なんだけど、必ずしも見切りが早いのが良いわけじゃない。前のぼくみたく自分の限界を決めつけて上限を勝手に設けてしまうことだってあるわけだし。

でもどっちにしたって不可能なもんは不可能である。

「ぶっちゃけ聞けど、勝率今何パーだ？」

「一割強」

「ほぼほぼダメじゃねーの!？」

「10回やって1回勝てるなら通し放題ですよ」

「うむ。100回やって10回スリケンが当たるのなら1000回投げれば100回当たるのだ」

「ニュアンス違くないか」

「勝てるか分かんない理由は……まあ色々あるんですけど」

今年のジャパンカップに出走する顔ぶれは有馬記念並の豪華さで、単純にこのウマ娘を対策すればいいという話はひとつも無い。

ペースを上げるのはマックイーンやアイネス先輩にとつては望むところだし、スローペースにしたら今度はデイブレイクやテイオーの方が本領を発揮する舞台が整ってしまう。

ざっくり一割強^{12%13%}とは言ったが、実のところ勝ちのビジョンは頭にまるで浮かんでこない。

(苦手意識で大なり小なりバイアスかかっている部分はあるだろうけど……)

結局、大して技の習得などはできないまま、今日はトレーニングを終えることになった。

・・・≠・・・

後日。その日の自主練のノルマを終えたぼくは、学園近くのカフェにやってきていた。

悪い方向に行き詰まりそうな考えを一度リセットするには、少し環境を変えるのがいい。制服からジャケットに着替え、帽子で髪を隠してサングラスでもかければだいたい変装完了。知り合いや勘の良いひと、よっぽどぼくのことを知ってるファンでもない限り分からないだろう。

仮に分かったとしてもトレセン学園周辺ということもあって、学園所属のウマ娘は普通にその辺で見かけるため、こういう状況での接し方というかマナーをある程度弁えているひとは多い。

さて、ともかくもう頭が疲れたので糖分が欲しい。たっぷり欲し

い。

「エスプレッソ砂糖ミルク多め、あとフレンチトーストはちみつたっぷり」

「メチャクチャ普通にスルーされてるの」

ちなみにこのお店、アイネス先輩のバイト先のひとつである。

外からふと見かけたので立ち寄っただけで他意はないのだが、変に警戒をさせてしまっているようで入店から度々様子を見に来られてしまっている。

逆に何もしないことで相手の警戒をスカして無駄に疲れさせる手もあるけど、今は別にそのつもりも無い。

タブレットを取り出して動画を再生する。マックイーンたち……ではなく、最近の注目ウマ娘がメインだ。例えば阪神ジュベナイルフリーズへの出走を決めたフラワー、デビュー直後から身体的に抜群の完成度を誇るミホノブルボン、あと先日の2戦目で惜しくも敗れたものの「普通に強い」タンホイザ、などなど。

ジュニア級の走りを見て学ぶところがあるのかと言われることがあるが、育成理論それ自体が日進月歩で常に変わり続けているし、作戦だってぼくが考えつかないようなことをするウマ娘は必ずいる。

ぼくの頭なんて、必要に駆られた上にある種の「ずる」をしてゲタを履かせてるだけなんだから、本当の意味で頭脳面の天才とも呼ぶべき相手が現ればまず頭脳戦では勝てない。

だから、たとえ新人であってもレースを見れば必ずそこには学びがある……というのがぼくの持論だ。

「お待たせしましたなの……あ、ジュニア級の子たちのレース？」

「先輩たちのレースは飽きるほど見たので気分転換です」

「飽きるほどって……」

大まかなクセが分かるくらいには。

アイネス先輩の能力の中で際立っているのは、スピードもそうだがやはり勝負根性だ。なにせ抜かれそうになった時のスパートや抜かれた後の差し返しの時が一番速いものだから。

もつとも、そのせいで脚に負担がかかりすぎていることから、クラ

シック期ほどレース間隔を詰められずにいるのだけど。ここに關してはクラシックが間隔詰めすぎな面もあると言えるだろう。スケジュール詰めすぎのぼくが言えるこっちゃないが。

適当に切ったフレンチトーストを口に含む。痺れるほどの甘さが脳に効く……ような気がした。

「ストライプちゃん、普段からこんなことしてるの？」

「普段からっていうのはちよつと語弊があります。趣味と仕事にも時間使ってますよ」

「え……どうやって……？」

「こう……どう……？」

……どうやってると改めて聞かれると、微妙に説明がし辛いな。

睡眠時間が短くても問題ないとか、トレーニングの時間がある程度一定なおかげでスケジュールに余裕があるとか、色々言えることはあるけど……人間（もウマ娘も）、何だかんだいらんことしたり無意味にボーツとしたりして時間を無駄にすることが多い。心がけていう意味ではそういう所は気をつけているのだけど。

「頑張つて時間捻出してらんです」

「何で普段ロジカルなのにこういう時だけすつごいアバウトなの？」

「こればかりは本当にひとによるんで……」

そもそもぼく個人はいざとなればロジカルよりフィジカルで強行突破しようとする癖があるので、むしろこちらの方が素と言える。

「先輩も余った時間や無駄な時間があるなら、何かできること考えてみるのもいいかもですね」

「あはは……それはそれで、別のことの方に集中しちやいそうなの」
集中力高いんだよなあこのひと。だから継続してバイトやれてる
とも言えるんだけど。

まあ、ここのところはそれこそ人によるし、いちいちぼくが言つて何がどうなるって話でもない。マルチタスクだって、見方を変えると注意力が散漫になってると言える部分もあるし……今はひとつのことに集中するくらいがいいってというのが定説だっけ？

……そうだ。今のうちに言つておこう。

「先輩」

「んー？」

「次は負けませんよ」

「……ストライプちゃんそういうこと言うタイプだっけ？」

「菊花賞越えてからこういうこと言うタイプになりました」

ダービーのあの日、結局ぼくはアイネス先輩に負けた後、怪我を気にしてそれ以上何か言葉をかけるといふことはしなかった。

その後も屈腱炎の診断を受けて復帰のための過酷なりハビリに耐える先輩に対し、無闇に言葉をかけることができなかったのもある。

「同じ東京2400mの舞台ですし。あの時はほんのちよつとの差で抜かれましたけど、ぼくも随分成長したつもりなので——リベンジマッチと、決意表明ってことで」

「ふふふ……その挑戦、受けて立つ！ あたしだってあの時よりもずっと成長してるんだから、そう簡単に負けてはあげないのー」

お互いにじっと目を見据え——ほどなくして他の店員さんから注意を受けたところでバチバチの睨み合いは終了。ぼくも注文したメニューを食べるのに戻った。

果たしてこれ、気分転換と言えるのだろうか。結局レースのことに頭行ってるし、宣戦布告までしちゃったし。

まあ、これはこれで……単に考え続けるといふよりはマシだと思うことにしよう。そうしてタブレットに視線を落とすと、誤操作で全く違う動画を再生してしまった。チョコクセンバンチョーの現役時代の動画だ。

ここまでやや漠然と動画を見ていたこともあって、まあ気分転換だからいいだろう——と言いつつ訳をしながら映し出されるジグザグ走行を眺める。

このひとのトンチキっぷりは他と比べても一段上だが、しかしここまでできるなら楽しかっただろうな。ブツチギリの速さだし。ギンシャリボーイに迫るほどだったというのも頷ける。術理は……ぼくの知る中では最高にイカれてるけど。

と、そこでふと、蛇行運転としか言いようのないその動きの中に、

引つかかるものを見つけた。

つい最近見た………というか、少なくとも自分がやった………動きに共通するものだ。

——ふと、ひとつ。おぼろげに次のレースで使えそうな考えが頭に浮かんだ。

反骨心に火を点ける

ジャパンカップ。秋シニア三冠の一角であり、有馬記念と同額という日本最高の賞金額を誇り、多数の海外招待選手を迎え入れる大レース。

ぼくにとつてのこのレースはそれと同時に、菊花賞・春の天皇賞のマックイーンに対するリベンジであり、ダービーでのアイネス先輩に対するリベンジであり——選抜レースの時のテイオーに対するリベンジでもある。

もちろん、負ける可能性は高い。完全に中距離にチューニングされた能力をしたウマ娘に対して、ぼくが優位に立てる理由があまり無いからだ。

だからと言って勝ちを諦める気は無いが。

いつになく緊張が心に湧き上がる中、控室はいつも通りの弛緩した雰囲気満ちていた。

まいどまいどぼくの方から緊張感という緊張感を壊して回っていたため、自業自得ではあるんだけど……「まあこいつなら大丈夫だろう」という信用なのか投げやりなのか曖昧な感情を向けられているのがよく分かる。

「まーこいつならほつといっても大丈夫だろ」

言っちゃったよ。

「放任〜」

「ストライプ君の場合、その気になれば自己マネジメントからメンタルコントロールまで全部自分でやってしまっくんじゃないか？」

「それでもありますが」

「何ならできねエンだよお前」

「皆と同じ速さで走ること」

「そういうマジなやつはやめろ」

できないことは何かって聞いたのシャカール先輩じゃないっすか。

まあ、実際のところできないことはいくらでもあるけど。できる風

に見せかけるのだけは得意だ。

ぼくはフラワーが淹れてくれたお茶を、不安を流すように一気にぐいっとあおった。

これ何杯目だっけ。お腹たぽんたぽんになる前にやめなきやいけないんだけど。

「ストライプがそこまで緊張してるの初めてじゃない？ どしたの？」

流石にヤバいと思って飴を口の中で転がし始めたところで、スカイ先輩も様子がおかしいと思っただらう。

今までのレース、一見すると緊張するような様子ほぼゼロで来てるから、やっぱり違和感があるんだらう。

「自分の手口全部晒した状態で走るなんて初めてですし」

これまでも色々なことをしてきたし、読んだり読まれたりを繰り返してこそいるが、推測は推測に過ぎないしレースの度に新しいことをしているのだから読みが的中することはまず無い。病的とか偏執的とか言われるくらいに思惑や策略を明かしてこなかったというのもある。

ぼくの思惑までの中させるなんて、それこそ心を読みでもしない限りは不可能だ。ここまでに15戦、全てを的中させられるとすればもう人間業じゃない。

いずれにせよ、あの動画はその点「答え合わせ」的な側面もあるため、ある意味皆が答えを用意した上でこちらを対策できていると言えよう。ちよつと対策が必要な内容が多岐にわたるけど。

「手札4枚晒した状態でポーカーできると思います？」

「晒したのもオヌシ自身だらう。哀れストライプⅡサンは善意の情報提供により爆発四散」

「とういか隠した1枚で駆け引き成立させる奴が何言ってやがんだ」
「ナカヤマさんと豪運や読み合いではなく口で対抗しようとする方は初めて見ました」

言ってもぼく自身そこまで運の良い方じゃないし。大事なレースで外枠引くとか、デビューすることになった世代とか……運で戦えば

負けるのは目に見える。

策略を仕掛けることはできても裏の読み合いって面ではそこまで得意な方じゃないし、むしろ読まれることだつて多い。なら舌戦での駆け引き以外にできることが無い——という単純な消去法だ。

ルール違反はしない。口だけで勝負するのがぼくの密かなプライドだ。

変な話、意図してやったわけじゃないとはいえ、もう人生2周目してるからこれ以上やりたくない。

「どくせなるようにしかなりやしねーんだ。普段通り姑息に行けよ姑息に」

way of saying
「言い方」

「緊張して体が固くなったら勝ち目も少なくなりますよ」

テイオーが体操選手顔負けの柔軟性があるので自慢にはならないが、ぼくも割と体は柔らかい方だ。というかそうじゃないと無減速クロスステップの複雑極まる脚の動きなんてできない。まあトレーニングで死ぬほど柔軟運動を課せられてたのも原因のひとつなんだけど……。

ぼくはひとつため息をついた。なるようにしかならないのはそのとおりだ。

「そうですね、じゃあ、気負わないことを頑張ります。それじゃあぼくはそろそろ行くんで……」

「気負わないことを頑張るんじゃないか」

「まだ時間あるよ?」

「トイレ行くんですよ言わせないでください恥ずかしい」

「トイレって言わなかった方が良かったんじゃないかい?」

「……………」

「今更黙つても遅いだろ」

ぼくはバックステップで部屋から退散した。

揺れるとマズいことになるのですぐに通常の歩行に戻った。

……≠……

今日のぼくの枠番は大外、8枠18番。

東京レース場2400mというダービーと同条件なだけに、外枠という要素も含めてリベンジマッチの色は濃い。ダービーよりも更に外枠だけだ。

(ほんっと、運がない)

だからこそ、ぼくの反骨心に火を点けるには最良の枠順だ。

テイオーがダービーで大外枠を引いてなお勝利したことから東京レース場でのジंकウスはほぼ無いものと考えていいが、人々に根付いた印象というものは変えがたい。ぼくが勝つと思っているひとはそう多くはないだろう。ぼく個人のファンにしても、勝ってほしいと考えてはいても不利だと考えているのは間違いない。

それを覆せたら、どれほど楽しいことか。

パドックで脱ぎ捨てた外套を軽く手元で振り回す。なんだか、気分がアガってきた。

『ほぼ同条件だったダービーではレコードタイムの圧巻の一着。奇跡の復活を成し遂げたアイネスフウジンが1枠1番での出走です』

本バ場の方からアナウンスの声と、同時に歓声が聞こえてくる。

各選手の返しと同時に進行される選手紹介だ。枠番が最後のぼくは当然最後になるのだけど、こう聞くとフツフツと闘争心が湧き上がってくる。

『メジロマックイーンは3枠5番、天皇賞春秋連覇。果たしてメジロの至宝はジャパンカップを制し秋の三冠に王手をかけることはできるのか』

ひとり、またひとりと紹介が進む毎に否応なしに観客のボルテージが上がっていく。

普段のぼくなら、ここで若干のジェラシーを感じながら、ぼくが最後の選手ですみませんねへへえ……なんて言つてウケを取りに行くところなのだろうが、そういう気分でもなかった。

『ダイブレイク、昨年のチャンピオンステークス勝者です。本年は惜しくも敗れましたが、日本の芝はどうか。海外から期待が寄せられて

います』

「昨年の有馬記念と比べても引けを取らないと感じるほどの豪華な陣容だ。思わず萎縮してしまいそうになるが、気合で堪える。」

「今日、ここでこの程度の出走者相手に萎縮しては、いつまで経つても有馬記念なんて出走できなくなる。慣れと、それから負けん気だ。最強になりたいと言うからにはいずれ越えなければならぬ壁はあまりにも多くある。」

『——トウカイテイオー、夢の三冠ウマ娘がジャパンカップに出走です。かつてのシンボリルドルフはここで惜しくも3着に敗れましたが、果たして「皇帝」超えを成し遂げることはできるのか!』

「今日一番の大歓声が上がった。やっぱり、うん。テイオーの存在は今このトウインクルシリーズで最も華々しいと言って間違いない。」

——そのテイオーに、ぼくが勝ちたい。

「嘘偽り無い本心だ。きっと困難極まることだろうけども……未だに具体的な対策を構築しきれてないけれども、だから絶対に勝てないなんてことはありえない。同じウマ娘だ。「困難」であっても「不可能」ではない。」

「ぼくは本バ場に向けて踏み出した。脱いでいた外套を音を立てて広げながら着用し直し、日の差すもとへと躍り出る。」

『そして、最後のひとりがやって来ました。カドラン賞を制したスーパーステイヤーにして、デイブレイクを破り欧州最高峰の中距離レースを制した「チャンピオン」——「サバンナストライプ!』』

——今再び、歓声が体を貫いた。

適応力の怪物

G1レースを5勝。内3戦が2000mで、芝、ダート、洋芝という求められる適性が全く異なる三種のコースを制覇した適応力の怪物——サバンナストライプ。

民族風の文様が施された外套を翻しながら姿を現した彼女の放つ重圧に、出走者の多くは息を呑んだ。

普段、いかにも弱者ですよ、挑戦者ですよ、という風を装っていても実績と能力は決して嘘をつかない。G1レース5勝という結果は小さくも確かな自信を植え付け、140cmにも満たない小さな体をひと回りもふた回りも大きく見せていた。

「1番人気はトウカイテイオーだが、本質的にはサバンナストライプこそが1番人気と言って間違いない」
「どうした急に」

本人の予想に反して、ストライプは事前投票で2番人気を獲得していた。

ストライプ自身はテイオーの人気をこそ評価することだろうが、俯瞰して見る側はまた異なる印象を持つ。

「シンボリルドルフに次ぐ無敗の三冠を手にしたトウカイテイオーは良くも悪くも広い層にファンを持つ。それこそかつてのオグリキャップのようなもので、投票が集まるのは極めて自然なことだ」

「シンボリルドルフのジャパンカップは4番人気じゃ……」

「あっちはミスターシービーという、よりアイドル的人気を博していたスターがいたのも大きい」

「なるほど」

「この半年、主戦場を海外に置いていたせいで日本のファンに情報があまり入らない中で、2番人気をもぎ取ったというのは純粋な実力……」

「天皇賞春秋連覇のメジロマックイーンや、同じ2400mレコードホルダーのアイネスフウジンを押しつけて2番人気という時点で規

格外というわけか」

「Exactement.^{そのとおりですわ}」

「誰今の」

フアンの考察に、次いで白毛のウマ娘は肯定の意を示した。

肌寒さを覚える11月終わりの空の下、使用人を連れてレース場に訪れるその姿はある種異様なものがあつたが、前例シンボリ・メジロ・サトノetc……はある。それ以上彼らが疑問点に触れることは無かつた。

「まったく、普段の雰囲気はどこへやら、ですわね」

「だよねえ」

片手だけの手袋をしっかりと嵌め直し歩いてくるその姿からは、平時の和やかさや楽天的な様子など微塵も感じられない。

速さが足りないことを誰よりも早く自覚し、常に見つめ続けてきたからこそ、サバンナストライプは誰を相手にしても油断をしない。その結果がほぼ100%に近い連対率だ。

総合力で勝っている相手に対しては絶対に番狂わせを許さず、自分は格上に対して常にワンチャンスを狙える位置取りを譲らない。格下から見た彼女は絶対に同じレースで見たくない悪魔のような存在でもあつた。

だからと言つて格上でも同格でも戦いたい相手では決して無いが。

「あはは、これはちよつと気圧されちやいそうなの」

「気圧されてる感ゼロですわ」

「気をラクくにしていかないよ。ストライプちゃんのことだから絶対に何か仕掛けてくるし」

「ボクはそれ墓穴だと思うなあ」

サバンナストライプというウマ娘は、困難と見ればできるだけ避け通ろうとする風に見せかけて、どうにか突破する方法を探そうとするタイプのウマ娘だ。勝負事に対する底意地の悪さと捻くれ方は超一流と言う他無く、プレッシャーが与えられていないと知ればまた異なるアプローチで攻めてくることだろう。

「皆さん、対策は済ませて来ましたか？」

「なんて言ってるの?」

「対策は済ませたか、だって」

「ウフフフ……」

デイブレイクの疑問に、マックイーンは微笑で曖昧に返した。

同じレースに出る以上、対策をしないわけがない。一方で、対策を「済ませている」とは口が裂けても言える状態ではない。

主な理由は、ジャパンカップ前に突如仕掛けられた解説動画という名の時限爆弾だ。判断材料や選択肢を相手に与え、情報量の洪水で正常な判断力を押し流す。それだけでも厄介極まるが、ストライプはそこから更に複数の選択肢を提示する。すなわち、隠した本命の手札で刺すか、あえて開示した手札で裏の裏をかくか——もはや何も考えもしない力押しをしに来るか。

動画も全てが一度に投稿されているわけではなく、日をまたいで複数が公開されているため、猶予は一ヶ月未満。その間に全ての対策を済ませるなど不可能だ。

更に、策というものは組み合わせても効果を発揮する。何をしてくれるかわかっているのに何をしてくるかわからない、などという矛盾した状態が破綻なく成立しているのは間違いなくこれまでの彼女が培ってきた「こいつなら何でもやる」という——あるいは単純に、胡散臭さ極まる風評の賜物だろう。

今この瞬間、出走者の中で最遅最小のシマシマウマ娘は、紛れもなく彼女たちにとって最大最強のライバルだった。

……≠……

なんかみんなの視線がやたら痛くて重いんですけどこれどういうこと?

戦績が戦績だから、世間での評判はともかく同じランナーなら注目を受けるってことは分かる。今回はマックイーンやデイブレイクといった直接対決を経たウマ娘も多いし……それにしたってなんか圧迫感強くない? デイブレイクはともかくマックイーンもテイオー

もアイネス先輩もぼくに勝ってるんだからそこまで圧を発しなくてもいいじゃん。他の皆も何かぼくに恨みでもあんの……？ある。

なんか変な汗出てきた。

トレナーさんも「貫禄が出てきましたね」じゃないんだよ。今手汗びつちやびちやで貫禄もクソも無いんだけど。それともあれか？貫禄が出たか？ いや体重は……昔と比べれば増えたけどそれでも今の身長に対する適正程度のはずだが……。

「そのくらい表情が引き締まっていたほうが素敵ですよ」

「イタリア流でも学んできたんです？」

デイブレイクの発言に少し面食らう。そういうこと言うのランフィニの方じゃん。

それにしたって表情って……そんなにぼく普段締まりの無い表情してる？

「マックイーン、ぼく普段どういう表情してるの？」

「余裕たっぷりで微笑んでいますけれど」

「……………」

まあそりや人によつちや腹立つわ。真剣勝負の場でヘラヘラしてるように見えるんだもの。

普段から営業スマイルを心がけてるせいだろうか。緊張感が極限まで高まらないと抜けてくれない。職業病……って言い方も変だけど、もう完全に癖だこれは。

「普段も余裕ゼロなんだけどなあ」

「って言う手口？」

「……………」

だーれも信じてくれないでやんの。

これもある意味では余裕に見えてしまう笑顔と同じく、長い時間をかけて培ってきたものか。いやホント……流石にテイオーたちはそろそろぼくの発言が嘘か本当か見分けられるようになってくれないかな……いや、これももしかして逆にからかわれてるのか？ アイネス先輩とかクスクス笑ってるし。

「あなたはもう少し自分が強豪なのだという自覚をもってくださいいま

し」

「普段テロリストとか煽動家とか言われて強豪の自覚を持てると思う？」

「風評を巧みに利用してるウマ娘が風評に流されてどうするのです」

風評っていうものは世間一般に広まっているからこそその風評だ。主観だけでもある程度は自分のことは分かるが、それでも主観的な要素だけではトレーニングにあたっては少し足りない。

本来はここで不足している客観的な視点を補うためにトレーナーさんがいるんだけど、この辺はぼくが単にその辺も突き詰めていきたいタチなだけだ。チームという枠組みの更に外からの視点から、自身を見つめ直す……それで流されてちゃ世話ないけど。

まあ、ぼくの場合は低めに流れていくくらいでいいだろう。変に褒められたり持ち上げられたりすると増長しそうで良くない。

『まだ足りない』って思ってた方が、油断もしにくいでしょ』

「——ふふ。そうですね」

マックイーンからの圧が強まったんすけど。

もしかして余計なこと言ったかなこれ。

『全ウマ娘コースにやってきました。まもなくゲートインです』

長めの返ウオームアップしが終わった頃、アナウンスと共に出走ウマ娘がゲートに招かれる。

ぼくも、頬を軽く叩いて気を引き締めながらそれに応じ——ず、一旦体をほぐすためにゲート前で柔軟と腿上げを繰り返す。

集中力が高まり、「いい感じ」になってきたところでゲートイン。これでダイブレイクはだいたいぼくの狙いは見えるだろう。多分、他の皆も現地では見たこと無いけどだいたいこの想像はつくはずだ。

『最後のひとりがゲートに入りました。態勢整って——』

ゲートが開く。ただでさえ強い逃げウマ娘であるアイネス先輩が出走している今、機先を制するにはコンマー秒か、更にそれよりも短い刹那の間での見極めが必要になってくる。

極限の集中力で脳は最高のパフォーマンスを發揮し、同時にこの「領域」に至っているウマ娘に言いしれない大きな圧迫感を与えてい

く。

『——スタートしました』

その中で、ぼくは集中状態を投げ捨てていの一番にゲートから口ケツトスタートした。

「「「は？」」」」

客席で観戦していたらしい、領域^{ソイン}到達経験のあるウマ娘たちから呆けたような声が漏れるのを聞いた。

今回のレースのスタートを飾るのは、領域^{ソイン}突入の超集中状態によるチャンピオンステークスの再現……などでは当然なく。

——他の走者に無駄な警戒を促し、精神力を削るための領域^{ソイン}を利用したフェイントである。

強制二者択一

スタート直後に叩き込んだ意識外からの一撃は、出走者の意識にコンマ1秒にも満たない意識の空白を生じさせた。

結局のところ、意表を突くと言っても効果としてはその程度。すぐに意識をレースに戻さなければならぬと分かっているウマ娘は、すぐさま頭を切り替えてくる。

しかし、その0.1秒足らずの空白が重要だ。脳が現象を知覚して体に命令を送るまで、世界最速でも0.2秒弱。ゲートが開くその瞬間に意識を空白にしてやれば、0.1秒足らずの不意打ちが0.2秒の初動の遅れを生むことになる。

加えて、ほんの一瞬の領域突入^{ゾーン}の目的は、ただ意表を突くことだけでなく、最速でスタートを切ることにある。

自分からわざと集中を切らしているわけだから再突入できるとすれば最終盤だろうが――。

(問題ない)

元々、2000m級で最初から最後まで維持できるとかの特殊な状況でなければ長時間使うことも無い。

所詮手札の一つだ。これ一つに拘泥^{こうでい}しすぎる方が良くない。

『サバンナストライプ好スタートを切りました。ぐんぐん前へ。アイネスフウジン、メジロマックイーンが続きます』

やはり、立て直しが一番早いのはこのふたりか。アイネス先輩は「してやられた」ことをむしろ楽しんでる雰囲気があるが、マックイーンはおちよくられたと思っっているのか半ギレっぽい。

……どつちかって言うアレは乗せられた自分への憤りかな。厄介だなこれは。アイネス先輩は元より、マックイーンも腹を立ててこそいるが感情を発散させ終わったらそれですぐ冷静に戻る。一流どころはメンタルコントロールも一流だ。

他方、こういうことをしてくると知ってるデイブレイクに動揺は無い。脚質が差しだからというのもあるだろう。多少遅れたとしても

位置取り次第でどうとでもなる。

テイオーは……。

「テイオーは少し当てられたみたいだな……」

スピカのトレーナーさんが眉根を寄せる。なるほど、ここで露骨に経験の差が出たようだ。

テイオーは現クラシック世代最強だし、能力的にもシニア級含めて最上位クラス。だが、対領域ソーンに対するノウハウは皆無だ。これは今まで領域ソーンに突入できる対戦相手がいなかったせいだ。

レース場で放たれているプレッシャーの種類がどういふものかを判断できるようになった直後のコレというのは大人げないが、勝負の場だ。一瞬でも油断すれば食われるなんて目に見えているのに手を抜けるものか。

「こういうハシゴ外しするとこ含めて扇動者アシテーター呼ばわりされんだよ」

「ストライプⅡサンの会社はいずれ暗黒メガコーポと呼ばれよう」

「アレもストライプにしかできない技だけど、まあ姑息だよね発想が」
身内からの評価はボロクソであった。

あとスナイパーⅡサンはぼくの悪口はいいけど会社への悪口は勘弁してほしい。我が社はコンプライアンス重点です。

(……さて、位置取りは悪いが)

言わずもがな、大外ということもあつてとにかく位置が悪い。下手な切り込み方をすれば斜行、じゃなくても純粹に最内までが遠い。

ロケットスタートこそできたが、あくまで他と比べ若干前に出ただけだ。「先頭集団」のくくりには入ったが、内に入ろうとすればそれだけロスが生じ、着順も徐々に後ろに下がっていく。

『さあ、ここでアイネスフウジンが前に出る。サバナストライプは2番……3番手』

『ここから気持ちよく逃げるかどうかわかいですね』

「ストライプが後ろにいて気持ちよく逃げられる子がいるなら見てみたいわよ……」

「スズカさんなら……!」

「……あいつスズカも対策してんじゃねえ?」

雨乞いを頻繁にやるだけに不快指数が高いつてか。やかましいわ。しかし、結果的に先行の位置取りになったのならとりあえずはこのまま行くしかない。

「……………」

問題は、後ろで不気味なくらい沈黙しているデイブレイクか。差しだから沈黙してて当然なんだけど、チャンピオンステークスの時以上に静かな、そして重厚な圧を感じる。

完全にぼくにロックオンしてるじゃん。他に知り合いないからそうもなるだろうけど……イギリスの時より更に濃厚だな。ランフィニのような有力者の知り合いないせいかな。

あれだけのプレッシャーが直に叩きつけられるのは正直気が重い
——が。

(いいね、この感じ。燃えてくる)

チリチリと前髪が焦げ付くような熱気。このくらい無きや面白くない。

これもある意味イギリスじゃ見られなかった、ぼくひとりに叩きつけられているデイブレイクの「本気」だ。

最初はあれだけ侮られていたぼくが、今や世界のトッププレイヤーに直に生の感情を叩きつけられている。こんな嬉しいことも無い。「アイツ普段強い相手とやるの嫌だっつってんのにいぎレースに出るとテンション青天井なのズリいよな」

「あはは……………」

問題は……アイネス先輩が恐らく煽りに乗ってくれない点だ。

互いの手の内は知っているし、煽り方に関してもほぼ間違はなく既に理解している。だから下手に煽っても乗ってはこない。ただでさえ普段バイトとして働いてもらってて接点も多いんだから、ぼくがちよつとやさつと揺らしたところで何ともならないだろう。

——つまり、「ちよつとやさつと」じゃなければいいということだ。
「しよつ」

『おつとサバンナストライプ前に入る。3番手に甘んじることが嫌ったか』

と言うより、今は他に手が無いし下がる方がマズい。切れ味勝負ができるわけでもないし。

さて、誘いに乗せる方法だが……要はちよつとやそつとじゃなく、マジであればいい。今、ぼくは本気で先頭を狙いに行っている。

単なる力押しかと言われると——まあその通りなんだが、ぼくも逃げは得意な方だ。だからそこで駆け引きを投げかけられる。同じく逃げが得意な相手に対して「自分の前に出す」か「自分が前に入る」かだ。これを瞬時に決めてもらう。

前に出てきてくれるなら望むところ。下がるなら——それでもいい。要はぼくが先頭に出るだけなんだから後は押し切るだけだ。

「出たよどつち選んでもストライプ有利になる強制二択……!」

「……あの、ウオツカさん。少し思っただんですけど」

「何すか?」

「ストライプさんってほぼ脚質自在ですから、二択自体が特に意味が無いんじゃない?」

「……うわっ」

……気付くひとは気付くか。強制二者択一なんてのは御為ごかし。自在脚質に両足突っ込んでるので、どう対応されたとしても大して結果は変わらない。下がればまくるし、中団に揉まればギリギリ狙いで差しに行くし、先行すれば煽るし、逃げれば徹底的に大逃げする。

大事なものは「選択させること」だ。一瞬の逡巡で構わない。あるいは迷わずとも構わない。「選んだ」事実が毒になる。

あの時ああしていれば、この時こうしていれば……今はまだ序盤だ。レースが進むごとに、自分の判断が本当に正しかったのかを振り返る瞬間が来る。

そこで0・1秒の隙が生じればいい。レースは絶対速度を問うものではない。相対的に一番早くゴールに辿り着くことができた者が勝者だ。

『アイネスフウジンこれに並びかける! 更にメジロマックイーンも負けじと前に出た! 先頭集団この最序盤から意地の張り合い!!』

「ウソ!」

「マックイーン!?!」

なるほど、そう来るか。よりによってマックイーンまで。

考えてた中で最悪のパターンだ。本来、先行策でのスタミナ勝負による押し切りが必勝パターンのマックイーンだが、逃げだつて苦手じゃない。「レース」の範疇で考えるなら先行策が一番適しているだけで——その能力はやはり逃げの形も極めて適している。

「ただの」体力勝負ならこっちに分があるんだけどなあ……いや、元々そうなるのは欠片も思っちゃいないんだけど。結局G1レースは最後の最後は速さ勝負。一応レコードに迫ったことはあるんだ。勝負できないほどではない。

もつとも、いつもいつも「詰め」の一手が足りないし、実際今も全然足りてると思わないんだけど……。

——ま、今ある手札でなんとかするしか無いさ。いつだつてそうしてきたんだから。

成立する唯一無二

スタミナとひと口に言っても、いくつかの種類がある。

ひとつは純粹な意味合いでのスタミナ。これはどれだけ長い距離を走れるかを問う部分で、主に心肺能力がここに関わってくる。

もうひとつは精神面。脳のスタミナ。単に頭脳を問うだけでなく、継続して思考し続けられるかが問題になる。集中力の問題もあるし、思考力の問題もあるし、もつと根本的に栄養が脳に行ってるかどうかの問題もある。

そしてもうひとつ。トップスピードを維持するスタミナ能力。これは心肺機能もだが、骨格や筋肉も大きく影響する。場合によっては筋肉の断裂や疲労骨折もありうるため、この分野に関しては繊細な見極めが必要だ。

MAX 64 km/h。概ね定着したこの速度で1ハロンを走れば11秒25ほど。上がり3ハロンの間維持できればだいたい34秒というところだろうか。

他方、例えばテイオーはダービーで上がり3ハロン36秒ジャスト。これは先行策を取っていたせいもあるが、クラシック級のこの時期はこのくらいが最速だという事情もある。

他のウマ娘にも目を向けると、タキオン先輩が皐月賞で35秒5。ネイチャが小倉記念で34秒6だったかな。フラッシュ先輩のような規格外を除けば、先行から逃げの立ち位置を確保しておけば、最速を維持して概ね……35秒ペースで行けば十分勝てる計算にはなる。計算通りに行くなら毎回勝てるんだが、もちろんそんなわけは無い。調子の良し悪しもあるしコーナーや坂もあるため、だいたいは上がり3ハロン36秒弱というところに落ち着く。

普段なら十分——ではあるんだけど。

(テイブレイク相手にこの「遅さ」はなあ)

——上がり3ハロン、推定34秒。

本気で差しに来る彼女なら、そのくらいやってもおかしいことは何

も無い。大きくリードを取ることができていればいいが……あつちだつて殺人的ペースで行くことは分かっているだろう。多分途中で上がってきて勝負をかけてくる。

最後の最後で脚が残らないとは思うけど……中距離だから、そういうわけにもいかないだろう。

「1ハロン11秒8、ここまで35秒強……マイルじゃねエンだぞ!」普通のウマ娘はその筋肉の質から、時速60kmで走るの簡単でもその速さで「走り続ける」のは難しい。実を言えばぼくも人種の関係上速筋の割合が高かったりもするが、そこは心肺能力とトレーニングでカバーだ。逃げも主戦術にすると定まった中1の頃から元チーフからは徹底的にシゴかれてる。

とはいえ……。

(流石にッ、そろそろ無理、か!)

ペースが早いのはいいが、ちよつと続けすぎた。まだ続けられる余裕こそあるが、このペースを維持しようものならあと1000mも走れば先頭集団は共倒れだ。

それにしても芝が微妙に合わん。いや、全然ダメってわけじゃないんだけど、相対的に。

海外が合いすぎてたつていうのもある。他のウマ娘が遅くなりやすいロンシャンやアスコットの洋芝は、どっちでもそんなに速度が変わらないぼくにとっては追い風だったわけだ。

それと比べると日本の高速バ場は、ぼくの「どのバ場でもそれほど速度が変わらない」という特徴が完全に裏目に出ている。相対的に一番早ければいい、というのにはぼくも常々言い続けているが……これもまた相対論。相対的に、日本の方が他のウマ娘が速くなるため、ぼくも毎回ギリギリのレースになっている。

息を入れるために徐々に速度を落としていくと、対応してマックイーンたちの速度も落ちる。いくらハイペースの方がいいと言っても度が過ぎれば単なる暴走でしかない。

それはそれとしてここでもう一回加速したらどんな顔するかな、なんて悪戯心が首をもたげるが、流石に驚かすためだけに自分の首を絞

めるわけにはいかない。ブラフによる心理効果以上にここで息を入れられないデメリットの方が大きいからだ。

爪先から足裏にかけて熱を帯びている。ちよつとやりすぎたか。「ふっ……」

息を入れると共に熱がわずかに抜けていく。我ながら反則めいた回復力だ。これでラストスパートストライプ基準の目分量。600m以上のロングスパート。をする元氣くらいは湧いてきた。

「こつからはしばらく動かねーだろうな」

「しばらく……How many?」

「……800mくれーか……?」

「ただ三分割しただけじゃねエか」

まあ序盤、中盤、終盤と分けるなら三分割するのが一番わかりやすいだろうし、的外れというほどではない。このペースで差すなら1400m付近で位置取りをしておかないと間に合わないだろうから。

ただ、これは差す側の都合で先頭集団のぼくらとしては残り3ハロくらいまで動くことはまず無いだろう。逃げは駆け引きを講じる余地こそあるが、ここまでペースを上げてしまうと流石にやれることも少ない。

……本当にそうだろうか？

自分に対しては特にだけど、ぼくは限界というものを自分で勝手に設ける悪癖がある。ここからできることが何かあるのではないだろうか？ このまま漠然と先頭を走り続けるのはぼくにとってベストを尽くしたと言えるか？

思考が凝り固まって硬直しているようにも思う。通じるブラフは——まだある。

『半分を過ぎました。中団より後ろ、位置取りを始めます。まだハイペース』

『先頭集団に迫れるかが気がかりですね』

中団——場合によっては先行脚質も、この辺で仕掛ける位置をさだめなければならぬ関係上、先頭集団も一定以上は後ろに注意を向ける必要がある。スパートのタイミングを誤って追いつかれたら巻き

返しも難しいからだ。

同時に、2番手以降に控えることになったマックイーンたちは、ぼくの動向にも気を配らなければいけない。何をしでかすのか分からないからだ。

そこで、前から後ろに注意が向かう瞬間、その隙を突いて前に出る。

「!?」

「っ——!?」

——ように、見せかける。

やったことはごく単純、僅かな間だけ歩幅を縮めて、スパートをかけるかのような足音をさせたただけだ。

ぼくがメタ読みで相手の性格や性質を考慮に入れた先読みをするのと同じく、他のウマ娘だってぼくに対してメタ読みを仕掛けている。

アイツの性格はこうだ。こういう場面だときつとこうする。……そういう考え方自体は悪いものじゃない。顔を合わせることが多い相手なら尚更だ。

また、マックイーンもアイネス先輩も一流……いや、超一流のランナーだ。領域^{ゾーン}フェイントの時によくわかったが、このクラスのウマ娘ともなると行動の「起こり」、気配とも呼ぶべきものを感じ取って先の先を取って行動できる。

たとえ視界の外の出来事であろうと——いや、視界の外だからこそ、隙が生じるからこそ不測の事態に体は動く。動いてしまう。「ストライプなら1200m付近からでも仕掛け始めるかもしれない」と知っているからこそ、ほんの一瞬の歩幅の変化、足音の違いを「スパートだ」と判断してしまい、聞き逃すことができない。

「!?」

「マックイーンたちが急に動いた!?!」

「今何をしたんですか!?!」

「歩幅を変えた上で速度を変えないフェイントだと?! なんて無駄な技術を!?!」

こちらから注意を外していたからこそ、ふたりはただ歩幅を縮めた

だけなのを踏み込みの前動作だと誤認した。

結果、数秒足らずの短時間とはいえ、こちらの思惑に気がつくまで仕掛け所でもないのに加速してしまう。

更に、ここで再度選択肢を突きつけられる。すなわち抜くか留まるかだ。

当然だが、この局面で抜きにかかるなんて愚の骨頂だ。なので、ふたりとも最終的にはまず確実にその場に留まろうとする。だが、1秒、0.1秒でも迷いが生じればそれだけスタミナは削れる。

——結果、先に状況を察して付き合っちゃダメだと判断したのはアインス先輩だった。

元々マイルから2400までに特化した能力の持ち主だ。無駄に使える体力は無いため即決できたのだろう。

対して判断を迷っているのがマックイーン。スタミナが豊富にあるからこそ、このままこちらの罠を食い破るかどうかを選択肢に挙げられているようだ。

だが現状、それは悪手だ。

張り合ってくるなら構わない。止めはしない。苦しい展開になってくるが、ぼくにとつての「苦しい」はぼく以外のウマ娘にとつては「地獄」だ。

マックイーンがいかにスタミナに優れるとは言っても、脚がそれに常に耐えきれぬわけじゃない。デビュー前に骨膜炎^ソ。菊花賞では骨折^ソ傷。ぼくしか知らない史実^{コト}だが、骨折して療養に入ったこともあつたはず1992年宝塚直前^{コト}だ。

そうなつたらこつちもタダでは済まないが、ぼくがタダで済まないレースなら全員タダじゃ済まない。皆仲良く負傷全滅、さもなきや脱落で着外である。

で、そんな状態に陥れば九分九厘ぼくが勝つ。純粋な体力勝負でしかなくなるからだ。100%脚に甚大なダメージを負うだろうからこつちは絶対やらないけど。

(……あつちもそんなことは分かっているはず)

勝敗を競う上でわざわざこつちに有利になるような真似はするま

い。意固地になっているように見えるのは表面上のこと。内心ではここからどうすれば出し抜けるのかを考えているはずだ。

フェイント——通じない。見せすぎたか。並ぶ気は……流石に無いだろう。後ろに降りて2番手になった。

『向正面、トウカイテイオーとデイブレイク、上がってきた』

そろそろか。もう少しで3コーナーに差し掛かる。スパートをかけるとするならこのあたりか？

いや——ここまでのやり取りで脚へのダメージも大きい。今回は4コーナーまで我慢すべきだろう。

逆に、4コーナーまで行けるならあとはもう速度を落とさずにいけるはず。残りは他のウマ娘の体力をどれだけ削り切れたか……だ。

『3コーナー抜けて間もなく4コーナー、後続がぐんぐん上がってくる！』

痛烈なプレッシャーが背中に突き刺さる。

この場にいる他の17人全員がぼくに強く大きく意識を向けてきている。たとえ最遅であろうとも、どれだけ軽んじられていたとしても、実績と戦い方次第でこんなにも世界の一流たちと張り合うことができる。

モノちゃんたちは今このレースを見ているだろうか？ いや、そこまで考える必要は無いか。

まずは眼の前のレースに勝つことだ。——そうしてはじめて、胸を張ってぼくは強いんだと言い切れる。

「——ッ!!」

領域に再突入する。あとはもう体力も技術も全て絞り尽くすだけの消耗戦だ。

「ストライプが上がって……上がっ……上がってる?」

「9割5分から10割に引き上げても上げ幅が少なすぎて上がってきているように見えないだけでしょう」

「マジ切れ味と無縁だなアイツ」

うるさいやい。

確かにぼくのジリ脚はフラッシュ先輩のようなズンバラリンと行

く切れ味とは無縁だ。ナタの切れ味と呼ばれたかのシンザンよりも更に鈍い。どっちかと言うと棍棒でタコ殴りにして引きちぎりに行ってるようなものだ。蛮族かよ。蛮族だな。

だが持続力という一点に関して言えば他の追従を許さないと自負している。極論、断ち切るという出力さえ同じなら過程は多少なんでもいい。

他のウマ娘が体力を使い果たして速度が落ちる時にぼくの速度が落ちないことで、差し返す余地が生じる。本当の勝負はそのタイミング……！

『ここで直線に向いた！ 残り500m、長い直線が待ち受ける!!』

ここでそろそろマックイーンたちも領域ゾーンに突入したのを感じた。タイミングとしては……どうだ!?

ギリギリを突いている……とは思うんだが……プレッシャーはほとんど近づいてきている。ひとつ、ふたつ——いや、4つ。

猛スピードで追い込んでくるこの白い影は——！

『400を切った、高低差2mの坂！ ここでトウカイテイオーとデイブレイクが突っ込んで来たあーッ!! 1番手に躍り出る!』

「!」
「——ッ」

やはり来たか!

2400mという彼女たちの得意距離だからこそまかり通る無法。最高速の維持ではなく一瞬の閃きに全てを託すからこそ成立する極限の切れ味。本来クラシック級のテイオーがここまでやってのけるのは想定外だが、デイブレイクに触発されて引き上げられたか、あるいは領域ゾーン突入の高揚感で色々なものが麻痺してしまっているか……。

……どっちでもいい!

徹底的に速度を維持する。抜かれようが今は構わない。あと400——300m、この坂で脚にダメージを受けているのは間違いない。速度は絶対に落ちるのだからそこを狙う。

抜こうとしてきた時に見えた横顔は、見るからに苦しそうなものだった。ダメージはある!

『先頭は大混戦！ サバンナストライプは未だ譲らず、メジロマック
イーンも並びかける！ アインスフウジン食い下がってきた！』

「ああっ！ クソツ、デイブレイクのヤツ微妙に塞いできやがった！」
「これじゃあ最内から抜きにかかるとが……！」

……前を塞がれたただけなら無減速クロスステップで突破できない
ことはない。

問題は、デイブレイクがどれだけの速度を維持できるかだ。海外ウ
マ娘特有の鋭い差し脚が、前回の敗戦を期に鍛え直して粘りをも伴っ
ていたら……悪ければそのまま負け。良くて、また引き分けの可能性
が浮上する。

天皇賞の時と状況はよく似ている。そもそもこのぼくの戦法がギリ
ギリを狙いに行くものなのだからこればかりはどうしようもない。

(……じゃあ引き分けに甘んじられるかって、そんなのはありえない)
ではどうするか？

記憶を辿る。疑似等速ストライドというわかりやすい手段こそあ
るが、あれは禁じ手を通り越した愚策だ。確かに根本的な速度に手を
入れることはできるが、使えば0.1秒後に自爆しかねないような欠
陥技など考慮に値しない。

だが——無減速クロスステップ、ミスデイレクション、スリッパス
トリーム、前傾姿勢……総じて速度を上げる決定打にはなり得ない。
『速い速い！ まだ伸びる！ やはりチャンピオンステークス前年覇
者は伊達ではないか！』

当たり前だ。ぼくが言うのもなんだが、展開に恵まれなかったのと
たまたま策がハマったこと、加えてあの時は疑似等速ストライドがフ
ルに使えたことが勝因として一番大きい。

徐々にスピードは落ちつつある。だが、こちらの速度を完璧に読み
切っているためか本当にギリギリで速度が足りない。

あと1秒！ 時速1kmでも加速できるなら……！ けれど、今の
手の内では……!!

「尻尾さえ回ってなけりゃああ〜!!」

「尻尾は関係ないでしょう!!」

余計な野次が耳に入り込む。そりやこつちだつて矯正するべきか悩んだが、と思つた——直後、何か繋がつたような感覚が脳髓を揺らした。

勝手に回転する尻尾は、ぼくにとつてある意味ではずっと付き合ひ続けてきた悪癖だ。こんなのがあるから遅くなつたんじゃないかも、これがあつて始めてこの速度が保てるとも思つてきたが……「尻尾が動く」という動作から見つめ直せば、これは本来バランスを取るための器官であり機能だ。

回転によつて微妙な重心の変化に対応していると考えれば、これまでの極端な走り方の一助になつていたことは間違いない。

ひとつひとつの経験と、自分に今できることを思い出す。

無減速クロスステップ。

ミスディレクション。

八艘飛びとスリップストリーム。

急激に向上したパワーと体幹。

——疑似等速ストライド。

ひとつひとつをそれぞれの本来の使い手と比べれば、熟練度に圧倒的な差が生じるのは間違いない。同じ土俵で比べたらどの分野でも確実に負ける。

だが、それぞれの要素を突き詰めて抜き出せばどうだ？ 無減速ク

ロスステップのための足捌き、ミスディレクションのための体捌き、スリップストリームや八艘飛びをするための観察眼、重心移動と強靱な体幹、疑似等速ストライドのための——最適化能力。そして、「回転」による姿勢制御。

それら全てを繋ぎ合わせ、再構築する。

我ながら馬鹿げた発想だと思う。多分どうかしてるんだと思う。

けど、できると——確信が全身を満たしていた。

『サバんなストライプが猛追する！ まだ垂れない、まだ垂れない!! 間に合うのかああーっ!!』

徐々にディブレイクの背が近づいてくる。いつもと同じ無減速クロスステップの始動、その途中で体を傾け、「落とす」。

同時に外向きの力と内向きの力を領域ソールによる肉体制御で速度ベクトルを微細に操作。矛盾で弾けそうになる体を体幹と姿勢制御で無理矢理抑え込む。

ほんの1秒足らず。

ほんの1km足らず。

それでも確かにこの脚は、無減速ではなく加速の領域に踏み込み——ほんの少しだけ、体を前に押し出した。

「な……………」

「今の、は——」

『……………ゴール！ インツツ!!』

尻尾が回転するからこそ、成立する唯一無二。

教わった全てと培ってきた全てをつぎ込んだ集大成。

あえて名付けるとするなら——急加速アフリカントービクオーバーテイク。

『まさかの差し返し、まさかの急加速！——これが世界を制したウマ娘だ！ ジャパンカップ、勝者は——ハナ差で、サバンナストライプ!!』
どよめきと歓声が天を衝く。

ドーナッツ先輩の「バグかよ」というボヤキが、ある意味で現状をよく示しているようだった。

ぼくは腕を高く空に掲げ————解けた緊張感のせいでもつれた脚を直しきれず、そのまま思いつきりすつ転んだ。

BLOW my GALE

陽光が差す秋の空に、歓声が響いている。

どこか他人事のような心地だ。勝った、と言うよりも「成った」という思いの方が強く、ようやく次のステージに進んだ——あるいは、超一流の怪物たちにようやく追いついたという感覚が胸中を占めていた。

数秒ほど遅れて、勝ったという実感がやってくる。

もう後続が来てもいい頃合いだ。起き上がって、勝者としてウイングランをしないと……と思った直後、ぼくの体は横から伸ばされた数名の手によって持ち上げられていた。

「んえ？」

犯人は、どうやらアイネス先輩を含む掲示板入りメンバー。そこに加えて、後から更に他のウマ娘までが混ざってくる。

先頭に立つてるアイネス先輩はにつこりこちらに笑いかけると、周りに何やら目配せをして……ぼくを胴上げし始めた。

「ウワーツ!？」

「わーっしょいー！」

「わっしょいー！」

「Wasshoi?！」

じよ……状況が飲み込めない！

いったいなぜ突然こんなことを?! そう思いながらなすがままになつていると、そのまま裏手に連れ出されてしまった。

「横わっしょいー！」

「ぐえーっ!？」

そして掟破りの落下……はせず、ぼくが載せられたのは、先に何やら察したためそこで待機していたらしいタキオン先輩とスカーレットが用意した担架の上だった。

え……何コレ。

「何コレ」

思ったことそのまま口から出ちやった。

困惑しきりのぼくにアイネス先輩がずいっと前に出て圧をかけてくる。

「ストライプちゃん。検査、行くの」

「な……なぜ……？」

「あなた、後ろから見えていましたけれど……ちよつと動きそうにない方向に脚が動いていましたわよ」

「マジ？」

疲労困憊そのものとしか言いようのないような表情ながら、テイオーが頷いてそれに答えた。

なるほど、どうやらマジらしい。

「脳内物質のおかげで痛みが和らいでいるのだろうね。少し時間が経ったけど、これはどうだい？」

「ア。ツツツ」

「ダメと」

可動域を確認し始めたところでエライ痛みが足首を襲った。

「骨折？」

「いや……多分捻挫……」

骨折の時の感覚は分かっているし、折れたような音はしていなかったので大丈夫だろう。

タキオン先輩は何やら変な可能性に行き着いたためか喜色満面だが、デイブレイクをはじめとして今回の出走者の面々は呆れ顔だ。そりやそうだ。勝者がこの調子じゃあ締まらない。

ぼくも苦笑いしながら、医務室に連れてかれていったのであった。

「重めの捻挫だね」

それから少しして、本来のスタッフと別にまるで医務室の主のように振る舞うタキオン先輩から下されたのは、そういうある種想定内の診断だった。

「またか」

「またですね」

「またやらかしたな」

「またですわね」

骨折じゃないからいいが——とでも言いたげに医務室にやってきた皆から生ぬるい視線が注がれた。

今回の負傷者はほくくらいだから許可されてるとはいえ、大入り満員すぎるだろ医務室。

「原因はぶつつけ本番であんな負荷がかかる異常な加速をしたせいだろうね。クククツ、実に興味深い！ もはや速度面で頭打ちに達していた君がここに来て最高速を上げられたというのは実に素晴らしいツツ!!」

「耳がつー!」

「おつとすまないウオツカ君。ともかくどうやったのか教えてくれたまえよー。頼むよー」

「これボクらが聞いても大丈夫なやつ?」

「問題ないではありませんの? どうせ——」

「まず尻尾を回します」

「何だつて?」

「——この子が喋るということは『喋っても問題ない』ということでしょうから」

ちよつと自信過剰な言い方になるかもしれないが、同じことは誰にもできないという自負がある。

あれは気付いた時にはもう尻尾を回して走っていたくらいのレベルで「尻尾の回転」による重心の制御ができる、という前提条件が無ければ成立しない技だからだ。

……いややろうと思えば割とできるのかもしれないけど、どっちにしろ普通のウマ娘は根本的な身体能力を伸ばした方が圧倒的に効率が良い。これは伸び悩んだせいで小技に傾倒しなければならなかったからこそというのが大きしい。

ともかくそんな説明をしてみると……驚くことに、タキオン先輩はへこたれてる様子は特に無いようだった。

「……いや! だが道が見えたのは確かに収穫だよ。うん。キモは重

心の制御と遠心力……そして肉体とパワーベクトルの完璧な制御だ」
「課題多くね？」

「多いよお!!」

若干ヤケになってませんかタキオン先輩。

まあ普通のウマ娘がその辺に徹底的に力入れて鍛えることはそうそう無いししょうがない。

逆に言えば鍛えられればあるいは、という道が見えたのがひとつの収穫なのだろう。

「……あーあ！ それにしても残念だなあ。先にそんなことが出来るって聞いてれば、ボクが勝てたかもしれないのに」5着。

「あなたストライプの罫にかかった時点でスタミナが枯渇するのがほとんど決まっていたじゃないですの」4着。

「って言っても、そんなに着差は変わらないし、皆にチャンスがあったと思うの」3着。

「彼女たちはなんと？」2着。

「着差は変わらないから誰が勝ってもおかしくなかったって」1着。

実際のところ、主観ではあるけどもつとデイブレイクとテイオーにスタミナがあつて、距離を取られていたら勝負は分からなかったように思う。5名が4バ身差に収まっていたし。

デイブレイクに関しては……元々中距離が主戦場だし、2000に適応しすぎたと考えるべきか。手の内とこっちの考え方は知られてるし、次2000でやったらこっちが負ける可能性は高い。

テイオーについても、翌年以降勝負する機会があるから……その時はどうなるか分からないや。

「それで、ウイニングライブは出られますの？」

「固定すれば多少は動けるし、それでなんとかか」

天皇賞の頃に一回骨折したから、動きを制限された状態での動き方はなんとなく掴めてる。固定して立ち位置に気をつければ、ライブ一曲分ならなんとかなるだろう。

アンコールを受けたら……受けたらどうしよう……ぼく消えつから！ ってことにできない？ ダメ？

……ともあれ、怪我人の周りにいつまでもいるべきじゃないと思っ
たのか、反省会や打ち合わせをするべきだと思っただか、大半の出走者
はしばらくすると医務室から立ち去っていった。

残ったのはベテルギウスとスピカの面々だけだ。

バンデージで固めに足首を固定してもらっている最中、ふとした拍
子に無言の瞬間が訪れる。

ここにいるのは、勝者と敗者。特に今回初めての敗北を味わったテ
イオーは、そろそろ実感が伴ってきている頃だろう。

だんだん気まづさが湧いてきてる。……そんなところで、椅子を引
く音がした。

「——ストライプ！」

「はいストライプです」

「次はボクが勝つよ！ 絶対！」

そして——身構えていたぼくに告げられたのは、そんな宣戦布告
だった。

(……そうだよね)

テイオーの強さはスピードがあるとか柔軟性が高いとかそれだけ
ではない。折れかけても折れない。折れられない。きっかけさえあ
ればどんなに心がへし折れてても立ち上がれる。そんな不屈の心だ。

気まづさなんて感じる方が間違ってた。そうだ、これでこそだ。

名実ともにテイオーは現クラシック世代最強のウマ娘だ。しかし
同時に、まだ肉体的には完成し切っていないということでもある。

これが本当の意味で完成したら……来年はどうなることか。

「楽しみにしてる」

今は、ただこの一言だけを返すことにした。

……あ、でもできれば2400でお願いしたいな……2000は無
理。うん。

……≠……

夜も更けてきた頃、ジャパンカップのウイニングライブは本日のメ

インレースの面々を迎え最高潮に達していた。

歌唱曲は、サバンナストライプの強い希望により「BLOW my GALE」。曰く、仮にも、今一瞬のこととはいえ「最強」の座を手にしたのならばこの曲しか無い——そう発言していたことを梨ギンシャリボーイ紗は思い返した。

「浮かない顔をしているな」

関係者席からライブを見るその中、元チーフトレーナーがどこか遠くを見つめている様子の彼女に声をかける。

サバンナストライプのレースを目にしてから——正確にはそのゴール目の姿を目にしてから——というもの、梨紗はどこか上の空だった。

ストライブは、名実共に現シニア世代で「最強」の座に就いたと言える。それを支えたのは紛れもなくギンシャリボーイが確立した無減速クロスステップから派生した技術だ。

それが喜ばしくないか、と問われればそうではない。そしてこれは、間違いなく「自ギンシャリボーイ分を超える素質」を目にした瞬間でもあった。

「——私はあんなことができるとは夢にも思いませんでした」「そうだな」

無減速クロスステップこそ、無敵の技術にして完成形。故にギンシャリボーイは無敗のままに現役を終えた。

——終えざるを得なかった。戦ってくれる相手がいなかったからだ。

食い下がってくるライバルもいた。しかし彼女は無理が祟り怪我で引退。そこでぶつりと何かの糸が切れ、気付けば引退していた。

「あの子と一緒に走っていれば、現役も続いていたのでしょうか」

「かもしれないな」

トレーナーの資格を取ったのは、自分を超越する逸材を探していたためだと説明している。

それが間違っているわけではない。だが同時に、梨紗は自分に勝る素質を持ったウマ娘がいれば——という幻想を追い求めている自分を否定し切れていない。

だからこそ、「完成形」である無減速クロスステップを更に発展させて己のものとするその姿は、あまりに鮮烈だった。

燻っていた燃え殻に吹き込んだ風のせいで、胸の奥が煌々と燃えていた。

「選手だったことの無い俺がお前がどう思ってるのかは分からんがな……何か思うことがあるならやってみるのも手だぞ」

「今は立場というものもあるんですよ」

「タキオンを見る。立場もあるのに死ぬほど自由にやっとなるだろう」

「いや、それは……」

「……短い人生だ。何をやったっていい。ストライプも大概自由に何でも、やりたいことをやっとなるだろう？」

「……………」

言葉一つで迷いが晴れるのならば、既に梨紗はもつと自由にやれていることだろう。娘の意固地さに、重い息が漏れた。

しかし——行動で示している者が、今彼女の視線の先にいる。

どのようにするにしても、やがてその迷いも氷解するに違いない。金城はそんな淡い確信を得ていた。

URA賞

激闘のジャパンカップからしばらく経った。

前走や戦績のおかげか、有馬記念ファン投票は1位になったりしたが、先約があるため東京大賞典に出ることにしたらURA職員に泣きつかれたり、いざ東京大賞典に出たら大井レース場が入場規制をかけられるほどの騒ぎになったり、砂のサイレンススズカに覚醒したファル子先輩にわからされて半バ身離されて負けたり……（多分捻挫の影響もあったと思う）ということにしたい。

——ともかく色々とあつて今年のシーズンは終わりを迎えたのだった。

前年と比べて出走数こそ多くないながらも、6戦4勝（1引き分け）。内、日本でG1を2勝、イギリスとフランスでそれぞれG1を1勝。これは世間の評判を上げるのに大きな効果があった。

縞毛の評価もこれで鰻登り——とはならなかった。

曰く、「あいつがおかしいだけ」。

つまり突然変異扱いである。

そもそもスピードに欠けるからレースに向いてないと言われていたのに、根本的な部分でそこが改善されない限りレース向きではないというのは覆しようがない。

まあ、それでも「中長距離以上の距離に向く」という長所を見つけて「全然レースに向いてない」じゃなく「特定の状況なら活かせる特徴がある」という、ある意味で正確な評価に至ってもいるのだけど。

ある意味ぼくが外れ値だからこそだろう。

ファンレター、は、元々多かったけど、ここ数ヶ月でまた激増した。ただこれまでとは少し種類が異なり、「勇気付けられた」「自分もトレン学園に入ろうと思った」というような内容が増えた。

だいたい「あなたのようなことはできないが」と注釈が入れられているのは誇るべきか嘆くべきか。

皆もやってみようよ。意外な才能が見つかるかもしれないしき

……。

さて。ともあれ1月上旬。今年のUR A賞の発表の場になんと、ぼくはやってきていた。

マックイーンと一緒に。

「何でや」

「お……おかしいですわね……なぜシニア級がふたりも……？」

UR A賞は基本、クラスと路線でそれぞれひとりずつ表彰されることになる。シニア級・クラシック路線のぼくとマックイーンが同時に表彰されるということはまずありえないのだ。

会場にはファル子先輩もいるので、何かまかり間違って最優秀ダートウマ娘にノミネートされたということは無さそうだ。シニア・テイアラ路線はヴィクトリアマイルを勝ち抜き凱旋門賞2着を手にしたミーク。短距離はカレンだ。史実1991年の最優秀5歳(当時の年齢表記)牝馬・最優秀スプリンターをダイイチルビーが同時受賞。だから路線違いでのノミネートも無い、と思う。

「同時受賞ということはあるんですか？」

「いや……流石に聞いたこと無いかな……」

フラワールの疑問ももつともだが、二年連続での選出ということはあつてもふたり同時ということはまず無い。

例えばフラワーが翌年、ティアアラ路線で活躍しつつスプリンターズステークスに出て勝つ、とかしたらクラシック級・ティアアラ路線の最優秀ウマ娘と最優秀短距離ウマ娘を同時に取ることはあるだろうけど……。

「……それにしても豪華なメンバーだね。ぼく場違いじゃない？」

テイオーにマックイーンは元より、ファル子先輩にカレンにミークにフラワー、それに期待の新星ミホノブルボン。

友達だから会話できてるウマ娘は多いけど、関係者じゃなかったらちよつと圧倒されそうなくらい華やかなメンバーだ。

「ストライプちゃん、嫌味に聞こえちゃうよ」

「一番豪華な成績してるじゃんストライプ……」

「……そうかも。ごめん」

正直、天皇賞春秋連覇とか三冠とかのわかりやすい大記録を引つ提げ、メディアにも大々的に取り上げられているテイオーやマツクイーンと一緒に行動しすぎてて、感覚が麻痺してる部分はある。

ぼくはメジロ家みたいな後ろ盾も無いので「悲願の〇〇制覇」とかのネームバリューは無い。三冠やグランプリ連覇みたいな一般にも分かりやすい華やかさみたいなものも無い。自分自身忘れがちだけど、外国人だからかメディアが及び腰な部分もある。

合同トレーニングしてる時にマスコミがきて「おっ、これはジャパンカップ勝者のぼくに取材かな？」なんて思ってたらテイオーたちの方に行かれてズッコケたし……。

いや、まあ、その後取材は来たんだけど、やっぱり今のトウインクルシリーズを牽引する「主役」はテイオーたちの方だと思わされた一幕だった。

客観的な話をしよう。G1レース6勝はすごい。海外レースで勝ったのもすごい。そこは事実だ。

しかし、同じシニア1年目で会長さんは七冠達成しているし、海外レースはうちのチームに成功者がいる。決して地味ではないけど、もっと分かりやすくセンセーショナルな方がいるので世間への訴求力に乏しいぼくの優先度は低い。……そんな感じ。レコードこそ取ったけど、チャンピオンステークスとか一般の人知らないもの。

表紙を飾るのはテイオーたちで、トップ記事での特集が終わった後に誌面を埋めるために挙がる第一候補、くらいの扱いだろうか。「とりあえずあいつを出しておけば間違いない」という安牌な位置づけなのは別に嫌いではないのだけど。この方が細々とも長く語られやすいし。

ともあれ、このあたりにぼくは若干のコンプレックスがあるのだろうと思う。今現在のトウインクルシリーズにおけるぼくの扱い完全にラスボスだもんよ。ネイチャじゃないけど、もっとまっとうな方向でキラキラしてえくとはちよっと思うよ。

「大変長らくお待たせいたしました。本年度、URA賞授賞式の司会を務めさせていただきます赤坂です」

と。裏でわちゃわちゃやっている間に準備が終わったらしい。呼ばれるのを待ちながら実際何でシニア級クラシック路線がふたりもいるのか考える。

もしかしてあれかな、UR A特別賞。年間の最優秀ウマ娘などとは別枠で組まれた賞で、知り合いだとスズカ先輩とスペ先輩、グラス先輩、それからオグリ先輩の受賞歴がある。

前年、前々年と受賞があったが毎年同じように受賞者がいるわけではなく、あくまで「特別にその必要が認められる功績を上げたウマ娘がいる場合」にのみUR A特別賞が授与される。

それこそ前年はエル先輩が最優秀シニアを受賞したのと同時にスペ先輩たちが並んで受賞したわけで……なるほど。これだ脳内指パッチン。

UR A賞は記者投票。よってより記者ウケをする戦績をしたウマ娘の方が選出されやすい。

それでもぼくは上げた結果が結果だ。無視するわけにもいかないし、無視したら大使館の方面から抗議が入ったりするかもしれない。実績の伴う外国人というのは厄介だろうフハハハ。

「——シニア級・クラシック路線最優秀ウマ娘はサバンナストライプに決定しました！」

「K w e e l i ?」スワヒリ語で「マジ？」

えっ。

えっ？

は？

「マックイーン呼ばれた？」

「あなたですわよ」

「マジか」

一歩前に出ると、盛大な拍手で迎えられた。

やっべ、実感湧かない。いや、え。ええー……？

顔の方は営業スマイル維持してるけど、混乱がどこかで漏れてはないだろうか。

嬉しい、は、もちろん嬉しいけど、いいのか貰っちゃって。いいの

か!?

「天皇賞春秋連覇の偉業を達成したメジロマツクイーンには、URA特別賞が贈られます」

「ありがとうございますわ」

……いいんだろうか。いいんだろうな。マツクイーンがそつちを受け取ってるんだし。

さつきカレンにも嫌味に感じられてしまっただけで言われたばかりだ。これは紛れもなくぼくの努力に対して下された評価だと思うべきだろう。

何よりそれこそがこれまで勝ってきた相手に対する礼儀でもある。……のだと思う。

やっぱこの辺のマイナス思考は出自とこれまでの扱いが大きいかな、やっぱり。

「では、続いて本年の年度代表ウマ娘の発表に移りたいと思います」

さて、視聴者的には待ちに待った年度代表ウマ娘の発表だ。まあここは順当に行けばテイオーだろう。三冠が年度代表を逃すなんて滅多にない2023年現在クラシック三冠を取って年度代表馬を逃したのは2020年のコントレイルのみ。同年の年度代表馬は九冠を達成したアーモンドアイ。ティアラ路線の場合は年度代表馬を逃すケースが多い。メジロラモーヌ、ステイルインラブ、アパパネ、デアリングタクトがこのケースに該当。し。

「審査は大変難航しましたが、最終的に決定したのはこのウマ娘——トウカイテイオーです！」

やっぱりな、という思いと同時に、ぼくもチャンスがあつたんじやないかなという思いが胸に湧く。

海外レースを制したウマ娘が年度代表ウマ娘になることは割とあることで、年間に海外で2勝というのはそれだけでも選出理由にはなると考えていた。

が……そこは人の気持ちというか、やはり「日本の三冠ウマ娘」にこそ取ってほしいという思いはあるだろう。

負けこそしたが僅差だったというのもある。来年はどうなるか分

からない、と皆が思っているとすればこの選出も納得ではある。いわば成長性込みでの代表選出ということだ。

（——つまり、来年はそれもねじ伏せられる実績を引っ提げてくれば年度代表になれるってワケか）

ピコンと頭の中で来年のスケジュールが埋まっていく。

……と、なれば確実に実績を積むことができる条件は……それから確か、ぼくの記憶が確かならこっちだとあのレースシリーズが存続してるはず……。

「本年著しい実績を上げた三名のウマ娘には、U R Aより新しい勝負服が贈呈されます」

「あ、そんなのあったっけ」

「滅多にありませんけれどね」

そのままマックイーンとテイオー、ぼくの三名が別室に案内される。手渡されたのは、新しくU R Aがデザインしたらしいぼく専用の勝負服だ。

これまでの緑色基調のものと異なり色合いは黒。横目でちらっと見えたのは……テイオーが赤でマックイーンが白。当然と言えば当然だが、イメージが被らないようにしているのだろう。

ミホノブルボン見ても思ったけど、このちよくちよく入るサイバーな発光ラインという技術使ってるんだろ。

「着替え終わりましたの？」

「もちよつと待って」

何だろこの……暗殺者？ ニンジャ？

これまでの狩人風から一気にイメージ変えてきてるな。それ自体はまあいいけど……うーむ……。

「テイオー……は……」

「どしたの？」

うーむ……やっぱりぼくの知ってるあの衣装ビヨンド・ザ・ホライズンだ。

マックイーンの衣装エンド・オブ・スカイもそうだけど、思った以上にこう、がつつりお腹出てるな……ぼくのも含め。おかげで露出度

が高い印象になってる。

UR A えるか？

——ちなみに、本放送での新衣装の評判は上々だった。

視聴者えるか？

夢の原型

深夜に知らないウマ娘が河川敷をものすごい勢いで走ってる。

そんな噂が流れ始めたのは、うちのトレーナーさんがトレーニングの時に眠そうにし始めてからしばらく経ってのことだった。

立場が立場だ。素性が知れたら大騒ぎになるし、深夜の時間帯を選ぶのも理解できないわけじゃないが、自分から答え合わせしていくスタイルってどうなんだろうね。

もう大騒ぎになってるような気もするが、名前が特定されていないということはまだ大丈夫な範疇なのだろう。多分。

その走りに惚れ込んでトレーナーがスカウトに行ったりとか、無いとは言いい切れないのがここ中央トレセン学園のトレーナー陣だ。

……いや、しかし、トレーナーさんもその辺は承知してるよな？
自衛っていうか、予防っていうか。

スタイル維持してるし入るからって現役時代のジャージそのまま使ったりは……してそうだな……あのひと変なところで思い切り良くてズボラだし、深夜で生徒と出くわすことが無いだろうからって油断してそう。

そういうわけで、話を大きくしそうなチームには先に牽制球を投げしておくことにした。

「噂の件、あれうちのトレーナーなんだよね」

テイオーとマツクイーンは幽霊でも見たかのような表情をしていた。

「どうやら牽制のつもりが失投したらしい。サバンナ凡ミス。

「なぜ!? 今そんな話を!」

「話を大きさにしないためにも少しね。先に牽制入れとこうかと思つて」

「大暴投だよお!」

「でもこれ言つといてつまんねー話で終わらせとかなないと門限ぶつちして見に行く黄金の船絶対いるでしょ?」

「いる……！」

その時巻き込まれるのは確実にマックイーンたちである。

「しかしなぜトレーナーさんが？」

「ダイエツトしてるんじゃない？」

一応、うちのトレーナーさんがギンシヤリボーイだということは関係者限りの秘密だ。トレーナー同士で知っているひともいるだろう。ウマ娘だということを探しているひともいるかもしれないけど、広めると大変なことになるだろうし知っているひとが少ないに越したことはない。

そんなわけで、今回も誤魔化しの一手である。

實際体を絞ってるのはその通りっぽいから嘘は言っていない。

「……あなたはダイエツト必要だったりしませんの？」

「いや特には」

「くっ……！」

何悔しがってるんだ。

「体質もそうだししばらくは調整も必要ないしね。マックイーンだつて別にそんなすぐレースあるわけじゃないでしょ？」

「調整は日頃からやっているからこそそのものですわよ。あなたは……」

「そういえばストライプ、レースの予定何も言っていない？ ボク早めにリベンジしたいんだけど」

「あー……んー、まあそうだね。このまま勝ち逃げもアリだけど……」

「ちよつとお！」

もちろんそんなことはしない。ただ……「今すぐ」とはいかないのが正直なところだ。

理由はいくつかあるが、少なくとも春から夏までのシーズンは全部そこに費やすことになる。

「秋まで待つて。ちよつと世界の長距離完全制覇してくるから」

「ええ!？」

「あなた、まさか——」

「ステイヤーズミリオン狙うつもりなんだよね」

——ステイヤーズミリオン。

英国レース界における長距離レースシリーズの名前だ。文字通り完全制覇者に100万ポンドの賞金が授与されるレースだが、史実で実施されたのはわずか二年限り。しかしこれはなんといか不幸な出来事が原因というか……とある長距離の覇者が二年連続で完全制覇を成し遂げたことが原因で、資金不足により廃止に追い込まれたという背景を持つ。

こちらではなんと現時点でレースシリーズが開催されており、完全制覇者はゼロ。まだ廃止など見えて来ていない状況である。知名度……はともかく、欧州のレースとして格は十分。レースシリーズの完全制覇、オマケにG1を合計8勝となればURAとしても「分かりやすい功績」として無視できないことだろう。

「で、帰ってきたら秋シーズン走る。勝負はその時かな」

「つてことは、秋三冠？」

「……どうかな」

なんだろうね。年明けてからなんとなく一年もたないだろうという予感がある。

——タイムリミット。本格化の「上がり」だ。

そもそも「サバンナストライプ」はJWCの第一回しか出走していないが、チャンピオンステークスを制している以上はそれなり以上の地力があって当然だ。

それでも二度目の出走が無かったというのは、(単純にネタ的に出尽くしたというのもあるだろうけど)翌年には衰えが来て引退したということではないだろうか。

というか三年連続出走してるメンツがおかしいんだよ。最低でも6歳で何でG1で無双してるんだよ意味わかんねえ。

……まあ……ぶっちゃけ引退に関してはいいんだ。トウインクルシリーズでやることやったから概ね満足した。

あとはもうちよっと好き放題やって後進のためのノウハウ残してから次のステージだ。
ドリームトロフィー

そもそも今でさえギリギリの勝負ばかりなのに、速度落ちたら

う勝ち筋無くなるって話だ。

そりやできるなら秋三冠も欲しいし、やる以上は頑張るけどね。

・・・≠・・・

午後。

いつも通りのトレーニングの時間……の、はずだったのだが、ぼくはドーナッツ先輩やリムジン先輩、スナイパーⅡサンと計画してトレーナーさんを学外のとある練習場に連れ出していた。

トレーニングのため……であることは確かだが、マスコミや知人もシャットアウトする理由は……どちらかと言うとトレーナーさんのためだろうか。理由は単純。

「最近メチャ噂になってるんで自重してください」

「はい……」

自粛要請である。

「つーかよおトレーナー。アタシらでも分かるレベルに杜撰なことしてつとそのうちマジですつば抜かれっぞ」

「ええ、はい……」

「Ah……噂になっている時点で問題では？」

「おつしやる通りです……」

いずれも事実である。

実際隠蔽が杜撰であるから今回のように噂になるのだし、噂になっている時点でマスコミが押し寄せてくる可能性は十分にあった。バレてないのは幸運の賜物だ。

元チーフから言っても親の忠告というのは素直には聞き辛い。というわけで、ぼくらにお鉢が回ってきたというわけである。

「とういか私であるとよく分かりましたねあなた達」

「なぜ分らないかと思ってるのだトレーナーⅡサン」

「ずーっと眠そうだし体の節々が痛そうだし筋肉痛っぽいですし、見るひとが見りや分かるでしょ」

「ぐう……」

ぐうの音が出る。

「何やってんすか、対戦相手がいなくて辞めるような寂しんぼのくせに一人で夜中にトレーニングとか」

「寂しっ……何を勝手なことを断定しているんです!？」

「違うんですか?」

うつむき加減の様子からは、否定の感情は感じられない。

ギンシャリボーイ
自分より強いウマ娘を育てることが目標と言っていたのを思い出してカマかけてみたけど、そんな的外れな推測でもなかったようだ。

「But……なぜこんなことを?」

「とりあえずダイエツトじゃないかって言って誤魔化しときましたけど、マジでダイエツトだったりします?」

「スシ……スシを食べすぎている。お腹がぷにぷにになっているのは」

「イヤーツ!」

「グワーツ!」

ウカツ! (n回目)

哀れ、お腹に伸ばされたスナイパー||サンの手は小指が極められ爆発四散! やはりトレーナーは強かった。

「んで実際何でなんだよ」

「ジャパンカップのストライプの走りに触発されて……」

え、マジ? なんか照れるでございませうなあ。

「それでウズウズして走っていたと」

「ええ」

ぼくが開発した……って言うと言語弊があるな。発展させたアフリカンタービンは元が無減速クロスステップということもあって、やりようによっては再現ができる可能性を十分に残しているものだと思う。

勿論、それだけ大きなきっかけと鍛錬が必要になるけど、トレーナーさん……ギンシャリボーイの琴線に触れることになってもおかしくはない。

ぼくは小さくため息をついた。ダメとは言わないけど、もっと良い手段無い？

「走りたくなったら……言えば良いのデハ？」

「トレーナーですよ私は。教え子にそんなことを頼むわけには……」

「いいじゃねーかよ頼み事のひとつやふたつ。ストライプストライプの顔の広さやら謎技能やら、大人でもそうそう持ってねーぞ」
どや。

単純に考えてもトレーナーさんはレース関係の繋がりが主だろうから、そこ以外の繋がりを持つのにぼくは適任だろう。

単に走るだけだとしても場所取りや根回しはお任せだ。

「どうか今回この練習場選んだのぼくだし。いいじゃん頼っても。適材適所ってやつだ。」

「かのミヤモト・マサシは家に火がついていれば、泥棒してもバレにくいと言った」

「普通に言えバカタレ。意味離れてんじゃねえか」

「アンブツシユするなら街中——あああーっ!？」

「で、何の話だっけか」

業を煮やしたドーナツツ先輩にメンポを剥ぎ取られたスナイパー
「サンはいつものように勢いを失ってしまった。」

まあ意味が通じなくなってるし仕方ない。で、言いたいこととしては正確には「木を隠すなら森の中」かな。

「わア……」

「泣いちゃった
Crying……」

「ともかく、ウマ娘が大勢いればその中で走ってても違和感は少ないってことですよね」

「それだ。つーか考え過ぎなんだよウチの連中」

オメーもだぞ、という強めの言葉に合わせて背中を叩かれる。しようがないじゃないですか、考えることがぼくの武器なんだから。

しかし、ここまで言ってもトレーナーさんはどうやら悩んでいる様子。大人になると体裁も社会的地位もすつつつごい大事なものは嫌ってほど分かる。しかし、うーん……今そういうタイミングでもないし

もうひと押ししたいところだが……。

「Bonjour。」

そんな折だった。流暢なフランス語と共に練習場に入ってくる白い影。せっかくだからと体験トレーニングに呼んでいたピンクフェロモンが到着したようだった。

「あ？ おいストライブ、部外者来ねーんじゃなかったのか？」

「前言いませんでしたっけ。将来のうちのエース。あの子です」

「ほーん。早っはええ青田買いだこと」

青田買いつていうか、なんだか懐かれてそのせいだから厳密には違うんだけど……いちいち訂正するのも面倒だしもうそれでいいや。

実際それに足る身体能力と素質があるのだから、その認識でも問題は無い。

「ピンクフェロモン……彼女、眼鏡をかけてましたか？」

「え？ いえ」

フランスでの様子を知っているトレーナーさんがいち早く違和感に気付く。

そういや赤いフレームの眼鏡をかけているな。どうしたんだろう。急に目を悪くしたってわけでもないだろうけど。

「眼鏡似合ってるね。どうしたの？」

「まず形からということでした。付けてみました。賢そうに見えますか？」

「そうだね……」

う……うーむ……そりゃ美少女だし似合わないわけがないんだが、鋭い目つきと合わせて賢いというより少し印象が硬い感じ。

あと「賢そう」で伊達メガネをかけるのは賢くないという指摘をした方がいいんだろうか。

いや、子供の幻想を壊すのも良くないし……ええか……。

ちなみに、あの伊達眼鏡がドミノマスク目元だけを隠す仮面。原作ピンクフェロモンが装着。要素だと気付いたのは後日になってからだった。

「そうだ、トレーナーさん。せっかくだし走りを見せてあげてくださいよ」

「は？ え!? 私ですか!？」

「ワハハハ、そりやいいや！ 本格化がまだだっつーんならいい参考になんだろ」

「先輩たちもどうですか？ あの伝説の不敗神話持ちとの勝負ですよ」
「乗った！」

威勢よくドーナッツ先輩がまずコースに向かっていく。次いで控えめながらもリムジン先輩がトレーナーさんを引っ張っていき、更にスナイパーサンがそれに追従した。

ピンクフェロモンは行くべきか迷っていたようだが、背中を押してあの中に混ざってもらうことにした。早いうちからレースの空気を味わってもらって、超一流の技を知っておくのは絶対にタメになる。コースに向かう皆を見送りながら、ぼくはホイッスルを手にした。

「じゃ、スターターやりますねー」

「……仕方ないですね」

不満げな言葉ながらも、トレーナーさんから嫌そうな気持ちは感じられない。やっぱり長いこと走れずに飢えていたのだろうと思う。

ぼくはまだ現役を続行しているのであの中に混ざることにはできない。けど、だからこそ言うべきか、ある意味でこの光景には特別なものを感じる。

「あの中に混ざっていききたい」という羨望の感情はぼくの原点であり、そのために長い準備を積み上げてここまでやってきた。

この光景は、ある意味でぼくの描いた夢の原型だ。

(第0回 JAPAN WORLD CUP——なんてね)

夢は、確かに手の届くところまで近付いている。

「位置について」

「よー」

JAPAN WORLD CUP

ドリームトロフィーリーグ。それは、本格化の「上がり」を迎え、トウインクルシリーズを引退したウマ娘たちの受け皿であり、よりショービジネスに特化した「レース」ではなく「ウマ娘」の祭典。

例年、ドリームトロフィーに所属するウマ娘は、「本戦」に位置付けられるサマードリームトロフィー、ウインタードリームトロフィーへの参戦に向けて「予選」とも言えるレースに参加することとなる。

一般に、テレビ局や企業が主催となる予選レースは、本格化を終えたという事情からエンターテインメント性に特化した種目が多い。怪我の予防や疲労を残さないという観点から、本戦を除くレースは多くがファンのための「ショー」であることが大半だ。

そこに、待ったをかける者が現れた。

曰く、ドリームトロフィーに所属するウマ娘は皆「本格化を終えた」という意味で同条件である。そのため、トウインクルシリーズと比べて速度にこそ劣るがより技巧的な走りを魅せることができるのではないか。

併せて——本格化の「上がり」や未成熟さを理由とした能力格差は生まれないため、本当の意味で「最も強いウマ娘」を決めるのに最適なのではないかと。

多くの反対意見は出たが、実力と話術とでそれらを捻じ伏せた若社長は、新たなレースの設立を宣言した。

世界最強を決めるレース、「JAPAN WORLD CUP」を開催する、と。

・・・≠・・・

『さあ——間もなく始まります、世界最強決定戦を謳う大レースJAPAN WORLD CUP。実況は赤坂、解説はかの無敗三冠ウマ娘のライバル、チョコセンバンチョーでお送りします』

『よろしく、お願いします』

晴れ晴れとした秋の空のもと、東京レース場に大勢のファンの歓声が轟く。

予選レースとしては異例の大観衆に見守られる中、ひとり、またひとりとレース場にウマ娘が脚を踏み入れた。

1 枠1番、シンボリルドルフ。

1 枠2番、ピーピードーナッツ。

2 枠3番、スペシャルウィーク。

2 枠4番、トウカイテイオー。

3 枠5番、ハリウツドリムジン。

3 枠6番、デイブレイク。

4 枠7番、ニンジャスナイパー。

4 枠8番、ピンクフェロモン。

5 枠9番、サバンナストライプ。

5 枠10番、モンジュー。

錚々たる顔ぶれであり、いずれもその世代の中心を担ったと言つて過言でないほどの実力と実績を誇る名ウマ娘。

ひとり現れるたびに会場が揺れ、盛大な声援が張り裂けんばかりに空気を叩く。

それでも、この日最も会場を沸かせたのは——紛れもなく、最後のひとりの存在だった。

『そして、6 枠11番。長きに渡る沈黙を破り、このウマ娘が帰ってきました。——無敗の三冠ウマ娘にして生涯無敗を誇る生ける伝説、ギンシャリボーイ!!』

現役時代とは異なる落ち着いた雰囲気、「和」を基調とした勝負服。かつての面影は薄くも、しかし確かな存在感は彼女が紛れもなく「ギンシャリボーイ」そのひとだということを実に示していた。

いつ、帰ってきたのか。

今までどこに行っていたのか。

そうした野暮な疑問が次々と浮かぶが、観客が選んだのは純粹な歓

声と、祝福の言葉だった。

『当時の勝負服とは異なる印象ですが、チョコセンバンチョーさん。いかが——あれえ!?!』

そして——祝福以上に、本来直情的で感情的なそのウマ娘が、生涯のライバルの復活に黙っていられるわけもなかった。

待っていたぞギンシャリ、などと叫びながら解説席を飛び出した彼女は、そのままターフに飛び出して行ってしまったのだ。

『これは……いいのでしょうか!?!』

「面白いからオツケーです」

『いいようです!』

普通のレースならば、こんなことがありえていいわけがない。

しかしこのレースはどちらかと言えばエキシビションマツチに近い自由度の高い枠での催しだ。サブナストライン主催者から鶴の一声が出たなら、そこに否やを唱えるものはいない。

何より、この場ファンと本人にいる者たちにとっては——このレースの決着を目にすることこそが何よりの望みなのだから。

『——世界で最も強いウマ娘は誰なのか選びぬかれた11人……いえ、12人による頂上決戦!』

ファンファアレーが鳴り響く。

華美な装飾は必要無い。娯楽性も必要ない。

ただ、全力をもって走る姿だけが、心に訴えかける最上のエンターテインメントに昇華される。

『JAPAN WORLD CUP——今、スタートしました!!』

——勝利へ。

夢を叶えたその先にも、道は続く。